取扱注意

放送大学開設予定授業科目講義内容案

昭和63年４月
第　６　版

放　送　大　学
教務部教務課

目　　次

1. 基本・基礎科目			開設年次	作成年度	メディア
	（人 文 系）				
1	生活と芸術 ……	1	60年度から	59	TV
2	日本の教育 ……	3	61年度から	60	TV
3	教育学概論 ……	6	61年度から	60	R
4	心理学概論Ⅰ（63年度限り） ……	10	60年度から	59（㊦）	TV
5	心理学概論Ⅱ（63年度限り） ……	12	60年度から	58（㊦）	TV
6	行動科学 ……	14	61年度から	60	TV
7	現代の人間観と世界観 ……	18	63年度から	62	R
8	哲学の基礎 ……	20	60年度から	58（㊦）	R
9	古代中国の思想 ……	22	60年度から	59（㊦）	R
10	近代の思想（63年度限り） ……	24	60年度から	58	R
11	現代の思想（63年度限り） ……	26	60年度から	58	R
12	ことばとコミュニケーション ……	28	63年度から	62（㊦）	TV
13	思考と論理 ……	30	61年度から	60	R
14	比較思想論 ……	32	61年度から	60	TV
15	文学と芸術 ……	34	61年度から	60	TV
16	日本語の基礎 ……	36	61年度から	60	R
17	日本語 ……	38	63年度から	62（㊦）	R
18	作歌・作句 ……	40	61年度から	60（㊦）	TV
19	人間の歴史 ……	42	63年度から	62	R
20	文化の形成と普及 ……	44	61年度から	60	TV
21	世界史と時代意識（63年度限り） ……	46	60年度から	58	R
22	人文地理学の基礎 ……	48	63年度から	62	TV
	（社 会 系）				
23	社会生活と法 ……	50	61年度から	60	TV
24	国家と法Ⅰ（63年度限り） ……	52	60年度から	59	R
25	国家と法Ⅱ ……	54	61年度から	60	R
26	政治学入門 ……	56	63年度から	62	R
27	比較経済・経営・社会 ……	58	61年度から	60	R

			開設年次	作成年度	メディア
28	経済学入門 ……	60	63年度から	62	R
29	社会学入門 ……	62	63年度から	62	R
30	社会科学の成立と発展 ……	64	61年度から	60(㊦)	R
31	現代社会論Ⅰ ……	68	61年度から	60	TV
32	現代社会論Ⅱ ……	70	61年度から	60	R
33	社会調査(63年度限り) ……	72	60年度から	58	TV
34	日本経済と産業と企業(63年度限り) ……	74	60年度から	58	TV
35	経営総論 ……	76	63年度から	62	R
36	会計総論 ……	78	63年度から	62	TV
37	数理計画法入門(63年度限り) ……	80	60年度から	59(㊦)	TV
	(自然系)				
38	現代の数学観 ……	82	63年度から	62	R
39	基礎数学Ⅰ ……	84	63年度から	62	TV
40	基礎数学Ⅱ ……	86	61年度から	60	R
41	基礎数学Ⅲ ……	88	61年度から	60	R
42	確率論・統計学(63年度限り) ……	90	60年度から	59	R
43	物質とエネルギー ……	94	61年度から	60	R
44	基礎物理学Ⅰ ……	96	61年度から	60	TV
45	基礎物理学Ⅱ ……	98	61年度から	60	R
46	基礎化学 ……	100	61年度から	60(㊦)	TV
47	人間の生物学(63年度限り) ……	104	60年度から	59(㊦)	TV
48	基礎生物学 ……	106	61年度から	60	TV
49	地球と宇宙(地球編) ……	110	63年度から	62	TV
50	地球と宇宙(宇宙編) ……	112	63年度から	62	TV
51	日本の自然 ……	114	61年度から	60	TV
52	自然系実験(63年度限り) ……	116	60年度から	58	TV

64年度改訂開設科目

	(人文系)				
53	心理学 ……	118	64年度から	63	TV
54	近代の思想 ……	120	64年度から	63	R

			開設年次	作成年度	メディア
55	記号論 ……	122	64年度から	63	TV
56	世界歴史と国際交流 ……	124	64年度から	63（㊦）	R
	（社 会 系）				
57	憲法概論 ……	126	64年度から	63（㊦）	TV
58	日本経済と産業と企業 ……	128	64年度から	63	TV
	（自 然 系）				
59	確率論 ……	130	64年度から	63	R
60	統計学 ……	132	64年度から	63	R
61	物理科学史 ……	134	64年度から	63（㊦）	R
62	生命科学史Ⅰ ……	136	64年度から	63	R
63	生命科学史Ⅱ ……	138	64年度から	63	R
64	人間の生物学 ……	140	64年度から	63	TV
65	科学と実験 ……	142	64年度から	63	TV

2. 外国語科目

66	英語Ⅰ（63年度限り） ……	144	60年度から	58	TV
67	英語Ⅱ－A（63年度限り） ……	148	60年度から	59	R
68	英語Ⅱ－B 1 ……	150	61年度から	60	R
69	英語Ⅱ－B 2 ……	152	61年度から	60	R
70	ドイツ語Ⅰ（63年度限り） ……	154	60年度から	59	TV・R
71	ドイツ語Ⅱ－A（63年度限り） ……	158	60年度から	58（㊦）	R
72	ドイツ語Ⅱ－B 1 ……	160	61年度から	60	R
73	ドイツ語Ⅱ－B 2 ……	162	61年度から	60（㊦）	R
74	フランス語Ⅰ（63年度限り） ……	164	60年度から	59	TV・R
75	フランス語Ⅱ－A（63年度限り） ……	168	60年度から	58（㊦）	R
76	フランス語Ⅱ－B 1 ……	170	61年度から	60	R
77	フランス語Ⅱ－B 2 ……	172	61年度から	60	R
78	ロシア語（63年度限り） ……	174	60年度から	59	R
79	中国語Ⅰ（63年度限り） ……	178	60年度から	59（㊦）	R
80	中国語Ⅱ（63年度限り） ……	180	60年度から	59（㊦）	R
81	中国語Ⅲ ……	182	62年度から	61	R

		開設年次	作成年度	メディア
82	中国語Ⅳ …… 184	63年度から	62	R
83	スペイン語 …… 186	61年度から	60	R
	64年度改訂開設科目			
84	英語Ⅰ …… 190	64年度から	63	R
85	英語Ⅱ …… 192	64年度から	63	R
86	英語Ⅲ …… 194	64年度から	63	TV
87	英語Ⅳ …… 196	64年度から	63	TV
88	英語Ⅵ …… 198	64年度から	63	R
89	ドイツ語Ⅰ …… 199	64年度から	63	TV
90	ドイツ語Ⅱ …… 201	64年度から	63	TV
91	ドイツ語Ⅲ …… 203	64年度から	63	R
92	フランス語Ⅰ …… 204	64年度から	63(㊦)	TV
93	フランス語Ⅱ …… 206	64年度から	63(㊦)	TV
94	フランス語Ⅲ …… 208	64年度から	63(㊦)	R
95	ロシア語Ⅰ …… 210	64年度から	63	R
96	ロシア語Ⅱ …… 212	64年度から	63	R
97	中国語Ⅰ …… 214	64年度から	63	R
98	中国語Ⅱ …… 216	64年度から	63	R
99	Japanese Ⅰ …… 218	64年度から	63	TV
100	Japanese Ⅱ …… 220	64年度から	63	TV

3. 保健体育

101	保健体育 …… 222	60年度から	59(㊦)	TV
102	体育実技 ……			

4. 専門科目

	生活と福祉			
103	生活史 …… 224	61年度から	60	R
104	生活の社会学(63年度限り) …… 226	60年度から	58	R
105	家庭の本質 …… 228	61年度から	60	R

			開設年次	作成年度	メディア
106	家族関係	230	62年度から	61	R
107	家庭の経済	234	63年度から	62(㊦)	R
108	家庭経営学（63年度限り）	236	60年度から	58	R
109	衣生活概論	238	63年度から	62	TV
110	衣服論	240	61年度から	60	TV
111	衣生活の科学	242	62年度から	61	TV
112	食生活論	244	61年度から	60	R
113	食物総論	246	63年度から	62	TV
114	食物各論	248	60年度から	58	TV
115	住居Ⅰ（63年度限り）	250	60年度から	59	TV
116	住居Ⅱ	252	61年度から	60	TV
117	住居Ⅲ	254	62年度から	61	TV
118	人間の病気	256	63年度から	62	R
119	母子保健	258	62年度から	61	TV
120	青少年の保健Ⅰ	262	61年度から	60(㊦)	R
121	青少年の保健Ⅱ	264	62年度から	61(㊦)	R
122	成人の保健	266	63年度から	62	R
123	老人の保健	268	62年度から	61	R
124	精神衛生	270	62年度から	61	R
125	余暇生活（63年度限り）	274	60年度から	59(㊦)	R
126	生活福祉	278	62年度から	61	R
127	生活と福祉特論		63年度から		

64年度改訂開設科目

128	人間と社会環境	279	64年度から	63	TV
129	家庭の経営	281	64年度から	63(㊦)	R
130	住生活史	283	64年度から	63	TV
131	環境科学	285	64年度から	63	TV
132	余暇生活	287	64年度から	63(㊦)	TV
133	家庭の福祉	289	64年度から	63	R

発達と教育

			開設年次	作成年度	メディア
134	学校教育（63年度限り）	291	60年度から	58（㊦）	TV
135	教育の方法	293	62年度から	61	TV
136	学習と指導	295	62年度から	61	TV
137	言語と教育	297	62年度から	61	R
138	道徳教育	299	62年度から	61（㊦）	R
139	教育評価	300	62年度から	61	R
140	教育思想（63年度限り）	302	60年度から	59	R
141	家庭教育（63年度限り）	306	60年度から	59	R
142	児童観	308	61年度から	60	R
143	情操の教育（63年度限り）	310	60年度から	58	R
144	青少年文化（63年度限り）	312	60年度から	59（㊦）	TV
145	地域社会と学校	314	62年度から	61	TV
146	生涯教育論（63年度限り）	316	60年度から	59	R
147	教育社会学	318	61年度から	60（㊦）	TV
148	青少年の指導	322	62年度から	61	TV
149	発達心理学Ⅰ（63年度限り）	326	60年度から	59	TV
150	発達心理学Ⅱ	328	61年度から	60	TV
151	学習心理学	330	63年度から	62	TV
152	学習心理学の応用	332	63年度から	62	TV
153	認知と思考	334	63年度から	62	TV
154	人間関係論	336	62年度から	61	TV
155	パーソナリティ論	338	62年度から	61	TV
156	臨床心理学	340	62年度から	61	R
157	カウンセリング	342	63年度から	62（㊦）	R
158	深層心理学	344	62年度から	61	R
159	文化と精神発達	346	62年度から	61	R
160	乳幼児の健康と心理	348	61年度から	60（㊦）	TV
161	児童の心理と教育	350	61年度から	60（㊦）	R
162	青年の心理と教育	352	63年度から	62	R
163	障害児の心理と教育	354	60年度から	58（㊦）	R
164	言語障害（63年度限り）	356	61年度から	60（㊦）	R

			開設年次	作成年度	メディア
165	発達と教育特論 ……		63年度から		
	64年度改訂開設科目				
166	学校教育 ……	358	64年度から	63(㊦)	TV
167	教育思想Ⅰ ……	360	64年度から	63(㊦)	R
168	教育思想Ⅱ ……	362	64年度から	63(㊦)	R
169	家庭教育 ……	364	64年度から	63	R
170	情操の教育 ……	366	64年度から	63	R
171	青少年文化 ……	368	64年度から	63	TV
172	生涯教育論 ……	370	64年度から	63	R
173	発達段階の心理学 ……	372	64年度から	63	TV
174	社会心理学 ……	374	64年度から	63	TV
175	心理・教育における測定法 ……	376	64年度から	63	TV
176	障害児の心理と教育 ……	378	64年度から	63	R

社会と経済

177	犯罪と法(63年度限り) ……	380	60年度から	59(㊦)	R
178	裁判と市民生活 ……	382	63年度から	62	TV
179	日常生活と法 ……	384	61年度から	60	TV
180	取引と企業の法 ……	388	62年度から	61	R
181	日本の社会と法 ……	392	62年度から	61	R
182	国際社会と法 ……	394	61年度から	60(㊦)	R
183	経済活動と法 ……	396	62年度から	61(㊦)	R
184	労働問題と法 ……	398	62年度から	61	R
185	政治思想Ⅰ(63年度限り) ……	400	60年度から	58	R
186	政治思想Ⅱ(63年度限り) ……	402	60年度から	59(㊦)	R
187	現代政治論(63年度限り) ……	404	60年度から	58(㊦)	TV
188	現代の政治生活 ……	406	62年度から	61	TV
189	現代の国際政治 ……	408	62年度から	61(㊦)	TV
190	日本の政治 ……	410	61年度から	60	TV
191	先進諸国の政治 ……	414	63年度から	62	R

			開設年次	作成年度	メディア
192	第三世界の政治	416	63年度から	62	R
193	政治史Ⅰ（63年度限り）	418	60年度から	58	R
194	政治史Ⅱ（63年度限り）	420	60年度から	59（㊦）	R
195	行政学	422	63年度から	62（㊦）	R
196	近代経済思想	424	62年度から	61	TV
197	経済発展論	428	62年度から	61（㊦）	TV
198	産業組織論	430	62年度から	61	TV
199	国際経済学	432	63年度から	62	R
200	日本経済史（63年度限り）	434	60年度から	59	TV
201	欧米経済史	436	62年度から	61（㊦）	R
202	財政と金融	438	61年度から	60	TV
203	社会学の理論Ⅰ（63年度限り）	442	60年度から	58（㊦）	R
204	社会学の理論Ⅱ（63年度限り）	444	60年度から	59（㊦）	R
205	社会構造と社会変動	446	62年度から	61	R
206	地域と生活	450	62年度から	61	TV
207	地域社会学	452	62年度から	61	TV
208	アジアの社会	454	63年度から	62（㊦）	TV
209	社会と経済特論		63年度から		

64年度改訂開設科目

210	犯罪と刑法	456	64年度から	63	R
211	日本政治思想	458	64年度から	63	R
212	西欧政治思想	460	64年度から	63	R
213	現代の政治理論	462	64年度から	63	TV
214	日本政治史	464	64年度から	63	R
215	西欧政治史	466	64年度から	63	R
216	現代の経済学	468	64年度から	63	TV
217	日本経済史	470	64年度から	63	R
218	近代日本の生活と社会	472	64年度から	63	TV
219	社会学研究法	474	64年度から	63	TV
220	芸能と社会	476	64年度から	63	TV

産業と技術		開設年次	作成年度	メディア
221	経営管理Ⅱ（63年度限り） …… 478	61年度から	60	TV
222	経営戦略 …… 480	62年度から	61	R
223	人事・労務管理（63年度限り） …… 482	60年度から	59	R
224	労働経済学 …… 484	61年度から	60	R
225	企業と会計Ⅰ …… 486	61年度から	60	TV
226	企業と会計Ⅱ …… 488	61年度から	60	R
227	マーケティング（63年度限り） …… 490	60年度から	58	R
228	経営組織論 …… 492	62年度から	61（㊤）	R
229	経営科学 …… 494	62年度から	61	R
230	生産管理とOR（63年度限り） …… 496	60年度から	58	TV
231	経営分析と財務管理 …… 498	62年度から	61	R
232	産業社会学 …… 500	60年度から	58	R
233	産業地理学（63年度限り） …… 502	60年度から	58（㊤）	TV
234	産業と情報 …… 504	63年度から	62	R
235	産業と企業（63年度限り） …… 506	60年度から	59（㊤）	TV
236	産業と資源 …… 508	61年度から	60	R
237	産業と環境 …… 510	60年度から	58（㊤）	TV
238	交通と通信 …… 512	62年度から	61	TV
239	流通と商業 …… 514	63年度から	62	R
240	サービス産業論 …… 516	62年度から	61	R
241	中小企業論 …… 518	63年度から	62	R
242	技術史・技術論 …… 520	61年度から	60	TV
243	産業技術の動向Ⅰ …… 522	62年度から	61（㊤）	TV
244	産業技術の動向Ⅱ …… 524	63年度から	62（㊤）	TV
245	システム工学 …… 526	61年度から	60	TV
246	人間工学 …… 528	63年度から	62	TV
247	情報工学 …… 530	62年度から	61	TV
248	計測と制御 …… 532	63年度から	62（㊤）	TV
249	設計工学 …… 534	61年度から	60	TV
250	物質工学 …… 536	62年度から	61	TV
251	エネルギー工学 …… 538	62年度から	61	TV

			開設年次	作成年度	メディア
252	都市計画 ……	540	63年度から	62	TV
253	産業と技術特論 ……		63年度から		
	64年度改訂開設科目				
254	経営管理 ……	542	64年度から	63	TV
255	企業と人材 ……	544	64年度から	63(㊦)	R
256	マーケィング ……	546	64年度から	63	TV
257	生産管理 ……	548	64年度から	63	TV
258	財務会計 ……	550	64年度から	63	TV
259	数理計画法 ……	552	64年度から	63	TV
260	産業と企業 ……	554	64年度から	63	R
261	産業および生業としての農業 ……	556	64年度から	63	R

人間の探究

262	哲学思想史 ……	558	62年度から	61	R
263	社会思想史 ……	560	60年度から	58(㊦)	R
264	知識と学問の構造 ……	562	60年度から	58	R
265	行為と規範 ……	564	60年度から	58	R
266	宗教学を学ぶ ……	566	63年度から	62(㊦)	R
267	構造と解釈 ……	568	63年度から	62	TV
268	記号と人間(63年度限り) ……	570	60年度から	59	TV
269	哲学的人間学 ……	572	63年度から	62	TV
270	日本言語文化論(63年度限り) ……	574	60年度から	58	R
271	上代日本文学 ……	576	63年度から	62(㊦)	R
272	和文古典Ⅱ ……	578	61年度から	60(㊦)	R
273	和文古典Ⅲ ……	580	62年度から	61	R
274	和文古典Ⅳ ……	582	63年度から	62	R
275	近代文芸Ⅰ ……	584	62年度から	61(㊦)	R
276	近代文芸Ⅱ ……	586	63年度から	62	R
277	漢文古典Ⅰ ……	588	62年度から	61	TV
278	漢文古典Ⅱ ……	590	62年度から	61	R

			開設年次	作成年度	メディア
279	西洋古典学	592	63年度から	62	R
280	日本語教授法	594	63年度から	62(㊐)	TV
281	歴史の理論	596	63年度から	62	R
282	日本文化史	598	63年度から	62	TV
283	アジア論Ⅰ(63年度限り)	600	60年度から	59(㊐)	R
284	アジア論Ⅱ	602	62年度から	61	TV
285	ヨーロッパ論Ⅱ	604	62年度から	61(㊐)	TV
286	アメリカ論Ⅰ	606	61年度から	60(㊐)	TV
287	アメリカ論Ⅱ	608	62年度から	61(㊐)	TV
288	美の本質と様態	610	62年度から	61(㊐)	R
289	文芸史と文芸理論	612	61年度から	60	R
290	美術史と美術理論	614	62年度から	61	TV
291	演劇史と演劇理論	616	63年度から	62	TV
292	音楽史と音楽論	618	63年度から	62	TV
293	民族音楽	620	62年度から	61	R
294	文化人類学	622	61年度から	60	TV
295	アフリカ論	624	62年度から	61	TV
296	イギリスの言語文化	626	61年度から	60	TV
297	アメリカの言語文化Ⅱ	628	63年度から	62	R
298	ドイツの言語文化	630	61年度から	60	TV
299	ドイツの言語文化Ⅱ	632	63年度から	62	TV
300	フランスの言語文化(63年度限り)	634	60年度から	58(㊐)	TV
301	フランスの言語文化Ⅱ	636	63年度から	62(㊐)	TV
302	ロシアの言語文化(63年度限り)	638	60年度から	58	TV
303	ロシアの言語文化Ⅱ	640	63年度から	62	R
304	人間の探究特論		63年度から		

64年度改訂開設科目

305	存在と価値	642	64年度から	63	R
306	日本の言語文化	644	64年度から	63	R
307	アジア論Ⅲ	646	64年度から	63	R

			開設年次	作成年度	メディア
308	フランスの言語文化Ⅰ ……	647	64年度から	63(㊐)	TV
309	ロシアの言語文化Ⅰ ……	649	64年度から	63	TV

自然の理解

310	解析学 ……	651	63年度から	62	R
311	現代応用数学 ……	653	62年度から	61	R
312	現代数学特論Ⅰ ……	657	62年度から	61	R
313	データ解析法の基本 ……	659	63年度から	62	TV
314	データ解析法の進歩 ……	661	63年度から	62	TV
315	統計学特論 ……	663	61年度から	60	R
316	時系列論 ……	665	63年度から	62	R
317	物理科学史(63年度限り) ……	667	60年度から	59	R
318	現代物理学Ⅰ ……	670	63年度から	62	R
319	現代物理学Ⅱ ……	672	63年度から	62	TV
320	物質の科学Ⅰ ……	674	62年度から	61	TV
321	物質の科学Ⅱ ……	678	63年度から	62	TV
322	物質の科学Ⅲ ……	680	63年度から	62	TV
323	生命科学史(63年度限り) ……	682	60年度から	59	R
324	生命のしくみⅠ(63年度限り) ……	686	60年度から	59	TV
325	生命のしくみⅡ ……	688	63年度から	62(㊐)	TV
326	植物の生理 ……	690	63年度から	62	TV
327	動物の行動と社会 ……	692	63年度から	62	TV
328	脳と行動 ……	694	60年度から	58(㊐)	TV
329	植物と菌の系統と進化 ……	696	62年度から	61	TV
330	動物の進化 ……	698	62年度から	61	TV
331	生態学概論 ……	700	61年度から	60	R
332	宇宙の構造と進化 ……	702	61年度から	60	TV
333	太陽系の科学 ……	706	62年度から	61	TV
334	宇宙像の変遷 ……	708	62年度から	61(㊐)	TV
335	地球の科学Ⅰ ……	710	62年度から	61	TV
336	地球の科学Ⅱ ……	712	62年度から	61	TV

			開設年次	作成年度	メディア
337	大気と海洋 ……	714	61年度から	60	TV
338	現代資源論 ……	716	61年度から	60	R
339	自然の理解特論 ……		63年度から		
	64年度改訂開設科目				
340	統計的データ解析とソフトウエア ……	720	64年度から	63	TV
341	量子論 ……	722	64年度から	63	TV
342	生命のしくみⅠ ……	724	64年度から	63(㊦)	TV
343	集団遺伝学 ……		64年度から	63(㊦)	R
344	恒星天文学 ……	726	64年度から	63	TV

5. 総合科目

345	生活と環境 ……	728	63年度から	62	R
346	心理と教育 ……	732	63年度から	62	TV
347	都市の研究 ……	736	63年度から	62	TV
348	情報化時代の産業・技術 ……	740	63年度から	62	TV
349	科学と宗教 ……	744	63年度から	62	R
350	生命論 ……	748	63年度から	62	TV
351	文学の東西 ……	752	63年度から	62	R

＝ 生活と芸術 ＝（TV）

― 日本生活文化史 ―

〔主任講師：熊倉功夫（筑波大学助教授）〕

全体のねらい

日本の芸術は西洋の芸術にくらべて独自の性格を持っている。芸術が純粋にその美を目標として創造されるのではなく、日本では生活の道具として制作される。また喫茶の習慣が、古今東西の美術工芸を取り込んで、茶の湯という独自の生活文化も作っている。芸能と工芸を軸に日本人の生活と芸術が結びついた文化の歴史を論じる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本人の生活と芸術	日本人の生活と芸術を総合的にとらえるにはどんな視点があるか。生活文化としての展開をたどり、ことに室町時代以後における生活に即した新しい文化として、茶の湯の意義などを考える。	熊倉功夫（筑波大学助教授）
2	茶の文化の成立	中国の茶の文化は、唐代に大きく成長し、日本にも9世紀に伝わってくる。さらに鎌倉時代にふたたび茶の文化が禅宗とともに渡来し、日本的な展開をとげた。	熊倉功夫
3	供える花と飾る花	「花を瓶に挿す」ことは、仏教の伝来とともに供花として盛んになり、平安貴族たちはそれを楽しむようになる。「瓶の花」がいかにして生活空間に入ってきたかをみる。	熊倉功夫 山根有三（群馬県立女子大学教授）
4	南北朝時代の美意識	鎌倉時代末期以後、中国から輸入された書画や工芸品が珍重され、「ばさら」という新しい美意識が流行する。「座敷飾り」は洗練され、それを母胎に茶の湯といけばなは発展する。	熊倉功夫
5	書院の茶の湯	室町時代の武家文化の発達にともない、新しい生活様式が完成される。そうした様式の1つの核となるのが書院における茶の湯で、書院の茶といわれる。その姿を具体的に述べる。	熊倉功夫
6	室町時代のいけばな	「花を瓶に挿す」ことにおいて、技術や方法が問題となりはじめたのは室町時代、15世紀の中葉である。室町時代のいけばなの確立と展開を、花伝書などを引いて論ずる。	熊倉功夫 山根有三
7	わび茶の成立	京・堺などの都市には豊かな新興町衆が登場する。彼らは武家貴族の遊びであった茶を自らの生活のなかにあみ直した。村田珠光と武野紹鷗の茶をとおしてわび茶の成立をみる。	熊倉功夫

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	千利休と桃山文化	わび茶の大成者千利休の茶とは、どのようなものであったのか。その生涯をたどりながら、わびを徹底させ、主客の礼法を完成させた利休の茶について考えてみる。	熊倉功夫
9	茶室の世界	茶の湯の発達はその舞台にもあたる茶室という独自の建築空間を展開させた。中世の書院造りから流れだす茶室の系譜をたどりながら、日本の住宅建築に与えた影響も考えたい。	同　上
10	池坊専好の立花	江戸時代初期にあらわれた池坊専好（二代）は、いけばな史上最大の天才であった。専好により完成したいけばなの古典・立花様式について、専好の人物像とあわせてみてゆく。	熊倉功夫 山根有三
11	桂離宮と寛永文化	17世紀前半の文化を寛永文化とよぶ。公家、武家、町衆たちの協同した文化活動によって、繊細で装飾性豊かな芸術が誕生した。その性格を桂離宮をとおして考える。	同　上
12	町人文化と建築	元禄時代を中心に町人の文化は遊芸の新しい展開をもたらした。遊芸は地方にも広がってゆく。京都の遊郭の建築、地方都市の町家建築のなかに、その実現をみる。	同　上
13	料理文化の系譜	日本の料理は味だけではなく見る料理だといわれる。かって料理は立派な芸能であった。室町時代から江戸時代後期までの料理文化の流れを概観し、茶の料理の特質をみる。	同　上
14	近代の工芸運動	日常生活の道具である工芸品に美を見いだし、これを民芸と名づけて評価したのが白樺派の宗教学者柳宗悦であった。民芸運動と柳の思想をたどりながら、その意義を考える。	同　上
15	伝統文化と近代	近代になって西欧的な思考様式が取り入れられると同時に、伝統文化は大きく変貌した。伝統文化の衰退と変質がなぜ起こり、今日、ふたたび流行しているのはなぜかを問い直したい。	同　上

＝ 日 本 の 教 育 ＝ （TV）

〔主任講師：深谷昌志（放送大学教授）〕

全体のねらい

日本の教育の特色を、諸外国との対比を視野に置き、それと同時に、歴史的な系譜をふまえて掘り下げていきたい。１５回は、初等教育から高等教育への流れを追う形で構成してある。なお、巾の広い視野を必要とするテーマなので、放送教材作成にあたって、さまざまな専門家の協力を得た。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	近代化と教育	日本の近代化を支えたのは教育の力だといわれる。たしかに、量的な普及という面で、日本の教育は、短期間に成果をあげた。しかし、質的な面では、急速な近代化のもたらした歪みが見受けられる。近代化の光と影は、現在、どのような姿を見せているのか。	深谷昌志
2	学 校	教育の中心は、なんといっても、学校教育であろう。そして、日本の学校は、社会的な期待に添った形で、多くの機能を果してきた。しかし、このところ、学校の機能を見直そうとする気運が強まっている。学校のどこに問題が潜んでいるのであろうか。	同 上
3	教 育 費	教育費については、伝統的に、受益者負担をめぐって論義が重ねられてきた。そして、公共による負担への働きが世界的な傾向であった。しかし、日本に限らず、欧米でも、教育費の公共負担をどの範囲にとどめるのかが社会問題になりつつある。	同 上
4	授 業	日本の教育のひとつの特色は、知識や技術を伝達するさいのたしかに見出しえよう。そうした成果が、学力の高さとなってあらわれるが、ここでは、一斉授業の系譜をたどりながら、日本の授業の持つ功罪を考察していきたい。	同 上
5	教 師	教職のあり方をめぐって、聖職論や労働者論、専門職論などが論じられてきた。全体として、教師たちの間に、専門職志向への動きが目につく。教師たちは、専門職のイメージの試に、教職がどのような形をとるのが望ましいと思っているのであろうか。	同 上
6	教 科 書	明治以後の教科書をみると、授業の形態に応じていろいろの種類のものがある。それらをみながら「教科書とは何か」を考えたい。また、外国の教科書のなかに私たちにとって参考となるものを探ってみたい。	天野正治（筑波大学教授）（国立教育研究所教授）
7	教 科	私たちは学校というと、すぐに国語・算数・社会といった教科を思い浮かべる。だが、教科というのは絶対不変のものではなく、歴史により、国によってさまざまの形をとる。今、わが国や世界において、教科の再編成がどのように進んでいるかを探る。	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	学力	入試は学力をはかることを目標にしているのだが、わが国の入試問題には知識・理解に関わる問題が多く、思考力、興味・関心、意欲などの側面が軽視されている。国際学力調査の結果なども含め、真の学力とは何かを探る。	天野正治
9	制服	今、大学では制服・制帽がほとんど姿を消したが、中学や高校の多くはそれを義務づけており、「服の乱れは非行のバロメーター」などと言われる。それは仮個性の型にはめる教育のあらわれではないのか。制服の歴史をさぐり、諸外国の様子などもみてみたい。	同上
10	非行	校内暴力やいじめなど社会問題化している現代の青少年非行について、その原因、背景、克服策などについて、実際にこの問題にとり組んできた人々の提言をもとに考える。現代の青少年の規範意識についても探ってみたい。	同上
11	国立と私立	我国の高校生の28％が、そして大学生の74％が、私立学校に在籍している。公立と私立の併存が、日本の中等教育、高等教育の一つの特徴といえよう。これまでの日本の教育拡大は、そのかなりの部分を私学に、依存してきた。しかし、その反面では、公私間の授業格差をもたらしており、こうした経済負担の格差を、いかに考えるべきかをめぐって、さまざまな議論がある。ここでは、こうした問題点の検討を行う。	潮木守一（名古屋大学教授）
12	入試選抜	高校入試、大学入試をめぐって、さまざまな議論がなされている。高校はいまや中卒者の95％が進学するところとなっているが、その入試選抜をめぐる競争は、依然として厳しいものとなっている。一体、こうした入試競争の背後には、いかなる背景がひかえているのであろうか。また、大学入試をめぐっても、さまざまな改革案が提出されているが、一体、日本以外の国々では、いかなる方法がとられているのであろうか。	同上
13	教育と産業	日本の産業の海外進出はめざましく、多くの国々はこうした日本の経済的成功に、きわめて強い関心を払っている。外国の関係者は、こうした日本の奇跡の原因を、日本人の教育水準の高さに求めたり、あるいは企業内訓練組織の充実に求めたりしている。しかし、その反面、日本の教育が余り職業教育を重視していない、という事実を指摘する見方もある日本では、一体、教育と産業とは、どのような関係にあるのであろうか。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
14	学　歴　社　会	日本は学歴社会だとして、さまざまな批判をあびているが、一体、学歴社会とはどんな特徴をもった社会のことをいうのであろうか。また、実際問題として、日本はどの程度まで、学歴社会としての特徴をもっているのであろうか。こうした特徴は、どのような歴史的な背景から生じてきたのであろうか。日本以外の国では、学歴とはどのような意味をもち、そこには、どのような変化が現れはじめているのであろうか。	潮　木　守　一
15	生　涯　教　育	人生一生涯が、学習の過程とする考え方が登場するとともに、生涯学習論が多くの論議を呼んでいる。社会生活の複雑化、職業生活の高度化は、これまでの教育のあり方、考え方に、新しい発想の転換を求めている。生涯学習とは、一体どのような考え方を意味しており、現実問題として、生涯学習はどうような形で、具体化されつつあるのであろうか。新なメデイアの登場とともに、人間の学習スタイルは、どのように変わりつつあるのか。	同　　上

＝ 教 育 学 概 論 ＝ （R）

〔 主任講師：田浦武雄（愛知学院大学教授）〕

全体のねらい

教育学は、教育現象を学問的に研究し、理論体系化したものである。教育は、文化・社会の動態と、人間の成長・発達との接する面で、文化と人間との現実構造や変化過程を探究し、よりよい未来を創出するのを助ける営みである。多くの教育問題との関わりを含め、教育の基本問題を研究し、それらの改善の方向を究明する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	教育学の意義	1～7の7回にわたって、教育学及び教育の意義を検討する。 教育学の概念、教育論と教育思想、教育学の始まり動向、日本における戦前と戦後の教育学の変遷について考察する。	田浦武雄（愛知学院大学教授）
2	教育の構造	人間形成には、すくなくとも素質と環境と教育との要素が含まれている。これら三要素の動的関連の基本構造について、検討する。併せて、ＩＱをめぐる論争及び野生児の記録が示すものなどについて考察する。	同上
3	教育の機能	教育という用語を吟味し、意図的教育と無意図的教育との関連について考察し、教育の社会的機能とに文化伝達、社会統制、文化改造の諸機能に関して、検討を行う。	同上
4	成長と教育	教育は人間の成長と発達をめざしている。成長の概念を重視したジョン・デューイの教育学の中心的主張と、かれが批判した諸学説すなわち準備説・開発説・形式陶冶説などの問題点を考察する。併せて、デューイの成長観について検討する。	同上
5	発達と社会化・文化化	発達の類似概念としての成長・社会化・文化化との関連について考察する。人間の成長・発達の過程の動態を捉え、いかに改善していくかの処方の重要性について検討する。	同上
6	発達と教育の理論	人間の成長・発達の過程の把握とその処方をめざすものとして、成長・発達の教育学を志向することが重要である。そのための学際的研究の必要性、成長・発達の考察の視点として文化内存在の概念を吟味し、全人的成長の構造を検討する。	同上
7	現代教育の動向 ――教育の人間化	現代教育の動向のうちで、注目すべきものは教育の人間化の追究であり、人間的教育の確立である。その構成要素として、民主的価値観、豊かな感情・情操、確かな知識、不屈の意志、逞しい健康、道徳的実践力、創造的態度などについて検討する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	現代教育学の類型 1 進歩主義・伝統主義	8～11の4回にわたって、現代教育学の類型について検討する。 戦後わが国の教育に影響を与えた進歩主義と、それと対立する伝統主義とについて、それぞれの理論的特色を類型的に考察する。	田浦武雄
9	現代教育学の類型 2 改造主義・実存主義	プラグマティズムの立場にたちながら、進歩主義とちがった歩みをした改造主義、および人間存在の問題を重視した実存主義について、理論的特色を検討する。	同上
10	現代教育学の類型 3 教育の現象学・教育人類学・教育社会学	現代教育学の新しい動きとして台頭した教育の現象学と教育人類学について検討する。教育の現象学は、実証主義のゆきづまりに対処して興り、実存主義の傾向をもった点、教育人類学は、教育現象についての文化人類学的研究として注目されている点を中心に考察する。あわせて教育社会学の特色も検討する。	同上
11	現代教育学の類型 4 社会科学的教育学・分析哲学・教育人間学	社会科学的教育学、とくにマルクス主義教育学は、社会主義圏の拡大とともに勢力を増しているが、その理論的特色を考察する。他方、イデオロギー的には中立であるが、哲学的分析を重視した教育学、いわゆる分析哲学の検討を行う。近年台頭している教育人間学について考察する。	同上
12	教育の文化的基礎	12～15の4回にわたって、現代社会と教育との関連構造について検討する。 教育は文化と密接に関連している点を、能力と文化的多様性、文化的産物としての能力、文化的相対主義、文化と人間形成、教育における文化研究等の側面に分けて考察する。	同上
13	地域社会と教育	教育をめぐる地域社会の問題、地域社会における学校の役割について検討し、学校の人間化と社会の教育化との関連について、教師の指導力の向上、非行問題への対応、地域社会のもつ教育力の向上などの側面にわたって、考察を行う。	同上
14	情報化社会と教育	情報化社会とマス・コミュニケーションの関係について考察し、併せて、情報化社会における教育のありかたについて、判断力の育成、学び方の学習、教養の向上、人生のビジョン、民主的価値への献身、生涯学習の必要性などの側面にわけて、検討する。	同上
15	家族・仲間集団と教育	幼少期から青年期にかけて、人間形成に影響を与える家族集団・青少年集団と教育との関係について検討する。家族と教育との関連については、家族集団の構造、機能の変遷、教育的機能の面から考察し、仲間集団と教育については、発達段階に応じた構造を考える。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	学校の機能と課題	16～27の12回にわたって、学校教育の基本問題を広い視野から検討する。 学校の概念、近代社会と学校、第二次大戦後の学校、公教育と学校、教育過程と学校の機能、学校の課題等の面から考察を行う。	田浦武雄
17	学力観の動向	学力観の変遷と学力のありかたについて検討する。とくに学力の概念、基礎学力論争を三期に分けて考察し、さらに、人間的教育のフレームワークの中で、基礎学力をいかに考えたらよいかの考察を行う。	同上
18	教育的価値と目的	教育目的は、教育実践を方向づけるものとして、重要な位置をしめている。教育目的の概念、教育基本法の教育目的、教育目的をめぐる論争を整理し、教育目的の構造について、顕在的目的と潜在的目的、規制と逆規制の関係を究明し、併せて教育目的の基準を考える。	同上
19	知識論	確かな知識は、情報化社会ではますます必要となる。知識の意義を理論的に反省し、知識の捉えかたについての諸立場を比較検討し、併せて教育の人間化の観点から、知識教育の課題が何かを究明する。	同上
20	教育課程	何を教えるかは、学校教育の基本問題の一つである。教育内容と教育課程との関係、教育課程の構成要素、教育課程の類型を検討し、学問中心教育課程、および人間中心教育課程の特色を考察する。	同上
21	教育方法	いかに教えるかは、学校教育の基本問題の一つである。教育方法について、その意義を考え、その諸理論を整理し、五段階教授法、問題解決学習、発見学習、制御による学習等の諸説について考察し、学習指導の最適化の必要性について検討する。	同上
22	生徒指導	生徒指導は教科指導と並んで重要な領域である。生徒指導の必要性、現代社会のインパクト、生徒指導と自己実現、生活指導の伝統の反省、生徒指導の課題等について、検討する。	同上
23	道徳教育 (1) 道徳と教育との関連	道徳教育の概念を吟味し、道徳教育を重視すべき理由について考察し、道徳と教育との関連について、価値観の指導、民主主義の理解、人間生活の核、主体的倫理と人類的倫理、社会的環境との対応等の面から、検討を行う。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
24	道徳教育　(2) 道徳教育の構造	先進諸国における道徳教育の体制を比較検討し、併せて、近年重視されている価値教育について、価値教育の類型を整理、分析し、価値教育のありかたについて考察する。	田浦武雄
25	情意的領域の教育	教育においては、認知的領域と並んで、情意的領域が重視される必要性を究明し、芸術教育の動向を考察し、芸術教育・情操教育の現実を分析し、それらの課題について検討する。	同　上
26	創造性の教育	創造的教育の必要性を考察し、創造性とは何かについて、その構成要素、創造性と倫理との関連、創造性の人間学の面から探究し、併せて、創造性教育の基礎的視点について、問題意識の明確化、ステレオタイプの打破、具体化能力の育成、枠組の明確化を検討する。	同　上
27	教育評価	教育評価が、人間的教育においてしめる意義について検討し、教育評価の重要な側面として、達成度の評価、形成的評価、創造性の評価等について考察する。	同　上
28	教育経営	28～30の3回にわたって、教育制度と教育との関連を広い視野から検討する。学校経営・学級経営等を包含する教育経営の意義を明らかにし、学校経営が課題とすべき領域、学校経営の活性化の方途，教育経営と学級経営の関連について考察する。	同　上
29	教育制度・行政	教育制度・行政の意義を考察し、学校制度の現状と課題、学校体系の改革、教育行政の動向について、検討する。歴史的反省とともに、他の国の教育制度・行政の動向との比較研究を行い、教育制度・行政の課題を究明する。	同　上
30	教師論	教育の質を左右するものとして、教師の役割は大きい。ILO・ユネスコの「教員の地位に関する勧告」(1966年）は、専門職としての教師を主張したが、その意義を吟味し、教職観の類型に考察を加え、併せて教員養成の課題について検討する。	同　上

＝心理学概論Ⅰ＝（TV）

〔主任講師：大山　正（日本大学教授）
　　詫摩武俊（東京都立大学教授）〕

全体のねらい

人の心と行動のはたらきを理解するために、まず、人が環境の状態と感覚を通して知り、それによって得た情報を処理して、自分の要求の実現に役立てていく過程を考えてみる。つぎに、このような人の心と行動が、子供から大人へと発達していく過程において、いかに変化していくか、また個人個人によりどのように違うかについて述べる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	心理学とは	心理学とは何か。その課題、対象、方法などをめぐり、歴史的発展の過程と現況を述べる。	大山　正（日本大学教授） 詫摩武俊（東京都立大学教授）
2	環境の認知Ⅰ 感覚	環境の中で生活するために必要な環境の状況把握。その手段としての感覚について考える。	大山　正
3	環境の認知Ⅱ 感覚	知覚は外界の忠実な反映でもない。知覚の法則、錯覚、空間と運動の知覚について述べる。	同上
4	情報の処理Ⅰ 注意と探索	日々の情報量は膨大だが利用は1部のみである。この観点から、注意と知覚的探索について述べる。	大山　正 御領　謙（千葉大学教授）
5	情報の処理Ⅱ 記憶	過去の情報は記憶として保存される。この記憶の成立、保持、検索、変容などを述べる。	大山　正 小谷津孝明（慶応義塾大学教授）
6	情報の処理Ⅲ 思考と言語	利用可能な情報を用い、人が問題を解決する過程としての思考と言語体系の役割を考える。	大山　正 東　洋（東京大学教授）
7	経験の効果 学習	人は過去の多くの経験によって、行動の習慣を獲得し、変容する。この学習過程を考える。	大山　正

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	要求と感情	人が行動を起こすのは要求にもとづく。生物的要求、社会的要求、関連する感情・情動などを述べる。	大山　正 託摩武俊
9	心の発達Ⅰ 乳幼期・幼児期	他の動物に比べ、人間は本能的行動が少なく可塑性が豊かである。乳幼児の成長過程を述べる。	託摩武俊
10	心の発達Ⅱ 青年期から老年期	青年期、成人期を経て老年期に至る心の変化、他人との関係や性格の変化について述べる	同上
11	個人差Ⅰ 知能	知能とは何か、どんな働きの知能があるか、測定は可能か、天才とは何かなどを述べる。	伊藤隆二 （横浜市立大学教授）
12	個人差Ⅱ 性格	性格の類型論と特性論、性格の形成に関与する諸要因、性格テストなどについて述べる。	託摩武俊
13	社会的行動	社会的環境の認知過程の特色、態度の形成と変容、援助行動と攻撃行動などを述べる。	加藤義明 （東京都立大学助教授）
14	心の異常	神経症と心因反応、神経症の類型、精神分裂病、躁うつ病、心の異常の分類について述べる。	福島　章
15	心理学の応用	心理学の研究成果や研究法が、実際にどのように応用されているかを実例をあげて述べる。	託摩武俊 大山　正

＝ 心理学概論Ⅱ ＝ （TV）

〔主任講師：中川大倫（放送大学教授）〕

全体のねらい

心理学概論Ⅰを土台として、心理学上の諸問題を各論的に述べる。これによって、心理学概論Ⅰとともに、心理学的なものの見方、考え方を豊かにし、同時に、心理学のみならず、隣接領域にかかわる諸事象に対しても、関心と興味とをもつことができるように配慮する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	心の発達Ⅰ	幼少期の発達における脳神経細胞間の精密な連結化と神経繊維の髄鞘化の重要さにふれ、それを土台として、発達の初期段階における経験が、その後の発達、知覚、学習の上に少なからぬ影響のあることを、刺激制限下に飼育された動物の実験事例を中心にして説明する。	中川大倫（放送大学教授）
2	心の発達Ⅱ	人の初期経験の問題について、二つの側面から説明を試みる。1　幼少期のある時期に人間的、社会的接触をもたなかった野生児、社会的隔離児の教育事例。2　感覚的、知覚的、社会的刺激の乏しい施設児の環境条件を改善し、より豊かな人間的、社会的環境を与え、その効果を確かめた研究事例。	同上
3	環境の認知Ⅰ	人の認知している世界は、その人を囲む物理的な世界とは違った世界である。知覚的世界とも、心理学的世界ともいわれる。この知覚的世界の特性につき、形の知覚（図ー地、群化、分節、枠組、輪郭線、知覚の場）と運動の知覚（実際運動、みかけの運動）を取り上げて説明する。	同上
4	環境の認知Ⅱ	知覚的世界の特質を空間知覚と時間知覚の側面から説明する。空間知覚では、奥行き視（単眼視と両眼視）と恒常現象（大きさ、明るさ、形の場合）にふれ、時間知覚については時空相対の関係を実証的に述べる。	同上
5	環境の認知Ⅲ	知覚的世界においては、刺激体制の構造化が十分でないと、主体の内的要因が知覚の形成因子として参加するようになる。本章においては、知覚形成における主体的要因として、構え、文脈、図式、順応水準、動機、共通の期待などについて述べ、また、知覚と有機体の生活の問題にもふれる	同上
6	学習Ⅰ	古典的条件づけと道具的条件づけ（オペラント条件づけ）の概要を述べ、両者の類似点と差異点に注意する。とくに、オペラント条件づけに関する諸問題や最近のシェイピング、バイオフィードバックの問題にふれ、現代生活との関連について述べる。	同上
7	学習Ⅱ	学習に関する認知的な考え方につき、ケェーラー、レヴィン、トールマンを中心に述べ、S－R学説と認知説とのかかわりにふれる。さらに、技能学習の特性を質的変化と量的変化の側面から述べ、社会的学習を、モデルの観察による模倣と不安回避による模倣について説明する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	記憶のシステムⅠ	まず、記憶の過程と記憶研究の方法の概要を述べ、さらに、最近の情報理論の影響による記憶過程のモデルを説明し、この記憶モデルを土台として、感覚的記憶の基本的な特質、ならびに、感覚的記憶と短期記憶の関係や短期記憶における情報処理過程について述べる。	中川大倫
9	記憶のシステムⅡ	前述した記憶モデルの流れをうけて短期記と長期記憶の関係を述べ、さらに、長期記憶の構造の問題、記憶におけるリハーサルと忘却の問題、長期記憶における情報の質的変容の問題、記憶研究と日常生活の関係などの事項について説明する。	同上
10	認知	形、文字などの認知に関する基本的な問題を取り上げる。まず、認知における特徴抽出の理論（心理学的理論と生理学的理論）を述べ、さらに、認知における情報処理の方略として、刺激駆動型処理と概念駆動型処理の特性ならびに両者の関係について説明する。	星薫（放送大学助教授）
11	個人差	人は発達のいろいろな段階を通じ、外部環境との相互作用の中に、新しい行動の様式を作りあげつつ、さらに、発達をつづけていく。人は、その間に、身体的にも知的にも、性格的にも、また、社会的な行動の仕方の上にも、いろいろな個人差を現すようになる。本章では、知的な個人差に焦点をしぼり、知能と学力とを、測定との関連において説明を試み、理解を深めようとする。	中川大倫
12	社会的行動Ⅰ	人の行動を社会的背景の中にとらえ、まず、対人関係において対人魅力とゲームの問題を説明する。ついで、集団の形成と構造化の問題に移り、集団形成の要因、集団参加の要因等を説明し、さらに、構造化の過程にみられるフォーマルな集団とインフォーマルな集団の関係、集団のまとまり、集団規範と同調の問題を取り上げ説明する。	山口勧（東京大学助教授）
13	社会的行動Ⅱ	まず、集団内の個人行動として、周囲の人からの影響として現れる社会的促進と社会的手抜きの現象を説明する。ついで、集団行動として、集団の生産性、リーダーシップ、集団内コミュニケーション、集団討議と決定の問題を説き、最後に、危機的場面と人の行動にふれる。	同上
14	要求（動機）と阻止現象	人は能動的に、また、目的的に振舞い、つねに環境との適応を求める。人は要求や目的にもとづいて行動し、目的を達成して満足し、また、目標到達を阻まれ、失望し、落胆し、ときに、憤慨し乱暴したりする。本章は、行動発現の動因となる要求（動機）や要求の阻止、それに伴う情緒的表現に焦点をしぼって述べる。	中川大倫
15	指導と治療	日常の社会的生活において、周囲の人々や社会的規範、社会的要請とのかかわりの中で、調和のとれた生活を送ることが困難な事例がある。そのような事例に対して、どのような指導が行われるか、また、治療の方法があるものか、その主要な方法について述べる。	同上

＝行　動　科　学＝　（TV）

〔主任講師：小川　隆（明星大学教授）
　　末永俊郎（日本大学教授）〕

全体のねらい

人間の行動に関する諸科学の概説ではなく、心理学としての行動科学を扱う。前半は個体の行動について生得的、習得的行動を扱い、後半は社会的行動を扱う。心理学概論、他の心理学関係の科目で多くは扱われないが、行動科学の視点からは大切な比較心理学、社会心理学の領域に重点が置かれる。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	行動科学の視点	1　心理学としての行動科学 2　行動の区分 3　行動と環境	小川　隆 （明星大学教授）
2	生得的行動 ──環境と行動	1　行動の発生 2　行動環境	同　上
3	生得的行動── 行動の系統発生Ⅰ	1　行動の種類 2　種に固有な行動の特徴と意義 3　行動の相同 4　行動の相似	渡辺　茂 （慶応義塾大学・助教授）
4	生得的行動── 行動の系統発生Ⅱ	1　自発生と内部要因 2　行動の周期性 3　行動の選択 4　行動の階層性 5　行動の最適化	同　上
5	生得的行動── 行動の個体発生	1　系統発生と個体発生 2　行動の発達的変化 3　個体発生の生得性と習得性	小川　隆
6	行動の生理学	1　はじめに　　6　連合野の働き 2　空間定位とは 3　フクロウの音源定位 4　こだま定位のメカニズム 5　頭頂葉と空間定位	酒田英夫 （日本大学教授）
7	習得的行動 ──行動の分析	1　習得的行動の種類 2　実験的行動分析	小川　隆

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	習得的行動 ―認知機制	1　刺激性制御 2　条件性強化	小　川　　隆
9	習得的行動 ―行動機制	1　強化 2　有害刺激の制御 3　選択行動	同　　上
10	言　語　行　動	1　オペラント行動としての言語行動 2　言語行動の機能 3　言語行動の行動的基礎	佐　藤　方　哉 （慶応義塾大学 教授）
11	選択行動 ―意志決定	1　意思決定論 2　主観確率 3　効用 4　認知的意思決定論	戸　田　正　道 （中京大学教授）
12	行動修正Ⅰ ―応用行動分析	1　行動修正とは何か？　　6　結論 2　目標の設定 3　行動の基本原理 4　行動を増加させる手続 5　行動を減少させる手続	出　口　　光 （明星大学講師）
13	行動修正Ⅱ ―教授工学	1　システム分析 2　トークン経済システム 3　個人化教育システム （Personalized System of Instruction PSI）	同　　上
14	行　動　薬　理　学	1　薬物の行動に対する効果 2　薬物の強化効果 3　薬物の弁別刺激効果 4　まとめ	安　東　　潔 （財実験動物中央研究所精神薬理部長）
15	行　動　工　学	1　科学的管理法 2　科学的管理法の問題点とその後の展開 3　行動解析の事例	西　岡　　昭 （労働科学 研究所員）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	社会的行動の発生	1 社会的行動とはなにか 2 動物の社会的反応 3 乳児の社会的反応 4 母子関係 5 言語の発生	末永俊郎 （日本大学教授）
17	社会的行動における学習	1 レスポンデント条件づけ 2 オペラント条件づけ 3 モデリング 4 態度形成・対人魅力と学習 5 攻撃・援助行動と学習	安藤清志 （東京女子大学助教授）
18	社会的認知と行動（Ⅰ）	1 認知のバランス 2 認知の不協和 3 自由の認知	山口勧 （東京大学助教授）
19	社会的認知と行動（Ⅱ）	1 因果関係の認知 2 因果帰属と行動 3 社会的比較と行動	同上
20	社会的行動と自己	1 自己意識・自己概念・自尊心・自己関係 2 自己意識と社会的行動 3 自己概念と社会的行動 4 自己評価・自尊心と社会的行動 5 自己開示と社会的行動	安藤清志
21	対人場面における行動Ⅰ	対人場面における作業成績	中村陽吉 （学習院大学教授）
22	対人場面における行動Ⅱ	対人行動における他者共存の影響	同上
23	対人場面における行動Ⅲ	対人距離と行動	同上

回	テーマ	内容	担当講師 （所属・氏名）
24	集団内行動Ⅰ	1　集団とは何か 2　集団に参加するのは何故か 3　集団の特徴	古畑和孝 （東京大学教授）
25	集団内行動Ⅱ	1　個人の遂行と集団の遂行 2　課題の性質・型と生産性との関係 3　集団における意思決定	同上
26	集団内行動Ⅲ	1　リーダーシップの概念 2　リーダーシップの機能 3　リーダーの情況との適合	同上
27	集団間行動	1　集団間行動とは何か 2　集団間における相互作用 3　集団間葛藤の軽減 4　実験的間接的経験を通しての国際関係	同上
28	集合行動Ⅰ	1　集合行動の類型 2　集合行動の一般的特性 3　集合行動における人間的行動の特徴	岡部慶三 （帝京大学教授）
29	集合行動Ⅱ	1　流言 2　パニック	同上
30	行動科学の展開	1　行動科学の歴史 2　今後の展望	末永俊郎

＝ 現代の人間観と世界観 ＝（R）

〔主任講師；中埜　肇（放送大学教授）〕

全体のねらい

激動しつつある複雑多様な現代の文化・社会・生活の根本に働いている人間観と世界観の本質をさまざまな角度から照明し、現代に生きることの意義を考えたい。第2回以降は2回ずつ担当講師によるそれぞれ専門的な視点からの講義を行い、各2回目の終りには主任講師との対談によって理解を深める。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論	私たちにとって「現代」はいかなる意味を持つか、現代の文明論的な特質は何か、現代の人間観と世界観はどのようなものか、などについて全般的・総括的に論ずる。	中埜　肇（放送大学教授）
2	現代社会に見られる人間観 ―技術と現代文化(1)	近代の産業社会を「技術」の世界として捉え、そのことを世界観的な意味を考える。そのさい、技術をそれ以前の「ａｒｓ」の観念と比較し、その同じ根から「芸術」の概念が生じたことに注目し、その状況を現代以前の特色として論じる。	山崎正和（大阪大学教授）
3	現代社会に見られる人間観 ―技術と現代文化(2)	前回の論述を承けて、現代の脱産業社会の特色を、技術・芸術分裂の時代の終りの始まりとして論じる。現代の新しい生産と消費動向のなかに、古い「ａｒｓ」の復活の可能性を考えたい。	同上
4	哲学的思想に現れた現代の人間観と世界観 (1)	現代思想の源流をだいたい今世紀のはじめにもとめ、哲学のさまざまな問題とその解決をめざすさまざまな方法が今日までどのように展開してきたかを、いわばタテに考察する。	塚本明子（東京大学助教授）
5	哲学思想に現れた現代の人間観と世界観 (2)	現代における哲学のおかれた状況とその使命をさぐるため、哲学とともに今世紀さまざまに展開してきた、哲学以外の学問分野との相互連関において、また学問の外の人間の活動や世界の問題との連関において、哲学をいわばヨコに考察する。	同上
6	科学・技術に見られる現代の人間観と世界観 (1)	この回は、科学・技術の成立を捉し、あるいは逆に科学・技術の進展によって深化された世界観を中心に考えてみる。物質、エネルギー、情報の三つの基本概念によって支えられた現代の世界観はどのような姿をしているか学ぼう。	村上陽一郎（東京大学教授）
7	科学・技術に見られる現代の人間観と世界観 (2)	この回は前回に扱った世界観の中で、人間がどのような位置にあるかを考えてみる。特に心理学、医学の《科学・技術化》が進むのに並行して、人間に対する考え方が大きく変化していることを中心に、人間疎外といわれるものにも触れよう。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	精神医学を通じてみた現代の人間観と世界観 (1)	精神医学は人間を1)生物学的2)心理学的3)社会学的4)形而上学的な、多元的存在としてとらえる。人間は「生物としてのヒト」であるが、一回的でかけがえのない自覚的存在である。この回は、とりわけ行動研究や脳研究が人間観・世界観に及ぼす影響を考える。	小田　晋（筑波大学教授）
9	精神医学を通じてみた現代の人間観と世界観 (2)	この回には、現代人のこころの病態と行動の異常を通してみた現代の人間観と世界観の特徴を考える。精神病の軽症化と一般化、異常－正常の境界喪失、妄想の内容変化などを通じて、現代人における境界線喪失・情報化・物象化などの特徴が浮かび上ってくる。	同上
10	宗教現象に見られる現代の人間観と世界観 (1)	個別・特殊な宗教の立場からではなく、人類（史）の宗教現象の統一的理解という宗教学の課題・視点から現代世界の宗教（現象）－それは多様なものである－に顕わになっている人間観と世界観の特徴と意味について、とくにまずその多様な現われについて考える。	荒木美智雄（筑波大学助教授）
11	宗教現象に見られる現代の人間観と世界観 (2)	現代の多様な宗教現象を人類の宗教史から類型学的に把握し直して、その特徴と意味について考える。	同上
12	芸術に現れた現代の人間観と世界観 (1)	芸術作品の中には、同時代の本質を映し出したものがある。そういった視点から、20世紀の特に現代的な芸術作品－美術、音楽、文芸などのジャンルにおけるいくつかの特色ある作品に映し出された現代の人間の姿を見て、その意味について思想的に考える。	増成隆士（筑波大学助教授）
13	芸術に現れた現代の人間観と世界観 (2)	(1)と同様の視点から、現代の世界の特色について、この場合は特に現代人の居住空間、生活環境という具体的な局面で見つつ、その意味について考える。建築論・都市論のほか絵画や文芸に描かれた現代世界の様相およびそれについての思想を問題にする。	同上
14	情報化とマスコミュニケーションに見られる現代の人間観と世界観 (1)	現代人の生活は、新聞・テレビ・雑誌などのマスコミと切り離しては考えられない。特にテレビの影響力は大きい。この映像を中心とした擬似的現実の受容と共有が人間をどう変えたかを論ずる。	青木　彰（筑波大学教授）
15	情報化とマスコミュニケーションに見られる現代の人間観と世界観 (2)	電気通信と情報処理の技術の発達によってもたらされる「高度情報社会」では、情報の洪水に対する賢明な選択が求められる。ニューメディアの登場など今後の情報環境の変化と人間の関係について考える。	同上

＝哲学の基礎＝（R）

〔主任講師；山本　信（東京女子大学教授）〕

全体のねらい

哲学は我々の日常生活に根ざし、人生観や世界観の問題に連なるものではあるけれども、学問として理論的にやってゆくためには、どうしても抽象的な概念や問題設定を扱うことができなければならない。そのための最も基礎的な道具立てを整えておきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	哲学とは何か	「哲学」という言葉そのものの意味を考えることから始め、この学問がもっている独自の性格と、それを学ぶときの特殊事情について述べる。	山本　信（東京女子大学教授）
2	哲学史の意義	他の諸学とは事情を異にして、哲学の研究は常にその歴史との内的な連関において行われなければならない。哲学を西洋から移入し、しかも自国の思想的伝統をもっている日本人には、この点でも特別の問題が課されている。	同　上
3	哲学の諸部門	普通哲学に属すると考えられている諸学問を列挙し、それぞれについて多少の説明を加え、それら全体にわたって見とおしをつける。	同　上
4	存在論の基本問題	「ある」ということをめぐる古来の論議をふまえ、「実体」「形相」「本質」など、歴史的にも体系的にも哲学にとって最も基本的な諸概念をとりあげる。	同　上
5	主観概念	「主観」あるいは「主体」と訳される概念の形成過程をかえりみることによって、現代にいたるまでの近代的な思考体制の原点を究明する。	同　上
6	近世的二元論	近世における心と物、精神と物体の二元論は、それ自体が本質的に不安定なものであり、観念論と唯物論という対立的立場もそのことの所産にほかならない所以を論ずる。	同　上
7	認識論の系譜	近世以降の哲学を特徴づける認識論的問題設定について、その端緒における歴史的意義を明らかにし、その後の展開を跡づける。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	主体性の形而上学	認識し行為する主体としてのあり方をもって原理とする立場が、近代の合理性をになう一方の柱として、どのように展開されてきたかを考察する。	山本　信
9	近代科学の思想史的意味	現在われわれが「科学」とよんでいる知的形態が、近代の合理性をになうもう一方の柱として、思想史的に何を意味しているかを考察する。	同上
10	科学的思考の諸性格	科学的な思考法、それはまたわれわれが小学校以来の教育で叩きこまれてきて常識になっている考え方でもあるが、その特質と帰結とを、いくつかの項目にわけて露わにする。	同上
11	生命と人間性	科学の進歩は、生命現象をも物理的化学的な過程にひきもどし、また人間に対してはその尊厳を剝奪してゆくかのようにみえる。こうした事態に関してどう考えたらよいか。	同上
12	心身問題	からだとの関係において心とは何なのかということは、人類にとって古くからの関心事であり、哲学の主要問題の一つでもあった。特に近世的二元論の文脈のなかで現在どう考えたらよいか。	同上
13	自由と必然	人間の自由に対立するものとして、運命、自然因果性、社会的制約などが語られる。これらの必然的支配を説く決定論に対して、どう考えたらよいか。	同上
14	真理論	何を考え何を語るにせよ、それは真なのかという問が最後までつきまとう。ではそもそも真理とは何か。そして、何かが真であるということはどうやって確かめられるか。	同上
15	現代の哲学的状況	哲学の歴史から見てわれわれがどのような状況におかれ、いかなる問題に直面しているか、ということを知るために、現代の諸学説に現われている思想的動向を概観する。	同上

＝古代中国の思想＝（R）

〔主任講師：戸川芳郎（東京大学教授）〕

全体のねらい

中国古代中世に生れた思想の歴史を概観する。その源流を追って、発現のすがたと現実に果たした役割またその後世への影響をえがきつつ、中国思想のいとなみを把握したい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	“仁”と孔子	周代文化の基礎－古代宗族制の世界－が再編にさしかかった春秋後期、はじめて人間関係のあり方を自覚した孔子が出現する。この儒家の開祖の思想と行動を時代の様相とともに説明する。	戸川芳郎（東京大学教授）
2	墨家集団の思想	礼楽文化に依拠した儒家の思想基盤をおびやかす墨家の、“兼愛・交利”の考えと党派的な結社集団の行動軌跡をたどる。“非行・節葬”の社会批判や“尚同・天志”の政体論にも言及する。	同上
3	孟子の王道論	戦国期の社会変動のただ中、聖人孔子を聖王の系列に加えた孟子は、その正統伝道者として王道政治の理想を遊説する。“仁義礼智”を支えた性善説を紹介し、その思想史上の評価を行う。	同上
4	荘子と老子	人為を排した「全性保真」の養生論と相対世界を脱して“斉同”の真実在をもとめた荘周の夢は、古代観念論の極致である。後続の『老子』の“無為而無不為”の政術をあわせ論ずる。	同上
5	“礼”と荀子	古代中国は、荀子の指示する方向に進んだ。天人の分離・後王思想・性悪説によって“礼法”秩序を支える根源を現実の実力者王者の権威に帰した。この、法家思想を導いた内容を伝える。	同上
6	諸子百家	儒墨二大集団のほかに戦国中・末期に活躍した遊説の士のうち、のちに名家－恵施・公孫龍－、法家－商鞅・申不害・慎到・韓非－、縦横家、兵家と称される思想家の行動をあつかう。	同上
7	陰陽思想と「易伝」	中国の生んだグローバルな思想とは、漢初の陰陽二元と五徳終始の説である。“変易”原則を説く「易伝」へも習合され、自然と人事を包括して、形而上の一者“太極”の概念を生む。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	司馬遷と歴史記録	叙事巨篇『史記』に現れた司馬遷の意図をその列伝を主軸に窺うとともに、周代伝来の政事記録一『尚書』と『春秋』を紹介する。加えて春秋学とその三伝を説明し史家の体例に論及する。	戸川芳郎
9	黄老思想と董仲舒	雑家の書『呂氏春秋』と『淮南子』を黄老思想を媒介にして説明する。一方、国教に立った儒学の教義、董仲舒の政治理論一天人相関の陰陽災異思想、春秋三統説、君権則天主義を述べる。	同上
10	儒教と経学	王朝支配の体制教学として前漢後期から清末に及んだ儒教について、その特徴を綱常倫理・修己治人・名分論・権威主義にわけて概観し、その学術の内容一経学一の史的展開を跡づける。	同上
11	漢家の復興	王莽新の簒奪政権をはさんで、当時の学術・文化を象徴する、劉向父子と班氏一族の事業を紹介する。前者の中秘書の総合整理、後者は劉漢受命説に立つ断代史『漢書』の編纂である。	同上
12	讖緯思想と王充	陰陽災異説から「以往知来」の予言化が進み、図讖の政術利用と緯書の出現に及ぶ。その批判者王充の唯物論的な気一元論と徹底した命定論を紹介し、その頌漢思想との関わりを述べる。	同上
13	許慎と鄭玄	学官と学制が整備された後漢礼教国家は、学術の分化と論争をよび、また総合解釈へと動く。漢唐訓詁学を代表する経学一許慎と鄭玄一を登場させその閲歴と学問のあらましを見る。	同上
14	生成論と"無"	「太極」「元気」の統合概念が成立すると、後漢期を通じて宇宙生成論が発達し魏晋期に三気五運へと展開する。その展開の様態を追究する一方「無」の存在論の深まりを王弼の所説に見る。	同上
15	人間史のこと	人間社会の歴史を遡って、その開闢に及び、宇宙生成と人間史とを継ぎ合わせたのは、魏晋期である。史体通史の創制とその盛行を通じて歴史意識を探る。末尾に、中国思想をまとめる。	同上

＝ 近 代 の 思 想 ＝ （R）

〔主任講師：中埜　肇（放送大学教授）〕

全体のねらい

とくに西欧を中心とした近代思想の特質を、神・人間・自然という主題にもとづいて、ルネサンス（15～16世紀）、知性の時代（17世紀）、啓蒙の時代（18世紀）、ロマン主義の時代（19世紀）という時間的経過のなかでとらえる。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	「近代」の概念	「近代」という概念の由来と意味およびその妥当性について考え、その範囲を限定し、いわゆる「近代化」の内容を検討する。	中埜　肇（放送大学教授）
2	中世と近代	近代の思想の特質を、その全般にわたって、それに先行する中世との対比において概括する。	同　上
3	神について(1)	近代初頭から17世紀までを中心に、キリスト教信仰が強く生きつづけたことを，当書の哲学思想や自然科学との関連において述べる。	同　上
4	神について(2)	宗教改革、神秘思想、ピューリタニズム、ピエティズムなどの宗教運動を信仰の内面化としてとらえ、その思想的な意味について考える。	同　上
5	神について(3)	啓蒙思想によって知性化・合理化された信仰としての理神論や無神論の意味について述べる。	同　上
6	神について(4)	スピノザ的汎神論の19世紀における復権によってもたらされた、知性と信仰との再統合である哲学的な理性宗教とその破綻について考察する。	同　上
7	人間について(1)	近代に入って生まれた新しい人間像を、ルネサンスのヒューマニズムやフランス・モラリストの思想を通して概観する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	人間について(2)	近代哲学の全体にわたって「心」・「精神」・「自我」・「意識」が優越していたことの思想的な意味を考える。	中埜肇
9	人間について(3)	社会的に見た近代的人間像の象徴とも言うべき「近代市民社会」の思想について考察する。	同上
10	人間について(4)	「近代国家」の思想的な基礎ならびにロマン主義のもとでそれと結びついた「歴史」の思想を検討する。	同上
11	自然について(1)	近代的自然像としての「開かれた宇宙」が持つ世界観的・学問的な意味について考える。	同上
12	自然について(2)	「物質的自然」に関する新しい学問としての「自然科学」の思想的な基礎およびそれと「自然哲学」との関係を論ずる。	同上
13	自然について(3)	「人間的自然」（human nature）の意味の発見と結びついた「自然法」思想について考える。	同上
14	自然について(4)	ロマン主義のもとにおける有機的（生命的）自然観や美的自然観と目的論的思考について述べる。	同上
15	近代と現代	近代の思想的な特質を，それら原理的批判から生まれた現代の思想的なありかたとの対比において再考する。	同上

＝現代の思想＝（R）

―20世紀後半の哲学―

〔主任講師：今道友信（清泉女子大学教授）〕

全体のねらい

現代を20世紀後半と規定し、1983年現在の思想状況を哲学的に明らかにし、21世紀への展望を試みることにする。テーマには、常に問われている永遠の課題と特に現代で問われ始めたものとがあるが、前者では方法の新しさに、後者では問題内容に重点を置く。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	現代の哲学的考察	・自我の方法的分裂 ・技術関連の成立 ・イデオゴニア	今道友信 (清泉女子大学教授)
2	過渡期の苦脳	・過渡期の設定 ・プラグマティズム ・ネオ・マルクシズム ・実存哲学	同上
3	科学哲学と論理学の変貌	・科学と論理学の再登場 ・科学哲学 ・論理学の変貌	同上
4	歴史の再考と比較研究	・三つの歴史 ・新しい歴史観 ・比較研究	同上
5	言語哲学	・言語と人間 ・言語の構造 ・言語の機能	同上
6	分析哲学の展開	・その定義と課題 ・ケムブリッジ学派 ・日常言語学派	同上
7	分析の諸相	・哲学的分析の諸相 ・精神分析 ・存在論的分析	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	構造主義	・新しい構造観 ・道徳と言語構造 ・構造主義について	今道友信
9	哲学的人間学	・人格主義的人間学 ・行為と反省 ・人文主義	同上
10	修辞学と美学	・修辞学－文化の自己規制 ・修辞の哲学から解釈学へ ・芸術哲学	同上
11	解釈学と宗教哲学	・理解の解釈学 ・形成的解釈学 ・宗教哲学	同上
12	社会哲学	・二人の先駆者 ・科学的社会哲学 ・フランクフルト学派	同上
13	自然哲学と形而上学	・形而上学の一般的規定 ・自然哲学 ・形而上学	同上
14	超越的形而上学	・死の哲学 ・批判的形而上学	同上
15	日本の現代哲学と哲学の将来	・Varia philosophica ・日本の現代哲学 ・哲学の将来	同上

＝ ことばとコミュニケイション ＝ （TV）

〔主任講師：吉田夏彦（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

ことばがコミュニケイションの中で果す役割を考えることを通じて、心、物、抽象的なもの、の三つのものの間の関係についての知見をえることをめざす。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	はじめに	コミュニケイション全体について論ずる	吉田夏彦（東京工業大学教授）
2	広い意味でのことば	表情、身ぶりもことばの一種に数えられることがある。また、自然の一部をなしているものごとまでことばといわれることがある。そういう例をひきながら、広い意味でのことばについて論ずる。	同上
3	せまい意味でのことば	前回とは反対に、話しことばや書きことばを典型とする、せまい意味でのことばについて、その性質を論ずる	同上
4	鳥や獣のことば	・話す鳥 ・類人猿の文字 ・アプリオリ主義	同上
5	ことばとコミュニケイション	ことばとそれによって表現される内容との関係を論ずることを通じて、コミュニケイション全体の中でことばが果す役割を考える	同上
6	ことばと心	ことばと心との関係について論ずる	同上
7	物とことば	物質についてのべることばについて論ずる	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	論理とことば	論理とことばとの関係について論ずる	吉田夏彦
9	計算機とことば	・論理設計 ・「生物」 ・配号配列の変形 ・自然言語	同上
10	ことばの背景	・母語と外語　・感情 ・文学の翻訳　・木敦どり ・風物 ・習慣 ・身ぶり	同上
11	個物	・心 ・プログラム ・個体 ・種類の限定 ・自分	同上
12	モデル	・人物画　・理論 ・幾分学　・認知科学 ・数学的な構造　・文法 ・模型　・規範 ・仮説　・規格	同上
13	表現と内容	・写真 ・俳句 ・心 ・正文	同上
14	語法の問題	・人工語 ・主語 ・「君は悲しい」 ・「はい」と「いいえ」 ・模形性	同上
15	おわりに	・「意味」　・ことば自体の価値 ・「外来語をつかうな」 ・思いやり ・正書法 ・母語	同上

＝ 思 考 と 論 理 ＝（R）

〔主任講師：大森荘蔵（放送大学教授）〕

全体のねらい

思考、論理という曖昧模糊とした二概念を明確にすることによって、両者の関聯が言語の場にあることを示そうとする。そして具体的に日常日本語の中から若干の語の意味規則を撰んでそれらの規則から現行市販されている教科書の論理学が導出されることを示すことによって論理の言語規則説の一般的証明を行う。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	概説的序論	本章の目的　本題の誤解　「思考」の曖昧さ　「思い」も思考　「思い」の言語化　言語規則説　記号論理学　我が国での記号論理　思考と論理　規則説の述べ方	大森荘蔵（放送大学教授）
2	思考とは？	思考の意味の曖昧さ　「思い」としての思考　知覚（perception）に対しての思考（conception）　思考的理解の様々　知覚の中に籠った思考　四六時中常に思考	同上
3	思考と言語	経験は普通言語化されない　言語以前の経験という誤解　想起とは過去形の経験　思考が言葉になる　夢の場合　繰返して誤解を排する	同上
4	論理とは？	論理的正しさを手掛りにして「論理」を考える　排中律の形式の正しさ　言語規則説　出発点となる語を選ぶ　四つの接続詞　それら接続詞の意味規則　論理学の導出　結果の検定　日本語から論理学が導出される　言語規則と論理的正しさとの関係の実例　平面幾何学の語群　親戚名集団　等高線の意味により平面図から切断面図を導出する	同上
5	言語規則から論理を導く	言語規則説の証明の必要　局所的論理　全域的論理　非主題的な言葉から出発　非主題的な名詞・動詞　接続詞は非主題的　真理値表による接続詞の意味表現　真理値表を使って複合文の真理値を決める　恒真文型　接続詞間の依存関係	同上
6	述語論理(1)	言語規則説を述語論理に及ぼす　主語ー述語の表表記法　関係を含む述語の表記法　「すべて」の表記(α)　「すべて」の範囲　話題世界を不定にしておく存在記号の導入　最大数に関する文例　束縛変項、自由変項述語文の簡単な表記法　真理値による述語の定義　n座述語　$(xi)H(x_1, x_2, xn)$　と$(xi)H(x_1, x_2, xn)$の真偽　述語論理の文型　回帰定義　妥当文型　公理系による公式的証明	同上
7	述語論理(2)	言語規則説への疑問　非主題的な語群から全域論理学　記号論理学の普遍性　弁証法と形式論理　接続詞と分割描写　量子論での接続不能　確率論と接続詞　総称詞の接続機能　論理は世界に相対的　E.T生物の論理	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	異なる言語に異なる論理？	言語規則説への疑問　非主題的な語群から全域論理学　記号論理学の普遍性　弁証法と形式論理　接続詞と分割描写　量子論での接続不能　確率論と接続詞　論理は世界に相対的	大　森　荘　蔵
9	論　理　的　必　然　性	必然性をとり上げる　論理的文は経験的検証と無縁　排中律の場合　規則に従う　規則に従わないと	同　上
10	古　典　的　三　段　論　法	古典的三段論法と記号論理学　三段論法各種　正しい三段論法　推論型と文型　推論型と文型の相互導出　接続詞　矛盾文型から任意の文が推論できる	同　上
11	思　考　の　論　理　性	二つの結論　思考は必ず論理的？　論理と言い換え　首尾一貫　はやり言葉の論理	同　上
12	形式化とコンピュータ	形式性の必要　形式化と機械化　算盤　コンピュータ　接続詞に対応するスイッチ回路　・のスイッチ　Vのスイッチ　～のスイッチ　機械的解法　決定可能性	同　上
13	人間・脳・コンピュータ	言い廻しの危険　§1コンピュータ　コンピュータは「計算する」　機能的同類化　§2脳「脳が…する」　脳過程　重ね描き　キメラ命題　キメラ命題は無意味　脳には機能的同類化は及ばない	同　上
14	言　語　と　世　界	言語表現という誤解　事物の輪郭　「家」の固定「家」の制作　言葉に生活が籠る　人の動作　カントの図式論も同様　時間順序　時間順序の制作　要約　人間的意味を世界に与える	同　上
15	論　理　と　世　界	世界の法則としての論理　論理は経験法則ではない　論理は言語を通して世界に成り立つ　時間順序　カントと規則説　今一つの観点　命題論理の接続機能　古典物理と量子論　弁証法論理　有効性の観点　結論	同　上

＝ 比 較 思 想 論 ＝（TV）

〔主任講師：中村　元（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

人間の思想の発展に関して、単に知識を伝えるというのではなく、世界が一つになり、万事がグローバルに考慮されねばならぬ時代になったので、＜思想＞そのものを取り上げて、東西を通して発展史的に述べて行きたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	比較思想論とは何か	思想は万人に承認され得るものである。この視点に立って、学問のセクショナリズムを打破し、普遍的思想確立のために諸文化圏の思想の比較考察が必要であると説く。	中村　元（東京大学名誉教授） 前田専学（東京大学教授）
2	比較思想論の発展	「比較思想論」はアメリカやヨーロッパにおいて長い発展史があるが、インド・シナ・日本など東洋においても古い歴史を有している。こうした東西の比較思想の歴史を概観する	中村　元 松本照敬（大東文化大学教授）
3	古代思想の特徴神々と究極のもの	どの文化圏においても最古代にはそれぞれに民族宗教が形成され、多くの神々が崇拝されていたが、やがて神々を超えた真の実在を探究する哲学的思惟が起こったことを考察する。	中村　元 上村勝彦（東京大学助教授）
4	自由思想家の出現	もろもろの文化圏のうちでも特にギリシャ・インド・シナにおいてそれぞれの伝統的な思想に反抗した唯物論・快楽論・道徳否定論・宿命論・懐疑論などの自由思想家を紹介する。	中村　元 丸野　稔（早稲田大学助教授）
5	人間の反省	人間が現実のすがたを直視し、現世の苦しみ、はかなさ、無常を自覚して、それらを超克することによって真の自己を探求する動きが起こったことを論じる。	中村　元 田辺和子（名城大学講師）
6	普遍宗教の生活倫理	普遍ないし普遍宗教といわれるものは、互いに伝統を異にするにもかかわらず、人間の生き方について意外と共通性をもっている。併せてその相違点を考える。	中村　元 末木文美士（東京大学助教授）
7	世界共同体の理想	都市国家から広域国家へすすむ中で、理想の政治・国家とは何かを宗教的思惟との関わりを中心に考察し、さらに世界国家をめざす動きによる世界共同体の理想に論をすすめる。	中村　元 三友景順（立正大学短期大学部助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	普遍的国家の成立	普遍的宗教を政治の中に生かそうという理想を掲げて統一的国家が諸文化圏において形成された。それら国家の諸帝王の思想や宗教的な考えをさぐる。	中村　元 斉藤　敬 （埼玉大学講師）
9	中世社会の思想的特徴	中世には諸国家の社会を通じて封建制度が確立されるにいたる。それに伴って身分的階位制が出現し、それを基礎づける思想体系として普遍的宗教が支配者によって権威づけられた。	中村　元 宮元啓一 （法政大学講師）
10	＜慈悲一愛＞の道	普遍宗教は人々をわけ隔てなく愛することを説いた。ここに＜慈悲一愛＞の道が成立する。その＜慈悲一愛＞がどのようなすがた・かたちをとったかを考察する。	中村　元 阿部慈園 （日本大学講師）
11	瞑想の道と哲学的思想	中世においては＜慈悲一愛＞の道と並んで＜瞑想＞の道が実践され、哲学的思索も深められたがそこから自力か他力かの二つの類型が論じられるようになった。	中村　元 津田真一 （日本大学講師）
12	自我の自覚と批判的精神	中世の伝統的権威を合理的主義をもって批判し、自我を自覚するところに近代的思惟が確立されてゆく。この点で徹底的であった東洋の思想家の所論へと考察をすすめる。	中村　元 丘山　新 （東京大学講師）
13	人間の平等	人間すべて平等であるという主張は近代において特に顕著になった。しかし国により、文化圏によって異なる点を考慮しつつ、平等思想による社会的連帯性の重要さを探る。	中村　元 吉野恵子 （東方学院講師）
14	宗教改革と近代思想	近世初期の宗教が職業倫理ないし資本主義精神を基礎づけたといわれるが、ここにも諸文化圏ごとに相違点があることを論じ、併せて主義や国家を離れた人類性の実現を説く。	中村　元 山口泰司 （工学院大学講師）
15	未来への展望	近代精神がもたらした種々の問題点を考察しながら、未来に向かっては、仏教でいうところの、「何人にとっても生命は最もいとしいものである」という自覚の重要性を論じる。	中村　元 前田専学

＝ 文 学 と 芸 術 ＝（TV）

〔主任講師：今道友信（清泉女子大学教授）〕

全体のねらい

文学を世界文学の視野においてとらえることは、古今の文学者や哲学者の夢のひとつである。漱石の文学論もアリストテレースの詩学も、時と処とを異にしても、その夢を果たそうとした企てであった。本講義は、国文学と西洋文学とにわたって、テキスト研究を介し、文学を他の芸術との照応において、省察する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	西洋文学の起源ーホメーロスとヘーシオドス	• ギリシャ文化について • 文学の概念 • 叙事詩について	今 道 友 信 （清泉女子大学教授）
2	古典ギリシャの文学 抒情詩と劇詩	• 抒情詩 • ギリシャ悲劇 • 喜 劇 • その後のギリシャ文学	同 上
3	ローマ古典文学	• ローマ文化とキケロー • 詩人たち • ローマの芸術	同 上
4	聖書の世界と超自然の光芒	• 聖 書 • 旧約聖書と芸術 • 新約聖書と芸術 • 超自然の光芒	同 上
5	ヒューマニズムの問題	• ルネサンス • 後期ルネサンスの文学 • 後期ルネサンスの芸術	同 上
6	黄 昏 と 死	• 黄昏（Le Crépusculaire） • L' Insolite（異常なこと） • 死	橋 本 典 子 （青山学院女子短期大学助教授）
7	模 倣 と 批 評	• 近代人と批評の自立 • 『ラオコーン』 • 発想と批評 • 模倣と想像力 • 視点の多様性と時間	坂 部 恵 （東京大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師 （所属・氏名）
8	永遠と時間	1. 有限と無限 2. 永遠と時間 3. 瞬間と時間	今道友信
9	フィクションとイメージ	1. フィクションとイメージ 2. 巨匠たちの群像 不在の詩	同上
10	日本文学の風土性	1. 日本人の風土観 2. 日本文学と自然	高橋良雄 （昭和女子大学教授）
11	歌論 「古今和歌集」仮名序	1. 「万葉集」と「歌経標式」 2. 「古今和歌集」仮名序 3. 「和歌体十種」「新撰髄脳」「九品和歌」 4. 「俊頼髄脳」	藤平春男 （早稲田大学教授）
12	物語論 源氏物語「蛍」巻	1. 女性の消閑の具としての物語と「源氏物語」 2. 物語の本質とは何か 3. 物語論の語られる場 4. 「源氏物語」の達成に見合う物語論	秋山虔 （東京女子大学教授）
13	幽玄論	1. 平安時代における幽玄 2. 藤原俊成における幽玄 3. 鴨長明の幽玄論 4. 藤原定家の幽玄、日常語としての幽玄 5. 藤原為家から正徹まで 6. 世阿弥における幽玄	久保田淳 （東京大学教授）
14	演劇戯曲論 近松・南北・黙阿弥	1. 近松門左衛門 2. 鶴屋南北 3. 河竹黙阿弥	諏訪春雄 （学習院大学教授）
15	現代文学	1. 近代小説の揺籃期 2. 近代小説の確立 3. 回顧と移行 4. アメリカ大学の役割 5. 文学の現代的使命 6. 現代文学の状況 7. 現代文学の課題	三好行雄 （大妻女子大学教授） 今道友信

＝日本語の基礎＝(R)

〔主任講師：阪倉篤義（甲南女子大学教授）〕

全体のねらい

母国語である日本語は、われわれが“言語”というものについて考えるための、最適の材料である。ここでは、特に日本語における特徴的な事実を取上げて、その意味を解明しつつ、実際的な問題にも触れて、日本語の基礎的な問題について、ひとわたり述べたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本語とは何か	何を指して日本語というか。世界の諸言語の中で、日本語は、どういう位置をしめているか。また、それはどういう系統の言語か、などの問題について述べる。	阪倉篤義（甲南女子大学教授）
2	日本語のさまざま	日本語と言われるものの中には、地方的な違い、歴史的な違いがあり、「話しことば」と「書きことば」との違いがある。そういう日本語の種々相について述べる。	同上
3	日本語のコミュニケーション	一般に、ことばによるコミュニケーションは、どのようにして成立するか。特に日本語のコミュニケーションの特色は何か。それが日本語の構造とどう関係するか、などについて述べる。	同上
4	敬語について	日本語の特色の一つとして問題にされる、敬語の本質は何か。「読んでやる」「見てもらう」などとともに、こういう物言いの生れてくる理由はどこにあるのか、について考える。	同上
5	「は」と「が」の使い分け	「は」と「が」との使い分けは、実践的には容易であるが、両者の違いを説明することは、むずかしい。これの解明は、日本語の構文論（シンタックス）の基本的な課題の１つである。	同上
6	語順の問題	日本語は、語順の比較的ゆるやかな言語であると言われるが、そこにある一つの法則とはどういうものか。また、日本文の句読点は語順とどのように関係するか、などについて述べる。	樺島忠夫（大阪府立大学教授）
7	日本語の語彙	語彙とは何か。語の種類には、どういうものがあるか。特に使用率の大きい語と小さい語との性格・機能はどう違うかなどの点を考え、日本語の語彙の特色を述べる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	和語・漢語・外来語	和語の、文章の中での役割、漢語が日本語において果す役割はどういうものか。特に造語という面から考えた場合の両者の特色。さらに、いわゆる外来語の役割などについて述べる。	樺島忠夫
9	語の意味と辞書	語の意味は、どのように記述されるか。また、それを集めた“辞書”というものについて、その種類と、利用法を述べ、語の意味の中核について考える。	阪倉篤義
10	日本語の文字と表現	日本語表記における漢字・ひらがな・カタカナ・ローマ字、4種類の文字。その役割分担や分かち書きの問題、外来語の表記やワードプロセッサーなどとの関係を将来の問題を含めて述べる。	樺島忠夫
11	日本語の発音	日本語の音韻組織は比較的簡単で、アクセントも、他の言語に比較して意義弁別の役割が軽い。その体系の概略と、方言的・歴史的な差異について述べる。	阪倉篤義
12	かなづかい・送りがな	仮名遣いとは何か。特に現代仮名遣いにおける“とお”と“とう”“こうし”は格子か子牛か、問題などを考え、また、送り仮名の問題点などを考える。	樺島忠夫
13	語史と慣用句	現代日本語は、過去の日本語の変遷の結果として生れてきたものである。現代語の単語が、かつてはどのような形や意味を持っていたか、また慣用句の意味などについて説く。	阪倉篤義
14	日本語の過去	日本語の歴史が始まって以来、今日まで千数百年の間に、内発的な原因、また外国語との接触による外発的な原因で、日本語はどのような方向に変化してきたか、その要点を述べる。	同　上
15	日本語の将来	日本語は、将来、発音・語彙・文字など、どのような面で変化する可能性があるか。それは日本人の言葉に対する態度によるが、将来の日本語はどうあるべきかを考える。	樺島忠夫

＝ 日 本 語 ＝（R）

（主任講師：宮地　裕（帝塚山学院院長）
　　水谷　修（名古屋大学教授））

全体のねらい

大学教育の目的の一つは、言語の運用能力の向上にある。この講義においては、全体を三つの部分にわけ、第1部においては、「話すことと聞くこと」、第2部においては「書くことと読むこと」に焦点を当て、日頃使っている日本語に対する自覚を促し、あわせて日本語の基礎的な運用能力の向上を目差す。さらに、第3部は、「応用編」とし、大学の講義の聞き方、レポートのまとめ方、発表と討論の仕方について、実際の場面に即して、応用力を身につけさせることを目標とする。したがって、日本語能力の開発を求める学生のみならず、日本語教育に関心を持つ層に対しても有益な講義となろう。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	国際化と日本語	序論。日本社会の国際化とともに、日本語に対する関心は世界的に高まっている。各国では日本語教育が拡大され、日本への留学生の数も飛躍的に伸びている。そういった事態の中で、日本人は自国語に対してどう自覚的である必要があるかを論じる。	宮地　裕（帝塚山学院院長） 水谷　修（名古屋大学教授）
2	日本語の母音と子音	第一部の最初。音としての日本語の基礎について考える。他の言語との比較を通して日本語の母音と子音の特徴を考える。外国人の誤用例も取り上げながら、日本語の音の難しさ等にもふれる。	水谷　修
3	日本語の音節と表記	持続音節、速音節といった日本語の特徴的な音節をとらえ、音節と表記との関係、さらには外来語の表記の問題についても考える。	同　上
4	アクセントとイントネーション	一言で日本語といっても、その実態は多様である。日本語の多様性について、各種の方言を中心に考えるとともに、外国人のアクセントやイントネーションの違いについても、その原因を考える。	同　上
5	話ことばの特色	終助詞や不完全文など、話ことば特有の言語現象をとらえ、文レベルでの話ことばの特色をとらえるとともに、実際の談話場面でのコミュニケーションについて実例をもとに考える。	同　上
6	聞くことの大切さ	コミュニケーションが成立するためには、いかに相手の言いたいことを聞けるかが鍵になる。中でも最も重要なことが、推定の能力である。円滑なコミュニケーションのための聞く態度について考える。	同　上
7	発音と表記法	第一部から第二部への橋渡。発音をそのまま表記することは容易なことではない。発音と表記法とのずれについて考え、書くことにまつわる難しさと、注意すべきポイントについて解説する。	水谷　修 竹内俊男（名古屋大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	書き方の基本	原稿用紙の使い方の基本から説き起こし、原稿を書く場合の約束などにふれながら、短かいエッセーの書き方について指導する。	竹内俊男
9	文章の構成	相手に理解してもらえる文章を書くには、センテンスの長さ、文章のリズム、文章の書きだしとしめくくりなどに注意する心要がある。文章構成の重要性を指摘し、読みやすい文章を書く方法について考える。	同上
10	復習とクイズ	名文とは読んで美しい文章のことである。名文と悪文との違いを、実際に読むことを通して考えるとともに、第一部と第三部の復習を行なう。	竹内俊男 水谷修
11	どれだけ聞けるか	第三部、応用編の最初。大学での講義の場面をもとに、どうしたら話をうまく聞くことが出来るか。メモを取る際にはどういった点に注意したらいいかを考える。	水谷修 清水康行 （名古屋大学助教授）
12	どうまとめるか	レポートをまとめようとする際に、その構成や記述の方法について、どういったことが問題になるかを示し、上手なまとめ方を考える。	清水康行
13	発表のこつ	人前で自分の調べたこと、意見などを発表しようとする際にどういったことに注意を払えばよいかについて、三分間スピーチの練習を通して考え、質問や意見の提示の仕方についてもふれる。	同上
14	討論の仕方	相手の言いたいことを理解し、その上で自分の考えを相手に納得させなければならない討論は高度な言語の技術を必要とする。あいづちの打ち方、否定や反論の仕方、思いやりの表現など、討論の要点について考える。	同上
15	総復習	第三部のまとめを行なうとともに、コミュニケーションの手段としての日本語のついて、話すこと聞くこと、書くこと読むことの各要素の関連についてふれ、全体のまとめとする。	清水康行 宮地裕 水谷修 竹内俊男

＝ 作 歌 ・ 作 句 ＝（TV）

〔主任講師：井本農一（実践女子大学長）〕

全体のねらい

短歌・俳句を知的に理解するだけでなく、それらを創作する試みによって、文学に対する共感と理解を深める。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	短歌と俳句の成り立ち	古典和歌・俳諧から現代短歌・現代俳句までの歴史的展望を述べ、短歌と俳句の文学的特質についても触れる。	井本農一（実践女子大学長）
2	風雅への共感	短詩型文学における作者と読者の同一性の問題を論じ、何等かの意味において風雅への共感が必要であることを述べ、いわば国民詩ともいうべき短詩型文学創作への導入を計る。	同上
3	なぜ歌をつくるか	短歌という表現様式はどういう発生の過程を持ち、どのようにして文学意識を深めてきたかを述べる。	岡野弘彦（国学院大学教授）
4	抒情の源流	短歌における二つの大きな主題である旅と恋について、各時代の実作にあらわれた抒情の変化を述べる。	同上
5	近代短歌の流れ	正岡子規・与謝野鉄幹によって開かれた近代短歌の二つの流れの、展開と変化のあとを実作品の上に見る。	同上
6	現代短歌の動向	戦後、きびしい批判の中から新しくよみがえった短歌が、どのような新生面を開いてきたかを、作品の上に見る。	同上
7	歌のしらべと写生	短歌を実作するに当って最も重要な、歌の「しらべ」と「写生」の問題について、作品に即して考える。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	批評と推敲	作歌の上の要点となる、頭材のとらえ方や言葉について考え、さらに鑑賞力、批評力を深め、推敲を進めることについて考える。	岡野弘彦
9	なぜ俳句を作るか	芭蕉の「古池や」の句をめぐって「俳」の意味をさぐり、俳句の特性を考えるとともに、俳句をつくることの意義について考える。	川崎展宏（明治大学教授）
10	近代俳句の出発	子規の俳句革新運動とそれによって切り捨てられたものの意味を、芭蕉の句を例にして考え、句作の「場」の問題、先行の文芸との関係などを考える。	同上
11	写生	明治という時代の中で子規が文学や俳句をどう考えたかを明らかにしながら、子規の写生について述べ、さらに写生の現代俳句における意義を論じる。	同上
12	花鳥諷詠と季語	虚子が俳句と俳人の在り方を規定した「花鳥諷詠」と、その方法としての「客観写生」について述べ、さらに季語について考える。	同上
13	対話の世界	挨拶の句は、連句の第一句目としての発句のはたらきが、近代の社交の場に生かされているものだが、挨拶句を鑑賞して俳句の対話性に着目する。	同上
14	俳句の近代化の過程	子規の俳句革新の試みが、その後いかに継承され、俳句の近代化がいかに推進されたかを具体的に考える。	同上
15	創作の根源にあるものとその形象化	この講座の結びとして、短歌・俳句の根源にあるものと、その形象化について述べる。	井本農一

＝人　間　の　歴　史＝（R）

～日本女性史～

〔主任講師：笠原一男（放送大学教授）〕

全体のねらい

われわれは、「人間の歴史」として日本の女性史をとりあげてみた。その日本女性史も、原始・古代・中世・近世・近代・現代へと時代を追って、政治的・経済的・文化的等々の女性生活をたどるのではない。ここでは日本の女性が宗教生活という面で、どのような歴史を辿って来たかを仏教を中心とした宗教史のなかで考えるつもりである。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	日本仏教にみる女性解放史序章	日本史上の女性の姿を職業別・階級別等々の面から概観し、男女の差別の甚しさとその理由を眺める。男女差別の甚しい日本女性史のなかで、宗教の世界に目を向けた時、男女の差別の撤廃が早々と実現した有様を、仏教伝来以来現代までの仏教の歴史のなかで概観する。	笠原一男（放送大学教授） 小栗純子（中央学術研究所講師）
2	女性を差別する古代仏教	日本の古代仏教の修行の場、すなわち大寺院の聖域が、修行と救いという点において女性を頑に差別している有様を古代仏教の大寺院を例として眺める。そうした女性差別の理由を、具体的な史料を示し、その解読を通じて古代仏教と女性の関係を考える。	小栗純子
3	巷の女性と古代仏教	古代仏教も、社会に生きる女性までをも、修行と救いから頑強に差別するわけにはいかなかった。巷にあっては、女性も仏教の救いを約束されたが、その条件は厳しいものであった。そうした女性と仏教の関係を、史料を通じて具体的に考える。	笠原一男
4	女性の差別を否定した鎌倉仏教	古代仏教の全面的否定を通じて生まれた鎌倉仏教は、救いと修行の面において女性差別を根底から否定し去った。鎌倉仏教の世界においてはじめて女人成仏、女人往生の論理が生まれた。このような女性と仏教の関係の変化を、鎌倉仏教と古代仏教との比較の中で考える。	同上
5	法然と念仏と女性	法然は古代仏教による強烈な弾圧と妨害を巧みにかわしながら、古代仏教否定の救いを打ち出した。それが専修念仏によるすべての人々の救いの論理であった。法然は、はじめて女性の往生成仏を論理的に展開した。ここでは、法然の女人往生論を考える。	同上
6	念仏に救われた平家物語の女性	『平家物語』は数々の女性の哀歓をえがいている。そうした女性たちは、最後に念仏によって救われていった。しかも彼女たちの救われた念仏は、法然の説いた専修念仏が多かった。ここでは『平家物語』に登場する女性たちと念仏による往生との関係を考える。	小栗純子
7	親鸞と悪人正機と女性	親鸞による念仏の救いは、悪人正機に象徴される。仏教の女性観は女性こそ最も煩悩の深い極悪人であった。このような女性こそ、親鸞の悪人正機からすれば最優先して往生を約束される人間であった。ここでは親鸞の女人往生論を『歎異抄』を通じて考える。	笠原一男

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	正法眼蔵にみる女性と仏教	古代仏教の聖域が女性を修行と救いから頑に差別したことを最も痛烈に批判したのが、道元であった。女性差別の元凶たる聖域の破壊こそ仏恩報謝になるのだといった道元の仏教と女性との関係を、『正法眼蔵』によって考える。	笠原一男
9	日蓮と女性	日蓮は法華経の功徳を南無妙法蓮華経の題目にこめて、すべての人々の救いを説いた。女性の救済に関しても、日蓮が最も多くの著作を残している。ここでは、日蓮の数々の著作を通じて日蓮と女性と仏教の関係を考える。	同上
10	女人正機の誕生	親鸞の生んだ悪人正機（悪人優先）の救いの思想の延長線上に女人正機の思想がひそんでいた。それが明確に「女人為先」「女人為本」「女人正機」という形で生み出されたのが、親鸞の子孫存覚の時であった。ここでは存覚の『女人往生聞書』によって女人正機の思想を考える。	同上
11	戦国時代の女性と蓮如	親鸞の教えを、戦国乱世の民衆のあいだに飛躍的に広めたのが、本願寺第八代法主蓮如であった。そのような蓮如が戦国時代の女性にたいして、どのような女人往生思想を説いたか。それを蓮如が開発した文書布教の手段である御文を通じて考えてみたい。	同上
12	江戸時代の女性と仏教	戦国時代まで自由な競争下に発展を競って来た宗教が、政治権力によって強固な統制下におかれたのが江戸幕藩体制の時代であった。そうした事情を女性と仏教を通じ、本願寺、専修寺、仏光寺の三大教団を例にとって考えてみる。	小栗純子
13	近代における女性と宗教	日本の近代社会の誕生によって、女性と宗教との関係においても著しく変化が見られた。近代社会における女性と宗教の特色の一つが、女性教祖の誕生とその教団の発展である。近代の民衆宗教の中で、天理教の中山みき、大本教の出口なおをとりあげ、女性教祖誕生のプロセスを考える。	同上
14	現代社会と女性教祖	近代・現代の民衆宗教における特色の一つが、女性教祖の誕生と発展である。近代から現代の転換期には新宗教が多数生まれた。その中には女性教祖の新宗教が珍しくない。ここでは霊友会の小谷喜美と佼成会の長沼妙佼を例にとって、現代における女性と仏教の関係を考える。	同上
15	女性と宗教	14回にわたって、宗教の世界における日本女性史を見て来た。今回は、古代・中世・近世・近代・現代、つまり仏教伝来以来今日にいたるまでに女性と仏教の関係はどのように変って来たかを、もう一度回顧し、将来への展望を行なってみたい。	笠原一男 小栗純子

＝文化の形成と普及＝（TV）

－日本仏教の形成と普及－

〔主任講師：笠原一男（放送大学教授）〕

全体のねらい

日本人は外国に学ぶことによって、数々の文化を形成して来た。そのなかで、最もながい歴史と普及度を誇っているのが仏教文化である。日本仏教の形成と普及の歴史のなかで、仏教界の宗祖＝英雄が果した役割に視点をむけて考える。なかでも、親鸞と蓮如を具体例として、文化の形成と普及という問題を考えてみる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本仏教の形成	1 仏教の伝来 2 聖徳太子と仏教 3 聖武天皇と仏教 4 最澄と空海 5 浄土教と末法思想 6 鎌倉仏教の誕生	笠原一男（放送大学教授） 小栗純子（中央学術研究所講師）
2	奈良時代の民衆と仏教	1 論より証拠 2 日本霊異記 3 日本霊異記の世界 4 悪人切り捨て	同上
3	平安時代の日本人と仏教	1 善人正機 2 悪人でも往生出来る 3 最悪の悪人が往生 4 質直と慈悲が往生の条件	同上
4	仏教の普及と鎌倉仏教	1 選択と専修の易行 2 法然と念仏 3 学問を否定する親鸞 4 悪人正機 5 仏教普及の条件	同上
5	比叡山の親鸞	1 叡山に登る 2 悪人こそ人間の本質 3 煩悩具足のほとけ親鸞	同上
6	悪人正機	1 歎異抄 2 悪人正機 3 煩悩具足が救いの条件 4 本願ぼこり	同上
7	親鸞の世界	1 師と弟子 2 念仏して地獄におちても後悔せず 3 報恩の念仏 4 親鸞における慈悲 5 和讃	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	念仏の普及と弾圧	1 報恩のための布教 2 念仏の普及と弾圧の必然性 3 親鸞の流罪	笠原一男 小栗純子
9	越後から関東へ	1 越後の親鸞 2 関東への旅 3 親鸞の責任感 4 関東の親鸞	同上
10	親鸞と政治権力と宗教	1 念仏の普及 2 弾圧者のために祈れ 3 念仏の縁つきたら去れ 4 国家と国民のために祈れ	同上
11	親鸞以後の真宗	1 発展をきそう真宗諸派 2 仏光寺派の発展 3 仏光寺教団の統制	同上
12	戦国時代の真宗と蓮如	1 部屋住みの蓮如 2 念仏の普及と御文 3 念仏の北陸への普及	同上
13	御文の世界	1 念仏者の理想像 2 極楽は往き易くして人なし 3 戦国乱世の生き方 4 念仏と現世利益 5 異端の批判	同上
14	念仏の発展と蓮如	1 貴族ぶるな 2 民衆の心をつかむ 3 蓮如の布教と発展 4 門徒の反体制的言動と蓮如	同上
15	一向一揆～激励の世と仏教～	1 本願寺教団の発展と一向一揆 2 蓮如と一向一揆 3 江戸時代と仏教 4 転換期の時代と民衆宗教	同上

＝世界史と時代意識＝　（R）

― 東アジアの紀年法と歴史記述法 ―

〔主任講師：和田久徳（放送大学教授）〕

全体のねらい

本講では、歴史を理解しやすくするため、その基礎となる紀年法と歴史書編纂の大要を説明する。さらに、この理解を通じて、歴史的な物の見方、歴史的センスを会得できるようにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序説	諸民族の間で発達した紀年法とこれにもとづく歴史記述法とによって、各民族の時代意識をさぐる意義を述べる。最初に、西暦とヒジュラ暦を説明する。	和田久徳（放送大学教授）
2	中国の紀年法(1)年号の成立と発達	年号という特色ある紀年法は、東アジア最初の大統一国家である前漢朝の全盛時、紀元前二世紀に成立した。初期はしばしば改元したが、ついに一世一元制となった。	同上
3	中国の紀年法(2)年号制の展開	年号は国家独立の象徴であったから、対立する国家はそれぞれ年号を建て、服属国は宗主国の年号を採用した。中国の年号制は近隣の異民族に受容された。	同上
4	朝鮮の紀年法と年号受容	6世紀前半の新羅で年号が建てられたが、その後、自国の年号をもつ時期はすくなかった。時代意識について、民族文化の独自性がみとめられる。	同上
5	ベトナム・日本の年号	ベトナムでは、10世紀後半から第2次世界大戦直後まで自国の年号が続いた。日本の年号は7世紀中頃が最初で、8世紀初めから現在まで連続している。	同上
6	中国の歴史記述(1)紀伝体	紀伝体史書の最初は『史記』『漢書』である。中国で考案されたすぐれた歴史記述法で、紀伝体による歴史記述が組織的に行なわれ、正史と呼ばれた。	同上
7	同(2)編年体	11世紀後半、『資治通鑑』が編修されると編年体による歴史記述が再認識され、その影響で各種の史書が著作された。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	中国の歴史記述(3) 紀事本末体 その他	『資治通鑑』の影響の一結果として、紀事本末体ができた。歴史的事件の首尾をまとめて記す歴史記述法である。	和田久徳
9	朝鮮・ベトナムの歴史記述	朝鮮では12世紀中頃に紀伝体の正史ができ、編年体史書も15世紀後半に完成した。ベトナムでは13世紀後半に歴史記述が始まったが、紀伝体の叙述はおくれた。	同上
10	日本の歴史記述(1) 六国史	『日本書紀』以下の6国史は、8世紀初めから約2世紀間の整備された歴史記述で、正史を実録体にするなど特色が多い。	同上
11	同 (2) かがみ物 その他	『大鏡』などの和文による歴史記述は紀伝体風を採用した点が注意される。江戸時代に、紀伝体その他の伝統的歴史記述法が受容され、日本的特色をもって完成した。	同上
12	南アジアの時代意識(1)	インドを中心とする南アジアでは、多種多様な紀年法が展開した。歴史記述の発達は東アジアにくらべると不活発であった。	同上
13	同 (2)	伝統的歴史記述はカシミールやスリランカなど周辺地域に展開した。南アジアにイスラム教徒の政権ができると、13世紀後半からイスラム史学による歴史記述が発展した。	同上
14	東南アジアの時代意識	インドの紀年法が受容され、独自の紀元もできた。歴史記述法はスリランカの史書とインド化されたイスラム史学の影響の下に展開した。	同上
15	まとめ 前近代東アジアの時代意識	従来の世界史の時代区分は再検討が必要である。紀年法の意味、とくに年号の特質が時代意識をよく示す。重要な歴史記述は各社会の時代意識の反映である。	同上

＝人文地理学の基礎＝（TV）

〔主任講師：西川　治（立正大学教授）〕

全体のねらい

人文地理学は、人間・環境系、社会活動の地域の組織、科学的世界像などの学際的研究及び地域計画、環境管理、景観育成、国際親善などの応用面においても基礎的な役割りを持つ空間的・環境的科学である。本講義では全体を、1.環境を作る人間、2.地域を組織する社会、3.世界を彩る文化、の三つに分けて説明する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	人の住む星 －人文地理学の視界－	人文地理学は、人間の生活環境としての地球表層空間を対象として、人間の適応形態、人間環境系（人文生態系）、自然と文化の織り成す地人模様（文化景）、それらの空間的配列の特色などを研究する具体的科学である。こうした視視界において導入部的説明を行う。	西川　治 （立正大学教授）
2	比較風土論の系譜	ヨーロッパと日本における風土論の展開、A、フンボルトやT、ラッツェル等による地理学的環境研究、人為による自然の改変、知覚環境論、環境管理などについても論及する。	西川　治
3	気候変化と民族移動	人間の出現後も、地球上の気候は、激しく変動してきた。人間はそれによって移動を続けてきた。その動く歴史の一瞬として現在がある。従って現在の地球上に見られる多様性は、気候変動のなかで理解されるべきで、本講義では現在までの一万年間の変動についてのべる。	鈴木秀夫 （東京大学教授）
4	地形環境と治水および利水	人間生活と関係の深い地形環境の考察例として、ここでは下記の事項を取りあげる。 ①　堆積平野としての日本の平野の特殊性。 ②　東北日本と西南日本の平野の差異と開発、期の問題、③　甲府盆地の地形環境と武田信玄の開発、④　中世末期から近世初期にかけての関東地方の治水と利水。	中山正民 （埼玉大学教授）
5	村落景観にみる歴史	地表面を多様に彩どる村落景観し耕作景を含む）には、その成立事情や変貌過程が多かれ少なかれ痕跡をとどめている。ここでは主として村落景観の持続性と変化の仕方と速度という観点に立って、それぞれに関わる自然的、社会的要因について考察してみたい。	山田安彦 （千葉大学教授）
6	地域を分ける農業	農業は顕著な地域的性格をもつ産業であり、世界的にみても、日本についてみても、それは明瞭である。ここでは、世界の農業の地域類型のあらましと、ヨーロッパを例にしての農業地域の形成過程、および日本と関東地方における農業の地域分化について考察する。	山本正三 （筑波大学教授）
7	地域を動かす工業	①　工業の地域的システム地域的存在としての工業のとらえ方　②　技術革新と機械工業の展開、工業分布とその変化、大都市の工業集団、地方の機械工業中心、労働依存型工場、③　風土と地場産業、地場産業の類型と変容、④　工業振興と地域の活性化	竹内淳彦 （日本工業大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	地域の人口問題	① 世界人口の動向、増加と偏在、出生、死亡のバランス、②人口都市化の進展、大都市地域への人口再集中（日本）、③高齢化社会への接近、人口転換過程と高齢化、高齢化と経済・社会（日本）、④現代の人口問題、国際人口会議人口問題の多様性	浜　英彦（成城大学教授）
9	都市プランと機能システム	都市の年輪を表わす平面形、規模と機能なども指標とする都市の類型、大小の都市群が構成するアーバンシステムに関するクリスタルラーやフィルブリックなどの理論、およびそれらの理論の地域行政や地域計画への応用面にもふれる。	西川　治
10	大都市地域の構造と動態	大都市の成長に伴い、中心業務地区を中心とする同心円、扇形、多核心的な地域分化が現われる。その事例とモデルを構造的、動態的側面から解説し、最近の都市化の動向からみた、大都市地域の変化の様相についても考察する。	山口岳志（東京大学教授）
11	大都市化に伴う都市問題	大都市の過大化に伴い発生する都市問題の具体的解決策としては、ニュータウン・工業再配置に代表される機能分散策に関しては都市群システム論が、荒廃した内部市街地再生に関しては都市内部システム論が、居住意識の変化の中では階層的住み分けの分布研究が、それぞれ重要である。	井内　昇（お茶の水女子大学教授）
12	都市情報の作成と利用	高度情報化時代において、都市の機能と形態は急速に変化している。この中で都市研究、都市政策、都市管理にとって地理情報の利用は不可欠である。都市情報とは何か、どのようにして作成されるか、どのように利用するか、について講義する。	久保幸夫（お茶の水女子大学講師）
13	ヨーロッパの文化地理	ヨーロッパ文化の多様性を歴史的背景を考慮に入れながら概観し、そのような空間的多様性に由来する地域問題、政治、社会問題を、すぐれてヨーロッパ的である国民国家（ネイション・ステイト）の概念との関連で考察する。	竹内啓一（一橋大学教授）
14	民族の住み分けと文化交流	人類集団の民族ごとの住み分けの例として南ヒマラヤのブータンと中国の雲南省を取りあげ、各民族の生活様式と自然環境の関わり、各民族間の文化的な接触、交流、そして環境の変化や歴史的な発展に伴なう住み分けの変化と生活様式の変容について述べる。	諏訪哲郎（学習院大学助教授）
15	世界地図の中の日本	世界地図史に現われる日本列島、日本人の地理的世界像の発達、世界的視圏における日本国論の変遷について説明し、さらに現代世界における日本の位置付け、地球社会の発展、地球環境の保全等における人文地理学の役割について考えてみたい。	西川　治

＝社会生活と法＝　(TV)

〔主任講師：山田卓生（横浜国立大学教授）〕

全体のねらい

国家のような大きな社会から会社・学校・同好会といった小さな社会にいたるまで、社会生活が秩序だって営まれていくためには、法による秩序維持が必要である。もっとも重要なのは、国家法であるが、慣習や習俗も重要である。本講座では、法の形態・役割、変動といった問題を考えながら、法律を学ぶ基礎を提供したい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	社会生活における法	1　社会と法 2　法の敬遠 3　法は何故必要か 4　法による社会秩序の維持 5　国家法と	山田卓生 （横浜国立大教授）
2	法の存在形態	1　法はどこにあるか 2　法令集 3　成文法の構造 4　不文法 5　判例法	同上
3	法と裁判	1　裁判による法の実現 2　法の不備と裁判の拒否 3　法の適用 4　先例としての裁判 5　判例の変更	同上
4	法は誰がつくるか	1　法はつくるものか 2　法典編纂 3　立法府による法律 4　行政府による法 5　裁判所による法形成	同上
5	法の種類(1) 民事法と刑事法	1　法の制裁による区別 2　民事責任と刑事責任の差異 3　民事責任と刑事責任の関係 4　民事責任と刑事責任の統合	同上
6	法の種類(2) 公法と私法	1　公法と私法　　6　むすび 2　公法と私法の区別の意義 3　公法と私法の差異 4　公法と私法の区別の基準 5　国または公共団体の特別扱い	同上
7	法の種類(3) 実体法と手続法	1　手続に関する法 2　法における形式 3　手続法は何を定めるか 4　刑事手続 5　行政手続 6　手続の簡略化	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	法の種類 (4) 国家法と自治法	1 国家の法と社会の法 2 地方自治と条例 3 自治団体の法 4 むすび	山田卓生
9	法の解釈	1 法とことば 2 解釈の方法 3 法の解釈と結果 ― 合目的解釈 4 法解釈の主観性 5 結論と理由 ― 論理と心理	同上
10	法と法律家	1 法の専門家 2 法曹とその養成 3 法曹の資質 4 裁判官 5 検察官 6 弁護士 7 準法律家 8 むすび	同上
11	法の順守	1 法を守らせる 2 法と強制 3 法の順守の教育 4 守りやすい法 5 法の順守の確保	同上
12	法の衝突	1 法の抵触と適用法規決定のルール 2 国家法相互間の矛盾 3 国家法と自治法 4 国家法と国際法 5 日本法と外国法	同上
13	法と道徳	1 法と道徳の関係 2 道徳と法的制裁 3 悪法論 4 正義に反する法、社会常識に反する法 5 悪法論の問題点	同上
14	法と常識	1 法における常識 2 法律・裁判と常識 3 常識の変化 4 法の比較 5 法のヴァラエティと普遍性	同上
15	法と社会変動	1 法と急激な社会変化 2 法の保守的傾向 3 社会変動への法の対応 4 新しい問題の法的処理	同上

＝国　家　と　法　Ⅰ　＝　（R）

―　憲　　法　―

〔主任講師：芦部信喜（学習院大学教授）〕

全体のねらい

憲法は、近代型から現代型へ大きく変化したが、人権を保障する法であることに本質がある点は、変わりない。この歴史の流れと憲法の本質を明確にし、明治憲法とも比較しながら、日本国憲法の原理と仕組みの大要を検討する。また、それを通じて、国家と法との関係についても考えてみることにする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	憲法と立憲主義	1. 国家と法 2. 憲法の意味 3. 憲法の分類 4. 憲法規範の特質 5. 立憲主義と現代国家 ― 法の支配	芦部信喜 （学習院大学教授）
2	日本憲法史	1. 明治憲法の特色 2. 日本国憲法の成立経過 3. 日本国憲法成立の法理	同　上
3	国民主権の原理	1. 日本国憲法の基本原理 2. 国民主権 3. 天皇制	同　上
4	平和主義の原理	1. 憲法第9条成立の経緯 2. 戦争の放棄 3. 戦力の不保持 4. 交戦権の否認 5. 安保体制	同　上
5	基本的人権の原理	1. 人権宣言の歴史 2. 人権の概念 3. 人権の内容 4. 人権の主体	同　上
6	基本的人権の限界	1. 人権と公共の福祉 2. 特別な法律関係における人権の限界 3. 私人間における人権の保障	同　上
7	包括的基本権と法の下の平等	1. 生命・自由・幸福追求権 2. 法の下の平等 3. 人権を確保するための基本権	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	自　由　権　(1) ー内心の自由ー	1. 思想・良心の自由 2. 宗教の自由 3. 学問の自由	芦　部　信　喜
9	自　由　権　(2) ー表現の自由ー	1. 表現の自由の意味 2. 表現の自由の内容 3. 表現の自由の限界	同　　上
10	自　由　権　(3) ー経済的自由・ 人身の自由ー	1. 職業の自由 2. 居住・移転の自由 3. 財産権の保障 4. 人身（身体）の自由	同　　上
11	参政権と社会権	1. 参政権 2. 生存権 3. 教育を受ける権利 4. 労働基本権	同　　上
12	統治の機構 (1) ー国　会ー	1. 権力分立の原理 2. 国会の地位 3. 国会の組織と活動	同　　上
13	統治機構 (2) ー内　閣ー	1. 行政権と内閣 2. 内閣の組織と首長 3. 議院内閣制 4. 財政 5. 地方政治	同　　上
14	統治機構 (3) ー裁判所ー	1. 司法権の意味と範囲 2. 裁判所の組織と機能 3. 司法権の独立	同　　上
15	憲法の保障	1. 憲法保障の諸類型 2. 違憲審査制 3. 憲法改正の手続と限界	同　　上

＝　国家と法Ⅱ　＝　（R）

〔主任講師：南　博方（一橋大学教授）〕

全体のねらい

国家権力の担い手の一つである行政権が法律関係の一方当事者となる場合には、多かれ少なかれ民事関係とはちがった特殊固有の法原理の適用をうけることになる。このような行政に特有な法（行政法）を認識し、現実の行政において生起する法律上の問題を解決するのに必要な知識を身につけるようにしたい。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	行政法とはどのような法か	1　行政に固有な法 2　行政と法 3　行政法の法源	南　博方 （一橋大学教授）
2	行政は誰が行うか	1　行政主体 2　行政機関 3　国の行政組織 4　地方自治組織 5　公務員	同　上
3	行政はどのような作用を行うか	1　行政作用の類型 2　秩序行政作用 3　整序行政作用 4　給付行政作用	同　上
4	行政行為とは何か	1　行政行為の意味 2　行政行為の種類 3　羈束と裁量 4　行政行為の附款	同　上
5	行政行為はどのような効力をもつか	1　行政行為の効力 2　違法な行政行為 3　職権による行政行為の取消し 4　職権による行政行為の撤回	同　上
6	行政立法・自治立法とはどのような作用か	1　行政立法 2　自治立法	同　上
7	その他の行政作用について	1　行政計画 2　行政契約 3　行政指導	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	行政上の法律関係とはどのようなものか	1　権力関係と非権力関係 2　特別の公法関係 3　私人の公法行為	南　　博方
9	行政はどのような手続で行われるか	1　行政手続法とは何か 2　行政行為手続 ― 略式聴聞 3　行政審判手続 ― 正式聴聞	同　　上
10	行政の実効性はどのようにして確保されるか	1　はじめに 2　行政罰 3　行政上の強制執行 4　行政上の即時強制	同　　上
11	行政によって受けた損失はどのようにして償われるか	1　損失補償とは何か 2　損失補償の法的根拠 3　損失補償の内容と方法	同　　上
12	行政によって受けた損害はどのようにして償われるか	1　国家賠償とはどのような制度か 2　公権力の行使に基づく損害賠償 3　公の営造物の設置管理の瑕疵に基づく損害賠償 4　私経済作用に基づく損害賠償 5　結果責任に基づく国家補償	同　　上
13	行政庁に対する不服申立てはどのようにするか	1　行政不服申立てとは何か 2　行政審判 3　苦情処理手続	同　　上
14	行政事件訴訟とは何か	1　行政事件訴訟の意義 2　行政事件訴訟の性質とその限界 3　行政事件訴訟の類型	同　　上
15	行政事件訴訟はどのような手続で審理されるか	1　処分取消訴訟の提起 2　処分取消訴訟の審理 3　処分取消訴訟の判決 4　行政事件訴訟の課題	同　　上

＝政治学入門＝（R）

〔主任講師：阿部　斉（放送大学教授）〕

全体のねらい

政治学の基礎概念とその相互の関連を明らかにすることで、政治学のより専門的な領域を学習するための出発点を作りたい。同時に政治学の入門的講義として、他の分野を学習する受講者にも、政治学のアウトラインがつかめるようにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	政治と権力	まず政治の機能を明らかにし、政治の二つの契機である自治と統治に言及する。次いで、政治的紛争解決の背後にある権力をとりあげ、その定義が多様であることの理由を明らかにするとともに、権威との差異を説明し、権力が権威化する条件としての正統性にふれる。	阿部　斉（放送大学教授）
2	国家の機能と諸型態	近代国家の最初の形態は、絶対主義国家であった。絶対主義国家が国民国家に変貌したのち、近代国家は夜警国家から福祉国家へと発展する。また、夜警国家から福祉国家への転換は、立法国家から行政国家への転換でもあった。こうした転換の過程を概観する。	同上
3	政府の諸類型	現代政治の組織原理としての権力分立を明らかにし、混合体制の意味に言及する。次いで、現代の政府の基本的類型である議院内閣制、大統領制、ソビエト制について、それぞれの特徴を具体的に説明する。あわせて、米国、英国、ソ連の政治制度にも言及したい。	同上
4	代表制と議会	議会を構成する代表の捉え方として、国民代表制と地域代表制があることを説明した後、二院制の意義にふれる。次いで、近代国家における議会の機能と現代国家における議会機能の変質を明らかにする。さらに、現代政治における立法過程にもふれたい。	同上
5	選挙と世論	世論表明の最も重要な機会である選挙の意味を明らかにするとともに、次いで、今日の選挙制度として最も重要な小選挙区制と比例代表制を比較検討し、あわせて日本の中選挙区制の特質にふれる。その際、定数不均衡にもふれたい。	同上
6	政党と政党制	政党の本質を明らかにし、次いで政党が現代の政治過程において果たす機能を検討する。また、非競合的な一統制と競合的な政党制との差異を明らかにし、あわせて政党制の諸類型にふれる。さらに、最近の傾向としての脱政党化の現象にも言及したい。	同上
7	利益集団の圧力活動	今世紀に入って、利益集団の圧力活動が活発になった背景を探るとともに、現代政治における利益集団の役割を明らかにする。また、利益集団の圧力活動に伴って現われたロビイストや審議会の問題点を指摘し、さらに利益集団との関連でコーポラティズムにふれる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師 （所属・氏名）
8	官僚制と行政国家	官僚制の意味を明らかにするとともに、現代政治における官僚制の役割を述べる。次いで、官僚化の帰結としての管理者国家の特徴を指摘し、あわせてその一側面としての政軍関係にふれる。さらに、管理者国家の弊害の矯正策としての「小さな政府論」に言及する。	阿部　斉 （放送大学教授）
9	地方自治と市民参加	中央集権と地方分権を対比しつつ、地方自治の意義を述べる。次に、地方自治には団体自治と住民自治の2側面があることを明らかにし、住民自治との関連で市民参加の意義を述べ、さらに市民参加の具体的形態としての大衆運動、市民運動、住民運動に言及する。	同　上
10	民主主義と自由主義	民主主義と自由主義との差異を明らかにするとともに、現代の政治でこの両者がどのように結びついているかを述べる。また、自由主義との関連で立憲主義の、民主主義との関連で平等主義の政治的意義を検討し、あわせて今日の民主主義の問題点を探りたい。	同　上
11	政治体制と政治変動	政治をシステムとして捉えることの意味を明らかにするとともに、政治システム論の文脈で政治体制の意味を説明し、さらにその最も重要な類型である自由民主主義体制に言及する。次いで、政治体制の変動に言及し、その最も極端な形である革命の問題にふれる。	同　上
12	全体主義と独裁主義	まず、大衆社会の出現とそれを背景とした全体主義の特質を述べる。次に、伝統的専制政治と現代的独裁政治との差異を明らかにしつつ、全体主義と独裁政治との関連にふれる。また、独裁政治と類似した面をもつ第三世界の権威主義体制や軍部独裁体制にも言及したい。	同　上
13	日本の政治	日本の政治の出発点になった明治国家の特質を明らかにするとともに、その遺産が戦後の民主主義に及ぼした影響を指摘する。次に、今日の保守政党の統治体制を検討しつつ、保守政党の永続的優位の理由を明らかにし、あわせて日本の政治的課題を指摘したい。	同　上
14	内政と外交	まず、国際政治と国内政治の差異を説明し、次に、19世紀ヨーロッパの古典外交を支えた勢力均衡策の意義を明らかにする。次に、20世紀に入ると、帝国主義と大衆ナショナリズムの出現によって、勢力均衡策が破。	同　上
15	現代の国際社会	第二次大戦後は、勢力均衡策に代わって集団安全保障が登場したこと、その制度化として国際連合が設けられたこと、核兵器の出現によって軍縮と軍備管理が重要な意味を持つに至ったこと、国際政治の焦点は、東西対立から南北問題に移行しつつあることを論ずる。	同　上

＝ 比較経済・経営・社会 ＝（R）

― 多様化する組織のなかで ―

〔主任講師：加藤秀俊（放送教育開発センター所長）

全体のねらい

現代の世界は、多様な社会・経済体制の共存によって成り立っており、それはひろい意味での経営体制のなかに徴分化され、ないしは反映されている。本講義は、その多様な体制、システムを歴史的・同時代的に比較しつつ、ことなった組織原理によって形成されている諸社会の相互交渉にともなう問題点をも解明することとする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	比較研究の意味と方法	比較研究とはなにか 比較研究の視点 比較研究と新しい世界像 比較研究の応用 文化的差異の意味	加藤秀俊 （放送教育開発センター所長）
2	組織の諸形態	人間関係の網の目 組織とはなにか 組織の特徴 組織の時代 目にみえない組織	同上
3	社会・経済・経営	歴史の発展段階説 ロストウの発展段階説 リースマンの段階説 発展段階説の一般化 単系進化説の限界	同上
4	市場経済と指令経済－財配分メカニズムの比較	財と労働の配分　市場経済の限界 需要と供給　指令経済の限界 経済の調整メカニズム　分担経済 市場の調整メカニズム 指令の調整メカニズム	坂井素恩 （放送大学助教授）
5	分権制と集権制 ― 経済の情報コミュニケーション構造の比較	経済の情報コミュニケーション 情服の種類と権限の位置 網状組織と樹状組織 分権制の利点と限界 集権制の利点と限界 企業組織における分権と集権	同上
6	伝統と近代 ― 慣習経済と発展経済の比較	時計と蒸気機関 貫習経済の特徴 発展経済の特徴 貫習経済と発展経済の重層的関係 経済における慣習の意味 社会に埋め込まれた経済	同上
7	効率と公正 ― 政府の経済的機能比較	ニューディール政府の意味　分配における正義 政府の役割　現代の課題 自由と計画 経済的自由 経済的正義	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	企業家の比較(1)	江戸時代の企業家 工業化の開始期の企業化（1868～1895） 工業化の進展期の企業家（1896～1937） 第2次世界大戦後の企業家（1945～1973） 比較の方法との関連で	堀内正博 （東京工業大学助手）
9	企業家の比較(2)	革新と企業家（シェムペーター） 不確実性と企業化（ナイト） 直感力と企業家（カーズナー） 比較の方法との関連で	同上
10	経営の国際比較(1)	オオウチの「セオリーZ」 パスカルとエイソスの「ジャパニーズ・マネジメント」 比較の方法との関連で	同上
11	経営の国際比較(2)	権力の格差 不確実性の回避 個人主義化と男性化 比較の方法との関連で	同上
12	経営組織の比較	機械的管理システムと有機的管理システム 組織の設計 比較の方法との関連で	同上
13	社会組織間の葛藤(1)－企業と家族の間にある葛藤	組織間の比較とコンフリクト　業績本位と帰属本位 女性の役割　家族と企業間の葛藤 産業社会の特徴 家族の社会的役割 家族と企業の経済的役割	坂井素恩
14	社会組織間の葛藤(2)－企業と国家間の葛藤	多国籍企業の問題点 規制者としての国家 会社設立の準拠法比較 投資の規制 経済権力と政治権力	同上
15	相互依存の世界	宇宙船地球号 「地球主義」の立場 「国家」の時代 相互依存の世界	加藤秀俊

＝ 経 済 学 入 門 ＝ （R）

〔主任講師：嘉治元郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

我々の日常の経済生活に則して、現代の経済学の骨組みを概説する。家計、企業、政府という経済単位の活動について論じ、経済社会の構造を明らかにする。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	経済生活と経済学	現代の経済学が、我々の日常の経済生活をどのように捉えているかという点について説明する。それによって経済学の体系を示す。	嘉 治 元 郎 （放送大学教授）
2	家計の経済活動 I 所 得	家計の所得の種類について具体的に説明し、その経済学的な意味づけを行なう。	同 上
3	家計の経済活動 II 消費と貯蓄	家計の所得の処分、言いかえれば消費と貯蓄について論じ、両者に関する理論を説明する。	同 上
4	企業の経済活動 I 財の生産	企業の活動のうち、財を生産する場合について論じる。	同 上
5	企業の経済活動 II サービスの生産	企業の活動のうち、サービスを生産する場合について論じる。	同 上
6	企業の経済活動 III 金 融	銀行業、証券業、保険業などの民間金融機関の活動について明らかにする。	同 上
7	貨 幣 ― 中央銀行の役割 ―	現在の経済社会における貨幣とは何であるかを明らかにし、合せて中央銀行の役割について論じる。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	市場の機能	財とサービス（生産物）の市場、労働力と資本（生産要素）の市場について説明し、同時に市場機構について論じる。	嘉治元郎 （放送大学教授）
9	経済社会の構造	日本経済の現状に則して、一国の経済を巨視（マクロ）的に捉える理論について説明する。	同　上
10	総需要と総供給 －雇用問題－	一国の経済活動水準の決定に関する理論について説明し、あわせて雇用の問題を論じる。	同　上
11	経済成長 －技術革新－	長期的な経済の成長について、技術革新の役割を中心に論じる。	同　上
12	政府の経済活動 －財政支出－	現代の経済社会における政府の役割を説明し、特に財政支出の意義を論じる。	同　上
13	政府の経済活動 －租　税－	政府の経済活動のうち、その収入面について説明する。	同　上
14	経済政策の目標	いわゆる混合経済体制の下での経済政策の目的と手段について説明する。	同　上
15	対外経済関係	一国の対外経済関係を、国際収支の面から説明し、世界経済の現状について略述する。	同　上

＝社　会　学　入　門＝（R）

（主任講師：井上　俊（大阪大学教授）
　　大村英明（大阪大学教授））

全体のねらい

社会学は間口の広い学問であり、きわめて多様なテーマを扱っているが、ここでは、その多様性の根もとにある社会学的な「ものの見方」を理解することにねらいを絞る。できるだけ具体的な事例に即しながら、社会学的な見方の面白さを伝えるような形で、話を進めたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	＜第1部・社会的存在としての人間＞ 社会のなかの人間	人間は社会のなかで自己を形成し、社会とのつながりのなかで生きている。社会的影響に関する社会心理学の実験などをとおして、人間が社会的存在であることをまず認識しよう。	井　上　　俊 （大阪大学教授）
2	文　化　と　価　値	「同種内で殺し合いをするのは人間だけである」などといわれるように、人間の行動には本能に支配されない面が多々ある。もっぱら遺伝と本能に規定される他の動物との対比において、人間にとって文化がもつ意味について考えよう。	同　　上
3	集　団　と　個　人	1. 共同体と機能集団 2. 未分化と分化 3. 模　　倣 4. 集団参加の諸相	大　村　英　昭 （大阪大学教授）
4	知　識　と　現　実	1. 意味と社会 2. ＜私＞と社会 3. 社会学という知識	栗　場　久　和 （関西大学助教授）
5	＜第2部・社会学の考え方＞ 自　殺　と　社　会 ―デュルケム	『自殺論』（1897年）を中心にしてE・デュルケムの社会理論を紹介し、それが、現代社会学の「機能主義」や「システム論」の考え方につながっていることを示す。	大　村　英　昭
6	宗教と資本主義 ―ウェーバー	『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の＜精神＞』（1904－5年）を中心にしてM・ウェーバーの考え方を紹介し、あわせてデュルケムとのちがい、現代社会学への影響などについても検討しよう。	井　上　　俊
7	自　由　か　ら　の　逃　走	E・フロムのナチズム研究をとおして、現代人にとっての「自由」の意味について考え、さらにD・リースマンらの社会的性格論への展開についてもふれよう。また、このフロムの研究がウェーバーの研究と深い理論上のつながりをもつことも忘れないようにしよう。	同　　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	潜在的機能の分析	犯罪や売春など、たいていの人が望ましくないと考えているような現象が社会にはむしろつきものである。それらの現象のかくされた働きを明らかにするためには、行為者の意図を超えた皮肉な結果や効用について分析を進めていく必要がある。	井上　俊
9	場面と体面	互いに演技しあうことによって私たちは自他の「体面」とその時々の「場面」とをともに維持しようと努めている。予期せぬハプニングによって「体面」や「場面」がそこなわれた場合は、共謀してそれを修復しようと努める。身近かな相互作用秩序について考える。	大村英昭
10	ストレンジャーの世界	見知らぬ人（ストレンジャー）同士が同じ空間のなかで生活している現代の都市社会。しかしそこでも、さまざまな気配りや抑制から成る微妙な秩序が保たれている。都市空間におけるストレンジャー同士の相互作用秩序について考えてみよう。	井上　俊
11	＜第3部・社会性と社会秩序＞ 家族のなかの世界	1. 家族の形態 2. 家族の機能 3. 親と子の世界	同　上
12	逸脱と社会変動	犯罪や非行など、社会秩序に反する逸脱行動はなぜ起こるのか。文化的な目標と制度的な手段とのズレから逸脱行動を説明するR・K・マートンの所論を中心に、逸脱と統制との関係を考えてみよう。	大村英昭
13	社会病理現象 －子ども問題を中心に－	1. コミュニケーションの病理 2. 学校教育の病理 3. 演技とラベリング	同　上
14	統制と権力	1. 内面的制裁の原理 2. 交換と権力 3. 恥による権力	同　上
15	＜まとめ＞ 社会学とは何か	社会学とは結局どういう学問なのか、その面白さはどこにあるのか。2人の講師がそれぞれの立場から自由に話しあう。また今回の講義でふれ残した問題や、聴講者からの質問などをも取り上げたい。	同　上

＝ 社会科学の成立と発展 ＝（R）

〔主任講師：松田智雄（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

人間の社会集団に関する法則性 ― という問題がこの講義の中心の主題である。人間の社会集団のなかにはある構造があり、その構造を歴史の流れでみれば発展のみちを進んでゆく。ここで法則性というのは、ひとりひとりの人間が、社会集団の構造と発展のなかで動いてゆくとき、その在り方を定める力を法則性と呼ぶのである。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	社会科学とは何か	一切の学問の源泉は、古典ギリシアに出発する。ソクラテスは対話のうちに哲学を語った。後に続いたプラトン、アリストテレスは学問の基礎を置く。	松田智雄（東京大学名誉教授）
2	社会科学の主要問題	人間の社会集団を貫く法則性とは何か、という問いである。やがてギリシヤには、ソクラテス、プラトン、アリストテレスが科学への途を展望する。	同　上
3	認識論のいみについて	カントは、すべて認識が経験とともに始まるとしても、その対象は認識する人が与えるのではない。人間の道具＝概念が、客観的認識をつくるという。	同　上
4	コペルニクス的転回	主観から客観に至る通路は、メトーデ〔＝方法〕であり、これは自然科学の実験と同じである。これを哲学に応用したことをコペルニクス的転回という。観察者を回転させ全星群をみる。	同　上
5	歴史的諸科学のあとづけ	ウインデルバントは、カントを継いで、科学を二分類し、法則科学と事件科学を、法則定立的方法と、個性記述的方法によって二分類した。自然科学と歴史科学に相応する。	同　上
6	経済学と固有の方法論登場	リッケルトによって、歴史的文化科学の成立が論ぜられた。自然科学的類概念でなく、文化科学的類概念を考え、すでに存在する経済学につき、中間的領域を設定した。	同　上
7	方法論論争	レコモーラーに対するメンガーの論争は、理論の有無をめぐって、レコモーラーは歴史的・帰納的方法を主張し、メンガーは理論の欠如を論難した。ここにマスク・ウエーバーが登場する。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	自然認識と自然法について	自然法思想は、ギリシアに発し、中世を経て近代にきた。自然状態に根ざす、自己保存権と処罰権とが、自然法から導き出された。	松田智雄
9	社会思想の科学への傾斜	ロックは、自然状態を想定して、そこから人間相互間の同意と契約による政治社会の設立を導き出した。市民社会的契約説が出現したのである。	同　上
10	自然状態についての先駆的パターン	フランス重農学派は、ケネーを頂点として、ついに社会科学としての、「経済表」の理論を樹立した。時代はすでに、資本主義的生産方法が、社会の基礎づけの初期に入り込んだ。	同　上
11	経済学の序曲 ―アダム・スミス―	自然的状態から「利己心」の自由を推し進め、自由放任を社会の利想として主張した。しかも、これを受けるのは、予定的調和で、神の見えざる御手の導きである。	同　上
12	経済学の根本問題	ピン製造工場における分業が、生産力を極度に拡大する。これが富の生産力であり、人間の労働が富を生産するのであるが、有用労働に従事する人数が増加する社会的分業を要する。	同　上
13	古典派経済学の軌道	デーヴィド・リカードウの経済学は、資本主義経済の法則性を把握する単越した理論性を備え、三階級への地代・賃金・利潤の三配分を明確に指摘し、これをミルの憂鬱な科学論が継続する。	同　上
14	ユートピア・社会批判から生まれるもの	フランス啓蒙主義は、革命的思想家ヴオルテール、モンテスキュー、ルソーを経て基本的な社会批判を確立するに至った。	同　上
15	社会批判から帰結するもの	いわゆる空想的社会主義は現実の社会から離脱した空理であった。マルクスは、社会構造の精密な把握から社会への革命的な批判を生み出す方法について自然科学的傾向が強い。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	歴史派経済学	リストに於ける歴史派経済学は、その主著「経済学の国民的体系」Das rationale Sgotem der Polifischen Oekonomie 1841のなかで、そのねらいは、「祖国（ドイツ）の実情」と「ドイツの利害」を把握して、必要なものはドイツの国民的市場と国民的工業を指摘した。	松田智雄
17	新歴史学派	ロッシャー、ヒルデブラント、クニースなどの「旧歴史学派」の成果は、次にシュモーラーやビュッヒャーなどの「新歴史学派」へと継承された。いずれも共通するのは、国民経済の「発展段階」を歴史的方法によって構成した、点にある。	同上
18	マルクス経済学の発展	マルクスの学説は資本主義社会の形成を前提として体系化されたが、現実の資本主義社会は「自由競争」の原則から、更に「独占」の組織へと進んだ。これに対応する「修正主義」が、ベルンシュタイン、カウッキーなどの学説として現れてきた。	同上
19	限界効用学派 (I)	古典学派とマルクス学派は経済学でいう価値の本質を、価値の客観的・歴史的根拠に求めたのに対して、現界効用学派は主観的・個人的判断に置き変えた。これを理論経済学の体系の基礎とし、ゴッセン、メンガー、フルラスなどが、築きあげた。	同上
20	限界効用学派 (II)	その発展は、オーストリアにウィーザー、ボェーム＝バヴェルクによって分配論について、ミーゼス、ハイエクによって貨幣論・景気変動論に至るまで展開された。アメリカにはクラーク、フィッシャー、カーヴァー、タウシッカ、セログマンなど。	同上
21	メンガーの学問的課題	歴史の発展とともに社会も転換してゆくときに限界効用原理は、社会の総体を一局部の「小宇宙」microcosmosによって理解する。経済現象を先ず「小宇宙」として探究し、それを通って世界全体を国民経済現象として、「大宇宙」として把握する。	同上
22	ワルラス人	かれの主著は「純粋経済学要論」であり、そのなかには純粋経済学、応用経済学、社会経済学の三部門が組織的に体系化される。その体系の特徴は一般均衡体系であり、数学的方法を駆使して、合理的方法によるより豊かな社会的富の生産と分配を扱う。	同上
23	新古典学派・マーシャル	ケンブリッジ学派を創立したのはマーシャルであり、新古典派経済学へ方向づけ、近代経済学のアダム・スミスである。社会観における自然法則でなく、有機的成長と進化を基礎的視点とし、数理解折的方法の摂取により、積密理論を展開した。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
24	マーシャル理論・均衡理論	経済社会の有機的成長過程の解明は究極の課題であるが、その前提として先ず果すべき部門は均衡理論と国民所得論である。この二つの礎柱の上に、「経済学原理」は、特殊均衡論、寡占と独占の問題、さらに長期・短期均衡の導入により体系化した。	松田智雄
25	ピグーと厚生経済学	厚生Welfareはいかにして増大されるか。測定用具を貨幣として、社会的厚生を測定すれば、それはとくに経済的厚生と呼ばれる。経済的原因によって、国民所得が形成されると、その平均量が大きければ大きいほど、厚生は増大する。	同　上
26	ケインズと近代経済学の革新	現代の経済学において、ケインズ「一般理論」は、国民所得を中心とする巨視的分析によって、国民経済の総体把握を単純化し、かつ可能とした。いわゆる「ケインズ革命」の名は、経済学の一画期を示し、それは経済の理論と政策とに影響した。	同　上
27	ケンブリッチ学派	マーシャル、ピグー、ケインズなど、いずれもケンブリッジ大学の講壇に立ち、しかも、イギリスが直面している政治・経済・社会問題について理論と政策を提起した。社会科学が時代を反映し、それに対して積極的な照明を与える関係の適例である。	同　上
28	シュンペーターと「新結合」	シュンペーターの経済学の特質は、あの「新結合」（＝革新）の概念は、驚くべき妙味を発揮しうるので、かれに「革新の社会経済学者」の名を与えることは正当であろう。「経済発展の理論」は、資本主義の発展を「新結合」として把握する。	同　上
29	毛沢東理論とその後の展回	中華人民共和国の社会主義体制は中国の全領域と全人民に展開されたが、そのうちに「文化大革命」における挫折と損失をいかにすべきか。この問いへの答えが、「社会主義体制と商品流通」という両者の矛盾なき結合を肯定する理論的提起（馬洪）である。	同　上
30	要約の意味で	ギリシア哲学、ソクラテス、プラトン、アリストテレスに始まり、カント学派の認識論および社会科学方法論への帰結。そして、イギリス社会思想、経済学の流れの画却はマルクス経済学であり、更に近代経済学が社会科学の精密化へと至る。	同　上

＝ 現代社会論Ⅰ＝（TV）

〔主任講師：辻村　明（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

現代社会論Ⅰでは、現代社会を基本的に規定している諸条件を、世界的視野のなかで眺め、現代社会が歴史的にどのように位置づけられるかを検討する。そのためには、資本主義か社会主義かといった社会体制という条件と、近代化という条件との絡み合いのなかでみていく必要がある。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	現代社会のとらえ方	人類の発展過程を５つの社会類型でとらえるマルクスとロストウの理論を紹介し、両者の比較を通して、現社会のとらえ方の典型を検討する。	辻村　明（東京大学名誉教授）
2	現代社会と大衆社会	現代社会を階級社会とみるか大衆社会とみるかで、意見は大きく成立するが、日本での大衆社会論とアメリカでの大衆社会論を比較しながら、コーンハウザーの大衆社会論を検討する。	同上
3	社会体制と近代化	現代社会を規定している最も基本的な条件である「社会体制」と「近代化」について、それぞれの定義をおこなったのち、両者の絡み合いのなかで、現代社会を分析することの必要性を説明していく。	同上
4	初期の資本主義	そのまず初めとして、資本主義社会を動かしている根本的なメカニズムを明らかにする。ウェーバーの初期資本主義のエートスやマルクス・エンゲルスの説を紹介する。	同上
5	現代の資本主義	資本主義社会が、「機械化」と「民主化」を内包とした「近代化」が進展することによって、どのように変貌してきたかを検討する。	同上
6	初期の社会主義社会	資本主義社会の対極をなす社会主義社会の基本的メカニズムを明らかにする必要があり、具体的にはソ連をとりあげて、国家機構、経済機構、党機構、言論機関などの現状を報告する。	同上
7	現代の社会主義（その１）	社会主義社会も、資本主義社会と競争していかなければならず、「機械化」という「近代化」は大いに推進されてきた。それが社会全体にどのようなインパクトを与えているか、主として経済や階級の面での可能性を検討する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	現代の社会主義（その２）	「近代化」によって、社会主義社会も「豊かな主会主義」になっていくわけで、その結果余暇、家族、宗教などの面で、イデオロギーに抵触しかねない現象が発生する。	辻村　明
9	収斂理論と拡散理論	資本主義社会と社会主義社会とは、類似した社会に接近していくであろうとみる収斂理論と、両社会は根本的に対立し続けるとみる拡散理論とを比較検討する必要がでてくる。	同上
10	現代社会と官僚制	大規模組織には不可欠の官僚制というメカニズムが、資本主義社会にも社会主義社会にも出現してくるのでその病理現象を検討することが、最終的な体制選択をするために必要な参考となるであろう。	同上
11	発展途上国の近代化	これまでは、両社会体制の先進国間での比較ということになるが、近代化の遅れている発展途上国も近代化を指向しているので、その近代化途上におけるさまざまな難問も検討しておく必要がある。	同上
12	高速社会と人間	機械技術のうちでも、特に交通機関の発達はめざましく、その総合的な結果として、「高速社会」とも呼ばれるべき状況が出現し、それが人間にどのようなインパクトを与えているかをみる。	同上
13	情報社会と人間	機械技術の発達は、単に交通機関においてばかりでなく、最近は通信機関や情報処理機関での発達がめざましく、「情報社会」が人間にどのようなインパクトを与えているかも検討しておく必要がある。	同上
14	機械技術発達の功罪（その１）	機械技術の発達は、人類に多くの利益をもたらした反面、過度の発達から逆に最近は不利益をもたらしている面があり、ここでは「高速社会」の功罪の両面を検討する。	同上
15	機械技術発達の功罪（その２）	同じように、「情報社会」の功罪も検討する必要があり、特にＩＮＳ（高度情報通信システム）の実現する高度情報社会の問題を検討する。	同上

＝ 現代社会論Ⅱ ＝ （R）

〔主任講師：辻村　明（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

現代社会論Ⅱは、Ⅰのマクロな視点にたいして、ミクロな視点にたった現代社会の現象的な諸問題をとりあげる。Ⅰが社会学的なマクロな視点とすれば、Ⅱは社会心理学なミクロな視点といえる。内容的には、自我の発生から対人関係、全国的レベルでの大衆現象、そして国際レベルでの文化摩擦に説き及ぶ。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	選択的接触といいわけの論理	現代社会には、あらゆる情報が氾濫している。しかしわれわれは、それらをすべてうけいれているわけではなく、選択しながら接触している。そのメカニズムについて、フェスティンガーとハイダーの理論を考察しながら、いいわけの理論の分析を試みる。	辻村　明（東京大学名誉教授）
2	自己成就予言と自己破壊予言	人間は自己暗示によって、その後の行動が変わるという心理的特性をもっている。そこに生じる現象として、自己成就予言と自己破壊予言をとりあげ、予言が人間の行動にどのような影響を与えるかを検討する。	同　上
3	匿名の無責任と責任の分散	現代社会は大衆社会ともいわれているが、大衆という大勢の集まりのなかで、個人は匿名の存在になりがちである。そうした匿名性がひき起こす無責任な行動について分析する。	同　上
4	縄張りと空間距離	動物には縄張りがあるが、人間にもそれに似たようなものがあって、他人と一定の空間距離をとりながら生活している。その諸相について考察するとともに、非言語的コミュニケーションにも言及する。	同　上
5	流行と物の普及	個性をもつ個人も、大衆の一員という側面があり、大衆現象のメカニズムに規定される。そのようなものとして、流行や物の普及といった現象がどのように発生していくかを検討する。	同　上
6	情報不足と流言	大衆現象の一つとして、流言や　話などの情報の伝播現象も重要であり、それをマス・コミュニケーションの物理的な機能および政治的な機能との関連で分析していく。	同　上
7	パニックとゲームの理論	現代社会はパニックをひき起こしやすいさまざまな条件をそろえている。そのメカニズムについて、ゲームの理論を参考にしながら考察する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	文化摩擦と誤解のレベル	国際化が進むにつれ、文化や価値観の異なる国民同士の接触が増大して、そこに誤解やコミュニケーション・ギャップが生じている。それを解消するにはどうしたらよいか。その対策を考える。	辻村　明
9	対外国イメージの研究	一衣帯水の隣国同士であるにもかかわらず、日韓両国は相互に偏見と悪いイメージを保持してきた。この日韓のコミュニケーション・ギャップを考察する前に、まず世界各国における対外国イメージの研究についてみておく。	同上
10	日韓のコミュニケーション・ギャップ	前章での考察をふまえて、日韓のコミュニケーション・ギャップの分析を試み、そこにみられる偏見や否定的イメージの実態と、それを解消するための方策を考えていく。	同上
11	日本人の国民性	われわれ日本人はどのような特徴をもっているのか。まず代表的な日本人論をとりあげ、さらに客観的な調査によるその実態を把握しながら、日本人の国民性を総合的に検討する。	同上
12	戦後日本の大衆心理・1	大衆心理は国民性とは多少異なり、ある特定の時代にあらわれる大衆の心理的特性を意味する。戦後日本の大衆心理を分析するに先立ち、その歴史的背景について考察しておく。	同上
13	戦後日本の大衆心理・2	大衆心理をとらえる方法として、ベストセラーの本をとりあげ、戦後40年間のベストセラーについて、特に「日本に対する肯定と否定」という観点に立って、年代別に分析を試みる。	同上
14	地域社会の復権	現代社会では、さまざまな要因から社会全体の画一化現象が多発し、地域社会や地方文化が破壊されていきつつある。その諸相をとらえながら、それを阻止するための方策を考える。	同上
15	地方文化の多様性	現代社会の危険性に対処するためには、地域社会の活性化が望まれるが、それは必ずしも容易ではない。ここでは、実際にそうした努力をしているさまざまなケースを紹介しながら、現代社会の今後の在り方について考察する。	同上

＝ 社 会 調 査 ＝ （TV）

〔主任講師：甲田　和衛（放送大学副学長）〕

全体のねらい

社会調査は i)歴史、ii) 方法、iii) 経験社会学の成立という３つの側面をもっている。社会調査の範囲は、センサスから個人の日記書簡に及ぶ。ここではわれわれの日常生活に社会調査がかゝわる問題を通して、この３つの側面をできるだけ同時にとりあげていきたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	社会調査の展開 日 本 (1)	群馬県村落調査を実例として、社会調査の方法とその限界について解説する。	甲田和衛（放送大学副学長）
2	社会調査の展開 日 本 (2)	戦前日本の社会調査の典型として戸田貞三「家族構成」を検討する。	同 上
3	国 勢 調 査	国勢調査の実施、集計、結果の利用から基本的統計調査としての国勢調査の歴史に及ぶ。	井出 満 総務庁統計局 総務課長
4	人口と社会 (1)人口データと人口指標	1) 人口と社会の相互関係、2) 人口研究の観察資料、3) 人口現象の測定方法について解説する。	阿藤 誠 厚生省人口問題研究所 人口資質部長
5	人口と社会 (2)近代日本の人口変動	1) 人口変動の一般モデル 2) 近代日本の人口変動に及ぶ	同 上
6	社会調査の展開 ヨーロッパ (3)	社会調査の創始者としての 1) Booth の貧困調査、2) Durkheim の自殺論をとりあげる。	甲田和衛
7	社会調査の展開 アメリカ (4)	３つの業績、Panel 調査として、Layarsgeld ほかの投票行動調査、社会心理学的要因の事例として、Stouffer ほかのアメリカの兵士、定量的方法の限界についてMurdock の社会構造をとりあげる。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	社会調査と経験社会学	統計的データと現実の社会、文化の測定、データの国際・比較等の諸問題について論談する。	甲田和衛 辻村　明 （東京大学教授） 直井　優 （大阪大学助教授）
9	世論調査	世論調査は、社会調査に大きな技術上の革新をもたらした。ここでは、世論調査の沿革を辿りつつ、無作為標本抽出や構造化された質問票の意義を明らかにする。そして指数化された情報が、人々の行動の予測や公共政策へ反映することを示す。	直井　優
10	産業・労働調査	近代の工業化は、新たな社会問題をもたらしただけでなく、オートメーションなどの技術革新は、勤労者の仕事や労使関係にたえず影響を及ぼしている。勤労者の仕事や動機づけの測定法を紹介することにより、社会調査の応用を明らかにする。	同上
11	社会階層と社会移動	近代社会は、機会の均等と現実の不平等が両立している社会である。そのため、社会全体に、不平等がどのように分布しているか、そしてどれだけ機会の均等が達成されているか、という問題に関して、縦断調査の方法と測定法を説明する。	同上
12	集団・組織調査	近代社会は、多元的な社会といわれるように、たんに家族の一員であるだけでなく、各種の集団や組織に属している。こうした集団や組織の社会的なネットワークや集団・組織が人々に及ぼす集合効果を測定する方法を説明する。	同上
13	地域調査	地域調査は、一地域に関する調査から、地域間の相互連関を明らかにする調査へと発展してきた。ここでは、地域を調査単位として、集計量による指数を作成し、それによって、地域間格差の是正をはかろうとする社会指標運動について説明する。	同上
14	国際比較調査	社会調査による結果の妥当性と信頼性は、たえず他の調査結果との比較によってのみ評価することができる。こうした比較調査の最も大きい設計が、国際比較調査である。具体的な調査事例をもとに、日本社会の普通性と個別性を説明する。	同上
15	社会調査の課題	社会調査の課題としてdata bankの問題をとりあげ、社会調査における方法上の問題について説明する。	甲田和衛 直井　優

＝日本経済と産業と企業＝（TV）

（主任講師：磯部浩一（放送大学教授）
黒澤一清（東京工業大学名誉教授））

全体のねらい

本講は日本経済の全体の姿（国民経済の構造）を、国民所得勘定などを用いて構造的に把握する。次に日本経済を構成する産業と企業の構造的な相互関連を明らかにする。さらに産業組織や企業経営のレベルにおける歴史的、構造的な特徴をうきぼりにすることが本講のねらいである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本経済―産業―企業研究の一般的枠組み―	本書の内容がどのような一般的枠組みの中に位置づけられるか、どのような問題意識に従って取り上げられるかを明らかにする。	黒澤一清（東京工業大学名誉教授）
2	日本経済と企業（国民所得勘定と企業）	最も単純な経済循環モデルから、国民所得勘定（企業部門、家計部門、政府部門、海外部門）の体系を示す。それは日本経済を構成する諸部門の構造的連関を統計的に示すものである。	磯部浩一（放送大学教授）
3	日本経済と産業（国民経済計算体系と産業）	国民経済計算体系の中に結合されている産業連関表を説明して、国民所得勘定では捨象される中間生産物の流れがどのように把握されているか。日本経済において産業はどのように位置づけられるか、を明らかにする。	同上
4	資金循環と産業・企業	現代経済にみる資金循環の重要性を明らかにし、その把握方法である資金循環表を説明して、産業と企業の位置づけを行なう。	同上
5	日本経済の発展と貿易	日本経済の発展において貿易の果してきた役割と、貿易と産業・企業の連関とを明らかにする。とくに、国際収支表によって、その特色を明らかにしたい。貿易摩擦や産業調整問題にもふれる。	同上
6	日本経済の発展と財政・金融政策	先進資本主義国へ追いつくために、中央銀行の信用創造による資金の調達と、政府主導下の大企業育成策がとられた。資本市場の発達が遅れたために、間接金融が企業の資金調達の方式となった。（資金循環表と国富表を示す）	同上
7	国民経済計算体系よりみた日本経済	まず国民経済循環におけるストック（資産の状態）を把握する国民貸借対照表勘定を説明する。これによって国民経済のフローとストックを把握する国民経済計算体系の５つの「物さし」を全部学習することになる。ついで、この５つの「物さし」で日本経済の現状をみることにしたい。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	産業構造の特徴	産業発達の形態学的特徴とそれをもたらした背後の根拠と条件を解明する。	黒澤一清
9	産業構造と生産性	産業とは、経済の、すぐれて形態的、かつ生産力的側面を指す。本章では、前章の形態学的側面の考察をさらに内容的に展開するために、日本経済 — 産業系を、生産性のタームで解明する。	同上
10	産業活動の効率と政策	産業活動が効率の観点から解明される。日本と米国との比較・分析によって、これが浮き彫りにされるだろう。最後に、日本産業の特徴をもたらすのにあづかった産業政策の特殊性が論ぜられる。	同上
11	日本経済における中小企業問題	急速な成長をした日本経済において、中小企業の問題性が国民経済の構造的矛盾としてあらわれた。中小企業問題の展開の特殊性と一般性を明らかにする。	磯部浩一
12	日本企業の経営史的特徴	戦前までの日本企業の歴史的特徴は、財閥本社を頂点とするピラミッド型で、終身雇用と年功序列型賃金制度による労務管理、さらに先進国から導入された生産管理や予算管理が組織的に展開されたこと、また中小企業の下請的利用の展開等があげられる。これらを具体的に把握する。	小林靖雄（放送大学副学長）
13	日本企業の国際競争力	日本企業は高度の技術・製品開発力、近代的設備の装備、人材育成、経営管理力の強化を基盤としてえられる高い生産性に支えられている。その実態を具体的に明らかにする。	同上
14	日本的経営の特徴	日本企業の経営管理の特徴は、終身雇用と年功序列賃金制度に育まれた集団主義的経営が展開し成果をあげる基盤となっている。この点を先進国との比較において展開する。	同上
15	日本経済の特色と今後の課題	政府の軍事費支出の比重の低いこと、民間部門の設備投資が高度成長の促進要因であり、消費支出の増大が国内市場の拡大、日本産業の輸出競争力を高めた。石油ショック以降、貿易摩擦の回避国内市場の開放、産業構造の技術集約化等の課題を示す。	黒澤一清 磯部浩一

＝経　営　総　論＝（R）

〔主任講師；栗山盛彦（千葉大学教授）〕

全体のねらい

今日の高度産業社会の中核的組織である「経営（企業）」について研究する場合の基礎的な考え方や概念を、できるだけ平易に、包括的に示したい。とくに専攻「産業と技術」という特定の諸専門科目を考慮に入れて、それらと有機的な関連をもたせるように工夫する。新しい時代的要請である技術革新や国際経営にも重点を置く。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	現代の社会と経営	経営学で何を学ぶか。またこれが未来志向的な学問として、どのような社会的課題に取組んで行くべきなのか。序章として、現代経営の全体展望を行ないつつ、これが経営学研究の中でどのように体系的に研究されているかを示して行きたい。	栗山盛彦（千葉大学教授）
2	経営と経営学	経営学の学問体系が初めて構想された母国は、ヨーロッパと米国である。日本の経営学は、この成果の導入によってその基礎を固めてきた。そこで戦前までの経営学説の発成と発展をこの章で取扱って行きたい。あわせて日本での体系化の経過に触れる。	同上
3	経済的な経営理論	上記に続いて、戦後のわが国経営学の発展を特にアメリカの経営管理論の導入とその影響による「管理学としての経営学」の内容と性格を論じる。とくに過税論、計量経営学理論および行動科学理論にふれ、最近の経営戦略論への橋渡しを解説する。	同上
4	経営と事業 (1)	経営学の基礎であり、対象である「経営」の本質を、「企業」「経営」および「事業」という基礎概念によって説明する。とくに「機能としての経営」、「構造としての経営」「この両者の統合体としての経営」についてメスを入れる。	同上
5	経営と事業 (2)		同上
6	経営目的	経営目的は、本質的に実践理論である経営学研究の出発点であるとともに、到達点でもある。今日支配的な意見は、経営目的は、経営理念と経営目標との合成体であるという。長期未来構想という経営者の主体的判断と科学技術市場という客観的條件との絡み合せで検討。	同上
7	経営職能の基礎	経営活動が展開される過税は、経営基本職能、管理職能の二つの視点から水平的、垂直的に区分してとらえられる。前者は、調達（人物金）製造及び販売に大別される。後者はトップマネジメント、ミドルマネジメント、ローワーマネジメントに区分される。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	経営管理	今日の代表的経営理論について説明する。内容を三つに分ける。経営過税論、経営計量論、行動科学論である。この三者を統合する新しい管理論としてシステム経営論を位置づける。	栗山盛彦（千葉大学教授）
9	経営組織	経営組織のうち、とくに経営管理組織についてふれる。機能別組織、事業別組織の特徴、スタフとラインの関係、企業間組織などから、多国籍企業組織の形態まで巾広く、現代的特質を説明する。	同上
10	経営の成長理論	ゴーイング・コンサーンとしての企業の接続的存立と発展に関する経営理論の概観を行ない、企業成長モデルを示す。機械的成長論、有機的成長論、投資延長論、統制的成長論にまで及ぶ。とくに成長論に関するこれけでの学説をフォローする。	同上
11	現代の経営計画思想	環境の不確実性、未来の不透明性が増大し、また成熟社会化により人間の欲求が多様化するに伴って、これを戦略ヴィジョンをもって計画化する要請が強く出て来ている。ポートフォリオ計画、長期経営計画などを中心に取上げる。	同上
12	新規事業形成と研究開発	高度科学技術の成果を利用した新規事業形成が、今日の最大のテーマである。新素材、バイオ及びエレクトロニクスなど未来事業をいかに効率的に事業化するか、研究開発はどうあるべきか、組織を活性化させる創造性を生かす方法は何か、を論じる。	同上
13	国際経営論(1)	日本企業の海外生産基地設営を中心とする海外事業戦略について論じる。とくに開発途上国への進出から欧米先進国への重点変換に注目。一般理論として、所有と国益、多国籍企業のグローバル戦略、ブーメラン効果、国内産業究明化に及ぶ。	同上
14	国際経営論(2)		同上
15	21世紀の経営ビジョン	21世紀の経営像を多面的に構想したい。一つは、感性志向的な製品・サービスの提供が、経営に要請されること、二つは、日本的経営の体質が変容し、国際化が進むこと、三つは、不確実性増大に対する対応戦略が必要なこと、四つは組織体としての経営の社会的正当化のためのコンセプトの構築が必要なこと。	同上

＝会　計　総　論＝（TV）

〔主任講師：江村　稔（放送大学教授）〕

全体のねらい

この講義は企業会計の「しくみ」と「はたらき」のあらましを学ぶことを目的とする。企業会計における会計処理は複式簿記として特色づけられるので、これを説明するが、会計処理は期間損益の算定という目的をもつので、その諸相についてもとりあげよう。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	決算書とその役割	企業会計の所産である貸借対照表と損益計算書は株式会社の定時総会に提出され会社の財産と損益の状況（財政状態と経営成績）を報告する役割をもっている。そこでまず、決算書としての貸借対照表と損益計算書について述べる。	江村　稔（放送大学教授）
2	複式簿記と複式記帳	複式簿記は左右両欄式の２つの勘定の間で行われる借方（左側）と貸方（右側）の同額記入としての複式記帳によって特色づけられる。この複式記帳を経済活動のもつ２面性に注目して説明する。	同上
3	複式記帳の法則	複式記帳は一定のルールに従って行なわれる。このルールは必ずしも理論的に設定されたものではないが、ぜひとも記憶しておかねばならないものである。	同上
4	決算のしくみ	各勘定の残高を借方・貸方の別に従って、１つの勘定にまとめると、その借方と貸方の合計額は一致する。この特長を用いて、記帳と計算の検証がなされるほか、勘定の締め切りとしての決算が完了し、決算が作成されるのである。	同上
5	損益計算書の様式	損益計算書に設けられている各種の区分、および、その区分ごとに示される各種の損益につき説明し、また、損益計算書の末尾に当期末処分利益が記載されることを明らかにする。	同上
6	利益の処分と留保	損益計算書の末尾に当期未処分利益が記載されることになっている。当期未処分利益は株主に対する配当など、会社が処分することができる利潤を示すものであるが、同時に、この未処分利益の増減計算書を知る必要がある。	同上
7	貸借対照表の様式	貸借対照表に設けられる各種の区分について述べるが、この場合、もっとも重要な問題として、流動・固定分類につき詳説しよう。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	損益計算の原理と方法	ある期間の損益は、その期間の収益からこれに対応する期間費用をさしひくことによって計算される。この計算のもつ理論的な意味について考えてみよう。また、期間収益と期間費用の決定にあたっては、発生主義と呼ばれる考え方がとられるが、現金主義との差を明らかにしながら、その意味につき説明を加える。	江村　稔
9	売上高と売上原価	企業の収益は、売上高から売上原価を差し引くことによって売上総利益または売上総損失として求められる。そこで売上高と売上原価の決定についての問題点を取り扱う。	同　上
10	棚卸資産の貸借対照表価額	商製品の貸借対照表価額は取得原価によるといわれているが、この金額は取得価額から払出価額を減じて求められる金額に期末修正を行ったものと解される。	同　上
11	固定資産の貸借対照表価額	固定資産の貸借対照表価額は、取得価額から減価償却累計額を減ずることによって求められる。取得価額もしくは取得原価の期間配分としての減価償却を中心として説明しよう。	同　上
12	繰延資産とその償却	企業による支出には、その効果が将来の数週間におよぶものがある。期間損益計算では、このような金額は数期間にわたる費用として扱われるが、このための会計技法として繰延資産の計上と償却が行われる。	同　上
13	引当金の設定	企業会計では、将来に生じる事象の金額を、あらかじめ期間費用として計上する処理としての引当経理が、例外的に認められている。引当経理が行われる条件は、きわめてきびしいが、この章では、これらの問題を論述する。	同　上
14	企業内容の開示と財務報告	有価証券報告書の主要部分をなす財務諸表については大蔵省令である財務諸表等規則が適用される。そこで、いわゆるディスクロージャーの諸問題を説明しよう。	同　上
15	財務諸表の監査制度	会社が作成し公表する決算書もしくは財務諸表については、監査役や公認会計士による監査が行われる。この章では、商法特例法と証券取引法による規制を説明する。	同　上

＝ 数理計画法入門 ＝　（TV）

〔主任講師：加瀬滋男（放送大学教授）〕

全体のねらい

現行の各種数理計画法のうち最も一般的で、しかも実際に顕著な成果を収めつつあるリニア・プログラミング（LP）につき、簡単な例を挙げながら平易に解説する。それらの具体的解法の理解を通して、さらに高度の数理計画法へ挑むための足掛りを提供しようとするものである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	数理計画法概説	計画問題への数理的アプローチの内容を述べるとともに、数理計画法の全般を概説する。	加瀬滋男（放送大学教授）
2	LPの具体例	若干の実際的な問題とそれらのモデルを例示し、LP応用の可能性の大きさを説く。	同上
3	LPの構造	LPの各種形式にふれ、さらに図解によりLPの構造に対する十分な理解に導く。	同上
4	シンプレクス法(1)	シンプレクス法の核心を成すシンプレクス表の意味と作成につき基礎的概念を略説する。	同上
5	シンプレクス法(2)	シンプレクス法における計算の意義と実際を講述し、シンプレクス法の理解を助ける。	同上
6	各種の特殊解法	改訂シンプレクス法などについて略説し、特別な場合における解法の実際を呈示する。	同上
7	2段階シンプレクス法	LPの応用範囲を広げるための2段階法の根拠と手法を説き、LPの妙味を紹介する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	実施上の検討(1)	最適解の実施に当たり留意すべき事項に言及し、条件の変更に基づく解の転化も述べる。	加瀬滋男
9	実施上の検討(2)	受動的な最適解の転化以上の積極的な最適解の変更およびサイクリング現象に話を進める。	同　上
10	モデルの改変	現実によく経験される条件の変更に追随する諸手法を論じ、最適解の実効性を検討する。	同　上
11	双対問題と整数解問題	最小化問題と整数解問題の解法を詳述し、シンプレクス法のより一層有効なことを示す。	同　上
12	特殊問題の解法	輸送問題・ネットワーク問題に適する独特な解法を紹介し、読者の視野拡大に寄与する。	同　上
13	CPMの解法	プロジェクトプラニングの一つでもあるCPM特有の解法の一部始終を例示する。	同　上
14	数理計画法利用の実際(1)	実践的立場から、数理計画法（特にLP）の利用における理論と実際の関連を追求する。	加瀬滋男 高井英造 （三菱石油㈱数理計画部）
15	数理計画法利用の実際(2)	産業連関表の分析への応用と、各種企業での活用諸例を述べ、将来への展望を試みる。	加瀬滋男 高井英造 大槻　健 （三菱石油㈱需給部）

＝ 現 代 の 数 学 観 ＝(R)

〔主任講師：前原昭二（放送大学教授）〕

全体のねらい

数学史のなかから、現代の数学観の形成に強く関係していると思われる事項のみをとり上げ、現代の数学者の大多数がもつ「数学に対する考え方」を解説する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	論証的数学の起源	証明を中心とする論証的数学はユークリッド原論に確定的な形で現われるが、それ以前の状況を、通説に従って簡単にのべる。	前原昭二（放送大学教授）
2	ユークリッド原論 I	証明に対するユークリッドの態度を示す一例として、3角形の2辺の和が他の1辺より大きい、ということの証明の筋道を、ユークリッドに従って述べる。	同 上
3	ユークリッド原論 II	定義と公理をもとにするユークリッド原論の構成と、ユークリッド幾何学における平行線の公理の意義、について解説する。	同 上
4	非ユークリッド幾何学	非ユークリッド幾何学の考え方について解説する。	同 上
5	非ユークリッド幾何学の無矛盾性	非ユークリッド幾何学という学問が存在し得ることを、当時の学者達がどのようにして保証しようとしたか、について述べる。	同 上
6	ヒルベルトの幾何学基礎論	ユークリッド幾何学と非ユークリッド幾何学の共存を許すヒルベルトの公理主義の考え方を説明する。	同 上
7	アインシュタインの『幾何学と経験』から	公理主義的な数学と公理主義以前の数学との差異、ならびに、公理主義的数学と自然科学との関係を、物理学者アインシュタインの講演「幾何学と経験」からの引用によって説明する。	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	虚数	虚数の概念の論理的な導入法について説明する。	前原昭二
9	無理数論	無理数の概念の論理的な導入法について説明する。	同上
10	整数と有理数	整数ならびに有理数の概念の論理的な導入法について説明する。	同上
11	デデキントの自然数論	自然数の概念を純論理的に導入しようとしたデデキントの試みについて解説し、集合と写像の概念が数学における最も基本的な概念である、ということの意味を説明する。	同上
12	ラッセルの数理哲学	論理とは何か、数学とは何か、論理や数学と経験科学との関係はどのようなものか、ということについての、論理主義の見解について解説する。	同上
13	集合論のパラドックス	ラッセルのパラドックスを例にとり、集合論的方法の極端な使用は矛盾を導くことがある。ということを説明する。その他、意味論的なパラドックスにも言及したい。	同上
14	数学基礎論	集合論のパラドックスとの関連において数学をどのように理解すべきか、ということに関する論理主義、直観主義、形式主義の考え方を説明する。	同上
15	数学の現状	数学基礎論の問題が未解決である現時点で研究を続けている数学者の平均態度と、公理的集合論に言及し、この講義のしめくくりとする。	同上

＝基礎数学Ⅰ＝（TV）

〔主任講師：前原昭二（放送大学教授）〕

全体のねらい

高等学校の微積分に引き続いて、微積分の初等的部分を講述する。計算法に主眼をおくが、最後に、微積分を論理的に構成する筋道の概略を説明する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	逆三角関数	初等関数のうち高等学校で未習の逆三角関数およびその微分法を述べ、不定積分が逆三角関数で表わされる有理関数や無理関数の積分について説明する。	前原昭二（放送大学教授）
2	微分	微分の定義とその簡単な性質を述べ、その表現形式が置換積分の計算に有用であることに言及する。	同上
3	有理関数の不定積分	有理関数の不定積分が初等関数の範囲で得られることの証明に沿って、その計算法を述べる。	同上
4	微分方程式	1階および2階の定数係数同次線形常微分方定式の解法を述べる。1階の場合を例にとり、定数変化法にも触れる。	同上
5	定積分の定義の拡張	有限個の不連続点をもつ関数の積分や、無限区間における積分について述べる。	同上
6	平均値定理	微分法および積分法における平均値定理とその幾何学的意味を説明し、コーシーの平均値定理の応用として、不定形の極限値についてのロピタルの定理にも触れる。	同上
7	偏導関数	2変数関数を例にとり、偏導関数の定義と記号を説明する。偏微分の順序の交換ならびに全微分にも言及する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	重　積　分	2重積分を例にとり、重積分の概念ならびに重積分の計算法を説明する。	前原昭二
9	重積分の変数変換	2行2列のヤコービアンの解説から始め、2重積分の変数変換について説明する。	同　上
10	テイラーの定理	テイラーの定理と、極大極小や曲線の凹凸などへの簡単な応用を述べる。2変数のテイラーの定理にも触れたい。	同　上
11	無　限　級　数	正項級数の簡単な諸性質を述べ、収束する無限級数の絶対収束と条件収束について説明する。	同　上
12	ベ　キ　級　数	関数のテイラー展開を目標とし、ベキ級数の諸性質を説明する。	同　上
13	平　面　曲　線	平面曲線についての微分幾何学的概念のいくつかを紹介する。	同　上
14	極限の定義	極限の精密な定義と考えられている、いわゆるエプシロン・デルタ式の定義について説明する。	同　上
15	微積分の論理的構成	微積分を論理的に厳密に構成するときの道筋の概略を説明する。	同　上

＝基礎数学Ⅱ＝（R）

〔主任講師：前原昭二（放送大学教授）〕

全体のねらい

線型代数学について講述する。しかし、線型代数学の詳論に立入ることはせず、連立1次方程式の解法と2次曲線・2次曲面の分類という古典的な問題に線型代数の方法を適用することによって、線型代数の方法の直観的性格と線型代数における諸概念の幾何学的な意味とを明らかにしたいと思う。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	n次元数空間	n次元数空間の概念を説明し、2次元・3次元の図形的なベクトル空間からの類推によって、n次元数空間の初等的な性質を解説する。また、連立同次1次方程式との関連において、ベクトルの1次独立性と次元との関係に言及する。	前原昭二（放送大学教授）
2	行列式	平行4辺形の面積と平行6面体の体積を利用して2次と3次の行列式の定義を与え、それを一般化することによって一般の行列式を定義する。また、行および列についての展開法にも触れる。	同上
3	1次変換	n次元数空間からm次元数空間の中への1次変換の定義を与え、1次変換を行列によって表現する方法を説明し、行列の演算を1次変換の演算によって定義する。また、行列式の積の計算法を、行列式の基本性質と1次変換の考えを利用して説明する。	同上
4	行列式の応用	正方行列が逆行列をもつ条件とか連立1次方程式のクラメルの解法を含め、行列式を用いると表現が簡潔になる事例のいくつかを初等数学の範囲から選び、それについて解説する。	同上
5	部分ベクトル空間	数空間の部分ベクトル空間とその次元について説明する。それとは独立に行列の階数の定義を与え、行列の階数と部分空間の次元との関係を明らかにすることを目標とする。	同上
6	連立1次方程式	一般の連立1次方程式に対し、解が存在するための1つの必要十分条件を与え、解が存在するときの一般的解法について述べる。	同上
7	対称行列と2次形式	転置行列の基本的な性質を述べ、対称行列を用いて2次形式を表現する方法を説明する。また、原点を中心とする2次曲線の標準形を求める方法を例にとり、2次の対称行列の固有値と固有ベクトルの幾何学的な意味を解説する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	正規直交基底と2次形式	正規直交基底と直交行列について説明し、2次形式を表わす対称行列が正規直交基底の変換によってどのように変形されるかを説明する。とくに3次の対称行列について、直交変換による対角比の方法を述べる。	前原昭二
9	2次曲線の分類	これまでに得た知識を用い、2次曲線の方程式の標準形を求める方法を述べる。	同　上
10	2次曲面の分類（その1）	前章と同様な方法により、2次曲面の方程式の標準形について述べる。	同　上
11	2次曲面の分類（その2）	前章で得た標準形をもとに、個々の2次曲面の形状や名称について述べる。	同　上
12	ベクトル空間	スカラーが実数である場合に限定し、ベクトル空間の一般的定義を与え、その基本的な性質について説明する。また、n次元ベクトル空間がn次元数空間と同形であることにも言及する。	同　上
13	n次元ユークリッド空間	n次元アフィン空間、n次元ユークリッド空間について説明する。	同　上
14	複　素　数	複素数に関する基本的事項について説明する。代数学の基本定理にも、証明なしで言及する。	同　上
15	ユニタリ空間	スカラーを複素数とするベクトル空間の一例としてユニタリ空間の定義を与え、ユニタリ変換による正規行列の対角比について説明する。	同　上

＝ 基 礎 数 学 Ⅲ ＝ （R）

〔主任講師：廣瀬　健（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

集合と位相の概念について講述する。

これらは、いずれも現代数学の基礎となる極めて重要な概念である。現代数学の諸分野を構成する各概念、手法は、これらの概念を用いて記述されるといってよい。

本講では、具体的な例をあげつつ、なるべく平易に、これらの解説を行う。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	集合とその演算	集合概念の説明から、用語の導入、歴史的経緯、その有用性について解説する。 集合論における基本概念、集合の上の演算とその意味、論理との関連などについて述べる。	廣瀬　健 （早稲田大学教授）
2	写像とグラフ	関数概念の説明、それを集合間の写像としてとらえることなどについて述べ、写像についての基本概念、すなわち単射、全射、1対1対応逆写像、写像の合成などについて説明し、さらに、それを集合の直積の部分集合として表現することなどを解説する。	同　上
3	同値美	現代数学の1つの特徴は、対象の“ある性質”に着目し、その性質について同じであるものは、これをひとまとめにして同一視し、“1つのもの”と考えるところにある。この考え方を集合を用いて表現する同値関係、同値類などについて述べる。	同　上
4	集合の濃度	“数”についての基本概念は、それによって個数を表現する濃度（基数）および順序を表現する順序数に関わるものが中心である。ここでは、集合の“個数”の概念を一般化した濃度について説明し、濃度についての代表的結果について解説する。	同　上
5	濃度と次元	1対1対応によって類別された各集合では、例えば、1次元の直線上の実数全体と二次元の平面上の点全体とは同じ濃度をもつ、次元を区別するのは位相的概念であって、これらの対応は連続にならないこと、ペアノ曲線などについて述べる。	同　上
6	順序集合	自然数全体の集合や実数全体の集合では、集合の要素の間に順序が定義されている。数学で扱われる集合の多くは、なんらかの順序関係が定義されているのが普通である。 ここでは順序をもった集合、すなわち、順序集合とその基本的性質を明らかにする。	同　上
7	ツォルンの補題	集合論を建設したカントルは、集合に適当な順序を導入すれば整列集合になることを仮定した。この仮定は後に選択公理やツォルンの補題という形で表現されることになった。ここでは、それらの意味についてなるべく平易な解説をする。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師 （所属・氏名）
8	実数の集合と ユークリッド空間	実数の集合と自然に対応する直線上の距離の概念を拡張してユークリッド空間を定義し、ユークリッド空間の“距離”の概念を用いて、関数の連続性の概念を定義し吟味する。また、集合に“構造を入れる”ことの意味について解説する。	廣瀬　健 （早稲田大学教授）
9	距離空間	ユークリッド空間を、空間としてさらに抽象化し、“距離”の概念を一般化して距離空間を定義する。実例をなるべく豊富に示し、やさしい関数空間などをも挙げる。	同上
10	位相空間	距離空間における、収速性、連続性などの性質を考察することにより、開集合、閉集合系の概念を用いて、距離空間をさらに一般化して、位相空間を定義する。	同上
11	位相写像と連続写像	定義された写像の定義域に構造が与えられているとき、その写像が定義域の構造をどの程度保存するかが問題になる。 位相空間の間の連続写像、位相写像が保存する性質、つまり位相的性質について解説し、実例をなるべく多数挙げる。	同上
12	コンパクト集合	位相空間に関わる議論の代表的な手法を考察すると、コンパクト性と呼ばれる性質が浮かびあがる。 コンパクト集合の定義、基本的性質について述べ、収束の概念などとの関係を説明し、その有用性を示す。	同上
13	連結集合	位相空間における部分集合同志の連結、分離の概念について考察し、連結集合に関わる諸性質、実例などを示す。 コンパクト性、連結性が位相的性質であることに注意し、直観的イメージとの関連を重視する。	同上
14	位相空間の分離条件	位相空間の概念は、きわめて一般的であるから、位相空間の点や部分集合の間の関係を導入し、内容を豊富にすることを考える。コルモゴルフ、フレシェ、ハウスドルフ、ヴィエトリス、ティエツェの分離公理などを解説し、正規空間によって、再び、実数にめぐりあう。	同上
15	距離空間と完備集合	可算公理、距離づけ可能性、可分、全有界などの概念と共に、位相空間への一般化への前程としての距離空間としてではなく、最もよく扱われる位相空間としての距離空間を考察し、完備性などについても解説する。	同上

＝ 確率論・統計学＝（R）

――― のうち確率論 ―――

〔主任講師：林知己夫（放送大学教授）〕

全体のねらい

不確実な現象を記述し、将来を予測するための手段としての確率論の入門である。個々の事象の確率を数値的に計算するのが目的ではなく、現象のモデル化を通して、いろいろな場面に適用できる数学的理論を構成することを目標とする。統計学の講義にスムーズにつながるような内容としたい。また、数学的な厳密性は追求しない。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	偶然現象の記述	同じ条件下で繰り返して観測されるような偶然現象が議論の対象である。不確実でとらえどころのない現象も、適当なモデルを作ることによって記述することができる。	清水良一（統計数理研究所教授）
2	確率モデル	偶然を記述するためには、まずどういう現象が起こりうるのか、あるいはどういう現象を考察の対象とするのかを明らかにしておく必要がある。「事象」という概念を導入し、さいころ投げのような簡単な場合について確率モデルの構成法を述べる。	同上
3	つぼのモデル	偶然現象を記述するのに、つぼのモデルは簡単で理解しやすく、しかも応用が広い。最も単純な復元抽出と非復元抽出を説明し、これに対応する確率分布として2項分布と超幾何分布を導入する。	同上
4	ベルヌウイの定理	確率pで起こることが期待される事象を考える。多数回（n回）の観察を通してこの事象の起こる回数（n_1回）の比率n_1/nの行動を考察する。nを大きくするとn_1/nはpの近いところで変動するようになる（ベルヌウイの定理）ことを示し、さらにその精密化を行う。	同上
5	条件つき確率	ある事象の起こる確率は情況に応じて変わるべきものである。偶然現象を観察して得られる情報は偶然についてより確実な知識をもたらす。この章と次の章では情報の利用に関する一つの定式化を、「条件つき確率」という概念を導入することによって行う。	同上
6	事象の独立	前章からの直接の続きである。このあとさらに確率論で最も基本的な概念の一つである「独立性」を導入する。ある事象が起こったことを知ったことによって、他のある事象の確率が変わらないとき、これら二つの事象は互いに独立であるというのである。	同上
7	独立試行	「事象の独立」をさらに発展させて「試行の独立」という概念を導く。相互に影響を及ぼし合わないような試行を、互いに独立であるという。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	確率変数	特定の偶然現象を観察した結果で決まる数量を確率変数という。これは一定の分布法則に従って変動する偶然量である。分布法則について幾つかの簡単な例をあげる。	清水良一
9	期待値	確率変数の行動は分布法則によって完全に規定される。期待値は、これを部分的に特徴づけるものである。「平均値」、「分散」など基本的な量を導入する。データから計算される「標本平均」が分布の平均値に収束するという大数の弱法則を述べる	同上
10	ポアソン分布とその周辺	2項分布は最も簡単な分布法則の一つであるがパラメータの値によっては別の分布で近似するほうが自然であり、計算も容易である。ポアソン分布による近似がその一つ。この章では、ポアソン分布と負の2項分布について述べる。	同上
11	多変量の確率変数・I	二つまたはそれ以上の確率変数を同時に考えることによって多変量（多次元）の変数が定義される。この章では主として2次元の変数について、その行動を記述する確率分布と期待値、とくに、変数の間の関係を表す相関などの概念を導入する。	同上
12	多変量の確率変数・II	2次元の分布に関連して、条件つき分布を導入し、それを正規分布についてやや詳しく述べる。また、独立な確率変数の和の分布（たたみ込み）の計算法を与える。	同上
13	母関数とその応用	母関数や特性関数を導入することによって、期待値の計算やたたみ込みを求めることは容易になる。さらに極限定理の証明に利用できるなど、これらの関数が強力な解析的手段を与えてくれることを幾つかの例によって示す。	同上
14	正規分布	確率分布としての正規分布は最小2乗法とともにガウスによって発見され、彼の誤差論の中で重要な役割を果たした。中心極限定理との関連もあってその重要性は今日でも変わっていない。この分布の意味、確率モデルとしての用途の広さ、その限界などについて述べる。	同上
15	独立でない変数の系例	講義の中であまり述べることのできなかった独立でない試行列の問題を取り上げ、マルコフ性について簡単に触れる。最後に、このあとに続く統計学に言及し、偶然を扱うこの二つの学問の相互の関係と役割を述べて終わる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
16	確率論と統計学	確率論と統計学の関連性について述べ、統計学において確率論がいかに活用されるかについて考察する。また、統計学とは何かについて説明し、今後の講義のバックボーンを与える。	林　　知巳夫 （放送大学教授）
17	統計学の基礎概念	統計学は集団を取り扱うことに始まる。この集団とは何か、について説明する。母集団の考え、集団の要素を表す標識、算術平均や分散のもつ意味、チェビシェフの不等式に基づく推論の仕方について説明を加える。	同　　上
18	統計的分布	度数分布の実例を幾つか示し、モード、メディアン、レインジ、平均、分散、標準偏差、対称度、歪度など基礎統計量について説明する。	石田正次 （帝京技術科学大学教授）
19	相関係数と相関比	最小２乗法の初歩的な説明をし、これを用いて回帰直線を求める。さらに多項式の当てはめ、相関係数についての話をする。	同　　上
20	測定誤差	調査や実験における測定誤差の性質とその統計的処理法について述べる。 系統誤差と偶然誤差の問題について詳しくその取り扱い法を述べる。	同　　上
21	統計的推定と検定	統計的推定と検定の基本的な考え方を簡単な実例によって説明する。 統計学での信頼性の問題について述べ、標本調査法における推定の基本概念を説明する。	同　　上
22	標本調査法	世論調査や品質検査などで使われる標本調査のやり方と、どうすれば調査精度を上げることができるかということについて説明する。	同　　上
23	調査の計画と統計的考え方（Ⅰ）	社会の実証的研究に利用される社会調査の企画を例にとり、調査の計画にあたって利用される標本抽出の方法の基礎となる単純ランダムサンプリングの方法について概要を述べる。	鈴木達三 （統計数理研究所教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	調査の計画と統計的考え方（Ⅱ）	調査の計画のうち、調査対象者の選び方については幾つかの手法がある。各種の補助的情報を利用することにより、効率のよい標本抽出計画を実行することができる。実際に行われている大規模な全国調査の標本抽出計画にもふれる。	同上
25	調査データの見方	調査から得られる情報（データ）は、情報収集の手法の選択、標本抽出の計画調査データの整理の仕方等、調査に利用した手法に関連している。ここでは標本調査によるサンプリング誤差について、具体的な実例を中心に述べる。	同上
26	工学への応用	不規則に変動する現象を統計的に解析するための基礎概念として、定常時系列の自己相関関数ならびにスペクトル密度関数について説明する。その応用として統計的システムの制御の問題を取り上げ、工学的実用例について概説する。	赤池弘次（統計数理研究所教授）
27	ソフトサイエンスへの応用	広く人間的・社会的事象の解明に携わるソフトサイエンスでは、人の意識や態度など、内容が多義的で変動しがちのデータから、有効な情報をどう取り出すかの工夫が常に優先する。この領域の統計的考え方や分析法の特徴を解説する。	水野欽司（統計数理研究所教授）
28	ライフサイエンスへの応用 ― 計量診断	からだの種々の計測データについて似たものをグループ化し、これらグループに同じ医学的意味を見いだし、病名、病状の度合い、予後の見通しなどの判断を行う計量診断に用いられる多次元的統計解析について講義する。	駒澤勉（統計数理研究所教授）
29	ライフサイエンスへの応用 ―自然保護の統計	野生動物の数を知ることは、自然生態系の中における野生動物のバランスを考えるうえで貴重な基本事項である。統計学の最も難しい問題の一つであるが、確率論・コンピュータ・標本調査理論を活用して、生息数を推定する方法を述べる。	林知巳夫
30	質を測る統計的方法	質的なものを量的に表すことは、現象を統計的に取り扱おうとするとき、不可欠のことである。この数量化の問題に対して、統計学の立場からどう考えてよいかを説明する。根本概念を明らかにするとともに、その具体化について述べる。	同上

＝ 物質とエネルギー ＝ (R)

〔主任講師：池上雄作（東北大学教授）〕

全体のねらい

自然界を形づくっている物質とエネルギーの科学でもっとも基本となることがらを学習する。とくに物質と熱エネルギー、化学構造とエネルギー、光と物質がみせるスペクトルなどに焦点をあわせて化学の立場から解説し、エネルギーと物質とのかかわりあいを学ぶことによって、自然への理解を高めたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	エネルギーの形態 ―序論として―	物質が形づくっている自然界や文明社会を動かしている原動力がエネルギーである。熱、化学、光エネルギーなど、エネルギーのいろいろな姿、エネルギーの変換、エネルギーと物質のかかわりあいを序論として解説する。ミクロの粒子がもつエネルギーを理解することの重要性を強調したい。	池上雄作（東北大学教授）
2	物質の理解	多様な物質の分類や構成をどう理解するかについて述べ、原子、分子、イオン、モルの概念を簡潔にまとめる。さらに、無機、有機物質のいくつかを化学式とともに解説し、最後に物質の状態変化および結合エネルギーに言及する。	同上
3	物質の状態と熱エネルギー	3～6章は化学熱力学の基本を取り扱うが、本章ではまず力学的エネルギーから入り、仕事と熱、内部エネルギー、そしてエネルギー不変則としての熱力学第一法則を解説する。さらに理想気体を取りあげ、可逆および非可逆的体積変化過程を述べ、熱、温度および熱容量に言及する。	関集三（大阪大学名誉教授）
4	状態変化・化学変化と熱エネルギー	物質の変化が起こるときは熱エネルギーの出入が伴う。反応熱の一般的性格、つづいて代表的化合物の生成エンタルピー、熱容量とその温度変化を説明、とくに熱測定、カロリメトリーを解説する。代表的な反応熱と緩学結合エネルギーにも言及する。	同上
5	物質変化の方向：エネルギーとエントロピー	自然に起こる物質変化には、主としてエネルギー変化で理解できるものとそうでないものがある。可逆変化と不可逆変化、変化と確率の関係を述べエントロピー概念の必要性に言及し、熱力学第二法則を示す。さらに、エネルギーとエントロピーから自由エネルギーを導く。	同上
6	自由エネルギーと化学平衡	エネルギーとエントロピーからギブズ自由エネルギーを導き、その性質と役割を解説したあと、化学ポテンシャルの概念を導入する。つづいて、代表的な化学反応系での反応の進行の可能性を予測するための熱力学量を与え、具体的に平衡条件を導く。	同上
7	エネルギー量子の概念	量子論のはじまりとなった物体の放射スペクトルの説明に関するプランクの量子の考え方、水素原子の電子の運動とスペクトルとを説明したボーアの原子模型、光と電子の粒子性と波動性の二元性について説明する。	米澤貞次郎（京都大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	電子の分布と エネルギー準位	電子の運動状態を明らかにする量子力学の基本方程式（波動方程式）について述べ、これから明らかにされる水素原子の電子状態にふれ、分子の結合に対する電子の役割について、いくつかの例を挙げて解説する。	米　澤　貞次郎
9	分子軌道と フロンティア電子	エチレンを例にとって炭素－炭素二重結合にσ電子とπ電子がかかわっていること、ベンゼン、ナフタレンなどの化合物中のπ電子の挙動を説明する分子軌道法について述べ、これら化合物の化学反応の理論であるフロンティア軌道理論にふれる。	同　　上
10	フロンティア軌道 理論とその周辺	フロンティア軌道理論を提唱した福井謙一博士との対談形式により、フロンティア軌道の発端、その展開、有機反応への応用、創造への道がどうあるべきかなどに関する博士の意見を聴く。	米　澤　貞次郎
11	電磁波と スペクトロスコピー	光や電波で代表される電磁波は宇宙線からラジオ波まで周波数が広い範囲に及び、$E=h\nu$ のエネルギーをもつ。電磁波の性質について、つづいて物質による光の吸収や発光が分子やイオンのエネルギー準位と密接な関係があることを説明し、スペクトロスコピーを概説する。	池　上　雄　作
12	紫外・可視光の 吸収スペクトル	多くの物質は紫外線や可視光を吸収して、その物質に特有なスペクトルを見せ、吸収帯は電子エネルギー準位間の遷移に対応する。そして、可視光の吸収は物質の色と深い関係がある。分光法について述べ、スペクトルと化学構造の関係を代表的な例とともに解説する。	同　　上
13	赤外線吸収 スペクトル	2μmから25μmまでの領域の電磁波は化学結合の振動や分子の回転運動と共鳴し、その吸収は赤外スペクトルとして便利に利用されている。 基本的な分子の振動や複雑な分子のスペクトルの例を挙げ、応用を含めて解説する	同　　上
14	生体とエネルギー	物質エネルギーの科学にとって、「生体とエネルギー」の課題は重要な位置を占める。生体における同化、異化とエネルギーの流れのわくぐみ、またエネルギー交代の主役がATPであることを中心に、概括的に説明し、解糖・呼吸とそのエネルギー収支にもふれる。	同　　上
15	光合成／まとめ	生物におけるエネルギー変換の代表的なものに光合成がある。緑色植物による光合成のしくみ、光エネルギーの捕足と電子伝達、CO_2の固定を中心に解説する。 最後に、本講のまとめを述べる。	同　　上

＝ 基礎物理学 Ⅰ ＝ （TV）

〔主任講師：戸田盛和（放送大学教授）〕

全体のねらい

自然現象をできるだけ少数の基本概念と法測によって理解しようとするのが物理学の立場である。Ⅰでは重要な概念と法則を明かにする。Ⅱではさらに深く物理学の基礎と人間の思考方法との関わりを考える。なぜ科学は常識をはなれなければならないか。数学はどの程度必要か。物質の科学と技術の関係は？。空間と時間の概念の変遷。物質と重力と宇宙の関係などの本質的な問題を古典物理学の範囲で明かにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	科学のはじまり	自然現象を理解しようとする知的な努力から科学が生まれた。エジプトのピラミッドに代表される技術、ユークリッド幾何学、アルキメデスによるがこの釣り合いの静力学の研究は数量的な科学のはじまりを物語っている。	戸田盛和（放送大学教授）
2	浮力と水の圧力	アルキメデスは風呂の中で浮力の原理を発見したと伝えられる。パスカルは大気の圧力が空気の重さによるものであることを明らかにした。これにより自然には真空が存在することが明らかにされたが、これは自然を理解する上で大きな発見であった。	同上
3	落下運動	ガリレイは落体の運動を研究し、速度が変化する場合の運動を明確に捉えた。実験と数理的な推論を組み合わせて自然現象を理解する方法がはじめられた。さまざまな運動、振り子の等時性について述べる。	同上
4	地球	ガリレイは望遠鏡によって木星の衛星や太陽の黒点などを発見し、地球もこれらと同じように天体の一つであることを明らかにした。地球が球形であることは古代ギリシャ時代にも考えられたが、この時代にこれが確認された。コペルニクスの地動説が提出された。	同上
5	太陽系	ケプラーの法則の発見について述べる。火星の楕円軌道、太陽系の秩序はどのように知られたか。	同上
6	運動の法則	ニュートンは運動の法則、それを有効に扱う数学、それに万有引力の法則をもって太陽系の問題と取り組んだ。地球をまわる月の運動はそのテストケースであった。	同上
7	力と運動	力に対する身近かな例といろいろの運動の具体的な例をあげる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	回転運動	多くの日常的な運動は回転を含んでいる。玉の衝突、円板の回転、潮汐、体操などにおける身体の回転、猫の空中における回転、コマの運動。	戸田盛和
9	仕事とエネルギー	ワットは蒸気機を発明し、馬力という単位を作った。エネルギーの概念は力学においても重要である。永久機関の夢にも触れる。	同上
10	温度と熱量	熱はエネルギーの一つの現れであることがわかってきたのは19世紀半ばである。熱現象に関する学問、低温の物理学も19世紀後半にはじまった。	同上
11	物質と分子	物質の分子的構造は今世紀になってから明らかにされたものであるが、ここでは原子分子に対する進歩、アボガドロの法則などについて述べる。	同上
12	流体の運動	飛行機の翼やヨットの帆に働く揚力をはじめ流体の運動は大変興味深い現象が多い。台風などの運動には地球の回転もからんでくる。	同上
13	波動	波は重要な運動の形態である。音の波、光の波、水の波などについて述べる。	同上
14	電気と磁気	電流は磁気的な作用がある。その研究は独特な歴史をもち、ファラデーを経てマクスウェルによって完成された。	同上
15	光と熱放射	マクスウェルの研究は電波の存在を予言した。一方で光速度の測定と熱放射の研究は物理学の２０世紀における大きな変革につながるものであった。	同上

＝ 基礎物理学Ⅱ ＝（R）

〔主任講師：戸田盛和（放送大学教授）〕

全体のねらい

物理学の基礎と人間の思考方法との関係を中心にしたい。なぜ科学へ導かれるのか、なぜ科学は常識をはなれていくのか、数学はなぜ必要なのか。空間と時間に対する考え方の変遷、物質と重力と宇宙に対する考え方の深まり、心と科学、科学と技術や社会の関わりなどについて、古典物理学の範囲で考察を加えたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	常識と科学 －科学の出発点	『自然はなぜ存在するか』といったいわゆる形而上学に属することを除外し、『自然の法則』だけを追求することにしたとき近代科学は出発することができた。	戸田盛和 （放送大学教授）
2	空間と時間 －地上から宇宙へ	ガリレイにおいては力学は地表の運動だけに限られていた。コペルニクス、ケプラー、ニュートンを経て恒星の集まりに対して静止した座標系が確立された。	同上
3	数学と物理学 －自然の数学的モデル	数学は人間の頭脳が作り出す論理的構造物である。数学が適用されるように自然をモデル化できたときに、その科学分野は大いに発展するようになる。	同上
4	物質変化と原子 －ミクロの世界へ	小さな原子と分子を考えることにより物質の物理的性質や化学反応などを説明できる。原子のモデルは太陽系について作られた重要なモデルである。	同上
5	温度と状態変化 －分子運動	原子・分子というモデルに力学を適用することにより、気体の性質が説明できる。そして温度は分子運動のはげしさの尺度であることが明らかにされる。	同上
6	エネルギーと熱量 －熱機関の効率	物質の分子的構造まで立ち入らずに、熱現象の間の関係を追求する学問が熱力学である。熱力学の法則は自然現象の多くが不可逆変化であることを学ぶ。	同上
7	決定論・確率・非可逆現象 －エントロピー－	不可逆変化を数量的に特徴づける量がエントロピーである。エントロピーの意味を分子論的に考察することにより、これが分子の配置の多様性の尺度であることがわかる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	電磁気学 ー場の概念	太陽系や分子の集団にニュートン力学を適用した成功は力学的自然観に導いたが、電磁現象は力学的モデルで理解できない。空間は電磁現象を伝える場であると考えられる。	戸田盛和 （放送大学教授）
9	物質の電磁気的性質 ― 物性物理と技術	金属と半導体や磁性体の性質は古典力学でなく量子力学で扱わなければならないが、古典物理学の範囲でも性質的に理解することができる。	同　上
10	光と物質 ―空間を伝わる波	光は波として空間を伝わる。光は物質によって散乱されたり、吸収されたりする。光を放射したり吸収するのは物質内の電子やイオンである。	同　上
11	地球と太陽 ー知識の統合	人間、地球、太陽などに対する好奇心は科学の出発点であり、科学の進展の各段階でたえず戻ってくる問いである。地球の構造、大陸の移動についても考察する。	同　上
12	光と相対性理論― 時空の概念の再考	空間を光が伝わるとき、これを高速で追いかけても光の速さはおそく見えず、同じ速さに見える。このことからニュートンの時間と空間の概念は修正されるに至った。	同　上
13	宇宙と一般相対性理論 ― 重力と時空	加速度系をすべて同等に扱う一般相対性理論では、ニュートンの万有引力の法則も、宇宙の概念も全く改められ、宇宙全体を物理学の研究対象とすることができる。	同　上
14	科学と創造 ― 科学をつくる頭脳	科学は熱心な努力によって進められるが、創造的なひらめきは突然の啓示のように与えられることが多い。そしてそれを育てる上で社会的環境が重要である。	同　上
15	個と全体 ― 科学的認識のかなた	科学の進歩は主に分析的な方法によってもたらされたが、生物の全体的な機能を研究したり、他の文化との関係を探めるには、全体論的な観点が必要である。	同　上

＝基　礎　化　学＝（TV）

〔主任講師：伊能　敬（武蔵大学教授）〕

全体のねらい

前半では化学という学問の対象である物質（その性質と変化）を究めるために必要な基礎知識を平易に述べる。

後半では応用面として化学がわれわれの日常生活や現代社会とどのようにかかわっているか。いくつかの角度から興味ある話題を取り上げる。初学者にも理解しやすいように、しかも可能な限り新しい情報を含め解説する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	化学とは (1) ～身のまわりの化学～	台所、自動車など、われわれの周辺にある親しみやすいものが、いかに化学とかかわっているか、実物と対応させながら化学におけるミクロな見方、考え方にはいりこんで行く。	綿抜邦彦 （東京大学教授）
2	化学とは (2) ～自然界に見られる化学変化～	自然界において、化学変化がどのような形で見い出せるか。化学変化イコール実験室、白衣、ビーカー、試薬瓶といったイメージを、ここで改めて見直す。	綿抜邦彦
3	物質の構造 ～物質は何からできているか～	固体物質の構造から発展させて、エネルギーと物質の不連続の問題、さらに原子の構造へとつないで行く。	同　上
4	原子の構造 ～陽子・中性子と電子～	原子を構成している電子、陽子、中性子の本性を調べ、さらに水素原子の構造、同位体、原子の電子構造などを明らかにする。電子の殻構造、価電子の数などの知識は、次章の理解に生かされる。	伊能　敬 （武蔵大学教授）
5	化学結合 ～価電子のはたらき～	いろいろな化合物の結合、特に結合のエネルギーや結合距離など、そこに認められる規則性などを概観したあと、結合はなぜできるかを考える。ここでは共有結合に重点をおいて話を進める。この理解が他の結合様式すべてを理解する上で必要だからである。	小谷正博 （学習院大学教授）
6	物質の三態 ～物質の状態変化はどのようにして起こるか～	気体の性質からはいって、液体、固体の特徴を明らかにし、それらの状態の相互変換について調べる。	綿抜邦彦
7	溶　液 (1) ～水のはたらき～	とくにすぐれた溶媒である水の性質から説き始めて、溶けるという現象、溶液の性質、純物質の液体との違いなどを学ぶ。	伊能　敬

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	溶液 (2) ～溶液からの離脱～	前章に続いて溶解と沈殿、蒸留、再結晶などに伴う諸現象を検討する。	伊能　敬
9	コロイド状態 ～中途はんぱな粒子～	物質の三態、正常な溶液から見れば、いろいろな意味ではんぱな状態にあるのがコロイドである。ところが、われわれを取り囲む自然界、衣食住を支える多くの物質が、実はそのコロイドの状態にある。	同　上
10	化学反応 (1) ～はやいかおそいか～	水素と酸素を一定割合に混合しただけでは反応しないが、点火すると一瞬にして爆発して反応が終る。鉄でもさびやすいもの、さびにくいものがある。いろいろな反応が、さまざまの反応速度を示す。その仕組みを調べてみよう。	田丸謹二 （東京理科大学教授）
11	化学反応 (2) ～連鎖反応と触媒作用～	水素と塩素との光化学反応は、ひとつの連鎖反応とは何かを調べ、これに関連した反応として触媒反応を説明する。	同　上
12	化学反応 (3) ～陽子・酸素・電子のやりとり～	酸と塩基、酸化・還元などの化学反応を、陽子、電子などのとり合いと平衡の立場から考える。	同　上
13	有機化学 (1) ～アルコールを中心として～	基礎化学の後半「化学と人間のかかわり」において活躍する有機化学関連の諸分野の話を理解するためにも、知っておかなければならない有機化学の基礎のうちこの章ではアルコールを中心に学ぶ。	務台　潔 （東京大学助教授）
14	有機化学 (2) ～カルボン酸を中心として～	前章に引き続き、カルボン酸とその誘導体を中心に学ぶ。	同　上
15	核化学 ～放射能とはどんなものか～	放射能とは何か。から始まって、核反応の表し方、人工核転換、核融合、原子力利用、放射性同位体など、核反応という他の化学分野と違う特異な領域について学ぶ。	綿抜邦彦

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
16	生命の化学　(1) ～生命は分子機械である～	生命は分子を部品とする機械である。細胞の主要部品としての核酸、タンパク質は、また何からできているのか。酵素の役割は何か。	大島泰郎 (東京工業大学教授)
17	生命の化学　(2) ～生命の歴史～	生命の起源から説き起こし、先カンブリア代における生命の歴史、酸素の歴史、分子進化という生物進化研究の新しい手段に至るまで、生命の歴史を追求する。	同　　上
18	食物と化学　(1) ～食物のエネルギー価～	生物が生命を保ち、生活現象を続けて行くためには、外界から物質を取り込み、生体に役立つように変化させるいわゆる栄養現象が不可欠である。五大栄養素とは何かを述べ、またエネルギー源食品のエネルギー値について考察する。	福場博保 （お茶の水女子大学教授）
19	食物と化学　(2) ～食品の色と味と香り～	私たちの食生活は、エネルギー源食品をカロリー計算の勘定合わせだけで与えられて満足するものではない。多くの食品の配合の妙を生かして、よりおいしく食べるのが私たち人類の特色ある食生活である。日常の食卓における色・味・香りを化学の面から解説する。	同　　上
20	生物のコントロール(1) ～天然物化学と生物活性物質～	天然物化学のあゆみを知るために日本における天然物研究者の足跡をたどる。生物活性物質の研究の現状と、植物の生活に関与するホルモンに触れる。	森　謙治 （東京大学教授）
21	生物のコントロール(2) ～生物活性物質研究の進歩～	天然有機化合物の構造決定法の進歩は、分析の微量化と切り離せない。生物活性物質研究の進歩について昆虫の生活に関与するホルモン、フェロモン、幻のオーキシンａなどの例によって解説する。	同　　上
22	化学と産業　(1) ～転換期にある化学工業～	学問としての化学は、いわゆる化学工業を成立させただけではなく、材料を媒介として他の産業分野にも貢献してきた。その歴史と現状を概観し、化学技術開発における指導原理の展開を探る。	平澤　冷 (東京大学助教授)
23	化学と産業　(2) ～高分子を例として～	素材や材料としての物質の開発には、その組成、分子構造のみならず、ミクロ、マクロな物質の構造、集合状態まで考慮する必要がある。合成高分子を例にしてニーズに適合する素材設計を考える。	同　　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	化学と産業　(3) ～どんなつくり 方があるか～	材料の開発はまたその合成法の開発でもある。設計された「物質の構成」を実現するためにどうアプローチするか。その指導原理を探る。	平　澤　　泠
25	化学と産業　(4) ～極限を 追求する～	物質の極限状態、または極限条件下における物質の性質を追求する過程で、画期的な新素材が生み出されている。新素材開発の動向と、それが産業に与える衝撃を予測し、化学工業の将来を展望する。	同　　上
26	エネルギー資源 (1) ～人類が利用し たエネルギー～	人類は火を利用することを知って、他の動物と異なる生活をするようになった。人類がこれまで利用してきたエネルギー資源を化学の立場から論述する。	綿　抜　邦　彦
27	エネルギー資源 (2) ～将来の エネルギー～	前章の化石エネルギーに替わるべき今後のエネルギーは何かを求め、原子力、地熱エネルギーについて解説する。	同　　上
28	化学と環境　(1) ～地球環境はど のように変遷 してきたのか～	太陽系の特異な一惑星としての美しい地球の環境の特色とくに水の果たす役割、大気の変遷、海水組成変動の歴史について述べる。	同　　上
29	化学と環境　(2) ～人類の活動と 地球環境～	人類が膨大な資源を消費し、膨大なエネルギーを使用するようになって、大自然の流れ、地球環境に影響がおよぶようになってきた。主として大気汚染を中心に、この問題を考えてみよう。	同　　上
30	再び化学とは ～分ける・つくる ・考える～	基礎化学の締めくくりとして、再び化学とは何かを問いかけ、化学における方法論を説明すると共に、今後の化学は専門家のみのものではなく、広く皆のものであることを説く。	伊　能　　敬

＝ 人 間 の 生 物 学 ＝　（TV）

〔主任講師：太田次郎（お茶の水女子大学教授）〕

全体のねらい

人間（ヒト）も生物の一種であることはいうまでもない。しかし、他の生物とは違ったいくつかの特徴を備えている。生物学の立場から、人間の形態や機能を調べ、人間とはどんな生物か、広く生物界に成り立つ法則性はどこまで人間に適用できるかなどを探り、科学的な人間像の理解をめざしたい。

回	テ ー マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	生物としての人間	全体の講義の導入として、人間（ヒト）は生物界でどんな位置を占めているのか、人体の特徴は何か、人間の脳は他の動物の脳とどこが違っているのかなどを概説し、生物学の立場で人間をとらえる視点を明らかにする。	太 田 次 郎（お茶の水女子大学教授）
2	人類の誕生と進化	生物の進化の歴史で、人間はいつ、どこで誕生したか、それはいかなる証拠で裏づけられるかなどを説明する。また、化石人類から現代人に至る進化の道筋をたどり、人類の誕生以後の進化の歴史を明らかにする。	同　上
3	人体の成り立ち	人体は、いかなる成り立ちであるかを、形態の面を中心に説明する。構成の単位となっている細胞の構造と機能、組織と器官の成り立ちとそれらの特徴を調べ、他の生物と比較する。また、人間の一生や老化についてもふれる。	同　上
4	血液とその働き	人体内の細胞は血液に浸され、血液は細胞・組織・器官の働きを支えている。血液の組成とそれぞれの成分の働き、血液循環のしくみ、腎臓での排出作用などを調べ、人体の働きにおける血液の役割を明らかにする。	同　上
5	脳と神経	人体における情報の伝達と統御にあづかる神経と脳の構造と機能を説明する。神経系の単位となるニューロンの構造、感覚器から脳へと情報が伝達されるしくみ、脳のつくりなどを調べる。また、脳とコンピュータとを比較する。	同　上
6	ホルモン	神経と共に人体の働きの調節にあづかるホルモンとは何か、その働きの特徴などを説明する。人体の各内分泌器とそれから分泌されるホルモンの種類、ホルモンの相互作用も調べる。他の動物のホルモンにもふれる。	同　上
7	行動	動物の行動としての本能、学習（刷り込みを含む）、知能の意義を、具体側を示しながら説明する。学習と知能を中心にして、他の動物の行動と比較しながら、人間の行動の特徴を、生物学の視点に立って考える。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	体内時計とバイオリズム	動物の行動に関して興味深い事柄の一つに、体内時計とそれに支配されるバイオリズムがある。人間を含めたいくつかの動物について、バイオリズムを調べ、それを支配している体内時計の特性を探っていく。	太田次郎
9	生殖と発生	人間を含めて多細胞動物は、1個の受精卵がもとになって発生し、成長する。代表的な動物の受精と発生の道筋を示し、それらと人間の発生との共通点や相違点を明らかにし、発生のしくみについての研究や成果を説明する。	同　上
10	遺伝Ⅰ	遺伝の法則、遺伝のもとになる遺伝子と染色体の関係、遺伝子の本体であるDNAの構造や働きについて説明する。特に、一般の生物に関して成り立つ遺伝の法則性が人間にどこまで適用できるかを明らかにする。	同　上
11	遺伝Ⅱ	双生児法を中心にして、人間のどの形質が遺伝し、どの形質が遺伝しないかを説明する。病気の遺伝、近親結婚の危険性、知能の遺伝に関する研究など、人間の遺伝の研究で特徴となる事柄をとり上げ、解説する。	同　上
12	個と集団	集団生活をしている動物では、1個体で生活している場合とは異なる法則性に支配されることがある。いくつかの動物の集団生活を調べて、そのしくみを探ると共に、それらと比較して、人間の集団生活の特徴を調べる。	同　上
13	自然と人間	自然界では、生物は自然環境と密接な関係を保ちながら生活している。そのような関係を説明し、その解析のしかたを明らかにすると共に、人間と自然との関係、生態系における人間の位置づけなどを明らかにする。	同　上
14	健康と病気	人間の生物学の特有の問題として、健康と病気をとり上げ、病気とは何かについて考察する。また、感染と免疫を中心にして、病気とその予防、治療などについて調べ、人間の生活における健康の意義を考える。	同　上
15	人間の未来	この講義のしめくくりとして、生物学の発達が未来の人間生活に与える問題点をとり上げる。体外受精、遺伝子工学、脳の機能の研究、人口問題などを例にして、人間の生物学の課題やそれに伴う問題点を説明する。	同　上

＝ 基礎生物学 ＝ （TV）

（主任講師：平本幸男（放送大学教授）
毛利秀雄（東京大学教授））

全体のねらい

生物学の分野では日々新たな発見が行われ、新しい概念が提出されている。また医学、農学、工学など応用分野との関係も深まっており、人類の将来に大きな影響を与えつつある。本講では、生物学の基本となる一般的事実や概念をできるだけ分り易く述べ、生命の探求がきわめて魅力に富んだものであることを伝えたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生物とは何か	細胞単位からなる生物／物質交代を行なう生物／増殖能のある生物／反応性を示す生物	山田晃弘（東京大学）
2	生物のつくり	生物の多様性／単細胞生物／多細胞生物／動物の組織／動物の器官／植物の組織・器官	平本幸男
3	生命の単位としての細胞	光学顕微鏡と電子顕微鏡／細胞の構造／細胞膜／細胞質／細胞分裂	同上
4	細胞小器官	膜と細胞小器官／核／小胞体／ゴルジ体／リソソーム／ミクロボディー／ミトコンドリア／葉緑体／ミトコンドリアと葉緑体におけるDNAとタンパク質合成／微小管／微小繊維／細胞小器官と細胞分化	同上
5	生体を構築する分子	生体高分子の成立／生体構築の単位分子／生体高分子／その他の重要な分子	山田晃弘
6	物質交代と酵素	酵素の本体／酵素の性質／固定化酵素／酵素の触媒する反応（酵素反応）／生体内の酵素／反応とエネルギー	同上
7	光合成	光合成の反応／光合成の明反応／暗反応／光呼吸／C_4－光合成／光合成と農業生産	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	発酵と解糖	発酵現象／発酵過程の研究／解糖過程の研究／ATPの発見／解糖と発酵の全貌／解糖のしくみ	山田晃弘
9	呼吸	内呼吸のしくみ／トリカルボン酸（TCA）回路／電子伝達系とATPの生産／呼吸のエネルギー効率	同上
10	太陽エネルギーと生物	植物の生産／地球上における植物生産／エネルギーの流れと物質循環／炭素と窒素の循環／自然界の炭素の循環／自然界の窒素の循環	同上
11	神経	個体内の情報伝達における神経の役割／神経系／ニューロン内での興奮の伝導／興奮の伝達／神経回路による情報の伝達	平本幸男
12	受容器	受容器（感覚細胞）／感覚受容のしくみ／機械受容器／光受容器／化学容器／温度受容器／電器受容器／感覚情報の統合と制御	同上
13	運動	生物の運動／筋肉運動／筋収縮のしくみ／神経による筋収縮の調節／アメーバ運動と原形質流動	同上
14	運動、発電、発光	真核生物の鞭毛・繊毛の運動／細菌の鞭毛運動／発電／発光	同上
15	ホルモン	ホルモンとは？／内分泌器官とホルモン／生殖現象に対する各種ホルモンの相互作用／ホルモンの作用機構	毛利秀雄

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	ホメオスタシス	恒常性の維持／自律神経系／血糖量の調節／体温の調節／浸透圧の調節	毛利秀雄
17	免疫	免疫系／抗体の構造と産生機構／細胞性免疫／免疫反応の応用	同上
18	染色体と遺伝	遺伝の染色体説／染色体とその構造／減数分裂／交叉と染色体地図／性染色体	石川統
19	遺伝の法則	対立遺伝子／優劣の法則と分離の法則／独立の法則／メンデルの法則とその後の遺伝学／ハーディ・ワインバーグの法則	同上
20	遺伝子	形質転換／DNAの構造と遺伝子／1遺伝子1酵素説／優性遺伝子と劣性遺伝子／RNAをコードする遺伝子／遺伝子でないDNA／遺伝子の複製／細胞質遺伝子／動きまわる遺伝子	同上
21	遺伝情報の発現Ⅰ	セントラル・ドグマ／RNAの種類／転写／RNAポリメラーゼ／プロモーター／転写産物の修飾と加工／遺伝子のイントロンとスプライシング	同上
22	遺伝情報の発現Ⅱ	tRNAとアンチコドン／アミノアシルtRNA／リボソーム／翻訳の開始／ポリペプチド鎖の伸長／翻訳の終了／実際のタンパク質合成	同上
23	遺伝子操作	制限酵素とDNAリガーゼ／組み換えDNAの作製と遺伝子のクローン化／遺伝子図書館／遺伝子工学／高等生物の遺伝子操作	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	性と生殖	無性生殖と有性生殖／性と性徴／世代交代と相核交代	毛利秀雄
25	受精	配偶子形成／接合／ウニの受精／哺乳類の受精	同上
26	初期発生	卵割／嚢胚（原腸胚）形成／中胚葉の形成と神経胚／器官形成／胚膜の形成	同上
27	分化と形態形成Ⅰ	モザイク卵と調節卵／勾配／誘導／細胞間の相互作用／核の役割	同上
28	分化と形態形成Ⅱ	植物の発生の特色／種子の形成と発芽／植物の栄養成長／植物の生殖成長／植物の寿命／植物の発生のしくみ	山田晃弘
29	分化と形態形成Ⅲ	分化・タンパク質・遺伝子／ガードンの実験／遺伝子の差次的発現と形態形成／遺伝子発現の調節と細胞分化	石川統
30	生命科学の展望	1　科学と技術 2　生命科学における新しい技術 遺伝子組み換え技術と細胞操作／胚の操作／無細胞系での生体反応／物理科学の発展に伴う新しい生命科学技術 3　技術の進歩に伴う生命科学の発展 基礎生命科学／工業生産／農業生産／環境問題／医療・保健問題 4　生命科学の展望	毛利秀雄 石川統

＝ 地球と宇宙（地球篇） ＝ （TV）

（主任講師；奈須紀幸（放送大学教授）
小尾信弥（放送大学教授））

全体のねらい

われわれの住む地球は宇宙の一員である。地球は固体地球とその上をおおう水圏および気圏よりなる。まず宇宙の中における地球の位置づけを認識し、ついで地球についての諸々の事象に探究の目を向ける。現在、われわれが目にする地球に加えて地球の歴史についても学ぶ。以上何れも基本・基礎的な立場に立って考究する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	宇宙の中の地球	地球は太陽系の中で水をたたえた唯一の惑星である。その太陽系は宇宙の中の銀河系に属する。日常われわれが意識する地球は巨大なスケールを持つものであるが、宇宙の中にあっては微小な存在である。このような宇宙の中における地球の位置づけを認識する。	奈須紀幸（放送大学教授） 小尾信弥（放送大学教授）
2	地球の層圏	地球は気圏・水圏・固体地球の3圏よりなる。それぞれの圏は、さらに幾つかの層圏に分れている。これら地球の層圏について、現在までに知られている知識の内容を学ぶ。	奈須紀幸
3	地球科学の発展	当然のことながら、人類は太古の昔より大地について様々な思索を行なってきた。そして長い年月をかけて地球の本質を解明し、その実像に迫ってきた。そのような地球科学の発展の経緯について学ぶ。	同上
4	大気	気圏を構成する主体は大気である。太陽エネルギーは大気に対し大きな運動を行なう原動力を与える。大気の大循環、気圧、風、前線など大気のダイナミクスについて学ぶ。また天気や気候についても学ぶ。	同上
5	海洋	水圏を構成する水分の大部分は海洋にたくわえられている。海水は流体であるので絶えず動き易いという本質を持つ、海流、潮流、波浪など、いづれも海水の流動のあらわれである。これらの事項について学ぶ。また海底のもつ本質についても学ぶ。	同上
6	固体地球	固体地球は層状構造をもつ、地表から地心へ向って地殻、マントル、外核、内核よりなる。地殻とマントル上層の一部はプレートとして地球表層の固い部分を構成する。このプレートは動いている。これらについて学ぶ。さらに重力と地磁気についても学ぶ。	同上
7	岩石と鉱物	地殻やプレートを構成する単位は種々の鉱物であり、1種または多種の鉱物の集合体が岩石である。岩石は主として造岩鉱物で構成される。岩石は火成岩、堆積岩、変成岩に3大別される。これらのことがらについて学ぶ。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	地層	堆積物は固化して堆積岩となる。堆積物や堆積岩は水平的なひろがりをもつ地層を形成する。地層の中にはよく化石を含む。地層の層序と対比は重要である。地層は変形して断層や褶曲を示すことがある。また整合、不整合関係を示すことがある。これらについて学ぶ。	奈須紀章
9	地質時代	地球上に水がたたえられるようになってから地表における物質の循環がはじまり堆積岩が形成された。それから以後を地質時代という。対年代、絶対年代を用いて地質時代の実体は解明された。これらのことについて学ぶ。また地質図についても学ぶ。	同上
10	固体地球の表層	固体地球表層の実体とその変遷の歴史については１９世紀後半より解明が大いに進んだ。ゴードワナ大陸、大陸移動説の提唱から古地磁気研究の結果による大陸移動説の復活、中火海嶺系の発見。大洋底拡大説の提唱へと時間経過を追って学ぶ。	同上
11	プレートテクトニクス	大洋底拡大説は数年後プレートテクトニクス説へ進展した。その間に大洋底地磁気異常の縞模様の発見、トランスフォーム断層の提唱、ホットスポット説の提唱があった。これらはプレートテクトニクス説の中でも生かされた。これらの事項について学ぶ。	同上
12	地震	大洋底拡大説およびプレートテクトニクス説が提唱されてから、それらとの関係で地震発生のメカニズムが随分と明らかになってきた。これらの事情について学ぶ。また地震の種類、規模、震度などについて学ぶ。	同上
13	火山	プレート境界にはよく火山が形成される。とくに活動縁辺域であるプレートの潜没帯は火山帯をともなう。さらに中央海嶺系やホットスポットには火山が形成されやすい。このような火山の形成の過程について学ぶ。さらに火山の種類について学ぶ。	同上
14	地球の歴史	地球の創生以来の歴史は近年随分とよく解明されてきた。地質時代以前、それから地質時代に入って生物の発生と進化をともなう地表の変遷の歴史は多彩を極める。先カンブリア時代、古生代、中生代、新生代を通じてこうした地球の変遷の歴史を学ぶ。	同上
15	日本列島	日本列島は大局的には太平洋プレートがユーラシアプレートの下へ潜没する変動帯に位置する。これは現状である。この点についてまず学ぶ。ついで日本列島の地史について学ぶ。さらに地下資源について学ぶ。	同上

＝ 地 球 と 宇 宙 （宇宙編） ＝ （TV）

〔主任講師：小尾信弥（放送大学教授）
奈須紀幸（放送大学教授）〕

全体のねらい

地球と宇宙という私たちの自然環境を学ぶ科目のなかで、ここでは宇宙について学ぶ。人間の宇宙観の歴史に始まって、太陽系や恒星、銀河系や銀河について学習した後に、宇宙全体の構造や進化、そして最後に地球を含む太陽系の起源を学んで地球編につなぐ。全体を定量的に扱うわけではないが、可能な限り事柄を量的に理解させる。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	天文学の歴史 I	天文学は最も古く興った科学の1つである。ここではギリシアの王子学から16～17世紀における太陽系の確立、それに続く古典天文学の発展や恒星天文学の誕生、さらに天体分光学から天体物理学が始まる19世紀末までを扱う。	小尾信弥（放送大学教授）
2	〃 II	今世紀に入って天文学は面目を一新して、大反射鏡の建造、新しい物理学による物質観や時空観の革新、電源観測や宇宙開発、コンピュータなどの技術開発によって、天文学も大きく発展し、人間の宇宙観も一新した。それらの過程と成果を学ぶ。	同 上
3	現代の天体観測	ケプラーの法則からビッグバン宇宙の検証まで、宇宙の知識は宇宙の観測にもとづいている。今日では、光学観測ばかりでなく電波観測や大気圏内の観測が重要な位置をしめているが、それら種々の観測を概観し、また分光観測など観測の再本についても学ぶ。	同 上
4	太陽系の運動	惑星は距離が近いため明るく見え、その動きも古くから観測され、占星術が興り、天動説や地動説が唱えられ、ニュートンに至って力学的な太陽系像が確立して、ここでは太陽系における運動の典型的なものとして、惑星の運動について学ぶ。	同 上
5	太陽系の天体	惑星や小惑星、衛星、隕石、彗星や流星物質など太陽を回る無数の天体は、呼び名が異なるように、大きさや外観、組織などをはじめとする性質に大きな違いが見られる。ここでは惑星をはじめ太陽系の主要な天体について学ぶ。	同 上
6	太 陽	太陽系の中心である太陽はふつうの恒星であるが、距離が近いため、表面の現象がその変化が観測できる唯一の恒星である。恒星に関する知識のかなりのものは、太陽の観測や研究が基礎になっているし、また地球に大きな影響をもつ点でも極めて重要な天体である。	同 上
7	恒 星 I	自分でエネルギーを放って輝いている点で、恒星は太陽と同種の天体がある。しかし、質量や半径、光度は広い範囲にわたっている。恒星についての種々の性質を知る手段は、その結果について学ぶ。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	恒　星　II	恒星の分光観測によって、表面の温度や化学組成をはじめ恒星についての多くの情報を得ることができる。ここでは分光観測の原理からそのの成果まで学び、また光度や表面温度、質量など個々の性質の間にみられる統計的な関係についても学ぶ。	小尾信弥
9	恒星の変化	恒星は星間雲のなかで誕生した、質量によって異なる寿命を終る。その間で主系列星や巨星、超巨星など特徴の大きく異なる状態を終る。また寿命を終る際も、質量により様相を異なる。ここでは進化を研究する原理から、進化の各段階の特徴を学ぶ。	同　上
10	銀河系の天体	銀河系には新星や超新星などの変わった天体や、星団のような恒星集団も見られる。また星間には星間物質や星間雲、さらに電波天体やX線天体なども見られる。これら銀河系の各種の天体について学ぶ。	同　上
11	銀河系の構造	われわれのまわりの恒星は、星間物質や星間雲とともに直径が約8万光年の薄い円盤状の集団をつくっている。これが銀河系である。ここでは銀河系の構造の歴史を概観した後で電波天体などで明らかにされ、銀河系の構造や運動、また銀河系天体の特作について学ぶ。	同　上
12	銀河の世界	銀河系の外には、銀河系と対等な別な銀河が無数に観測されている。これらの銀河の距離や大きさ、質量、さらに型などについて学ぶ。さらに、厘時銀河やクコー・リーなど特異な銀河や銀河集団について学ぶ。	同　上
13	宇宙の構造	宇宙の全体的な特徴をまとめて概観したあとで、相対論的宇宙論の基礎になっているフリードマンのモデルについて学ぶ。またフリードマンにモデルに基づく膨張宇宙の構造について学ぶ。	同　上
14	宇宙の進化	フリードマンのモデルに物質と放射を導入して得られる進化宇宙論を中心に学ぶ。3K宇宙背景放射に基づいて宇宙に転期のあったこと、またビックバン初期の宇宙の進化についても学ぶ。宇宙の未来についても述べる。	同　上
15	宇宙の進化と地球	宇宙で物質が優勢となった後に、銀河や恒星のような現在われわれが観測する天体が形成され、進化した。その過程のなかで、現在の宇宙に見られる元素も進化した、そのなかで地球をはじめとする太陽系の天体が形成された過程についても学ぶ。	同　上

＝ 日 本 の 自 然 ＝　（TV）

〔主任講師：奈須紀幸（放送大学教授）
　　西川　治（立正大学教授）〕

全体のねらい

日本の自然の姿を、いろいろな視点から眺めてみる。とくに、住民の地形・気候・水文・生物、ないし自然的環境とのかかわり方、日本人の自然観や自然保全等について生態的、歴史的、地域的に考察して、日本列島の自然的特色を総観する。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	内外から見た日本の自然	1　変容した自然景 2　自然景の特色 3　外国人のみた日本の風景	西川　治 （立正大学教授）
2	日本人の自然観とその変遷	1　伝統的自然観の再検討 2　相反する二つの自然観 3　自然観の比較論	同　上
3	日本の地質	1　地質の基礎知識 2　日本列島の地質構造 3　プレートの動きと日本列島 4　日本列島の変成帯 5　日本列島の地史	奈須紀幸
4	日本の地形的特色	1　島国としての地形の特色 2　山国としての地形の特色 3　平野と盆地の地形 4　地形の環境論的意義	式　正英 （お茶の水女子大学教授）
5	日本の地域環境と生活 ― 地形環境と開田史	1　土地の使い分け 2　地形環境と開田史 3　地形面をはい上がる開田史 4　人工水系による景観変化	西川　治
6	日本列島の気候の特色	1　世界的視野からみた気候の特色 2　季節の成り立ち 3　冬 4　梅雨季と盛夏 5　秋霖・台風季	前島郁雄 （東京都立大学教授）
7	日本の気候環境と生活	1　亜熱帯から亜寒帯へ 2　顕著な季節変化 3　作物栽培と気候 4　雪と生活 5　気象災害	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	日本の水文環境	1　水に恵まれた日本 2　日本人と水 3　水利用と環境問題	槻根　勇 （筑波大学教授）
9	日本の森林と文化	1　日本の植生分布 2　日本の森林と文化	大沢雅彦 （千葉大学教授）
10	日本の植生景観とその調査法	1　植生帯状分布の調査 2　微地形分布と土壌・植生調査	大沢雅彦 武内和彦 （東京大学助教授）
11	日本の動物と生活	1　動物の分布をきめる自然条件 2　過去の日本列島における動物分布 3　縄文時代の生活と動物 4　日本列島周辺の海生動物 5　陸上生物 6　日本列島における鳥の分布 7　動物分布と人間の生活	濱田隆士 （東京大学教授） 樋口廣芳
12	日本の海岸	1　海岸の大別 2　日本の海岸 3　特殊な海岸 4　流水の浸食・運搬・堆積作用 5　海岸に働く営力 6　日本の海岸の例示	奈須紀幸
13	日本の海	1　日本の海 2　日本の周辺の海水 3　日本周辺の海底 4　日本周辺の大陸棚	同上
14	日本の自然	1　自然災害　　3　平野と高潮洪水 2　災害発生の素因としての日本の自然 4　平野と河川洪水　　5　平野と内水洪水 6　津波災害　　7　山崩れ、地滑り 8　火山災害　　9　地震災害 10　自然災害対策としての自然環境認識の重要性	大矢雅彦 （早稲田大学教授）
15	自然の利用と保全	1　自然の再認識 2　日本における自然保全の先覚者 3　自然災害と防災対策 4　景勝地の保全運動	西川　治

＝ 自 然 系 実 験 ＝　（TV）

― 科学的な考え方と進め方 ―

〔主任講師：宮代彰一（放送大学教授）〕

全体のねらい

多くの自然科学（ひろく理工学ととらえる）における実験というものを　りあげ、これらを横断して眺め、そこに共通した考え方や手法を抜き出してきて勉強してみたい。各テーマ（章）において、それぞれの趣旨に沿って、できるだけ色々な科学の分野からの実験や実例を引用、提示する。なお本科目の面接授業ではいくつかの実験を学生が自ら行えるようにする。

は放送番組における主な実験や見学　Ⓖ＝ゲスト

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	序　　論 （科学と実験）	・科学における実験の意義 ・実証科学のおこり；近代物理、化学、生物学の成立の歴史における例 ・実験（科学）の限界；再現性 ・実験の分野；基礎科学と応用科学	宮　代　彰　一 （放送大学教授）
2	企　画　・　計　画	・問題の把握、発見がまず最初 ・その手法；ＢＳ法やＫＪ法、整理による発見 ・計画性について、その手法；フローチャートやPERT法 ・計画をすすめる上での二、三の問題	宮　代　彰　一 Ⓖ宮　尾　　亘 （東芝技術管理部 慶応大学講師）
3	情　報　・　文　献	・科学は情報の拡大再生産 ・科学技術情報の所在とその形 ・文献の種類、その膨大な量 ・研究の各段階と調査のあり方 ・情報の検索の方法、機械検索	宮　代　彰　一
4	実　験　の　心　得 （実験の準備）	・現象をうけとめる人間の感覚 ・学習実験と研究実験 ・機器の理解、ブラックボックスへの対応 ・実験の記録、ノート ・装置の作成、工作、材料について	遠　山　紘　司 （放送大学助教授）
5	実　験　の　心　得 （安　全　性）	・実験は危険と背中合わせ ・危険の分類、素因と誘因 ・危険な化学薬品、装置、設備、器具 ・安全のための基本的注意と実験のマナー ・事故をおこしたら	渡　辺　徳　子 （放送大学助教授）
6	整　理　と　分　類	・整理は事物の把握の基本 ・データの整理、周期律表、グラフ表示 ・試料の整理；各種標本などの例 ・考え方の整理 ・分類と分類学、分類の階級、学名	遠　山　紘　司
7	単　位　・　標　準	・単位と標準は定量化の基盤 ・物理量と単位、次元 ・のぞましい単位系、国際単位系（ＳＩ） ・物理定数・７つの基本単位と標準 ・慣用の単位とＳＩ	大　井　みさほ （通産省工技院 計量研究所）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	観察と測定	• 自然をよく観ることと測ること • 観察の例、野外観察 • 機器を用いた観察、例として顕微鏡 • 直接測定と間接測定 • 測定結果の表し方、図表化、実験式	宮代彰一 遠山紘司
9	誤差と精度	• 測定には不確かさが伴う • 絶対誤差と相対誤差 • 測定精度のバランス • 系統誤差と偶然誤差、ガウス分布 • データの処理、最小二乗法 • 妥当な測定；硬度と精度（二法）	冨永靖徳 （お茶の水女子大学助教授）
10	測定とゆらぎ	• 測定対象自体のあいまいさについて • 放射線測定におけるばらつき、ポアッソン分布 • 情報と雑音；熱雑音 • みえるゆらぎ • 誤差とゆらぎ；ゆらぎの中にも法則性をみる	同上
11	電気計測	• 実験にかかせない電気・電子的手法 • 電気の量と測定、偏位法と零位法 • 指示計器・測定点 • 受動素子と能動素子、トランジスタ • 変化する量の測定；オシロスコープ	田中清臣 （電気通信大学助教授）
12	数値計算とシミュレーション	• 実験と数値計算的方法と電子計算機 • πの実測と計算；モンテカルロ法、数値積分法など • シミュレーション、モデル化、減衰振動 • コンピュータ・アニメーション、データ爆発	同上
13	電子計算機の応用	• 電算機の実験研究への利用、そしてとくに、観測・制御への応用 • 実験システムの自動化 • 離散的な量、2進数、量子化と標本化 • インターフェース；センサなど	同上
14	報告	• 研究や実験は報告で仕上がる • 学習（学生）実験でのレポート • 報告（論文）の組立て • よい報告とは（内容上、表現上） • 各種の技術報告、特許という形の報告	宮代彰一
15	しめくくり		同上

＝　心　理　学　＝　（TV）

〔主任講師：大山　正（日本大学教授）
　　託摩武俊（東京都立大学教授）〕

全体のねらい

人の心と行動のはたらきを理解するために、まず、人が環境の状態と感覚を通して知り、それによって得た情報を処理して、自分の要求の実現に役立てていく過程を考えてみる。つぎに、このような人の心と行動が、子供から大人へと発達していく過程において、いかに変化していくか、また個人個人によりどのように違うかについて述べる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	心理学とは	心理学とは何かについて、２回以降の内容を説明しながら具体的に述べ、つぎに心理学の課題対象方法などをめぐって、歴史的発展の過程と現況を述べる。	大山　正（日本大学教授） 託摩武俊（東京都立大学教授）
2	環境の認知Ⅰ 感覚	人間が環境の中で生活し行動し、環境に適応していくためには、まず環境の状況を把握する必要がある。その手段としての感覚の特性について考える。	大山　正
3	環境の認知Ⅱ 知覚	われわれが環境の状況を見、聞き、感じる場合、それは単なる感覚のよせあつめでも外界の忠実な反映でもない。この観点から知覚の法則、錯覚、空間と運動の知覚について述べる。	同　上
4	情報の処理Ⅰ 注意と探索	われわれが日々接している情報の量はきわめて膨大であるが、われわれはその一部しか利用していない。この観点から注意と知覚的探索について述べる。	大山　正 御領　謙（千葉大学教授）
5	情報の処理Ⅱ 記憶	人間が利用している情報のかなりの部分は記憶として保存されている過去の情報である。この記憶の成立、保持、検索、変容などについて述べる。	大山　正 小谷津孝明（慶応義塾大学教授）
6	情報の処理Ⅲ 思考と言語	選択され、検索された情報を用いて、ある目的のために、人が問題を解決していく過程が、思考である。その際には、人々が長年にわたり作り上げ、個人が幼時より習得してきた言語の体系が大きな役わりを演ずる。	大山　正 大村彰道（東京大学助教授）
7	経験の効果学習	多くの生物とともに人間は、過去の多くの経験によって、行動の習慣を獲得し、変容している。この学習の過程を、条件づけの原理に基づいて考えてみる。	大山　正 片桐雅義（宇都宮大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	要求と感情	人が行動を起こすのは何らかの要求にもとづいている。要求には、多くの動物と共通している生物的要求と、人間の社会生活にもとづく社会的要求がある。また、これらの要求が実現される過程にさまざまの感情と情動が生じる。	大山　正 託摩武俊
9	心の発達Ⅰ 乳児期・幼児期	他の動物に比べて、人には本能的行動が少なく豊かな可塑性をもって生れてくる。赤ちゃんがまわりの人々とのかかわり合いの中でどのように成長していくか、幼児期の心の特徴はどのようなところにあるかについて述べる。	託摩武俊 柏木恵子 （東京女子大学教授）
10	心の発達Ⅱ 青年期から老年期	青年期から成人期、老人期にかけての心の変化、とくに他人との関係、自分自身についての考え方や感じ方の変化について述べ、さらに現代のわが国の青年の特徴や、高齢者の諸問題についても言及する。	託摩武俊
11	個人差Ⅰ 知能	知能とは何か、知能にはどんな働きがあるのか、知能はどんな構造をもっているのか、知能の測定は可能か、天才とは何かなどについて述べる。	託摩武俊 伊藤隆三 （横浜市立大学教授）
12	個人差Ⅱ 性格	性格に認められる多様な個人差の形成過程、性格の類型、性格の測定法、性格の認知、性格の好き・嫌いなどについて述べる。	託摩武俊
13	社会的行動	人はつねに他人とのかかわりをもって生きている。個人と集団との関係、他人に対する態度の形成過程、人と人との距離感、人間関係にみられる日本人の特徴などについて述べる。	託摩武俊 永田良昭 （学習院大学教授）
14	心の異常	精神病、神経症、性的倒錯、非行、自殺などの実態、現在の特色、これらの原因、対策などを取り上げる。	託摩武俊 福島　章 （上智大学教授）
15	心理学の応用	現在の心理学は個人の生活とも社会の諸事象とも密接に関係している。心理学の研究成果や研究法が実際にどのように応用されているかを実例をあげながら述べる。	託摩武俊 大山　正

＝ 近代の思想 ＝ （R）

〔主任講師：中埜　肇（放送大学教授）〕

全体のねらい

近代というものをある時間的な長さをもつひとつの思想的な構造体と見なし、その内実を神・人間・自然という3つの主題にもとづいて分析する。講義の対象は主として西欧の近代であるが、できるかぎり世界全体に及ぶ普遍的な視角をも忘れないようにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	「近代」の概念(1) 思想としての近代	「近代」という概念を精密に検討し、それにまつわる問題点を指摘し、かつ近代をひとつの思想と考え、その内容について考える。	中埜　肇 （放送大学教授） 湯川　佳一郎 （法政大学教授）
2	「近代」の概念(2) 中世と近代	近代はその出発において中世に対する明確な対立を意識していたが、その対立の本質を具体的に考察する。	同上
3	近代における「神」の概念(1) 近代初頭の宗教・哲学・科学の関わり	ルネサンスから17世紀までのキリスト教信仰を、哲学思や自然科学との関わりのなかで考える。	同上
4	近代における「神」の概念(2) 近代における宗教運動	宗教改革・神秘思想・ピューリタニズム・ピエティズム・ジャンセニズムなどの宗教運動を近代人が提示した信仰の内面化としてとらえ、その思想的な意味をさぐる。	同上
5	近代における「神」の概念(3) 啓蒙思想と宗教	啓蒙思想によって変容させられた宗教の様相を理神論や無神論について考える。	同上
6	近代における「神」の概念(4) ロマン主義と宗教	19世紀におけるロマン主義の流れのなかで試みられた哲学と宗教との統合を「理性宗教」について考察する。	同上
7	近代における人間像(1) 新しい人間	近代の出発点において理念的・現実的に形成された新しい人間の像を具体的な例示にもとづいて概観する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	近代における人間像(2) 「心」の優越	近代の思想全体にわたって「心」・「精神」・「自我」・「意識」が優越していたことを、主として哲学の流れのなかでとらえる。	中埜肇 湯川佳一郎
9	近代における人間像(3) 市民社会	近代人の社会性の凝縮的表現とも言うべき市民社会の思想的な意味について考える。	同上
10	近代における人間像(4) 国家と歴史	「近代国家」と呼ばれるものの思想的な基礎と、ロマン主義のもとで拡大した「歴史意識」の思想上の意義を検討する。	同上
11	近代における自然観(1) 近代的自然観の特質	近代になって成立した新しい自然像・宇宙像の思想的な意味を考察する。	同上
12	近代における自然観(2) 自然科学の成立と自然哲学	「自然科学」の思想的な基礎および近代になっても生き続ける「自然哲学」と自然科学との関係を論ずる。	同上
13	近代における自然観(3) 人間的自然と自然法	「人間的自然」（human nature）の自覚にもとづく思想の展開と、それに由来する近代自然法について述べる。	同上
14	近代における自然観(4) ロマン主義の自然概念	ロマン主義が構想した「生きた自然」や美的・目的論的自然の思想について、その否定的・肯定的な意味を考える。	同上
15	近代と現代	現代は近代の「死」から生れたと言われる。その「死」の意味と現代の持つ思想的な特質や問題点とを考察する。	同上

＝　記　号　論　＝　（R）

〔主任講師：吉田夏彦（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

論理学の成果にもとづいて記号の役割についてのべることに第一の重点をおき、ついで、より広い見地から記号について論じ、哲学と記号論との関係についてものべる。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	はじめに	「記号」ということばの意味について論ずることから始め、記号と人間の生活とのあいだにきわめて密接な関係のあることを種々の例をあげながら語る。	吉田夏彦（東京工業大学教授）
2	せまい意味での記号	道路標識、数学の記号、化学記号、など、ふつう記号の典型と考えられているものについて、その発生、意義についてのべる。	同　上
3	論理記号	やはりせまい意味での記号と考えられている論理記号を紹介する。	同　上
4	理論の形式化	論理記号により、数学の概念の定義、証明が形式化できることについてのべる。	同　上
5	記号のあらわすもの	4を受け、形式化された体系とモデルとの関係についてのべる。	同　上
6	記号としての数学	さまざまな現象の記述に数学がもちいられていることの意味を論じ、記号が、対象となっている現象と数学的な構造との橋わたしとなっていることについてのべる。	同　上
7	フィクションと記号①	いまだ特定の現象の記述にはもちいられず、その意味では待機の姿勢にある数学の理論がそれ自体の興味のために研究されていることを例として、フィクションと記号との関係についてのべる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	フィクションと記号②	文学作品、ひいては芸術作品を例として、フィクションと記号との関係についてのべる。	吉田夏彦
9	論理主義批判①	3－7にのべたような見地からの記号論について、それは論理学というかぎられた領域での成果から一般論をひきだすもので、あやまりだとする批判がある。そのような批判の当否について論ずる。	同上
10	論理主義批判②	前回のつづき。	同上
11	記号と世界①	現代の社会生活が、記号をとおしてのみ世界と接触するよう強制しているようにみえるという状況を、狭義の記号との関連で論ずる。	同上
12	記号と世界②	前回の問題を、ひろい意味での記号との関連で論ずる。	同上
13	記号としての人間	人間が記号としてはたらいている局面があることを、演技という概念との関連で論ずる。	同上
14	事物自体	記号からはなれて事物自体を直接知ることができるかどうかという問題を論ずる。	同上
15	終わりに	前回までにのべたことをふりかえりながら、哲学と記号論との異同について論ずる。	同上

＝ 世界歴史と国際交流 ＝（Ｒ）

― 東アジアと日本 ―

〔主任講師：田中健夫（東洋大学教授）〕

全体のねらい

現代の世界は多くの民族によって構成される多くの国家群に分裂している。これまでの歴史研究・歴史叙述は民族や国家の枠組みのなかで行われるのが普通であったが、それから離れた広い視野から歴史をみなおすことはできないだろうか。日本の歴史を東アジアの歴史のなかで、それとの関連において再検討してみたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	海から歴史をみる	「海国日本」という言葉があるが、果たして日本はふるくから海国だったのであろうか。日本人は海に対してどのような思いをいだいていたのか、またどんな対応をしてきたのか。海の日本人に対する影響はなんであったか等の諸問題を考える。	田中健夫（東洋大学教授）
2	古代日本列島をめぐる国際的環境	日本は、倭国・倭人とよばれる時代から、東アジアの一員として、中国や朝鮮と密接な交流を持ち、その影響を受けながら、次第に国家としての形をととのえていく。その推移について、東アジアにおける国際交流の展開を軸に考えてみたい。	石井正敏（中央大学助教授）
3	遣隋使・遣唐使と文化交流	中国で隋・唐が、律令を基礎に中央集権国家を築き、高度の文化を開花させると、日本は積極的に先進文物の輸入に努めた。ここでは、政治・文化に重要な役割を果たした遣隋使・遣唐使の行動を中心に、朝鮮半島の動向を視野にいれて国際交流の様相を見る。	同上
4	中国社会の発展と日宋交流	唐が滅び、五代十国の時代を経て宋が中国を再統一すると、国内の商業・経済が発展し、日本や高麗との海外貿易も盛んに展開されるようになった。この日本・宋・高麗間の交流が、日本の社会・経済・文化にどのような影響をもたらしたかを考えてみる。	同上
5	中世日本の内と外	中世の日本人は、日本をどのようなひろがりとして認識していたか。その空間の内と外および境界は、どんな性格を帯びた場だったか。逆にアジアの人びとは日本をどんな眼で見ていたのか。境界を活動の場として内と外とを媒介した人びとの行動にも注目したい。	村井章介（東京大学助教授）
6	モンゴルの興起と国際関係の変貌	日本の前近代では稀有の経験だった蒙古襲来を、アジア規模の視野から把えなおす。侵略を蒙った諸国（南宋・高麗・ベトナム・ジャワ・日本等）の運命の共通性と差異。また夷秋が中華の主となったことが、国際関係にどんな変貌をもたらしたかを考える。	同上
7	倭寇の活動とその本質	１４世紀から１５世紀にかけ、朝鮮半島を中心に倭寇とよばれた集団が猛威をふるった。倭寇の構成員、その行動の様相、行動の舞台、大規模化の理由などを検討して、これまで通説とされていた倭寇像を修正し、東アジア海域で演じた倭寇の活動の歴史的意義を考える。	田中健夫

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	東アジア通交圏の成立	中国大陸で明帝国が起こり、漢民族支配が回復すると、周辺の諸国に朝貢をよびかけた。日本・朝鮮・琉球等はこれに応じて使節を送り、東アジアには新しい通交の秩序が形成された。ここでは室町政権の対明通交や新興貿易商人の活動を中心に述べる。	田中健夫
9	琉球王国の発展とヨーロッパ人のアジア進出	15世紀の初め尚王統が琉球王国の統一を完成し、明に入貢するとともに日本・朝鮮・南方諸地域に貿易船を派遣して多彩な海外活動を展開した。一方、東アジア海域に登場したヨーロッパ人は中国僑商や琉球人と接触しながら北上し、やがて日本に到達する。	同上
10	豊臣秀吉の朝鮮侵略	東アジア世界の征服をめざした秀吉の朝鮮侵略について、(1)1592年の侵略にいたるまで、(2)1592年から翌年までの第1次侵略（文祿の役）、(3)1593年から'96年までの日明講和交渉とその破綻、(4)1597年から'98年までの第2次侵略（慶長の役）を再検討する。	北島万次（高崎経済大学教授）
11	豊臣政権の世界認識とアジア外交	秀吉は、「日本は神国」であるとして宣教師追放令をだし、「日輪の子」であると称して朝鮮の服属を強要した。この「日本は神国」「日輪の子」の論理を軸として、秀吉は東アジア諸国および南蛮諸国と通交関係を持とうとした。	同上
12	鎖国の再検討	近世日本の対外関係のあり方を「鎖国」とよぶことが定着して久しいが、実態に即してみると、同時代の中国・朝鮮などの「海禁」政策と同じ類型と考えられる。その観点から「鎖国」概念を再検討し、近世日本の対外関係の特質を、東アジアとの関連で考える。	荒野泰典（立教大学助教授）
13	「日本型華夷秩序」の成立と展開	近世日本は、長崎・薩摩・対馬・松前でそれぞれ隣接する異国・異民族と恒常的な関係を結ぶとともに、それぞれの関係を、自らを「華」とし、他を「夷」として「華夷主義」的に編成していた（日本型華夷秩序）。ここでは、その秩序の成立と展開について述べる。	同上
14	幕末・維新期の国際関係	多彩な幕末・維新期の国際関係のうち、ヨーロッパ的、近代的な外交体制の創立と、それ以前の東アジア的、伝統的な対外関係のあり方との相克に焦点を絞り、日朝関係を中心に、日本の対外関係の近代化が、同時にアジアに対する侵略を随伴する理由を考える。	同上
15	東アジアにおける国際相互認識	人と物との交流の歴史を通じて、東アジアの諸国家間にはそれぞれ異なった国際認識が生まれた。文化的落差・経済的需給関係・軍事的緊張等を反映したものであるが、地域別に(1)中華型、(2)中国周辺型、(3)島嶼孤立型に分け、その特質を考えてみる。	田中健夫

＝ 憲 法 概 論 ＝ （TV）

〔主任講師：樋口陽一（東京大学教授）〕

全体のねらい

近代憲法発展史の流れの中では日本国憲法を理解し、その主要な諸条項の意味を明らかにするとともに、憲法運用のなかで提起されている法的な問題点について考える。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	はじめに ― 「憲法」というコトバを手がかりに	「実質的意味の憲法」「形式的意味の憲法」「立憲的・近代的意味の憲法」という。一見無味乾燥な定義ふうの説明を手がかりにして、それらの背後にあるゆたかな意味あいに、国にむけることからはじめる。	樋口陽一（東京大学教授）
2	「人類普通の原理」としての近代的意味の憲法	「個人の尊厳」を骨格とする近代的意味の憲法の原理が、「人類普通の原理」（前文）といわれることの意味を、大きな歴史の流れの中で位置づける。	同 上
3	近代日本のあゆみと憲法	幕末の開国から1945年の敗戦までの近代日本のあゆみを、第2講でいう意味での憲法をめぐる曲折という角度から、あとづける。	同 上
4	日本国憲法のなりたちと基本原理	敗戦をきっかけとした日本国憲法のなりたちをふりかえって、問題点を考える。あわせて、国民主権・人権保障・平和主義の三大原理の意味を考える。	同 上
5	国民主権と象徴天皇制	国民主権原理のもつ意味を、112憲法の天皇中心主義を否定するものとしての側面について、明らかにする。	同 上
6	国民主権と選挙	国民主権原理のもとで選挙に託される役割を、明らかにする。	同 上
7	国民主権と権力分立 ― 国会と内閣	国民が主権者だといっても、その国民の意思は、権力分立のしくみを通して表明される。国会と内閣のしくみを中心に、政治部門のあり方を見る。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	国民主権と権力分立 ― 裁判所	権力分立にとって、とりわけ重要な、裁判の独立と、裁判所による憲審査について考える。	樋口陽一
9	国民主権と権力分立 ― 地方自治	地方自治、さらにはより一般的に、分権型民主主義のもつ意味について考える。	同　上
10	人権の基本理念 ― 個人の尊重	人権という考え方の根本にある個人の尊重、それとの関連で平等の問題を考える。「人権の限界」といわれている問題についての、あるべき考え方も探る。	同　上
11	人権 ― 精神的自由と経済的自由	人権のなかでも中心的な位置を占めてきた「国家からの自由」について、精神的自由と経済的自由の相異点をも考慮に入れながら、検討する。	同　上
12	人権 ― 国家からの自由と社会的権力からの自由	人権については、今日、政治的権力＝国家からの保障だけでなく、さまざまの社会的権力からの保障ということが問題となる。	同　上
13	人権 ― 社会権と新らしい人権	「○○からの人権」だけでなく、社会的公正を実現するための積極的な措置をとることを要おする社会権が問題となる。そのほかさらに、現代社会の構造変化に伴って、いろいろな新しい人種が言語解釈のかたちで主張されるが、それらをもとりあげる。	同　上
14	平和主義と国際協調	日本国憲法の平和主義条項のもつ意味を、フランス革命以来の近代憲法史の流れの中に位置づけながら理解し、その今日的意味の可能性を探る。	同　上
15	憲法保障と憲法改正	憲法の最高法規性を確保するための憲法保障のあり方について、違憲審査制の問題を含めてあらためて検討する。憲法改正についての法的な諸問題をも、検討する。	同　上

＝日本経済と産業と企業＝（TV）

〔主任講師：小林靖雄（放送大学副学長）
磯部浩一（放送大学教授）
宮沢健一（一橋大学教授）〕

全体のねらい

日本経済の国際的地位は最近数年の間に大きく変化し今や世界一の債権国となり、貿易摩擦などの難問に直面し、進むべき方向を真剣に捜索している現状にある。転換期にある「日本経済と産業と企業」の動きを、自分の眼で見、自分の頭で考えるための分析の用具や、枠組みを提供するのが本書のねらいである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本経済の国際的地位	日本経済は第二次大戦後の荒廃状態から、急速な経済成長をなしとげ、先進国段階へ到達した。1970年代以降の世界経済の変化は、アメリカ経済の相対的地位の低下をともなう歴史的変動である。頼るべき海図のない日本経済の現段階を確認する座標軸を考えてみたい。	磯部浩一（放送大学教授）
2	経済の実態把握の方法	最近、経済学は改に立つのかという疑問を聞くことがある。これは現在の経済変化が急激であることのほかに、これまで経済理論で一定であるとされた諸前提そのものに変化一経済基盤の変動が生じているためである。	同上
3	日本経済の歴史的展開	日本経済は第二次大戦前において、先進国へ追いつくために、富国強兵を国是として、高い生産水準と低い消費水準とを両立させてきた。戦後は平和国家として経済成長を進求し、先進国段階に到達した現在、その地位にふさわしい経済の在り方を問われている。	同上
4	国民経済計算よりみた日本経済	国民所得勘定など5つの「物さし」をもつ国民経済体系によって、日本経済の現状を体系的に把握したい。最初に、5つの「物さし」を簡単に説明してから、これら「物さし」による測定結果としての日本経済の姿を示すことになろう。	同上
5	経済基盤の変動	内的要因として人口の高齢化、経済の成熟化、第三の技術革新の進展などがあり、外的要因としては貿易摩擦、金融の国際化などの諸要因があり、交通・通信・金融などの諸方面の規制の緩和や、制度の変化を生じつつあり、経済基盤の変動に注目して検討したい。	同上
6	産業経済のとらえ方	産業とは何か。誰でも知っているこの言葉も、多義的で定義も一通りではない。国民経済を組み立てている組成単位としての産業と、企業の競合しあう集団単位としての産業との、質の違う両側面を含むためである。産業社会でのその意味と位置づけとを点検する。	宮沢健一（一橋大学教授）
7	産業構造の型と特徴	一国の経済を構成する産業の組合せの姿、これが産業構造だが、そうした産業構造は、どのような構成変化と発展の形態を示してきたか。比較的よく知られている構造変化の経験法則を紹介・吟味しながら、その背後で働いている根拠と条件は何かを解明する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	産業連関の仕組み	産業構造を、発展の形態よりは、変動の機能にそくして考えるには、それなりの方法が必要で、産業連関分析はそのための手法である。この方法を用いて産業諸部門の間の相互依存の関係を究明し、ある変動が他の諸部門に与える波及効果の相様と帰結を追及する。	宮沢健一
9	産業組織の成り立ち	各産業では、各々の産業に属する諸企業が相互に競争したり、協調したりしながら、業種ごとに特有な産業組織を形づくっている。産業組織論の見方に立って、そうした競争秩序の姿を把握しながら、市場の構造と市場での企業の行動・成果との関係を吟味する。	同上
10	産業社会と経済変動	全体としての産業社会の運行は、産業構造と産業組織の両面の変化を含みながら進行する。その運行の型と性格は、どのような視角から評価できるか。近年の新しい情報化・国際化・成熟化や、産業政策のあり方をどうみるのか。産業社会のこれらの課題を考える。	同上
11	企業経営の歴史的発展	第2次世界大戦前までの日本の大企業の経営の歴史的発展を、財団本社による資本支配、労働運動の発展と労働管理の展開、稟議制度の発展、科学的管理の導入、財務管理の展開、下請企業の利用についてのべる。	小林靖雄（放送大学副学長）
12	日本企業の国際比較	日本の企業が、今日先進工業諸国と比較して、技術、設備近代化、人的能力、経営管理と、それらの総合としての労働生産性および企業収益性にわたり、どのような特徴をもつかをのべる。	同上
13	企業の多国籍化	高度成長期以来今日までの日本企業の海外投資について考察し、その結果としての企業の多国籍化と、そこでの経営管理の問題点についてのべる。	同上
14	日本的経営とその変化	日本の企業の終身雇用と年功序列型賃金制度を基盤とした集団主義経営の特徴を説明し、近年それが次第に変貌しつつあることをのべる。	同上
15	日本経済と産業と企業の今後の動向と課題	以上の日本経済と産業と企業の検討を終了した時点において、今後の動向を展望し、課題を明らかにしたい。	小林靖雄 宮沢健一 磯部浩一

＝ 確　　率　　論 ＝（R）

〔主任講師：清水良一（統計数理研究所教授）〕

全体のねらい

確率論は偶然現象を記述するための一つの数学的手段である。偶然現象というのは現実に起るのか起らないのか起るとすれば何時どのような形で起るのかということが予測出来ない、という意味でのでたらめさをもっているものをいう。このような現象も一定の条件下で観察を続けていると発生の仕方に一定の法則性が現われて来る。それを見るためには現象を適当にモデル化しなければならないことを説き、その方法と効用を述べる。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	偶然と賭について	賭を伴うさいころ投げやカード遊びは予想困難な偶然に支配されており、それだけに人々は余計に夢中になり、また「偶然」の研究に駆り立てたられた。賭事の研究から誕生したといわれる確率論の歴史をたどり、また、われわれのまわりに見られる偶然現象について考える。	清水良一（統計数理研究所教授）
2	偶然現象の記述と確率モデル	同じ条件下で繰り返して観察されるような現象の中で見られる偶然が議論の対象であるが、「偶然」というものを具体的にとらえてこれを定義するのは極めて難しい。ここでは偶然とは何かということではなく、適当なモデルを作ることによって「偶然現象を記述する」ことを問題にする。	同　上
3	標本空間と事象	偶然を記述するためには、まずどういう現象が起りうるのか、あるいはどういう現象を考察の対象とするのかを明らかにしておく必要がある。「事象」という概念を導入し、さいころ投げのような単純な場合について確率モデルの構成法を述べる。	同　上
4	つぼのモデル	偶然現象を記述するのに、つぼのモデルは簡単で理解しやすく、しかも応用が広い。最も単純な復元抽出と非復元抽出とを説明し、これらに対応する確率分布として2項分布と超幾何分布を導入する。	同　上
5	偶然の法則性	確率論で問題になるのは「信じられない偶然」という類のものではなく、むしろ予測が困難という意味ででたらめに起る、という程度のごくありふれた現象である。この様な現象も大量に観察を続けていると一定の法則性が見えてくる。その簡単な例を述べる。	同　上
6	確率変数と確率法則	偶然現象はいろいろな形で表現することが出来るであろうが、数学的な解析の為には数値的な側面が重要である。現象を数量化したものを確率変数という。これは一定の法則に従って変動する偶然量である。確率法則についていくつかの例をあげる。	同　上
7	平均と分散	偶然量である確率変数のふるまいは確率分布によって完全に決まるが、その大きさとばらつきの程度を知るだけでも可成りのことが分かる。平均値と分散はこれらを量的に表わす一つの手段である。この章ではさらにもう少し一般に確率変数の「期待値」を導入しその利用について述べる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	条件つき確率	ある事象の起る確率は状況に応じて変わるべきものである。偶然現象を観察して得られる情報は偶然についてより確実な知識をもたらす。この章と次の章では情報の利用に関する一つの定式化を「条件付き確率」という概念を導入することによって行う。	清水良一
9	互いに独立に成起する事象	前章からの直接の続きである。このあとさらに確率論で最も基本的な概念の一つである「独立性」を導入する。ある事象が起ったことを知ったことによって、他のある事象の確率が変らないとき、これら二つの事象は互いに独立であるというのである。	同上
10	互いに独立な試行の系列	「事象の独立」をさらに発展させて「試行の独立」という概念を導く。相互に影響を与えあわないような試行を互いに独立であるという。いわゆるベルヌウイ試行はその最も単純なものである。	同上
11	稀な現象の記述	十分短い時間間隔の間に高々1回だけ、しかも極めて小さい確率でしか起らないような事象の系列が問題である。これらの事象は一定時間の間に何回位い起り得るだろうか。この問題は状況に応じていろいろな場合が考えられる。ポアソン分布で記述される現象とその周辺について述べる。	同上
12	多変量の確率変数	2つまたはそれ以上の個数の確率変数を同時に観察することによって多変量の確率変数が導入される。この章では主として2次元の変数についてその行動を記述する確率分布について述べるが、両変数の間の関連を明らかにするための種々の概念が導入される。	同上
13	極限状態での確率変数の行動	例えばつぼのモデルで抽出回数nが小さい時には、どんな抽出法であれ取り出される赤いボールの個数に関する確率を計算することは容易である。しかし、nが大きくなるに従ってこのことは急速に困難さを増す。これを解決するための極限理論について述べる。	同上
14	正規分布	13章の理論の帰結として正規分布が自然に導かれている。この章ではこの分布の重要性とこれを使うことの限界について考察する。	同上
15	互いに独立でない変数の系列	「互いに独立でない変数の系列」というのは余りにも一般的で取扱いに窮する。マルコフ性という構造を仮定するなど、非独立性をもたらす原因をモデル化することによって有効な手段が得られる。簡単な例をいくつかあげてこれを説明する。	同上

＝統　計　学＝（R）

〔主任講師：長坂建二（放送大学助教授）〕

全体のねらい

各種統計データのとり扱い方、まとめ方の基礎をまず習得し、ついで確率論（基礎数学Ⅰ）を予備知識として仮定して、標準的な統計推論である統計的推定論・検定論を理解する。更に、統計学のいくつかのトピックを紹介して、広く統計学の姿を把んでもらう。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	統計学への紹待	大量データの観察から一定の法則を発見する統計学の基本的な考え方を、グラント、ペティ、ジュースミルヒなどの先駆的な研究を引用し現在のデータと比較参照しつつ統計学の有用性について述べる。	長坂建二（放送大学助教授）
2	資料の整理	変数（変量）の概念をラベル付けにより説明を与えると共に、与えられた統計資料を、ステム・リーフ法や度数分布の形に整理するやり方を実例と共に示し、%点や対数変換についても触れる。	美添泰人（立正大学教授）
3	位置と拡がりの尺度	統計資料を整理した後に、その全体的な状況を説明する数字として、平均、中央値、最頻などの位置の尺度と、範囲、分散、標準偏差などの拡がりの尺度、およびそれらを合成した偏差値、変動係数などの解釈を与える。	長坂建二
4	関連の尺度	二つの量の間の関連を見るための手段として、散布図・相関係数、回帰直線の計算法と、最小二乗法を通じての解釈を説明する。また、量的データを質的データに変える採点法や、因果関係を相関との差異についても言及する。	同上
5	データの変換	データ構造をより明確にするために、データの変換とその処理法について概説する。そして、移動平均、度数分布の対称化、散布図の線形化などの各種技法について説明を与える。また、異常値とその処理についても言及する。	美添泰人
6	ベイズの定理	数学的には極めて単純なベイズの定理は、統計学においては深い内容を持つこと、そして事前確率や事後確率の考え方を紹介し、健康診断の不思議さに見られるような実例について説明を与える。	松原望（東京大学教授）
7	暗号と統計推論	文字の出現頻度を理論頻度と比較して、古典的換字暗号の解読に統計的手法が適用可能であることを示すと共に、最近の暗号システム、特に公開鍵暗号法を紹介し、統計的手法の限界について論ずる。	長坂建二

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	母集団と標本	全数調査と標本調査の違いについて、工業製品の品質管理を例として考え、母集団と標本抽出の概念を導入する。また、計数型品質管理技法より、超幾何分布、二項分布が導入されることや、生産者危険、消費者危険についても言及する。	長坂建二
9	統計量と分布Ⅰ	誤差論の立場から、二項分布、およびその極限としての正規分布を導入する。また、級内分散、級間分散と比からF分布を導入し、関連してT－分布、X^2－分布についての概略を述べる。	松原　望
10	統計量と分布Ⅱ	母集団分布を仮定して、標本を確率変数を考えた統計モデルに対して、統計量とその分布を数学的に導出する。また、チェビシェフの不等式と母集団分布の仮定の効用や限界や分布者の引き方についても説明する。	長坂建二
11	統計的推定論	不備・一致・十分・有効などの推定量の性質を紹介し、点推定について述べる。また、最大推定量の考え方を説明する。さらに、信頼正間の求め方と正規母集団に対する例を与える。	同　上
12	統計的検定論	統計的仮説検定論の考え方と枠組を示し、正規母集団を仮定して平均、分散に対する検定の原理と計算法を解説する。また、適合度検定、独立性の検定、相関係数の検定についても、計算法を与える。	同　上
13	ベイズ推論	推定に対するベイズ的な統計手法について、信頼区間のベイズ的な求め方や、P一値などのような基本的な考え方を紹介し、例を与える。	美添泰人
14	リスクの下での行動	リスクの下での行動を、統計的決定理論を基礎としてベイジアンの立場から概説し、ポート・フォリオなどの経済・社会における応用例について述べる。	松原　望
15	統計学の将来	統計学の将来について 1）コンピュータの利用と不可分となること 2）認知科学の視点を持つこと 3）探索的データ解折と統計手法の頑健法の三つの観点から論する。	長坂建二

＝物理科学史＝　(R)

〔主任講師：坂本賢三（千葉大学教授）〕

全体のねらい

科学史は科学を歴史的に扱う学問であるが、単に過去の発見を時間的順序に並べて説明するだけのものではない。歴史的に扱うとは、科学をその時代の社会の中に置いて考察することであり、それぞれの時代に、なぜそのことが問題になったのか、なぜそのようなとらえ方をしたのかを探ることである。

この講義では、科学史のうち生命科学に関する分野を除いた全部、すなわち、物理学・化学・天文学・工学等の歴史を扱うが、物理科学は単に研究対象によって生命科学と区分されるのではなく、基本的には対象を扱う方法の相違に大きな特徴がある。現代は生命現象をも物理科学的に扱おうとしているから、生命科学と重なり合う部分も持っているが、歴史的には別の学問的伝統として今日に至っているので、物理科学史だけを独立させて扱うことには十分意義がある。

したがって、自然に対する物理科学的なアプローチの仕方を歴史的に見ることによって、「自然の理解」を理解する助けにしようというのがこの講義の目的である。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	中世科学の3つの流れ	近代科学の意義を認識するために、17世紀までの主要な自然へのアプローチの仕方を、アリストテレス主義（目的論）、ヘルメス（錬金術と占星術）、アルキメデス（機械論）の3つの流れから概説する。	坂本賢三（千葉大学教授）
2	科学革命	近代科学の成立を「科学革命」ととらえる現代の科学史像を概説し、その基本的特徴を、宇宙像の変革と数学の利用と実験装置の発達から見る。	同上
3	方法の確立	近代科学の方法は、ほかならぬ物理科学の方法であり、その基本的性格と意義を、フランシス・ベーコン、デカルトなどの扱い方の中に見て行く。	同上
4	力学の成立	物理科学の基本的モデルとしてまず成立したのが古典力学であった。ガリレオやデカルトの運動学がニュートン力学に統合されて行った過程を追い、「力」という概念成立の意義と公理系としての側面に注目し、なぜ古典力学が物理科学のモデルになったかを考察する。	同上
5	十八世紀の諸科学	18世紀には、光・電気その他あらゆる面で物理科学が展開したが、とくに流体力学と地学と工学を典型として取りあげ、その社学的背景や技術との関係、教育機関の成立などについて考察する。	同上
6	微積分の役割	数学は一応、物理科学の中には含めないが、物理科学の特徴として数学の利用は見ないわけに行かないし、とくに微積分は力学の成立と切り離すことができないので、その意義を見る。とくに物理科学において法則が微分方程式の形で表現されることの意味、18世紀に展開した変分法とその意義、それらの結晶としての解析力学について扱う。	同上
7	近代物理科学の完成	それまで錬金術や薬学として近代科学になっていなかった化学がラヴォアジエによって近代物理科学の1つとして出発を始めたことの意義を元素の概念の確立、分子説、原子説の成立において扱う。19世紀化学工業との関係についても論じる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	電磁気学の完成	初期の理論からあらためてふりかえり、電気学の歴史を概観するとともに、電磁誘導の発見を媒介にして成立した「場」の概念、マクスウェルによる電磁気学の体系化、さらに電磁波の概念や光の波動説にも触れる。	坂本賢三
9	熱力学の成立	蒸気機関の研究から熱力学が成立した経過をたどり、エネルギー概念の成立、熱力学の基本原理とその特質を見る。さらに分子運動論と統計力学についても触れる。	同　上
10	相対性理論の確立	エーテルの概念を検討して、古典電磁気学との関係を明らかにし、とくに力学の面における特質を強調する向きのある一般の解説に対し、科学史的に見た場合の相対性理論の意義を述べる。	同　上
11	物質の構造と量子論	19世紀末に始まった電子論と原子論の復活、さらに放射能の発見等から「量子」の概念が出てきた過程をたどり、量子論から量子力学の成立、素粒子論への展開の経緯を述べ、解釈問題、観測問題にも触れる。	同　上
12	天体物理学と宇宙の構造	天体の物理的研究の発展、天体望遠鏡の発達などから、20世紀前半に盛んになった宇宙構造論や宇宙進化論の歴史を概観する。20世紀後半における新知見にも触れる。	同　上
13	通信工学とサイバネティクス	20世紀後半に登場した新しい物理科学のアプローチの仕方として、通信と制御の理論の意義を述べる。ここでは、自然科学と工学との密接化の問題や推測統計学の役割、オペレーションズ・リサーチとの関係、情報概念の成立について歴史的に見て行く。	同　上
14	物性論の発展	以前から行なわれていた研究であるが、ここではとくに、磁性の研究、低温物理、超伝導、半導体などのトピックを歴史的にとりあげ、材料工学の発達（レオロジー）にも触れる。	同　上
15	物理科学の現在	むすびに当る部分であるが、現代物理科学が完成しているわけではないので、物理学における最近の統一理論や生物物理学の動向や工学において物理科学がモデルとしての役割を果しつつあることなど、最近の話題をとりあげながら、物理科学史全体をまとめる。	同　上

＝生命科学史Ⅰ＝ (R)

〔主任講師：筑波常治（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

生物についてどういう研究がおこなわれてきたか、その歴史をたどりながら、科学的態度とはどのようなものか、あきらかにしてゆきたい。科学研究の偉大さはもとより強調されなければならないが、反面たんに絶対化するのではなく、それに宿命的にともなっている偏向ならびに限界も指摘したいと思う。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	「生物学」の源流	「生物学」とよばれる学問が、大むかしからあったのではない。18世紀にこの名のもとに統括されるまで、生物を素材にしながらも、それぞれ別派の研究が独立におこなわれてきた。学問自体の変遷のあとを、まず最初にたどってみたい。	筑波常治（早稲田大学教授）
2	統一法則対多様性	生物学の源流はいくつもあるが、代表的かつ対照的な流れとして、生命論と博物誌があげられる。生命現象の共通普遍性をもとめた前者と、自然界の多様性に価値をおいた後者を対比しながら、現代生命科学の特色を考えてみたい。	同上
3	生命観の変遷 Ⅰ	「生命」とは何か。その正体をきわめようとした研究のあとをたどり、とくに生気論から機械論への移行をつうじて、科学以前と科学の自然観を対比する。またどちらの場合も、生命の正体にかんする考え方が、せまい意味での生物研究のわくをこえて、社会一般さまざまな面にひろい影響をおよぼしていた事実をあきらかにしたい。文化史的な内容の濃い講義になると思う。	同上
4	同上 Ⅱ		同上
5	同上 Ⅲ		同上
6	博物誌も分類学Ⅰ	自然界・生物界の多様性におどろき、それを知ることを喜びとし、それ以上の多様性をさらにもとめて自然にいどんだのが博物誌であった。ところがやがてそのなかから、多様性の奥にまた統一された秩序があるのだという考えがおこり、一定の基準にもとづいて生物界を分けなおそうとする分類学が出現した。多くの面で共通した素材をあつかいながら、発想の根底で対照的なふたつの立場を対比して、人間対自然の関係を考察する。	同上
7	同上 Ⅱ		同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	同上 Ⅲ	同上	筑波常治
9	「性」と生物学 Ⅰ	生命の正体、生物界の多様性、さらにもうひとつ性にたいする関心が、生物学の主要な源流になったと考えられる。具体的には発生学と遺伝学がそこから生じたとみなされよう。生物の個体発生の過程を探求した歴史をたどり、生命現象の神秘性への認識のあとをふりかえってみたい。	同上
10	同上 Ⅱ	同上	同上
11	進化の思想 Ⅰ	生物学の歴史で、功罪両面にわたりもっとも各方面に多彩な影響をあたえたのが、進化論である。しかしこれは絶対的学説ではなく、かなり仮説性のつよいひとつの論である。また自然科学のあらゆる学説理のうちで、これくらいいろいろな意味で、社会環境とのあいだに密接かつ露骨な関連をしめしてきた例もめずらしいといえる。進化論の歴史をつうじて、科学と社会のつながりを考察する。	同上
12	同上 Ⅱ		同上
13	同上 Ⅲ		同上
14	微細な生物界、巨大な生物界	時代とともにヨーロッパ人は海外へ進出し、研究対象となる自然および生物の世界を拡大していった。同時に一方では顕微鏡をはじめ各種技術の発達で、研究対象が細かくしぼり込まれていった。ふたつの動きを対比しつつ、生命科学の発達をあとづける。	同上
15	屈折した科学の歩み	科学の発達は単調ではなかった。前進と後退、さまざまな曲折が入りまじる。いくつかの代表的学説を例にとって、その複雑さをあらためて洞察してみたい。	同上

＝生命科学史Ⅱ＝（R）

〔主任講師：筑波常治（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

Ⅰあるいは Ⅱをそれぞれ単独に履修しても、または両方あわせて履修しても、どれでも可能である。Ⅱは生命科学の歴史にのこる代表的人物の列伝を中心に構成する。しかしたんなる個人の人物論にとどめず、それぞれの生涯と実績をとおして、それぞれに代表される各分野の歴史をあきらかにするのがねらいである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	古代最高の生物学者	生物学の歴史でまず重要視されるのが、アリストテレスである。その業績をつうじて、ギリシア的な考え方とともに、近代科学の源流をなす発想の型をあきらかにする。	筑波常治（早稲田大学教授）
2	古代ローマおよび中世の研究者たち	古代ローマならびに中世は、従来の科学史で低い評価しか受けなかった。しかしじつはこれらの期間をつうじて、近代科学の基盤となるさまざまな修練が蓄積されてきたのである。それを具体例にそって説明したい。	同上
3	ルネサンスおよびそれにつづく研究者たち	ルネサンス期のひとつの特色として、多方面にわたって活躍した万能的才能の出現があげられる。換言すればこの時期、現在のように学問が細分化していなかったということになる。そのなかから、ダ・ヴインチ、パラケルスス、ゲスナーなどをとりあげたい。	同上
4	人体の探求者	医学と生物学はきわめて密接な関係をもつ。とくに近代初期、人体解剖によって、体内の構造があきらかになったことは、生命科学に甚大な影響をおよぼした。ベサリウスがその分野を代表した。と同時に反面では、ある意味での暗黒部分もまた生じたのである。	同上
5	機械論者と顕微鏡学派	17世紀はニュートンを代表に、近代科学が確立された世紀とされている。生命にかんしても、デカルトにより機械論が提唱された。また顕微鏡が普及して、それまで知られなかった微細な生命の存在があきらかとなった。レーヴエンフクがその立場を代表した。	同上
6	多彩な18世紀の研究者たち Ⅰ	18世紀はきわめて興味ぶかい世紀だ。一方で17世紀に成立した近代科学をいっそう推進しようとする人物があらわれ、他方でそれにたいする懐疑からの一種のわりもどし現象がおこる。しかも長期的にみた場合、後者がかえってその後の科学の発達に役だった場合も少なくないのだから複雑である。ド・ラ・メトリ、ヴォルク、リンネ、ビュフォンなどをとりあげたい。	同上
7	同上 Ⅱ		同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	進化論の提唱者および反対者	18～19世紀、革命をはさんで激動したフランスは、生物学史においても、進化論をめぐる激動があった。ラマルクおよびキュビエのふたりを対比しながら、その激動の内容をたどってみたい。	同　上
9	進化論の確立者	生命科学史においてもっとも有名かつ重要なダーウィンをとりあげ、その生涯と学説をたどりつつ、偉大さといわれる真の意味を考えてみたい。一見して平穏そして幸福にみえる一生にも、しらべるとやはりそれなりの人生の悲喜劇があった。	同　上
10	遺伝法則の発見者Ⅰ	ダーウインとならんで有名なメンデルは、生物研究にかんしてじつは素人（アマチュア）であった。ところがそれなればこそ、遺伝の法則を発見できたのである。そのかわり当時の生物学界からは、評価されずにおわってしまった。気象学をつうじて物理学的発想を身につけていたがゆえのメンデルの業績と不運について考えてみたい。	同　上
11	同　上　Ⅱ		同　上
12	自然発生説をめぐる人びとⅠ	親がなくともまったく異なる物のなかから、生命がわいてでるという自然発生説は、古代このかた常識として存在したのである。この常識に疑問をはさみ、各種の実験でそれを否定しようとした人びと、これに反発してあくまで自然発生説を支持しようと、これまた実験に訴えた人びと、その攻防はじつにみごとに生命科学史の一面の軌跡をえがきだす。最後に決着をつけたのが、パストゥールであった。	同　上
13	同　上　Ⅱ		同　上
14	農学の確立者	医学とともに応用生物学といわれる農学だが、意外と生物学とのむすびつきは注目されていない。とかく無視されがちだったこの分野にに、あえて照明をあてて、とくにテーアとシュベルツというふたりの研究者をつうじて、農業研究のあるべき姿を考えてみたい。	同　上
15	日本生物学の確立者	日本の生物学史にもいろいろな話題がある。もっとも重要な人物をひとりとなると、わたしは貝原益軒をえらびたい。主著「大和本草」をつうじて、中国の影響からじよじよに離脱していった日本生物学の独立のあとをたどりたい。	同　上

＝人間の生物学＝（TV）

〔主任講師：太田次郎（お茶の水女子大学教授）〕

全体のねらい

人間（ヒト）も生物の1種であるが、他の生物とは違ったいくつかの特徴をもっている。それらの特徴とは何か、人間とはどんな生物かを、生物学の立場から探っていく。また、広く生物界に通用する法則性がどこまで人間に適用できるかを調べ、科学的に見た人間像の形成をめざしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生物としての人間	本講座の導入として、人間（ヒト）は生物界でどんな位置を占めているのか、人体のおもな特徴は何か、脳を中心にして人間は他の動物とどこが違っているかなどを概説し、生物学の立場で人間をとらえる視点を明らかにする。	太田次郎（お茶の水女子大学教授）
2	人類の誕生と進化	生物の進化の歴史で、人類はいつ、どこで誕生したか、それはいかなる証拠で裏づけされるかなどを述べる。また、化石人類から現代人に至る進化の道筋をたどり、人類進化の歴史を探る。	同上
3	人体の成り立ち	人体は、いかなる成り立ちであるかを、形態的面を中心にして述べる。組織・器官・器官系の成り立ちを調べて人体の特徴を知るとともに、構成の単位となっている細胞の構造と機能について概説する。	同上
4	血液とその働き	人体内の細胞は血液に浸され、血液は細胞の働きを支えている。血液とはどんな組成でそれぞれの成分はいかなる働きをするか、血液循環のしくみ、腎臓での排出作用などを調べ、人体の働きにおける血液の役割を明らかにする。	同上
5	人体の活動とエネルギー	人体は様々な活動を行うが、そのもとになるエネルギーは何か、エネルギー獲得の手段などについて概説する。消化と吸収、呼吸などのエネルギー獲得手段、筋収縮などエネルギーを消費する活動を中心に述べる。	同上
6	脳と神経	人体における情報の伝達と統御にあづかる神経と脳の構造と機能を説明する。神経系の単位となるニューロン、興奮伝達のしくみ、脳のつくりなどを調べ、脳とコンピュータを比較して、脳の働きの特徴を述べる。	同上
7	ホルモン	神経と共に人体の働きの調節にあづかるホルモンとは何か、その働きの特徴などを説明する。人体の各内分泌器から分泌されるホルモンの種類、ホルモンの相互作用を調べ、人体の恒常性を維持しているしくみを述べる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	行動	動物の行動としての本能、学習（刷り込みも含む）、知能の意義を、具体例を示しながら説明する。人間の行動の特徴を、学習と知能を中心にした、他の動物の行動と比較しながら考えていく。	太田次郎
9	生殖と発生	人間も含めて多細胞生物は、1個の受精卵がもとになって発生、成長して成体となる。代表的な動物の発生の経過を説明し、それと人間の発生との共通点や相違点を明らかにする。また、発生のしくみを探る研究にもふれる。	同上
10	遺伝のしくみ	遺伝の法則、遺伝のもとになる遺伝子と染色体の関係、性と遺伝、遺伝子の本体であるDNAの構造と機能などを概説する。生物一般に成り立つ遺伝の法則性が人間にどこまで適用できるかも考える。	同上
11	人間の遺伝	人間のどの形質が遺伝し、どの形質が遺伝しないかを探る方法、その結果などを概説する。特に、双生児法をもとにした知能や病気などの遺伝、近親結婚の危険性など、身近かな問題をとり上げて述べる。	同上
12	個と集団	自然界では、動物はふつう集団で生活している。集団生活をしている動物では、1個体で生活している場合とは異なる法則性に支配されることが多い。動物の集団生活の法則性を調べ、人間の集団生活と比較する。	同上
13	自然と人間	自然界で、生物は環境と密接な関係を保ちながら生活している。自然界での生物どうしのつながり、生物と自然環境との関係を概説し、人間と自然の関係、生態系における人間の位置づけなどを述べる。	同上
14	健康と病気	人間の生物学の特有の問題として、健康と病気をとり上げ、病気とは何かについて、生物学の立場で考える。特に、感染と免疫を中心にして、病気の予防と治療、人間の生活における健康の意義を考える。	同上
15	人間の未来	本講座のしめくくりとして、生物学の発展が未来の人間生活に及ぼす問題をとり上げる。性と生殖、遺伝、脳の研究などが人間の論理に与える問題点、人口問題などを例にして、今後、人間の生物学てもつ課題を概説する。	同上

＝科学と実験＝（TV）

〔主任講師：宮代彰一（放送大学教授）〕

全体のねらい

広い科学のなか（工学や技術も含む）の多くの分野での実験的な仕事を横に貫き、共通する問題、考え方、あるいは手方などを抽出して考えてみよう。これらはそれ自体で興味深く、実際的であり、かつ、少し大げさだが、実証科学の本質にも係わるものと思う。なお、面接授業では、いくつかの実験を学生が自ら行えるようにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	科学と実験	自然学、中世の科学を経て実証科学となったのは17世紀、それがわれわれの近代科学／その科学にも限界、再現性、分析と総合／実験の舞台として基礎科学と応用科学／学習実験と研究実験。	宮代彰一（放送大教授）
2	問題発見と計画	「実験屋」は現象や物を相手にしているだけで夢中になる。しかし、まず問題の発見（把握、企画）が重要／そして、もう一つはどうすべきか、計画（手順）が大切／それらの手法として王道はないが、あえて例を考える／それに計画実施上の二三の問題。	同上
3	情報・文献	科学は情報の拡大再生産、オリジナリティの積み上げ／科学技術情報の所在とその形、文献資料の種類、その膨大な量／研究の各段階と調査のあり方／情報の検索、原理と方法、コンピュータ検索／情報活用上の注意。	同上
4	観察と記録、そして整理	観察、それは事物の語りかけに耳をかたむけること、それが出発点／それを心にとどめるための記録／さらに結果を整理して考える／この一連の作業は科学実験の最も基本的作業／自然観察と手法の具体例／整理、分類の種々の場合、共通な考え方。	吉田治（千葉大教授）
5	感覚と観測	現象を受け止めるひとの感覚、すぐれた五感、そしてまたその限界／観測に機器を用いるのは五感機能の拡大、定性的拡張と定量的補強／視覚機能に関する例、大きさ、強度、波長、時間の面で／感覚とセンサ	宮代彰一
6	単位・標準	単位と標準は科学実験のほか日常でも定量化の基盤／単位のおこり、物理量と単位・次元、単位と単位系／単位の進化、望ましい単位系、国際単位系（ＳＩ）／物理常数、７つの基本単位と標準／慣用の単位、社会習慣と単位の進化	大井みさほ（東京学芸大教授）
7	実験器具・装置	器具、装置の準備、何をしたいのか？／具体的な基本例として長さの測定器具、目盛の読み取り、副尺など／機器、装置の製作、目的は？、設計、図面、工作、材料／機械器具への理解と取り扱い、増えるブラックボックスとその扱い	

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	電気・電子的手法	前章の実験装置の話に関連／電気・電子的な手法は多くの分野に共通、電気計測とかエレクトロニクスの人口／結局は電圧と電流の観測である／簡単な電気測定、メータ、偏位法と零位法、測定点／コンピュータと実験、測定や実験操作の自動化	田中清臣（電通大助教授）
9	実験と安全性	実験の作業が危険と背中合わせであることを改めて認識したい／災害とその原因、誘因と素因／種々の危険、化学的な危険、機械的な危険、電気的な危険／学校実験現場での例／安全のための注意	若松　茂（放送教育開発センター教授）
10	データの取りまとめ	数値的なデータの取り扱い／データの有効桁数、全体像の把握／測定または計算結果の表し方、表や図による表現、／グラフの作り方、実験曲線、実験式／数値計算のポイント、およびコンピュータの利用／コンピュータによるグラフ化、データ爆発への対処	遠山紘司（放送大助教授）
11	測定の不確かさ	測定には常につきまとう不確かさにつき次章とともに考える／直接測定と間接測定、測定精度のバランス／誤差の起因は？、系統誤差と偶然誤差、ガウス分布、平均値など／データの処理と最小二乗法／確度と精度、妥当な測定	同　上
12	観測とゆらぎ	しっかりした測定でも残る不確かさ、測定対象自体のあいまいさ／測定の限界自然の姿、それなりの法則性／いくつかの具体例、自然放射能、フォトンの姿、情報と雑音、ブラウン運動／マクロなゆらぎ	宮代彰一
13	モデルと実験	現物を用いない実験もある／現象の記述とモデル化、振動現象の例／思考実験の必要な場合、理論の検証、得られた理論の演繹や応用／模型（モデル）実験、いくつかの例、信憑性／コンピュータ・シミュレーション	
14	報　　告	研究や実験は報告で仕上がる／学習（学生）実験におけるレポート／報告書（論文）の組み立て／よい報告とは分かる報告、内容上の問題（事実と意見の区別など）と表現上の問題（悪文など）／各種の技術報告、特許という形の報告	宮代彰一
15	しめくくり	学習と実験、本当の興味とか楽しさとかは？実際問題への適用／創造へのつながり、創造の技法、発散の段階と収束の段階／同時発明同時発見、／創造の評価、成否／一つの大切な方法論	同　上

＝ 英 語 Ⅰ ＝ （TV）

An Introduction to Living English Speech

－ドラマの英語－

〔主任講師：鈴木　博（東京大学教授）
　　國吉丈夫（千葉大学教授）〕

全体のねらい

副題にLiving English Speechとあるように、話されている英語のありのままの姿を学習の対象とする。教材としては主として標準的な英語のテレビドラマを使い、ことばが使われている場面や身体的動きなどの非言語情報と関連させながら聴解力の養成を目指す。話す練習は聴解力養成の一環として行うことになる。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	Living English Speech	生きた話しことばとしての英語の例としてインタビュー、ニュース、演説を取り上げて学習用に作られた英語との差を示す。そのあと本講座で使う作品を一覧し、授業の一部を紹介する。最後に、毎回設ける「音声コーナー」の第１回で母音図の見方を解説する。	鈴木　博（東京大学教授）
2	The Computer －１－	生きた話しことばに本格的に取り組む前の準備として英国放送協会（ＢＢＣ）が英語学習用に制作したフィルムを２本使うが、今回はその１本の前半を利用する。 「発音コーナー」では母音図上での個々の英語音の位置を確認する。	同　上
3	The Computer －２－	前回のフィルムの後半を使って学習したあと、前半後半を通して視聴する。 「発音コーナー」では二重母音について解説する。	同　上
4	In the Park －１－	準備段階としてＢＢＣが制作した英語学習用フィルムをもう一本使って音声英語に慣れる練習を行う。今回はその前半を使う。 「発音コーナーでは英語の子音のうち、破裂音、破擦音、摩擦音を取り上げる。	同　上
5	In the Park －２－	前回のフィルムの後半を使って学習したあと、前半後半を通して視聴する。 「発音コーナー」では英語の子音のうち、鼻音、〔ｌ〕、〔ｒ〕、〔ｗ〕、〔ｊ〕を取り上げる。	同　上
6	The Necklace －１－	生きた話しことばに本格的に取り組む最初の教材はモーパッサンの短編小説「首飾り」を現代のアメリカに場面をおきかえてドラマ化したフィルムである。今回は５分40秒分。 「発音コーナー」では前置詞、代名詞、助動詞、接続詞等の「弱形」を取り上げる。	同　上
7	The Necklace －２－	前回のフィルムの続きを使う。全体で20分の作品のうち今回は３分35秒分。 「発音コーコー」は「弱形」の続きで、音が省略される場合を取り上げる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	The Necklace — 3 —	前回のフィルムの続きを使う。今回は6分30秒分。 「発音コーナー」では「音の連結」を取り上げる。	鈴木　博
9	The Necklace — 4 —	「首飾り」の最終回で、約1分の最後の結末部を使っての学習のあと、この作品を通して視聴する。最後の重要なせりふはこの通しの視聴で初めて聴くことになる。 「発音コーナー」では破裂音が連続した場合に起きる。「不完全破裂」を取り上げる。	同　上
10	A Point of Departure — 1 —	米国で制作放映されたテレビドラマシリーズ Family の中のエピソードを6回に分けて学習する。中流階級の家庭の長男が抱く自立の悩みとそれに寄せる家族の思いやりがテーマである。今回は約6分分。 「発音コーナー」では「同化」を解説する。	同　上
11	A Point of Departure — 2 —	前回のフィルムの続きを使う。全体で約36分のうち今回は7分30秒分。 「発音コーナー」ではフィルムに頻出する gonna（going to）と wanna（want to）を取り上げる。	同　上
12	A Point of Departure — 3 —	前回のフィルムの続きを使う。今回は約6分30秒分。 「発音コーナー」では「強勢（ストレス）」を取り上げる。	同　上
13	A Point of Departure — 4 —	前回のフィルムの続きを使う。今回は約4分30秒分。 「発音コーナー」では「リズム」を取り上げる。	同　上
14	A Point of Departure — 5 —	前回のフィルムの続きを使う。今回は約5分10秒分。 「発音コーナー」ではイントネーションの4つの基本型を取り上げる。	同　上
15	A Point of Departure — 6 —	前回のフィルムの続きを使う。今回は約5分30秒分。 「発音コーナー」では前回の基本型に入らないイントネーションの型と意味について解説する。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
16	A Pornt of Departure —7—	「出発点」の最終回で、約36分の作品を前半と後半に分けてそれぞれ解説したあと視聴する。	鈴木　博
17	An Eye to the Futre —1—	☆効果的に学習を進めるための留意事項 ◎アメリカのＴＶドラマFAMILYのシリーズの一つを七つの部分に分けて使うが、その最初のLawrence一家の朝食の場面 ☆PHONETICS Corner：日本語と英語の音声の流れの違い、発音練習	國吉文夫 （千葉大学教授）
18	An Eye to the Futre —2—	☆前回の復習と英語表現テスト ◎Lawrence一家の夕食の後、夫婦が話し合っている。妻のKateは夫のDougに就職したいという決意を打ち明ける。 ☆PHONETICS Corner：英語の強勢アクセントとその発音練習	同　上
19	An Eye to the Futre —3—	☆前回の復習と英語表現テスト ◎Kateは前の晩に夫のDougにすすめられたように知人のSandy Prattの音楽事務所に行って就職の相談をする。Sandyは又大学生になって勉強したらどうかという。 ☆PHONETICS Corner：文表現の強勢と発音練習	同　上
20	An Eye to the Futre —4—	☆前回の復習と英語表現テスト ◎夫のDougは最初驚くがKateの大学行きに賛成する。電話で連絡を受けたKateは次の日auditionを受けに大学に出かける。そこで自分の力のなさを思い知らされ断念する。 ☆PHONETICS Corner：英語文表現の強調と強勢	同　上
21	An Eye to the Futre —5—	☆前回の復習と英語表現テスト ◎断念したKateが働く音楽事務所にDr. Stylesがやって来る。前日のauditionの先生である。非礼をわびていろいろいうKateに先生は諭すように話しかけるのであった。 ☆PHONETICS Corner：英語くリズムと発音練習	同　上
22	An Eye to the Futre —6—	☆前回の復習と英語表現テスト ◎音楽事務所の単調な仕事に飽き足らなくなって辞めたKateは夫に会って打ち明ける。そして、「大学も、職もやめてしまうとはどうしたのだ」と強く励まされるのであった。 ☆PHONETICS Corner：英語のイントネーション	同　上
23	An Eye to the Futre —7—	☆前回の復習と英語表現テスト ◎意を決してKateは大学のDr. Stylesのところに行きauditionを受け入学を許可される。Kateは希望に胸をふくらませて猛然とピアノの練習に励むのであった。 ☆PHONETICS Corner：イントネーションの型	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	An Eye to the Futre —8—	☆七回に分けて扱ってきたこのＴＶドラマを出来るだけ通して見る。ことばを意識しないで英語の世界に浸ることを目標とする。ことばが使われている場面、文化的背景。 ☆PHONETICS Corner：英語のイントネーションとその発音練習	國吉丈夫
25	The Ingenious Reporter —1—	☆前回までの総復習とディクテーション・テスト ◎ＴＶドラマ“The Ingenious Reporter”を五つの部分に分けて扱うがその最初の場面である。青年記者Harry Langleyが身元不明の死体を利用し大スクープとする考えを編集長にいう。 ☆PHONETICS Corner：英語のテンポとポーズ	同上
26	The Ingenious Reporter —2—	☆前回の復習とディクテーション・テスト ◎犯人を装って逮捕され、計画通り監獄に入ったHarryは検察官の取り調べを受けている。検察官の話す事件の顛末をHarryは最初は半分茶化し気味に聞くのであった。 ☆PHONETICS Corner：英語表現の音量の変化	同上
27	The Ingenious Reporter —3—	☆前回の復習とディクテーション・テスト ◎殺された恋人のHenriettedだと聞かされ、Harryにとって予想もしなかった事態となる。公判にどう対処するか弁護士のDupres と話し合うが意見が全く合わない。 ☆PHONETICS Corner：英語表現の音質の変化	同上
28	The Ingenious Reporter —4—	☆前回の復習とディクテーション・テスト ◎重要な証拠のないこの件には打ち勝つ自身があるという弁護人のDupresには耳を貸さず、Harryは法廷の場で事実をそのまま述べるのであった。 ☆PHONETICS Corner：音声分析と総合的効果	同上
29	The Ingenious Reporter —5—	☆前回の復習とディクテーション・テスト ◎Harryに急き立てられるようにして編集長を証人に立てるが、検事Lefargeの巧みな尋問に形勢は逆転する。法廷から出てきたHarryは怒り狂った群集に命を絶たれる。 ☆PHONETICS Corner：英語表現のスタイル	同上
30	The Ingenious Reporter —6—	☆前回の復習とディクテーション・テスト ◎五回に分けて扱ってきたこのＴＶドラマを通してみる。出来るだけことばを意識しないで英語の世界に浸ることが目標である。 ☆講師とゲストとの話し合いを聞く。 ☆PHONETICS Corner：いろいろな英語	同上

＝ 英 語 Ⅱ － A ＝　(R)

〔主任講師：山内久明（東京大学教授）〕

全体のねらい

英語Ⅱ Aでは、大学の一般教養課程における英語講読に相当する程度の英文を読むことになっている。さまざまの文体に慣れるために、(Ⅰ)事実についての論述、(Ⅱ)文学作品の想像的散文、(Ⅲ)論述的要素と想像的要素とを兼ね備えた散文を選んで読む。英語の修練と同時に、新知識を得たり、想像的世界を垣間見るのがねらい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	Walter Perry: Open Univursity 'The Basic Ideas' (1)	イギリスの社会・教育制度の中で「放送大学」が生成発展する背景として三つの要因があった。①成人教育の必要性、②教育放送の発達、③機会均等主義の促進。成人教育のためには、従来どのような機関があったか。	山内久明（東京大学教授）
2	Walter Perry: Open Univursity 'The Basic Ideas' (2)	イギリスにおける成人教育には二つの欠陥があった。(ⅰ)既存の高等教育機関は、職業訓練目的に適していなかったこと。(ⅱ)既存の高等教育機関は、成人教育を必要とする人々を受け入れる態勢を欠いていたこと。	同 上
3	Walter Perry: Open Univursity 'The Basic Ideas' (3)	イギリスに従来からあった教育放送番組が、放送大学発足の機運にいかに関わったか。	同 上
4	Walter Perry: Open Univursity 'The Basic Ideas' (4)	従来イギリスの教育を特徴づけたエリート主義に対して、機会均等主義の理念が、放送大学の発足にどう結びついたか。	同 上
5	E.M. Forster: 'The Story of a Panic' (1)	場面は、南イタリアの風光明媚な観光地。因習に凝り固まったイギリス観光客の一行に混じって、躾や因習から逸脱した少年ユースタスが登場する。渋るユースタスも伴って、一行は背後の山の栗林に散策に出かける。	同 上
6	E.M. Forster: 'The Story of a Panic' (2)	散策に出かけた山中で、突如得体の知れない「恐怖」（Panic）に襲われてわれ先にと山を駆け下りる。因習的で鼻持ちならない英国人観光客の俗悪さと、不合理な恐怖心から遁走する愚かしさ。	同 上
7	E.M. Forster: 'The Story of a Panic' (3)	山を駆け下りる途中、Eustaceがいないのに気付いた一行は、元の場所へと引き返す。一行の恐怖と不安をよそに、ひとり山中で平然として、山羊の足跡の上を転げ廻るEustaceの姿には、大人たちの理解を絶している。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	E.M. Forster:'The Story of a Panic,(4)	帰る途々、喜々として山中を跳びはね自然界と一体化したかに見えるEustaceの姿は、大人たちには不可解である。さらに、ホテルのイタリア人使用人に馴れ馴れしく振舞おうとするEustaceは、階級意識にとられた大人たちのひんしゅくを買う。	山内久男
9	E.M. Forster:'The Story of a Panic'(5)	その日の真夜中、ひとり闇の中でホテルの庭を徘徊するEustaceに再び狼狽する大人たちは、室内に監禁しようと、使用人Gennaroを買収して、Eustaceを連れ戻す。	同上
10	E.M. Forster: 'The Story of a Panic '(6)	二階に閉じ込められた筈のEustaceとGennaroは、窓から庭に飛び下りる。Gennaroの死。あとには、庭の塀を跳び越えて逃げ延びたEustaceの笑いが、下方の谷間からこだまして響いて来るのだった。	同上
11	Kenneth Clark:Civilisation 'The Worship of Nature' (1).	18世紀後半、キリスト教信仰にとって替わるかのごとく、自然に崇高美を発見し、自然を賛美崇拝する態度が顕著となってくる。実例として、イギリスの詩人コリンズとグレイが挙げられるが、最大の自然崇拝者はルソーであった。	同上
12	Kenneth Clark: Eivilisatior 'The Worship of Nature' (2).	自然崇拝の諸相をJean-Jacques Rousseau、Johann Wolfgang von Goethe、Samuel Taylor Coleridgeに即して辿る。	同上
13	Kenneth Clark: Eivilisatior 'The Worship of Nature' (3).	英国の湖水地方に生まれ、生涯の大半をその地で過ごしたWilliam Wordsworthの場合を、代表的な詩の一部を手がかりにして論ずる。	同上
14	Kenneth Clark: Eivilisatior 'The Worship of Nature' (4).	Wordsorthの自然詩の素朴な写実性は同時代の風景画家John Constableに通ずる反面、Wordsworthの詩のもうひとつの側面である自然に宿る崇高性の発見は、もうひとりの画家J.M.W.Turnerに通ずる。自然崇拝をめぐっての詩と絵画との並行が辿られる。	同上
15	Kenneth Clark Eivilisatior 'The Worship of Nature' (5).	19世紀後半のフランス画家の場合－Constableの写実性の伝統は例えばCourbetにみられるのに対し、Turnerの主観的幻想性は、Van GoghやMonetのような印象派の絵画に通ずる。	同上

＝ 英 語 Ⅱ ― B 1 ＝ (R)

主任講師：比嘉正範（放送大学教授）
ニコラス・ジョン・ティール
（同志社女子大学助教授）

全体のねらい

この科目の目的は (1)構造の複雑な英文を読めるようになることと、(2)日本の政治、社会、文化などについて英語で読み、英語で語れるようになることである。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	Introduction	構造が複雑なため解釈の難しい英文の読み方、大意の取り方や、この科目の学習方法などを説明する。	比嘉正範（放送大学教授） ニコラス・ジョン・ティール（同志社女子大学助教授）
2	The Ideology of the Samurai	江戸時代の武士階級の政治・社会思想と儒教との関係および日本の儒教化を論じている。	同 上
3	Modern Bureaucracy	日本の官僚制の特徴を述べ、政治家と官僚との関係を論じている。	同 上
4	Japan's Two Constitutions	明治憲法と戦後の新憲法の二つの憲法のそれぞれの特徴をヨーロッパの憲法と比べながら論じている。	同 上
5	Government and Politics	明治維新後における日本政府の成立および議会政治と政党政治の発達と問題点を説明している。	同 上
6	Industrial Revolution	１９世紀末に始まった日本の産業革命がどのようにして明治政府によって推進されたかを説明し、日本の産業化が成功した要因を論じている。	同 上
7	The Motorization of Japan	日本の自動車化の歴史と、自動車社会の問題などを紹介している。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	The Home	戦前と戦後の家庭を比較し、日本人の生活様式がいかに変化し、生活が物質的にいかに豊かになっているかを述べている。	比嘉正範 ニコラス・ジョン・ティール
9	Leisure	日本人にとって余暇とは何か、趣味とは何かを論じている。	同　上
10	Educating the Nation	日本の寺小屋教育の発達、特徴、問題点などを説明している。	同　上
11	Imitators or Innovators ?	日本人は模倣能力に優れ、創造力に欠けていると一般にいわれているが、人類の文化を発達させるのに模倣が重要な役割を果してきたことを論じている。	同　上
12	The Family System	明治時代に法制化された日本の家族制度を説明し、これが戦後どのように変化したか、今後どう変化し得るかを論じている。	同　上
13	Police and Crime	交番に代表される日本の警察は、外国の警察に比べて犯罪の阻止と犯人の検挙に良い成績をあげているが、これの要因が何であるかを探っている。	同　上
14	Sex	性に対する日本人の考え方や態度を歴史的に説明し、これが戦後どのように変化しているかを述べている。	同　上
15	An Ageing Society	日本も高齢者の数が増え、欧米並みに社会が高齢化してきているので、高齢化した日本人社会における人口問題、出生率と育児の問題、老人の福祉の問題などを検討している。	同　上

＝英語Ⅱ－B 2＝(R)

主任講師：比嘉正範（放送大学教授）
ニコラス・ジョン・ティール
（同志社女子大学助教授）

全体のねらい

この科目の基本的な目的は、受講者が学術的な内容の英文を読めるようになることである。そのための入門的な教材として、学問分野の紹介文を使うことにした。このような英文に慣れることによって論文調の文章を読む能力を養っていきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	科目紹介	An introduction to the goals, structure and content of the course, with advice on how to study for it and suggestions for further reading.	比嘉正範（放送大学教授） ニコラス・ジョン・ティール（同志社女子大学助教授）
2	Philosophy	An introduction to Philosophy, the study of knowledge of and belief in reality. Exercises in making questions about the text and then answering them, and in vocabulary building.	同上
3	Anthropology	An introduction to Anthropology, the study of humanity and human culture. Exercises in making questions about the text and then answering them, and in vocabulary building.	同上
4	Archaeology	An introduction to Archaeology, the study of the remains of past human cultures. Exercises in making questions about the text and then answering them, and in vocabulary building.	同上
5	Sociology	An introduction to Sociology, the study of the individuals, groups and institutions that make up society. Exercises in making questions about the text and then answering them, and in vocabulary building.	同上
6	Psychology	An introduction to Psychology, the study of mental processes and behavior. Exercises in making questions about the text and then answering them, in analytical skills, and in vocabulary building.	同上
7	Learning	An introduction to Learning, the process by which changes in behavior result from experience or practice. Exercises in comprehension and analytical skills.	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Physics	An introduction to Physics, the study ofhow the world around us is put together and how it changes. Exercises in paragraph outlining and in structural analysis.	比嘉正範 ニコラス・ジョン・ティール
9	Astronomy	An introduction to Astronomy, the study of the stars, planets, and other objects that make up the universe. Exercises in paragraph outlining and in structural analysis.	同　上
10	Home Economics	An introduction to Home Economics, the study of the management of a household. Exercises in paragraph outlining and in structural analysis.	同　上
11	Health	An introduction to Health, the study of physical, mental and social well-being. Exercises in paragraph outlining and in structural analysis.	同　上
12	Ecology	An introduction to Ecology, the branch of biology that deals with relationships things have to each other and to their environment. Exercises in paragraph outlining and in structural analysis.	同　上
13	Business	An introduction to Business, the activities of all commercial producers of goods and services. Exercises in paragraph outlining and structural analysis.	同　上
14	Industry	An introduction to Industry, a group of businesses that produce a similar product or provide a similar service. Exercises in paragraph outlining and in structural analysis.	同　上
15	Statistics	An introduction to Statistics,a set of methods used to collect and analyze data. An exercise in outlining.	同　上

＝ドイツ語Ⅰ（その１）＝（TV）

主任講師：辻　　瑾（放送大学教授）
　　中山　純（明治学院大学助教授）

全体のねらい

その１では、ドイツ語の語学力の基礎となる文法知識と、その活用方法を習得する。また、単に文法規則や単語を暗気するだけの勉強に終らぬように、メディアの特性を考慮して、言葉の背景にある文化を、少しでも理解していただくために、毎回ドイツ都市を紹介していく。その１の授業は、ラジオを通じての、その２の授業と裏表になっており、授業の進み方に注意をして下さい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	Beginnen Wir!	ドイツ語とは、どんな言語か？ドイツ語の歴史や他の言語との関係を説明、発音や読み方を学びます。	辻　瑾（放送大学教授） 中山　純（明治学院大学助教授）
2	Rothenburg－1	名詞の性別や動詞の現在人称変化など、最も基本的な文法事項を説明し、必要な語彙も表示して、学習が本格的になります。	同　上
3	Rothenburg－2	非人称表現や名詞の複数形、複合名詞の性別の決め方などがこの課の文法事項。慣用句を用いた会話もあり、基本語彙も増えます。	同　上
4	Würzburg	都市紹介の文章も長くなり、文法事項としては前置詞が出てきます。その格支配を覚え、最後の応用文は自力で和訳すること。	同　上
5	Frankfurt am Main	特定の状況で前綴りが切りはなされる分離動詞を扱い、ドイツ語の文章の特徴となっているワク構造の勉強をします。	同　上
6	Düsseldorf	再帰動詞の説明と形容詞の用法上の問題点、それにdaß－文と呼ばれる副文を扱います。副文で重要なのは定形の位置です。	同　上
7	Hameln	現在完了形を扱い、完了時称を作るときの、動詞のhaben支配とsein 支配を解説。曜日や四季などの名前も覚えましょう。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Der Rattenfänger Von Hameln	折り返し点です。野外劇を楽しんでください。指示代名詞の説明と、数字や時刻・金額の言い表し方の練習。	中　山　　純
9	Goslar	疑問詞の説明と、付加語の形容詞が並んだ場合の注意事項。疑問詞のない疑問文の定形の位置。	同　上
10	Hamburg	形容詞の比較の作り方、関係代名詞に導かれる関係文、従属と並列の接続詞などを扱います。接続詞の種類と語順との関係に注意。	同　上
11	Berlin — 1	ここではドイツ語の「態」の問題、つまり能動態と受動態の作り方を取りあげます。「態」の違いは、物の見方の違いです。	同　上
12	Berlin — 2	文法事項として、接続法第Ⅰ式を解説します。用法上の問題や、直接法の時称との対応関係がその中心です。	同　上
13	München — 1	接続法第Ⅱ式の作り方と用法を勉強します。放送授業では、12課から14課までクラオスとガービのスケッチも扱います。	同　上
14	München — 2	一応初級文法を学んだところで、簡単な造語の方法を説明します。これは辞書をひくときに知っていると便利です。	同　上
15	Viel Erfolg!	この最後の課には、クラオスとガービのスケッチの台詞を掲載します。復習を兼ねて読んでください。初級の総まとめです。	辻　　理 中　山　　純

＝ドイツ語１（その２）＝(R)

〔主任講師：辻　　理（放送大学教授）
　　中山　純（明治学院大学助教授）〕

全体のねらい

その２の授業では、主として、その１で説明した文法事項の定着と、基本的な語彙の習得を目指す。更に、発音やイントネーションの練習もするので、その２の授業はドリル練習が中心になる。ヒヤリングと「書く」練習のためには、その２の７課からディクテーションが用意されている。その１の授業とあわせて、総合的な語学力を身に付けてほしい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	Beginnen Wir!	学習の要点：1）発音　2）動詞の現在人称変化　3）名詞　4）人称代名詞　5）冠詞	辻　理 中山　純
2	Was ist das?	学習の要点：1）発音　2）定冠詞／不定冠詞（４格）　3）名詞　4）疑問詞 was/wo	同　上
3	Was schenkst du ihm?	学習の要点：1）発音　2）定冠詞／不定冠詞（１・４格）　3）人称代名詞（３格）　4）前置詞	同　上
4	Sie ist hübsch.	学習の要点：1）発音　2）現在人称変化（幹母音が変音するもの）　3）前置詞　4）形容詞（述語的用法）　5）人称代名詞（３格）　6）Diktat	同　上
5	Was hast du morgen vor?	学習の要点：1）動詞の過去形　2）分離動詞　3）否定の表現　4）テレビLEKTION5のTEXT	同　上
6	Wie alt sind Sie?	学習の要点：1）数詞の練習　2）再帰動詞　3）形容詞　4）所有代名詞　5）否定の冠詞kein　6）テレビLEKTION6のTEXT	同　上
7	Wirst du morgen zu uns kommen?…	学習の要点：1）複合時称　2）形容詞の付加語的用法　3）Diktat　4）テレビLEKTION７のTEXT	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	Franz kann gut Klavier spielen	学習の要点：1）話法の助動詞　2）話法の助動詞に準ずる動詞　3）話法の助動詞の応用　4）Diktat	辻　　理 中山　　純
9	Wie spät ist es jetzt?	学習の要点：1）話法の助動詞　2）時刻の表現　3）疑問詞　4）命令文　5）テレビLEKTION 9 のTEXT　6）Diktat	同　上
10	Ist Hamburg kleiner als Berlin?	学習の要点：1）関係代名詞　2）形容詞（副詞）の比較　3）テレビLEKTION10 のTEXT　4）Diktat	同　上
11	Von wem wird er gerufen?	学習の要点：1）受動態　2）テレビLEKION 11 のTEXT　3）Diktat	同　上
12	Seien Sie etwas geduldiger!	学習の要点：1）接続法第Ⅰ式の練習　2）テレビLEKTION12 のTEXT　3）Diktat	同　上
13	Würden Sie mir das Buch mitbringen?…	学習の要点：1）接続法第Ⅱ式の練習　2）テレビLEKTION 13 のTEXT　3）Diktat	同　上
14	Könnten Sie mir eine Auskunft geben? …	学習の要点：1）接続法第Ⅱ式の用法（話法の助動詞を中心にして）　2）テレビLEKTION14 のTEXT　3）Diktat	同　上
15	Viel Erfolg!	学習の要点：副文の練習	同　上

＝ドイツ語Ⅱ－A＝（R）

〔主任講師：辻　　瑆（放送大学教授）〕

全体のねらい

ドイツ語Ⅰにつづく講義である。若いドイツ人夫婦クラオスとガービの日本体験を枠としながら、現代のすぐれた作家・思想家のさまざまな文体に触れていく。文章の構造を分析的・理知的に解明していくことと、言葉をきっかけとして想像力を駆使することが、実は同じ根拠に立つものであることを体得していきたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	Gabian ihre Eltern （両親にあてたガービの手紙）	日本に無事到着したことを知らせて、その目に映った日本人の姿、女性、男性、子供たちを描写していく。カルチャ・ショックの始まり？	辻　瑆 （放送大学教授） ニゲシュ テイヒ夫人
2	Gesprach mit einem japanischen Sensei 日本の先生との会話	日本の先生とクラオス、ガービの若夫婦。「何でも好きなように教えてほしい」という日本の先生。一定の目標やカリキュラムがあるはずだと思って怒るクラオス、なだめるガービ。	同　上
3	Schwierige Textauswahl （やっかいなテキスト選び）	テキストだのドイツ語だのと言っても、実に千差万別。その内容はまた必ず形式にあらわれる。日本人のロマンチックなドイツ像に困惑しながら、テキスト選びをする若夫婦。	同　上
4	Über Tagebücher 日記について	クラオスとガービは、自分たちの変化の足跡を書きとめるために日記をつけようとする。カネッティの日記についての一文が想起される。あくまで言葉による意識化を要求した文章。	同　上
5	Gespräch zu „Aufbruch" 『出発』についての会話	カフカの小品「出発」の解読。言葉が分っても、内容が分るとは限らない。想像力を駆使して、自分で文学を完結させることが必要。	同　上
6	Das Mittel zum wirklichen Friend 本当の平和への道	哲学者ニーチェが正当防衛を論拠にする軍事力保有を攻撃。 クラオスとガビは日本語で夢を見た？	同　上
7	Zumüberleben？ 生き残るため？	西独のすぐれた科学評論家ディトフルト教授の論文の一節。私たちの脳は、自然を客観的に認識するためでなく、私たちが生き残るためにできているのであろうか？1本の垂直な線の物語ること。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Warum ein Deutsch-Deutsches Wörterbuch？ なぜ独々辞典か？	T教授登場して、なぜ独々辞典かの長広舌。ゲルハルト・ヴァーリヒ著「現代独々辞典」の序文の一節を読み、他の辞典からいくつかの項目を紹介。	辻　　瑆 ニゲシュティヒ夫人
9	Sprache and Gesellschaet Ⅰ 言語と社会Ⅰ （言葉で嘘をつく？）	ある新聞のインターヴュ記事から。たとえば核廃棄物処理場をめぐる言葉の使用について。いったい言葉は、嘘をつく道具なのだろうか。	同　上
10	Sprache and Gesellschaet Ⅱ 言語と社会Ⅱ （ドイツ語におけるアメリカニズム）	公開討論の一部。ドイツ語にもアメリカ語は非常に多く流れこんでいる。その原因を探り、一見矛盾して見える社会と言語の相互作用を解明しようとする。アメリカ反対を叫ぶ若者たちの方が、かえってアメリカ風なのだ。	同　上
11	Der Hamor and die Deutschen ユーモアとドイツ人	どうもドイツ人の短い作品は、まじめくさってばかりいる、と嘆くガービ。そこでブレヒトに登場していただき「形式の素材」の訓話を一つ。	同　上
12	Kalturschock カルチュア・ショック	クラオスもガービも時に日本で体験するカルチュア・ショックに耐えられない。「あひるの博士」ローレンツが、「慣れたもの」への憧れを解明。	同　上
13	„Roman“ ロ　マ　ー　ン	現代スイスの作家ペーター・ビクセルの「ロマーン（長編小説）」という超短篇小説。そこに見られる現代性についてクラオスとガービが議論。	同　上
14	„Erbe“ 受け継いだもの	ドイツ語圏での流行語の一つ、「批判的」という言葉でも、実に千差万別に用いられ、意図し意味するところが正反対になりかねない。今は西ドイツに暮らすクンツェのわさびの利いた小品。	同　上
15	Über Städte 都市について	クラオスとガービは、都市の姿こそ、ヨーロッパの歴史を如実に物語るものと考え、抒情とファンタジーのあふれるベンヤミンのベルリン描写を想起する。歯が立つか立たないか。	同　上

＝ドイツ語Ⅱ－B1＝（R）

〔主任講師：辻　　瑾（放送大学教授）〕

全体のねらい

「ドイツ語Ⅱ－A」で抽象的な思考への糸口を把握したものと考え、「Ⅱ－B1」では印刷教材の量をふやしていきたい。印刷教材をreflexivに扱い、解釈する態度が求められる。世紀の転換期にミュンヘンに活躍した作家たちの作品を取上げるが、1945年のTh.マンの発言までをも視野に収めつつ、政治的状況が文学に複雑な影を落しているさまを言語表現の中に見ていく。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	Brief aus Japan	7年間の日本滞在を終えて、ドイツに帰国したニゲシュティヒ夫人にあてた手紙。南のミュンヘンで暮らす北ドイツ人は、何を感じているだろうか？	辻　瑾（放送大学教授）
2	Brief aus München	かつての芸術家居住区シュヴァービングは、今はただ不動産屋が跳梁するところ。かつての面影は全然ないとのむごいご託宣。	同上
3	Simpl <1>	シュヴァービングの現在がそういうことであるなら、残された作品によって、私たちはこれを再生させなくてはならない。Ringelnatzが描く芸術家酒場ジンプル。	同上
4	Simpl <2>	芸術家酒場ジンプルの続き。Ringelnatzはついにこのジンプルの座付詩人に昇格する。	同上
5	Gedichte von Ringelnatz und Mühsam	そのRingelnatzのひりりと皮肉の利いた可愛らしい詩と、ぐさりぐさりと人を刺すアナーキストMühsamの詩。	同上
6	Die Schutzimpfung <1>	Wedekindは当時のシュヴァービングの大御所。芝居の自作自演もしばしば。そのWedekindがめっぽう不道徳な不倫物語を語って聞かせる。	同上
7	Die Schutzimpfung <2>	こんな予防接種を女房にされたら、世の亭主たるもの生きた心地もしまいという、奇妙な話の続き。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Der Herr Fischötter <1>	伯爵家の生まれでミュンヘンのボヘミアンになった女流作家、Franziska Gräfin zu Reventlowの作品。	辻　　瑆 （放送大学教授）
9	Der Herr Fischötter <2>	この作品、やはり世紀末の特徴をそなえていると言えそう。女性と死と動かすことのできない運命がその主題。	同　　上
10	Der Herr Fischötter <3>	かわうそ氏のせいで恋人を失った方もかわいそうだし、罪もないのに決闘で殺されるかわうそ氏もかわいそう。かわいそうな人がいて初めて物語ができ上がるのだろうか。	同　　上
11	Kriegserklärung	不遇な女流作家Lena Christの作品。第1次世界大戦が勃発したとき、なぜミュンヘンの人々はインテリをも含めて、あんなに喜んだのであろう。	辻　　瑆 大　貫　敦　子 （放送大学助教授）
12	Räterepublik	１９１９年、たったの一か月足らずのことであるが、ミュンヘンにはレーテ共和国の政府が誕生した。その首班となったErnst Tollerの語る思い出。すごい混乱。	同　　上
13	Flucht und Verhaftung	レーテ共和国の首班であったTollerは、今は厳しく追われる身。ようやくかくまってもらった家でも、裏切り者の女に密告されてしまう。	同　　上
14	Ohrfeigen und Hausverkauf	これはKarl Valentinの二つの作品。いやでも笑っていただかないと、ミュンヘンから化けて出そう。どこか氷りつくようなValentinの笑い。	辻　　瑆
15	Mit Thomas Mann	Thomas Mannはミュンヘンに住み、ミュンヘンを愛し、ミュンヘンで傑作を書きあげた人。そのMannがいかにミュンヘンをまもり、またドイツ文化をまもろうとしたか。	同　　上

＝ドイツ語Ⅱ－B2＝（R）

〔主任講師：岩崎英二郎（独協大学教授）〕

全体のねらい

現在、ドイツの新聞や小説などでごくふつうに用いられている文章語が楽に読めるような実力をつけること。それを目標としてテキストの読解、「ドイツ語Ⅰ」では扱われなかった文法事項の解説、それと関連した独作文の練習を行う。単にドイツ語を受動的に理解するだけでなく、ドイツ語で自分の考えを発表する力をつけることの重要さを強調したいと思う。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	Die elektronische Gesellschaft (1)	文法解説　－話法の副詞－ 独作文(1)	岩崎　英二郎 （独協大学教授）
2	Die elektronische Gesellschaft (2)	文法解説　－語構成(1)－ 独作文(2)	同　上
3	Die elektronische Gesellschaft (3)	文法解説　－語構成(2)－ 独作文(3)	同　上
4	Die elektronische Gesellschaft (4)	文法解説　－語構成(3)－ 独作文(4)	同　上
5	Die elektronische Gesellschaft (5)	文法解説　－文の種類－ 独作文(5)	同　上
6	Die elektronische Gesellschaft (6)	文法解説　－文の構成要素－ 独作文(6)	同　上
7	Die elektronische Gesellschaft (7)	文法解説　－補足成分と添加成分(1)－ 独作文(7)	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Die elektronische Gesellschaft (8)	文法解説　－補足成分と添加成分(2)－ 独作文(8)	岩　崎　英二郎
9	Die elektronische Gesellschaft (9)	文法解説　－付加語－ 独作文(9)	同　　上
10	Die elektronische Gesellschaft (10)	文法解説　－配語法(1)－ 独作文(10)	同　　上
11	Die elektronische Gesellschaft (11)	文法解説　－配語法(2)－ 独作文(11)	同　　上
12	Die elektronische Gesellschaft (12)	文法解説　－心態詞－ 独作文(12)	同　　上
13	Begegnungen mit Fritz W　(1)	独作文(13)	同　　上
14	Begegnungen mit Fritz W　(2)	独作文(14)	同　　上
15	Begegnungen mit Fritz W　(3)	独作文(15)	同　　上

＝フランス語Ⅰ（その１）＝（TV）
－生きた会話表現－

〔主任講師：福井芳男（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

視覚による状況の把握とフランス語の音との結びつきが、自然に行なわれるよう、アニメ、ロケーションなどによる素材を使い、発音練習、構文練習を併用して、聴き、話し、理解する能力を涵養する。よい発音習慣と少数の文法の運用能力をつけて、フランス語の入門とする。特に構文感覚の養成を重視する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	Bonjour, Viriane（こんにちは、ヴィヴィアーヌ）	フランス語の母音・単母音・半母音、むずかしい子音や名詞の性、名詞の数、名詞標識語（不定冠詞）など。	福井芳男（放送教育開発センター教授）
2	Ils s'amusent（彼らは遊ぶ）	フランス語の発音上の注意と動詞の不定形、-er動詞の直説法・現在形、疑問形、否定形、定冠詞の縮約など。	同上
3	Pres dúne ferme（農場の近くで）	リエゾン、アンシェヌマン、エリジョンの解説。etre の直説法・現在形、形容詞の女性形、導入詞など。	同上
4	Ils vont voyager（旅行）	フランス語のリズム段落について。文法解説はavoirの直説法・現在形、主語のon、形容詞の位置など。	同上
5	復習 (1)	第1課から第4課までの総復習。さらに冠詞以外の名詞標識語のまとめ、「子供たちの言葉の習得」についてアドバイスなど。	同上
6	Dans le train（車中で）	alle と faire の直接法・現在形。il が使われる非人称構文、時間の表現など。	同上
7	Ala sortie de la gare（駅の出口で）	復合過去形の説明と否定のいろいろな型（否定の副詞・否定の代名詞）など。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Au jardin des Tuilerie （チュイルリー公園で）	半過去形の説明と各種の代名動詞について。	福井芳男
9	Au Quartier Latin （カルチェ・ラタンで）	人称代名詞、肯定命令文と人称代名詞、強勢形人称代名詞など。	同　上
10	復　　習　(2)	第6課から第9課までの総復習。finirの直説法・現在形と不規則動詞の現在形。ヴェルレーヌの有名な詩を味わってみる。	同　上
11	Les images （画　　像）	中性代名詞enとyの用法。devoirの現在形、動詞＋不定形について述べる。	同　上
12	Sur la Seine （セーヌ河で）	動詞の未来形の形と用法、命令形と代名詞について。	同　上
13	Le matin （朝）	形容詞・副詞の比較級・最上級、フランス語の6文型について。	同　上
14	Adieu （さようなら）	複文（並置文・等位文・従属文）と従節（名詞節・形容詞節・副詞節）の説明。	同　上
15	復　　習　(3)	第11課から第15課までの総復習。文型の展開を名詞グループ、動詞グループにわけて学ぶ。	同　上

＝フランス語Ⅰ（その２）＝　（R）

〔主任講師：福井芳男（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

ラジオというメディアの特性を考え、音の直接把握と学生の反応の敏速化をねらう。同時に文法項目をこまかに、体系立てて解説することにより、フランス語の理解を深め、聞き、読み、話すという能力の基礎を与える。テレビ（フランス語Ⅰ－Ａ）と関連させ、発表能力と構文知識をより深めて行く。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	会話と発音	簡単な基礎会話を習得しつつ、フランス語の発音訓練、綴り字の読み方を勉強する。母音、鼻母音、むずかしい子音、リエゾン（連読）、アンシェヌマン（連音）、エリジョン（母音省略）など。	福井芳男（放送教育開発センター教授）
2	動詞の変化と否定文・疑問文er	動詞の現在形を通じ、基本文型とその変形の基礎を習得する。	同上
3	名詞と名詞グループ	冠詞類と名詞との関係を覚え、かつ名詞の性・数、C'est ～, Ce sont ～など導入詞を勉強する。	同上
4	avoir と etre	基本的な２つの動詞の現在形を学び、そのさまざまな用法を勉強する。他に国籍を表す名詞（形容詞）、国名と性、定冠詞の縮約など。	同上
5	形容詞と数・時間の表現	形容詞の女性形、形容詞の位置と、数詞、時間の表現を学ぶ。	同上
6	６文型と動詞の現在形	基本的な不規則動詞の直説法・現在形を学ぶとともに、フランス文の６文型を理解する。	同上
7	非人称構文と動詞句	天候、時間などの表現、さらにフランス語で多く使われる動詞＋不定形の結びつき方を説明する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	疑問文と動詞の現在形	疑問代名詞、疑問形容詞、疑問副詞によるさまざまな疑問文型と、重要な不規則動詞の変化について述べる。	福井芳男
9	否定文と動詞の現在形	否定のさまざまな型と重要な不規則動詞の変化に触れる。	同　上
10	代名詞と形容詞・副詞の比較級・最上級	最上級、人称代名詞の用法、位置などを学び、さらに形容詞・副詞の比較級・最上級について勉強する。	同　上
11	代名動詞と中性代名詞 en と y	再帰的代名動詞、相互的代名動詞、受動的代名動詞、本質的代名動詞について勉強し、かつ中性代名詞 en と y の使い方を学ぶ。	同　上
12	動詞の過去形とその用法	複合過去、半過去、大過去の３つの過去の表現様式を説明し、その形を覚える。ほかにリエゾンの解説も。	同　上
13	動詞の未来形とその用法	変化がやや複雑な未来形とその用法について説明し、前未来形にも触れる。さらに命令形のさまざまな形と、使役動詞としての laire＋不定形を勉強する。	同　上
14	関係代名詞と現在分詞	関係代名詞のしくみと過去分詞の一致、現在分詞の用法、ジェロンディフの用法などを勉強する。	同　上
15	文　の　構　造	基本文型とその展開の諸様式を学習し、また複文とはなにかについて説明する。さらに受動形、se faire＋不定法にも触れる。	同　上

＝フランス語Ⅱ－A＝(R)

〔主任講師：福井芳男（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

複文構造をまず把握することによって、読み、理解するという方向に前進する。それもラジオというメディアを通じて、フランス語のイントネーションの理解を深め文のみならず思考のリズムをつかまえるようにする。さらにさまざまの型の文章に接し、フランス語の文章に慣れるようにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	Si…（もし…） 副詞節と条件法	まず副詞節・特に仮定節を学び、それとの関連で条件語を勉強する。	福井芳男（放送教育開発センター教授）
2	Il a dit que…（彼は言った） 間接話法と時制の一致	名詞節の一環として間接話法を学ぶか、必然的に時制の一致の問題に触れる。	同上
3	Je voudrais…（…したい） 接続法 (1)	名詞節内における接続法（現在形・過去形）を学ぶとともに、その形を習得する。	同上
4	Bien que le travail soit difficile（仕事はむずかしいけれど）接続法(2)	形容詞節、副詞節を中心に接続法の用法を勉強する。	同上
5	Signe de lhisto re（歴史のしるし） 単純過去の体系	単純過去を用いる文における過去の体系を学び、歴史、小説などの記述文への導入部とする。	同上
6	Lettres（手紙） 文章読解 (1)	読解訓練の最初は手紙・生活に必要なやさしい手紙や、練習では少しきちんとした手紙など。フランス語の手紙は日本での手紙の書き方とはかなり異なった注意を必要とする。	同上
7	Metéo et rapport dún fait（天気予報と事実の報道文）文章読解(2)	天気予報や事件の報道の文体を新聞記事から勉強する。速報を重んずるジャーナリズムには、多くのパターン、きまった言い回しがある。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	文章読解 (3)	歴史記述文（事実を語るものだけ）と軽いコント。洗練された笑いには、いろいろな要素が必要である。	福井芳男
9	文章読解 (4)	軽い笑い話、インタビュー記事。話し言葉の気楽さと書き言葉のまじめさが混在するインタビュー記事は、現在かなり発行している発表形態。	同上
10	文章読解 (5)	書き言葉への移行。書き言葉には単語の明確化、動詞の名詞化など、フランス語が知的で理窟っぽいといわれるさまざまな特徴がある。歴史記述文を付記。	同上
11	フランスと日本(1) （文章読解）	パリについての簡単な紹介、パリ人気質など。さらに第14課まで4回にわたり、日仏交流の歴史を振り返る。	同上
12	フランスと日本(2)	フランス語と外来語について。フランス語の純粋さを護ろうとする動きと、英語を使ってしゃれれ言い方をしてみたい流行性と…	同上
13	フランスと日本(3)	日本のことを何も知らないフランス人に、日本の風俗習慣や食物などを説明するにはどうするか。フランス語のよい練習になる。	同上
14	Decion á la japonaise （日本的決定法） フランスと日本(4)	ロベール＝ギランの日本的な方針決定法を読みながら、フランス人に見られる日本理解の進展について考える。	同上
15	La France et le Japon （フランス詩の翻訳） フランスと日本(5)	ヴェルレーヌらのフランス語の詩を美しい日本語に移しかえた。	同上

＝フランス語Ⅱ－B1＝(R)

〔主任講師：福井芳男（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

Ⅱ－Aまでに習得した文法知識と語彙力の基礎的な部分によって、かなり高度のコミュニケーション能力が発揮できることを示すため、Ⅱ－B－1においては会話力、発表力の開発に重点を置く。特に重要な状況を想定して、相手の意見を聞き、自分の考えも述べられる。知的なコミュニケーションができるようになることを目標とするすべての課にフランス人、日本人ゲストによる実習をも含む。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	自己紹介	まず自分が何者であるかを相手に知らせること、ついではある人物を別の人にこまかく紹介する術を学ぶ。	福井芳男（放送教育開発センター教授）
2	情報の求め方	相手にいろいろと情報をたずねる場合の言いかた。この場合聞きとり練習も兼ねることが必要であろう。	同上
3	指示、命令	仕事の上でいろいろな指示を出し、また命令を出す場合の言い回し、答えかたを学ぶ。	同上
4	情報の与え方	フランス流に適確な情報を与える場合、特にニュース、コメント、日常生活情報などの与え方を学ぶ	同上
5	復習と応用	1－4までのパターンを復習するとともに応用会話を通じて短かい応答に必要な合の手、成句などを学ぶ。	同上
6	意見、判断の述べかた	まず自分の考え、意見を述べるための表現を学ぶ。	同上
7	賛意支持の表現法	相手、あるいは第三者の意見に賛意を表し、あるいはそれを支持する言いかたをさまざまのニュアンスで表現できるように訓練する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	反論の言いかた	議論においては必らず反論が必要となる。時に西欧の人たちとの議論では反論の技術が必要となる。	福井芳男
9	疑い、保留の表現法	6, 7, 8課においてニュアンスをつける練習をするがそれをふえんして疑いなどの表現を加え、さらに論理立ての問題に触れる。	同　上
10	復習と応用	6－9までのパターンを復習するとともに応用会話を通じて議論などに必要な合の手、成句、書き言葉的な言い回しを学ぶ。	同　上
11	感嘆文	11－14までは感情をこめた言い回しの練習になる。まずは感嘆文について学ぶ。	同　上
12	喜び、悲しみの表現	感情表現基本的なものは喜び悲しみである。1－10までに学んだ平常の情報伝達、議論などの場合にもこれらの表現をいかに生かすかも考える。	同　上
13	怒り、憎しみ、楽しさの表現	ここでは以上の感情表現のほかに単語の使用法によってどう感情を表わすかという語彙論的な側面も検討する。	同　上
14	皮肉、優しさ誇張	すでに会話における修確率な面は何度かとりあげていると思うが、ここでは特に皮肉、からかい、誇張などの面を中心にしていわば会話のテクニックについて考えてみる。	同　上
15	復習と応用	11－14までの復習とともに俗な表現、上品な表現という位相の問題に触れる。	同　上

＝フランス語Ⅱ－B2＝(R)

〔主任講師：福井芳男（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

書き言葉を中心として、社会、人文系のフランス語文献を読むよすがを作るための清読をおこなう。これは文学作品を読むために十分役立つであろう。特に新聞、雑誌での記事を読むための入門とし、フランス社会での重要事項『日常生活』『女性の（地位の）問題』『教育問題』をとりあげてフランス社会へのアプローチの鍵をそこに見出そうと考える。そして書き言葉への入門となればよいと考えている。現実の事象について考える力をつけることがフランス語の力をつけることになるのである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	食事：新しい食うこと	フランス人の生活で最も重要なもののひとつが食事である。しかし、現代生活ではどう変わってきているのだろうか。	福井芳男（放送教育開発センター教授） 井戸桂子（放送大学助教授）
2	食通の天国	現代のあらゆる変化にもかかわらず、フランス料理は依然としてフランス文明の最も重要な産物のひとつである。その中心にリヨンがある。	同上
3	フランス人の金銭感覚	「毛糸の靴下の中に」金貨をひそかに貯めているというのは、フランスについて一般的にもたれているイメージであるが、現代社会では、それがどうなっているであろうか。	同上
4	家族の変化	家族はしばしば糾弾されてきたが、多くの人がまだ執着しているものでもある。現代社会の中でフランスの家族はどうなっているのだろうか。	同上
5	バカンスによる大いなる断絶	バカンスはフランスでは大切な制度になっている。バカンスがどのようにフランス人の中に入りこんでいるか。この問題を考えることはますます発達するレジャー文明を考えることになる。	同上
6	生命を与える女性	女性の地位向上は20世紀後半、全世界での重要問題である。先進的な役割をしてきたフランスだが、どういうふうに問題をとらえているのだろうか。まず母性と女性の解放の問題がある。	同上
7	働く女性の問題	女性が働くときどういった問題があるのか。特に過労、心労は並たいていのものではない。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	女性の戦い(1)	女性解放の重要な担い手であり、女性問題省の大臣もやった、フランソワーズ・ジルーの手記から、まず女性の解放の基本問題に触れている部分をとりあげる。	福井芳男 井戸桂子
9	女性の戦い(2)	女性解放問題で、ジルーはシモーヌ・ド・ボーヴワールの立場を批判しているが、これは、問題のむずかしさをさらに明確化する。	同　上
10	女性の労働	総括として、女性の労働の状況を、働く女性たちがどう見ているか、という問題をとりあげる。	同　上
11	学校：人生についてのある種の概念	社会の根幹は教育にある。まずフランス人と学校との関連についての記事を見る。	同　上
12	秘かな選別	公式の選別（バカロレア）の他に、バカロレア内での格づけ、そして重要なリセへの優秀な生徒の集中化現象が見られる。	同　上
13	私学の新たな成功	フランスの公立絶対化がどうくずれているか、日本の現状とくらべて、たいへん興味ある現象が起っている。	同　上
14	エナ（E.N.A.）に入ること	フランスの高等教育で最も特徴ある、グランドゼコルの問題を見ていく。	同　上
15	5月の事件とその影響	68年5月、大学を吹き荒れた騒動とは何であったか。それはどういう影響を与えたかを見る。	同　上

＝ロシア語（前半）＝（R）

〔主任講師：浅岡宣彦（大阪市立大学助教授）〕

全体のねらい

ロシア語前半では名詞の格変化と動詞の人称変化に的を絞り、基本的文型、文例をえらんで分かり易い内容のものにしたい。そのために最少限必要な文法の基本的事項を厳選し、使用語　を制限し、ロシア人に吹き込みをお願いして、耳からの学習の利点を生かしていきたい。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	文字と発音(1)	アルファベット　•母音 子音の分類　•有声子音と無声子音 アクセント　•母音の弱化(1) a と o の場合 子音の音声的変化（同化現象）	浅岡宣彦 （大阪市立大学助教授）
2	文字と発音(2)	軟子音　•軟音記号 b 硬音記号 ъ　•母音の弱化(2) Я と e の場合 正書法の規則 硬母音字と軟母音字の語尾における対応	同　上
3	第1課 簡単な文章	ロシア語の品詞　•「ある、いる、である」 活動体名詞　•疑問文とその答え 等位接続詞 И, a, НО　•AではなくてB AかBか　•イントネーション	同　上
4	第2課 名詞の性・数・格	名詞の性（男性・女性・中性）•名詞の数 名詞の格　•若干の特殊な複数形 名詞の単数主格　•人称代名詞 所有代名詞	同　上
5	第3課 動詞の人称変化(1) 名詞の対格	動詞の不定形　•動詞の現在(1)－第1変化－ 動詞の現在(2)－若干の特殊変化－ 疑問代名詞 КТО, ЧТО と名詞の単数対格 人称代名詞の対格　•他動詞	同　上
6	第4課 動詞の人称変化(2) 名詞の前置格	動詞の現在(3)－第2変化－ 子音の交替A、歯音変化　B、唇音変化 ИО　РУсСКИ と РУССКИИ　ЯЗЫК 名詞の単数前置格　•不変化名詞	同　上
7	第5課 形容詞の長語尾形	形容詞の長語尾形　•形容詞的代名詞 個数詞（1～10）　•順序数詞 形容詞の述語的用法　•動詞ОЬIТЬの過去と未来 動詞ЖИТЬ、ХОТеТЬ　•時を示す副詞 （補語的）従属複文	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	第6課 動詞の過去、命令法	動詞の過去 疑問詞ＫＴＯ、ЧТОと述語動詞の過去 命令法（２人称） 不定人称文　　• 副詞 曜日の表現　　• 形容詞から派生した名詞	浅岡宣彦
9	第7課 名詞の生格	名詞の単数生格 疑問詞ＫТО、ЧТОと人称代名詞の生格 生格の用法「AはBを持っている」 否定の生格 期間を示す対格　　• 個数詞 2, 3, 4 と名詞の生格 УМеТьとМОЧь　　• НＮ…、НＮ…、	同上
10	第8課 動詞の体	動詞の体（不完了体動詞、完了体動詞） 過去時制における体の基本的意味 否定文における体　　• 体と時制 動詞の体の形成	同上
11	第9課 動詞の未来、 －ＣЯの動詞	動詞の未来（合成未来と単一未来） 命令法と体　　• 否定文における命令法 再帰代名詞 себя　　• -СЯ動詞 時刻の表現(1)　　• 月の名	同上
12	第10課 名詞の与格	名詞の単数与格 疑問詞ＫТО、ЧТОと人称代名詞の与格 無人称文　　• 不定法文 НеТІь3Яの用法　　• НравВПТьСЯの用法 名詞の与格を要求する動詞	同上
13	第11課 名詞の造格	名詞の単数造格 疑問詞ＫТО、ЧТОと人称代名詞の造格 造格の用法　　• 前置詞 с の用法 述語としての造格　　• ИгРаТь の用法 関係代名詞　　（主格）	同上
14	第12課 運動の動詞	運動の動詞　　• 定動詞の用法 不定動詞の用法 空間関係を表す表現（Где? Куда?Откуда? の問いに答える） 場所の副詞　　• のり物の手段	同上
15	第13課 復習編・名詞の格変化	名詞の単数の格変化 疑問代名詞ＫТО、ЧТОの格変化 人称代名詞の格変化 主格、生格、与格、対格、造格、前置格の用法	同上

＝ロシア語（後半）＝（R）

〔主任講師：浅岡宣彦（大阪市立大学助教授）〕

全体のねらい

前半は文法事項の説明が煩雑にすぎた点に留意し、後半では文法事項を絞り、文章の読みを多くしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	第14課 名詞複数の格変化(1)	男性名詞の複数変化 女性名詞の複数変化 中性名詞の複数変化 数量を示す性格	浅岡宣彦 (大阪市立大学助教授)
17	第15課 名詞複数の格変化(2)・数詞(1)	-bに終わる女性名詞 男性名詞 数詞と名詞との結合 集合数詞 個数詞(1)　個数詞(2)	同上
18	第16課 形容詞の格変化	疑問代名詞 какой 指示代名詞 этот，тот の格変化 個数詞と形容詞・名詞との結合	同上
19	第17課 形容詞的代名詞の格変化	再帰所有代名詞 свой 定代名詞 весь，сам，самый	同上
20	第18課 形容詞の短語尾形	男性単数形における母音の挿入 短語尾形の用法 рад，до жен（ねばならない）	同上
21	第19課 体の形成(続)－接頭辞のある運動の動詞	特殊な接頭辞 по-，за- 接頭辞のある運動の動詞の主な用法 1人称、3人称の命令法	同上
22	第20課 形容詞の比較級・副詞の比較級	形容詞の比較級 副詞の比較級 比較級とともに用いられる副詞・副詞句 比較級を含む表現 普遍人称文	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
23	第 21 課 形容詞の最上級・副詞の最上級	形容詞の最上級 副詞の最上級 順序数詞 年月日の表現	浅　岡　宣　彦
24	第 22 課 数詞(2) ── 個数詞の格変化	概数の表現 時間の表現 前置詞を用いる時の表現	同　上
25	第 23 課 仮　　定　　法	条件の従属文 目的の従属文 譲歩の従属文 ロシア人の姓名と父称 年齢の表現	同　上
26	第 24 課 否定代名詞・否定副詞　不定代名詞・不定副詞	疑問代名詞・疑問副詞	同　上
27	第 25 課 関係代名詞・関係副詞	関係代名詞 кто, что, который, какой, чей 関係副詞　　場所の従属文 時の従属文　　原因の従属文 結果の従属文　　様態の従属文 接続詞 что と чтобы の用法	同　上
28	第 26 課 副動詞・形動詞(1)	副動詞の形成 副動詞の用法 形動詞(1) ── 能動形動詞（現在と過去） 形動詞の位置	同　上
29	第 27 課 形　動　詞　(2)	被動形動詞（現在と過去） 被動形動詞短語尾形 形動詞をもつ名詞・形容詞 受動相	同　上
30	第 28 課 話　　法	読み物	同　上

＝中　国　語　Ⅰ　＝（R）

〔主任講師：頼　惟勤（千葉経済大学教授）
　　平松圭子（大東文化大学教授）〕

全体のねらい

漢字は表意文字であるから、表音文字を利用しつつ前半では発音練習に重点をおき、かつやさしい文型を通して中国語のリズムを習得できるようにする。後半では動詞を中心とした慣用句型に初歩的な文法の説明を加える。全体を通じ、語順が大切なので、基本表現の文例をできるだけ多くして語順の習得をめざす。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	第1課　発音Ⅰ	はじめに、普通話（標準語）について 拼音字母（発音記号） 母音（その1、単母音） 声調 母音（その2、複合母音、鼻母音、特別母音）	頼　惟勤 （千葉経済大学教授） 平松圭子 （大東文化大学教授）
2	第2課　発音Ⅱ	子音 発音表記のまとめ 声調の変化①¥3声	平松圭子 中国人講師 欧陽可強
3	第3課　请多帮助 （どうかよろしく）	人称代名詞 〃是〃を用いた述語文（主語＋是＋名詞） 疑問文①〃吗〃 声調の変化②〃不〃 声調の変化③軽声	同上
4	第4課 这本书很好 （この本はとてもよい）	形容詞述語文 造句助詞　〃的〃 疑問文②反復疑問文	同上
5	第5課 今天几月几号？ （今日は何月何日ですか）	数のいい方 年、月、日、時間のいいかた 疑問文③疑問詞のいろいろ 声調の変化④〃一〃	同上
6	第6課 我有两个中国朋友 （中国の友人が二人いる）	量詞（助数詞）〃个〃、そのほかの量詞 動詞述語文目的語の位置 動詞の否定①　〃不〃 声調の変化⑤〃儿〃	同上
7	第7課 画得很象我 （わたしにそっくりに画けました）	程度補語をもつ動詞述語文（造句助詞〃得〃） 程度補語の否定と疑問 目的語の前置 造句助詞〃地〃	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	第８課 正所听音楽 （いま音楽を聞いています）	動作の進行、持続を表す副詞〃正在〃 時態助詞〃着〃〃呢〃 疑問文④選択疑問 動詞の否定②　〃没〃	平松圭子 中国人講師 欧陽可強
9	第９課 看过中国电影 （中国の映画を見たことがあります）	動作の完了、経験を表す時能助詞〃了〃〃过〃 完了、経験の否定 語気助詞〃了〃 動量詞（動作の回数を表す）	同　上
10	第10課 我能看中文报 （私は中国の新聞を読むことができます）	能願動詞〃能〃〃会〃〃可以〃〃要〃 〃应该〃 簡単方向補語　〃来〃〃去〃 方向補語と目的語の位置	同　上
11	第11課 什公时候看完？ （いつ読み終りますか）	結果補語 結果補語を伴う動詞の否定 処置式　〃把〃による目的語の前置	同　上
12	第12課 你一个人搬得动搬不动? (一人で動かせますか)	可能補語 可能補語の否定 可能補語を用いた文の疑問型 複合方向補語① 複合方向補語と目的語の位置	同　上
13	第13課 比以前好多了 （以前よりずっとよくなりました）	比較表現①　〃比〃 比較表現②　〃象〃……一〃样〃 〃跟〃　　一〃样〃 比較表現③　〃有〃を用いた比較表現 介詞のはたらき	同　上
14	第14課 刚学了两个多月 （やっと二ケ月余り勉強したところです）	時間補語 時間補語と目的語の位置 複合方向補語②	同　上
15	第15課 请朋友去吃饭 （友人を食事にさそう）	兼語式構文 使役表現　〃叫〃〃〃〃使〃 受身表現　〃叫〃〃〃〃被〃	同　上

＝中　国　語　Ⅱ＝（R）

〔主任講師：頼　惟勤（千葉経済大学教授）
　　平松圭子（大東文化大学教授）〕

全体のねらい

入門編では平易な話しことばを学習した。今回はそれに続いてやや程度の高い文章を読みながら慣用句型、文法を学び、複雑な構文を解読する。テキストの内容には、少年向けの易しい文章、比較的平易な筆調の随筆、論文調の文章、新聞記事など異る文体の文章を集めた。解読を通して中国語の特長について基本的な常識を学ぶ。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	变戏法（手品をつかう）	1. 中国語の句読点について 2. 副詞“再”“又”“还”	頼　惟勤（千葉経済大学教授） 平松圭子（大東文化大学教授） ゲスト　中国人講師 魏　鐘　祺
2	东嶺朝霞・1（東嶺の朝やけ－1）	1. 存現文 2. 連動式	平松圭子（放送大学助教授） 中国人講師 魏　鐘　祺
3	东嶺朝霞・2（東嶺の朝やけ－1）	1. “一” 2. ことばのはばについて。接続詞のはたらきをする“好” 〔口字句と成語〕	同　上
4	我的伯父㈠ 私の伯父さん	1. 有的 2. 同一の数詞と量詞の反復 3. 離合動詞	同　上
5	我的伯父㈡ 私の伯父さん	1. 跟着 2. 不过 3. 光 4. 疑問詞の特殊な用法	同　上
6	我的伯父㈢ 私の伯父さん	1. 反語の表現① 2. 是不是	同　上
7	我的伯父㈣ 私の伯父さん	1. 虽然…，但是…， 2. 都 3. 那么 4. 是…的	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	养　花（一） 鉢植えの楽しみ	1. 丙為～所以… 2. 只要～，就… 3. 不是～就是… 4. 尽管 5. 象～似的	平松圭子 中国人講師 魏　鐘　祺
9	养　花（一） 鉢植えの楽しみ	1. 不但～ 2. 不利于～ 3. 4. 反語の表現②	同　上
10	从札幌到长崎・求知之行・1（札幌から長崎まで－新知識を求めて）	1. 用 2. 把 3. 対 4. 適対 5. 由于	同　上
11	从札幌到长崎・求知之行・1（札幌から長崎まで－新知識を求めて）	1. ～也好…也好 2. 不　～而且…	同　上
12	“朝潮朝落”和“长涨长消”・1「朝に潮満ち、朝に潮引く」と「長く湧き、長く消ゆ」	1. 不妨 2. 一下	同　上
13	“朝潮朝落”和“长涨长消”・1「朝に潮満ち、朝に潮引く」と「長く湧き、長く消ゆ」	1. 前後に同じ疑問詞を対応して用い、強調を表す。 2. 由	同　上
14	“朝潮朝落”和“长涨长消”・1「朝に潮満ち、朝に潮引く」と「長く湧き、長く消ゆ」	1. 要是 2. 也许	同　上
15	“朝潮朝落”和“长涨长消”・1「朝に潮満ち、朝に潮引く」と「長く湧き、長く消ゆ」	1. 如果 2. 会	同　上

＝ 中 国 語 Ⅲ ＝ (R)

～論理と接続関係～

〔主任講師：伊藤敬一（中京大学教授）〕

全体のねらい

中国語Ⅰ、Ⅱで基礎課程を終了したので、この中国語Ⅲでは、やや長い文章や少しむずかしい作品を取り上げる。その中で、中国語の孤立語的性質の背後にある中国語の論理を把握すること。およびそれによって表現された中国的作品世界へのアプローチが読書力をつけるカギであると考える。これらを重点に学習して行く。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	有的人（ある人）	著名な現代中国の詩人藏克家が魯迅を記念して詠んだ詩。ここで中国語の主述関係、句と句節と節、文と文の接続関係、および文章全体の論理の問題を語法の観点から分析してみたい。	伊藤敬一（東京大学教授） 中国人講師 黄麗華
2	魯迅詩文両則（魯迅の詩と文二つ）	第一課との関連で、魯迅の有名な旧体詩≪自嘲≫と散文≪；野草，題辞≫を読む。ここでも接続と論理の問題を考えると共に，参考としてこの二つの作品に関する評論の一部を収めた。なおローマ字　かち書きの規則と品詞分類をとりあげる。	同　上
3	牛郎织女 (1)（牽牛と織女・その一）	第３課から第６課は中国の代表的童話作家葉紹鈞（聖陶）が書いた七夕伝説（羽衣伝説）である。きわめて調子のよい名文で朗読や聞きとりの練習に適している。語法のポイントとしては、やはり文の接続関係と論理の展開の問題を論じたい。	同　上
4	牛郎织女 (2)（牽牛と織女・その二）		同　上
5	牛郎织女 (3)（牽牛と織女・その三）		同　上
6	牛郎织女 (4)（牽牛と織女・その四）		同　上
7	火车上的威风 (1)（バカ大将汽車に乗る・その二）	第７課から第10課は文革の初期1966年８月に、紅征兵の迫害を受けて非業の死をとげた作家老舎が、1959年頃ひそかに書き、未発表のまま、死後13年目の1979年、名誉回復後天人の手によって発表された一幕劇。老舎の初期のユーモア短篇小説≪馬　先生≫（1933年）を自分の手で改編脚色したもの	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	火车上的威风(2)（バカ大将汽車に乗る・その二）	で、きわめて中国的な作品であり、「かけ合いまんざい」を思わせる会話は絶妙である。作品鑑賞と共に、ここでも中国語特有の接続と論理展開の問題を深める。 また、練習として、旧作の小説の一部もとりあげたい。	伊藤敬一（東京大学教授） 中国人講師 黄麗華
9	火车上的威风(3)（バカ大将汽車に乗る・その三）		同　上
10	火车上的威风(4)（バカ大将汽車に乗る・その四）		同　上
11	夜　（之一）（夜・その一）	第11課から第15課は中国の代表的な女流作家丁の円熟期とも云える延安時代の代表作'夜'をよむ。作品鑑賞と同時に、ここでも接続と論理の問題を考える。なお、時代背景を知る上で、内容的に若干関連した同時期の問題作である随筆「三八節有感」の一部を練習でとりあげたい。	同　上
12	夜　（之二）（夜・その二）		同　上
13	夜　（之三）（夜・その三）		同　上
14	夜　（之四）（夜・その四）		同　上
15	夜　（之五）（夜・その五）		同　上

＝ 中　国　語　Ⅳ ＝ (R)

～文革をめぐる中国人の心～

〔主任講師：伊藤敬一（中京大学教授）〕

全体のねらい

中国語Ⅲで中国語の論理と接続関係を学んだので、その応用として、今回は比較的長い作品を読む。文革後の中国人の心を知るため、老世代を代表する巴金と若い世代を代表する張抗抗の作品を選んだ。最近の新しい語彙や全般的な語法の問題も随時とりあげる予定である。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	巴金作 「怀念萧珊」(1) （わが妻シアオシャンを偲ぶ） （その１）	中国文学界の長老であり、世界的にも著名な作家巴金は、「文革」中の迫害の中で、最愛の妻蕭　を亡くした。その深い心の傷は読者の心を打たずにはおかない。そしてその傷が巴金の現在の生き方の支えともなっている。	伊　藤　敬　一
2	同　上 (2) （同　上） (その 2)		同　上
3	同　上 (3) （同　上） (その 3)		同　上
4	同　上 (4) （同　上） (その 4)		同　上
5	同　上 (5) （同　上） (その 5)		同　上
6	同　上 (6) （同　上） (その 6)		同　上
7	張抗抗作 「夏」　(1) （夏）　(その 1)	文革中黒龍江の酷寒の農場に八年間下放した経験をもつ若い女流作家張抗抗の作品は、古い倫理的規範や共同体的な規制にひやかな目を向けるが、同時に自由を求める青春の血は、はれやかな未来にも目を向ける。	同　上 （発音指導） 黄　麗　華

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	同　上 （2） （同　上） (その 2)		同　上 （発音指導） 黄　麗　華
9	同　上 （3） （同　上） (その 3)		同　上
10	同　上 （4） （同　上） (その 4)		同　上
11	同　上 （5） （同　上） (その 5)		同　上
12	同　上 （6） （同　上） (その 6)		同　上
13	同　上 （7） （同　上） (その 7)		同　上
14	同　上 （8） （同　上） (その 8)		同　上
15	同　上 （同　上） (その 9)		同　上

＝スペイン語＝（R）

〔主任講師：山口羔正（放送大学助教授）〕

全体のねらい

本授業は初級者に向けてあるので、まずはスペイン語に慣れるために平易な文を用いて、頻度の高い単語と基礎文法の学習をすることを主眼とする。そのため、できる限りの練習を行うが、その中心となるのが動詞の活用で、これをマスターすることがスペイン語初級学習の第一の主要課題である。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	発音（その１）	アルファベット；母音の発音練習、子音＋母音の発音練習、子音の単語による発音練習；あいさつ等のきまり文句（その１）	山口羔正（放送大学助教授）
2	発音（その２）	子音の発音練習（続き）、２重母音・３重母音の発音練習、２重子音の発音練習、注意すべきつづり字、音節の切り方、アクセント；あいさつ等のきまり文句（その２）	同上
3	名詞 冠詞 形容詞	男性名詞・女性名詞、単数形・複数形；定冠詞・不定冠詞（性、数による変化）；品質形容詞（性、数の変化）	同上
4	固有名詞 人称代名詞の主格 直説法現在－ 動詞Ser 前置詞De	人名、地名、国名などの固有名詞；人称代名詞の主格：主格の人称・数による動詞 ser の直説法現在活用変化、ser の用法；肯定文・否定文の練習、疑問文と応答練習；前置詞 de を用いる表現。	同上
5	直説法現在－ Estar 及び 規則活用－AR動詞 場所の副詞	estar の直説法現在の活用、場所・状態を表わす用法、応答練習；場所の副詞、前置詞 en 及び場所を示す前置詞句；－ＡＲ動詞の直説法現在規則活用、主な動詞について基本的な文による練習；直接・関接補語を示す前置詞 a。	同上
6	直説法現在－ 規則活用－ER動詞 及び－IR動詞 様態・量の副詞 基数（その１） 時間	－ＥＲ動詞及び－ＩＲ動詞の直説法現在規則活用、主な動詞について基本的な文による練習；様態・量の副詞；基数１から30まで；時間の表わし方。	同上
7	直説法現在－ Haberの特殊形Hay Tener の活用 所有形容詞 指示語	haber の特別な形 hay の用法・練習；不規則動詞 tener の直接法現在の活用及び用法・練習；所有形容詞、人称代名詞の所有格、指示代名詞、指示形容詞。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	直説法現在 - 不規則活用動詞（その１） 接続詞（その１） 時の副詞	直説法現在１人称単数の活用形が－go で終る動詞及び dar 、ir、ver の活用、基本的な文による練習；接続詞 y 、o、pero、sino 、porque ；時の副詞 ahora、después、hoy、mañana、etc.	山口羔正
9	直説法現在 - 不規則活用動詞（その２） 人称代名詞対格 形容詞の名詞化	直説法現在で語根の母音が ue、ie、i となる動詞の活用、基本的な文による練習；人称代名詞の対格（直接補語の形）；冠詞＋形容詞による名詞化。	同　上
10	直説法現在 - 不規則活用動詞（その３） 人称代名詞与格 中性人称代名詞	直説法現在で１人称単数の活用形が－zco で終る動詞、saber及び不定詞の語尾が－uir、－iar、－uar である動詞の活用、基本的な文による練習；人称代名詞の与格（関接補語の形）；人称代名詞の対格と与格の併用；中性人称代名詞の主な用法。	同　上
11	人称代名詞与格・対格（続き） 主な前置詞 人称代名詞前置詞格 基　数（その２）	人称代名詞与格・対格と名詞の直接・関接補語の重複表現；主要前置詞の主な用法；人称代名詞の前置詞格（前置詞の後に来る形）；３０以上の基数。	同　上
12	不定詞（その１） －mente のつく副詞	不定詞の用法：動詞の補語及び動詞句で用いる場合、ser の構文に用いる場合、不定詞につく人称代名詞の対格・与格：形容詞＋－mente により作る副詞。	同　上
13	Gustar 及び類似の動詞 序　数 無人称文	gustar、parecer、faltar、doler、etc. の用法、基本的な文による練習；序数の用法；無人称文：自然現象を表わす動詞、天候の表現、３人称複数の活用形による表現。	同　上
14	命　令（その１） 感　嘆　文	２人称（tú、vosotros）、３人称（usted、ustedes）に対する肯定及び否定命令の動詞の活用形、人称代名詞対格・与格と共に用いる場合；qué と cómo を用いる感嘆の表現。	同　上
15	再帰動詞（その１）	再帰代名詞，再帰代名詞の対格的用法、与格的用法、強意・特別のニュアンスを加える用法、再帰動詞としてのみ用いられる動詞。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
16	再帰動詞（その２）	相互的用法、無人称的用法、受身的用法；復習 ser･estar、estar･haber･tener	山口羔正
17	命　令（その２） 形容詞及び副詞の比較（その１）	１人称複数 nosotros への命令、再帰動詞の命令；形容詞の比較級及び最上級、特別な形の比較級、絶対最上級；優等比較、劣等比較、同等比較；副詞の比較	同　上
18	直説法完了過去（その１） 不　定　語 否　定　語	直説法完了過去の規則活用、主な動詞の基本的な文による練習；不定語のうち特に否定・肯定で対応する不定形容詞・不定代名詞及び否定副詞等の用法。	同　上
19	直説法完了過去（その２） 疑　問　詞	直説法完了過去の不規則活用動詞、主な動詞の基本的な文による練習；疑問詞のまとめ（ qúe、quién、a quién、de quién、cuándo、dónde、adonde、de donde、cuanto、como、cual ）	同　上
20	直説法不完了過去接続詞（その２）	直説法不完了過去の活用（規則・不規則活用）及び用法；完了過去と不完了過去；接続詞（ porque、como、ya que、aunque、cuando 等）で結ばれる文。	同　上
21	過去分詞 直説法現在完了 受　動　態	過去分詞の規則・不規則形、過去分詞の用法；直説法現在完了（ haber の現在形＋過去分詞 ）、その用法及び主な動詞による練習；動詞 ser の受動態。	同　上
22	直説法未来 不定詞（その２） 接　続　詞　Que	直説法未来の規則・不規則活用形、主な動詞による練習；前置詞等につながる不定詞の用法、不定詞の完了形；接続詞 que による名詞節の用法（主語、補語の場合）	同　上
23	直説法過去完了 関係代名詞 関　係　副　詞	直説法過去完了の形及び用法、主な動詞・基本的文による練習；主に que による関係代名詞の用法（その他、quien、cuyo など）、行為者を表わす冠詞＋que の表現；関係副詞 donde 等の用法。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	直説法可能 中性冠詞 lo 現在分詞	直説法可能の規則・不規則形及び主な動詞と基的な文による練習；中性冠詞 lo＋形容詞（句）、lo que …の用法；現在分詞の規則・不規則形及び完了形、現在分詞と共に用いられる人称代名詞対格·与格、現在分詞の用法。	山口恭正
25	直説法未来完了 直説法可能完了 形容詞・副詞の 比較（その２） 縮少辞・増大辞	直説法未来完了及び直説法可能完了の形と用法、主な動詞と基本的な文による練習；関係代名詞 que を用いる比較の表現；名詞・形容詞・副詞等につける縮少辞と増大辞。	同上
26	接続法現在 （その１） 知覚・放任の動詞	接続法現在の規則・不規則活用、名詞従属節での用法：従属節が主動詞（形容詞）の補語節の場合及び主文の主語節の場合、従属動詞を接続法の活用にする主な動詞（述部）と基本的な文による練習；不定詞・分詞を伴う知覚・放任動詞の表現。	同上
27	接続法現在 （その２） 命令（その３）	接続法現在の副詞従属節での用法、関係代名詞・関係副詞の形容詞節での用法、独立文での用法；que＋接続法現在の構文による命令。	同上
28	接続法過去 直接話法・ 関接話法	接続法過去の活用、用法及び練習；decir を用いる直接話法・関接話法、その時制・人称等の一致の練習。	同上
29	接続法現在完了 条件文（その１） 直接疑問·関接疑問 不定詞（その３）	接続法現在完了の形、用法及び練習；si を用いる現実的条件文；preguntar を用いる直接疑問と関接疑問の表現；疑問詞・si の後に不定詞を用いる表現。	同上
30	接続法過去完了 Como si の表現 条件文（その２） 直説法と接続法	接続法過去完了の形、用法及び練習；接続法過去・過去完了を用いる como si の表現；現実の逆を仮定する非現実的条件文；似た構文で用いられる直説法と接続法。	同上

＝英語Ⅰ＝（R）
Rebuilding the Foundation of English

〔主任講師：比嘉正範（放送大学教授）
　　平賀正子（放送大学助教授）〕

全体のねらい

高等学校までに学習した英語の活性化をはかり、英語の基礎力を改めて養うことがこの科目の目標である。日本人にとって英語を難しくしている要因を、日本語と英語との比較と文法・語彙・構文の解説などを通して説明し、英語がより易しく使えるようにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	はじめに	なぜ英語は難しいのかについて考える。この科目の概要を述べ、学習の仕方を説明する。	比嘉正範（放送大学教授） 平賀正子（放送大学助教授）
2	英文法の復習	基本的な英語の文法について復習する。文型、文の要素、品詞、態、話法、などについて、高等学校までに学習したことを再検討する。	同上
3	日本語からみた英語(1)	日本語と英語の文の構造の違いを、「省略」という点から探る。日本語では省略されるものが、英語では省略されずに表現されることが多い。日本語ではどのように省略がおこり、それが何故英語を学ぶ時の難しさにつながるのかについて説明する。	同上
4	日本語からみた英語(2)	日本語と英語の文や表現の構造の違いを、「曖昧さ」という点から探る。日本語には曖昧な表現が多いと言われているが、それが英語を学ぶ時、どのような影響を与えるのかについて述べる。	同上
5	日本語にない英語の特徴(1)	英語にはあって日本語にはない再帰代名詞、無生物主語などの文法的な特徴を再検討する。	同上
6	日本語にない英語の特徴(2)	英語にはあって日本語にはない仮主語－真主語文のような文の構文的な特徴を再検討する。	同上
7	重要な品詞(1)－動詞	英語の動詞と、動詞に関係する時制、態、などについて再検討する。また、動詞から名詞、形容詞への品詞交換の方法についても説明を加える。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	重要な品詞(2)ー名詞および形容詞	英語の名詞と形容詞を再検討する。また、それぞれの品詞から他の品詞への交換についても説明を加える。	比嘉正範 平賀正子
9	語　　彙	いくつかの標準的な語彙表の活用法を中心に、語彙力のつけ方を検討する。	同　上
10	難かしい英文(1)ー長文	なぜ文は長くなるか、長文を短文にするにはどうしたらよいか、について説明し、難しい長文を易しく理解できるようにする。	同　上
11	難しい英文(2)ー省略文	省略はなぜおこるかについて説明し、省略のある英文になじませる。	同　上
12	難しい英文(3)ー美文・独創文	文学作品に見るような、美しい表現や独創的な表現がなぜ難しいかについて説明し、それらを理解するてがかりを与える。	同　上
13	難しい英文(4)ー丁寧文	英語に見られる敬語や丁寧表現の特徴について説明し、理解を深めさせる。	同　上
14	難しい英文(5)ー公式文書	公式文書独特の言い回しについて説明する。	同　上
15	ま　と　め	この科目で学んだことの総復習をし、知識を知識のまま終らせることなく、実際の英語の経験の中で役立たせるには、どのようにしたらよいかについて、今後の学習の方向を示す。	同　上

＝英語Ⅱ＝（R）

Greative Communication in Social Situations

〔主任講師：比嘉正範（放送大学教授）
　　平賀正子（放送大学助教授）〕

全体のねらい

これまでに習得した英語の基礎を活用して、自分で英語の文を作り、コミュニケーションを進めていくことができるようになることがこの科目の目標である。コミュニケーションの仕組みを学ぶと同時に、英語文化についての基本的な知識を身につけて、具体的な人間関係・状況・場面に応じた英語が使えるようにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	はじめに	コミュニケーションの仕組みについて解説する。コミュニケーションを構成する要素を、事実に関する文、感想の文、話しかけの文の３つに分析し、実際のコミュニケーションがどのようなプロセスで進んでゆくのかについて説明する。	比嘉正範（放送大学教授） 平賀正子（放送大学助教授）
2	Opening and Closing	コミュニケーションの始め方と終え方、出会いのあいさつや別れのあいさつなどについて、対面している相手との話し方、電話の相手との話し方を例に説明する。人間関係・社会関係の違いに基づく表現のスタイルの違いについても触れる。	同上
3	Introducing and Inviting	人を紹介する時、紹介された時、あるいは自己紹介をする時の話し方、および招待の仕方、受け方、断り方について説明する。また、呼称、敬称、名前の呼び方などについても説明する。	同上
4	Asking a Favor and Thanking	人に何か頼みごとをする時の言い方、およびお礼の言い方、感謝の気持の表し方などについて説明する。「ていねいさ」の度合も検討する。	同上
5	Complimenting and Scolding	お世辞の言い方、人の誉め方について、また人のしかり方について説明する。	同上
6	Giving/Receiving and Treating	贈り物をする時、また受け取った時のコミュニケーションや人におごる時のコミュニケーションについて、日本文化における贈答の習慣との違いをふまえながら説明する。	同上
7	Arguing and Making up	議論の仕方、同意の仕方と反対の仕方、仲直りの仕方について説明する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	Complaining and Apologizing	不平・不満の言い方、怒りの表し方、およびあやまり方、わび方について説明する。	比嘉正範 平賀正子
9	Getting Attention and Interrupting	人の注意や関心の引き方、また人の話しのさえぎり方について説明する。	同上
10	Congratulating and Consoling	お祝いの述べ方、喜びのわかちあい方、なぐさめ方、悲しみのわかちあい方について説明する。	同上
11	Joking and Teasing	冗談の言い方、からかい方など、ユーモアのある話しの仕方について説明する。	同上
12	Gossiping and Bragging	うわさ話しの仕方、自慢話しの仕方について説明する。	同上
13	Eliciting and Confiding	相手の話しを上手に引き出す方法、また相手に悩みを上手に打ち明ける方法、あいずちの打ち方などについて説明する。	同上
14	Refusing and Making Excuses	断わり方や言い訳、弁解の仕方について説明する。	同上
15	まとめ	最後にこの科目のまとめをし、今後の学習の方向を示す。	同上

＝ 英 語 Ⅲ ＝ （TV）

〔主任講師：鈴木　博（東京大学教授）〕

全体のねらい

映画化された文学作品を二つ使って、普通に話されている英語を聞いて理解する力を養成する。毎回、映画を5、6分ずつ学習し、映画全体を学習し終ったところで映画を通して視聴する。発音の解説と口頭練習も聴解力養成に資する目的で行う。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	The Necklace —1—	モーパッサンの「首飾り」を現代のアメリカに場面を置き換えてドラマ化したもの。 あらすじ：マティは友人ジーンの豪華な暮しぶりを見て意気消沈している。晩の食卓で夫が面白い話をしても乗ってこない。 発音コーナー：母音図の見方	鈴木　博（東京大学教授） 高山一郎（東京大学助教授） Dennis E. Schneider（東京大学外国人教師）
2	The Necklace —2—	前回の復習とテスト あらすじ：妻を喜ばせようとして手にいれたパーティの招待状を見せると妻は着て行くものがないと言う。ドレスを手に入れるとアクセサリーを借りにジーンのところへ行く。 発音コーナー：母音図上の個々の音の位置	同　上
3	The Necklace —3—	前回の復習とテスト あらすじ：パーティで人気の的になり大いに満足して帰宅したマティが首飾りが無くなっているのに気が付く。パーティ会場へ電話すると首飾りの落し物は届いていない。 発音コーナー：二重母音	同　上
4	The Necklace —4—	前回の復習とテスト あらすじ：代わりの首飾りを返そうと宝石商で値段を聞くと7万ドルとのこと。支払い能力を遥かに越えた額である。八方手を尽くし、ジーンには首飾りは修理中と電話する。 発音コーナー：破裂音、破擦音、摩擦音	同　上
5	The Necklace —5—	前回の復習とテスト あらすじ：遂に家を売り多額の借金をしてダイヤモンドの首飾りを作って返す。ジョージは借金返済のために働き続ける。5年たっても借金の半分も返済できない。 発音コーナー：鼻音、〔l〕,〔r〕,〔w〕,〔j〕	同　上
6	The Necklace —6—	前回の復習とテスト あらすじ：やっと借金を返済し終えた10年後のある日マティは湖のほとりでジーンを見て話しかける。マティの話を聞いてジーンは驚く。 発音コーナー：英語のリズム	同　上
7	The Man that Corrupted Hadleyburg —1—	このフィルムはマーク・トウエイン原作「ハドリバーグを堕落させた男」をドラマ化したものである。約40分の作品を8回にわたって学習し、9回目に通して視聴する。 発音コーナー：弱形—その1	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	The Man that Corrupted Hadleyburg —2—	前回の復習とテスト 発音コーナー：弱形—その２	同　上
9	The Man that Corrupted Hadleyburg —3—	前回の復習とテスト 発音コーナー：同化—その１	同　上
10	The Man that Corrupted Hadleyburg —4—	前回の復習とテスト 発音コーナー：同化—その２	同　上
11	The Man that Corrupted Hadleyburg —5—	前回の復習とテスト 発音コーナー：音の連結	同　上
12	The Man that Corrupted Hadleyburg —6—	前回の復習とテスト 発音コーナー：不完全破裂	同　上
13	The Man that Corrupted Hadleyburg —7—	前回の復習とテスト 発音コーナー：gonna とwanna	同　上
14	The Man that Corrupted Hadleyburg —8—	前回の復習とテスト 発音コーナー：イントネーション	同　上
15	The Man that Corrupted Hadleyburg —9—	前回の復習とテスト 映画を通して視聴する。	同　上

＝ 英 語 Ⅳ ＝ （TV）

An Introduction to Living English Speech (2)

－ドラマの英語(2)－

〔主任講師：國吉文夫（千葉大学教授）〕

全体のねらい

話されている、ありのままの姿の英語を学習の対象とする。標準的な英語が使われているテレビドラマを素材とし、ことばが使われている場面や、身体的動きなどの非言語情報などと関連させながら主として音声英語の理解力および表現力の養成を目指す。文字英語の学習にはドラマのスクリプトが音声英語と一体の形で扱われる。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	"An Eye to the Future" —1—	☆効果的な学習法について ◎アメリカのＴＶドラマFAMILY のシリーズの一つを八つの部分に分けて使うが、その最初のLawrence 一家の朝食の場面 ☆ PHONETICS Corner ：日本語と英語の音声の流れの違い、発音練習 ☆文構造練習（展開練習）	國 吉 文 夫 （千葉大学教授）
2	"An Eye to the Future" —2—	☆前回の復習と英語表現テスト ◎朝食の後、夫と二人の子供が出かけた後、ボランティア仲間で隣人のElaine Hogan がやって来る。この時Kateはうっかり失敗をしでかす。 ☆ PHONETICS Corner ：英語の強勢アクセントとその発音練習 ☆文構造練習（展開練習）	同 上
3	"An Eye to the " Future" —3—	☆前回の復習と英語表現テスト ◎Lawrence 一家の夕食の後、夫婦が話し合っている。妻のKate は夫のDoug に就職したいという決意を打ち明ける。 ◎ PHONETICS Corner ：文表現の強勢と発音練習 ☆文構造練習（展開練習）	同 上
4	"An Eye to the Future" —4—	☆前回の復習と英語表現テスト ◎Kate は前野晩に夫のDoug にすすめられたように知人の Sandy Pratt の音楽事務所に行って就職の相談をする。Sandyはまた大学生になって勉強したらどうかという。 ☆ PHONETICS Corner: 英語文表現の強調と強勢と発音練習　☆文構造練習（展開練習）	同 上
5	"An Eye to the Future" —5—	☆前回の復習と英語表現テスト ◎夫のDoug は最初驚くがKate の大学行きに賛成する。電話で連絡を受けたKate は次の日audi-tionを受けに大学に出かける。そこで自分の力のなさを思い知らされて断念する。 ☆ PHONETICS Corner: 英語のリズムと発音練習 ☆文構造練習（展開練習）	同 上
6	"An Eye to the Future" —6—	☆前回の復習と英語表現テスト ◎断念したKate が働く音楽事務所にDr Stiles がやって来る。前日のauditionの先生である。非礼をわびていろいろいうKate に先生は諭すように話しかけるのであった。 ☆ PHONETICS Corner:英語のイントネーションと発音練習 ☆文構造練習（展開練習）	同 上
7	"An Eye to the Future" —7—	☆前回の復習と英語表現テスト ◎音楽事務所の単調な仕事に飽き足らなくなって辞めたKate は夫に会って打ち明ける。そして、「大学も、職もやめてしまうとはどうしたのだ」と強く励まされるのであった。 ☆ PHONETICS Corner: 英語イントネーションの型と発音練習 ☆文構造練習（展開練習）	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	"An Eye to the Future —8—	☆前回の復習と英語表現テスト ◎意を決してKate は大学のDr Stilesのところに行きauditionを受け入学を許可される。Kateは希望に胸をふくらませて、猛然とピアノの練習に励むのであった。 ☆ PHONETICS Corner: 英語イントネーションと発音練習　☆文構造練習（展開練習）	國吉丈吉
9	"An Eye to the Future" —9—	☆八回に分けて扱ってきたこのTVドラマをできるだけ通して見る。ことばを意識しないで英語の世界に浸ることを目標とする。ことばが使われている場面、文化的背景。 ☆ PHONETICS Corner: 英語のテンポとポーズとその発音練習	同　上
10	"The Ingenious Reporter" —1—	☆前回までの総復習とディクテーション・テスト ◎TVドラマ" The Ingenious Reporter "を五つの部分に分けて扱うが、その最初の場面である。青年記者Harry Langleyが身元不明の死体を利用し大スクープとする考えを編集長にいう。 ☆ PHONETICS Corner: 英語表現の音量の変化と発音練習　☆文構造練習（展開練習）	同　上
11	"The Ingenious Reporter" —2—	☆前回の復習とディクテーション・テスト ◎犯人を装って逮捕され、計画通り監獄に入ったHarryは検察官の取り調べを受けている。検察官の話す事件の顛末をHarryは最初は半分茶化し気味に聞くのであった。 ☆ PHONETICS Corner: 英語表現の音質の変化と発音練習　☆文構造練習（展開練習）	同　上
12	"The Ingenious Reporter" —3—	☆前回の復習とディクテーション・テスト ◎殺された恋人のHenriette だと聞かされ、Harryにとって予想もしなかった事態となる。公判にどう対処するか弁護士のDupresと話し合うが意見が全く会わない。 ☆ PHONETICS Corner: 音声の分析と総合的効果発音練習　☆文構造練習（展開練習）	同　上
13	"The Ingenious Reporter" —4—	☆前回の復習とディクテーション・テスト ◎重要な証拠がないこの件には打ち勝つ自信があるという弁護人のDupresに耳を貸さず、Harryは法廷の場で事実をありのまま述べるのであった。　☆ PHONETICS Corner: 英語表現のスタイル、発音練習　☆文構造練習（展開練習）	同　上
14	"The Ingenious Reporter" —5—	☆前回の復習とディクテーション・テスト ◎Harryに急き立てられるようにして編集長を証人に立てるが、検事Lefargeの巧みな尋問に形勢は逆転する。法廷から出てきたHarryは怒り狂った群衆に命を絶たれる。 ☆ PHONETICS Corner:いろいろな英語(1)、発音練習 ☆文構造練習（展開練習）	同　上
15	"The Ingenious Reporter" —6—	☆前回の復習とディクテーション・テスト ◎五回に分けて扱ってきたこのTVドラマを通してみる。できるだけことばを意識しないで英語の世界に浸ることが目標である。 ☆ PHONETICS Corner:いろいろな英語(2)、発音練習 ☆文構造練習（展開練習）	同　上

＝英　語　VI ＝（R）

主任講師：山 内 久 明（東京大学教授）
グレアム・ロー（恵泉女学園大学助教授）

全体のねらい

英語Ⅰ～Ⅶの中での位置付けによると，英語Ⅵは，文学作品，特にフィクションからの抜萃を読む作業を通じて，文化的コンテクストの中で現代英語に習熟することを目指している。二人の講師の協力によって，テクストの部分的理解を超えて　合的理解に到達するよう，さまざまな試みを行いたい。

（内　容）

1. George Orwell, 1984(1949).
2. 〃
3. William Golding, Lord of the Flies (1954).
4. 〃
5. John Wain, Hurry On Down (1953).
6. John Braine, Room at the Top (157).
7. Iris Murdoch, An Unofficial Rose(1962).
8. 〃
9. David Lodge, The British Museum is Falling Down (1965).
10. 〃
11. Muriel Spark, The Driver's Seat(1970).
12. 〃
13. John Fowles, Mantissa (1982).
14. Timothy Mo, Sour Sweet (1982).
15. Kozuo Ishiguro, A Pale View of Hills (1982).

＝ドイツ語Ⅰ＝（TV）

〔主任講師：辻　　瑆（放送大学教授）
　　中山　純（明治学院大学助教授）〕

全体のねらい

ドイツ語Ⅰは全　課のカリキュラムを入門編と基礎編に分けて、発音や語形変化の基礎的な知識から始めて、文を作る為の最低限の文法知識を習得するところまでを学習する。具体的にはまず最初の５課で、ドイツ語の発音や読み方の練習を中心に置きながら、難解とされる語形変化の仕組みを見て、ドイツ語の言語として特長の概要を　ようにする。基礎編では、色々な状況の中でのドイツ語を学びながら、基本語彙を増やしていくように努める。目標は、ドイツ語を学習していく上での土台を作ることである。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	ドイツ語入門(1)	ドイツ語を始めるにあたって。 ドイツ語は何処で使われているか。 ドイツ語の基本的な仕組みについて。 ＡＢＣと発音／母音と子音	辻　　瑆 （放送大学教授） 中　山　　純 （明治学院大学助教授）
2	ドイツ語入門(2)	発音 品詞について 大文字と小文字 名詞の性	中　山　　純
3	ドイツ語入門(3)	発音 変化をする語と無変化の語 語形変化の基本 主語／述語／目的語 語と文	同　上
4	ドイツ語入門(4)	発音 動詞の人称変化と名詞の格変化 格変化の仕組み 人称とは何か	同　上
5	ドイツ語入門(5)	発音 動詞の形ー定形／不定形 文成分とは何か 定形の位置	同　上
6	Wo liegt Frankfurt?	動詞の人称変化 人称代名詞（単数） 疑問詞　wo 疑問文と叙述文	同　上
7	Was ist das?	動詞の人称変化 名詞の性 定冠詞と不定冠詞 疑問詞　was	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Wie heiβen Sie?	動詞の人称変化 人称代名詞（複数） 名詞の複数形 格変化 疑問詞wie	中　山　　純
9	Unsere Klasse	動詞の人称変化 1格と4格 所有代名詞 前置詞 aus	同　上
10	Stadtbummeln	動詞の人称変化 冠詞の格変化 形容詞 前置詞（場所を表わすもの）	同　上
11	Einkaufen	数詞（基数詞） 単位の表現　3格目的語 命令形（Sie） 前置詞	同　上
12	Theaterbesuch	数詞／時刻の表現 曜日 前置詞 疑問詞　wann/wie lange/wie oft 分離動詞（枠構造）	同　上
13	Im Reisebüro	再帰動詞 再帰代名詞の格変化 前置詞 否定の冠詞 序数詞と日付け	同　上
14	Verkehrszeichen	話法の助動詞 文の枠構造について	同　上
15	So war es einmal	動詞の過去形 過去の人称変化 daβで始まる副文	辻　　理 中　山　　純

＝ドイツ語Ⅱ＝（TV）

〔主任講師：辻　　理（放送大学教授）
　　中山　純（明治学院大学助教授）〕

全体のねらい

ドイツ語Ⅱでは、語学スケッチを見ながら、生きたドイツ語の習得を目指す、言葉だけではなく、ドイツでの様々な生活の場面を鑑賞しながら、地誌的な知識をも深めていく。文法知識としては、副文や話法、また「　」等単純な語形変化を越えたものについて練習をする。この段階から、積極的に視・聴・覚の語学の3要素を配慮した学習をしていく。ドイツ語Ⅱを修了した時点で、ドイツ語の初級学校文法の知識を習得し、1,500語程度の生活語を中心とする単語能力を身に着けることを目標とする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	Wir stellen uns vor	現在人称変化 再帰動詞と分離動詞 自己紹介の表現 スケッチ(1)	辻　理 （放送大学教授） 中山　純 （明治学院大学助教授）
2	Die Arbeitsplatz	冠詞の用法 名詞の単数と複数 前置詞 場所を表わす表現 スケッチ(2)	同　上
3	In der Küche	命令形 形容詞と副詞の比較級 数量の表現 スケッチ(3)	同　上
4	Einkaufen (1)	接続詞と副文 形容詞 服装・趣味に関する表現 スケッチ(4)	同　上
5	Einkaufen (2)	複合時称 sein 支配と haben 支配の動詞 スケッチ(5)	同　上
6	ドイツ人と日本人	基本事項の復習 職業・結婚・教育などに関する 日独の調査をもとにして、平均的なドイツ人像と日本人像を考える。 インタビュー	同　上
7	In der Schule	話法の助動詞 所有代名詞 比較の表現 スケッチ(6)	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Unsere Klasse	話法の助動詞 複合時称 仮定の表現 スケッチ(7)	辻　　理 中山　　純
9	Die Schmidts kommen	受動の助動詞 受け身の表現 スケッチ(8)	同　上
10	Der Urlaubsplan	複合時称 副文 期間・時刻の表現 スケッチ(9)	同　上
11	Unsere Wohnung	復習 ドイツの住いの紹介 日独の子供部屋の比較 日独のしつけの違い	同　上
12	Hobby	接続法の基本的な用法 第Ⅰ式と第Ⅱ式 仮定・条件の表現 スケッチ（10）	同　上
13	Kinobesuch	間接話法 接続法の時称 間接・伝聞の表現 スケッチ（11）	同　上
14	Am Sonntag	受動態・接続法のまとめと復習 報告の表現 スケッチ（12）	同　上
15	ま　と　め	ドイツ語学習上のポイント 全体の復習	同　上

＝ドイツ語 Ⅲ＝（R）

〔主任講師：辻　　理（放送大学教授）〕

全体のねらい

読むための文法に多少重点を移し、その復習をした上で、若いドイツ人夫婦の日本体験、特に二人の受けるカルチャー・ショックを軸として、現代ドイツのすぐれた作家や思想家のさまざまな文体に触れていく。同時に、まったくの日常会話から一歩脱して、考えを述べるためのドイツ語に近づきたい。

テーマ

1. 動詞定形の位置
2. 副 文 章 (1)
3. 副 文 章 (2)
4. Zu を伴う不定詞
5. Gabi an ihre Eltern
6. Gesprach mit einem Japanisehen Sensei
7. Schwierige Textauswahl
8. Gespräch zu “Aufbruch”
9. Pas Mittel zum wirklichen Frieden
10. Zum Überleben?
11. Warum ein Deutsch-Deutsches Wörterbuch?
12. Mit Wörtern Iügen?
13. Der Humor und die Deutschen
14. “Raman”
15. “Erbe”

＝フランス語Ⅰ＝（TV）

〔主任講師：福井芳男（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

フランス語に入りやすくするために、テレビ映像と言葉の結びつきを考え、ある喜劇的なシチュエーションを作り、フランス人の習慣と言語との関係を把握させる。自然なフランス語の習得を目ざすため、教材はフランス語を母国語とする考えが、ふつうに使う表現に限る。コミュニケーションのためのフランス語を中心にして、いわゆるméthodes communicalivesとし、復習、繰り返しを中心とする。なお、ビデオ、写真によるパリ案内も付ける。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	あいさつ：「こんにちは」と「さようなら」	名前、身の言いかた、コミュニケーションの方にはまずここから始めねばならず、発音の基本を兼ねる。	福井芳男（放送教育開発センター教授） 井戸桂子（放送大学助教授） 田辺保子（放送大学非常勤講師）
2	紹介	他人の紹介、自己紹介、そして紹介辞、C'est～とフランス語の名詞・冠詞について、一単語を発音・綴り字の読みかたとともに言える。	同上
3	身体を動かし、何か動きをする	相手の好みをたずねるなどコミュニケーションをすすめる。動詞のこと。	同上
4	感謝	わび、お祝い、礼儀作法の基本になる言いかた簡単な命令形と名詞　語（冠詞、所有形名詞など）	同上
5	復習	インタビュー（家庭生活について）	同上
6	時－数	時間や曜日、その基本となる数	同上
7	天候、時間、年齢、動詞／avoir		同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	体、健康、形容詞	体の部分の名を覚える。　avoir を使う。	同　上
9	－er動詞　aller 場所の表現	ランデヴーのとりかた。	同　上
10	復　　習	インタビュー（家庭）	同　上
11	代名詞、代名動詞 faire	覚えるべきところが増加するので、それを避けるために発考と綴り字の問題を練習、イントネーションを重視する。	同　上
12	代名詞　－en，－y 不規則動詞	早くフランス語になれるために会話の基本形を早くして言ってみる。道を聞く、聞き返す、時間を聞く、	同　上
13	物、人の指導、 形代名詞		同　上
14	も　の　を　読　む 意　見　を　聞　く		同　上
15	復　　習		同　上

＝フランス語Ⅱ＝（TV）

〔主任講師：福井芳男（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

フランス語Ⅰの復習と兼ねつつ、コミュニケーション言語の習得をはかり、さまざまな情況で使い得るよう多くのシチュエーションを考える。これはフランス人の家庭へのロケーション、フランスから来た人へへのインタビューなどを行なう。なお、フランスの地方の案内も行う。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	自分の意見を述べる（賛意、反対）	フランス語Ⅰの1－4までを使う	福井芳男（放送教育開発センター教授） 井戸桂子（放送大学助教授） 田辺保子（放送大学非常勤講師）
2	自分のことを述べる	フランス語Ⅰの6－9までを使う	同上
3	相手にたずねる	疑問を出す フランス語Ⅰの11～14まで	同上
4	自分のしてきたことを述べる	インタビュー 履歴書の書き方（過去形）	同上
5	復習		同上
6	記述、のしかた、形容詞	形容詞 インタビュー	同上
7	疑問の出しかた	インタビュー	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	感情表現	インタビュー	福井芳男 井戸桂子 田辺保子
9	過去の表現	インタビュー	同上
10	復習	インタビュー	同上
11	許可を求める、許可を与える、拒否する	ディアローグ、スケッチ	同上
12	賛意、反対	ディアローグ、スケッチ	同上
13	不満、怒り	ディアローグ、スケッチ	同上
14	非難、無関心	ディアローグ、スケッチ	同上
15	復習	インタビュー	同上

＝フランス語Ⅲ＝（R）

〔主任講師：福井芳男（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

ラジオの特性を生かし、聞く能力の　　をはかり、Ⅰ、Ⅱで勉強したことのとりまとめとして、文法、構文、知識の整理、基本文の習得をはかる。なお、単語の用法についてもこまかい検討を加える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	名詞とその周辺 (1)	名詞グループ、限定詩の名詞 冠詞の用法と冠詞の省略	福井芳男（放送教育開発センター教授） 井戸桂子（放送大学教授） 田辺保子（放送大学非常勤講師）
2	名詞とその周辺 (2)	形容詞の問題、同格の用法	同上
3	名詞とその周辺 (3)	形容詞、副詞の比較、moinsとautant	同上
4	感嘆文、一語文	省略された言いかた、文脈の概念を与える	同上
5	名詞のまとめ	生活関連の名詞ーフランス生活を浮び上がらせる。	同上
6	動詞とその周辺 (1)	動詞の活用法ー現在形	同上
7	動詞とその周辺 (2)	時制	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	動詞とその周辺 (3)	動詞による構文	福井芳男 井戸桂子 田辺保子
9	動詞とその周辺 (4)	法	同　上
10	動詞のまとめ 動詞＋不定詞	動詞＋不定詞	同　上
11	書き方等への移行	抽象語ー派生語	同　上
12	名詞変形 (1)	抽象語の形成	同　上
13	名詞変形 (2)	書き方等と話し言葉	同　上
14	動詞と不定詞	設文の諸問題	同　上
15	設文のまとめ	文の種類、記述文、論述文	同　上

＝ロシア語Ⅰ＝（R）

〔主任講師：川端香男里（東京大学教授）〕

全体のねらい

ロシア語学習の基本を習得させる。発音と文字、基本的語彙の学習を中心にし、ついでやさしい会話的表現を軸に基本的な格変化、人話変化になじませると同時に、いかにもロシア的と思える表現法に興味をもたせることを主眼におく。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	文字と発音(1)	アルファベット、活字体と等記体、子音と母音、アクセント	川端香男里 安岡治子（東京工大非常勤講師）
2	文字と発音(2)	軟音と硬音の対立、音の変化	同上
3	≪……は……です≫	名詞と人話代名詞、否定文と疑問文、接続詞	同上
4	≪……は……ではありません≫	肯定の返事と否定の返事、イントネーション	同上
5	名詞と代名詞	名詞の性、数、格。所有代名詞、疑問代名詞	同上
6	動詞 быть	бытьという動詞の使い方（所有表現も含めて）。現在、過去、未来形。	同上
7	動詞の変化(1)	不定形、現在変化の形（第1変化）、名詞の格	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	動詞の変化(2)	現在変化（第2変化）名詞の前置格	川端　香男里 安岡　治子
9	動詞の変化(3)	過去形、命令形、不定人話文	同　上
10	形　容　詞　(1)	形容詞の性と数。代名詞の性と数。	同　上
11	形　容　詞　(2)	形容詞の短語尾形、数詞、形容詞のさまざまな用法、副詞。	同　上
12	格の用法(1)	名詞の生格の用法。 対格と前置詞の復習	同　上
13	格の用法(2)	名詞の与格と造格の学習、前置詞の用法。	同　上
14	動　詞　の　体	完了体とと不完了体、体と時性。体の形成。	同　上
15	動詞の未来	未来形の用法、Ｃ Я動詞、全体の復習	同　上

＝ロシア語Ⅱ＝（R）

〔主任講師：川端香男里（東京大学教授）〕

全体のねらい

ゆっくりと基本を学習したロシア語Ⅰを受けて、主法的語彙的にも若干学習のスピードをあげて高度の文章表現になじませ、最終的には辞書の助けを借りて、比較的読みやすい古典、プーシキンの詩、チエーホフの短編が読めるようなレベルまで持って行く。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	ロシア語動詞の特徴	体の問題、運動の動詞、定動詞	川端香男里 安岡治子（東工大非常勤講師）
2	普編人称文、不定人称文	ロシア語独得の二人称、三人称による表現に習熟させる。この課より読本部分を設ける。	同上
3	名詞複数の格変化	複雑な複数変化を整理する。	同上
4	形容詞の格変化	形容詞の硬変化と軟変化	同上
5	代名詞の格変化	疑問代名詞、指示代名詞、形容詞的代名詞の格変化	同上
6	音の変化	複雑な子音交替、　　音の整理 形容詞短語尾の用法	同上
7	接頭辞	接頭辞がつくことによって豊かになる語形成を動詞の体の形成	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	比較級と最上級	形容詞と副詞の比較級と最上級の用法	川端 香男里 安岡 治子
9	数詞	数詞へ格変化と数詞を用いた表現	同上
10	不定代名詞・不定副詞	小詞を用いる不定詞、および否定詞表現	同上
11	仮定法	条件文、譲歩文	同上
12	関係詞	関係代名詞と関係副詞、およびそれらを用いた従属文	同上
13	副動詞形動詞(1)	副動詞の形成と用法。能動形動詞	同上
14	形動詞(2)	被動形動詞、受身表現	同上
15	話法	直接話法と間接話法、シンタックス	同上

＝中国語Ⅰ＝（R）

〔主任講師：傅田　章（東京大学教授）〕

全体のねらい

やさしいスキットを読みながら、中国語の発音と文法の基礎を学習する。文法は全体の枠組みを見通しての把握を心がけつつ、中国語Ⅰで統語構造、品詞の機能の最も基本的な部分から始めて、中国語Ⅱに接続し、2個学期で基礎課程を終える予定である。その間、機能語を中心に基本的語彙を習得出来るようにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	第1課 発音Ⅰ	四つの声調 単韻母(1) ― 主母音 声母(1)	傅田　章 （東京大学教授）
2	第2課 発音Ⅱ	第三声の連続 複韻母(1) ― 韻尾 軽声	同上
3	第3課 発音Ⅲ・主述・動賓	声母(2) 主語＝述語 動詞＝目的語 限定疑問 ― 疑問詞	同上
4	第4課 発音Ⅳ・補語・形容詞	声母(3) 動詞＝補語 ― 断定の動詞 shi（是） 形容詞述語(1) 選択疑問(1) ― 肯定否定、副詞 bù（不）	同上
5	第5課 発音Ⅴ・修飾Ⅰ	単韻母(2) ― 介母音 複韻母(2) ― 介母音で始まる複韻母 修飾語と被修飾語 連用修飾語(1) ― 副詞、時間語	同上
6	第6課 経過	連体修飾語(1) ― 助詞 de（的） 状態の完成 ― 助詞 le（了） 状態の持続 ― 助詞 ne（呢）	同上
7	第7課 発出	語気助詞 ― ma（吗）、ba（吧）、ba2（吧）、a（啊）など 文の構造 助詞 a（啊）の連声	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	第8課 限　　定	数詞＝助数詞 序数と量数 指示詞 yi(一)の声調変化	傳田　章
9	第9課 移動・授与	人称代名詞 集合 ー 接尾辞 -men（们） 移動動詞＝場所目的語 授与動詞＝二重目的語	同　上
10	第10課 アスペクトⅠ	完了相 ー 動詞接尾辞 -le（了） 動詞の相と述語の述べる状態の相	同　上
11	第11課 アスペクトⅡ	経験相 ー 動詞接尾辞 -guo(过) 持続相 ー 副詞 zǎi（在）、動詞接尾辞 -zhe（着） 選択疑問(2) ー 已然未然、副詞 méi（没）	同　上
12	第12課 動作量	動詞＝動作量補語 動作量助数詞 動作量補語と目的語 動詞の重ね型	同　上
13	第13課 認　　定	“能願動詞” ー 動詞句補語を伴う動詞 néng（能）など 動詞句補語を伴う形容詞	同　上
14	第14課 心　　理	心理動詞 ー 文補語を伴う動詞 xiang（想）など 告知動詞 ー 文目的語をとる動詞 gǎosu（告）など	同　上
15	第15課 使　　役	使役動詞 ー 目的補語を伴う動詞 ging(请)など 使役をいう動詞 jiào（叫）、ràng（让） 動詞の整理	同　上

＝中国語Ⅱ＝(R)

〔主任講師：傅田　章（東京大学教授）〕

全体のねらい

中国語Ⅰに接続して文法の基礎の学習を続ける。文の核になる動詞句のやや複雑な形のものから、さらに複文へと進み、文法の大枠の学習を終える。また発音についても、音節の仕組みや発話の際のアクセント・イントネーションなどに及んで整理した理解をはかりたい。中国語Ⅱで一応の基礎課程の学習を終える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	第1課 存在	存在の表現 ― 動詞you（有） 現象描写 ― “存現”文 個体の叙述と現象の描写 場所語 ― 方位詞	傅田　章 （東京大学教授）
2	第2課 連用 Ⅰ	動詞句連用(1) ― …lái（来）/qù（去） 動詞句連用(2) ― lái/qù… 動詞句連用(3) ― …-zhe（着）… 動詞句連用(4) ― 動作の動作	同　上
3	第3課 連用 Ⅱ	前置詞句(1) ― zài（在） 前置詞句(2) ― bi（比） 前置詞句(3) ― dào（到）など 事態の断定 ― 助詞de（的）	同　上
4	第4課 連用 Ⅲ	前置詞句(4) ― gen（跟） 前置詞句(5) ― 受身の表現 前置詞句(6) ― gei（给）など	同　上
5	第5課 包括	包括限定(1) ― lián（连） 包括限定(2) ― yìdianr ye（一点也）… 包括限定(3) ― shenme dou（什　都）… 音節の構造・r化	同　上
6	第6課 主題化	前置詞句(7) ― ba（把） 主語としての動作対象など 不定の主題を提示するyou（有）	同　上
7	第7課 結果 Ⅰ	動作の評価 ― “程度補語”，動詞接尾辞-de（得） 結果の事態 ― “結果補語” 動作と結果(1) ― “結果補語” 性質と程度	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	第 8 課 結　　果　　Ⅱ	動作と結果(2)　—　“趨向補語” 動作と結果(3)　—　-zǎi（在），-dǎo（到） -zhù（住），-zháo（着）など 動作と結果(4)　—　“可能補語”，-bu-（不） 複合語の語構成	傳田　章
9	第 9 課 結　　果　　Ⅲ	動作と結果(5)　—　“趨向補語”の転化 起動相　—　-qǐlai（起来） 継続相　—　-xiaqu（下去） 経過相　—　-guò（过）	同　上
10	第 10 課 接　　続　　Ⅰ	接続関係 副詞と副詞　—　yī（一）…jiù（就）… など 接続詞と副詞　—　yàoshi（要是）…jiù （就）…など	同　上
11	第 11 課 接　　続　　Ⅱ	接続詞と接続詞　—　yīnwei（因为）… suoyi（所以）…など 包括限定(4)　—　shei（谁）…shéi… 選択疑問(3)　—　対称	同　上
12	第 12 課 対比と描写	形容詞述語(2)　—　対比表現 形容詞の重ね型 名詞句述語	同　上
13	第 13 課 修　　飾　　Ⅱ	連体修飾語(2)　—　限定・描写 連用修飾語(2)　—　助詞de（地） 量詞の重ね型	同　上
14	第 14 課 付　　加	文節に入る語気助詞 語気助詞に近い語句 付加的な短句	同　上
15	第 15 課 発　　話	弱音節　—　強弱アクセント 文音調	同　上

＝ Japanese Ⅰ ＝（TV）

主任講師：アントニオ・アルフォンソ（明海大学教授）
西原鈴子（国立国語研究所日本語教育センター室長）

全体のねらい

日本語のもっとも基本的な構造を、単なる詰め込みでなく応用可能な知識として正しく理解させ、それによって日本人の物の考え方、日本人の生活と文化を広く世界に紹介することを目的とする。

日本語を一見流暢に話しながら、その実正確に学んでこなかったような人々の「やりなおし日本語」としても活用されるように、コミュニケーションの流れの中で自然に使用できる表現を発展的に組み立て、有効な解説と適切な映像によって効率的に提示する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	Lesson 1 ○学習の目的と方法 ○場所の移動とはい、いいえ	場所の移動を表す形、主語の省略、「へ、に、から、まで」（方向・起点）、「に」（目的）、移動の時の表現「と」（共同者）、人名につく「さん、くん」 「はい／ええ、いいえ」、「はい・いいえ」で答える疑問文、勧誘を表す形	アントニオ・アルフォンソ（明海大学教授） 西原鈴子（国立国語研究所日本語教育センター室長）
2	Lesson 2 ○動作を表す ○主題・対比・範囲	「を」（対象）、「で」（場所）、「に」（目的間接目的）、「で」（手段）、「と・か」（並立）、「は」、「も」	同上
3	Lesson 3 ○継続・完了 ○要求・依頼・許可・不許可	「て型」、-eru、-iru動詞、その他の動詞、変格動詞「する・くる・いく」「知っている・覚えている・持っている」「もう・まだ」 「～を下さい」、「～て下さい」、「お～下さい」 「～てもいい」、「～てはいけない」	同上
4	Lesson 4 ○主格・存在の表現 ○感情・感覚の所在、所有を表す	「が」、「は」と「が」の対比、「ある」と「いる」、場所を表す語彙－上、下、前、後 etc「～気がする」「～匂いがする」、所有の「ある」 「出来る・わかる・見える・要る」「雨が降っている」etc「～に立っている」、「で」と「に」の対比、「～に出る」	同上
5	Lesson 5 ○名詞の修飾 ○数量の表し方	「名詞＋の＋名詞」、形容詞、形容動詞、疑問詞、数詞、助数詞、数量の副詞的用法 「どのくらいかかりますか／しますか」、「いくらですか」「おいくつですか」「ぐらい」「約」	同上
6	Lesson 6 ○確定・断定の表現、肯定文、否定文 ○話題の範囲の枠、話題の中心	（名詞） です／でした じゃないです じゃなかったです 象は鼻が長い 花子は目がきれいだ この歌は太郎が得意だ （形容詞） です／かったです くないです くなかったです	同上
7	Lesson 7 ○常態の用法、現在、過去 ○関係語、述語の名詞化	（肯定） ○現在　いく 過去　いった ○英語との対照 関係節の主語 私の／が言ったこと こと、の、こと／のの用法の対比 （否定） いかない いかなかった 英語の前置詞と対応する日本語の動詞 toys in the showcase ショウウィンドウにでているおもちゃ	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Lesson 8 ○「のです」の用法 ○推定、伝達、思考の内容明示	○説明、確認 ○推定を表す　でしょう、だろう 　　ーと思う　の用法　ーかもしれない　の用法 質問　　お名前は何とおっしゃいますか 間接疑問文　いつ来るか聞いてください 間接命令文　少し待つように言って下さい	アントニオ・アルフォンソ 西　原　鈴　子
9	Lesson 9 ○希望と意志 ○授与・当然・義務	○ーたいです、ーたいと思います ーしようと思う、ーするつもりです ○ーてもらいたい、ーてほしい ーはずだ、ーほうがいい	同　　上
10	Lesson 10 ○「する」の機能と用法 ○「する」と「なる」の対比と副詞の表現	○司会をする、変な顔をする、丸い顔をしている、気にする、外来語の名詞＋する、日本語を勉強する、日本語の勉強をする ○山を住宅地にする　vs　山が住宅地になる　等 名詞＋に、形容動詞＋に、形容詞－く型、 動詞－て型、動詞－ないで型、肯定文／	同　　上
11	Lesson 11 ○動詞の複合 ○動詞て型、接続助詞「が」	○ーてしまう、ーてみる、ーておく、ーてたまらない、ーですみません ○動作・状態の継起・因果関係、原因・理由 前置き・事柄・場面などの提示、ふくみを持たせる終助詞、英語の関係節との対比、二つの節の対比	同　　上
12	Lesson 12 ○時に関する表現 ○時、時間的幅を表す副詞節	○助詞「に」を伴う／伴わない時間表現、時を明確に指す「に」の用法、助詞「で」を伴う時間表現、時間・金額など数量とともに用いられる表現 ○とき、まえ、あと、～てから、まで あいだ、うち、～ている最中の意味を表す接尾辞「中」、ながら	同　　上
13	Lesson 13 ○動作の方向・目的を表す ○目的を表す表現	○ーに書く、貸す、教える、知らせる ーにいい、わるい、むり ーに間に合う、会う、似合う ーにわかる、できる、見える ○「のに」と「には」 あそこまで行くのに二時間かかった あそこまで行くには二時間かかる	同　　上
14	Lesson 14 ○助詞「か」の用法 ○助詞「も」の用法、「でも」の用法	○疑問、遠まわし「ーじゃありませんか」「ーんじゃないかと思います」　質問に対して質問で応ずる形 ○疑問を表す語に付く「も」（誰も、いつも） 数量を表す語に付く「も」（いくらも、一人も）等 ○疑問を表す語に付く「でも」（誰でも、何時でも） 名詞に付く場合（子供でもできる、お茶でもいかがですか）等	同　　上
15	Lesson 15 ○助詞「で」の用法 ○判断・感情表現と共に用いられる「で」	○期限・限度・範囲を表す（これでおわりだ） 比較表現で範囲を表す（これはこの中で一番いい） ○これでいい、それで困る、こんな時間ですみません お会いできなくて残念です	同　　上

＝ Japanese Ⅱ＝（TV）

主任講師：アントニオ・アルフォンソ（明海大学教授）
西原鈴子（国立国語研究所日本語教育センター室長）

全体のねらい

Japanese Ⅰを基礎にし、より高度な日本語の知識を得、かつ、より複雑な表現の運用を習熟することを目的とする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	Lesson 1 ○助詞「は」と「が」の対比	○叙述・描写表現の「が」、自然現象を表す場合の「が」、自然な気持ちを表す場合の「が」、既出・既知の事柄を取り上げる「は」 基本的規則：「は」　話題の範囲の境界 「が」　話題の中心・焦点　等	アントニオ・アルフォンソ（明海大学教授） 西原鈴子（国立国語研究所日本語教育センター所長）
2	Lesson 2 ○逆接の表現 ○事柄を列挙、例示的に列挙	○のに、のくせに、かわりに、ても ○事柄を列叙する「し」 判断の理由・根拠を示す「し」 列叙の「し」と「～も～も」との対比 ○「や」、「など」、「～たり～たり」	同上
3	Lesson 3 ○接続助詞の働きをする「たら」 ○接続助詞の「と」、「ば」	○「たら」 事柄の間の時間的前後関係を示す 仮定の順接条件を示す 予期しない出来事を示す 「たらどうですか」「だったら」と「なら」の用法 ○「と」　自然の帰結　予期した当然の帰結 「ば」　動詞の仮定形　仮定条件	同上
4	Lesson 4 ○可能態 ○可能態の用法、「だけ」の用法	○可能形、自・他動詞の可能態 可能態の主語、可能態と準可能態に現れる「に」 ○可能態に続く「ように」「ていただけませんか」 可能態と共に使われる「ぐらい」と「ほど」 ○明確な数量を示す「だけ」、可能態と共に使われる「だけ」	同上
5	Lesson 5 ○受動態 ○日本語の受動表現の特徴、使役態	○受け身形、受動態の表現、受動表現で動作主を表す「に」「によって」「から」「で」 ○対象を助詞「を」で表す受動態（魚をとられる） 自動詞の受動態・自発的受動態 ○使役形、許可・強制を表す場合、自・他動詞の使役態、使役態で対象を示す「を」と「に」	同上
6	Lesson 6 ○他動詞と自動詞 ○「ある・なる・する」「－た・－ている」	○対をなすもの、可能形・受け身形（自動詞）、擬似使役動詞（他動詞）、助詞「を」と「が」、「が」と「で」「に」、主語の「で」、焦点の「が」 ○状態的存在動詞、活動的存在動詞、変化を表す動詞	同上
7	Lesson 7 ○アスペクト ○形式名詞、「ばかり」	○時制を変ぐアスペクト、「～た」のまとめ、開始の「～だす」「てしまう」、完了の「～おわる」「てしまう」、経由・過程の「～てくる」　等 ○「ところ」の意味と機能、所信・所見・所属の「ところ」、「～ところへ」「ところで」「～ところを」 ○アスペクトの「ばかり」「たばかり」と「～ただけ」の対比、限界の「ばかり」	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	Lesson 8 ○形式名詞「よう」「もの」「わけ」	○様態・ありさまをあらわす比況の「よう」(「～ようだ」)、名詞修飾(「～ような」＋名詞)、助詞修飾(「～ように」＋名詞) ○自然・不変の原理を表す「もの」、繰り返し起った事柄を示す「～たものだ」等 ○筋道・事情を説明する「わけ」、「の」との対比「～するわけはない」「～ないわけはない」等	アントニオ・アルフォンソ 西　原　鈴　子
9	Lesson 9 ○「の」と「こと」 ○動詞状名詞とその用法	○共に可能な場合、「の」だけ可能な場合、「～のと～のとどっちがいい」「明日のことにしよう」等 ○動詞の名詞形、動詞状名詞の複合体、形容詞と動詞状名詞の複合体 ○「～だ」「お～だ」「お～する」「お～なさい」	同　　上
10	Lesson 10 ○同種の事柄を暗示する ○「という」の用法、動詞「する」	○文頭の「なんて」、名詞につく「など」「なんか」「なんて」 ○「という」＋名詞、「というのは」「これという～」 ○疑問を表す「どう」と共に用いられる「する「こうする」「そうする」の用法、仮定を表す「とする」の用法、「としては」「にしては」の用法	同　　上
11	Lesson 11 ○感覚的印象を表す ○陳述副詞、接続副詞	○畳語の類(同音の反復)：ぶうぶう 「り」で終わるもの：ぼんやり 「と」で終わるもの：きちんと ○どうも、どうぞ、どうせ、どうか、恐らく　等 ○けっきょく、つまり、ようするに、すなわち、それとも　等	同　　上
12	Lesson 12 ○文脈における「こそあど」 ○接続副詞とその用法	○指示詞とともに用いられる「する」と「いう」の用法 「そうです」と「ちがいます」の用法 それで、それから、それなのに、そのとき、そのため、そのかわり、だが、だから、だけど、そうして、そうすると	同　　上
13	Lesson 13 ○名詞の並列 ○複合関係節、文の複合	○接続助詞による並列：「とか」「に」「やら」 名詞の並記による並列　等 ○関係節の並列、関係節に含まれる関係節・従属節 ○複数の文の連続・複合、連続する文の複合体	同　　上
14	Lesson 14 ○未完結文 ○倒置、後置、中止形	○僕に言えばよかったのに、こちらは山田ですが 婉曲表現：良くない～、さあ、どうでしょう ○変じゃない？あの人は、憎らしいなあ、あの子 倒置の心理的意味 ○動詞の原型：いる～おり、 ○形容詞：～く型	同　　上
15	Lesson 15 ○尊敬の表現 ○謙譲の表現、尊敬関係と人間関係	○名詞：接頭辞「お」「ご」 ：接尾辞「さん」「さま」「～学長」 ○動詞：特定の語：いらっしゃる、おっしゃる 特定の形：お～になる／なさる ○名詞：お返事します、お電話します　等 ○丁寧体、くだけた表現と敬語 人間関係の親疎と文体・語彙	同　　上

＝ 保 健 体 育 ＝ （TV）

― 新しい人体論 ―

〔主任講師：平沢弼一郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

人は２本の足のうらで立つ。そこで、その足のうらに関与するさまざまな因子から、すべての動作の基本である直立能力を定量的に評価する。これをスタシオロジー（身体静止学）という。本講義はこのスタシオロジーの観点に立って「人」と「からだ」の関わりを解説する。なお毎回自己診断と調整のための基礎体操Medico physical Therapyを紹介する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	見る人聴く人別の人	美しい人を見たり、美しい音楽を聞くと心のときめきを感じる。ここでは知覚の内省的把握が、健康の自己管理の基礎条件であることを中心課題とし、視覚と聴覚の分析能力の比較から、「見る人」から「聴く人」への転換について考える。	平沢弼一郎（放送大学教授）
2	息 こ ら え	「息こらえ」の時間の長短は、その人の、その時の身体的および精神的能力の総和である。これは心身の持久力を知るための最も簡便な方法である。運動負荷や姿勢変化にともなう実験結果と、長期間継続して測定した資料に基づいて解説する。	同 上
3	偉 人 と 健 康	健全な精神ははたして健全な身体にのみ宿り、健全な身体には必ず健全な精神が宿るのだろうか。ユベナリスの言葉を出発点として、いわゆる偉人と呼ばれた２４人の体格について考察しながら、心身の「健康」・「不健康」を考える。	同 上
4	か ら だ の 形	人のからだの形はなぜこのようになったのだろうか。ここではソボッタ（J・Sobotta）の体表の地理図、サリウス（A. Vesalius）解剖図によって骨格の仕組みを学習する。また、カバラの思想によるセフィーロスのからだの部分の意味づけについて言及する。	同 上
5	膝 小 僧	「膝小僧」とは膝関節のこと。この関節を中心に、脚の筋肉の起始部と停止部、神経支配とそのはたらきについて、実際に解剖をしている画面によって学習を展開してゆく。「膝小僧」は前方には曲がるが後方には曲がらないのはなぜか、も解明する。	同 上
6	直立人の歩む道	ヒトはいつどのようなきっかけで、またどのような道のりをたどって「直立人」になったのだろうか。ヒト化（hominization）における「直立人」への進化の過程を系統発生学的見地から考察する。われわれ直立姿勢に完全に適応しきっているのだろうか。	同 上
7	新 生 児 の 反 抗	人は出生後約１０か月でだれからも手ほどきをうけないで一人で立つことができる。その機序（要因と過程）の解明はいまだに明らかではない。ここでは出生直後の新生児の姿勢制御と神経発達との関連について個体発生学的見地から解説をする。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	か　ら　だ　ち	「からだ」の語源は、人が大地に両足を踏まえて立つさまを表す「からだち」（躯立ち）というやまとことばに由来する。「からだ」に関連する文字や言葉から、「からだ」の価値観の変遷について解説する。	平　沢　弼一郎
9	ス タ シ オ ロ ジ ー	アリストテレスの「動物運動論」から、からだの動的固定（Steady setting）の機序について解説する。スタシオロジーの原論、評価の方法、装置、応用面（平衡神経科学・整形外科学・神経内科学・神経眼科学）の現況について述べる。	同　上
10	日本人の直立能力	両足をきちんとそろえて立つロンベルグの姿勢を２０秒間とらせた時の重心図（重心動揺面積）から、日本人の直立能力について、年齢差、性差、環境差（地理的・社会的）、病経別、民族差を解説する。	同　上
11	左　足　と　右　足	左足と右足のあいだには、機能的な一側優位性（ラテラリゼーション）が存在する。左足は前進の方向性と全身の安定の支持作用、右足はスピードのコントロールと器用性の役割分担がある。また、左足は遺伝因子、右足は環境因子によることを解説する。	同　上
12	はだしとすあし	近ごろ全国各地で「はだし教育」がはじめられている。「はだし」と「すあし」の相異から、ここでは「足のうらをはかる」目的、方法、解析法、評価法について解説する。また、「足とはきもの」の問題についてもふれてゆく。	同　上
13	立つことと歩くこと	ヒトは立つことができてはじめて歩くことができる。ヒトは片足歩行である。正常な歩行はその重心軌跡がゆるやかなサインカーブを描く。脳性麻痺患者の歩容から、「立つこと」と「歩くこと」の関連を解説する。	同　上
14	ふんぞりかえった日本人	昭和５２年から日本各地の遺跡から沢山の古代人の足跡が発見された。この足跡から日本人の立ち構え（身構えと気構え）を考察したところ、平安時代あたりから変わったことが推定される。縄文晩期から年代を追ってその変化を解説する。	同　上
15	現　代　人　の　足	この20年くらいのあいだに、現代人の踵が丸くて大きくなっている。これは重心位置の後退現象を物語る。もしこのことが直立能力の衰退であると考えることができるとすれば、ことは重大である。人類の存亡の危機について論説を試みる。	同　上

＝生　活　史＝(R)

〔主任講師：中鉢正美（元慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

現代の生活史をそのミクロとマクロの視点から明らかにして生活をめぐる諸問題が直面している転換点を討論する為の素材を提供したい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	生活史、生活学、生活構造論	広義の両方についてふれる。生活構造論は特定の社会階級の発達と変動を扱う。生活学は日本の急速な近代化過程に於ける主要な生活問題の生成とその安定化への動向を検討する。	中鉢正美（元慶應義塾大学教授）
2	マクロとミクロの生活史	生活学は日本の近代化過程に於ける生活の発展及び安定化に就いての学際的研究であり、生活史は特定の個人を典型とした生活近代化の追跡である。両者はそれぞれ密接な関わり合いをもっており、その問題点が明らかにする。	同　上
3	共同体の生活史	生活史の原点は、家族、職場といった人々が直接関わり合う共同体的な集団である。とりわけ夫婦や親子がその生活を共有するためには一定の対話や相互行動を繰り返す過程が重視されなければならないことを解説する。	同　上
4	文書記録の生活史	共同体は生活の直接的経験を相互に伝達し合って生活を続けるが、これを第三者に伝達し合う為には文書による記録の必要がおこる。関接的な伝達手段による生活史は近代社会に於ける生活史研究の基本型を構成するものといえる。	石毛直道（国立民族学博物館助教授）
5	都市の生活史	共同体の生活史が村落を基礎とするのに対して、都市は相対的に新しい生活様式を構成する。この都市の生活様式について解説する。	川添　登（建築評論家日本生活学会理事長）
6	産業化と生活史	十九世紀産業都市の発達によって近代社会は全く新しい様相を呈した。産業都市は都市生活生活一般についてもこれに対する新しい対応をせまることとなった。この産業化との関わりを解説する。	副田義也（筑波大学教授）
7	諸文化の生活史	生活史とは、ある社会全体の生活が、時代によってどのように変化してきたかという意味と特定の社会の特定の時代に個人がどのように生きたかを記録したものをいう場合とがある。ここでは二つの場合を考え合わせて解説する。	原　ひろ子（お茶の水女子大学学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	意識と無意識のかかわり	人間は無意識的に繰り返される日常的生活の中で一定の生活構造を形造り、やがて産業化による社会的変化に直面して新しい文化の諸関係を創造すべく模索を始める。この無意識的な日常生活と意識的な非日常的模索との関わりを精神分析学的諸研究を手がかりとして解明する。	中鉢正美
9	衣食住の生活史	労働力の再生産を行う主体である人間の近代的生活がどのように発生し展開されて行ったかを、近代生活の中心的な部分である衣食住から考察してゆく。	同　上
10	医療・教育・住居・福祉の社会化	現代社会の発達につれて、生活の社会的共同消費の部分が発達してきた。そこで社会的な共通経費としての医療や教育・住居・福祉の問題について解明する。	同　上
11	日本の生活史・1－1 明治維新～第2次世界大戦までの生活水準	幕末から明治初年において食糧の生産がその生活水準の約半分に達していた。第1次大戦後の近代化と共にこの水準は約3割に変化し、第2次大戦と共に再び嘗ての水準に迄転落した過程を概説する。	同　上
12	日本の生活史・1－2 第2次世界大戦以降の生活水準	第2次大戦後ほぼ10年の間に生活水準は戦前の高さに回復した。その他20年間戦後日本経済の高度成長と共に現在のヨーロッパ並みの高さに迄回復し食糧生産はその2割内外にまで低減したことを概説する。	同　上
13	日本の生活史・2－1 明治維新～第2次世界大戦までの人口変化	明治初期の人口は3700万人前後であったが、1930年代には8000人台を超えたが第2次大戦によって7200万人に縮少をした。戦後のベビーブーム以後、人口のピラミッドが拡大から縮少に転換する迄を一つの時期として説明する。	同　上
14	日本の生活史・2－2 第2次世界大戦以降の人口変化	ベビーブーム以後の人口増加率は拡大から縮少に転化したが、人口の高齢化現象が現れてきた。人口総数は一億二千万人に達し、やがてその絶対数が減少の過程に入ろうとしている状態を説明する。	同　上
15	「生活史」の総括	日本の生活水準が上昇し人口の増加が頂点に達した現状に於て、現代生活の再構成がせまられている事情を参加者を交えて討論したい。 4人の聴講者の感想	同　上

＝生活の社会学＝(R)

〔主任講師：副田義也（筑波大学教授）〕

全体のねらい

Ⅰ.生活構造論は、生命の日日の創造として、人間の生活の本質をとらえ、その人間らしいありかたを考える。Ⅱ生活問題論は、生活の人間らしさが失われる問題状況を学問的にとらえる工夫をする。Ⅲ生活保障論は、生活の人間らしさを維持・回復する政策・制度・運動・実践を論じて、福祉国家・福祉社会のありかたまでを考える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生活構造	生活の本質を人間の生命の日日の生産過程として把握する。また、それは、労働者のばあい、労働力の生産→労働力の販売→労働力の消費→生活手段などの生産→生活手段などの購買→生活手段などの消費→…という循環となるのを示す。	副田義也（筑波大学教授）
2	生活水準	生活水準は賃金水準、貨幣消費水準、物量消費水準に区分される。ここでは貨幣消費水準に注目して、最低生活費研究の現状と、生活費目の分類を論じるほか、新しい概念を紹介する。	同上
3	生活関係	夫婦関係は分業関係であり、たがいの労働力、性的成熟、愛によって成立する。親子関係は扶養関係であり、子の無力性、愛、その他によって成立する。また、世帯の概念にもふれる。	同上
4	生活時間	生活構造の時間的形式としての生活時間を、生活周期、家族周期、日常の生活時間などで論じる。日常の生活時間では、生活主体の性別、年齢、職業などによる構成の変化にとくに力点をおきたい。	同上
5	生活空間	生活構造の空間的形式としての生活空間を、活動空間、資源空間、意識空間などで論じる。さらに資源空間からシビル・ミニマム論をみちびき、意識空間からコミュニティ論、地方自治論をみちびきたい。	同上
6	生活問題	社会問題、生活問題の概念規定をする。生活問題とは、人びの生活のうち、社会が解決、予防が必要な問題として、一定の価値意識にもとづいて指定するものである。	同上
7	諸範疇の関係	生活問題の政策的範疇、実践的範疇、運動的範疇、科学的範疇を規定し、それらの関係を論じる。政策的範疇は、抽象的・統計的だが、実践的範疇は具体的・個別的である。また、運動的範疇、科学的範疇の限界にもふれる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	貧困問題	貧困問題の政策、運動、科学の三範疇の関係を分析して、科学的範疇のうち、欧米の相対的剝奪の概念や日本の不安定階層の理論を多少くわしく述べる。貧困の多元的把握をめざしながら、それを無限定に拡大してゆく一部の動向は批判する。	副田義也
9	非貨幣的問題	保育問題、老人問題を例にとり、非貨幣的問題の政策、運動、科学の三範疇の関係を分析する。これはニーズと扶養の函数であることを示し、家族形態、婦人労働などとの関連をあきらかにする。	同上
10	諸類型と原因	生活問題を階級問題、階層問題、地域問題、家族問題、個人の問題などとして把握する見方を紹介し、それぞれのばあいで、成立過程を理解する枠組が異なることを指摘する。	同上
11	生活保障	生活保障の体系を紹介し、福祉国家の条件のひとつに位置づける。国家独占資本主義期の政治＝経済構造の産物であり、生存権保障の方法であることを示す。	同上
12	所得保障	社会保険、公的扶助、家族手当などについて、原理的性格をあきらかにし、さらに、日本での現状を紹介し、問題点、改良の方向・試案を提示する。	同上
13	医療保障	医療の領域を概観し、その原理的性格、日本での現状を紹介し、問題点、改良の方向・試案などを論じる。	同上
14	サービス保障	児童福祉、老人福祉、身体障害者福祉、精神薄弱者福祉、母子福祉の五つの領域で原理的性格をあきらかにし、コミュニティ・ケア・専門的処遇などに焦点をあわせながら、現状を分析していく。	同上
15	生活保障運動	生活保障の政策、実践の向上を要求・期待する運動、その実践に参加する運動を論じる。それらが、生活問題、生活保障を学習する運動＝教育運動であり、また、研究する運動＝科学運動である可能性を追求する。	同上

＝家庭の本質＝(R)

〔主任講師：加藤秀俊（放送大学教授）〕

全体のねらい

社会の最小単位集団である家族、そして、その周縁概念である「家庭」を、歴史的、同時的にとらえ、きわめて今日的な課題としての家族、家庭の諸問題を考察する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	家族の発生と進化 (1)	この2回の講義で、生物進化のなかでの家族の発生と進化を、とりわけ霊長類の行動をつうじて検討し、生物社会のなかでの人間の「家族」の特性を位置づける。	伊谷純一郎（京都大学教授）
2	家族の発生と進化 (2)		同上
3	家族の構成と構造 家族とは何か (1)	人類の諸文化のなかで、「家族」の観念はきわめて多様な意味をもち、また、家族構造じたいも、相対的な性質のものである。この3回の講義をつうじて、さまざまな文化のなかでの家族の類型、その社会的機能などについての基礎概念を学習する	中根千枝（東京大学教授）
4	家族内の人間関係 家族とは何か (2)		同上
5	配偶者と親子関係 家族とは何か (3)		同上
6	家から家庭へ 家族から家庭へ(1)	主として日本の近代史のなかで「家」をめぐる観念の変化に着目し、イエ→家族→家庭という「家」の進化ないし変貌を考察し、現代「家庭」の意味と可能性を位置づける。	米山俊直（京都大学教授）
7	家族の析出 家族から家庭へ(2)		同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	家庭の未来 家族から家庭へ(3)	主として日本の近代史のなかで「家」をめぐる観念の変化に着目し、イエ→家族→家庭という「家」の進化ないし変貌を考察し、現代「家庭」の意味と可能性を位置づける。	米山俊直
9	近代化の秩序モデル 日本の近代化と家庭(1)	家族の中核にある「結婚」の問題、そして、そこから派生する結婚観、家族観を日本の近代のなかでさぐり、家族をめぐる思想史を学習する。	神島二郎 （立教大学教授）
10	家族主義の由来 日本の近代化と家庭(2)		同上
11	家庭と婦人教育 家庭の誕生 (1)	「家庭」ということばは、英語のhomeを福沢諭吉が翻訳したものといわれている。ここでは明治以降の婦人雑誌や生活運動をつうじて「家庭」が誕生し機能しはじめた経緯と現状をとらえる。	加藤秀俊 （放送大学教授）
12	家庭内の緊張関係 家庭の誕生 (2)		同上
13	近代日本の「家」と文学(1)	近代文学は、ある意味で、イエをめぐる個人の心理的葛藤の歴史であったといえる。この講義では、近代日本の文学作品のなかに「家」や「家庭」がどのようにえがかれてきたかを探求する。	多田道太郎 （京都大学教授）
14	近代日本の「家」と文学(2)		同上
15	家族の将来	都市化の進行、人口移動の加速化、さらに人口の高齢化などによって家庭は変貌しつつある。これまでの14週にわたる講義をふまえながら、家族と家庭の将来を展望する。	加藤秀俊

＝家　族　関　係＝（R）

〔主任講師：森岡清美（成城大学教授）〕

全体のねらい

1. 戦前から戦後をへて現在に至るまでの、日本家族の構造と機能にみられる変化を明らかにする。
2. 日本の家族関係の現状を、外国の家族関係と比較して考察し、その特色を明らかにする。
3. 高齢化社会における家族関係の問題点を探り、それへの対策を検討する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	家　族　と　は	1.家族は集団　2.法令用語としての家族　3.日常語としての家族　4.家族の定義　5.形態面の特色　6.関係面の特色　7.機能面の特色	森岡清美（成城大学教授）
2	家族・家庭・世帯	1.家族　2.家庭　3.世帯　4.家族・家庭・世帯	同　上
3	核　家　族	1.家族の要素的単位　2.核家族説　3.小集団としての核家族　4.核家族の二面性　5.核家族の世代関係	同　上
4	家族の類型と分類	1.居住規則と家族の類型　2.夫婦家族制　3.直系家族制　4.複合家族制　5.家族類型の地域的分布　6.類型・典型・分類　7.家族の分類　8.類型と分類との関係　9.家族の再分類	同　上
5	核　家　族　化	1.核家族化　2.家族と世帯　3.産業化と核家族化　4.日本の核家族化の歩み　5.核家族化の諸要因	同　上
6	小　家　族　化	1.小家族、小家族化　2.家族規模の近似値　3.わが国の小家族化　4.小家族化の国際比較　5.小家族化の諸要因	同　上
7	家族のライフサイクル	1.ライフサイクルの発想　2.ライフサイクル研究の発端　3.家族のライフサイクル　4.ライフサイクルの捉え方　5.発達段階の設定　6.直系制家族のライフサイクル　7.複合制家族のライフサイクル	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	ライフサイクルの変化	1.女子の一生の変化　2.日本におけるライフサイクルの変化　3.ライフサイクルの変化によって生じた新局面　4.ライフサイクルの問題点　5.ライフコースの発想	森岡清美
9	異性交際	1.相補的な二つの性　2.異性交際の発達　3.デイトの機能　4.デイトの逆機能　5.異性交際の実態　6.デイトの開始年齢　7.異性交際と性モラル	望月崇（大正大学教授）
10	配偶者選択	1.配偶者選択の範囲　2.配偶者選択の基準　3.規範－相互作用説　4.欲求相補説　5.配偶者選択の過程	同上
11	結婚	1.結婚の意味　2.結婚の機能　3.恋愛結婚の増加　4.結婚相談所の繁栄　5.高い結婚率　6.初婚年齢の変化	同上
12	離婚・再婚	1.離婚の意味　2.離婚に対する社会の態度　3.日本の離婚の動向　4.離婚の社会的背景　5.離婚原因　6.再婚の状況	同上
13	家族の危機	1.家族危機とは　2.ＡＢＣ－Ｘモデル　3.ジェットコースター・モデル　4.二重ＡＢＣ－Ｘモデル　5.マリッジ・カウンセリング	同上
14	子どもの社会化	1.親子関係と社会化　2.社会化としつけ　3.社会化の過程　4.現代家族の問題点	同上
15	共働き夫婦	1.女子の就労の動向　2.共働きの増加　3.共働きの理由　4.共働きの悩み	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	老親の扶養	1.家族機能としての老親扶養関係　2.何歳から老人か　3.老人の欲求とその充足　4.老親扶養の三側面と三種の居住関係　5.老親扶養の二類型　6.現代日本における同居型扶養の動向　7.現代日本における近居型扶養の登場	森岡清美
17	家族と住宅	1.家族と住宅　2.ノェルターとしての住宅　3.戦後日本における住宅の量的改善　4.大型住宅と小型住宅　5戦後日本における住宅の質的変化と改善　6.和式茶の間の消失と洋式居間の確立	同上
18	家族と食生活	1.家族と寝食の共同　2.寝食と家族機能　3.家族は日常的会食の単位　4.台所と食事室　5.家計費のなかの食料費　6.戦後の食生活内容の変化　7.電気冷蔵庫の普及と食生活への影響　8.はたらく主婦と加工食品　9.外食および家庭内外食の増加	同上
19	家族と家計	1.家計の収支動向　2.階層と家計構造　3.中流家庭の家計　4.生活設計の意味　5.家計と生活設計	望月嵩
20	家族と余暇活動	1.余暇の意味　2.余暇活動の活発化　3.余暇意識　4.家族と余暇行動	同上
21	家族の役割構造	1.家族の構造　2.家族的地位　3.家族的役割　4.役割期待・役割認知・役割遂行　5.役割取得・役割葛藤　6.役割遂行による欲求充足　7.生物学的差異が役割配分を規定するか？　8.役割配分の規定要因　9.役割構造の変化	森岡清美
22	家族の勢力構造	1.地位の序列　2.権力の序列　3.権威の序列　4.勢力の序列　5.勢力構造の実態　6.夫婦の勢力関係　7.親子の勢力関係　8.勢力構造を規定するもの　9.勢力構造の変化	同上
23	家族の情緒構造	1.情緒とは　2.家族の情緒構造　3.夫婦の伴侶性　4.親子間の情緒	望月嵩

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	家族と先祖	1.先祖とは　2.先祖の類別　3.死者と先祖　4.家における先祖とその祭祀　5.家的先祖祭祀の機能　6.家的社会での非家的先祖祭祀とその機能　7.家の変化にともなう先祖観の変化　8.仏壇保持率の推移　9.先祖祭祀の変化	森岡清美
25	親族関係	1.親族・親族関係・親族集団　2.親族とは　3.親族の類別　4.親族関係　5.親族集団　6.夫婦家族制と異居近親関係　7.直系家族制の場合、とくに日本の同族と親類について　8.親族関係の変化	同上
26	家族と地域社会	1.家の社会的被拘束性　2.地域社会とは　3.村落的社会と家族　4.都市的社会と家族　5.家族の変化と地域社会　6.地域社会の変化と家族　7.都市的社会と住民運動	同上
27	家族機能の変化	1.家族の機能　2.オグバーンの家族機能縮小説　3.機能縮小のより積極的把握　4.産業化と家族機能の変化　5.社会の変化でなぜ家族が変わる？　6.パーソナリティー機能の分化　7.家族の機能復権　8.家族の機能はほんとうに縮小したか？	同上
28	家族意識の変化	1.家族意識とは　2.家族意識は果たして捉えうるか？　3.「家族意識の変化」の捉え方　4.子がない場合養子は必要か？　5.先祖を尊ぶか？　6.どの子に財産や事業を相続させるか？　7.老後を子どもに頼るつもりか？	同上
29	家族の未来	1.家族の変動にたいする悲観論と楽観論　2.未来への要請　3.過去の未来家族論　4.家族は消滅するか？　5.ソ連邦の家族政策　6.家族は存続しうるか？　7.日本の家族はどうか？　8.家族はどこへ？　9.家族のゆくえと政治	同上
30	家族福祉と社会福祉	1.福祉とは　2.家族福祉と親族福祉　3.企業福祉　4.社会福祉と家族福祉　5.福祉の最小性と最大性　6.福祉と幸福　7.家族の福祉機能と社会福祉との関連	同上

＝家庭の経済＝（R）

〔主任講師：今井光映（金城学院大学教授）〕
古郡鞆子（明海大学教授）

全体のねらい

1.家庭経済は家庭・個人の自己実現という目的価値を実現するために、生産・消費・貯蓄の経済行為を営むがそれを経済全体の中でシステム的にとらえる。

2.家庭経済の行為をシステム的にとらえる場合、とくに生活する者の視座・視点で主体的にとらえることによって、中核的なエコシステムである家庭経済の本質的な機能と位地づけを浮き彫りにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	家庭経済の本質意義と機能	家庭経済の目的価値を家族・個人の自己実現におくことの意味を、家庭経済の本質にてらして考える。また、その家庭経済が経済全体のシステムの中で、生産・消費・貯蓄の経済行為に関してどのようにかかわり、位地にあるかを認識する。	今井光映（金城学院大学教授）
2	家庭内生産と家事労働	家庭経済の本質的な機能のひとつである家庭内生産の意味を考える。この生産活動は必ずしも企業の果しているものと同じではないが、家族の維持と発展のために重要な、市場的あるいは非市場的価値を生み出している。この機能の変遷と現代的意味を明らかにする。	坂井素思（放送大学助教授）
3	家事労働の経済的評価	家事労働の変化、賃労働とシャドウ・ワークの概念、経済学における家事労働の取り扱い、などに触れる。その上で、家族、家事労働のあり方を考える。	古郡鞆子（明海大学教授）
4	労働と家庭経済	家庭経済が果している労働供給の役割を考察する。産業化の進展は、職場と家庭の分離を促進したが、反面、現代経済のなかでは、労働を通じて家庭経済と国民経済は密接に結びついている。就業構造、所得分布などに言及し、この間の関係を明らかにする。	坂井素思
5	自由時間と家庭経済	自由時間を家族・個人の自己実現への解放のための時間として意義づけ、その変化が家計構造にどのような影響変化をもたらしているかを認識する。また自由時間の増大に伴うサービスをめぐる消費者問題など、自由時間の本質にかかわる諸問題を考える。	今井光映
6	消費の理論	家庭経済の果している消費機能について考える。家計を単位とする消費活動がなぜ行われるのか。そしてまた、このことは国民経済とどのように関わっているのか。消費理論の検討によって明らかにする。	坂井素思
7	家計の収支構造	家計の収入と支出の構造、その移り変わり、収入と支出の関係などを実態に即して分析し、生活水準の動向を明らかにする。そして、家計の収支構造が価値観や生活行動の多様化、教育水準などによってどのように変化するかを考える。	古郡鞆子

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	消費のサービス経済化	サービス経済化が消費構造に与える影響を考える。経済の中心がモノからサービスに向うなかで、個人消費支出に占めるサービス支出が増加傾向にある。ここでは、消費のサービス経済化の実態と背景を明らかにする。	古郡鞆子
9	貯蓄と家庭経済	家計の立場から貯蓄を見る。貯蓄の動機、目的、貯蓄性向の決定要因などを考えながら貯蓄率の動向を分析し、家計の貯蓄行動を明らかにする。	同上
10	家計の資産選択	家庭経済では、資産ストックはどのような状態にあり、またどのような役割を果しているのか。資産選択の決定要因、資産の保有動機など、家計の資産保有行動を明らかにする。	坂井素思
11	物価と家計	物価上昇の背景要因とそのメカニズム、及びそれが家計に及ぼす影響を認識する。また物価上昇に対応する家庭経済の対応を、短期生活設計と長期生活設計の視点から考える。	今井光映
12	税と家計	家庭経済は公共的な経済部門とどのような関係で結ばれているのだろうか。公共支出や政策の家庭経済へ及ぼす影響、あるいは所得再分配のあり方など、税を媒介とする家庭経済と公共経済の関係を明らかにする。	坂井素思
13	長寿社会と家庭経済	長寿社会の構造と、それが家庭経済に及ぼす影響、ならびにそれに対応する家庭経済のあり方を考える。また、活力ある長寿社会のための活力ある福祉経済のあり方を、家庭経済の視点で考える。	今井光映
14	社会構造の変化と家庭経済	家庭経済の長期的な変動について考える。家族は、世帯構成の変容、家族機能の変化などの長期的な変動を受ける。このような産業化を中心とする社会経済的変動は、家庭経済にどのような影響を及ぼしてきているか。経済文明的視点から考察する。	坂井素思
15	これからの家庭経済を考える	経済社会環境の変化の中で、家族・個人が生活の価値を守り、自己実現するために、生活環境の適応面（個人的生活設計面）ならびに醸成面（社会的生活設計面）で考えておかなければならない諸点を考え、各人のライフスタイルづくりへの指針とする。	今井光映

＝家庭経営学＝(R)

―これからの社会と家庭経営―

〔主任講師：今井光映（金城学院大学学長）〕

全体のねらい

家庭経営はそれをめぐる生活環境から影響をうけ、適応を迫られるとともに、他方では、そのあり方が生活環境を醸成し、変えていく。これからの社会の動きの中で、家庭経営が考えておかなければならない内在的、外在的諸問題をとりあげ、家庭経営がその本来の目的を実現するための問題解決のすじ道を考えることとする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	家庭経営の本質と目的	家庭経営は、最も根源的にして中核的なエコシステムである。それは何を本質とし、何を目的とするか、企業・国・自治体などの派生的なエコシステムとの関係はどうかなど、家庭経営の根本問題を考える。	今井光映（金城学院大学長）
2	家庭経営のシステム	家庭経営はインプット、プロセス、アウトプット、フィードバックの4つのマネジメント要素から成る。それら4要素の内容と関連を、具体的な例で考え、合理的な家庭経営行動の基礎とする。	同上
3	家庭経営の意思決定の過程	新しい家庭経営において「家庭経営とは意思決定のことなり」と考えられ、意思決定こそ家庭経営の中核とされる。家政の意思決定のプロセスを具体的な例をあげながら考える。	同上
4	家庭経営における価値とライフスタイルの設計	家庭経営のシステムにおいて、価値は最も中核的なインプットとして意思決定のプロセスを方向づけ、それぞれにライフスタイルを形成する源となる。価値の意義とその家庭経営への影響の過程を考える。	山口久子（椙山女学園大学教授）
5	家庭経営と経済生活の設計	経済生活は、家庭経営の中核的なサブシステムである。家族個人の自己表現を進めていくための方法論を理解し、家庭経営の理論をふまえて、家族・個人のライフサイクルにそった家庭の経済生活の設計を考える。	同上
6	家庭経営と食生活の設計	食生活を家庭経営の一つのサブシステムとしてとらえ、食事がもつ精神的要素の大きいことを充分認識しながら、食物・栄養の理論をふまえて、家族・個人のライフサイクルにそった食生活の設計を考える。	同上
7	家庭経営と衣生活の設計	衣生活を家庭経営の一つのサブシステムとして、人間に最も近接した環境としてとらえていくことの必要性を知り、繊維・衣料の理論をふまえて、家族・個人のライフサイクルにそった衣生活の設計を考える。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	家庭経営と住生活の設計	家族・個人のライフサイクルおよび住要求にそった住生活の設計を、起居様式、持家志向、住生活空間の構成、住環境の基準、高齢者と住生活、物的管理の視点から考える。	小澤紀美子（東京学芸大学助教授）
9	家庭経営と生活時間の設計	家庭や個人の生活時間の構造がどのような変化をたどっているか、またその変化の中で家庭経営はどのような問題に迫られているかを考える。またその有効な活用のためのマネージメントの方法を考える。	同上
10	家庭経営と家事労働の設計	家事労働は、従来、時間的要素と身体的要素によって、労働生理学的に把握されてきたが、それに加えて、情感的と認知的の二つの要素を加えて、トータルにとらえられる必要がある。それとともに、それを経済的に評価する方法も考えておく必要がある。	同上
11	高齢化社会と家庭経営	世界に類をみない早やさと水準ですすんでいるわが国社会の高齢化によって、家庭経営がどのような影響を受けるかを自覚し、それに対応する方策を家庭経営の立場で考える。	山口久子
12	情報化社会と家庭経営	従来、家政の意思決定は経験的に行われてきたが、ハウスホールドコンピュータの開発によって、それを科学的に行うことができるようになった。ニューメディアの時代を迎えるに当たって、おこりうる家政の問題を考える。	小澤紀美子
13	家庭経営と消費者問題	家庭経営がその目的を達成するうえで問題としなければならないものに消費者問題がある。その背景構造を明らかにし、問題を解決するための生活環境醸成的な家庭経営を考える。	今井光映
14	家庭経営と消費者教育	今日の家庭経営をめぐる外部環境条件の大きな問題として消費者問題があるが、その問題解決の担い手として消費者教育を位地づけ、その考え方と方法を考える。	同上
15	これからの家庭経営を考える	これまで学習してきた14章までの各章で、説明し足りなかったこと、あるいはとくに強調したいことを、各担当者が確認するとともに、この3者のてい談という形で、これからの社会の中での家庭経営のあり方を話し合う。	今井光映 山口久子 小澤紀美子

＝衣生活概論＝（TV）

〔主任講師：矢部章彦（放送大学教授）〕

全体のねらい

“生活の中の衣服”という視点から、今日の衣生活にかかわる諸問題を、多くの事例をあげて通観する。

流れの筋を、衣服が語る人間、衣生活を支える科学に大別し、それぞれの立場から概説し、さらに高度な専門への橋渡しとする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生活の中の衣服	衣服は身体をおおうとか、寒暑を防ぐとか、上べを着飾るとか云った、バラバラの機能の寄せ集めではない。むしろ衣服をまとう人間がその根源にあることを、概論的叙述の中ではっきりさせておきたい。	矢部章彦（放送大学教授）
2	衣服の意味(1) －衣服の機能－	衣服は単に寒暑や外敵・外傷から身を守る物理的機能をもつだけではなく、着る人の心と結びついた様々の機能をもっている。衣服とは何かを考えるにあたり、衣服の諸機能を概観する。	小池三枝（お茶の水女子大学助教授）
3	衣服の意味(2) －衣服と心情－	衣服を通して人間をみるということについて、いく種かの具体例によって考える。	同上
4	衣服の意味(3) －衣服と社会－	衣服は個人の社会の一員たることを保証して、社会生活における保護の役目をもつ。衣服の社会的機能について、西欧中世の二つの習慣をとりあげて考える。	徳井淑子
5	衣服の意味(4) －流行－	新しい流行は常に社会の批判をうけるが、一方流行に遅れた衣服もまた常に社会に入れられない。西洋の中世から近代に至る歴史の中に、流行に対する人々の反応を探り、その理由を考える。	同上
6	衣服の意味(5) －制服－	現代社会において衣服の社会的機能の最も顕著な例は、制服に求められる。制服がもつ三つの性格、保護・主張・排除について、西洋服飾史の事例によって考える。	同上
7	衣服と人体	衣服は人体の体温調節や運動性などの機能をどのように補助しているか。また、妨げとなるのはどのような場合かを、衣服の素材、形、着方などの面から考える。	酒井豊子

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	衣服の素材(1)	天然繊維から合成繊維まで、各種繊維の特質を、衣服の実用上の諸特性との関係など把える。またそれらの改良、改質の方向にも触れる。綿、毛などの輸入や、繊維消費などについても考えてみたい。	酒井豊子
9	衣服の素材(2)	織物・編物などの布を中心に、衣服を構成する種々な材料について、その製法、用途などを概観し、衣服の取り扱い易さや着心地のよさなどの上に関係の深い性能について考察する。	同　上
10	衣服の色(1) －色とは何か－	形・文様・周囲の風物に托した情緒の表現など、人間の内面と外の世界との調和、人間の体験や学習効果と結びついた色の世界。 色の見方と見え方について、広範囲な視点から編ずる。色名（固有色名・基本色名）から、色の定量的記述にまで言及する。	矢部章彦 小池三枝
11	衣服の色(2) －染めについて－	染めの技法の伝統。染料・繊維の組合わせにもとずく近代染色技法ならびに染色理論。 染色物の、日光・洗濯・汗・マサツ等による変退色とその評価など、主として科学的な立場からの解説を試みる。	矢部章彦
12	衣服の製作(1)	伸縮性、剛軟性など、素材の物理的、力学的性能が、衣服を形づくる上でどのようにかかわるかを考察。縫う、編む、接着など、衣服製作の諸作業を、出来上りの丈夫さ、美しさなどの面から検討する。	酒井豊子
13	衣服の製作(2) －既製服－	既製服は、すでにわれわれの衣生活に欠かせない存在となっている。ここでは、既製服の企画から製造に至る工程を追って、既製服がどのようにわれわれに提供されているかを理解する。	同　上
14	衣服の手入れ	新しい衣服を長持ちさせる手だてについて考える。平常の手入れ、保管のほか、最も重要な課題として、洗濯についてやゝくわしく論ずる。 衣服のいたみを、系統的に整理して、それぞれについての対策を考える。	矢部章彦
15	衣生活と環境 (付)衣生活の総合的考察	衣生活を社会的に見たときの諸問題を、衣服の廃棄と再利用、繊維処理剤の安全性、洗剤にかかわる諸問題の三点にしぼり、概要を説明する。 最後のまとめとして、人文・社会・自然の三つの立場を融合して、人間にとっての着ることの意味を再考する。	同　上

＝ 衣　服　論 ＝（TV）

〔主任講師：谷田閲次（お茶の水女子大学名誉教授）
徳井淑子（放送大学助教授）〕

全体のねらい

日本、西洋の服飾の歴史の中から具体的な事象をとりあげて服飾表現の諸相をみる。前半で表現の担い手である形態・色彩・文様の問題を扱い、後半で服飾の美感をとりあげる。実物資料、絵画・彫刻等美術資料、服飾についての記録、考証等の文献、文学作品の資料を引用しながら、服飾研究の一つのあり方を示す。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	形態と表現	衣摺　面と表面装飾　形態の対比　装飾部分	谷田閲次（お茶の水女子大学名誉教授）
2	中世西欧の社会と服飾表現 (1) －騎士と宮廷生活－	封建儀礼と服飾　騎士道と服飾　宮廷風恋愛と服飾	徳井淑子（放送大学助教授）
3	中世西欧の社会と服飾表現 (2) －衣服のヒエラルキー－	中世の衣服観　ヒエラルキーの実現　文字にみる衣服と社会階層	同上
4	中世西欧の社会と服飾表現 (3) －紋章と衣服－	国王と紋章　都市と紋章	同上
5	色彩の寓意と象徴	服制と色彩　寓意と象徴　重ね色目の抒情	谷田閲次
6	中世西欧の色彩の象徴	深紅－プールプルとエカルラット　緑衣の習慣の流行	徳井淑子
7	文様の意想	大様の三つの要素　意想のさまざま　雅びへの志向	谷田閲次

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	近世日本の 服飾文様　(1) ー小袖文様を読むー	「御ひいなかた」の文様から　様子と集磐の文様　橋に波　「一来」の大文字の文様　かまきり山の文様　かささぎの文様	小池三枝 （お茶の水女子大学助教授）
9	近世日本の 服飾文様　(2) ー歌舞伎文様の 発生・展開ー	舞台と役者と観客　江戸前期ー女形の衣裳から　江戸後期ー江戸町人の生活と歌舞伎　役者染の流行一路考恭	同　上
10	流　　行	服飾の社会性　流行の構造　モード（時世粧）　武家服飾の嗜み	谷田閲次
11	「だ　て」	「たて」という語　奴、町奴、男達　だての心　当世風としてのだて	同　上
12	「い　き」	他政期の江戸文化　新風としてのいき　いきの好み　いきの心	同　上
13	「ダンディスム」	風俗としてのダンディ　ダンディズムの展開	徳井淑子
14	「ハイカラ」	幕末維新期ー洋装への関心　明治初期ー洋装化と外国人の目　明治20年代　明治30年代ーハイカラ語の出現	小池三枝
15	服飾と人間	衣服の主人公　服飾の歴史とは　作家なき作品　形を生む心　表現された服飾	谷田閲次

＝衣生活の科学＝(TV)

〔主任講師：矢部章彦（放送大学教授）〕

全体のねらい

衣生活と衣服の機能との関係に焦点をあてて、快適な衣生活の科学的側面を考えてゆきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	衣服の機能	衣服機能のもつ自然科学的側面を、ヒトの要求する諸性能、素材の性質との関係、衣服に仕立て着用する過程での要求性能、手入れ・保存から廃棄に到る道すじを通観し、衣服機能のもつ美的要求に関しても、自然科学的諸性能が、いかに深くかかわっているかを概説する。	矢部章彦（放送大学教授）
2	ヒトの体温調節と衣服	衣服の機能をまずヒトの側から考えてゆくための基本事項について解説する。 ヒトの体温調節のしくみとその限界、衣服による気候調節（衣服気候）、ヒトの環境への適応、馴化などが主題となる。	田村照子（文化女子大学助教授）
3	気候に応じた衣服設計	衣服による保温と放熱の機構を、物理と衛生の両面から考察する。水分の吸収と放散も重要な課題であり、これら諸性能と素材の物理的、化学的性質との関連に多くの問題が隠されている。	同上
4	人体の動きと衣服の運動機能性	人体の動きの規則性と、これに応じた動きやすい衣服設計の考え方を、衣服のゆとりと素材の伸縮性、動きを拘束する衣服圧の許容限界の面から併せ考えていきたい。視点はあくまで人体の側にある。	同上
5	水にかかわる性質	肌着の吸湿、吸水性。レインコートの撥水性など、種々のかたちで要求される衣服と水とのかかわりを、繊維の化学的性質にさかのぼって考える。高分子の化学的特性との関係が重点となる。	中島利誠（お茶の水女子大学教授）
6	熱にかかわる性質	合成繊維は熱により収縮、融解しやすい反面、熱固定によるプリーツ加工ができるなどの利点もある。これら衣服の熱的な性質と繊維を構成する高分子の物理的性質との関係を述べる。	酒井豊子（都立立川短大教授）
7	型くずれ、寸法変化と素材の性質	収縮、伸長、型くずれの原因となる繊維の性質や、織物、編物などの構造的特徴を知り、防縮加工、形態固定加工などの原理を、羊毛の防縮加工や、パーマネントプレスとして著名な樹脂加工を例に解説する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	衣服と色 (1)	衣服の素材は、デザインにあらわれる布構造や形態的特徴のほか、染色による色彩効果およびその耐久性（堅ろう度）が重要な要素となる。 染色の基礎原理、繊維別の染色法、染色物の堅ろう度とその評価法につき述べる。	駒城素子 (お茶の水女子大学講師)
9	衣服と色 (2)	衣服のもつ効果を、どのように評価するかは決して単純ではない。美学的立場、心理学的立場、自然科学的立場の総合的効果としてとらえねばならない。 ここでは、色の表示法を中心にして、主として自然科学の立場から色の問題を説明する。	矢部章彦
10	布から衣服へ	布により衣服を形づくるうえで重要な布の造形性の問題として、布の張り、剪断特性を中心にとりあげ、布を構成する繊維の曲げかたさなどの性能や、織物・編み物など布の組織・構造のちがいが、どのようにかかわるかを考察する。	酒井豊子
11	既製服と型紙	われわれは用いる衣服の大部分を既製服により調達している。満足度の高い既製服の供給には、すぐれた型紙の製作が第一歩である。既製服製造工程の中から、特にパターンメーキングに関するさまざまな手法を紹介する。	同上
12	衣服の手入れ (1) 洗浄理論	新しい衣服を、いかに長もちさせるかという衣生活の大切な課題を洗濯を中心に、2回にわたって解説する。 洗浄理論は、汚れる→汚れを落とす、過程を界面化学の立場から組み立てて説明する。	矢部章彦
13	衣服の手入れ (2) 洗濯の条件	日常行う洗濯に焦点をあわせ、洗浄理論を背景として有効な洗濯条件を考える。衣服の手入れの目的は、よごれ除去とともに形態、外観、風合いなどを含めた総合的な品質の再生・保存にある。	前島雅子 （千葉大学教授）
14	衣服のいたみ －劣化とその防止－	衣服のいたみとその防止法について系統的に考察する。着用、洗濯と保管の間に種々の原因で衣料は劣化が進むことは避けられない。 流行遅れなどの廃棄理由は次章にゆずり、主として科学的な立場に立って解説する。	駒城素子
15	衣服と環境	衣服の入手から廃棄までの道すじを考えること。着用する衣服の安全性と繊維処理剤との関係の考察。外部環境の汚染が問題になっている今日、洗剤に関する諸問題を広い視点から考え直すことを主題とする。	矢部章彦

＝食　生　活　論＝（R）

〔主任講師：宮崎基嘉（放送大学教授）
　　鈴木継美（東京大学教授）〕

全体のねらい

現代はわが国では飽食の時代といわれるが、世界には飢餓地域も存在する。人間がたどってきた食べる事を歴史的な視点から、また文化の発展の過程から追究してみたい。狩猟民、牧畜民、農耕民の食事から現代の食事に至る変化を考え、食の根源に存在する嗜好の心理について触れる。また近年における わが国の食生活に及ぼしている要因のなかから、都市化の問題と家族生活の問題をとりあげ、食の近代化とは何かを考えてみたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	食　の　文　化	人類は生存するために、食物を求めて数百万年ものあいだ努力してきた。その食にかかわる営みである「食の文化」について概観する。	宮崎基嘉（放送大学教授） 鈴木継美（東京大学教授）
2	人間の食事とサルの食事	食物を摂取するという活動は、根本的には飢えと渇きを癒すためのものである。その摂食行動の様式について、まずサルの食事に焦点をあて、次いでヒトへの進化の過程に言及する。	鈴木継美
3	採集・狩猟民の食事	採集・狩猟による食物獲得は、ホモ・エレクトウスの段階にまでさかのぼることができる。現存の数少ない採集・狩猟民の食生活を観察し、その実態を探る。	同　上
4	牧畜民の食事	牧畜民とは、放牧家畜を飼育して生計をたてている人々のことをいう。彼らの食生活は当然、畜産物を中心としたものとなるが、アフリカのレンディーレ族の事例をみながら検討する。	同　上
5	農耕民の食事・1	今からおよそ1万年前に発生した農耕は、急速に世界各地に広がり、さまざまに進行していった。農耕民の食物・食事の原型を知るために、パプア低地・ギデラ族を考察する。	同　上
6	農耕民の食事・2	世界中に広がる農耕民のなかで、穀物を主産物とする人々に焦点をあて、穀物依存型の食生活の実態と問題点について考察する。	同　上
7	世　界　の　食　事	大航海時代直前の世界は、主作物によって色分けすることができるが、国際交流の盛んな現代において、それがどのように変化してきたかを探る。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	日本の食事文化	古代から現代に至るまで、日本の食事文化はどのような変遷をたどってきたのだろうか。それらをふまえた上で、今後の日本人の食生活における課題を検討する。	宮崎基嘉
9	嗜好の心理	味覚や嗜好は先天的に決められるのではなく、後天的なもの、環境・生活等により変化し、形成されていくものである。嗜好に関する民族的な伝統と変化について解明する。	祖父江孝男（放送大学教授）
10	米食の文化	稲の発生と日本への伝播・普及の歴史をたどり現代日本の米食文化に焦点をあて、その実態と問題点について考察を加える。	宮崎基嘉
11	豆食の文化	豆類は農耕の初期において、すでに世界中に広がっていった。豆はどのように食べられてきたのだろうか。豆食文化の起源と発展の経緯を探る。	同上
12	魚食、肉食の文化	魚食か、それとも肉食か。貯蔵技術や輸送手段が未発達であった時代においては、風土条件がそれを規定した。日本の場合を中心に、魚食、肉食文化の足跡をたどる。	同上
13	都市化と食生活	食生活の変化の度合いは地域により異なるが、その重要な要因は都市化にある。日本人の食生活パターンに及ぼす都市化の影響を考察し、今後の課題を検討する。	内野澄子（厚生省人口問題研究所・医学博士）
14	家族と食生活	家族がそろって食事をすることの重要性について、さまざまな角度から検討を加え、家族と食生活とのかかわりあいを考える。	足立己幸（女子栄養大学教授）
15	食の近代化	高度成長時代の昭和３５年以降、日本人の食生活は著しい変化をみせてきた。現代日本人の食生活を見直し、食の近代化とは何かを考える課題を提供する。	宮崎基嘉

＝食　物　総　論＝　（ＴＶ）

〔主任講師：宮崎基嘉（放送大学教授）〕

全体のねらい

食物の持つ意味、食物の役割は生活のなかで、また健康との係りあいにおいて近年いろいろの問題を提起している。また食物をめぐる諸科学の進歩もあり新しい視点から食物を理解することが日常生活の上においても必要になった。食物の種類は極めて多いが、全体に通じる問題を栄養、健康、嗜好、品質、保蔵の面から学習する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	生活と食物	食生活の変化は生活の変化と深く関係している。食物の変化は技術の進歩もあるが需要の変化にもよる。今、食物は健康とのかかわりで見直しを迫まられている。食物と栄養の問題を中心に考えていく。	宮崎基嘉（放送大学教授）
2	炭水化物の役割	食物成分のうち最も量的に多く、また種類も多い炭水化物について主に栄養的役割について述べる。食物の調理や加工など食物を扱う上での炭水化物の変化やその栄養に及ぼす影響など多角的な解説をする。	加藤博通（東京大学教授）
3	脂質の働き	この２年間に最も摂取量の増加した成分で、食生活の変化を象徴する成分でありまた健康の視点からも注目されている成分である。研究の進歩も著るしく新知見を中心に解説する。	五十嵐侑（お茶の水女子大学教授）
4	たんぱく質とアミノ酸	たんぱく質は生命の基本物質であり、アミノ酸はそれを構成する成分である。たんぱく質の重要性について認識する。食物たんぱく質の栄養上の価値の相異について、アミノ酸組成との関係を述べる。	宮崎基嘉（放送大学教授）
5	ミネラルの働き	ミネラル（無機質）は種類が多い。それぞれ個別の働きがあると同時に相互に関連して働いている。体内での動きも極めて能動的である。ミネラルの吸収、利用について新しい研究が展開されている。微量ミネラルについても最近注目されている。	内藤博（東京大学教授）
6	ビタミンの役割	ビタミンの種類も極めて多く、その作用も多彩である。系統的にビタミン類全般について解説する。特にビタミンA、D、B、C などについて詳述するとともに、食物、食事によるビタミン補給についても述べる。	荒川信彦（お茶の水女子大学教授）
7	非栄養の役割	食物の成分の中には栄養素に分類されていない多くの成分がある。これら非栄養素の役割について近年研究が発展してきている。食物繊維は健康との関係で広く研究が発展している成分である。	綾野雄幸（千葉大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	栄養所要量と食事	前章までの知識を総括し、日常生活活動において摂取すべき望ましい栄養量の基準となっている栄養所要量について解説する。また日常食事の構成について説明する。さらに運動付加の意味について述べる。	宮崎基嘉
9	食物の色・味・香り	食物の具備すべき重要な機能に嗜好適性の問題がある。この章では嗜好に関係の深い、食物の色、味、香りの成分について解説する。この分野の研究は驚くほど広く深く行なわれていることが理解されよう。	小林彰夫（お茶の水女子大学教授）
10	食物の品質	食物の品質が問われる時代である。食物の品質を規定する因子を分析し、これを保証する手段としての国際食品規格、国内食品規格の問題を探る。品質の一つである食物のうまさとはどのようなことなのか。うまさを形成する食物の物性に触れる。	吉川誠次（共立女子大学講師）
11	食物の保蔵	食物の生産と消費を結ぶ中間技術としての保蔵の重要性は世界の食糧問題の一環としてその研究開発が急がれている。食物の品質を保持しつつ貯蔵するために新しい技術が駆使されている。中間水分食品もその1つである。	荒井綜一（東京大学助教授）
12	食物の調理科学	食物の調理は食物をおいしくするための操作を考えてもよい。また食物を処理したとき起る物理・化学的変化をみてもよい。どのような操作がどのような意味をもつのか、科学的、体系的にこれを解説する。	杉田浩一（昭和女子大学教授）
13	食品の衛生と安全性	食物の安全性を確保するために食品衛生学の領域において活発な研究が行なわれている。食中毒の問題、食品添加物の問題、安全性の考え方、法規制などにつき述べる。	細貝祐太郎（女子栄養大学教授）
14	食物をめぐるトピックス	特に新しい問題を扱うわけではない。13章までに入りきらなかった重要なテーマ3題について述べる。すなわち、(1)食物のエネルギー、(2)水、(3)微生物利用の3題である。	宮崎基嘉
15	食物の未来像	食物はこれからどのように変っていくのだろうか。過去に行なわれた未来予測の結果を検証し、新らしい未来予測に触れる。食物の機能について新しい見方がなされ、機能性食品の研究が開発されている。	同上

＝食　物　各　論＝（TV）

〔主任講師：宮崎基嘉（放送大学教授）〕

全体のねらい

食物総論における知識を土台として、日本における日常食品について、その生産、流通方式、含有成分、栄養価、品質、調理加工適性、貯蔵法、家庭における利用方法などにつき各論的に教える。食品をめぐる諸情勢、とくに法規制についても触れる。ねらいは食品についての科学的教育にある。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	日本の食品	わが国の食品の多様化傾向、消費の動向について述べ、日常食品の全体像を示す。食品をとりまく規制についても触れておく。	宮崎基嘉（放送大学教授）
2	農産食品 1 ー穀類	米、小麦を中心に、その食形態、成分、食味、品質と加工品との関係について解説する。	同上
3	農産食品 2 ーいも、でん粉類	各種いも類の性状について述べる。でん粉については、その性質、構造を明らかにしたうえ機能と利用法をあげる。	同上
4	農産食品 3 ー豆類、果実類	豆類の種類、成分について述べる。特に大豆については豆腐、豆乳、新たんぱく食品など広い用途を紹介する。種実類の種類、成分についても解説する。	同上
5	農産食品 4 ー野菜類、きのこ類	新野菜を含め野菜類の種類、系統、流通、成分について述べ、その効用に触れる。きのこ類の名称、種類についても解説する。	同上
6	農産食品 5 ー果実類	新品種や外国からの新導入果実も含め、果実類の種類を紹介し、品質、成分について述べ、その加工品について解説する。	同上
7	畜産食品 1 ー肉類	食肉の種類、肉の組織構造、肉の熟成、食肉の成分、部位による違いなどを解説する。また肉加工品についても触れる。	荒川信彦（お茶の水女大教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	畜産食品 2 ー乳類、卵類	牛乳成分の微細構造を説明し、牛乳の栄養価を検討する。さらに牛乳、乳製品を種類別に解説する。また鶏卵を中心に卵の構造、成分、栄養価について解説する。	宮崎基嘉
9	水産食品 魚介類藻類	魚介類の消費の状況、流通経路、魚介類の成分、鮮度判定法などを中心に解説する。藻類については種類をあげたうえ、栄養価を評価する。	同上
10	甘味食品、し好食品	砂糖・でん粉糖の種類と構造、甘味などについて解説し、新しい糖類も紹介する。また菓子類、茶、嗜好飲料について述べる。	加藤博通（東京大学教授）
11	醸造食品	みそ、しょうゆ、食酢、アルコール飲料など微生物を利用する醸造食品について述べる。微生物の働き、醸造食品の製造法、種類による成分の違いなどを解説する。	宮崎基嘉
12	調味食品	塩、調味料、トマト加工品、香辛料について述べるとともに、油脂食品についてもこの章で解説する。	同上
13	加工食品	新しい加工食品類を取り上げる。すなわち乾燥食品、冷凍食品、調理冷凍食品、レトルトパウチ食品などがどのように製造されるのか解説し、その成分、利用について述べる。	同上
14	特殊食品	栄養強化食品、特別用途食品、医療用食品などについて解説し、いわゆる健康食品の問題点や食品の栄養価表示についても触れる。	同上
15	食品のまとめ	食生活の変化要因をさぐり、食事の事例を検討したうえで、食品の特色を食品群別にとらえて説明し、食生活指針について述べる。	同上

＝住　居　Ｉ＝（ＴＶ）

―住　生　活　論―

〔主任講師：清家　清（東京工業大学名誉教授）
　　本間博文（放送大学助教授）〕

全体のねらい

住居１では住生活の問題を中心に講義する。住生活は家族生活の基本であるが、異なった自然環境や社会環境のもとで住生活がどのように営まれているか、様々な実例を紹介し、その本質について考える。ついで、我国における住生活の変遷を考察し、その特徴を明らかにする。あわせて、現代の住生活上の問題点を検討し、将来の課題と展望について考える。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	住居学のめざすもの	住居学のめざすものは何か。「住居Ｉ」の講義を展開するにあたり、住居学の目的と範囲について、その概要を解説する。	清家　清
2	風土と住居－１ ＜乾燥地の住まい＞	日本と異なった自然環境や社会環境において人々がどのような住まい方をしているのか。まず、日本と大きく異なる乾燥地域の住まいに焦点を当て、その住居の特徴と住生活をさぐる。	八木幸二 （東京工業大学助手）
3	風土と住居－２ ＜寒冷地の住まい＞	寒冷地では、人々はどのような住まい方をしているのか。中国黄河流域の地下住居を例にとりあげて、その特徴を考察する。	同　上
4	風土と住居－３ ＜湿潤地の住まい＞	日本の住まいは、比較的湿潤地のそれに近いといえる。ここでは、日本よりもっと湿潤で暖かい地域の住まいを考察し、乾燥地、寒冷地と比較することによって日本の住まいの特徴を考えてみる。	同　上
5	住まいの歴史－１ ＜竪穴住居から寝殿造まで＞	日本人の住まいは、一体どのような変遷をたどってきたのか。我が国における住居の最も古い形態とされる竪穴住居から平安時代の貴族・庶民の住まいまで、その移り変わりを考察する。	本間博文
6	住まいの歴史－２ ＜主殿造から書院造へ＞	鎌倉時代から江戸時代に至る武家社会における住居の変遷について考察する。この時期に我が国独特の住居の形式が完成するが、その経緯をたどることによって、日本的な住居のあり方を考えてみる。	同　上
7	住まいの歴史－３ ＜中世・近世の庶民住宅＞	中世・近世における庶民の住宅や住生活のようすを、絵巻物や文書記録などに残された僅かな資料を手がかりにしてさぐる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	住まいの歴史－4 ＜明治・大正時代の住宅＞	明治に入って、我が国の住居は大きな変化を受ける。伝統的な我が国の住居が、西欧の住居の影響を受けてどのように変わり今日の姿に至るか、その経緯を述べる。	本間博文
9	住まいの構成原理－1 ＜建具と床仕上げ＞	日本の住居を特徴付けているさまざまな構成原理について、ここでは畳と建具をとりあげ、それらが定着するに至る経緯をたどりながら、我が国の住居の特色を明らかにする。	同上
10	住まいの構成原理－2 ＜空間の転用性と室礼＞	日本人の住生活に見られるさまざまな習慣について述べ、それらが相互に有機的に結び付いて独特な住生活を作りあげていることを概説し、日本人の住生活の歴史のまとめとする。	同上
11	現代の住まい－1 ＜独立住宅の住生活＞	大部分の家族の望む住まいの形は庭付き1戸建て住宅、いわゆる独立住宅とされている。この独立住宅について、その問題点と改善すべき課題について考える。	同上
12	現代の住まい－2 ＜集合住宅の住生活＞	集合住宅における住生活で生じるさまざまな問題に関して、ここでは主に公団住宅を中心にとりあげ、その実情について考察を行う。	同上
13	社会と住まい－1 ＜海外の住宅事情＞	海外、特にヨーロッパにおける住宅事情の推移と現状について学び、我が国における住宅の問題点を明らかにし、改良の指針をさぐる。	同上
14	社会と住まい－2 ＜国内の住宅事情＞	明治から現代に至る我が国の住宅事情の変遷をたどり、今日の住宅事情の問題点がどこにあるかを考える。	同上
15	社会と住まい－3 ＜住生活の現状と課題＞	我が国の住宅事情を欧米諸国のそれとの比較から明らかにし、今後の改善の指針をさぐる。	同上

＝住　　居　　II＝（TV）

－住　環　境　論－

〔主任講師：東　修三（帝国女子大学教授）
　　本間博文（放送大学助教授）〕

全体のねらい

住居は住生活の場である。健康で快適な住生活を営む前提として、住居の室内環境、敷地環境および地域の住環境、ならびに関連事項などについて、科学的理解を深める。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	住環境とは何か	「住居II－住環境論－」の講義を展開するにあたり、住環境とは何か。なぜ、住環境を学ぶのかについて、まず考えてみる。	東　修三（帝国女子大学教授）
2	住居の敷地環境－1－自然的条件－	まず住居の敷地の選定にあたって留意すべき敷地の自然的条件、すなわち、地形、地質などの土地の性状、ならびに微気候について述べる。	同　上
3	住居の敷地環境－2－日　照－	住居の日照は敷地の南側の建物や樹木などで障害を受ける。日影曲線、日影図および日影時間図、太陽位置図などを解説して、日照時間と隣棟間隔、中高層建築物の日影規則ならびに日照障害などについて述べる。	同　上
4	地域の住環境－1－大気汚染と騒音－	都市は大気汚染、騒音などによってその住環境が悪化しており、多くの公害問題が発生している。住環境としての保健性、快適性を確保する立場からこれらの公害に注目して、その実態と対策を中心に述べる。	同　上
5	地域の住環境－2－社会的条件－	居住地の選択には、教育、医療などの公共施設の配置状況や公害、交通事情などの社会的条件が問題になる。居住環境が住宅を取り巻く周辺の空間要素によってどのような影響を受けるか、その関連について検討する。	本間博文（放送大学助教授）
6	室内環境－1－室内気候と自然気候調節－	住居の内部は屋根や外壁などの住居構造体によって外気と隔てられているため、外部の一般の気候と違った気候状態を呈しており、これを室内気候という。室内気候の成立機構、さらに住居の自然気候調節機能を中心に述べる。	東　修三
7	室内環境－2－人工気候調節－	冷暖房などの設備によって快適な室内気候を実現しようとするのが人工気候調節である。熱貫流に関する基礎事項、冷暖房理論に基づき、住居構造体の断熱設計などについて述べる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	室内環境－3 －通風と換気－	通風は夏季在室者に涼感を与え、換気は冷暖房時の室内空気の汚染を排除し、ともに室内気候の改良に役だつ。通風計画および換気設計について述べる。	東　　修三
9	室内環境－4 －採光と照明－	室内に適度の照度を確保するのに昼間は窓その他の開口部から採光する。採光が不十分なときや夜間は照明を行なう。採光計画および照明設計について述べる。	同　　上
10	室内環境－5 －騒音の妨止－	外部騒音などを防止するには、住居構造体、特に外壁などの隔壁、窓、扉などの遮音性を高める必要がある。騒音に関する基礎事項、構造体材料の遮音性能などに関する事項を概説して騒音防止対策に役だてる。	同　　上
11	室内環境－6 －結露の妨止－	冬季暖房時などに、室内の壁、天井および床、さらに押入の内部などに結露が発生し、その表面に汚損を受けることが多い。結露の発生機構を探り、その防止対策について述べる。	同　　上
12	住居設備－1 －太陽熱利用－	省エネルギー時代における住居の設備計画のあり方について考える。まず、太陽熱利用の設備システムを使ったいわゆるソーラハウスなどの研究を紹介する。	本間博文
13	住居設備－2 －省エネルギー手法－	住居の室内環境を調節するための設備計画、すなわち、冷暖房設備、照明設備などの住居設備計画における省エネルギー手法について、その体系ならびに若干の具体例を述べる。	東　　修三
14	廃棄物処理	廃棄物は多様化し、量も増える傾向にある。廃棄物の発生と処理のバランスがくずれると、住環境の悪化を招く。廃棄物の排出、その収集・処理の実状などを述べ、更には廃棄物を出さないための工夫について考える。	本間博文
15	これからの住環境	講義内容を総括し、残されたいくつかの問題、近年の都市人口の急増とそれに伴う住居形態の変容、都市やその周辺地域の開発計画などの住環境への影響等について、本講義のしめくくりとして考える。	東　　修三

＝住　　居　　Ⅲ＝（ＴＶ）

―住　計　画　論―

〔主任講師：清家　清（東京工業大学名誉教授）
　　本間博文（放送大学教授）〕

全体のねらい

住居は住むための機械であると言われている。人間の行動に支障なくかつその行動を快適に安全に営むことを可能とすることが最大の役割であると言って良いだろう。また、外部の環境を適切に調整して人間の生命活動に最適なように環境を調整することも重要な機能である。住居Ⅲでは住居Ⅰ、Ⅱで学習した内容をふまえて、物としての住居が快適で利便性に富む住生活を可能とするための計画課題を様々な角度から検討する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	住計画とは何か	「住居Ⅲ－住計画論－」の講義を展開するにあたり、その目的や課題、あるいは方法について解説し、望ましい住計画の条件を考える。	清家　清（東京工業大学名誉教授） 本間博文（放送大学助教授）
2	風土と住計画－１ －沖縄の住まい	住計画論の最初に、わが国としては特殊な気候条件における住まいのあり方を概観し、気候風土と住計画の関連を考察する。本章では沖縄の住居を取りあげる。	本間博文
3	風土と住計画－２ －寒冷地の住まい	北海道はわが国としては寒冷な地域で、本州の住計画とは異なった問題点がある。このような寒冷地における住生活の特徴を明らかにし、住宅のあり方を考える。	同　上
4	平面計画－１	第２次大戦後の住宅には、戦前の中廊下型とは全く異なった平面型の住宅が登場し、モダンリビングと呼ばれた。この定着の過程と平面型の特質について述べる。	同　上
5	平面計画－２	前章に続いてモダンリビングの構成原理とその変遷について述べ、このモダンリビングが庶民の住宅にどのような影響を与え、今日に至っているかを検討する。	同　上
6	規模計画－１	住宅の室内空間の設計には、人体寸法が重要な決定要因となる。本章においては、人体寸法に基づいた室内空間の規模決定の問題について検討し、住宅の規模決定の為の基礎的な知見を得る。	清家　清 本間博文
7	規模計画－２	住宅の規模はどの程度あれば良いのだろうか。この点の国民的合意が得られなければ、居住状態の根本的改善は難しい。本章では、最低居住水準、適正居住水準を基に日本人としての住宅規模について考える。	本間博文

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	室内計画	外敵や猛獣などに対して比較的安全な島国に住む日本人と、大陸に住む民族との間の室内(インテリア)という言葉に対する感覚の相違、日本人の古来からの考え方の移りかわりなどから、室内計画の本質を考えてゆく。	清家　清
9	構造計画－1	建築物は、地震、積雪、強風、その他もろもろの災害に対して安全でなければならない。どうすれば安全な構造体にすることができるのか。基本的な事項から考察をすすめてゆく。	同上
10	構造計画－2	構造計画は、結局は各部位の平衡条件を検討し、力とその支持方法と変形の幾何学的・物理的・力学的な相互関係をしらべることに帰する。この章では、その問題を、いくつかの具体例について考える。	同上
11	構造計画－3	実際の建築物は、どのような構造計画のもとに建てられているのであろうか。いろいろな構造のメリット・デメリット、わが国に多い木造の場合の留意点などについてふれる。	同上
12	安全計画	住生活は、安全であることがもっとも基本である。本章においては、日常生活における各種の危険に対して、安全な住計画の課題を考える。	本間博文
13	防災計画	わが国のように、地震や台風を始めとする各種の自然災害の多い国では、災害に強い家を造ることは絶対的な条件である。本章では、主として地震を取り上げ、地震に安全な住宅について考える。	同上
14	住居の維持管理	住居の維持・管理は日常の住生活に直接関連し、住宅の居住性を大きく左右する。本章においては、集合住宅の管理と戸建て木造住宅のメンテナンスを取り上げ、現状の問題と今後の課題を明らかにする。	同上
15	おわりに これからの住まい	本章においては、住居Ⅰ「住生活論」、住居Ⅱ「住環境論」と今回の住居Ⅲ「住計画論」を合わせた45章の講義のまとめとして、日本における住生活の現状と今後の方向について総括的な展望を行う。	清家　清 本間博文

＝人　間　の　病　気＝（R）

〔主任講師：香月秀雄（放送大学長）〕

全体のねらい

人間は太古から現在に至る間そうであった様に、恐らくは将来とも、病気なるものとの対決を強いられることになろう。病気は個人のものに止まらず、人間が社会を形成するに至った時点では、個人のもつものが集団に影響を与え、また社会を維持する絆が往々にして個人の身心に影響を及ぼす。人間の病気を教養の概念として述る。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	病　気　と　は	健康と対比されるものとして病気が定義される。そして健康はしばしば身心の安寧なる状態として理想的に捉えられるが、生物としての人間は精神的にも肉体的にも常に平衡状態を保つための変動の中に生命を維持している。その平衡状態の破綻を病気と考えるべきであろう。	香月秀雄（放送大学長）
2	病気と人間との斗の歴史	人間同志の斗い、動物との斗い、自然災害等による外傷は因果関係の明らかなものとして古くから手当ての対象とされたが、原因の不明なものは精霊、悪魔によるものとして呪術的、宗教的に捉えていた。これを破り病気の真の原因に近づく端緒は伝染性疾患の流行にあった。	同　上
3	病気の原因と成立	大部分の病気は内因、外因によって全身レベルで起っている変化として考えられる。病気と関係のあると考えられる単一の條件とか、複合された條件の全てを病因として捉えることには問題がある。	同　上
4	病気を診断すること	病気によって起る個体の変化を外見から捉えることはそれ程困難でないが、内部に隠されたものの変化を知ることは決して容易ではない。而しこれは病気の診断、治療に必須の條件になる。近世に発達した各種の検査法は病気を診断する上で大なる貢献と共に弊害も生じた。	同　上
5	病気の症状と分類	病気の症状は千差万別であり、加えて個人の感性、受容度によって異ってくる、唯症状の有無、種類、部位、年令、性差、職業といった人間の生活との関わり合いは病気を診断する重要な手掛りとなり、また病気を分類する必要性が生じてくる。	同　上
6	科　学　の　参　入	目で捉え確かめることが顕微鏡の出現でより微細なもの、病因となる微生物の存在を明らかにしたが、更に生体臓器の活動に伴う電流の把握、放射線の医学分野への参入、生理学、生化学の関与は病態のみならず、生命現象の解明に灯をともす反面医学と医療との乖離をも伴った。	同　上
7	医　学　と　医　療	永い期間の多くの経験と知識の積み上げにより作られた医術、医療の歴史に漸時科学としての理論づけが行われ学問体系としての医学が樹立されるに至ったが、人間は医療なる名目の下にそして医学なる科学的根拠によって全体の総合性をあえて傍におく危険と苦悩にさらされている。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	心と肉体	科学の発展により人間の機能を機械的に捉え、更に分子レベルの追究は肉体を物質として捉えるに至っているが、心の存在はどのような科学的追求の目標になっているのか。	織田尚生（放送大学助教授）
9	心の病気	解明することの困難な心の病気とはどのようなものか。	同上
10	病気と経済	病気は個人にとっても家族、更に社会にとっても経済的な問題と深い関わり合いを持つ。	伊東光晴（京都大学教授）
11	病気の治療	多くの病気の原因が次第に明らかにされてきた現状では、治療は多分に科学的根拠を持つに至ってきたが、生体のもつ自然治療力に頼る対症療法以外の薬物療法、外科療法その他各種の療法は常に功罪を伴うもので、個人の資質、その人の置かれた環境等に左右される。	香月秀雄
12	治療の適応	病因と治療手段とは常に直結するものではない。個人としてもその人の生理的条件が捉えられて治療手段が撰択される。また病人を囲む家族、社会的条件はその撰択に充分に配慮されなければならない。病気の治療は治療手段の撰択－治療適応－により可否が決定する。	同上
13	加令と病気	人間の生成から発育そして老化、死という避けることのできない一生の過程の中に入り込む病気は、生後の環境に適応する時期と老化の時期に大きな負担となる。特に老化に伴う調節性状の衰えは軽い病変も悪化する傾向があり合併症も起し易い。	同上
14	病気の予後	病気の成り行きを予後と言い、病気の種類、機能、治療の方法に加えて個人の資質、生活環境等が予後に関連し、どの病気がどのような経過をとるかは一概に決めることが困難である。	同上
15	人間の病気と社会	病気が人間の生活に落とす影は微妙である。その人の心と肉体に何等かの痕跡を残し、行動にも影響与え、人集団、社会組織にもこれが反映してくる。病気は個人のものであると同時にその人の住む社会の問題でもある。	同上

＝母　子　保　健＝（TV）

〔主任講師：古谷　博（放送大学教授）〕

全体のねらい

ヒトの出生は母の体内における卵細胞の受精という生物学的現象にはじまり、これに遺伝と環境がからんで胎児の発育、分娩、授乳、育児という一連の過程を経て、人間としての完成の第一歩となるものである。この過程は内外の要因によってその安定が維持されているが、ここではそのメカニズムについてのべる。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	母と子の健康科学のねらい	母と子の健康は人間の要点であり、この健康が維持されるには多くの要因が複雑にからみあっている。この微妙で巧みな仕組みを理解するとともに意義も明らかにする。	古谷　博（放送大学教授）
2	生命のはじまり	生殖細胞の起源から始まり、減数分裂、卵子の成熟と卵胞の発達、精子の成熟、卵子数の推移、ホルモンと排卵、受精のメカニズム、精子のキャパシテュション、多精子受精防禦メカニズムと述べていく。	鈴木秋悦（慶応義塾大学助教授）
3	受精のメカニズム	受精卵の分割と分化、受精卵と卵管環境、着床前後の受精卵、子宮内膜と妊娠準備状態、胞胚の形とはたらき、着床のメカニズムについて述べる。	同　上
4	受精卵と胎盤	胎盤の初期発生学、胎盤の構造とはたらき、羊水のはたらきと組成、妊娠期間における胎盤と羊水、胎盤とホルモン、ヒトの胎盤の特徴について述べる。	同　上
5	母体・胎児・胎盤系の相互関係	胎児は胎盤を通じて母体との間に物質交換を行いながら成長する。また胎盤から産生されるホルモンは母児にさまざまな変化を及ぼしている。これらの相互関係について解明する。	太田孝夫（帝京大学教授）
6	胎児の発育	胎児の体は三胚葉がまず形成され、次第に各臓器に分化し、それぞれが機能を発揮しはじめ、胎外生活への適応のための準備を行っている。その発育過程について述べる。	同　上
7	妊婦のからだと心の変化	妊婦の全身的並びに局所的変化、妊娠中の生理的変化の個人差、心の変化、妊娠を安定維持させるメカニズムについて解説する。	伊藤博之（聖路加国際病院産婦人科医長）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	妊婦と環境	妊婦をめぐる諸々の環境因子、すなわちくすり、放射線、嗜好品、ウィルス、細菌などと、人間社会とのかかわりあい、つまり里帰り分娩、夫立会い分娩、ラマーズ法、座位分娩などについて解説していく。	伊藤博之
9	妊婦と生活	妊娠中のスポーツ、食事、性生活のあり方と高年婦人の妊娠、若年婦人の妊娠、勤労婦人の妊娠について、くわしく解説していく。	同　上
10	分娩の経過	分娩はどのようにしてはじまり、胎児はどの様にして分娩されるかについて、その過程をくわしく解説していく。	太田孝夫
11	分娩と胎児	分娩は胎児にとっての最初にして最大の試練でもあり、また母体にとっても分娩は肉体的・精神的にさまざまに影響している。この分娩が母児にどのように作用しているかについて解説する。	同　上
12	産後の回復	妊婦から褥婦、授乳婦へのうつりかわり、全身局所の身体的な回復、ホルモンの変化、母性のめばえなどについてくわしくのべる。	古谷　博
13	乳汁分泌	乳腺の発生と発達、構造と機能、ホルモンの作用と乳腺の機能、母乳の生成と分泌、乳汁分泌の調節などについて解説する。	同　上
14	母乳哺育	子どもにとって、いかに母乳が優れているかについて述べ、その母乳栄養のすすめ方、母乳哺育と母子結合についてくわしく解説していく。	奥山和男 （昭和大学教授）
15	子どもとは	2～3歳頃までは子どもにとって環境因子が大きく影響し、心身の成熟とともにその頃から社会への参加としてのしつけや教育が始まる。ライフサイクルにおける乳幼児期の位置づけを解説する。	巷野悟郎 （東京家政大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
16	胎児から新生児へ	出生に伴うからだの生理的変化と新生児の身体的特徴、それに応じた新生児の養護のあり方について解説し、未熟児についても触れる。	奥山和男
17	母と子のふれ合い	母と子のふれ合いと心の発達について、早期接触の重要性、母子結合を促進する育児のあり方、愛情遮断症候群など現在の母子関係の問題点も含めて解説していく。	同　上
18	子どもの栄養	新生児期をはじめその後の栄養、つまり母乳栄養・人工栄養、および離乳から幼食にわたる問題を扱うとともに、肥満、ヤセ、牛乳嫌い、小食など。	川崎富作 （日赤医療センター 小児科部長）
19	子どもの身体発育	身体の形態的成熟過程とその評価の意義及び評価の具体的方法について述べる。肥満、ヤセなどについてもとり上げ、解説する。	高野　陽 （国立公衆衛生院 母性小児衛生学部長）
20	子どもの運動機能発達	運動機能を順調に発達させる養育のあり方を考えていくとともに、乳幼児期の運動機能の発達過程とその評価判定についてくわしく述べる。	同　上
21	泣き声と言葉	産声から喃語、その後言葉へと発達していく段階を、母と子、環境などとのかかわりで考えていく。また言葉の発達のおくれ等にもふれる。	巷野悟郎
22	子どもの生理機能	乳幼児の生理の主なものについて、特に体温、すい眠、排泄などについてくわしい解説をしていく。	同　上
23	子どもと個人差	子どもの身体には、顔が各々違うように一人一人にそれぞれ個人差があり、その個人差により罹患傾向や疾病の軽重も違ってくる。この点を体質と併せて解説する。	川崎富作

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	子どもの発育と病気	子どもは新生児、乳児、幼児と発育していくがその発育に応じて病気の種類、現れ方とも違いがでてくる。この点を免疫の発達、また予防注射による病気の予防について述べる。	川崎富作
25	子どもの健康と環境	子どもの健康は環境によって大いに変化する。環境との関わりで、遊びの問題、事故の問題などについて述べる。	同　上
26	子どもの健康増進	環境に適応するための日常生活における問題点を考え、健康増進について述べる。ことに自律神経系の働きの年齢的推移の解説と、生活とのかかわりにふれる。	巷野悟郎
27	子ども と生活	こどもが社会生活に適応し順応していくための日常生活のあり方、いわゆる「しつけ」についてのべる。	同　上
28	子ども と社会	現在実施されている各種健康診査・保健指導をはじめ、こどもの健康のために社会がいかに関わっているかを述べる。子どものための施設などを紹介する。	高野　陽
29	集団保育	乳幼児の集団保育の意義とあり方、特に、集団保育における健康管理・事故防止について述べる。また、保育の具体的内容や家庭保育での関連についても解説する。	同　上
30	母と子どもの健康を考える	日本における母子保健の推移を見直すとともに、新生児とくに未熟児管理の進歩に果たした保育器の役割を解説し、母子保健向上の今後の視点をとらえる。	古谷　博 馬場一雄 （日本大学教授）

＝青少年の保健Ⅰ＝(R)

－学令期の保健－

〔主任講師：本間日臣（放送大学教授）
丸井英二（東京大学講師）〕

全体のねらい

健康科学に関連する講座には、母子保健・成人保健・老人保健とともに、少青年期保健がある。年令の順に、健康について考える構成になっている。この項では、学令期から成人するまでの、成育期の健康について、肉体的に精神的に、調和のとれた成長・成育とは何かについての理解を深めたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	少年期の健康科学	放送大学における、生涯にわたる健康科学に関する講義の一環として少年期の健康科学を位置づけ、その内容について主任講師の立場から講義を行う。	本間日臣（放送大学教授） 丸井英二（東京大学講師）
2	学齢期の心身の特徴	少年期は学校で生活をする学童期でもある。この時期の身体と心について、概括的に展望し、今後の講義の前提となる知識を整理する。	高石昌弘（東京大学教授）
3	少年期のからだの変化(1) －消化器、呼吸器を中心に－	少年期は消化器や呼吸器についての質的変化は少ない。しかし、身体全体の発育に伴い、その量的変化は著しい。これについて構造と機能の両面からみていく。	馬場一雄（日本大学教授）
4	少年期のからだの変化(2) －神経系、感覚器、歯など－	幼児期に出来上がった器官の機能的変化について講義する。特に、いくつかの運動機能を中心にその発達をたどる。また、感覚器および歯の発達にもふれる。	同上
5	少年期のからだの変化(3) －循環器を中心に－	循環系に関する基礎的な知識について解説し、循環系および腎機能の変化と、この時期にみられる病的変化についての講義をおこなう。	阿波彰一（東京大学講師）
6	少年期のからだの変化(4) －少年期の性的発育－	人間に男女の性差があるのはなぜか、性はいかにして決定されるか。その結果、思春期はどのようなメカニズムで発現するのか。生物学的な基礎知識を紹介する。	玉田太朗（自治医科大学教授）
7	少年期のからだの変化(5) －運動器を中心に－	学童の骨折が話題になることが多いが、その根拠はあるのか。人体の構造から、骨折はいかにして生ずるか、またその予防策について述べる。	杉浦勲（名古屋大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	少年期のこころの変化	少年期には身体上の変化に比べ、こころの変化は著しい。乳幼児期から学童期まで、それぞれの時期に特有の精神的課題を抱えている。子どもにとっての環境の変化と対応させて考えていく。	小倉　清（関東中央病院精神科部長）
9	身体の右と左	身体は一見すると左右対称のように見えるが、よく観察すると決してそうではないことが理解できる。脳の左右両半球の機能差から幼少年期の環境、言語、文化に言及する。	角田忠信（東京医科歯科大学教授）
10	保健環境としての家庭	家庭は子どもにとって最も重要かつ身近な環境である。健康問題発生の場、健康保持増進の場、健康問題解決の場としての家庭の重要性について考える。	江口篤寿（筑波大学教授）
11	子どもの食事と栄養	学童期は身体の量的変化の著しい時期であり、それを支えるための栄養について考える。さらに、こどもの生活のなかでの食生活の役割についてふれる。	金子佳代子（女子栄養大学講師）
12	学校における保健	学校保健は保健管理と保健教育とに分けられる。ここでは、それにとどまらず、学校という場における健康問題、さらに、子どもたちの生活、成績との関連のなかで心身の健康について調査結果を交えて考えていく。	小倉　学（茨城大学教授）
13	学校給食	学校での生活のなかで学校給食はいかなる意義を持つか、またその内容はどうか。子どもの食環境の変化と併せて、「食」について考える。	茂木専枝（実践女子大学教授）
14	青少年期の健康と社会環境	子どもの健康は生物学的に理解されるだけでなく、ひろく社会的存在としてとらえなければならない。青少年の健康問題は同時におとなの問題でもある。広い視野から健康を見直していく。	中江公裕（独協医科大学助教授）
15	青年期への移行	少年期から青年期への移行期として思春期をとり上げ、身体的成熟の側面と健康についてふれる。成熟の男女差もトピックとなる。	高石昌弘

＝青少年の保健 II＝（R）

〔主任講師：本間日臣（放送大学教授）
丸井英二（東京大学講師）〕

全体のねらい

この科目では、青少年の保健(1)に引き続き、一生にわたる健康科学の一環としての青年期を扱う。この時期は、身体的にほとんど成人と変わらないほどに成長している。しかし、環境が拡大していくにつれ、精神的な問題が様々な形で生じてくる。従って、生物学的な側面だけでなく、心理的、社会的な側面にも注目していく。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	青年期のからだ(1) 生理機能の成熟と問題点	からだの全機能がピークに達する少・青年期における遺伝的素因と環境諸因子との相互反応が、人間形成と以後の人生の健康維持にいかに大きく影響するかを、序説的に述べる。	本間日臣 （放送大学教授） 丸井英二 （東京大学講師）
2	青年期のからだ(2) 男性を中心に	思春期男子にみられる身体的変化、とくに性成熟過程を中心に解説する。また、思春期早発症や遅発症の原因やその治療、さらにその他の疾患についてもふれる。	白井将文 （東邦大学教授）
3	青年期のからだ(3) 女性を中心に	思春期から青年期にかけての女性の性成熟について概説し、よくみられる産婦人科疾患に関して保健学の立場からとらえる。また、結婚前にチェックすべき女性の健康問題についてもふれる。	林　謙治 （公衆衛生院学校衛生室長）
4	青年期のからだ(4) 思春期発現のメカニズム	思春期の概念・定義を復習したのち、性機能に関与するホルモンを説明する。これらホルモンの思春期における変化と、それを調節するメカニズムについて述べる。	玉田太朗 （自治医科大学教授）
5	青年期のこころ(1) 中学生	中学生の年齢の人々は、からだ以上に、こころの問題の多い時期である。この時期に特徴的にみられる心理的課題をとおしてながめてみる。	小倉　清 （関東中央病院精神科部長）
6	青年期のこころ(2) 高校生	高校生のこころの動きについて考えてみる。この時期に避けて通ることのできないこころの成長の過程は、心身の両面に反映されてくることを理解する。	同　上
7	青年期のこころとからだその相関に注目して	人のこころとからだは、元来ひとつのものである。その深い相関に注目して、人の成長について考え、青年期についての理解をさらに深めていく。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	青年期の体力とスポーツ	青年期の体力の特徴と、トレーニングの基本について述べ、次いで、青年期のスポーツの意義・環境、および傷害の実態とメカニズムなどにふれ、青年期の体力・スポーツを多角的にとらえる。	武藤芳照 （東京大学助教授）
9	思春期の問題行動と相談	思春期は自立の時期でもあり、また受験期でもある。問題行動の要素の複雑さと、対応の困難さについて事例をとおして、多角的にふれていく。	江幡玲子 (思春期問題研究所研究員)
10	青年期の栄養と食事	身体発育のいちじるしい青年期の栄養所要量について解説する。さらに、青年をとりまく食生活の今日的特徴を整理し、その後の人生の健康を左右する健全な食生活習慣を身につけることの必要性を講述する。	金子佳代子 (女子栄養大学講師)
11	学生の性に関する問題	学生生活においても、さまざまな問題がある。それらを検討し、なかでもこの時期に問題となる性の問題について、学生という立場に焦点をあてて考える。	武田敏夫 （千葉大学教授）
12	青年と労働環境	人の健康は環境とのかかわりの中でつくられる。労働環境は学齢期までは経験しない環境であり、健康阻害要因も少なくない。それらを例示して労働環境の概要を述べる。	滝川　寛 （三重大学助教授）
13	青年期のライフスタイル	人の健康に重大な影響を及ぼしうる飲酒と喫煙は、青年期に習慣性が確立されることが多い。この成年期になる以前でできあがるライフスタイルについて、酒とタバコを中心に考えていく。	片本哲郎 （東京大学助手） 本間日臣
14	青年の健康と社会環境	青少年期は、一生のライフスタイルを決定する重要な時期であることを認識し、とくに社会的因子とのつながりの強い性行為感染症と薬物依存を中心に考えていく。	中江公裕 (独協医科大学助教授)
15	青少年期の健康科学 （まとめ）	青年期を死亡・疾病構造からみると、成年期以後への重要な入り口である。にもかかわらず青年の健康意識は高くない。そこから、望ましい生活習慣についても言及する。	本間日臣 丸井英二

＝ 成人の保健－成人期・壮年期の健康科学 ＝ （TV）

〔主任講師：本間日臣（放送大学教授）〕

全体のねらい

母子健康科学、少年期・青年期の健康科学につづき、一生の中で最も生産活動の盛な成人・壮年期の健康科学であり、次の老年期健康科学へ続くものである。健康保持や成人病の予防は、生活様式（食事、運動、休養、睡眠、働き方、嗜好品など）と密接に関係するので、日常生活の中の刺激に対する生体反応の理解を目標として解説する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	成人期・壮年期健康科学序論 健康の指標としての検査値の読み方	成人期・壮年期の健康科学講座では、日常生活でわれわれが直接経験する様々のエピソードを取り上げ、その際の生体反応のメカニズムを解説し、それを積み上げて全体としてこの年代の健康についての知識がまとまるように企画した。まず検査値に影響する諸因子について述べる	本間日臣（放送大学教授）
2	日常生活における生体反応統御のメカニズム (1) 睡眠と覚醒	睡眠の覚醒のメカニズムとパターン、その周期性に伴なう自律神経系、呼吸循環系、内分必代謝系の日周リズムと健康保持に関わる意義と役割について解説する。	同　上
3	〃 (2) 運動・安静と生体反応	運動を負荷するとからだの中でどのような反応がおこるか、その功罪、安静時にはからだの中でどのような反応がおこるか、その功罪について述べる。	同　上
4	〃 (3) ストレスおよび疲労と生体反応	ストレスは一般に生体に有害な刺激と受けとられているが、広義のストレスは、生命維持、からだの成育に必要な刺激ともいえる。ストレスに対しどのような生体反応がおこるか、また疲労とはどのような状態でどのような変化が生じているかを解説する。	吉田　尚（千葉大学教授）
5	〃 (4) 肥満の生理学	肥満とは何か、肥満の原因とは何か、肥満時に呼吸、循環、代謝などの諸機能はどのように変化しているか、肥満にどのように対処すべきかについて述べる。	同　上
6	〃 (5) 食事・飲酒と生体反応	食物の消化吸収のメカニズムとそれに影響を及ぼす諸因子、消化をよくする食べ方、腸内常在菌業の役割、アルコールと生体反応について解説する。	本間日臣
7	〃 (6) 入浴・水浴と生体反応	入浴・水浴に際して、体温、呼吸、血圧、心拍、血液、消化機能、自律神経機能はどのような刺激を受けどのように反応するかを解説する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	日常生活における生体反応統御のメカニズム (7) 外傷と生体反応	外傷すなわち生体組織の損傷の種類は広義では多収にわたるが、日常生活で遭遇する創傷を中心に局所反応と全身反応発生の機序、すなわち生体防御反応発動のメカニズムを解説する。	香月秀雄 （放送大学長）
9	〃 (8) 環境と生体反応① 高地・大気汚染・喫煙の影響	高地・高所への移動、大気汚染、喫煙の際にみられる生体反応を解説する。	本間日臣
10	〃 (9) 環境と生体反応② 家庭・職場と生体反応	日常生活の大部分を占める家庭と職場という環境内の多種多様の刺激因子と生体反応の解明は健康保持または増進に大きな意義がある。これらについて述べる。	丸井英二 （放送大学客員助教授）
11	〃 (10) 病気と薬剤と生体反応	病気については深く触れないが、病気の際にどのような生体反応がおこり、その際に用いられる薬剤がからだの中でどのような反応をおこし、効果をあらわしたり副作用を示すかについて述べる。	本間日臣
12	〃 (11) ジェット症候群（時差ボケ）の成因	生体のバイオリズムは、1年、季節、1月1日を周期とするものの他、瞬時も絶えることのない律動的リズムなどいろいろある、いわゆる時差ボケの成因を生体バイオリズムの立場から眺めてみる。	本間日臣
13	生活々動と右脳・左脳	人類の約9割は右手利きであるかそれはなぜだろうか、手足をふくめ人のからだの形は左右対象にみえるが、諸機能は左右同じではない。右脳と左脳の機能の違いと生活々動との関わりについて考える。	朝長正徳 （東京大学教授）
14	更年期女性の生体反応の変化	女性の生殖期から生殖不能期への移行期にあたる更年期（閉経期）には、からだの中でホルモン分泌の変化がおこり、いろいろの不定愁訴の原因となる。これらについて解説する。	古谷博 （放送大学教授）
15	ライフスタイルと健康 成人・壮年期健康科学のまとめ	成人病や老年病の多くはライフスタイル病(生活習慣病）と呼ばれる程、長年にわたる生活様式を背景として発生する。これ迄述べてきた日常生活における生体反応をふり返り、健康の維持増進への方策を考える。	本間日臣

＝老人の保健＝ (R)

〔主任講師：本間日臣（放送大学教授）〕

―老年期の健康科学―

全体のねらい

健康に関する本学の講座は母と子の健康科学、少青年期の健康科学、成人壮年期の健康科学、老年期の健康科学からなり、受精卵の分裂から高齢末期までの加齢変化と各年代の生体反応を一貫した基本理念に基いて解説する。一人の個性の確立、自己同一性の完成の時期に相当するこの年代の健康について科学的総合的理解を目指す。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	老年期の健康科学序論	健康科学講義シリーズ構成の骨格すなわち総論と各論の解説、つづいて各章のテーマとねらい、老年期加齢変化（老化）に関与する諸因子、寿命と個人差の原因の解説。	本間日臣（放送大学教授）
2	老化とは―老化の諸学説	老化のメカニズムは現在なお未知の部分が多く、昔から多数の学説がある。大きく分けて内因性の遺伝子説やホルモン説、外因性のストレス説や放射線説などがある。	朝長正徳（東京大学教授）
3	老化度の測定について―検査値のよみ方	老化度測定法の基礎となる老化のパラメーターとその意義を解説する。種々の健康診断検査値の青年や成人との相違、したがって検査値をよむときの注意を述べる。	同上
4	臓器・組織の変化(1)細胞の変化	細胞はからだの最小構成成分であり、加齢とともに分裂速度や様式が変わるか、すべての臓器・組織の構胞が同時性に変化するわけではない。また個人差も大きい。	本間日臣
5	臓器・組織の変化(2)神経の変化(1)	睡眠が中断される、物忘れをする、運動機能が低下するなどの現状から運動神経系の加齢変化を中心にそのメカニズムを解説。	朝長正徳
6	臓器・組織の変化(3)神経の変化(2)	老年期の視覚、聴覚、味覚、皮膚感覚の変化とそのおこり方、すなわち知覚神経系の反応性の低下の機序について解説する。	同上
7	臓器・組織の変化(4)呼吸・循環系の変化	階段や坂道を登るときの息切れ、夕方の足のむくみ、夜入眠時のせき・たん、夜尿など日常変化の背後にある呼吸循環系の反応の加齢変化を解説する。	本間日臣

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	臓器・組織の変化(5) 内分泌・代謝機能の変化	骨折しやすい現象の背後には骨粗鬆症と呼ぶ状態があるが、これに関係するカルシウムやビタミン代謝の変化をはじめ糖代謝、諸種内分泌機能の加齢変化を解説。	朝　長　正　徳
9	臓器・組織の変化(6) 消化機能・腎機能の変化	薬剤服用後の吸収、代謝、排泄の加齢変化のため老人では副作用がおこりやすい。解毒と排泄を担当する肝臓と腎臓機能の変化を中心に解説する。	同　　上
10	臓器・組織の変化(7) 防御・免疫機能の変化	高齢者の直接死因の第一は肺炎である。なぜか。肺の防御・免疫機能の加齢変化、つづいて生体の防御・免疫機構全般の発動様式と変化を解説する。	本　間　日　臣
11	外見の変化 顔つき、体型、歩き方などの変化	白髪、顔のしわやしみ、爪の変化、身長、姿勢、皮下脂肪、歩き方など外見の変化をもたらす生体内の変化を分析し、これまで解説してきた諸臓器・組織の変化をまとめて考える。	同　　上
12	知能の老化とボケ(1) －知能の老化と老年痴呆	“もの忘れ”がひどくなり認知能力が低下すること、すなわち知能の老化の特徴は何か、そして影響する因子はどのようなものがあるか、ボケとはどう違うかを解説する。	長谷川　和　夫 (聖マリアンナ医科大教授)
13	知能の老化とボケ(2) －痴呆性老人の実態	ボケは脳の器質性障害を基礎としておこる知能障害である。ボケと似た意識障害やうつ状態がある。その鑑別点やボケの予防法を述べる。	同　　上
14	知能の老化とボケ(3) －痴呆性老人の対策	ボケにはいろいろな原因があるので、個別的に原因対策を立てる必要がある。原因不明のアルツハイマー型は対応がむずかしい。介護の原則と社会的対策を解説。	同　　上
15	老年期の光と影 －自己同一性の完成とその栄光	人の肉体の諸機能は思春期を頂点として弱化するが、精神活動は60歳以後まで上昇をつづける。自己同一性の完成、それが老年期の栄光である。	本　間　日　臣

＝精　神　衛　生＝　(R)

〔主任講師：挾間秀文（鳥取大学教授）
織田尚生（放送大学助教授）〕

全体のねらい

精神医学および臨床心理学の応用科学である精神衛生学を、主に精神力動的立場から講義する。心の健康増進についての科学である精神衛生の基礎および応用の各方面に亘って、検討を加える。その際、人文諸科学特に文化人類学や宗教史学等との学際的領域にも留意する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	心の異常とは	心が健康であるとはどのような状態をさすのかを検討し、精神衛生の全体像を概観する。	挾間秀文（鳥取大学教授）
2	正常と異常	心の異常は、必ずしも価値の劣った破壊的な状態を意味するのではない。この点について、精神力動的な見地から述べる。	河合隼雄（京都大学教授）
3	現代の精神衛生	精神衛生の歴史について述べ、精神衛生の基本的な考え方を概説し、さらには予防の活動に関して検討する。	織田尚生（放送大学助教授）
4	心の異常とは(1) ー心理・社会的要因による精神障害	心理社会的要因による精神障害を通して、人間の健康な生き方を考える。	挾間秀文
5	心の異常とは(2) ー身体的要因による精神障害	身体的要因による精神障害を通して、人間の健康な生き方を考える。	同上
6	家族の在り方 ー現代の家族の人間関係と問題点及び対策	現代における家族の人間関係とその問題点を取り上げ、問題解決の方向について検討する。	吉本千鶴子（国立京都病院非常勤医師）
7	現代における父性と母性	人間の心に内在する父性と母性について述べそれらがどのように子どもの心の発達に影響を及ぼすかについて検討する。	織田尚生

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	子どもの心の発達と健康(1)－胎児期新生児期・乳児期	胎児期から乳児期にかけての段階の心の発達と、その問題点について論じる。	山中康裕 （京都大学助教授）
9	子どもの心の発達と健康(2) －幼児期以降	幼児期以降の子どもの心の発達とその問題点について論じる。	同　上
10	子どもの心の発達と健康(3) －症例を中心に	心が障害された子どもの事例について、その回復過程を検討する。	同　上
11	思春期・青年期の心の健康(I)	この発達段階の心の健康と、その問題点や障害された場合について論じる。	村瀬孝雄 （立教大学教授）
12	思春期・青年期の心の健康(II)	障害された場合の事例について、その治療過程を含めて検討する。	同　上
13	成人前期の心の健康	この段階の心の課題と、心の健康の障害された場合の対策について述べる。	小川捷之 （横浜国立大学教授）
14	成人中期の心の健康	この段階の心の健康のあり方とその対策について、例をあげながら検討する。	同　上
15	成人後期の心の健康	この段階の心の構造と、心が障害される場合のカウンセリングについて述べる。	小川捷之 織田尚生

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
16	老年期の心の健康	老年期をいかに生き抜くかについて、精神力動的な立場から述べる。	小川捷之
17	職場における人間関係	職場におけるリーダーシップのあり方を通して健康な人間関係とは何かという問題を検討する。	三隅二不二 （奈良大学教授）
18	海外生活と心の健康	事例を取り上げながら、異文化の中に暮す場合の心の健康を考える。	稲村博 （筑波大学助教授）
19	睡眠と心の健康	睡眠と心の健康との関わりについて検討する。	川原隆造 （鳥取大学助教授）
20	アルコールと心の健康	飲酒による心の障害について概説し、それに対する対策を考える。	斉藤学 (東京都精神医学研究所)
21	薬物の乱用と依存	薬物乱用によって生じる心の障害について概説し、それに対する対策を考える。	佐藤光源 （岡山大学教授）
22	文化と心の健康	文化と心の健康との関係を文化人類学の立場から述べる。	祖父江孝男 （放送大学教授）
23	宗教と危機の心理学	心の危機において宗教の果す役割とその両義的価値について述べる。	織田尚生

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	自殺と自殺防止	現代わが国でみられる自殺の実態について概観し、それに関する対策を検討する。	稲村　博
25	心の異常に有効な薬物の作用	精神薬物が人間の心に与える影響を通して、心について考える。	小椋　力（琉球大学教授）
26	心理療法の構造	力動的心理療法学の立場から、心理療法の基本構造について検討する。	織田尚生
27	行動とこころの健康	行動療法学の立場から、こころの健康と人間行動との関連性、さらには健康が障害された場合の対策について検討する。	山上敏子（国立肥前療養所行動科学センター所長）
28	心の健康と責任能力	犯罪者の精神障害と責任能力の問題を検討することを通して、心の健康とは何かということを考える。さらに罪と罰と償いという問題にも触れる。	挾間秀文 織田尚生
29	生と死をつなぐもの－末期ガン患者の生き方を通して	人の死のあり方を通して生を考えると同時に援助の方法を考える。	河野博臣（河野胃腸外科医院長）
30	地域社会の心の健康	心の健康と地域社会との関連について論じ、精神衛生センターや児童相談所など関係諸機関について述べる。	増野肇（栃木県精神衛生センター所長）

＝余暇生活（その１）＝（R）
――日本人の余暇――

〔主任講師：一番ヶ瀬康子（日本女子大学教授）〕

全体のねらい

いまや余暇生活問題は、国民の大きな生活課題としてうかびあがってきている。寿命が延び、生涯のなかで余暇生活の時間が増加したことや、労働時間短縮などで余暇時間がふえたことなどが、その理由であろう。その中で、ただ受け身の余暇生活ではなく、自発的な余暇活動をもつよう、その探求のための視点と視座を明らかにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	余暇とは何か	余暇とは何か、その概念、語源などについて述べる。また、現在の日本においては、いかなる範囲の生活行為を余暇生活ととらえているかにふれる。そして、この講義の目的をのべ、講義全体の導入とする。	一番ヶ瀬　康子（日本女子大学教授）
2	余暇生活の歴史 ①歴史的展開	ある社会の余暇生活のありようは、その社会の歴史的特質を反映する。近代以前の社会から現代社会に至るまで余暇の意味内容がどのように変化してきたかを、それぞれの社会の特質とのかかわりで検討する。	牧野　暢男（日本女子大学教授）
3	②戦後の推移	余暇生活が戦後、どのように変化してきたかについて検討する。余暇生活を昭和３０年以降の高度成長時代の「大衆レジャー時代」と昭和４８年以降の第一次石油危機以降の「多様で個性的レジャー時代」に分けて、その背景と特質について探る。	松山　美保子（機械振興会経済研究所・調査役）
4	余暇生活の条件	余暇生活を規定する条件は、歴史的・社会的にさまざまである。現代日本人の余暇生活を条件づけている諸要因を検討するとともに、余暇生活の内容との関係について考察する。	牧野　暢男
5	余暇生活の構造 ①時間・空間・手段	余暇時間を、まず共同体における「時間の共有制」から「時間の私有制」への移行の視点からとらえる。次に余暇活動を可能にする余暇空間のひろがり（モータリゼーション）とパーソナル化（テレビ）から余暇の実態をみる。	岩崎　隆治（社会評論家）
6	②階層	余暇生活は、労働時間と関連する余暇時間、家計のなかでのレジャー・教養費など経済階層的条件によって影響される。経済階層的条件がどのように余暇生活に影響を及ぼしているか、各階層の余暇生活にどのような特徴があるか検討する。	山手　茂（茨城大学教授）
7	③余暇歴	余暇生活に大きく影響を及ぼす余暇歴、つまり、人々が過去にどのような余暇活動を行ってきたかが、いかに現在の余暇活動の豊かさ、あるいは貧弱さを左右しているかについて検討する。	松山　美保子

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	余暇生活の実態 ①子ども	子ども時代の余暇生活は、生涯における余暇生活の在り方に影響する。その子ども時代の余暇生活の中心である「遊び」が、現在どのような状態であるか、時間、場、仲間との関係で現状をとらえそのあり方を検討、考察する。	一番ヶ瀬　康子
9	②青年	青年の余暇実態を生活意識の変化－労働中心から生活中心へ、オカネ重視から時間重視へ、職域から地域、または第三の空間へーを中心にみる。とくに夫婦中心型のレジャーの登場にスポットをあてる。	岩崎　隆治
10	③勤労者	勤労観やレジャー観の変化をあとづけながら、中高年サラリーマンの余暇の実態をみていく。	同上
11	④主婦	主婦は、核家族化、少産化、寿命の延長、家事労働軽減化など生活周期と生活構造の変化によって余暇時間が増加し、多様な余暇活動を行っている。ライフ・ステージ別分析をふまえて、中年期主婦の活動タイプ別分析を試みる。	山手　茂
12	⑤高齢者	高齢者の余暇生活の実態調査をもとに、その特徴と問題点を検討し、高齢者の余暇生活を豊かにする条件を探る。	松山　美保子
13	⑥家族	家族の生活条件が個人の余暇生活に及ぼす影響について考察し、さらに家族単位の余暇活動の実態を探る。	山手　茂
14	国際比較	世界各国の余暇生活の実態を紹介するとともに、国際比較調査の結果にもとづき、日本人の余暇生活の特質をあきらかにする。	牧野　暢男
15	余暇生活を高めるために	以上述べてきた日本人の余暇生活の歴史、実態や問題点をふまえ、さいしょに述べたこの講座の目的との関係で自らの課題として、どのように余暇生活を高めるか、その検討課題について述べ、〝まとめ〟とする。	一番ヶ瀬　康子

＝余暇生活（その２）＝（R）
――これからの余暇――

〔主任講師：一番ヶ瀬康子（日本女子大学教授）〕

全体のねらい

前回では、日本人の余暇の実態およびその改善のための、視点と視座を明らかにした。その視点と視座ににもとづき、さらに具体的な課題を検討するために、余暇をめぐる社会的諸局面においての課題を展開し、どのような政策的展開が必要とされるかについて検討する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	人権としての余暇	余暇の確立を、基本的人権のひとつとしてとらえ、「余暇権」確立へのあゆみが、国際的にすすめられてきている状況を説明する。そして、日本の場合はどうであるか、諸法との関連で把握する。	一番ヶ瀬康子（日本女子大学教授）
17	余暇生活の動向 ①余暇活動の特徴	日本人の余暇活動を多様な側面から分析し、その特徴と問題点について述べる。さらに高齢化社会における「生きがい」の重要性という観点から、余暇と労働の関係、余暇機会の拡大、余暇学習などについて述べる。	松山美保子（機械振興協会経済研究所調査役）
18	②余暇産業の推移	需要と供給という経済的側面から余暇活動をとらえ、余暇産業の特性、近年における余暇市場の推移について述べるとともに、今後、成長が期待される余暇市場の部門、特徴および問題点について述べる。	同上
19	③企業の対策	企業の余暇対策は、戦前の労務管理のなかにみられる。戦後は福利厚生として行われてきたが、所得水準の下昇、レジャー産業の発達、レジャーの多様化のなかで、企業の余暇対策は曲り角にある。その実情と方向を考える。	岩崎隆治（社会評論家）
20	④労働組合の対応	労働組合の余暇対策は、企業に比べて遅れをとっている。しかし、最近では高齢化社会への対応策の１つとして、生涯教育に力を入れる組合が増加してきた。その動向をふまえ、今後の方向について検討する。	同上
21	余暇生活の展開方向 ①多様化する情報とその選択	余暇生活へ今や影響の大きい余暇情報が、歴史的にどのように変ってきたかについて述べ、さらに来たるべきニューメディア時代における余暇情報の多様化、その余暇生活へのインパクトおよび問題点について述べる。	松山美保子
22	②余暇施設の確保と共有化	余暇生活を高めるためには、まず住宅がそれにふさわしいものであることが重要である。しかし余暇の集団性・社会性の必要を考えるとき、地域における余暇施設が重要である。その余暇施設のあり方を多面的に探究する。	一番ヶ瀬康子

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
23	③組織づくりの必要と課題	余暇推進のための組織づくりは、レジャー意識の普及に比べて大幅に遅れているが、余暇開発センターの設立を機に、企業中心から地方自治体中心へと移行しつつある。その意義と課題について述べる。	岩崎隆治
24	余暇生活の主体形成 ①家庭教育の重要性	親は、子どもとともに豊かな余暇活動を行なうことを通じて、子どもが余暇生活を主体的に充実させる人間として育つよう努力する必要がある。この課題達成のために、どのような考え方と方法を親は学習すべきかを考える。	山手茂 (茨城大学教授)
25	②学校教育の検討	学校生活が、青少年の余暇生活のあり方やその後の余暇行動にどのような影響を及ぼすかを考える。そして、余暇生活の主体形成の視点から、学校教育の現状を検討し、今後の余暇教育の方向を探る。	牧野暢男 (日本女子大学教授)
26	③社会教育の変革	社会教育は、余暇生活充実の条件の1つであると同時に、余暇教育の場でもある。学習、スポーツ、レクリェーションなどの社会教育活動を中心に、住民が主体的な余暇生活を営むための社会教育のあり方を検討する。	同上
27	④余暇指導者の必要	団体・グループの活動、社会教育、福祉、保健活動、コミュニティ活動など、多くの分野で余暇活動の指導者が求められている。これら様々な分野の指導者の地位、役割と養成・研修の実態および今後の課題について考える。	山手茂
28	余暇生活への政策転換 ①地方自治体の方向	県や市町村における余暇施策の推移と現状を、まず明らかにする。次に、まちづくりや地域づくりなどとの関連で、余暇環境の整備と充実のための地方自治体の課題や施策の方向を検討する。	牧野暢男
29	②国の政策の推進	国の余暇政策がどのように発展してきたかをふりかえり、今後の政策課題とその推進方策を考えるための余暇活動の基礎的条件の整備、情報の収集、提供システムの整備、指導者の養成、研修など多くの政策を検討する。	山手茂
30	「余暇権」確立のための視点と視座	余暇生活を充実していくためには、何よりも生活者自らの認識と努力が肝要であり、とくにその社会的努力が重要である。講義全体を総括し、余暇権確立のための原則を探究し、まとめとする。	一番ケ瀬康子

＝ 生　活　福　祉 ＝（R）

〔主任講師：仲村優一（放送大学教授）〕

全体のねらい

この科目は、人間が社会生活を営む際に直面する生活上の諸問題にどんなものがあるか、そして、それらに対処して問題解決を図ることを目的とする社会的諸施策はどうなっているか、また、その問題点は何か、についての基本的理解をえさせることを目的とする。中でも、社会福祉の制度と施策を中心に、一個の市民として当然にもっていってよいと思われる知識を身につけてもらうことをねらいとしたい。

主な項目

(1) 人間の社会生活と生活上の諸問題(1)
(2) 人間の社会生活と生活上の諸問題(2)
(3) 社会福祉の意味
(4) 社会福祉と関連諸施策
(5) 社会福祉の展開(1)　欧米
(6) 社会福祉の展開(2)　欧米（つづき）
(7) 社会福祉の展開(3)　日本
(8) 社会福祉の展開(4)　日本（つづき）
(9) 社会福祉の制度と仕組(1)　法制のあらまし(i)
(10) 社会福祉の制度と仕組(2)　法制のあらまし(ii)
(11) 社会福祉の制度と仕組(3)　行財政の仕組(i)
(12) 社会福祉の制度と仕組(4)　行財政の仕組(ii)
(13) 社会福祉の主な分野(1)　概要について
(14) 社会福祉の主な分野(2)　公的扶助(i)
(15) 社会福祉の主な分野(3)　公的扶助(ii)
(16) 社会福祉の主な分野(4)　児童福祉(i)
(17) 社会福祉の主な分野(5)　児童福祉(ii)
(18) 社会福祉の主な分野(6)　老人福祉(i)
(19) 社会福祉の主な分野(7)　老人福祉(ii)
(20) 社会福祉の主な分野(8)　障害者福祉(i)
(21) 社会福祉の主な分野(9)　障害者福祉(ii)
(22) 社会福祉の方法(1)　ケースワーク(i)
(23) 社会福祉の方法(2)　ケースワーク(ii)
(24) 社会福祉の方法(3)　グループワーク
(25) 社会福祉の方法(4)　コミュニティ・オーガニゼーション
(26) 社会福祉の従事者問題(1)
(27) 社会福祉の従事者問題(2)
(28) 社会福祉施設の問題(1)
(29) 社会福祉施設の問題(2)
(30) 社会福祉と国際化

＝人間と社会環境＝（ＴＶ）

〔主任講師：大橋　力（筑波大学講師）〕

全体のねらい

複雑なからだとこころを持つ生き物・人間と、その人間たちの多岐にわたる活動のステージになっている社会環境とについて、情報環境学の立場から包括的に学ぶ。動物行動学・分子生物学などの新しい生物学、生態人類学の諸領域、システム論・制御論などの情報科学を主要な学問的基盤におき、実際的に論を展開する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	"人間と社会環境"についてどう学ぶか	人間の社会行動の多様性を的確に捉えるためには専門分化した学問は限界が大きい。その限界を打破する新しい学問のひとつとしてこの科目で起用する情報環境学について、物質・エネルギー・情報の三つの次元から有機的に対象に接近する方法論を述べる。	大橋　力（筑波大学講師）
2	生命と環境	まず、生命とは何かについて、自己増殖オートマトンの理論を出発点に説明する。次に地球型生命の特徴と地球の生態系について述べる。さらに、生命主体と、それを囲む環境との関係について、システム理論を導入して整理を行う。	同上
3	環境としての社会	生き物の中には、特別な秩序を持った群れをつくるものがある。その群れ一種社会一は生き物にどのような利益をもたらすのかを考える。こうしてつくられる"社会"を、新たに造成された環境として捉え、その構造・機能について検討する接近法を述べる。	同上
4	社会をつくる動物たち	動物の中には、さまざまな社会をつくるものがある。その多様な姿について、動物行動学の観点から整理して学ぶ。また、動物の社会行動の過程を制御している生得的解発機構の理論等についても知識を得る。さらに、これらの原則が人類にもあてはまることを知る。	同上
5	人類社会だけの特異な多様性	社会をつくる動物たちを見ると、その社会の構造は種ごとに決まったパターンを持っていることがわかる。ところが人類だけは、きわめて多種多様な社会を生み出してきた。この多様性を生態人類学の観点から分類し、概観してみる。	同上
6	自然性を重視した社会とその環境	さまざまな人類社会の中には、生存上、人間の持つ生物としての自然性を比較的重視したライフスタイルを維持してきたものがある。発展よりは安定を志向する社会といえる。その代表例である狩猟採集社会について、実際のフィールドワークに基づいた知識を得る。	同上
7	加工性を重視した社会とその環境	人為的な加工とその蓄積に高い価値をおく社会がある。安定よりは発展を志向する社会といえる。いわゆる文明社会は総じてこのカテゴリーに入る。このような発想を持った社会システムの本質を探り、そこに生まれる環境の特性について検討する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	棲みわけ型"の社会・非棲みわけ型"の社会	いわゆる"棲みわけ"は地球上の生物社会の原則といえる。ところが、人類では、この原則が守られている"棲みわけ型"の社会だけでなく、これを放棄した"非棲みわけ型"の社会が存在する。この社会の生態系に及ぼす影響、および環境特性について論じる。	大橋　力 （筑波大学講師）
9	本来と適応	すべての生命は、情報物質"核酸"に書き込まれたプログラムの指令下におかれている。そのプログラムには、基本的なライフスタイルに対応する"本来"のものと、状況の特殊化に対応する"適応"のためのものとがある。この二重構造と社会環境との関連を検討する。	同　上
10	人間社会のシステム化機能する二つのプログラム	種社会をつくる動物たちの社会行動のプログラムも遺伝子の支配下にあり、人類もその例外ではないと考えられる。一方人間社会には法律、戒律など社会行動のもうひとつの規範―プログラム―が存在する場合がある。この両者が一致しない社会の環境を論じる。	同　上
11	人間の生物特性と社会環境との不適合(1)　物質・エネルギー・環境について	人間の生物特性は、その柔軟性の範囲を含めて、遺伝情報の支配下にあり、ほとんど固定されている。それと現実の社会環境との間に無視できない不一致が発生し、持続すると、社会は存続をおびやかされる。この問題を物質・エネルギー面について検討する。	同　上
12	人間の生物特性と社会環境との不適合(2)情報環境について	人間の心は脳という物質機械の活動に他ならない。脳は情報代謝装置であり、環境からのある種の情報入力で打撃を受けるだけでなく、ある種の情報欠損によっても異常を呈する。社会の情報環境が人間の脳にとって不適合になった場合の病理現象について検討する。	同　上
13	自然性と加工性との調和を重視した社会とその環境	現存する多種多様な人間社会の中に、自然性と加工性との両者の調和を重視する発想を持つものが少数存在する。この種の社会の環境は、現状況下にあっても人間生存とのかなり高度な適合性を示している。実例にのっとって、このような社会環境について知識を得る。	同　上
14	社会の自己組織化を導く"情動"の役割	自然性と加工性との調和に成功している社会のひとつの特徴として、情動、ことにパフォーマンスの誘起する快感が社会の結集や葛藤緩和に有効に機能している。自我の制御と利他行動の活性化とを通じてシステム化をもたらす情動のメカニズムについて論じる。	同　上
15	新しい調和の発見のために	加工性重視社会の頂点に立つ科学技術文明の社会環境は特に精神世界の面でけわしい限界に直面している。この危機の当面の打開策として人間に適合した情報環境の再建を欠かすことはできない。そのために精神活動領域における自然性と加工性との調和の道を探る。	同　上

＝家　庭　の　経　営＝　（R）

〔主任講師：原ひろ子（お茶の水女子大学教授）〕

全体のねらい

家庭のあり方を比較文化的に考察することによって、人間にとって、家庭や家庭のあり方が多様であることを認識し、その上で、現代日本の家庭を、それをとりまく環境との関連において検討する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1 2	家族の多様性と普遍性(1) 家族の多様性と普遍性(2)	人間の諸文化に見られる家族の多様性を眺め、人間にとっての家族の普遍性は、どのように把えられるかを考える。	原　ひろ子 （お茶の水女子大学教授）
3	家族と家庭	欧米や日本の近代史のなかで、収入を得る場としての職場と、消費の場としての家庭が分離し、家族という人間の制度のもつ機能が限定されてくる変貌過程を考察する。	同　上
4	家庭と個人 ーこれからの家庭の経営	夫と妻、親と子、祖父母と孫など、家庭の中でさまざまな立場にある、個人の自己実現についての欲求が高まってきている今日、それぞれの欲求を持つ個人の自己実現を促しつつ、サービスや情報や心のつながりが保証される「生活の港」としての家庭をどのように経営していくかについての可能性の巾を考える。それと同時に家庭をめぐる、さまざまな「危機」への対応を考える。	同　上
5	家事労働と市場労働	家庭における家事労働と、労働市場における労働とが、どのように把えられてきたか、を考える。	篠塚英子 （お茶の水女子大助教授）
6	家庭と経済	今日の家庭生活の経済的基盤が社会の経済システムとどのように関連しているかを眺める。	同　上
7	女性の働き方の変化	日本における雇用機会均等法の施行と労働基準法の改正が、女性の働き方にどのように関わり、家庭生活の多様化をもたらしうる基盤となっているかを考える。	同　上
8	家計運営の変化	世帯単位や、個人単位の消費行動や貯蓄・財テクなどをめぐって、夫婦や親子がどのようにコミュニケートし、意志決定しているのかを眺め、さらに、生活協同組合その他の消費者団体の活動に見られるような、家庭と家庭のつながりが、個々の家庭の家計運営をどのように関連しているかを考察する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師 （所属・氏名）
9	家庭と空間	一つの住宅における家族の生活のしかた、家族員の隣居・近居や単身赴任など、家族と空間の関係から、家庭経営を考える。	小澤紀美子 (東京学芸大助教授)
10	生活空間のネットワーキング	公園、病院、保育園、幼稚園、学校、保健所、地域の集会所、図書館、相談サービス、老人のためのディホーム、身障者の活動の場、家族間の職場などを含む生活空間が、どのように、ネットワークされるのかを、テレビ電話や各種の情報交換技術などの発達との関連で眺め、生活者が主体的に生活空間をネットワークしていくために家庭間で協力しあったり、地方自治体その他の行政機関や企業などに働きかけていくことができるかの可能性を考察する。	同上
11	ライフサイクルの変化と家庭	生れてから死ぬまでの個人の加齢や、ライフ・ステージの移行と家庭生活のあり方が近年どのような変化を示しているかを眺めるとともに近未来を予測する。	袖井孝子 (お茶の水女子大助教授)
12	老人・家族・コミュニティ	老人にとっての家庭を家族やコミュニティとの関連で眺める。	同上
13	子ども・家族・コミュニティ	子どもにとっての家庭を家族やコミュニティとの関連で眺める。特に雇用されて働く父母とそうでない父母をもっている子どもがそれぞれにかかえる問題を考える。	原ひろ子
14	シングルライフ・単身赴任・共働き別居	現代日本に見られる諸現象を家庭経営の視点から考察する。	同上
15	ライフスタイルの選択と異質なものとの共存	今日の日本では個人が選択するライフスタイルは多様化しつつある。多様化したライフスタイルが存在する社会及び老若男女が共存する時代の家庭経営を考える。	同上

＝住　生　活　史＝　（ＴＶ）

〔主任講師：平井　聖（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

何時の時代にも、人間は生まれた時から、家族の構成員である。子どもが始めて意識した時、普通はそばに親がいる。兄弟がいるかもしれない。少くとも、母と子は密接な関係にある。全く親族がいなかったとしても、廻りに誰もいないということはない。住まいは、家族のためのものである。家族の構成が違えば、住まいが変わる。社会の変化に対応して生活様式が変わり、住み方が変わる。住み方が変われば、住まいもその変化に応じて変わっていく。

通常は、家族は社会の中の最小単位で、これが一つの住居に収まるが、時代によっては、血縁のある最小単位が、集落を構成していることもある。このようなときは、一つの住居だけでなく、集落を対象としなければならないことになる。

この講義では家族と住まいの対応関係に焦点をあて、併せて家族の構成員それぞれの側からも、住まいをみていこうと考えている。そして、家族の構成員の中では、できるだけ家族の中心的な存在であった女性の生活を、追ってみたいと思っている。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	Ⅰ　はじめに 住居と家族の生活・個人の生活	趣旨を説明するとともに、日本における家族の移りかわりと住居形式あるいは住宅様式の対応関係について概要を解説する。趣旨の説明には、明治以降の日本の近・現代にみられる家族観や生活観あるいは生活様式の変化ならびに技術の進歩がどのように住宅を変えていったかを考えてみることにしよう。	平井　聖 （東京工業大学教授）
2	Ⅱ－1　先史時代 住居と生活	竪穴住居については、その中から発見された土器等から、構成員の領域について考えてみたい。文化人類学や民俗学・考古学等の成果を借りて、集落の構成についても考えたい。高床の住居や倉庫については、どのように日本列島にもたらされたか、床の発生と生活様式の関係についても考えることにしよう。	同　上
3	Ⅱ－2　古代：奈良・平安時代の都と都での生活1	考古学の成果をもとにした平城京・平安京の再現と、出土品から都での生活を推測する。寝殿造と寝殿造にいたる奈良時代の住居について、発掘の成果と文献・絵画史料からの復原について解説する。	同　上
4	Ⅱ－3　古代：奈良・平安時代の都と都での生活2	寝殿造と寝殿造にいたる奈良時代の住居について、当時の戸籍から推定されている家族構成、考古学の成果、日記や日記文学そして絵巻物に描かれた生活、結婚の形式や財産の相続関係等から考えることにしよう。また、庶民の住まいと生活についても、絵画史料や発掘による出土品等によって考えてみたい。	同　上
5	Ⅱ－4　中世：武家の生活・公家の生活	寝殿造から主殿造への移りかわりを、住居そのものの変化を追うとともに、家族観の変化、結婚形態の変化、相続関係等を背景に、考えてみることにしよう。対屋と小寝殿・小御所の関係や、中心となる建物の平面構成等が問題になる。	同　上
6	Ⅱ－5　近世：桃山時代　武家の生活・公家の生活	最近の発掘の成果と文献史料とくに絵図類から江戸時代初期にいたる上層階級の生活と住宅との関係をみる。	同　上
7	Ⅱ－6　近世：江戸時代　上層階級の公的生活	将軍や藩主の生活を、史料と指図を用いて、建物と対応させながら考える。特に、今回整理された江戸城本丸・西の丸関係の障壁画の小下絵と指図を用いて、御殿の内部構成について解説する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	Ⅱ-7 近世：江戸時代 中・下級武家の生活	江戸における旗本、各藩における家老以下の住まいについて、平面図から読みとれる生活について考えてみよう。また、江戸詰めの時の住まいについても、指図から考えてみたい。	平井 聖
9	Ⅱ-8 近世：江戸時代 上層階級の趣味の生活	数寄屋風の意匠について、平安時代から存在していたその系譜について、絵巻物や屏風絵を用いて解説し、江戸時代においては特に後水尾院と東福門院の場合と桂離宮を例に、具体的に建物と用例を対応させながら考える。	同上
10	Ⅱ-9 中・近世：都会での庶民の生活	中世の都会での生活は、絵巻物と洛中洛外図屏風を手掛かりにするほかない。従って京都中心にならざるを得ないが、近世になれば京都や江戸のような大都会だけでなく、地方の城下町での生活も絵巻物・都市図屏風・浮世絵・道中記・日記等様々な史料から探ることが出来る。また、近世には各地に遺構もあるので、それらを用いて庶民の日常生活を描いてみたい。	同上
11	Ⅱ-10 中・近世：地方での庶民の生活	中世の農村や宿場町での生活は、史料が乏しく具体的に描きだすことはむつかしい。農家の遺構も、室町時代のものはごくわずかである。近世に入って18世紀になると、限られた地域ではあるが、農村の一村全体の構成を知ることが出来る史料が見つかっている。しかし、生活に関しては、発掘された生活用具や残っている様々な道具等を通して、推察することが可能である。	同上
12	Ⅱ-11 近・現代：近代化の系譜1	江戸時代以来の和風住宅に住み、伝統的な日常生活を主としてきた多くの人々が、西欧文明のどのような面から影響を受け、生活様式がどのように変わり、住宅がどのような具体的変化が起こったかを見ていく。茶の間での生活と座敷の使い方がどのように変わっていったか、洋風の生活様式が住宅内部でどのように広まっていったか等が中心となる。	同上
13	Ⅱ-12 近・現代：近代化の系譜2	欧米式の生活様式をそのまま取り入れ、洋風住宅に生活したのは、明治から昭和の敗戦に至るまでの時期には、ごく限られた人々であった。しかし、一方では庶民を相手に純粋にアメリカ式の住宅を輸入し、あるいは設計して、純洋式住宅の普及に努めただけでなく、啓蒙するために住宅雑誌をだして啓蒙に心をくだいた人もいた。純洋式がどのように受け取られ、受け入れられたかを、追ってみたい。	同上
14	Ⅱ-13 近・現代：理想と夢	兼好法師以来、我が国でも理想の生活、理想の家について書かれてきた。また、家相のような災難を避けるための工夫もみられる。近代には、欧米の家庭観にもとづく理想の家庭像を求めて、様々な提案が行われている。最近は技術の進歩を反映して、21世紀の生活、21世紀の住宅に関する未来予測や夢が語られている。日本や外国における理想と夢を対比してみよう。	同上
15	Ⅲ おわりに 新しい日本的生活様式	日本人は、歴史時代に入る前から今日まで、時代によって強弱はあっても、大陸からの影響を受け続けてきた。その上、幕末から欧米の影響を受けることになった。日本の生活文化は、これらを同化した折衷文化であるが、そのなかは生き残ってきた古来の文化がある。また、外来の文化にたいする態度も、選択しながら受け入れるという点に特色がみられる。そのような事をふまえながら、現在と近い未来の生活様式について考える。	同上

＝環　境　科　学＝　（TV）

〔主任講師：山根靖弘（千葉大学教授）〕

全体のねらい

健康な生活を守り、快適に暮らすためには、我々の環境について十分な理解が必要である。本講座は、水および大気の自然環境、食品や毒性の問題にもふれ、また緑化と生活などの社会環境などについて科学的な基礎概念を論じ、環境への知識を深めようとするものである。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	健康な生活を守るために	環境汚染の歴史的背景として、環境汚染の移り変わりを述べつつ、「環境科学」の一般的概念について説明する。また、本講座で述べる内容についての概論を説明し、全体像を理解してもらう。	山根靖弘（千葉大学教授）
2	水環境 (1) 水と健康	我々の生活における水利用の重大さと、健康と水との関連について飲料水を中心にのべるが、日本の特色である温泉と健康との関連について説明する。	同　上
3	水環境 (2) 水の汚れ	環境中の水は物理、化学、生物学的に公共用水として好ましくない方向に変化し、汚濁がおこる。水質汚濁の進行過程を論じ、富栄養化やアオコの発生などを述べる。また、水質汚濁の基準値を説明する。	同　上
4	水環境 (3) 水の浄化	水質の汚濁状態を検査する方法すなわち水質汚濁の測定法を簡潔に説明し、さらに水質汚濁の浄化法として、下水道の普及、工場排水の規制、終末処理場における浄化方法などを解説する。	同　上
5	空気環境 (1) 環境大気	人間の生命維持の上に基本的に重要な環境大気を構成する成分やその役割を述べ、環境大気を汚染する成分について、最近の動向と健康に及ぼす影響を解説する。	中澤裕之（国立公衆衛生院室長）
6	空気環境 (2) 室内空気	人間の一日の生活の中で室内における生活時間は時として大きく、室内環境の重要性を述べる。又、室内空気の有害成分として一酸化炭素、窒素酸化物及びたばこの煙等を紹介する。	同　上
7	環境と緑 (1) 緑と人間	人間と緑のかかわりあいについて、八重群島竹富島の農民の暮らしを守る緑の態様や、旭川・帯広市のように人為的に自然林を切りひらいて生産空間をつくりだして居住している開拓地、そして、奈良の都・平城宮などの古代の都市に生きる人々の生活と緑の関係を基に解説する。	田畑貞壽（千葉大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	環境と緑 (2) 水系と緑と自然	市街地の水辺と緑、災害と緑などを中心に長崎市稲佐山山頂で収録。急傾斜地の緑の状況、宅地化した山なみで集中豪雨の時の災害状況、そして仙台杜の都の広瀬川を中心に都市化した水辺環境の保全運動について紹介し、特に丘陵地の宅地化、広瀬川の環境悪化の原因についても論及する。そして、特に近年重要視されている都市の緑とウォーターフロントについて解説する。	田畑貞壽
9	環境と緑 (3) 緑計画	ヴァチカルな地形、人為的な干渉、緑の施策などを事例に富士山五合目より学校林、自然公園、リゾート地区、ゴルフ場、農村集落工場、海岸など土地利用の違いを緑の環境について特に地域生態系の問題を中心に緑とのかかわりあいを解説する。	同上
10	土環境 土の汚れ	土壌汚染に関係する主な汚染物質として農薬、重金属等を取り上げ、その汚染原因と動植物を含む生体への影響を解説する。さらに一般及び産業廃棄物の処理対策についても述べる。	中澤裕之
11	環境と健康 (1) 重金属の毒	環境中に放出された水銀、カドニウム、鉛およびクロムなどの重金属の汚濁状況と、それが体内にとり込まれた場合の生体影響について説明する。	山根靖弘
12	環境と健康 (2) 農薬など有機物の毒	DDT、BHCなどの農薬類の環境汚染と、これら農薬の特性、残留性と生体影響との関連、またPCBなどの化学物質の汚染と生体への影響など、環境汚染有機物質について論ずる。	同上
13	環境と健康 (3) 植物の毒	生活の周辺にある有毒植物、キノコなどによる中毒の実態を知り、それらがどのような毒なのか、どうしたら中毒を防止できるかについて学ぶ。	山崎幹夫（千葉大学教授）
14	環境と健康 (4) 微生物の毒	前回にひき続き身の周りの毒のなかから微生物の生産する毒に注目する。この中には穀類など大切な食糧を汚染するカビ毒や微生物毒を起源とするフグ毒やホタテ、バイ貝などのような魚貝類の毒も含まれる。	同上
15	環境と発がん	環境中には発がん物質が存在し、発がんの原因となるので、化学発がんを中心として述べ、終りに本講座のまとめについて論ずる。	山根靖弘

＝余　暇　生　活＝　（ＴＶ）

〔主任講師：一番ヶ瀬康子（日本女子大学教授）〕

全体のねらい

いまや余暇は、国民の大きな生活課題であり、権利である。ことに寿命が延び、生涯のなかで余暇生活の時間が増加し、労働時間短縮などで余暇時間がふえたことなどがその背景にある。そのなかで受け身の余暇生活ではなく、自発的そして創造的な余暇活動をもつより、またその探求のための視点と視座を明らかにする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	はじめに 人権としての余暇生活	余暇とは何か。その概念・語源、および権利性について述べ、現在の日本においては、いかなる範囲の生活行為を余暇生活ととらえているかについてふれる。そして、この講義の目的と意義とを述べ、講義全体の導入とする。	一番ヶ瀬　康子 （日本女子大学教授）
2	1〕現代社会と余暇 (1)　高齢化と余暇	現代社会の焦点の一つである高齢化によっていったい余暇生活は、どのような影響をうけているか。また、それに対して、どういうことが、早急に考えられねばならない課題であるかなどについて、問題提起をふくめ、課題を検討する。	同　　上
3	(2)　情報化と余暇	現代社会の一つの大きな焦点となっている情報化によって、余暇生活は、いったいどのような影響をうけ、変化してきたのか。またそのなかで現実には、どのような課題が生じ、現実に問題が存在するのかなど、実態をふまえて検討する。	薗田碩哉 （日本レクリエーション協会調査研究室部長）
4	(3)　国際化と余暇	現代は、余暇そのものも国際化しているといわれている。その国際化傾向のなかで、現実には、どのような問題が存在するのか、さらにどういうことが、その焦点となっていくかなどについて現実の問題と動向をとらえ、課題を検討する。	牧野暢男 （日本女子大学教授）
5	2〕余暇生活の歴史 (1)　前近代	余暇生活は、歴史のなかで変化していく。とくに自給自足経済のもとで、身分制のきびしかった前近代では、どのような余暇生活が展開されていたか。また、そこでは日本の風土のなかで生み出されたものが、どのようなものであったかについて述べる。	薗田碩哉
6	(2)　近　代	近代に入って商品経済が浸透していくなかで余暇生活が、どのように変化してきたか、とりわけ賃金生活者のそれについては、どのような問題が存在したか。さらに娯楽をふくんだ余暇生活の実態はどうであったか、その推移について述べる。	同　　上
7	(3)　現　代	現代とりわけマスレジャーが発達し、とくに余暇産業が盛んになってきた時代において、余暇生活は、どのように変化していったか、一方多くを占める賃金生活者側からとらえて、どのような問題があるかなどについて、日本の推移を中心に述べる。	同　　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	3)日本人のライフスパンと余暇問題 (1)余暇歴とライフスパン	長くなった人生において、それぞれのライフ・ステージにおける余暇歴が、その人の人生をどのように規定するものであるか。人生をトータルにみて、いかに余暇は大きな課題であり、それぞれのライフ・ステージに具体的な意味をもつかについて述べる。	一番ケ瀬　康子
9	(2)平均的日本人の余暇生活	現在、日本における賃金生活者の平均像をとらえ、その賃金生活者の余暇生活は、いったいどのようなものであるか、またどういう傾向をもっているのかなどを探究する。そしてその状況をふまえながら、日本人の余暇生活の問題点をさぐる。	牧野　暢男
10	(3)世界の余暇生活	とくに欧米の賃金生活者の余暇生活、またアジア諸国の賃金生活者の余暇生活などについて述べ、日本の賃金生活者の余暇生活との比較をこころみる。そしてそれぞれの特徴をつかみ、日本人のこれからの余暇生活の検討をする。	同　　上
11	4)余暇生活の条件づくり (1)子ども時代からの主体形成	余暇歴が、人々の余暇の在り方を大きく規制することを考えたとき、余暇については、その子ども時代からの在り方が検討される必要がある。そのことをどう考えるか、具体的に、どのような活動があるのか、改善点は何かなどを述べる。	同　　上
12	(2)労働時間短縮	余暇活動は、一方で労働時間によって大きく規制される。現在の日本人の最大の課題となっている労働時間短縮問題とは、どういうことなのか。現状はいったいどうなのかなどから問題を探究し、余暇時間との関連を探究する。	一番ケ瀬　康子
13	(3)余暇の設備・環境	余暇が活発になるためには、そのための空間および環境が、それにふさわしくなることが必要である。とくにその点についての日本の現実がどうかをとらえ、またそれについての環境整備がいかにあるべきかにふれ、問題の提起をする。	薗田　碩哉
14	(4)余暇政策をめぐって	余暇生活を向上させるためには、個人的な努力のみならず、それ以上に地方自治体および国の政策の在り方が大きく問われる。とくに、諸外国のそれとくらべてみた場合、日本の政策はどうなのかなどについて、具体的に解説し問題点を述べる。	牧野　暢男
15	おわりに 創造的余暇生活をめざして	この講義のまとめとして、余暇生活を創造的に、積極的に営むことの意義を認識する。そしてそのような余暇生活を営むための方法について個人レベルの努力をふくめ、余暇生活の権利をまもるための社会的な在り方での展望を論じ、まとめとする。	一番ケ瀬　康子

＝家　庭　の　福　祉＝　(R)

〔主任講師：仲村優一(放送大学教授)〕

全体のねらい

この科目は、家庭の福祉を社会福祉の視点からとらえて解明することをねらいとする。すなわち、家族の共同生活体である家庭にとって福祉とは何か。また、福祉に欠ける状態とはどんなもので、それを生み出す要因は何か。問題解決のための福祉施策やサービスおよびその問題点は何か、等の諸点を明らかにする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 (所属・氏名)
1	家族と家庭および家庭生活	家族と家庭の概念規定を明らかにした上で、家族の生活共同体としての家庭の生活の構造をどうとらえるかを考察する。生活の理解については「生活と福祉」専攻における生活に関する諸科目でえた知見をできるだけ活用する。	仲村優一 (放送大学教授)
2	家庭の福祉とは何か	「福祉」ということばは多義的であり、とらえ方を限定しておかないと「家庭の福祉」についても理解があいまいになる。福祉を抽象的な「さいわい」ということでなく、生活の諸側面における快適さ(アメニティ)としてとらえて、その総体としての「家庭の福祉」の意味を検討する。	同　上
3	家庭福祉問題の構造	家庭生活の内容を生活構造の諸部面に照らして吟味した上で、家庭生活全体における福祉の不足もしくは欠如を家庭福祉問題としてとらえ、その構造を明らかにする。	同　上
4	生活問題としての家庭福祉問題	前節を受け、家庭福祉問題を社会問題としての生活問題の一つとして理解する立場から、その様相論と原因論を究明する。	同　上
5	現代日本の家庭福祉問題(1) －児童	現代社会の社会変動が家庭に与えるマイナスの影響および、それが家庭福祉問題を生み出すメカニズムを明らかにするなかで、その問題の具体的な体現者としての児童に表われる諸問題を究明する。	同　上
6	現代日本の家庭福祉問題(2) －老人	前節に続き、都市化、高齢化、核家族化等が家庭生活に及ぼす影響を明らかにするなかで、それによって老人福祉問題が生み出されるメカニズムを究明する。	同　上
7	現代日本の家庭福祉問題(3) －家族関係	前の2節で取り上げた問題は、観点を変えると、家庭内における家族関係にかかわる問題としてもとらえられる。より具体的に、現代日本の夫婦関係、親子関係、三世代関係等に関する諸問題がどのような形をとって表われているかを明らかにする。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	家庭福祉事業の成立と展開(1) －欧米の場合	英国や米国においては、家庭問題を社会福祉課題として取り上げ、社会福祉事業の一環としての家庭福祉事業（ファミリー・ソーシャルワーク）が発展して今日にいたっている。その成立と展開の歴史をふりかえってみる。	仲村優一
9	家庭福祉事業の成立と展開(2) －日本の場合	わが国の場合は家庭福祉問題の顕在化が遅れたこともあって、家庭福祉事業が未成熟であるが、最近になってやっとその萌芽が見られるにいたっている。その辺の歴史的事情と今後の方向について検討する。	同上
10	家族政策と家庭福祉	家庭の福祉を社会的に支えるものとしての家族・家庭に関する社会政策、社会保障、社会サービス等の政策体系を家族政策としてとらえ、その現状と問題点を概観する。	同上
11	家庭福祉の施策とサービス(1)	家庭福祉事業の範囲でとらえられる各種の施策が社会福祉の各分野（公的扶助、児童福祉、老人福祉、障害者福祉等）においてどのように展開されているか。また、その問題点はどこにあるか、等を明らかにする。その場合これまでの福祉サービスが分野ごとに対象を家族の一員としての個人としてとらえる視点が不十分であったことに特に注目する必要がある。	同上
12	家庭福祉の施策とサービス(2)		
13	家庭福祉の実践技術(1)	家庭福祉事業の実践技術としては、ケースワークを中心にグループワーク、コミュニティワーク等の方法が体系化されて今日にいたっており、さらに、家族療法なども導入されるにいたっており、さらに、家族療法なども導入されるにいたっている。これらの諸技術について、具体的な事例の研究により、そのあらましを学習する。	同上
14	家庭福祉の実践技術(2)		
15	家庭福祉の現段階と今後の課題	家庭福祉事業の充実が期待されながら、その充分な発展を見ることができないでいるわが国の社会福祉の現状について、その実態を明らかにし、今後の課題を探ってみる。	同上

＝学　校　教　育＝（TV）

〔**主任講師**：深谷昌志（放送大学教授）〕

全体のねらい

本講では、学校教育の現状をふまえつつ、学校教育のあり方を理論的に深めていきたいと考えている。

全体の構成としては、1、2回で学校の紹介をした後3～6回を通して、学校の歴史的な系譜をたどる。7～10回で、学校の制度的な枠組を紹介した後、以下、各論の形で、学校教育の諸側面を検討する形をとりたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	子どもの発達と学校	子どもの発達にとって、学校の果たす役割を〝いくつかの教育実践〟を紹介しつつ考えてみたい。	深谷昌志（放送大学教授）
2	日本の学校、その特色	諸外国の学校の姿との対比の中で、日本の学校の特色を、歴史的な背景を含めてとらえ、問題を堀り下げていく。	同　上
3	近代の社会と学校の成立	学校のあり方は社会の歴史的変化に対応して変わる。ここでは、近代学校をそれ以前にあった藩学や寺子屋などと対比して考える。	中野　光（立教大学教授）
4	国家による学校教育の明暗	明治中期の教育政策を歴史的素材として、国家主義的な教育の明暗を解明する。	同　上
5	教育改造を求めた動き	大正デモクラシーの時代といわれた第一次大戦後の教育界に起った教育改造の動きを、画一化と個性との関連でとらえる。	同　上
6	戦後の教育の原点	戦後の教育改革の原点を確かめるために、「教育基本法」の理念や、六・三制の成立事情などを考察する。	同　上
7	学校をめぐる法規	学校教育と法規との関連を、子どもの「教育を受ける権利」保障という立場から、学校の実態にそくして考える。	下村哲夫（筑波大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	学校経営の仕組み	学校の主体性を求める事が強い。主体的な学校づくりを目指すのに校長をはじめ教職員の協力関係をどう組織化したらよいかを考える。 教育目標の達成のために、学校では校長をはじめとする教職員が組織化されている。その中でとくに重要な校長の役割を中心にとらえる。	下村哲夫
9	教育内容と授業	学校の教育内容について、教育課程と教育課程の基準との違いを明確にしながら、教育課程編成の手順や、問題点を考える。	同上
10	教育活動の展開	教科書、補助教材、児童・生徒の懲戒、学校事故など、教育活動の展開に関連して生じるさまざまな問題を、法規との関連でとらえる。	同上
11	学級集団の構造	小学校教育の中心は学校にある。そこで、学級の持つ意味を集団構造の視点からとらえてその特色を明らかにする。	深谷昌志
12	教師の仕事	教師の専門職化とのかかわりで、教職のあり方をとらえる。特に教職の特性を教員養成のあり方の点から考える。	同上
13	地域社会と学校	学校の役割を地域社会や家庭との関連で考えていく。それと同時に、教育と学校との違いもとらえる。	同上
14	学校論の系譜	近代以降に限ってみても、さまざまな学校論が提起されてきている。そうした系譜を現代の視角から分析し跡づける。	同上
15	学校改革の可能性	さまざまな問題点をふまえて、これからの日本の学校改革の可能性を、諸外国の学校改革の状況を視野においてとらえてみたい。	深谷昌志

＝ 教 育 の 方 法 ＝（TV）

〔主任講師：東　　洋（白百合女子大学教授）〕

全体のねらい

学習および発達に関する心理学的知見と教授の過程に関する実践的検討とをあわせ、単に既存の教育方法についての知識を得るのみでなく、新しい教育方法の開発、理解、評価の能力を獲得してもらいたいと思う。心理学、教育学、教育工学の諸分野から、数名の講師が分担して講述にあたる。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	教えるという仕事	柔軟な方法観の必要 従来の学校教育の型にとらわれずに学習の場はどこにも	東　　洋 （白百合女子大学教授）
2	教えのスタイル	教えのスタイル やりかた主義 学習観と教師の役割	同　上
3	家庭と学校	小さな対立 家庭の文化、学校の文化 潜在的カリキュラム 潜在的カリキュラムにおける家庭と学校 これからの家庭－学校関係	同　上
4	日本の学校と欧米の学校	外発的動機と内発的動機 動機の日米比較 内面的動機	同　上
5	いろいろな教育(1)	オープンエデケーション（Ⅰ） －イギリス・アメリカでの発展と現状	加藤幸次 国立教育研究所 第四研究部第二研究室長
6	いろいろな教育(2)	オープンエデケーション（Ⅱ） －21世紀に生きる子どもたちのための学校と創造	同　上
7	いろいろな教育(3)	プログラム学習 完全習得学習 応答する環境	菅井勝雄 （大阪大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	いろいろな教育(4)	視聴覚メディア利用の発展 視聴覚メディアの特質 視聴覚メディアと学習指導の形態	高桑康雄 （上智大学教授）
9	いろいろな教育(5)	教育の中のコンピューター(1)(2)(3)	東洋 鈴木靖子 （白百合女子大学助手）
10	幼児教育に学ぶ	学習者としての幼児ー二つの見方 幼児の学習ー知的側面 幼児の学習ー動機的側面 水道方式	永野重文 （国立教育研究所第三研究部長）
11	障害児の教育	障害児 発達障害児 障害児の鑑別診断 学習課程と障害 治療教育の諸原則	森永良子 （日本電信電話株式会社伊豆逓信小児リハビリテーション科副長）
12	人格の成長と教育	人格の成長過程－社会化の過程 自己意識の発達 カウンセリング的アプローチ 教育とカウンセリング	東洋 繁田進 （横浜国立大学助教授）
13	教師はどのように育つか(1)	「育つ」ということ 教師が最初に当面するむずかしさ 4年間の授業の変化(1)－最初の2年間	稲垣忠彦 （東京大学教授）
14	教師はどのように育つか(2)	4年間の授業の変化(2)－後半の2年間 方量の形成とライフ・コース	同上
15	これからの時代と教育方法	学習はいろいろな機会をとらえる 学習環境と教育環境 これからの教育の考え方	東洋

＝学習と指導＝（TV）

～教室の社会学～

〔主任講師：片岡徳雄（広島大学教授）〕

全体のねらい

「学者と指導」すなわち「何が、どのように、教えられ学ばれるか」は、心理的・主体的な問題であると同時に、文化的、人間関係的な問題である。ここでは、後者、社会学的視点に立って、学習と指導の行なわれる様々な現実の教室を分析し、その改善点を考える。印刷教材では論理的に、TV番組では実例時に、考察する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	教室とは－成長と集団	生涯教育の盛んな今日、「教室」は至るところにあるが、これから考察する教室が「教室」の名に値いするには、どんな教育が必要か、競争と協同、学習集団、準拠集団などの概念から考える。	片岡徳雄（広島大学教授）
2	指導と経営－教師のリーダーシップ	指導者とは、どんな性格で、どんな働きをするのか。父理原理と母性原理、P機能とM機能の違いを考える。また教師と政治家、経営者との共通点と相違点も、比較考察する。	同上
3	教室づくり入門－－行為と感性による	学習者たち1人ひとりの個性が大事にされ、しかも、教室としてまとまっている。そんな教室をどうつくってゆくか。教室の人間関係づくりの新しい方法について考えたい。	倉田侃司（広島文教女子大学教授）
4	教室の組織と運営－参加と責任	教室はメンバーの成長のためにある。教室の組織と運営は、一人一役、全員参加の方式に求められる。それらを、対人感情の現実をからませて考えてゆく。	片岡徳雄
5	教室の規律と風土－温かさと厳しさ	教室には規律は必要か。そこに、生み出される集団風土は、いかなるものか。支持的風土とその風土をつくる手法とを、理論的・実験的・実践的に考えてゆく。	同上
6	教室の学習内容－－目的と養成	教室は、様々な学習内容を学ぶためにある。カリキュラムはいかに編成されるか。そこで学習者が味わう学習経験とはなにか。そして、教科外の学習、潜在的カリキュラム、そして放送教材と印刷教材の関係などを考える。	同上
7	授業の形態－－一斉指導と集団学習	学習教育が始まって以来、最も普及したのは、一斉指導と呼ばれる授業形態であった。この形態は、最もやりやすいものであるが、欠点も多い。授業の三つの構造要因を手がかりにしながら、よい授業の形態について考える。	高旗正人（岡山大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	授業の評価－態度と意欲	ふつう評価というと、狭い意味でのテストによる知的学習効果に限定されがちである。しかし、ここでは、学習者が学習過程を通して身につける意欲や態度の、さらには、指導者の自己反省に役立つ、評価へも視野を広げて考えてみたい。	高旗正人（岡山大学教授）
9	指導困難者の指導－偏見と信頼	教室で成長するための学習者が、教室で傷つき、むしろ反教室的になることがある。このような指導困難者がどうして生れるか。そしてまた、彼らをどう指導するか。ラベリング論、カウンセリング論、そして態度変容論から考える。	片岡徳雄
10	教室の移動と祭り－体験と解放	教室は、例えば修学旅行や野外キャンプのように、教室外で学習することもある。あるいは、運動会や文化祭のように、場所は学校内でも、学習者の体験を基に祭りの形で学習することもある。これらの行動のもつ意味を、現代の社会的・文化的状況から考えてみたい。	森　　楙（広島大学教授）
11	幼児の教室－学習と遊び	管理や統制が厳しい学校に比べて、幼稚園や保育所の教室には、まだ自由が残されている。それは、幼児の学習が遊びを通してなされているからである。ここでは、遊びを中心とした幼児の教室の特性を取り上げることで、学習の本来のあり方を考えてみよう。	同上
12	大学の教室－自学自習の場	大学の授業とその他の学校の授業には違いがあるか。講義はどんな特徴と長短をもつか。日本の大学教育の問題と今後などを、外国の大学教育との比較を通じて考えてみたい。	喜多村和之（広島大学教授）
13	生涯学習の教室－自発と継続	生涯学習の「教室」を支えている、最も大きな要因は、メンバーの自発的で継続的な学習への意志である。それを、どのように引き出し、伸ばしてゆくか。学習参加度や人間関係、さらにはリーダーシップとのかかわりで、多角的に考察する。	住岡英毅（滋賀大学助教授）
14	教室の歴史－日本の場合	教師の歴史は人類の歴史とともに古い。教室の教師のコミュニケーション形態の移り変りを探るとともに、日本の教室の人間関係の変遷をも、その社会的背景を合わせつつ、考える。	片岡徳雄
15	期待される教師像－人格と技術	教育の根源は教師の人にある。教室の教師に、今なにが求められているか、教師の人格の問題を、指導技術との関係において考えたい。そして、なお残された課題を、幼児教育、初等教育、中等教育、高等教育のそれぞれの教師について考える。	同上

＝言語と教育＝（R）

〔主任講師：村石昭三（埼玉大学教授）〕

全体のねらい

人間の言語習得の問題に触れながら、言語発達に即した教育とはどうあるべきかを考える。このため言語の機能から始め、音声、文字、語彙、文法の諸能力の習得に触れ、表現、理解における創造性の問題までを扱う。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	言語の機能	(1)伝え・伝わる (2)ことばの世界 (3)言い惜しみ、聞き惜しむ (4)ことばかけ、などに関する事例から、言語の機能とは何かを考える。	村石昭三（埼玉大学教授）
2	音と声	(1)ことばの誕生 (2)リズムの世界 (3)音と声のひびき、などに関する事例から、子どもの持つ言語への直観力（言語感覚）について考える。	同上
3	音から文字へ	(1)一音一字対応 (2)音と文字の有意味性 (3)ひらがなの機能、などに関する事例から、子どもにとって文字とは何かを考える。	同上
4	助詞の使い分け	(1)「も」と「は」 (2)未来年の文法 (3)助詞の習得 (4)助詞の修正 (5)文法への興味、などに関する事例から、機能語の問題を考える。	同上
5	語彙の習得 ー好きな言葉ー	(1)好きな言葉・嫌いな言葉、(2)「行く」と「来る」 (3)意味を習得する過程、などに関する事例から、語彙習得の順序性について考える。	同上
6	語彙の習得 ー認知の方向性ー	(1)あべこべ (2)対義の複合語 (3)順行と逆行、などに関する事例から、認知の方向性について考える。	同上
7	語彙の習得 ー助数詞ー	(1)助数詞はどれだけ (2)文化の変容と助数詞 (3)概念の発達と助数詞 (4)意味の構造化、などに関する事例から、概念形成とのかかわりについて考える。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	語彙の習得 ー概念の意味づけー	(1)ことばで描く世界 (2)仲間づくり (3)定義 (4)意味づけ、などに関する事例から、概念形成とのかかわりについて考える。	村石昭三
9	生活のことば	(1)保育に拾う (2)目主焼き (3)へのへのもへじ (4)ファンタジーの世界、などに関する事例から、生活のことばの意味について考える。	同上
10	絵本ー絵を読む	(1)絵を読む (2)話の先を読む (3)会話を読む (4)「見え」を読む、などに関する事例から、読みとは何かについて考える。	同上
11	ことば遊び ・文字遊び ー表現の心	(1)ことば遊び (2)文字遊び (3)ことば遊び、文字と遊ぶ、などに触れながら言語教育の中での意味を考える。	同上
12	ことばと創造性	(1)子どもらしさとは (2)話をつくる心、などに関する事例から、創造性の意味を考える。	同上
13	話づくりと創造性	(1)ファンタジー (2)話づくりの技法 (3)ロダーリのファンタジー論 (4)表現力とファンタジー、などに関する事例から、文章表現と創造性の問題を考える。	同上
14	ことわざ	(1)ことわざの解釈違い (2)ことわざの打ち返しに関する事例から、言語生活における、ことわざ、名言の意味について考える。	同上
15	日本人の読み書き能力	(1)世界の読み書き能力 (2)日本における読み書き能力調査、(3)読み書き能力の基準、(4)読み書き能力の改善などから、国際比較や暦年調査の比較をし言語と教育の問題を総括する。	同上

＝ 道 徳 教 育 ＝ (R)

〔主任講師：宇佐美寛（千葉大学教授）〕

全体のねらい

道徳という事実の中心的部分は、社会的問題状況における個人の意志決定である。そして、どんな教育でも、この意志決定の能力に何らかの影響を与えている。その意味では、およそ教育というものは、道徳教育である。被教育者の道徳に影響しない教育などというものはあり得ないのである。だから、学校で行なわれている道徳教育一般を論じたのでは、学校で行なわれる教育の全てを扱うことになり、あまりに広くなりすぎる。そこで、この科目では、特に「道徳教育」を意識して計画的に特定の内容・方法で行なっている教育実践を論ずる。具体的には、いわゆる「道徳」の時間の問題を中心に論ずる。

第1章　道徳教育と「道徳」

1. Ⅰ　かくれたカリキュラム
2. Ⅱ　向山洋一氏の実践
3. Ⅲ　事例（現状の諸特徴）

第2章　「道徳」の現状

4. Ⅰ　「道徳」のしくみ
5. Ⅱ　事例（「道徳」の症状）

第3章　「道徳」の資料

6. Ⅰ　「ぼくはこうかいしない」
7. Ⅱ　「気持ち」

第4章　「言葉と経験」

8. Ⅰ　言葉による教育
9. Ⅱ　事実
10. Ⅲ　新しい認識
11. Ⅳ　何を教えたいか

第5章　道徳教育の今後

12. Ⅰ　事例（望ましくない事態）
13. Ⅱ　事例（今後の可能性）
14. 〃
15. 〃

＝教　育　評　価＝　（R）

〔主任講師：肥田野直（放送大学教授）〕

全体のねらい

教育評価は「点数をつけること」を意味すると考えられやすい。しかし、本来の教育評価は、児童・生徒の個性に応じた指導を行い、その実態に即して教育条件を改善するために必要な情報を集め、それぞれの目的に適した形で提供するものである。受講者の身近な経験を素材としながら、教育評価についての理解を深めたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	教育評価とは	「教育評価」には暗いイメージがつきまとっている。ここでは教育評価の全体像を正確に理解するために、いくつかの視点から考えてみる。	肥田野　直（放送大学教授）
2	自己評価と他者評価	自己概念の形成に対して自己評価と他者評価の果たす役割、評価のもつ動機づけの積極的機能と消極的機能などについて考える。	同　上
3	学習過程と評価	教育目標・指導計画を設定するときの評価の活用、学習ー指導過程の中における形質的評価の意義と方法などについて考えてみる。	同　上
4	知識・思考の評価	学習完了後に行われる総括的評価における相対評価、到達度評価、個人内評価、進歩状況の評価の意義について考える。方法としては認知的領域の知識・思考の評価法、とくに学力検査法の理解を深める。	同　上
5	技能・習慣の評価	精神運動的領域の技能・習慣の評価法について、観察法、面接法、評定尺度法を中心として考える。	同　上
6	興味・意欲の評価	情意的領域の興味・意欲の評価法について、質問紙法、興味検査、達成動機測定、価値観調査を中心に考える。	同　上 宮本美沙子（日本女子大学教授）
7	適性の評価	適性及び進路指導の意義を考えるとともに、レディネス検査、進学適性検査、職業適性検査について理解を深める。	肥田野　直

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	性格の評価	学習指導、生徒指導のいずれにも必要な性格の評価法として、目録法（質問紙法）、作業検査法、投影法について理解を深める。	肥田野　直 高橋一郎 （東京都荒川区立第6中学校教頭）
9	対人関係の評価	学級内の友人関係、親子関係、児童・生徒―教師関係の評価法を、相互評価法を中心として考える。	肥田野　直
10	試験・検査の影響	試験や検査が与える悪影響を減じ、積極的効果を発揮させるための問題作成法や実施法について考える。	同　上
11	評価と指導	教師が評価結果を有効に活用するためのさまざまな方法や指導態度について考える。	同　上 井上健治 （東京大学教授）
12	指導要録と通知表	評価の公的記録である学籍簿及び指導要録の変遷とそこに示される評価観の変化を考察するとともに、通知表（通信簿）の機能について考える。	肥田野　直
13	資格試験と選抜試験	資格試験と選抜試験の性格と役割を明確にし資格試験についての理解を深める。選抜試験については入学試験制度の歴史を考察する。	同　上
14	学力調査	学力調査の方法とその結果の教育改善への反映について歴史的に考察するとともに、国際学力調査と全米学力調査についての理解を深める。	赤木愛和 （国立教育研究所研究室長）
15	教育評価をめぐる諸問題	教育条件を改善するための評価として、授業分析や学校評価などを考察するとともに、他者評価を能動的に自己概念形成のために取り入れる評価観の確立について考える。	肥田野　直

＝ 教 育 思 想 ＝ （R）

〔主任講師：村井　実（大東文化大学教授）〕

全体のねらい

どうしたら子どもたちを善くすることができるか、についてのさまざまの考え ── 教育思想 ── を、歴史的な発生と発展の順を追って吟味したい。ある時代に、ある思想を、どういう人物が代表的に表明したかという、列伝体の形式によって講義を展開する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	教育思想のはじまり（一） －教育ということば－	教育ということばが作られるということは、教育が問題として人々の意識に上ることを意味する。それは、人間の歴史の上で、いつごろ、どのようにして起ったか。	村 井 実 （大東文化大学教授）
2	教育思想のはじまり（二） －子どもを善くする－	子どもを善くしたいということから、そもそも何が善いのか、また、どうしたら善くすることができるか、などが問題として生ずる。これが、教育思想のはじまりである。	同 上
3	ソ ク ラ テ ス	「善さ」とは何か、「善くする」とは何か、などの問題を生涯をかけて問うと同時に、その問い方について、「産婆術」「問答法」などの主張を行ったソクラテスの歴史的意味は何か。	同 上
4	プ ラ ト ン	ソクラテスの弟子として、プラトンは、ソクラテスの思想を理論的に整えることに力を注いだ。だが、その思想はソクラテスに対して、対極ともいうべき特徴をもつに至った。その吟味。	同 上
5	イ ソ ク ラ テ ス	イソクラテスは、ソクラテス、プラトンとほぼ同時代のアテナイの町で、さらに独自の修辞学校を開くことによって、教育思想の第三の原型ともいうべきものを展開してみせた。それは何か。	同 上
6	人間主義・理想主義・現実主義	子どもたちを善くしたいという、教育の思想に、子どもたち、および善さをどう考えるかに応じて、教育思想の三つの原型が生まれた。ソクラテスの人間主義、プラトンの理想主義、イソクラテスの現実主義である。	同 上
7	クインティリアヌス	ローマの共和制社会では、討議と説得の術としての雄弁をもって教育の理想とするに至った。その思想の集大成としてのクインティリアヌスの「弁論家の教育」の特色。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	アウグスティヌス	キリスト教が社会に力を強めるに至って、そのキリスト教的「神」との関わりにおいて人間の教育が考えられる。ギリシア・ローマの時代の教育思想との比較を試みたい。	村　井　　実
9	中世の教育思想 (一) －教会の教育－	子どもたちを善くしたいという、その善さが、理想として神とされ、その神に向って子どもたちを形成することが教育と考えられた。しかし、神を求めるということよりも、神に基づいての形成が強調された還相の理想主義といえる。	同　上
10	中世の教育思想 (二) －世俗の教育－	教会が掲げる神の理想の下で、世俗の世界では、宮廷は宮廷なりに、商人は商人なりに、職人は職人なりに、社会階層毎に現実主義的な教育を展開した。思想上、いわば理想主義と現実主義との癒着が発生したのである。	同　上
11	ルネサンスの教育思想	久しい中世の教会による桎梏からの解放を求める動きが、ギリシア・ラテン時代の人間像を理想に掲げる人文主義の教育思想を産んだ。代表的な人物にエラスムス、トーマス・モーアなどが挙げられる。	同　上
12	宗教改革の教育思想 －ルターと カルヴァン－	中世は、人間にとっての「善さ」＝神が教会によって独占された時代といえる。それを教会から解放して、聖書を通しての人間との直接の関係に置こうとしたのが、ルターとカルヴァン、宗教改革の思想家たちであった。だが、その教育上の意味は何か。	同　上
13	ラブレーと モンテーニュ	人文主義の教育が形式化して「キケロ主義」と評されるようになるのに対して、形式よりも内容、ことばよりも感覚や理性、知識よりも経験を重んじようとする実学主義が台頭した。中世以来の理想主義的な大勢に対しては、久しぶりの現実主義的な関心の再現である。	同　上
14	コメニウス	「知る」という働きの普遍的な重要性、万人にとっての可能性への着眼を中心として、それを現実化するための方法と組織がどう考えられたか。近代を支配するに至った実学主義的教育思想のスタート。	同　上
15	思想の系譜（一） －ロック－	現実主義的な思想の中、社会的実学主義と呼ぶにふさわしい、イギリス紳士階級の教育思想の代弁者がロックである。この原理が、「健全な身体に宿る健全な精神」として表現される。もちろん健全というのは、ロックとその階層にとっての「善さ」を意味したのである。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	思想の系譜（二）―子ども観と絶対主義の教育思想―	ロックは子どもの心はあらゆる知識や善悪の考えに対して「白紙」であると考えた。そこから、教育上においても、経験と訓練を重んずるという原則が生れた。だが、この子ども観が絶対主義国家において、強制教育の推進を支える。	村井　実
17	ルソー	「造物主の手を出るときはすべてが善いのだが、人間の手にかかってすべてが駄目にされている」という革命的な宣言……その教育思想的意味は何か。	同上
18	汎愛派の人々	ルソーの影響下に、人間、自然、感覚と身体との関心等をもとに、ドイツに汎愛派の運動が生じた。バゼドウ、ザルツマンなどを代表とするが、とくにザルツマンについてその特色を見てみたい。	同上
19	カント	人間と自然を重んずるというルソーの系譜に立ち、同時に実践上では汎愛派に同調したが、カントは、両者の現実主義的な関心をはるかに越えうる、いわば理念主義的思想を抱いた。これは、人間性理念の完成という、その意味での新らしい理想主義思想の力強い宣言であった。	同上
20	コンドルセ―フランス革命の教育思想―	フランス革命は、教育上歴史的な二つの問題を提起した。一つは、圧制への抵抗としての自由と平等の強調であり、第二は、国家による公教育という考えである。この二つの、ほとんど矛盾的といってよい要求の、最初の調停者として、コンドルセが出現した。	同上
21	ペスタロッチー	政治への関心、経済への関心と、教育への関心との関係、したがって、政治思想・経済思想と教育思想との関係、こうした関係がペスタロッチーの思想としてどう把握されていたか。	同上
22	フレーベル	アウグスティヌスやルターの場合の教育思想の中心にあった「神」が新しい意味をもって出現する。子どもの中の「神」、それが教育の歴史にどういう新しい動きを作り出したか。	同上
23	オーウェン―産業革命と教育―	産業革命の進展と共に、社会が労働者の子弟の啓蒙を必要とし、そこから社会の側からの労働者階級への教育的関心が生じた。こうして社会主義の教育思想が生れる。その代表者としてのロバート・オーウェンの思想を吟味する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	ホーレス・マン ーアメリカの 教育思想ー	フランス革命によって提出された、自由と平等と公教育との緊張の解決への道が、新大陸の新国家アメリカにおいて、デモクラシーの理念の下に拓かれることになった。その代表的教育行政・思想家として、ホーレス・マンが出現した。	村井　実
25	ヘルバルト ー思想と科学ー	近代に入って、教育に科学の成果としての知識・技術をとり入れると同時に、教育の思想を科学化する関心が高まっていった。その最初の積極的な試みがヘルバルトによって企てられた。ここでは、その試みの意味と限界とを考察する。	同　上
26	デュー イ	国家と知識・技術と、市民と、人間と、この四者の必然的なもつれ合いをどういう方向に解決して理想の教育を実現するか。この視点から、デューイの教育的民主主義の思想を吟味する。	同　上
27	森　有　礼	日本における国家と教育との関係をどう考えどう調整するか。森有礼の国家主義的教育思想の成立を吟味する。	同　上
28	福　沢　諭　吉	森有礼と同時に、同じ意図をもってスタートした福沢諭吉の教育思想が、どういう異った主張に結晶していったか。その両者の相違の意味。	同　上
29	教育の民主主義 (一) ー新しい出発ー	明治以来の日本での教育、戦争と敗戦、米国教育使節団報告書、教育基本法と新教育の運命、現在の日本の教育思想上の問題としてそれが何を意味するか。	同　上
30	教育の民主主義 (二) ー現実の歩みー	日本の戦後の教育は民主主義を旗印として進められたが、いつのまにか、自由の理想にも平等の理想にもかえって遠ざかる方向に進んでいる。これは何を意味するのか。これを、明治以来の潜在的な国家主義の問題として吟味する。	同　上

＝家庭教育＝（R）

〔主任講師：山村賢明（立教大学教授）〕

全体のねらい

家庭内のあれこれの場面で、子どもをどうしつけるかといった単なる技術論としてではなく、より広い視野に立って、家庭教育の本質的機能をとらえたい。そのために、家庭教育を人間の社会化過程の一環として位置づけ、そこにみられる問題を、日本の文化や現代社会のあり方との関連で考えてゆく。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	家庭教育の考え方 (1)子どもの発達と家庭	子どもはどのようにして、一人前の大人へと社会化されてゆくのか。とくに家族の役割をとりあげ、家庭教育が家族の日常生活の現実に即して考えられなければならないことを示す。	山村賢明（立教大学教授）
2	(2)日本人の形成と家庭	日本の家庭においては、子どもは極めて幼児から日本人として形成される。とくに基本的生活習慣や日本語の獲得を通して、日本の文化の本質的な部分が伝えられることを指摘する。	同上
3	(3)家庭の教育・学校の教育	家庭における自然な教育から、学校という専門的教育機関への移行という歴史的変化をふまえて、家庭教育本来の機能は何か、両者の関係はどうあるべきかを明らかにする。	同上
4	家庭における人間形成 (1)母親の役割 ―愛の原体験	子どもの発達に対応した、母親の役割を考える。そして母親の役割の中心が、将来様々な対象に拡大してゆく愛の感情を原始的に形成する点にあることを述べる。	同上
5	(2)父親の役割 ―権威の原体験	母親とは異った関わりをもつ父親の役割の諸相をとりあげ、父親の重要な役割は、規範や道徳意識の基礎にある権威の感覚を、子どもに最初に与えるところにあることを示す。	同上
6	(3)性別役割としつけ	男女の性別役割が、まず家庭の中で父親・母親をモデルにして子どもに獲得される。性別役割が社会や時代を通して不変のものでないこと、これからのしつけのあり方について考える。	同上
7	(4)きょうだい関係の意義	親のもとでの親和と競争、対等と庇護といった微妙な関係を経験するところに、きょうだい関係の重要性をみる。同時に、今日の「一人っ子的状況」のもつ問題点を考える。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	しつけの日本的特質 (1)子ども観の問題	日本の性善説的子ども観のもとでは、子どものコントロールに難点が出てくることを、とくに現代の状況から論じ、子どもに対する明確な言葉による要求の必要性を指摘する。	山村賢明
9	(2)母子関係への偏り	日本の親子関係においては、とくに母子の関係が濃密であることを示し、それが結果として、子どもの甘えを助長し、規範意識をうすくさせるように作用することを論じる。	同上
10	(3)家庭からの集団主義	日本的集団主義の行動様式が、まず家庭生活の中でつくられることを示し、他方で、いかにして個人の自律性や主体性をのばすようなしつけを行うかについて考える。	同上
11	現代家庭のひずみ (1)育児不安と過保護	核家族化と情報過多は育児不安を、さらに子ども数の減少と生活水準の向上は過保護を、必然的にもたらすことを述べ、それから脱出する方法や、祖父母との関係を考える。	同上
12	(2)「見えない父親」と子ども	現代の工業化社会のなかで、経済中心の生活のなかで子どものことを忘れる父親、そしてそのような父親の回復なしには、子どもの問題行動の解決はありえないことを論じる。	同上
13	(3)母親による子どもの管理	伝統的な母子関係の濃密さに加えて、ますます顕在化する母親、その母親によって先廻りしてすみずみまで管理される子どもの生活を述べそれが子どもに及ぼす影響を考える。	同上
14	(4)受験体制と家庭	社会全体にみられる受験体制の中で偏差値信仰にとらわれた家庭をとりあげる。そして子どもを見る親の目、子どもをとらえる勉強以外の多様な物指の必要性について考える。	同上
15	結び ー新しい家庭教育の創造	本講座のしめくくりとして、社会・家庭・子どもをめぐる現代の問題状況のなかで、どのような形で家庭教育を再生させるか、その可能性をさぐる。	同上

＝ 児　童　観 ＝（R）

〔主任講師：深谷昌志（放送大学教授）〕

全体のねらい

子どもについての見方を概観しようというのが、本講義の目標である。全体は三部構成をとっており、まず4回までで、欧米の児童観をさぐる。次いで、5～9回で、日本の児童観を歴史的に掘り下げた後、10～14回で、臨床心理学の立場からの児童観をまとめる。そして、最後に、未来の児童観にもふれてみたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	子羊たち ―西洋の児童観(1)	牧畜と役畜の高度な発達が西洋文明の基礎であり、そこで育まれた動物イメージは子どもに投影された。子どもたちははじめ子羊に、ついで子馬にたとえられた。明確な教育目標と計画性、教師の主体性という西洋の教育の特徴は、この児童観と表裏の関係にある。	舘　昭 （放送教育開発センター助教授）
2	タブラ・ラサ ―西洋の児童観(2)	工業化の波が西洋におこると、児童に対する無機物イメージが支配的となった。素材に対する加工可能性の飛躍的な発展は、子どもの教育可能性の信念の源であった。子どもたちがあらゆる文字を書き込める白紙（タブラ・ラサ）に見立てられ、工場モデルの近代学校が成立した。 ゲストは西洋教育史の宮沢康人東京大学教授。	同　上
3	子供の発見 ―西洋の児童観(2)	動物イメージと無機物イメージの濃厚な西洋社で、時として植物イメージがとてつもなく大きな役割を果たす。ルソーが提起した教育観は、伝統的な西洋のそれと正反対の、子どもの主体性に基礎を置くものであった。そしてその背景に植物イメージが躍動する。ゲストは宮沢康人東京大学教授。	同　上
4	内的世界 ―西洋の児童観(4)	ヒューマニズムの児童観が現代の西洋で力を得てきている。科学によって人間が解剖される時、子どもの動物視、無機物視は極限に達する。そうした時代のヒューマニズムの橋頭堡は、人間の内的世界の発見によってなされた。新しい児童観が西洋社会に育ちつつある。	同　上
5	児童観・東西	子どものとらえ方に、西欧と日本との間にかなりの開きが認められる。そこで、前回までの経過をふまえ、西洋教育史の専門家・志村鏡一郎静岡大学教授を招いて、日本の児童観の特色を、欧米との対比の中でとらえていきたい。	深谷昌志 （放送大学教授）
6	児童観の成立	子どもをいつくしむのが、日本の伝統だといわれる。この回では、藩学や寺子屋の時代にさかのぼって、日本の児童観の源をたしかめてみたい。 放送教材のゲストは、日本教育史の専門家で、児童観にくわしい石川松太郎日本女子大学教授である。	同　上
7	日本の近代と児童観	日本の近代化につれて、学校で学ぶ子どもたちが増加してくる。それだけに、学校関係者が、子どもをどうとらえていたのかが重要になる。そこで、児童規則などを素材として児童観をとらえてみたい。ゲストは、石川松太郎教授。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	児童観の転換	大正時代の新教育運動は童心礼讃とよばれるような児童観を生み出した。そこで、新教育運動の児童観を紹介すると同時に、児童文学にあらわれた児童観の分析を、児童文学者の西本鶏介氏とともに掘り下げてみたいと思っている。	深谷昌志
9	情報化社会の中で育つ	現代の子どもを特徴づけているものは、マス・メディアとのふれ合いであろう。そしてテレビ育ちとよばれるような成長のスタイルをたどる子が多い。そこで、マンガなども素材としながら、情報化社会の致来が児童観に与えた影響を考えていきたい。	同上
10	現代の子どもをどう理解するか —母子関係を中心に—	母子関係に問題のある具体的事例をあげて、その問題の背後にある心理を中心に、現代の子どもをどう理解したらよいのか述べる。	小川捷之 （横浜国立大学教授）
11	現代の子どもをどう理解するか —父子関係を中心に—	父子関係に起因する実際の治療事例を紹介する。そして、その子どもの治療過程を論じながら、現代の子どものもつ特徴をあげ、子どもをどう理解したらよいか考えを述べる。	同上
12	現代の子どもをどう理解するか —兄弟関係を中心に—	或る具体的な治療事例を紹介する。そして、その事例を中心に、現代の子どもの兄弟関係について述べ、彼等をどのように理解したらよいのか考察する。	同上
13	現代の子どもをどう理解するか —児童期と思春期—	思春期前期の治療事例をあげ、現代の子どもの児童期から青年期に到る問題点を浮彫りにする。そして、この時期の子どもたちをどう理解したらよいのか、述べる。	同上
14	現代の子どもたち	心理臨床の場で接する子どもたちを通して、現代の子どもたちの特徴についてまとめ、我々大人は、今後どのようにして子どもたちを理解していったらよいのか考察する。	同上
15	未来の子どもたち	これまで、①欧米の児童観から始まって、②日本の児童観を概観し、最後に、③臨床心理学の立場から、子どもをどう見るのかを考察してきた。今日は、それらの立場をふまえ未来の子どもたちについて、考察を進めたいと思う。	深谷昌志

＝情操の教育＝（R）

主任講師：片岡徳雄（広島大学教授）
　　：高萩保治（東京学芸大学教授）

全体のねらい

情操を育てる教育は、人間が人間であることを確める教育である。それはまた、現代の人間社会の危機を克服する一つの道でもある。今までの芸術教育とは異なる視点から、情操教育を考える。すなわち、人間の想像力や表現力を育てることを出発点とした、美的価値への感情や態度を築いてゆく意義と方法を、多くの事例に即して考えてみよう。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	情操とは －価値への感情－	情操とはなにか。人間の感情の働き、前頭葉の働き、の中で考える。また、情操の中でも、とりわけ、表現美の価値に対する感情を、根本に見定める。	片岡徳雄 (広島大学教授)
2	情操教育とは －表現し想像することから－	美的な価値に触れさせ、教えこんで、情操を育ててゆくのではない。情操教育は、表現し想像することから出発する。 ドイツのシュタイナー学校やその他の多くの事例で、考えたい。	野村幸治 (広島大学助教授)
3	科学と情操と	情操教育は、科学の研究や道徳の教育と重なりあう。創造の喜び、創造の苦しみ、イメージの働きなどにおいて、である。 最近の科学文明の問題に情操教育が果す役割についても考える。	片岡徳雄
4	芸術教育でなく	芸術教育は、情操教育の一部であっても、そのすべてではない。情操教育で大事なのは、その技術性ではなく、表現としての体験である。 美的とは、技術とは、そして芸術とは。	同上
5	いま情操教育では	現在の日本の学校教育では、芸術教育はあっても、情操教育は弱い。四つの問題点－美術と音楽、文学、映像と総合、社会性、のそれぞれのゆがみ－について考える。	同上
6	文学教育では	幼児から大人に至るまで、人は多くの物語や詩に接する。情操教育としての問題は？ 幼児の読み物、学校の文学教育、そして成人の読書、の実情に即して考える。	同上
7	文学教育とは	人間にとって、文学とはなにか。そしてまた、文学教育はどうあるべきか。 様々な理論を検討した上で、人間性の理解と想像性の伸長、という目標をつきとめる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	音楽教育とは	情操教育としての音楽教育を考えるに当たって最初に、音楽と人間のかかわり合いを幅広く考察する。次に音楽的な感動と表現の関係について触れ、音楽教育への示唆についても考える。	高萩保治 (東京学芸大学教授)
9	いま音楽教育では	学校音楽教育は、指導要領で鑑賞と表現の領域で指導するよう規定されているが、総合的な音楽指導の実践や指導のアプローチなどに触れ、情操教育としての音楽教育のねらいを考える。	同　上
10	これからの音楽教育	音楽が非言語コミュニケーションの一つであることに留意して、音楽教育は人間的ふれ合いの中で子どもの表現能力をのばすよう、発想の転換と多様な表現を求めて音楽教育を考える。	同　上
11	美術教育では	子どもはなぜ絵を描くか。好んで描いていたのが、なぜ急に描かなくなるのか。「自由画教育」派の考えに対する「技術指導」派の考え、絵の鑑賞など、美術教育の諸問題に触れる。	鈴木幹雄 （神戸大学講師）
12	マスコミと映像の中で	現代は、映画やテレビやラジオなど、映像的・電波的マスコミの時代である。その中で、情操はどう育てられているか。 マスコミの強い影響の事実と、おくれがちな映像教育、について論じる。	片岡徳雄
13	総合の活動の中で	情操は、様々なからみの中で、総合的に開発される。 仲間の中から生れ、仲間を結びつける、表現活動－劇表現と祭りに焦点をあてたい。	野村幸治
14	社会の人間化として	現代社会の問題は、あまりにも科学技術化され、遊び的表現を見失なっているところにある。現代社会の人間化のために、遊びと芸術をどう育てるか。つまり情操教育への期待は大きい。	片岡徳雄
15	自己実現として	情操教育はまた、人間それぞれが自己実現してゆくための教育でもある。 自己実現とは、自己実現的人間とは、そしてまた、美的自己実現のもつ深さ・厳しさ・自由とは。	同　上

＝青少年文化＝（TV）

〔主任講師：深谷昌志（放送大学教授）
門脇厚司（筑波大学助教授）〕

全体のねらい

ひとくちに、青少年文化といっても、子ども文化と若者文化とでは実態も異なっているし、当然、分析のアングルも違ってくる。そこで、本講義では、子ども文化を前半、青年文化を後半で扱う形式をとることにした。文化論であるから、現実の姿を紹介すると同時に、そうした現像を理論的に深める点にも配慮することにした。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	青少年文化のとらえ方	青少年文化を、青年文化と子ども文化とに分け、それぞれの文化を特性を明らかにする。そして、青少年文化の現状を概観する。	深谷昌志（放送大学教授）
2	遊びの機能	子どもの人間形成にとっての遊びの意味を発達段階をふまえて考察する。続いて、「群れ型」から「孤独型」へ、遊びが変遷したことにより、子どもの発達にどのような歪みが生じたのかを堀り下げていく。	深谷昌志
3	玩具の変遷	さまざまな玩具を紹介しながら、子どもの心を豊かに育てる玩具はどういうものなのか、考えていく。また、現代の玩具がそうした条件を備えているか検討する。	同上
4	童話の世界	子ども雑誌を素材としながら、童話の成り立ちを紹介する。また、児童文学が低迷しているといわれる現代、童話が、今後も、子どもの成長に必要なものかを考察していきたい。	同上
5	仲間集団のゆくえ	現代の子どもはギャング集団を失い、友をもたずに成長していく。そうした現状をふまえ、仲間集団の中で、子どもたちが身につけたものは何なのかを考えていく。	同上
6	テレビとのつき合い	テレビとのふれ合いを、子どもたちはどうとらえているのか。子ども番組の変遷をふりかえりつつ、子どもにとっての望ましい視聴態度とは何かを検討していく。	同上
7	情報化社会の中で	テレビの他にも、マンガやゲームウォッチなど、子どもたちは、情報化社会の状況にとりかこまれて育っている。しかし、子どもたちに、間接体験の肥大と直接体験の縮小の傾向がみられる。そうした情報化社会の子ども文化を深める。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	子ども文化の再生	子ども文化を再生するために、どういう方策が必要なのかを、遊び場や児童公園などと関連させて考える。	深谷昌志
9	青年期と青年	青年文化を理解するには、その担い手たる青年集団のさまざまな特性を理解しておく必要がある。そこで、まず青年期に特有の身体的・精神的特性をみる。	門脇厚司
10	青年文化論の検討	青年文化を学問的な分析の対象としはじめた時代的背景と青年文化論にみられる代表的な見解を紹介する。	同　上
11	青年文化とその発生条件	青年文化の一般的な特質を整理し理解につとめると同時に、そうした青年文化があらわれる時代的・社会的特徴にもふれる。	同　上
12	現代社会と青年文化	現代のわが国の青年文化を生み出してきた戦後日本の社会的特徴をみつつ、今日の若者文化がどのような性格を帯びているかについても言及する。	同　上
13	現代の若者文化(1) －浮遊文化の諸相	今日の若者文化の1つの特徴を〝浮遊文化〟ととらえ、そうした文化を支える青年の意識や価値観を紹介しつつ、その実態を報告する。	同　上
14	現代の若者文化(2) －閉塞文化の諸相	今日の若者文化のあと1つの特徴を〝閉塞文化〟ととらえ、このような文化を生む若者の気分や生活を考えつつ、その実態を報告する。	同　上
15	青年文化の展望	社会が大きく変わりつつある今日、青年文化は今後どのような方向をたどるのか。強化説と消滅説の2つの見解を軸に、青年文化の将来を展望する。	同　上

＝地域社会と学校＝（TV）

〔主任講師：溝口謙三（東北福祉大学教授）〕

全体のねらい

学校は、国の政策による制度として普及発達してきた。しかし学校は異った地域社会の中にあり、子どもたちはその地域の中で生活し成長している。学校教育は、国の統制と地域社会の独自性とをどのように切結んでいくべきか。最近の社会と地域の変貌を背景にすえ、地域類型を軸にして、学校教育の在り方を多面的に考察する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	学校と社会	学校は、計画的な教育の場として、子どもたちを望ましい人間に形成し、社会人となることをねがう。子どもを受け入れる社会は、社会の進歩に役立つ人間を期待する。教育において、学校と社会はどのようにかかわるのか、その相互関係を考えて序論とする。	溝口謙三（東北福祉大学教授）
2	教育と社会	人間は生まれた後に、多くの行動を学びとって人間と成っていく。その場は家庭、交友、学校である。これらの学習の場は一定の地域社会の中に在る。それが地域とどのようにかかわりまた支えられているかを理論的に考える。	同上
3	教育における地域社会	地域社会とは、人間が生活する具体的な場である。教育においては、学校を中核として、地域社会をどう考え、どのような範囲ととらえるか。さらに最近の地域変貌が学校教育にどう影響しているかを検討する。	同上
4	地域社会の中の教育	子どもは地域社会の中で生活し成長する。地域は、それぞれの伝統と条件にもとづいて慣習や規制や価値観などを〝仕込む〟。このような地域の教育力はどのようにはたらくのか。それが学校教育とどうかかわるのかを考える。	同上
5	地域教育運動の実践	地域と学校とを結ぼうとす動きは戦前からあった。さらに戦後は、新しい地域学校運動も起こった。郷土教育、生活綴方運動、地域社会学校の試みなどの実践を通して改めて地域と学校とのかかわりを見直す。	同上
6	地域社会の変動と学校の変化	明治以来、国策としての近代学校制度は、それぞれの地域社会に支えられて発達してきた。最近の社会の変動と学校教育の変化によって、学校と地域との関係は変化し、相互に離れてきたとされる。この事実を明らかにし、次の地域類型別の学校分析の仮説とする。	同上
7	都市の学校	地域類型の一つとしての都市は、人工の文化に支えられて現代社会の先端にあり、子どもたちの学習・生活環境も豊かである。反面、過密といわれる社会状況の中で、子どもたちはかえって孤独になっているといわれる。都市の教育状況と学校の役割を考える。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	農村の学校	都市と対比される農村は、生命のある自然に包まれている。その学習環境は人間にとって欠くことのできない生活経験の場とされる。しかしいまの農村の生活は都市化され、子どもたちも身近な自然から遠ざかっている。ここに農村学校の新たな役割がある。	溝口謙三
9	へき地の学校	"恵まれない地域"とされるへき地は、さらに過疎化に苦しんでいるといわれる。しかし豊かな自然を温存するへき地では、マイナスの要因を逆転するきっかけが見出せないだろうか。へき地に成長する子どもたちと学校の様子をさぐる。	同上
10	大きな学校・小さな学校	定員を定めない小・中学校では、大きな地域では子どもも多く学校も大きくなる。小さな地域では学校も小さい。学校規模の大小はどのように規制されているのか。またそれが学校教育にどのような影響を与えるかを考える。	同上
11	学校統合と学校寄宿舎	学校の規模が規制され、とくに小さな地域の小規模学校が非効率とされると、統廃合がなされる。その結果、自宅からの通学ができなくなると学校寄宿舎に入ることになる。地域との関連で出てくるこのような学校の実態から、新しい教育の問題を考える。	同上
12	大きい学級・小さい学級	学校規模の中に学級の大きさの問題がある。学級の大きさも法的に規定されてきたが、狭い地域では数人だけの学級も多い。どれだけの大きさが適切か。ここから学校の集団教育の本質を考える。	同上
13	複式学級	狭い地域でのごく小さな学校では、数こ学年を1学級に編成した複式学級になる。この"やむをえない"措置が固定化した現在の学級に多くの問題を投げかける。諸外国の学年別学級解体等を事例にしながら集団教育の意味を考え直したい。	同上
14	地域社会と高校・大学	戦後の新制の高校は、地域のすべての青年に開かれた中等教育として発足し、大学は「一府県一大学」の確認で創設された。この原点にたちかえり拡げられた地域社会の視角から、高校と大学の在り方を見直したい。	同上
15	地域社会の生涯教育体系	いま構想されている生涯教育の体系を地域社会の基盤でとらえ、幼児保育、学童の校外活動、コミュニティ・カレッジ論などを、学校教育との関連でとらえて、地域社会と学校との関連の問題をしめくくる。	同上

＝生涯教育論＝（R）

－生涯教育学の成立をめざして－

〔主任講師：麻生　誠（大阪大学教授）〕

全体のねらい

生涯教育理念は、わが国でも漸次、教育政策や教育制度、教育組織、教育課程などに影響を及ぼすようになった。だが、生涯教育は、教育の自由と平等、学習と教育との間の矛盾に代表されるような二律背反的要素を内にふくんでいる。このような生涯教育理念を現代の教育現実と関連させながら、新らしい生涯教育学を構想してみよう。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生涯教育の理念	生涯教育は、人々の自己実現を達成させるために、人々の全生涯を通して人間的、社会的、職業的な発達を援助する教育の仕組みである。ややもすれば言葉だけの美辞句に終ってしまう恐れのある生涯教育理念を全体社会のなかに位置づけて総合的・統一的観点からとらえ直してみよう。	麻生　誠（大阪大学教授）
2	生涯教育の社会的背景	人間は「生涯にわたって学ばねばならぬ」ということは古くから言われてきた。この意味で、生涯教育は古き理念である。しかし、最近生涯教育論が唱導されてきたのはこの古き理念の新らしい意味を引き出すような社会的条件が発生してきたからである。このことを考えてみよう。	同　上
3	生涯教育と学習要求	生涯教育は、何よりも国民の生涯にわたる学習要求を前提としている。だが、あらゆる人間が生涯教育を享受しよう継続的な学習要求を持っているものであろうか。この問題を考えてみよう。	同　上
4	日本の生涯教育のルーツを探る	生涯教育理念は、それぞれの社会や国によってこのニュアンスが異っている。その理由の一つは、国々の文化的、教育的伝統が異っているからである。わが国の生涯教育のルーツを江戸時代の教育書に探ってみよう。	同　上
5	教育政策のなかの生涯教育	1965年、ユネスコにおいてはじめて唱えられた生涯教育論も、２０年の歳月を経て、人間にたとえれば成人にたっする齢を重ねたことになる。それはわが国の教育政策に、もろもろの影響を与え続けている。だがその成果たるや未だしの感が深い。生涯教育論が、わが国の地方レヴェルの教育政策のなかに、どのような影響を与え、どのような成果をもたらしたかを明らかにしてみよう。そして生涯教育の理念と現実のギャップを探ってみよう。	同　上
6	生涯教育と放送利用	放送は、生涯教育機会を社会に拡散させるのに大きな力を持っている。しかしまた、教育上無視できない限界もあわせ持っている。これら限界を克服し、放送を生涯教育に生かす手だてを考えてみよう。	同　上
7	生涯教育を欧米に見る(I) －アメリカの生涯教育－	欧米の生涯教育政策・制度を概観しながら、生涯教育の教育政策や教育制度上の課題を考えていこう。まず、生涯教育の先進国といえるアメリカの生涯教育の特徴をみてみよう。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	生涯教育を欧米に見る(Ⅱ) ―イギリスの生涯教育―	イギリスでは、歴史的に学校卒業後の継続教育が整備されており、ここを中核とした生涯教育構想が注目される。さらに、公開大学も放送大学のモデルとして考慮に価する。	麻生　誠
9	生涯教育を欧米に見る(Ⅲ) ―スウェーデンの生涯教育―	福祉国家として名高いスウェーデンの生涯教育は学ぶべき点が多い。高等教育の開放、北欧の伝統的成人教育としての学習サークル有給教育休暇や奨学金政策などの種々な学習保障活動をみてみよう。	同　上
10	生涯教育を欧米に見る(Ⅳ) ―ソビエトの生涯教育―	社会主義体制下の生涯教育の事例としてソビエトをみてみよう。そこでは、政府主導型官僚制、画一性などのデメリットが生じやすい。 これらが如何に克服されてどのような社会主義的人間類型が形成されているか、みてみよう。	同　上
11	生涯教育の体系と行・財政問題	生涯教育論には、行・財政論が欠けていると批判される。「誰でもが何時でも何処でも学習できる」という生涯教育シュラムの行・財政的基盤を探り、生涯教育システムを確立するには、行政がどう変わるべきかを検討しよう。	同　上
12	地域社会と生涯教育	私たちの生活は、私たちの生活圏としての地域社会を基盤としておこなわれている。このような地域社会のなかで地域住民に対してどのような教育機会が提供され、住民の学習要求をどのように充足させているかを、一つの事例をとりあげて考えてみよう。	同　上
13	発達課題と生涯教育	人間の発達過程のそれぞれの時期に現われる発達課題を首尾よく達成することによって健康な人格が生まれる。現代日本の発達課題とその解決に生涯教育のはたす役割を考えよう。	同　上
14	成人教育学（アンドラゴジー）をもとめて	これまでの教育学は子どもを対象とするものであった。生涯教育の時代とともに、成人が対象とする教育方法論や教育課程論が必要となる。このような要請に答えて誕生した成人教育学（アンドラゴジー）である。その成果を紹介しよう。	同　上
15	日本の生涯教育の必要性と可能性を求めて	わが国の生涯教育を支える三本柱である学校教育システム、社会教育システム、職業訓練システムの実態と問題点を明らかにし、それらをどのように組み合わせていけばわが国の生涯教育システムが確立されるようになるかという可能性を考えてみよう。	同　上

＝教育社会学＝（TV）

〔主任講師：河野重男（お茶の水女子大学長）
新井郁男（上越教育大学教授）〕

全体のねらい

教育と社会の関係は一方向的ではなく、相互的なものである。教育は社会のあり方や発展をきめる重要な役割を果たすが、同時に教育のあり方や発展は社会の影響を受ける。このような社会の発展を規定しながらも、逆に社会の発展によって規定される教育を、人間の成長発達の過程とかかわらせて、ダイナミックに考察する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	社会現象としての教育(1) ～教育とは～	教育は、社会によってその内容、方法、形態、目的などは異るにしても、すべての社会に共通にみられる現象である。それは一体何故であろうか。このように教育の本質を社会との関連において考えてみる。	新井郁男 （上越教育大学教授）
2	社会現象としての教育(2) ～人間の発達と社会～	人間の発達は、単に生物学的・心理学的現象ではなく、人間が人間として発達するためには、人間社会、人間文化の働きかけが不可欠だという意味で、すぐれて、社会的現象であるということについて考える。	同上
3	社会現象としての教育(3) ～実証性・科学性～	理念としての教育あるいは教育技術を志向する教育学ではなく、教育を社会的事実として、実証的に分析する。科学としての教育社会学の特性を明らかにする。教育社会学研究の歴史を概観し、さらにそこで用いられる研究手法について学ぶ。	岡崎友典 （放送大学助教授）
4	社会現象としての教育(4) ～教育調査法～	教育の具体的な事象を、客観的に記述・分析するための手法として教育調査法について、調査目的、調査対象、調査技法などを社会調査の理論を用いて、調査の手順に即して考察する。	同上
5	学校の発達と社会の変化	教育を最も計画的、組織的に行う社会的制度として発達してきた学校は、長い歴史の中では、その目的・体系・機能などに変遷がみられるが、近年は急速な社会変化との間に大きなギャップを生んでいる。このような近況について考えるのが本章のねらいである。	新井郁男
6	学校の近代化と外国教育の受容	学校の発達における外国教育の影響の仕方にはどのようなパターンがあるかについて考える。	同上
7	学校の役割と機能	学校が社会から期待されている役割は何なのか、また、学校が現実に果たしている機能は何なのか。その役割と機能との間にどのようなギャップが生じているのか。このような問題を塾の発達と関連させて考えてみたい。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	職業としての教師	教職の性格をめぐって、これまで多くの議論がなされてきた。専門職論、聖職論、労働者論などを素描しつつ、ここではとくに「職業」として教師が果たす社会的役割を、多様な職種との対比をとおしてその特性を明らかにする。	岡崎友典
9	教師の養成と資格	教師養成の歴史を概観し、さらに高等教育機関で養成される「教員の資格」について，免許状の取得や教員の採用状況（需給関係）などを素材に考える。また教員の再教育・研修の実態についても考察する。	同上
10	生活者としての教師	新卒の青年教師から半世紀近い教職経験をもつベテラン教師まで、同じ教師でも、生活の体験はさまざまである。社会人としての生活体験が教育実践に反映される過程を、学校組織内の教師集団といった視点から明らかにする。	同上
11	教育内容と社会	社会の中に存在するさまざまの知識の中から、教育の目的の観点から選択された教育的知識としての教育内容が、いかに社会と深くかかわっているかを、歴史的に考察する。	新井郁男
12	学校と文化	学校には、社会一般の文化を反映しながらも、教師の文化と生徒の文化という二つの文化によって構造化された独自の文化がみられ、これが学校の教育的働きを、促進したり阻害したりしている。この学校文化の中でも特に生徒文化について考える。	同上
13	学校組織の機能	学校は教育を目的とする組織体（オーガニゼーション）はいかなる特色をもっており、それがどのような機能を果たすのかについて考察する。	同上
14	教育と政治	教育が社会統制機能を果たすための一つのメカニズムとしての教育行政を中心に考える。	同上
15	教育と産業	近代社会の成立以降、産業の発展にとって教育は不可欠な条件となった。それは質的に高い労働力を産業に提供することはもとより、産業の構造の転換を促進するにたるだけの科学技術の進歩を教育が保障するからである。この点を歴史的に考察する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	コミュニティ形成と学校	地域社会の変貌、特にコミュニティ形成の基盤である地域性、共同性そして地域連帯意識が弱化、希薄化している。ここでは新しいコミュニティの創造の必要性を国民の「文化活動の場」としての地域社会と学校の関連でとらえ、地域社会学校の現代的可能性をさぐる。	河野重男（お茶の水女子大学長）
17	社会化 (1) ～社会化とは何か～	社会化の定義、関連する基本的概念について解説する。	新井郁男
18	社会化 (2) ～親の役割～	社会化は人間の一生にかかわる課題であるが、なんといっても、子どもの社会化は最も重要である。その子どもの社会化に、親はどのような役割を果たすべきなのか、という問題を現実の状況に照らしながら考えていく。	同上
19	社会化 (3) ～ の役割～	基礎的集団である家庭から、機能的集団である学校・職場に社会化の機関が移行するにともない、社会化の機能は分化・深化する。ここでは、政治的社会化、職業的社会化、そして性的社会化など、学校・職場で展開される社会化の実態を把握する。	岡崎友典
20	社会化 (4) ～地域社会の役割～	生活の場としての地域社会は、近年急激に変化しており、かつてのように個人の生活を全人格的に包括するわけではないが、その重要性は家族同様むしろ高まっているといえよう。現代社会の地域社会が社会化に果たす役割について、地域生活者としての子どもといった観点から考察する。	同上
21	学歴社会の成立	学歴とは、個人が生涯で得た学校教育の経歴の全体をさすが、学歴主業イデオロギーが支配する「学歴社会」では、最終学校の社会的価値（評価）の序列化が、人々の最大関心事となる。学歴が物言う社会がどのようにして成立し、いかなる問題をもつか考察する。	同上
22	学歴と職業	学歴が一定の職業資格と相関関係をもつとしても、学歴が職業を決定するわけではない。むしろ職業が新たな学歴を要請するのが現代社会であるといえよう。ここでは学歴と職業との間のダイナミックな関係を、職業教育、職業的社会化、企業内教育などからとらえる。	同上
23	試験	義務教育後の教育機関への進学には、何らかの入学試験がともなう。資格試験、競争試験のいずれにおいても、そこで測られる学力の養成・習得をめぐってさまざまな教育問題が生じる。受験地獄に代表されるわが国の試験の状況を、中・高等教育を中心にとらえる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	社会の病理と教育の病理	社会と教育の関係はいうまでもなく相互規定的である。社会の病理現象が教育に反映されるだけでなく、教育の病理の進行は社会の進歩・発展を阻害する。両者の病理現象の実態を社会機能の観点から、どのようにとらえるか、アプローチの方法について考察する。	河野重男
25	問題行動 ～発達の病理～	近年、青少年の問題行動は枚挙にいとまがない。これらはいずれも、青少年が望ましい発達を阻まれているという意味で、まさに発達の病理にほかならない。ここではとくに、青少年の非行をとりあげ、非行を生み出す諸条件、非行の推移と現況の特質など考察する。	高橋均 （武蔵大学教授）
26	学校の病理	登校拒否、校内暴力、教師のノイローゼなど教育実践にかかわる病理や、入学試験や就職などの学校制度や教育内容にかかわる病理について、その歴史的・社会的背景についてさぐるとともに、新しい形の学校教育についても検討する。	同上
27	学校の改革	教育改革の必要性が指摘されて久しい。その際つねに学校改革が中心的課題として提起されながら、制度面についてはほとんど変化はみられない。それはなぜか。ここでは近代学校の歴史をおさえつつ、現代の学校批判における論点を整理し、改革の可能性をさぐる。	児島邦宏 （東京学芸大学助教授）
28	生涯教育論と学校	わが国の教育水準の高さは、学習社会といった概念に象徴的に現れている。学習社会は生涯教育（学習）の社会である。ここでは、生涯教育の理論を学校教育を軸として学び、これからの教育のあり方について検討する。	河野重男
29	情報化社会と学校	現代社会は、大量の情報が氾濫し人々を圧倒し、はては人間がその中に巻き込まれ、引き回され翻弄されて、あたかも人間が機材に使われるような状態を生み出している。ここでは情報化社会の特徴を整理し、情報の内容とその処理能力を高めるための学習形態についても学習する。	同上
30	国際化と教育	海外生活や旅行はもとより、直接出かけなくとも、他の国の人々や文化に接する機会が増大しているが、日本人のこれへの適応の仕方はきわめて消極的である。この問題を特に異文化理解という観点から考える。	新井郁男

＝青少年の指導＝（TV）

〔主任講師：深谷昌志（放送大学教授）〕

全体のねらい

児童・生徒の指導のむつかしさが語られることが多い。子どもたちの成長のスタイルがことなってきたので、これまでの指導方法は有効性を失ないつつある。そこで、本講義では、青少年の指導のあり方を、青少年の実態をふまえつつ、現実的な対応も含めて総括的に堀り下げていきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	指導とは(1)人格の構造と発達	人格の構造を3つの領域に分け、教育作用として、よくわからせる、やり方を身につけさせる、やる気を育てるの3つを考える。また人格形成上の発達課題を幼児期から青年期までに分けてとりあげ、その達成のための方法をのべる。	坂本昇一（千葉大学教授）
2	指導とは(2)指導の考え方	指導のねらいとしての自己指導の力の育成の意味、それを達成するためのアプローチ、すなわち子どもに自己決定を与える、存在感（自尊感情）を保証する、そして、人間的ふれあいを基盤にして行うの3つについて具体的事例で説明する。	同上
3	指導とは(3)青少年の理解	青少年の理解のアプローチとして、共感的理解と評価的理解をあげる。前者については事例を中心にして説明する。後者は、主として客観化された検査を中心にする。たとえば、知能検査としてのビネー法や性格検査としてのロールシャッハ検査などを紹介する。	同上
4	指導とは(4)指導の領域と内容	青少年が直面する問題を分類して7つの指導領域を示す。その中の適応指導と進路指導をとくにとりあげ、前者は帰国子女の問題などの例示により、後者は、学級指導の時間での進路指導のあり方を説明することにより、理解を深める。	同上
5	指導とは(5)指導の機能と体制	生徒指導の組織と運営について説明し、さらに学校教育と社会教育の連携について、少年自然の家での活動やボランティア活動を例示して説明する。また、地域ぐるみの活動を展開するための組織・体制のあり方についても説明したい。	同上
6	学校の中で(1)教師の仕事	青少年指導を実際に担うのは教師であろう。もちろん教師の主たる仕事が授業であるのはいうまでもないが、それと同時に教師は児童・生徒の精神面での成長にかかわりを持つ。生徒指導に関連させて、教職の意味を深めていきたい。	深谷昌志（放送大学教授）
7	学校の中で(2)学級集団	学校の中の子どもたちは、教師から指導を受けるとともに、学級の友だちと時を過す。そうした友の存在は、子どもたちの学校での充足感と密接な関連を持つ。集団としての学級集団の特質を述べ、指導にあたっての留意点を指摘していきたい。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	学校の中で(3) 学校の機能	学校は子どもにとって、生活の場でもある。ひとつの制度としての学校をどのように構成していったらよいか。学校のあり方を理論的に深めるとともに、将来の学校像の検討も進めていきたい。	深谷昌志
9	学校の中で(4) 学力の構造	学校の主たる機能は学力をつけることだという。しかし、学力のとらえ方は、かならずしも一義的でない。中でも系統学習の中心の学力と生活単元を媒介とした学力とでは著しい対比を示す。そうした学力のとらえ方を整理し、理論化を図ることにしたい。	同上
10	学校の中で(5) 学校文化	学校には、その学校なりのカラーがあり、そうしたカラーは児童、生徒の人間形成にインフォーマルではあるが、根強い影響を及ぼす。ここでは学校独自のカラーを学校文化ととらえ、その機能を多角的にとらえていきたい。	同上
11	人間形成の観点から(1) 性差の形成	男らしさや女らしさをどう考えるのかは青少年指導にとって、中枢の意味を持つ。特に性差の縮小あるいは伝統的な性的分業意識のゆれ動きが目につく現在、学校の中で、性差をどう指導していったらよいのかを堀り下げていきたい。	同上
12	人間形成の観点から(2) 言語の社会化	現代の子どもたちはマス・メディアの中から育つ。そうした成長を、ここでは言語的な社会化の観点から堀り下げていきたい。特にバーンスタイン教授の言語的社会化理論を中心に、言語面での指導のあり方を比較教育学的な視野をまじえて展開していく。	同上
13	人間形成の観点から(3) 家庭の教育力	現代の子どもたちは、人工的な環境の中で成長し、自然とのふれ合いに欠く。その結果、生活体験などに乏しくなる。キャンプなどの指導が重要になるが、それは学校内での指導と異質なものであろう。自然活動プログラムを展開するさいの留意点を考えていく。	同上
14	人間形成の観点から(4) 自然活動	子どもの成長に家庭は大きなかかわりを持つ。家庭の機能については、別の指導でもさまざまな形で扱われているが、ここでは子どもの人間形成の観点から父親や母親の役割を中心として、家庭の機能を問い直してみたい。	同上
15	人間形成の観点から(5) 個性の幅と文化	日本では、日本語を話し和食を食べる生活を、あたり前だと思う。そのため、人々をとらえるにあたって、同質性を前提とする。そして、差異を認めにくい土壌が持ってくる。生徒指導にあたって、個性の指導がなによりも大事だが、現実には課題が多い。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
16	問題への対応(1) 「症状の意味を考える」 －偏食を例に－	子どもの問題行動を扱ってゆこうとする際に症状として表面に表われているものは一つの信号に過ぎず、その奥に真の意味がかくされていることが多い。食事行動の異常を例に、症状のもつ意味の多様性を考えてみよう。	深谷和子 （東京学芸大学教授）
17	問題への対応(2) 「問題の根を探す」 －登校拒否を例に－	同じ問題行動でも、その根には様々のものが関わっている。不登校（学校へ行かない）の例をひきながら、その根を堀り下げようとする試みの必要性を示す。	同　上
18	問題への対応(3) 「経過を見る」 －ことばの異常を例に－	子どもは発達途上にある存在で時間と共に症状が少しずつ変化してゆくことが多い。早期に問題の所在を決めてしまうのでなく、経過を見てゆくことが大切である。遊戯観察の例なども紹介しながら発達の経過を見まもることの大切さを指摘する。	同　上
19	問題への対応(4) 「子どもを支える」 －いじめを例に－	すべての問題行動の対応のしかたには治療者として共通に「子どもを支える」必要性がある。遊戯療法を例に使いながら子どもを支えることの意味を探ってゆきたい。	同　上
20	問題への対応(5) 「母親を支える」 －再び登校拒否を例に－	母親は子どもの最大の環境であり、かつ子どもに問題行動が生じた際に、重要な補助治療者の役割を果すものである。母親面接を通して、治療者はどう母親と関りこれを支えれば、子どもの問題行動の指導につながるか考えてみようとする。	同　上
21	非行をめぐって(1) 非行の現状と背景	非行は第三のピークを迎えたといわれる。それと同時に、非行の幼稚化など、非行のさまがわりが説かれている。そこで、まず非行の実態をとらえ、その背景を探ってみたい。	麦島文夫 松本良夫
22	非行をめぐって(2) 非行の入口	非行といっても軽度のものから重度のものまでが含まれる。非社会性は、軽度な非行に属そうがここでは、そうした非行の入口的な症状をとらえその対応をまとめていく。	麦島文夫
23	非行をめぐって(3) 女子非行	女子の非行は、女性らしさの形成にからんで、複雑な様相を呈する。ここでは、女子非行を例として、非行のメカニズムを堀り下げていきたい。	麦島文夫 内山絢子

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	非行をめぐって(4) 非　行　集　団	非行というと、群れをなして、バイクをのりまわすツッパリグループがイメージにうかぶ。そうした非行集団がどういう特質を持ち、そして非行生徒が何故群れを組みたがるかなどを考えていきたい。	麦　島　文　夫 （帝京大学教授）
25	非行をめぐって(5) 非行からの回復	ここでは、シンナー等の薬物乱用などを素材として、非行から回復（再生）するためにどういう対応が望まれるのかを、総合的にとらえていく。あわせて、諸機関との連携の必要性を説く。	麦　島　文　夫 安　香　　宏
26	問題へのアプローチ(1) ー精神分析ー	精神分析の創始者フロイト、Sの考え方とその治療技法をわかりやすく紹介する。	小　川　捷　之 （横浜国立大学教授） 乾　　吉　祐 （慶応大学講師）
27	問題へのアプローチ(2) ー行動療法ー	近年、アメリカを中心に盛んになった行動療法の基本的考え方と治療理論および治療技法についてわかりやすく紹介する。	小　川　捷　之 中　野　良　顕 （筑波大学助教授）
28	問題へのアプローチ(3) ークライエント中心療法ー	来談者中心療法の創始者ロージャス、Cの人となりとその基本的な考え方、および、治療技法をわかりやすく紹介する。	小　川　捷　之 飯　長　喜一郎 （お茶の水女子大学助教授）
29	問題へのアプローチ(4) ー分析心理学ー	ユング、C.G.の人となりとその考え方の基本について紹介し、その治療観および技法についてわかりやすく紹介する。	小　川　捷　之 織　田　尚　生 （放送大学助教授）
30	問題へのアプローチ(5) ー箱庭療法ー	ユングの分析心理学を背景にして生まれた箱庭療法についての基本的な考え方を紹介しあわせて人間の心が癒え、成長してゆくさまを具体的な事例にそくして提出し、検討してゆく。	同　上

＝発達心理学Ⅰ＝（TV）

〔主任講師：宮川知彰（放送大学教授）〕

全体のねらい

人生の各時期の精神発達の状況、現象を概観したあとで、発達心理学とはどのような科学であるのか、精神発達はどのような方法で研究されているか、「発達」についてどのような見方、考え方があるのかといったより抽象的な問題について考えてみることにする。つまり具体的な現象から理論的な問題へと考察をすすめていこう。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	乳児	乳児は、一般に母親との相互の社会的関係を通して成長・発達をとげる。本章では、胎生期の成長に続き、乳児期の身体・運動、知的機能、情動や性格などの発達的特徴を指摘し、それをふまえて初期経験の意義と養育のあり方を考える。	寺田晃（東北大学教授）
2	幼児	幼児期の身体と運動、思考や言語などの知的機能の発達、自我や自立心・道徳性の芽ばえ、性役割の学習、性格、遊びを中心とした対人関係の形成を述べ、幼児期とはどんな段階かを検討し、家庭・保育所・幼稚園での指導問題を考える。	同上
3	学童	学童期における身体と運動機能、知的機能（とくに論理的思考と知識、言語）の発達、仲間との相互交渉を通じての行動空間の拡大、性役割と道徳性・自我意識の発達などについて考え、あわせて家庭、小学校の指導の問題点を指摘する。	寺田晃 大山正博（東北学院大学教授）
4	青年	青年期とは、いつからいつまでのことをいうのか、また青年期の「発達課題」は何かについて概述する。	宮川知彰（放送大学教授）
5	壮年	「精神発達」の過程では、新しい「能力」が獲得されていくと同時にこれまであった「能力」が失われたり減衰したりする。壮年期では若き日の何が失われ、何が新たに獲得されるのだろうか。壮年の社会的責任との関連でこの問題を考えてみよう。	同上
6	老年	20代以降、70～80才代に到るまでに、我々の記憶力、知能テストで測る知力等はどう変化するのだろうか。記憶力は年と共に衰えると言われるが、具体的にどのような変化があるのか。多くの実験結果を概観する中で、考察してみたい。	星薫（放送大学助教授）
7	人間と人生	これまで6章にわたって人生各期の特徴を概説してきたが、本章は人生経過を全体として概観し、年齢の推移と共に変化する社会的な地位と関係づけながら、人生経過における人格特性の形成・変化の過程を考えてみよう。	宮川知彰

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	発達心理学とは	発達心理学について、ヨーロッパ特にドイツとアメリカとでは、異なった視野・観点をもっているように思われる。この点を紹介するとともに、発達心理学はいかなる科学であるべきかについて考えてみる。	宮川知彰
9	動物における心理発達	進化の過程において、いかにして心理が発生し、また要素的感覚心理の段階から知覚的心理の段階へと発展していったかを考察する。その際動物の生活条件とそこにおける動物の活動に留意してその心理発達を分析する。	松野豊（東北大学教授）
10	動物と人間	人間に固有の心理は社会的起源をもち、媒介的構造をもち、意識性をもって働く、このような人間心理の生物学的前提は何であろうか、また人間の心理はどのような新たな生活条件と活動の下に生まれたのかを考察する。	同上
11	発達心理学のあゆみ	哲学、教育学、心理学、さらに生物学や医学など、隣接する人文・社会および自然諸科学の発展とあわせて、発達心理学が科学としていかに台頭し、その体系を整えるにいたったか、今日までのあゆみと問題点について具体的に検討する。	寺田晃
12	精神発達の研究法	一つの問題を解決するのには、その問題を解決するのに最も適当した方法を創案しなければならない場合が多い。それで発達心理学の領域でも幾多の独特な方法が考案されてきた。本構では、それらのうち基本的なものについて概説しょう。	宮川知彰
13	発達の理論	精神が発達するとはいったいどのようなことを指すのであろうか。そもそも「発達」は何か。この問題について諸家の考え方を概観し、できうれば首肯しうる発達理論を選択するとともに、新しい発達理論の建設の可能性をも考えてみたい。	同上
14	発達と学習	今日の子ども達には、「どうせダメだ」という悲観的な「発達観」に囚われている者が多いのではなかろうか。本講では、発達と学習との関連についての諸家の見解を概観して、「やればできる」という積極的な発達観の形成に寄与したい。	野呂正（宮城教育大学教授）
15	発達と障害	障害児とはどのような子どもか、その定義と類型、診断・判断の技法を、医学・生理学、社会学、教育学などの知見を含めて総合的に解説する。	大山正博

＝発達心理学Ⅱ＝（TV）

〔主任講師：宮川知彰（放送大学教授）〕

全体のねらい

人間の心理－行動は、一般心理学では、感覚・知覚・記憶・思考・言語等々というふうに、要素的な領域にわけて考察されている。発達心理学Ⅱでは、これにならって、人の心理－行動の発達を、上記のような要素ないし領域ごとにみてゆき、教育において発達心理学の果すべき役割について考えてみたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	身体の発達	人の身体とその運動能力の発達過程や性的成熟の過程を概観し、あわせて「発達加速現象」について考えてみる。	宮川知彰（放送大学教授）
2	知覚と記憶の発達	人間の知覚や記憶の機能がいかに形成され、その後それがいかに変化していくのかについて考えてみたい。	星薫（放送大学助教授）
3	思考の発達	動作を伴うことなしには困難な問題解決から視点が「中心化」してしまう表象での思考、具体的状況に拘束される論理的思考を経て純粋に抽象的、演繹的に展開できる思考へと発展する思考の発達特徴を概観する。	野呂正（宮城教育大学教授）
4	言語の発達	信号体系の中での言語、話しことばと書きことばの発達、言語と思考との関係、言語の行動調整機能の諸問題について発達的に考える。	同上
5	感情の発達	感情・情緒・情操とよばれる心理－行動の形態が発達するとはどういうことかについて検討して「情操教育」のあり方を考えてみたい。	宮川知彰
6	動機づけと教授・学習	動機づけとは精神的諸活動がどんな状態にあることをさすのかを説明すると共に、特に教授・学習が発達的にいかなる動機づけの過程で成立するのか、ならびに内発的ないし外発的な動機づけの手だてを中心として、教授・学習の有効なあり方について検討する。	寺田晃（東北大学教授）
7	物との交渉の発達	人間は、基本的には、物の世界と人の世界という交差する2つの世界の中で発達していく。ここでは、とくに、物の世界との関わりに焦点をあて、子どもが、それをどのように支配していくかということを発達的に考える。	野呂正

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	社会性の発達	「社会性」とは何か、また「社会性」の発達とはどういうことかを検討して、その発達過程のあるべきすがたを考えてみよう。	宮川知彰
9	愛着と分離	人の世界、とくに、ここでは、「愛着と分離」ということで特徴づけられる母子相互交渉に焦点をあて、動物研究の新しい知見をも参考にしながら、その世界の中で、子どもがどのように発達していくか、また、発達のつまずきについて考える。	野呂正
10	遊びと精神発達	物と人とが交差する典型的な世界としての遊びの中で、子どもたちは、何を、どのように発達させていくかについて考える。	同上
11	知能と創造性	知能とは何か。知能の概念の変遷や知能測定の方法とその限界、さらにさまざまな認知機能の発達を概観し、そのうえで創造性との関係を考えてみよう。	柏木恵子（東京女子大学教授）
12	成熟と学習	学習の適期の問題を、とくに、ここでは、成熟と学習との関係という点からとらえ、その中で、伝統的なレディネス観のとらえ直し、そして新しいレディネス観の創造について考えてみる。	野呂正
13	自己意識の発達と性格形成	自己をどう認知し、自己像をどう作っていくか、自己概念による人格形成、そして他律から自律への道すじと社会とのかかわりについて、概観する。	柏木恵子
14	発達診断	発達診断とは何かの定義と発達診断に関する諸理論を説明すると共に、具体的に身体と運動機能・知的能力・人格・学力・適性などの精神的諸機能の発達に関する測定と評価、ならびに発達障害の臨床的な診断・判断の方法と技術、問題点などについて解説する。	寺田晃
15	発達心理学と教育	発達心理学ないし発達理論が「教育」にいかなる点でどのような貢献をなしうるかまた「教育」に貢献しうる発達心理学ないし発達理論とはいかなる学問であり理論であるのかについてみたい。	宮川知彰

＝学　習　心　理　学＝(TV)

〔主任講師：小口忠彦（放送大学教授）〕

全体のねらい

学習心理学が、人間にとって、どのような役割をしめるか、ということが全体としてのねらいになっている。したがって、「家庭」、「学校」、「社会」がかかわっている。実験的研究、実験的事例などをできるだけ多く取り入れるようにする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	学習心理学の概要	学習心理学における「学習」とはどのようなことであるか、を中心として、学習心理学の役割や構造などを述べる。	小口忠彦（放送大学教授）
2	学習と発達	「学習」と「発達」とが、車の両輪として、相互に補い合う相互補完性（相補性）のもとに成立していることを述べる。	同上
3	学習と目標	学習には、意図的学習と偶然的学習とがある。このことを、目標とのかかわりという点を中心として述べる。	同上
4	学習の方向	学習には、望ましい方向への学習もあるが、望ましくない方向への学習もふくまれている。この点を中心として述べる。	同上
5	学習の成立(1) －古典的条件づけ－	「条件づけ」ということによって、学習が成立することを、古典的条件づけを中心として述べる。	同上
6	学習の成立(2) －道具的条件づけ－	「条件づけ」ということによって、学習が成立することを、道具的条件づけを中心として述べる。	同上
7	学習の成立(3) －認知構造の変化－	認識構造の変化によって、学習が成立することを述べる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	学習と外発的動機づけ	「動機づけ」について、外発的動機づけを中心として述べる。	小口忠彦 （放送大学教授）
9	学習と内発的動機づけ	「動機づけ」について、内発的動機づけを中心として述べる。	同　上
10	学習と問題解決(1) －模　倣－	学習と「模倣」との関係について述べる。	同　上
11	学習と問題解決(2) －創　造－	学習と「創造」との関係について述べる。	同　上
12	学習と練習	学習と練習との関係について、特に重要な点を中心にして述べる。	同　上
13	学習と転移	学習と「転移」との関係について述べる。	同　上
14	学習と自己認知	学習と「自己認知」との関係について述べる。	同　上
15	学習と個人	学習と個人との関係について、特に重要な点を中心にして述べる。	同　上

＝学習心理学の応用＝（TV）

〔主任講師：小口忠彦（放送大学教授）〕

全体のねらい

学習心理学の応用として、学習指導、学習意欲、思考態力、人格形成（人間形成）、心理療法などの諸問題について、要点を述べる。実験的研究、実験的事例などをできるだけ多く取り入れるようにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	学習指導の概要	学習は、望ましい方向へ進むだけでなく、望ましくない方向へも進むので、「学習指導」全般についての概要と、「学習指導法」についての概要とについて述べる。	小口忠彦 （放送大学教授）
2	学習意欲	学習意欲を高めるには、どのようにしたらよいか。学習を、望ましい方向へ、しかも、自ら進めるためにどのようにしたらよいか、について述べる。	同上
3	思考能力	人間が学習する場合、「思考」は重要な役割をする。しかし、その思考とは何か、その思考をのばすにはどのようにしたらよいか、について述べる。	同上
4	論理的思考	論理的思考をのばすにはどのようにしたらよいか、について述べる。	同上
5	創造的思考(1)	新しいものをつくり出す創造的思考をのばすには、どのようにしたらよいか、特に注意すべき点は何か、について述べる。	同上
6	創造的思考(2)	新しいものをつくり出す創造的思考をゆがめる条件は何か、特に注意すべき点は何か、について述べる。	同上
7	受容学習	有力な学習指導法としての「受容学習」とは何か、について述べる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	発見学習	有力な学習指導法としての「発見学習」とは何か、について述べる。	小口忠彦（放送大学教授）
9	役割演技	重要な学習指導法としての「役割演技」とは何か、について述べる。	同上
10	集団主義	重要な学習指導法としての「集団主義」とは何か、について述べる。	同上
11	自己開発	読書法、生活綴方などをふくめ、自ら自分の可能性を開発しようとする学習指導法について述べる。	同上
12	生涯学習	誕生から老後にいたるまでの「生涯」を、エリクソンの「人生周期」を中心とし、学習指導法について述べる。	同上
13	自己修復	誤りに自ら気づき、自らの力で直す。というのが自己修復であるが、この誤りは、人格（パーソナリティ）にかかわることもあり、複雑になる。この自己修復について、特に注意すべき点は何か、を述べる。	同上
14	学習と心理療法	いわゆる心理療法を、学習との関連のもとで考察する。	同上
15	学習と行動療法	最近になって目立ってきた行動療法を、学習（学習理論）との関連のもとで考察する。	同上

＝認　知　と　思　考＝（TV）

〔主任講師：中川大倫（放送大学教授）〕
星　　薫（放送大学助教授）

全体のねらい

認知あるいは認知心理学は、人間の複雑な行動の背景にある内的過程に深くかかわりをもつ。この内的過程は、これまで大きな影響力をもっていた行動主義が、ブラックボックスとして検討をさけた点である。20世紀後半に至って、情報理論やコンピューターの開発と普及の影響を受けた心理学は、認知に対する関心を強めてきた。このような流れの中で、本講は次のような項目により説述される。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	認　知　と　は	まず、認知あるいは認知心理学の歴史的展開から述べる。とくに、1950年代以降、情報理論、機械システム的考え方、コンピューターの開発と普及等の影響のもとに、人間を情報処理体として類比的にみるようになった最近の認知心理学の動向について述べる。	中川大倫（放送大学教授）
2	刺激の受容とパターン認知	認知は刺激情報の受容から始まる（ボトムアップ処理）。しかし、パターン認知の成立には、経験、知識、動機等の要因の参加が大きな役割をもつ（トップダウン処理）、情報のボトムアップ処理とトップダウン処理の相互作用を中心として、パターン認知を述べる。	同　上
3	記憶の過程Ⅰ	入力情報は保存される。これが記憶である。記憶の過程は認知に大きくかかわりをもつ。その記憶の過程につき、モデルを手がかりとして述べる。まず、入力情報が極めて短い時間保存される感覚記憶につき、視覚、聴覚の領域からその特性について述べる。	同　上
4	記憶の過程Ⅱ	記憶の過程の中で、比較的短い時間経過中に大部分衰退する記憶がある。この種の記憶が短期記憶といわれる。この短期記憶の容量、その衰退過程、その衰退防止のためのコントロール操作、短期記憶とワーキングメモリ、さらに、視覚コードと聴覚コードの関係等について述べる。	同　上
5	記憶の過程Ⅲ	記憶の過程の中で、比較的持続性の長い記憶が長期記憶といわれる。ここでは、短期と長期記憶の関係、長期記憶の永続性、長期記憶と構造、意味的記憶とエピソード記憶、超記憶、証言の問題等について述べる。	同　上
6	記憶の過程Ⅳ	記憶された情報は検索され利用される。この検索過程について説かれた幾つかの理論について述べ、また、記憶情報の衰退と忘却、記憶と動機、記憶の改善についてふれる。	同　上
7	記　憶　と　概　念	我々は、多くの言葉の意味を知っているが、これは言葉の意味を「記憶している」ということに他ならない。言葉の意味は、実に膨大な量から成るわけだが、この意味についての記憶（意味記憶）に関する最近の研究を紹介し、知識の構造について考えてみたい。	星　　薫（放送大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	記憶と言語	人が、読む・書く・話すといった手段によって言語を自由に操れるのは、その背景に言葉に関する膨大な知識を記憶の中に貯えているからである。この、知識構造研究の枠組の中で、言語理解について考えてみよう。	星　薫
9	思考と記憶	言語理解の過程で、人は明言されたことだけから、内容を理解するのでなく、明言されていない事柄を推論によって埋めていくことで、理解を進める。推論は、明言された情報と自分の知識構造とにもとづいてなされると考えられるが、人間が実際にどのような推論のプロセスをたどるのかをみていくことで、人間の思考過程について考えていきたい。	同　上
10	イメージと認知	イメージの特徴は何か。われわれはイメージの大きさ、形、角度等を認知することができる。では、イメージと知覚との関係はどうか。また、イメージと記憶の関係はどうか。イメージは記憶再生に有効であるといわれる。さらに、認知地図の問題にもふれる。	中川大倫
11	推理と理解	帰納的推論と演繹的推論における。人間がおちいりやすい誤りを中心に、その背後の心的プロセスについて説明する。また、日常言語における推論にも焦点をあて、会話を通した推論のスキーマやスクリプトなどについても論じる。人工知能との関連にもふれる。	佐伯　胖（東京大学助教授）
12	問題解決と理解	問題解決過程の研究の歴史、とくに、方略研究から知識表現への移行を説明する。具体的には、算数の文章題理解、計算、などの誤解やエラーの分析から、物理の単純な問題の中にふくまれる日常生活的知識との関連を中心に、最近の認知科学の成果を紹介する。	同　上
13	認知の個人差	ここでは、事象の認知における個人差の問題を取り上げる。とくに認知スタイルなどを中心にして個人差の生じる諸次元について考察する。	山口　勧（東京大学助教授）
14	社会的認知	ここでは、とくに社会的事象や人についての認知がどのように行なわれるかを考えることにする。対人認知・社会的認知のバイアス・認知の斉合性などについて解説する。	同　上
15	認知のコンピューターシミュレーションと人工知能	認知に代表される人間の高次情報処理機能はきわめて複雑な構造的特性を備えているので、その研究のためにコンピュータ上に模型を組み、シミュレーションを行なうような人工知能的方法が有力な手段となる。2、3の例をあげて入門的解説を行なう。	戸田正直（中京大学教授）

＝人間関係論＝（TV）

〔主任講師：三隅二不二（奈良大学教授）〕

全体のねらい

人間関係の三つのレベル、則ち対人関係、集団・組織、文化のうち集団・組織に重点をおく。集団力学として、集団規範の形成、同調と逸脱、競争と協同のダイナミックス等、又、組織の人間関係として、小集団活動、リーダーシップ、意思決定について述べる。実践面としては教師のリーダーシップ、事故災害予防と人間関係に及ぶ。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	人間関係の科学	1. はじめに人間関係ありき "こころ"の発生/自己の他者 2. 新日本人と人間関係 欲求体系の中心転換/新日本人の誕生/主座欲求と周辺欲求/これからの人間関係/行動科学	三隅二不二 （奈良大学教授）
2	対人関係	1. 対人関係と利得 利得関係/利得行列の変換/公平の原理 2. 対人間関係の発生と抑制条件 援助行動/責任分散仮説/不安と対人関係	同上
3	家族の人間関係	1. 家族関係への新しいアプローチ 家族心理学とは/レヴィンの先駆的考察/研究の歩み 2. ファミリー・カウンセリング 家族関係のダイナミックス/家族危機/家族アセスメント/基本的な前提/援助の4段階 3. 家族教育～家族への心理ー教育的方法	岡堂哲雄 （文教大学教授）
4	グループ・ダイナミックス	1. 人間関係の基礎科学と実践科学 グループ・ダイナミックス/民主型指導と専制型指導 2. 実践科学としての集団行動学 集団治療学/感受性訓練 3. 総合集団科学としてのグループ・ダイナミックス 4. 集団科学のパラダイム わが国での研究	三隅二不二
5	同調と逸脱	1. 個人主義と集団主義　わが国の研究 2. 同調行動の生起　ミルクラムらの通行人の実験 3. 知覚判断における同調 シェリフによる「自動運動」実験 4. 個人に対する集団圧力 アッシュによる知覚判断の実験/集団としての同調機能	同上
6	競争と協同	1.競争と協同の概念　2.競争と協同ー集団内競争と集団間競争　3.ゲーム場面を通しての競争と協同ーPDゲーム　4.小集団協同学習と偏見の低減：ジグソー技法ージグソー技法　5.集団間葛藤の軽減の試みー内集団の実験的形成/集団間葛藤の生起/集団間葛藤の軽減/その他の方策　6.競争と協同の活用ー競争に必要な配慮/協同の活用	古畑和孝 （東京大学助教授）
7	偏見の心理	1.はじめに　2.偏見ー偏見とは/ラベリングとステレオタイプ/ステレオタイプの自己充足的機能　3.偏見の心理的メカニズムー権威主義的パーソナリティ/スケープ・ゴート説/反応増幅仮説/誤った関連づけ　4現代における新たな偏見ースティグマとしての病気/バイオテクノロジー時代のマイノリティ 5.偏見の解消をめざして	白井泰子 （信州大学助教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	リーダーシップ	1.はじめに－人物よりも行動様式　2.リーダーシップのタイプ分け－慣用類型の限界/リーダーシップPM概念/リーダーシップPM4類型/リーダーシップPM論の実験/PM型が最上/実験の結果/Mでは期待に答えられない/PM型効果はPとMの相乗作用/PM行動と創造性/達成動機の高い部下が高度のリーダーシップを求める。	三　隅　二不二
9	意　思　決　定	1.　個人の意思決定－ジャニスとマンのモデル 2.　集団の意思決定 集団決定法/組織における参加的意思決定/複雑な参加の効果/勢力格差と参加/参加的意思決定が適合する状況	同　　上
10	職場の人間関係(1)	1.　はじめに　2.　近代的組織としての官僚制 インパーソナルな人間関係 3.　小集団の発見 ホーソン工場での疲労実験/小グループの連帯意識 4.　ヒューマン・リレーションズの時代 モラール・サーベイ/職場満足度の2つの要因/職場小集団の連帯感が活力源泉	同　　上
11	職場の人間関係(2)	1.　職場におけるリーダーシップの研究 第一線監督者行動の2つの研究 2.　職場でのPM行動を測る－測定の「ものさし」をつくる/先入観なしの質問項目収集/P行動・M行動の測定尺度/PM4類型への分類　3.PM4類型を吟味する－PM類型と仕事満足度　4.PM類型とチーム・ワーク－PM類型と集合会合/PM類型と精神衛生	同　　上
12	教師と児童・生徒の人間関係	1.　はじめに－新しいインセンティブ・システム 2.　教師のリーダーシップ－教師のリーダーシップ測定項目/教師評定の測定結果 3.　中学教師のリーダーシップ 4.　リーダーシップ(指導力)評定尺度の妥当性 5.　調査の結果	同　　上
13	災害・事故と人間関係	1.はじめに　2.自然災害と人間関係　3.緊急事態のリーダーシップ　4.緊急脱出時の避難誘導法－指差誘導法/吸着誘導法/吸着誘導法の有効性/吸着誘導法の避難誘導プロセス/誘導者と避難者の人数比による制約/指差誘導法と吸着誘導法の併用の有効性　5.人為災害・事故予防の集団決定－バス運転士の事故防止と集団決定　6.集団決定の効果　7.その後のアクション・リサーチの展開	同　　上
14	ゲーム理論と人間関係	1.実験ゲーム研究－マトリックス・ゲーム 2.ディレンマ・ゲーム－マトリックス型ディレンマ・ゲームの実験/ディレンマ・ゲームの方略構造/個人合理性/社会的ディレンマ/集団合理性 3.ディレンマ・ゲーム研究の展開－競争性の発達/木こりゲーム	戸　田　正　直 （中京大学教授）
15	日本人の人間関係	1.第一の特色　2.義理人情－義理人情スケール/義理人情という考えの筋道 3.中間的な回答　4.人間関係をさぐる諸方法 計量的方法/文化人類学的方法/その他の方法	林　　知己夫 （放送大学教授）

＝ パーソナリティ論 ＝ （ＴＶ）

〔主任講師：小口忠彦（放送大学教授）〕

全体のねらい

心理学におけるパーソナリティ論で、解決を求められていたのは、従来としては、「知能＋性格」としての「よせ集め」の点であった、とまとめることができる。

この点を中心として、解決の方向づけを試みたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	パーソナリティとは	1 人間のこころ 2 パーソナリティの翻訳 3 パーソナリティの定義 4 パーソナリティの研究	小口忠彦（放送大学教授）
2	生産性と防衛性	1 生産性ー防衛性という側面 2 生産的方向 3 防衛的方向 4 開いたこころ・閉じたこころ	同上
3	社会化と同化	1 社会化ー同化という側面 2 時間的変化 3 場面的変化 4 病理現象 5 適応範囲	同上
4	正常と異常 Ⅰ	1 異常の状態 2 異常の根拠 3 異常から正常へ	同上
5	正常と異常 Ⅱ	1 正常の状態 2 正常の根拠 3 正常と成熟 4 正常の段階	同上
6	自己修復	1 自己修復 2 自己修復の異常 3 自己修復の正常 4 自己修復の限界	同上
7	自己実現	1 心理学の弱点 2 心理学的研究 3 自己実現	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	自己	1 自己と自我 2 決定主義 3 上昇傾向 4 自分を知る	小口忠彦
9	基本的人格構造	1 集団のパーソナリティ 2 基本的人格	同上
10	人格類型	1 方法論 2 類型論 3 特性論 4 価値観	同上
11	性善説	1 人間の本性 2 創造性 3 集団の力	同上
12	性悪説	1 性悪説 2 死の本能 3 欲求不満―攻撃仮説 4 犯罪	同上
13	非性悪説	1 非性悪説 2 ロジャーズの立場 3 マズローの立場	同上
14	矛盾説	1 矛盾 2 矛盾の根拠 3 矛盾説	同上
15	人格心理学	1 人格心理学 2 心理学の領域 3 心理学の総合	同上

＝臨　床　心　理　学＝（R）

〔主任講師：村瀬孝雄（立教大学教授）〕

全体のねらい

1. 異常心理学の全体像、基本的考え方、およびそれらとの関連においてとらえられた代表的病理と現代的病理について述べる。　2. 上述のような諸病理に対して、心理学的な援助・介入の考え方と技法およびその成果について紹介と考察を行う。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	異常心理学の全体像と基本的な考え方	臨床心理学の定義に触れ、次に主要な特性について簡単な解説を試みる。①対象は広義の心の不健康、不適応など広範囲におよぶ②実践的技術学③臨床的態度④体系性はゆるやか⑤学術的であり文化拘束性が高い。臨床家の役割と貢献および臨床心理学の歴史について短く述べる。	村瀬孝夫（立教大学教授）
2	a　神経症圏の中の中心的病理 b　犯罪心理学	神経症の定義と下位分類、診断と治癒の実際について：対人恐怖とヒステリー患者を例に用いて解説するとともに、不安、防衛、自我の強さ、性格障害の概念と反社会的性格、精神鑑定の実際についても述べる。	福島　章（上智大学教授）
3	精神病圏の代表的精神病理とくに精神分裂病と躁うつ病の心理	精神病についての最も基本的な理解のための解説を行いあわせて、精神分裂病と躁うつ病の精神病理、分裂病者、躁うつ病者への対応に際して留意すべき心理学的配慮についても解説する。	吉松和哉（東京都精神医学総合研究所）
4	臨床心理学的アセスメント(1)	臨床心理学の立場から病理的現象と病者に対して行う援助的介入を展望するとともに、アセスメント（評価、査定）について、その本質と目的を中心に、総論的考察を示す。	村瀬孝夫
5	臨床心理学的アセスメント(2)	アセスメント面接の目的と特異性、面接にあたっての留意点、初回面接の重要性と実例解説をし、さらに臨床面接の信頼性と妥当性についても述べる。	同　上
6	臨床心理学的アセスメント(3)	臨床心理検査法をその特殊性を中心に概観しさらに、検査法の分類と評価、活用上の留意点と戦略について解説する。	同　上
7	臨床心理学的アセスメント(4)・1	ウェクスラー式知能尺度の基本的考え方と特性を述べるとともに、この検査の解説と実用性にもふれる。また質問紙の一般的特質、効果と限界、代表的な質問紙検査（YG、MPI、GHQ）についても解説する。	伊藤研一（大正大学講師）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	臨床心理学的アセスメント(4)・2	投映法の特質と分類を解説するとともに、とくにその代表的技法としてロールシャッハ法および樹木描画法（バウムテスト）の説明をし、実例を示す。	村瀬孝夫
9	臨床心理学的アセスメント(5)	アセスメントの解釈とは、仮説をつくり上げる力であることを説明し、この仮説と現実との交流、総合的所見の重要性と困難性検査報告について解説する。	同上
10	心理療法とは何か	原点としての精神分析療法を粗描した後、心理療法の一般的条件と諸種の立場を、4つの流れに大別して概観するとともに心理療法の典型的過程について、一つのモデルを示して解説を行う。	同上
11	精神分析	精神分析のもっとも基本的な人間理解の特質として、無意識仮説、心理・性的経験の重視、幼児期の重視をあげて解説し、次いで、この療法の技法と過程について、実例に即して説明する。	同上
12	来談者中心療法	アメリカ生まれのいくつかの立場では、現在の治療者、患者関係を生きること、それ自体をもって治療的とみなした。治療者の提供する成長促進的態度について述べるとともに個人が自己の内的な体験過程にフォーカスする技法を用いる立場の解説もする。	同上
13	行動療法	行動主義心理学の立場から、完全に客観的にとらえられる行動を、学習心理学の実験的成果にもとづき、強化やモデリング等の技法を用いて変容しようとすることを解説する。	小林重雄（筑波大学教授）
14	森田療法と内観療法	日本で生まれ発展してきた全く独自の治療法が森田療法と内視法であり、この両者のよって立つ人間観や、目指す治療像は、基本的共通性をもつが、具体的手続きは全く対照的である。これらのことについて、ややくわしく解説する。	村瀬孝夫
15	社会心理学的接近と臨床心理学	異常心理の改善には、治療者と患者間の一対一の関係を活用するだけでなく、集団が成員におよぼす強力な影響力を活用する立場や技法が近年急速に発展してきた。これとは別に、生態心理学的観点からの環境調整などについても説明する。	山口勤（東京大学助教授） 村瀬孝夫

＝カウンセリング＝（R）

〔主任講師：佐治守夫（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

カウンセリングについて、その基本的な理論と、実践上の技法を学ぶことを目標とする。そして歴史的な過程をも含めて、今までの著名な理論家達の考え方を紹介し、同時にカウンセラーの態度実践上の倫理的問題、社会からの要請、訓練の方法などにもふれる。事例を適宜、挿入することで理解をふかめる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	カウンセリングとは何か（序論）	カウンセリング、心理治療、さらに広く、人間援助の方法を概観し、このような領域が現在ますます注目されつつある状況を考える。家庭内の問題、子どもの発達と教育にかかわって、学校での問題、職業、職場にかかわる問題などなど。事例(1)、登校拒否	佐治守夫（日本・精神技術研究所・心理臨床センター所長）（東京大学名誉教授）
2	カウンセリングの定義(1)	カウンセリングの定義は、後にのべる様々の理論によって微妙なちがいがある。ここでは、かなり包括的に、今日通用している定義についてのべる。	同上
3	カウンセリングの定義(2)	カウンセリングの定義(1)をふまえて、様々な立場で特に強調される諸点をとりあげて評説する。カウンセリングは、そのように立つ、パーソナリティ理論と切りはなせないこと、人間の成熟、健康についての考え方と密着していることものべる。事例(2)	同上
4	望ましい特殊な対人関係		同上
5	心理療法の展開(1)	力動精神医学の黎明とその展開。フロイト精神分析が生まれるまで ・メスメルと動物磁気術 ・シャルゴとジャネーその後の展開	同上
6	心理療法の展開(2)	ブロイェル Breuer J.の除反応(Abreaction)の理論とフロイト Freud S. ・フロイトの基本的理論 ・自由連想法	同上
7	心理療法の展開(3)	フロイトの基礎的な発見とその理論 ・抵抗と抑圧 ・不安と防衛 ・性的衝動 ・精神力学	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	フロイト以後の展開(1) —特にユングを中心として	・フロイト補遺 ・ユング Carl Gustav Jung 1875～1961：ユングのコンプレックス 自我と自己 ego self と 真の自我 real self　・全体的自己 Whole self ・投影及びその他の症状・集合的、普遍的無意識	佐治守夫
9	フロイト以後の展開(2)	・ユングの精神療法 ・新フロイト派（Neo-Freadian）	同　上
10	ロジャースの貢献 —クラインス中心療法—		同　上
11	ロジャースにおける治療関係の意味	・治療によるパーソナリティの変化 ・変化したパーソナリティの特徴 ・パーソナリティ変化の条件の検討	同　上
12	ロジャースにおける治療的変化の仮説と理論の特徴	この理論で取りあげられなかったもの	同　上
13	治療的面接（カウンセリングの実際(1)	事例を取りあげる意味と、その際の注意について ・事例の概要 ・最初の面接に至るまでの接触の重要さ ・第1回目の面接、沈黙と砂場の作品	同　上
14	治療的面接（カウンセリングの実際(2)	第1回目の面接、沈黙と砂場の作品 ・2回目以降のサボテンの意味ある出現 ・3回目から5回目のキャンセンまでサボテンを通じての関係のふかまりと、その結果としての治療者介入の失敗・5回目のキャンセルをめぐって	同　上
15	治療的面接（カウンセリングの実際(3)	クライエントの陰性転移感情、両向性感情にどのように共感し、対応することができるか、あわせて治療者の反対転移について	同　上

＝深　層　心　理　学＝　(R)

〔主任講師：織田尚生（放送大学助教授）〕

全体のねらい

無意識の構造に関する講義をおこなう。この際講義内容が単なる知識としてでなく、生きた体験として身につくように配慮する。深層心理学の二大潮流であるフロイトとユングのうちで、主としてユングの学説に従って話を進めるが、フロイトの説との関連性にも留意する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	無意識の心理学	フロイトとユングがいかにして無意識の存在に気づくようになったか。その研究史について述べる。	織田尚生（放送大学助教授）
2	自我とコンプレックス	自我の機能、さらには自我がコンプレックスの存在によっていかに強く影響を受けるかを考える。	同　上
3	コンプレックスの解消	コンプレックスが解消される過程について、心理療法の実際に触れながら解説する。	同　上
4	イメージと象徴	深層心理の内容と密接に関係し、また重要な機能をもつイメージと象徴について、例をあげて考える。	同　上
5	夢とその特性	無意識の生み出したものである夢を取り上げ、そのさまざまな特徴について検討する。	同　上
6	夢の分析	心理療法の技法としての夢分析について、わかりやすく解説する。	同　上
7	父と母の原型	親のイメージを検討することによって、普遍的無意識とその内容である元型について述べる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	影の心理学	個人の心理のみならず集団の心理を理解する場合の鍵概念になる。影(shadow)の問題を論じる。	織田尚生
9	ペルソナとこころ	ユングのペルソナという概念を取り上げて、人間の外的および内的適応について検討する。	同上
10	心の中の異性	人間の心理的な成長のために、心の中の異性(アニマとアニムス)の発達が大切であることを述べる。	同上
11	自我と自己	意識の中心をなす自我が、無意識の深層から自己によって統禦されている点を論じる。	同上
12	個性化と布置	ユングの考えた心の成長過程である個性化について解説し、心的危機における布置と共時性の問題にも触れる。	同上
13	イニシエーションとコスモロジー	深層心理学と文化人類学(象徴人類学)や比較宗教学との学際領域の問題として、イニシエーションと心理療法との関連性について論じ、さらに内的なコスモロジーの意義にも言及する。	同上
14	神話と昔話の心理学	元型的モチーフの表現としての神話と昔話の重要性について述べ、前章について心理療法とコスモロジーとの関係を研究する。	同上
15	日本人の深層	ユングの分析心理学の視点から、日本人心性、特にその集団志向性と中心志向性について述べる。	同上

＝文化と精神発達＝ (R)

〔主任講師：小口忠彦（放送大学教授）〕

全体のねらい

精神発達は、文化によって影響されるが、その文化は、逆に、精神発達によって影響される、という仕組みになっている。こうした仕組みを前提にし、精神発達の望ましい発展についての考察を試みる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	文化とは何か	1 文化の存在 2 文化と文明 3 文化の向上	小口忠彦 （放送大学教授）
2	文化の機能性と構造性	1 構造的側面 2 機能的側面	同上
3	文化の生産性と防衛性	1 労働と余暇 2 ユーモア	同上
4	文化の特殊性と普遍性	1 共感の基礎 2 創造の機能	同上
5	精神発達Ⅰ －人類の立場	1 知性と徳性 2 自由・平等・博愛 3 個人主義と集団主義	同上
6	精神発達Ⅱ －日本人の立場	1 長所と短所 2 矛盾と解決	同上
7	精神発達Ⅲ －個人の立場	1 個人と人間 2 人格的活力 3 人間の生涯	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	未開社会と精神発達	1. 思考様式 2. 言語体系 3. 前論理的 4. 未開心性	小口忠彦
9	文明社会と精神発達	1. 社会状況 2. 精神状況 3. 精神発達	同　上
10	乳幼児期と文化	1. 人間の能力 2. 自分と仲間 3. 素質と環境	同　上
11	青年期と文化	1. 青年文化 2. 青年期の根拠 3. 青年期の問題	同　上
12	老年期と文化	1. 高齢化社会 2. 生きがい 3. 新しい文化	同　上
13	欲求と文化・Ⅰ	1. 特殊な生産性 2. 日本的準拠枠	同　上
14	欲求と文化・Ⅱ	1. 文化と笑い 2. 人間と笑い	同　上
15	文化の模倣性と創造	1. 人間の問題 2. 正常の問題	同　上

＝乳幼児の健康と心理＝（TV）

〔主任講師：平井信義（大妻女子大学教授）〕

全体のねらい

児童学pedologyの立場、子どもを心理学、教育（保育）学、保健学、文化論、障害児論（精神衛生）などさまざまな分野から研究しながらそれらを総合する立場から、とくに子どもと直接触れ合うなかで、子どもから学ぶ（禅の言葉：三尺の童子を拝す）姿勢で研究したわれわれの成果を中心に、からだと心の問題を講ずる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	人格形成の理論と人間関係	発達的観点と教育的（治療教育的）観点に立って人格構造論および形成論を総括してみると、からだは心の環境であり、心すなわち人格は自発性と自己統制の能力を柱にしており、後者は思いやり（共感性）が育つことによって形成されているという結論に達した。	平井信義（大妻女子大学教授）
2	自発性（とくに意欲）の発達と育児・保育	自発性の発達に伴って意欲がさかんとなり、いきいきと遊ぶ子どもになるが、そのためには、いたずら（探索活動）、おどけ・ふざけ、反抗、けんかなどが大きな意味をもっているが故に、それらを抑圧しない育児・保育をいかに実現したらよいかを論ずる。	同上
3	共感性（思いやり）の発達と育児・保育	思いやり（共感性）とは、相手の立場に立って相手の気持を汲む能力であるが、それは、大人（とくに母親）から思いやりを受けることによって発達する。それ故に、いかに思いやりのある母親になるための努力をしたらよいかを、育児・保育の具体性の中で述べる。	同上
4	言語発達・社会性の発達と育児・保育	言語発達には個人差が著しく、それは素因にもとづく面もあるが、乳幼児期の母子関係と密接な関係がある。また、社会性には友人関係の発達と生活習慣の自立があげられるが、前者は情緒の安定と自発性の発達と密接に関係している。後者は、決して急がないこと。	同上
5	知的発達と育児・保育	知的発達には個人差が著しく、それは素因による面もあるが、発達速度が関係していることを考慮すべきである。知能テストによって測定しようとする試みもあるが、誤りを犯しやすい。また、知的な面を優先させて育児・保育をすると、人格形成のゆがみを作る。	同上
6	身体発育・運動機能の発達と養育・保育	身体発育には個人差が著しく、それは栄養の条件によることもあるが、多くは素因にもとづくから、良否の評価は慎重でなければならない。また、運動機能の個人差は運動の機会が十分に与えられているかどうか、困難に挑戦する意欲が養われているかどうかと関係する。	同上
7	家族関係と育児・保育	家族関係は、子どもの人格形成に及ぼす影響が大きく、夫婦関係が調和しているか否かが母親の育児を左右するし、さらに年寄りが同居している場合には、姑嫁の関係が母親の育児に影響する。また、年寄りの孫に対する態度も、人格形成を左右することがある。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	集団保育―幼稚園と保育所	集団保育の中で、とくに幼稚園と保育所の問題を取り上げ、両者のちがいを述べ、とくに保育内容や方法について、子どもの自発性(意欲)と思いやり（共感性）とを育てる望ましい保育について述べ、さらに小学校教育との相違について明確にする。	平井信義
9	児童福祉の理論と実践	児童福祉には、健全育成の面と、心身に恵まれない子どもに対する保育・養護の面とがある。そのための施設およびその運営と理論的背景について講ずる。なお、世界で最も理想的養護施設であるＳＯＳ子どもの村での実践とその考え方を紹介する。	同上
10	児童と環境、自然・文化財・社会環境	児童を取り巻く環境、とくに自然、それに代る児童遊園、文化機（遊具、玩具、ＴＶ、ラジオ、絵本その他多数）について望ましいものを紹介するとともに、地域環境がどのように子どもの心身の発達に影響を及ぼしているか、われわれの研究を紹介する。	同上
11	問題（こころとからだ）の早期発見と医療・治療教育・福祉(1)	心身に問題をもっている子どもには、弱視（盲）児、難聴（ろう）児、言語障害児、肢体不自由児、病虚弱児、精神薄弱児、情緒障害児などがいるが、それらについて早期発見と早期療育の現状について述べ、今後の療育のあり方について考想を語る。	同上
12	問題（こころとからだ）の早期発見と医療・治療教育・福止(2)	とくに心に問題のある子どもについて、さまざまな問題行動の原因と治療方法を述べ、とくに人格形成上のゆがみが育児・保育によって生じており自発性の発達不全や情緒の不安定によることを述べ、治療の方法としてとくに遊戯療法を紹介する。	同上
13	思春期問題から見た乳幼児期	思春期以後の子どもの問題、例えば登校拒否、学習意欲の喪失、神経症、心身症、自殺企図、家出・非行などはすべて人格形成上のゆがみと考えてよく、その萌芽はすでに乳幼児期にある。その早期発見と対策について述べ、予防するための育児・保育を考える。	同上
14	文化人類学と国際比較から見た育児	文化人類学は、とくに未開社会の研究によって、親子関係や育児および人格形成について、豊富な提案を行ってきた。また、育児や教育についての比較も、わが国の育児や教育を考える上でさまざまな示唆を与えてくれた。それらを紹介しながら、今後の育児を考える。	同上
15	乳幼児をめぐる現代の問題点	現在、世界に起きている子どもの問題のトピックスを紹介する。例えば、アフリカなどの子どもの飢餓状態、アメリカで増加している親に虐待を受けている子どもたち、欧米での育児法の180度の転換、わが国にのみに多発している登校拒否などについて原因を考える。	同上

＝児童の心理と教育＝（R）

〔主任講師：東　　洋（白百合女子大学教授）〕

全体のねらい

精神の発達と、教育および社会環境的諸要因との相互作用を概説し、知能、学力、情意に関し最近数年間に急速に集積しつつある研究成果の分析に立って、発達と教育とに関する通説の若干を批判的に検討する。特に知的発達と自我の形成の問題に力点を置き、心理学を勉強しようとする者に発達・教育的視点を、又、教育に関心を持つ者に心理学的視点を提供することを目的とする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	子どもの精神発達をどうとらえるか	講座の導入として、子どもの精神発達についての概念。（特にそのさまざまな考え方について）	東　　洋（白百合女子大学教授） 永野重史（国立教育研究所第3研究部長）
2	最初の一年	active な反応の発達、環境との相互作用、道具への反応などの問題も含む。	永野重史
3	親と子	出生前後から子どもへの期待、母性意識の形成、母子相互作用、愛着の形成、母親の仕事。	東　　洋
4	言葉の誕生	ジェスチュアや喃語からどのように形式的な面と機能的な面との両面において言語が発達するか。	永野重史
5	知的能力、その概念と最近の研究	知能とはどういうものか。その知能検査と意味。	東　　洋
6	子ども時代の始まり	赤ちゃんと子どもはどう違うか。子ども時代の発達課題。	永野重史
7	表象能力の発達	イメージの世界、イメージによる思考。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	言語と思考	言語と思考、言語発達における問題や異常。	永野重史
9	論理的思考と知識構造	表象的思考から具体的概念的思考を経て論証的な思考の能力が形成されるまで。	同上
10	子どもと友達	自己中心性からの脱却、競争と協力、友達関係のひろがり。	東洋
11	行動基準の形成と発達	社会は、その社会の成因としての行動の型を各個人について形成していく。つまり社会化の働きをもつ。この社会化の働きを行動の基準の形成との関係で考えてみる。	同上
12	自我の発達	依存から独立へ、心理的離乳の問題、児童期の精神衛生。	東洋
13	子どもから大人へ	１１、１２歳（小五）の段階での論理的思考力の発達や、社会関係、情緒面での諸問題	永野重史
14	教育と発達	課題によって、その学習に適切な発達上の時期があるという考え方の紹介と、それを教育上どう考えるか。	永野重史
15	健康な精神発達をたすけるために	すこやかな精神発達を助けるためにどういうことをすべきか。	東洋 永野重史

＝ 青 年 の 心 理 と 教 育 ＝（R）

〔主任講師：宮川知彰（放送大学教授）〕

全体のねらい

青年期が人生経過の中で　また人の精神発達において、どのような役割・課題・意義をもつかをさまざまな視点から検討し、青年のための教育がどうあるべきかについて考えてみる。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	青年期とは ――青年心理学の課題――	青年期の開始期と終期とをどうとらえるか、青年の心理行動は、児童や成人のそれに比べてどのような特徴的な性質をもつか、そして青年心理学はいかなる課題をもつかについて考えてみる。	宮川知彰 （放送大学教授）
2	青年心理学の研究法 －その方法論と方法－	青年を個（会社）として把える立場と一般として（特定の機能などを）把える立場がある。こうした目標の違いによって、この方法論と方法は異なっている。ここでは、その二つの立場と方法を解説し、さらに、個と一般（普通）についての問題点を考察する。	久世敏雄 （名古屋大学教授）
3	青年期のからだと心 －からだとの出合いと性の問題－	身体的成熟（特に第二次性徴の発現）が青年の心理面にどのような影響を及ぼすのか。性的成熟を通して、青年がどのような問題に直面し解決していかなければならないのか。男の子・女の子から男性・女性としていかに自己を確立していかなければならないのか。	福富護 （東京学芸大学教授）
4	進路選択 ――青年の発達課題――	青年期は、複数の進路可能性の中から、自らの進路を決定していく時期でもある。現代の日本社会というしくみの中で、青年達はどのように進路を選択しているのか、青年期の発達課題とのかかわりを通して、その実態と援助のあり方について考察を進める。	片岡彰 （東北大学助手）
5	反抗 ――人生・社会と青年――	青年が自我を確立し、主体的な自己であると努力する過程で、青年の発達を阻害するかの如く青年が認識する既存の権威に対して“反抗”するのはむしろ当然である。青年の権利である健康な反抗と青年の発達との関係を考えてみたい。	佐竹宣夫 （芝浦工業大学教授）
6	友情と仲間 ――青年と集団活動――	青年期に形成される友情は、われわれの生涯にとって極めて重要な意味をもっている。 青年の友情形成と青年の集団活動がどのようにおこなわれているのか、それが青年の発達にとって、どんな意義があるのかを考えてみたい。	佐竹宣夫
7	青年の生活構造 ――学習と余暇活動――	青年期における人格形成にとって特別な重要性を持つ活動として、学習と余暇をあげることが出来る。多くの青年達が高等学校、大学に通う生活を送っている現在、学習と余暇はその生活の中心となる位置を占めている。この二つの活動の意義について考えてみる。	斉藤耕二 （東京学芸大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	今日の女子青年	ライフ・サイクルの変化、出生率の減少、高学歴化などによって女性の就業が増大している。しかし、雇用均等法が施行されても、雇用条件の性差別が解消される見通しもない。こうした就業構造の中で変動する女子青年の職業観、結婚観や性役割観などを考察する。	江川　亮 （芝浦工業大学教授）
9	今日の勤労青年	いわゆる技術革新の進展のもとで、人間労働の単純化、細分化、規制化が進行している。その職場で、単調労働を強いられる青年たちの過酷なまでの心理的・生理的負担の実態を明らかにするとともに、欧米における“労働の人間化”の試みについても触れてみたい。	江川　亮
10	青年の精神病理 －思春期心身症、登校拒否、留年、自殺、性の問題－	青年期には、精神内界の均衡を保ちながらおとな社会に適応できる人格を形成していくことが期待されるが、体の急激な変化や環境刺激がストレスとして作用し非適応状態を招くことがある。ここでは、精神的な病理現象を通して青年の心理について理解を深める。	中村雅知 （東北大学助教授）
11	青年のつまづき －非行・暴力・いじめ－	青年の非適応のもう一つの現れは、他者とのかかわりの領域においてである。非行・暴力・いじめには、活々たる生への意欲と他者への思いやりが失われている。ここでは、逸脱行動を通して、彼らのつまずきと、これへの対処の仕方を考えてみる。	中村雅知
12	青年の活動意欲 －「やる気」・「生きがい」の問題－	現代の青年は、どのような物や事柄に価値を置いて行動しているのか。現代青年の「生きがい」「価値意識」の実態を検討しながら、青年の行動の源泉としての「やる気」「活動意欲」を考察する。	片岡　彰
13	青年文化論 －日本の青年・世界の青年－	現代社会では、青年達は、成人や子供達とは異なった、独自な文化を持っている。この青年文化の特質、心理的機能を検討して、青年期と社会の関係について理解を深める。	斉藤耕二
14	現代の青年論 －アィデンティティアパレル－、etc－	さまざまな視点から展開することができるが、ここでは、その基底となる青年心理の諸理論が構成されてきた道筋として、生物学的、社会的、世代的要因、さらに、コーホートと歴史の要因にふれ、現代の青年論－アィデンティティ、アパレーなどについて述べる。	久世敏雄
15	青年心理学と教育 －青年心理学小史－	青年心理学の成立とその発展の歴史の中でこの学問がこれまでの青年教育において果してきた役割を概観するとともに、今後のこの学問の使命について考えてみる。	宮川知彰

＝障害児の心理と教育＝（R）

〔主任講師：寺田　晃（東北大学教授）〕

全体のねらい

障害児の教育は、人間の尊厳を問い教育の本質にせまるものである。本コースでは、前半に総論として、まずそうした障害児がどんな子どもなのかと診断・判断の方法、研究法を検討すると共に、後半の各論では、障害の類型別に、心理の発達的特徴と教育の方法、福祉の在り方などを一連に考え、障害児への一般的理解を深める。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	障害児とはどのような子どもか	障害児とはどのような子どもか、その定義と類型を主に心理学、社会学的、医学・生理学的な見地から総合的に解説する。障害児は、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、病弱、虚弱、知能、情緒、学業不振、重複障害の各子どもである。	寺田　晃（東北大学教授）
2	障害教育の目的と歴史的発展	障害児に対する学校教育の理念と目的（目標）、普通教育との関係、障害児教育の位置づけとの現状などを述べ、あわせて障害児に関する研究、教育（養護）一般の歴史的なあゆみについて論ずる。	同　上
3	障害児の研究の課題と方法	障害児の病理（身体・諸器官、大脳ほか）、心理（認知、人格、情動ほか）、教育（指導内容と方法ほか）の各分野にわたり、従来の研究とその傾性を概括し、現下の障害児教育・心理の研究の課題性を指摘する。	同　上
4	障害の原因と診断・判断	主に医学・生理学、心理学の見地から、障害児の心身に関する病理と障害の一般的様相を述べ、かつ医学、心理学による測定・評価の方法を説明し、科学的な診断の実際的技法と問題点とを解説する。	同　上
5	発達と障害（Ⅰ）発達の仕組みと機能	発達とは一般にどんな機構と段階を経て展開するものなのかを個体発生の側面から検討し、従来の発達理論を各種紹介すると共に、発達に対処して障害がいかに位置づけられるものであるかを考察する。	同　上
6	発達と障害（Ⅱ）障害児と家庭・学校および社会	発達における親の役割と意義、障害にかかわる家庭的条件、学校教育の意義、学校での行動状況などを考察をもとに、発達と障害の特に2次的な効果を述べ、家庭・学校での教育一般の在り方を検討する。	同　上
7	感覚障害論（Ⅰ）視覚障害児の心理と教育	視覚障害児の身体、認知能力、学習能力、人格、情動、社会的行動などを通じて、視覚障害児の心理的、教育的な発達と特徴を概観し、医学的所見をも加えて、主に盲学校教育の現状と適切化を検討する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	感覚障害論（Ⅱ）聴覚障害児の心理と教育	聴覚障害児（言語障害を含む）の身体と認知能力、学習能力、人格・情動と社会的行動の各発達と特徴を把握し、主にろう学校教育の現状と最適化を考えることにより、感覚障害論をまとめる。	寺田　晃 新谷　守
9	身体・運動障害論(Ⅰ)肢体不自由児の心理と教育	主に医学・生理学、心理学の立場で、肢体不自由児の身体・運動の能力の障害の特徴をとらえ、治療教育ならびに職業的リハビリテーションの現状と養護学校教育の最適化を考える。	寺田　晃 村井憲男
10	身体・運動障害論(Ⅱ)病弱児・虚弱児の心理と教育	前章と同じ立場から、病弱児・虚弱児の身体・運動上の障害特徴、心と身と発達の相互関連性を論じ、健常な状態への復帰をふまえて、養護学校教育の現状と指導の最適化を考察し、身体・運動障害論をまとめる。	同上
11	精神発達障害論(Ⅰ)知能障害児の心理と教育	知能障害児の身体・運動の能力、認知能力、人格・情動ならびに社会的行動の障害特徴を述べ、小・中学での特殊学級、養護学校および施設での教育・訓練・養育の現状と指導の最適化、社会適応等を論じる。	寺田　晃
12	精神発達障害論(Ⅱ)情緒障害児の心理と教育・治療	自閉な傾向、登校拒否、施設症ほかいわゆる情緒障害児の心身の諸特徴を述べ、学校教育での現状と、家庭教育を含めた指導の在り方、教育相談等について考察し、精神発達障害論をまとめる。	大山正博 （東北学院大学教授）
13	学力障害論　―学業不振児の心理と教育	学業不振および学習障害の定義、診断類型を述べ、心理的、環境的な側面からの特徴と不振の原因を指摘し、学校教育での教育相談を中心とした指導の効果、適切な措置の在り方について論ずる。	寺田　晃 仁平義明
14	心身障害児の福祉と生活	障害児の福祉の理念、福祉行政を含む福祉の構造、職員の養成などの形態を考察し、重症障害を中心として、相談指導、通園指導、施設療育、収容保護ならびに統合教育などの実践的問題を、医学、心理学、教育学その他の分野から論ずる。	寺田　晃 大山正博
15	障害児教育の展望	主に第7章から第14章までの各種障害型の特徴を総括し、『“障害児”とは（そして“人間”とは）何か』を論及しつつ、障害児研究と教育の意義ならびに障害児教育はどのようにあったらよいかという今後の問題点を展望する。	寺田　晃

＝言語障害＝（R）

〔主任講師：内須川　洸（筑波大学教授）〕

全体のねらい

ことばによるコミュニケーションは、人間が社会生活上不可欠の機能である。この講座は、この機能に障害を示す人々の諸問題の理解を助けるよう言語障害学をやさしく解説した入門である。(1)言語障害の概説、(2)発達と言語障害、(3)人間関係と言語障害、(4)聴覚と言語障害を主柱として、各種の言語障害とその予防並に改善を論じた。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	言語障害とは	言語障害とは何か。定義の問題をコミュニケーションの立場から考察する。それに基づき８種に分類し、それぞれの言語障害について、出現率、障害の特性・問題点に関する解説を行う。併せて今後１５回にわたる講義聴講に関するオリエンテーションを兼ねる。	内須川　洸（筑波大学教授）
2	言語障害の心理と教育	総論の第１に、人間の心理面から言語障害を考察し、そこに包含される諸側面から理解を深めるため、罰・欲求不満・不安・罪悪感・攻撃性の心理について解説する。さらに我が国の言語障害教育について、発展の経緯・現状・問題点・課題に関して紹介する。	同上
3	言語障害の生理と病理	総論の第２に、ことばの連鎖（チェーン）、すなわち言語の特徴であるフィードバック過程を解説し、その面から障害の発生を考察する。とくに発声・構音・リズムの生理および病理を解説する。さらに言語の中枢過程である象徴機能と大脳の仕組みの概要を述べる。	同上
4	発達と言語障害	総論の第３に、言語の特徴の別の側面、発達について考察し、障害の発生の基礎条件としてのスピーチ・レディネスについて述べる。さらに言語発達に関連する諸要因を器質的・情緒的・環境的の３局面から考察し解説する。また、言語学習の原理をわかりやすく述べる。	同上
5	人間関係と言語障害	総論の第４に、言語機能面に着目して、その４大機能を解説するとともに、特にコミュニケーション機能における考察を深める。言語的・非言語的コミュニケーション、直接的言語関係・間接的言語関係、言語の二大様式、すなわち音声言語と文字言語の特徴を述べる。	同上
6	言語発達遅滞児の理解	今回から言語障害の各論の第１に言語発達遅滞児をとり上げ、その理解を深めるため、発達の診断面を重点的に論じる。遅滞の器質的・環境的・人間関係的諸要因について述べ、診断法については、観察法・各種検査法・分析法などにふれて解説する。	同上
7	言語発達遅滞児の治療・教育	幼児を中心として言語発達遅滞児の言語治療法を解説する。これに関連して近年米国のコロラド大学で開発された対人関係反応学習法(INREAL)を紹介する。さらに言語発達を促進する聴きとり能(Listening Ability)開発法、人間関係改善法などについて述べる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	吃音児(者)の理解	吃音児(者)を診断・評価する方法について学習する。そのため言語・身体・心理の3側面の理解に必要な基礎知識を学び、重症度の判定法、吃音行動の観察法、検査法について解説する。吃音を幼児吃・学童吃・成人吃に便宜上区分し、それぞれの特徴を理解する。	内須川　洸（筑波大学教授）
9	吃音児（者）の治療・教育	吃音児(者)の治療・指導問題を中心として、幼児吃音・学童吃音・成人吃音の治療上の相違を概略述べる。また治療・指導上留意すべき点として、各種治療法の特性を紹介し、この使用計画の立て方を学ぶ。成人吃音の場合には、吃音者の生き方吃音の克服を重視する。	同　上
10	構音障害児(者)の諸問題	構音障害のさまざまな種類について、原因・言語症状・治療経過・予後などを紹介し、構音障害の診断手続を解説する。とくに構音テストの種類実施方法などにふれる。なお、口蓋裂児の言語治療も含めて、構音障害児の治療・指導法について解説する。	同　上
11	音声と音声障害の諸問題	音声の3要素、大きさ、高さ、音質について音響物理的特性を考察する。音声障害の発生を音声習得過程の不全と病理的原因から考察し、さまざまな種類の音声障害について解説する。また音声障害の評価法、改善・治療法の概要を解説する。	同　上
12	聴覚と言語障害	聴こえの仕組みを聴器の構造とその機能面について解説し、聴力や聴覚の障害が如何にして発生するか考察する。さらに難聴に伴う言語障害の特性や教育・指導法について概略を解説する。また我が国における〝ろう教育〟と〝難聴教育〟について述べる。	同　上
13	器質的言語障害と重複障害	器質的言語障害のさまざまな種類について解説し、そのうち特に脳性マヒによる言語障害・失語症・小児失語症について、障害の特性・言語治療の概略を解説する。また障害の重複化傾向・治療指導問題にふれるとともに重複障害児教育の問題を考察する。	同　上
14	人間生活と言語障害	講義のまとめの第1に、さまざまな人の生活の中で、言語生活の意義を考察し、その言語が障害されたとき示される「ゆがみ」や問題について論じる。第1に生活環境に生ずる多種雑多な変化について、第2にこれらに直面する言語障害者のリハビリテーションについて。	同　上
15	豊かな言語関係を育てる	まとめの第2は、言語が正常に学ばれるのに必要な言語関係と環境面の配慮や努力について学ぶ。言語障害の進行をくい止めたり予防する方策は何か、言語障害児を自然治療に導くことは可能か、言語生活をとりまく望ましい環境や人間関係のあり方や言語衛生について学ぶ。	同　上

＝学　校　教　育＝　（ＴＶ）

〔主任講師：深谷昌志（放送大学教授）〕

全体のねらい

学校教育がどんな意味を持っているのかを考えていく。この講義は教育学関係の入門的な性格を持たせてあるので、基礎的な事実を深めていく。なお、この科目は昭和58年に作成したものを手直ししたので、放送・印刷教材ともに工夫をこらしてある。学習しやすさを配慮したつもりなので、頑張って学習して欲しい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	子どもの発達と学校	子どもの発達にとって、学校の果たす役割を、"いくつかの教育実践"を紹介しながら考えてみる。そして、教育の営みの中で、学校はその一部を担っていることを指摘し、学校の持つ功罪を考えていきたい。	深谷昌志（放送大学教授）
2	日本の学校、その特色	日本の学校は中央集権化され、個性に乏しいといわれる。そこで、諸外国の学校の姿との対比させて、日本の学校の特色を、歴史的な背景を含めてとらえ、問題を堀り下げていく。	同　上
3	学　校　文　化	学校文化をシンボライズするものとして卒業式を事例としてあげる。そして、入学式や運動会などのあり方に関連させて、日本の学校文化の特色を考えていく。	同　上
4	教　師　の　仕　事	教育の主たる担い手は教師であろう。そこで、教師の仕事を紹介しつつ、教師の専門職化とのかかわりで、教職のあり方をとらえる。特に、教職の特性を教員養成の今後に関連させて考えていく。	同　上
5	学級集団の構造	小学校教育の中心は学級にある。そこで、学級の持つ意味を集団構造の視点からとらえて、その特色を明らかにする。それと同時に、学級集団を分析していく技法についても紹介していきたい。	同　上
6	授　業　と　学　習	授業にはさまざまなスタイルがあってとらえにくい。しかし、ここでは、授業のとらえ方を概観するとともに、学習者の立場から、授業を見つめ直してみたい。なお、学業成績の意味についても考えていきたい。	同　上
7	近代学校の成立	学校のあり方は社会の歴史的変化に対応して変わる。ここでは、近代学校をそれ以前にあった藩学や寺小屋などと対比して考える。その後、明治５年の学制発布以後の学校作りの流れを紹介していきたい。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	国家による学校教育の明暗	明治中期の教育政策の展開を歴史的素材として戦前における学校教育の明暗を解明する。それと同時に、中等教育や高等教育の整備についても考察を加える。	深谷昌志
9	教育改造を求めた動き	大正デモクラシーの時代といわれた第一次大戦後の教育界に起こった教育改造の動きを、教育の画一化と個性との関連でとらえる。そして、現在からみて、大正自由教育の投げかけた問題は何であったのかを考えていきたい。	同上
10	戦後教育の原点	第二次大戦後の教育改革の原点を確かめるために、「教育基本法」の理念や、六・三制の成立事情などを考察する。現在では、この時期の教育が分りにくくなっているのでくわしい紹介を行ないたい。	同上
11	学校をめぐる法規	現代の学校は、好むと好まざるとにかかわらず法的な枠の中で成立している。そこで学校教育と法規との関連を、子どもの「教育を受ける権利」の保障という立場から、学校の実態に即して考える。	同上
12	地域社会と学校	学校は地域の中で機能している。そうした学校の役割を地域社会や家庭との関連で考えていく。PTAのあり方にもふれるが、それと同時に、教育と学校との違いもとらえる。	同上
13	学力と入試	学校のあり方に入試はさまざまな影響を与える。ここでは、入試のあり方について歴史的な考察と同時に、比較教育的な観点からの検討を加えていきたい。そして、学力の意味を堀り下げて考えていく。	同上
14	学校論の系譜	近代以降に限ってみても、さまざまな学校論が提起されている。そうした教育思想家の学校論を概観した後にそうした系譜を現代の視角から分析し、現在の視点から何を学ぶべきかを考えていく。	同上
15	学校改革の可能性	さまざまな問題点をふまえて、これからの日本の学校改革の可能性を、諸外国の学校改革の状況を視野においてとらえる。そして、未来の社会で、学校がどういう機能を果たすことになるかについて堀り下げていきたい。	同上

＝教育思想（I）＝（R）

〔主任講師：村井　実(大東文化大学教授)〕

全体のねらい

教育の思想というのは、子どもたちを善くしようとする工夫や活動を支えるさまざまの考えである。それが、歴史上、時々の経済や政治、あるいは文化の状況の中でどう変化し、どう発展してきたかを代表的な思想家たちについて見ながら、古代より近代の始まりにまで及びたい。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	教育思想のはじまり (1) 教育ということば	教育ということばが生まれるということは、教育が問題として人々の意識に上ることを意味する。それは、人間の歴史の上で、いつごろ、どのようにして起こったか。	村井　実 (大東文化大学教授)
2	教育思想のはじまり (2)子どもを善くする	子どもを善くしたいというところから、そもそも何が善いのか、また、どうしたら善くすることができるのか、などが問題として生ずる。これが教育思想の始まりである。	同　上
3	ソクラテス	「善さ」とは何か、「善くする」とは何か、などの問題を生涯にかけて問うと同時に、その問いかたについて、「産婆術」「問答法」などの主張を行ったソクラテスの歴史的意味は何か。	同　上
4	プラトン	ソクラテスの弟子として、プラトンは、ソクラテスの思想を理論的に整えることに力を注いだ。だが、その思想は、ソクラテスに対して、対極ともいうべき特徴をもつに至った。その吟味。	同　上
5	イソクラテス	イソクラテスは、ソクラテス、プラトンとほぼ同時代のアテナイの町で、さらに独自の修辞学校を開くことによって、教育思想の第三の原型ともいうべきものを展開してみせた。それは何か。	同　上
6	人間主義・理想主義・現実主義	子どもたちを善くしたいという、教育の思想に子どもたち、および善さをどう考えるかに応じて、教育思想の三つの原型が生まれた。ソクラテスの人間主義、プラトンの理想主義、イソクラテスの現実主義である。	同　上
7	クインチリアヌス	ローマの共和制社会では、討議と説得の術としての弁論術が教育の中核となった。そうした教育思想の集大成としての、クインチリアヌスの『弁論家の教育』の特色。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	アウグスチヌス	キリスト教が社会に広まるにつれて、そのキリスト教との関係において教育が考えられる。それと、ギリシャ・ローマ時代の教育思想との比較。	村井　実
9	中世の教育思想 (1)教会の教育－神への形成としての教育	子どもたちを善くしたいという、その善さが、理想としての神とされ、その神にむかって子どもたちを形成することが教育と考えられた。しかし、神を求めることよりも、神に従うということへの形成が強制された。還相の理想主義といえる。	同　上
10	中世の教育思想 (2)　世俗の教育	教会が掲げる神の理想の下で、世俗の世界では宮廷は宮廷なりに、商人は商人なりに、職人は職人なりに、社会階層ごとに現実主義的な教育を展開した。思想上、理想主義と現実主義との癒着が生じたのである。	同　上
11	ルネッサンスの教育	久しい中世の教育からの開放を求める動きが、ギリシャ、ラテン時代の人間像を理想に掲げる人文主義の教育思想を生んだ。代表的な人物にエラスムス、トマス・モアなどが挙げられる。	同　上
12	宗教改革の教育思想 －ルターとカルヴァン	中世は、人間にとっての「善さ」＝神が教会に独占された時代といえる。それを教会から開放して、聖書を通しての人間との直接の関係に置こうとしたのが、ルターとカルヴァン、宗教改革の思想家たちであった。その教育上の意味は何か。	同　上
13	ラブレーとモンテーニュ	人文主義の教育が形式化して「キケロ主義」と評されるようになるのに対して、形式よりも内容、ことばよりも感覚や理性、知識よりも経験を重んじようとする実学主義が台頭した。中世以来の理想主義的な大勢に対しては、久し振りの現実主義的な関心の再現である。	同　上
14	コメニウス	「知る」という働きの重要性、万人にとっての可能性への着眼を中心として、それを現実化する方法と組織が考察される。－近代を支配するに至った実学主義的教育のスタート。	同　上
15	思想の系譜	教育思想は、子どもを善くしたいという人々の意欲に貫かれて、人間主義的、理想主義的、現実主義的など、時どきの政治的、経済的、文化的等の状況に応じて変化しながら発展していく。その経過の回顧と展望。	同　上

＝教育思想（II）＝（R）

〔主任講師：村井　実（大東文化大学教授）〕

全体のねらい

教育の思想というのは、子どもたちを善くしようとする工夫や活動を支えるさまざまの考えである。それが、歴史上、時々の経済や政治、あるいは文化の状況の中でどう出現し、どう変化し、どう発展してきたかを、とくに近代の始まりから現代までについて、振り返ってみたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	現実主義の広がり―階層性と国家性	ロックは、イギリス紳士階層の教育思想の代弁者として出現した。「健全なる身体と健全なる精神」というのが、階層的「善さ」として、そこへの訓練が重んじられる。この原理が絶対主義国家の全体に及ぶ。	村井　実（大東文化大学教授）
2	ルソー	「造物主の手が出るときはすべてが善いのだが人間の手にかかってすべてが悪くなる」という革命的な宣言。―その教育思想的な意味は何か。	同上
3	汎愛派の人々	ルソーの影響下に、人間、自然、感覚と身体等への関心をもって、ドイツに汎愛派の運動が生じた。バゼドウ、ザルツマンなどを代表とするが、とくにザルツマンについてその特色を見てみたい。	同上
4	カント	人間と自然を重んずるというルソーの系譜に立ち、同時に汎愛派の実践に同調したが、カントは、両者の現実主義的な関心をはるかに越え出る、独特の思想を説いた。これは、人間性理念の完成という、その意味での新しい理想主義思想―理念主義―ともいうべきものの力強い宣言であった。	同上
5	コンドルセ―フランス革命の教育思想	フランス革命は、教育上、歴史的な二つの問題を提起した。第一は、人間の自由と平等の強調であり、第二は、国家による公教育という考えである。この二つの、ほとんど矛盾的といってよい要求の、最初の調停者として、コンドルセが出現した。	同上
6	ペスタロッチー	政治への関心、経済への関心と、教育への関心との関係、この関係がどう把握されたか。またそうした関係の中で生きる人間というものがどう把握されたか。	同上
7	フレーベル	アウグスチヌスやルターのばあいの教育思想の中心にあった「神」が、新しい意味をもって出現する。子どもの中の「神」―それが教育の歴史にどういう新しい動きを作り出したか。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	オーウェン ー産業革命と教育	産業革命の進展とともに、社会が労働者の子弟の教育を必要とし、そこから、社会の側からの労働者階級への教育的関心が生じた。こうして社会主義の教育思想が生まれる。その代表者としてのオーウエンの思想を吟味する。	村井　実
9	ホーレス・マン ーアメリカの教育思想	フランス革命によって提出された、自由、平等の理想と公教育への要求との緊張の解決への道が新大陸の新国家アメリカにおいて、デモクラシーの理念のもとに拓かれることになった。その代表的教育思想家、行政家としてホーレス・マンが出現した。	同　上
10	ヘルバルト ー思想と科学	近代に入って、教育に科学の成果としての知識・技術を取り入れると同時に、教育の思想を科学化する関心が高まった。その最初の積極的な試みがヘルバルトによって企てられた。ここでは、その試みの意味と限界とを考察する。	同　上
11	デューイ	国家と、知識・技術と、市民と、人間と、この四者の必然的なもつれを、どういう方向に解決して理想の教育を実現するか。この視点から、デューイの教育的民主主義の思想を吟味する。	同　上
12	森　有礼	日本に於ける国家と教育の関係をどう考え、どう調整するか、森有礼の国家主義的教育思想の成立を吟味する。	同　上
13	福沢諭吉	森有礼と同時に、同じ国家近代化の意図をもってスタートした福沢諭吉の思想が、どう異なった主張に結晶していったか。その両者の相違の意味。	同　上
14	教育の民主主義 (1)　新しい出発	明治以来の日本での教育、戦争と敗戦、米国教育使節団報告書、教育基本法と新教育、新教育の運命、現在の日本の教育現実等は、教育思想上の問題として何を意味するか。	同　上
15	教育の民主主義 (1)　現実の歩み	日本の戦後の教育は、民主主義を旗印として進められたが、いつの間にか、その理想にかえって遠ざかる方向に向かって進んでいるかに見える。これは何を意味するか、これを、明治以来の潜在的な教育的国家主義の問題として吟味する。	同　上

＝家　庭　教　育＝　(R)

〔主任講師：山村賢明（立教大学教授）〕

全体のねらい

家庭教育の問題を、乳幼児にたいするしつけや教育のハウ・ツー的手引としてではなく、人間が一人前の大人になる発達の過程を見通したうえで、日本の社会や文化という広い観点から、原理的・体系的にとらえたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	子どもの発達と家庭	子どもが一人前の大人へと発達していく社会化の過程の中に、家庭教育を位置づけて考える。そのような本講義の基本的立場を提示し、家庭教育は家族の日常生活に即して実際的にとらえられるべきことを述べる。	山村賢明（立教大学教授）
2	日本人の形成と家庭	家庭教育は、単に一人の人間の成長・発達としてではなく、(日本)社会の文化の再生産、より具体的には日本人の形成として、基本的な役割を果たすものであることを指摘する。	同　上
3	家庭の教育・学校の教育	日常的しつけ機関としての家庭と、専門的教育機関としての学校の特質を考え、両者がそれぞれ独自の機能を果たすことによってこそ、子どもの逞しい健全な発達が可能になることを明らかにする。	同　上
4	母親の役割－愛の原体験	子どもの社会化にとっての母親の役割の本質と子どもの発達に応じたその変化を考える。そして母親の役割の中心が、人間的な愛や感情を原則的に形成するところにあることを示す。	同　上
5	父親の役割－権威の原体験	人間社会に特徴的に見られるという父親の役割を多面的にとりあげ、父親の重要な役割が規範や道徳の基礎にある権威の感覚を、子どもに最初に与えるところにあることを述べる。	同　上
6	性別役割としつけ	男女の性別役割が、まず家庭の中で父親・母親をモデルにして子どもに獲得させるものであることを示し、性別役割は時代や社会によって異なること、男女平等をめざす性別役割のしつけについて考える。	同　上
7	きょうだい関係の意義	親のもとでのきょうだい間の親和と競争、対等と庇護といった関係が、人間形成に与える重要な意義を指摘し、今日の一人っ子的状況がもつ問題点について考える。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	日本の子ども観としつけ	しつけや家庭教育の基礎としての子ども観が歴史・社会的に変るものであることを示し、日本の性善説的な子ども観の特徴を明らかにし、子どもにたいする明確な言葉による要求(しつけ)の必要性を論じる。	山村賢明
9	母子関係への偏り	日本の親子関係においては、特に母と子の密着が濃厚であることを指摘し、それが結果的に父子関係を深くさせ、甘えを助長し、規範意識をあいまいにさせる効果をうみ出すことを示す。	同　上
10	家庭と日本的集団主義	日本人の行動様式の特質としての日本的集団主義が、まず家庭の中からつくられることを示し、他方国際化の動きの中で、いかにして個人の自律性や主体性をのばすしつけが行われうるかについて考える。	同　上
11	育児不安と過保護	核家族化と情報過多は育児不安を、さらに子どもの数の減少と生活様式の向上は過保護をも必然的にもたらすことを述べ、さらにそれから脱出する方法や、祖父母との関係についても考える。	同　上
12	「見えない父親」と子ども	現代の工業化における「見えない父親」の問題は日本だけではないが、さらに日本的状況がそれに輪をかけている事実を指摘し、父親の回復なしには、本当の家庭教育も子どもの問題行動への対応も困難となることを論じる。	同　上
13	子どもを「管理する母親」	父親とは逆に、伝統的な母子関係の濃密さも手伝って、ますます顕在化する母親、その母親によって生活のすみずみまで管理されるようになる子どもの生活を述べ、それが子どものパーソナリティに及ぼす影響について指摘する。	同　上
14	受験体制の中の家庭	子どもたちの生活をとりまく受験体制の中で、偏差値に振りまわされ、学校の下請け機関となる家庭をとりあげ、子どもを見る親の目に勉強以外の多様な物資が必要であることを考える。	同　上
15	結　び 21世紀へ向けての家庭教育	本講義のしめくくりとして、家庭教育の役割を要約し、現代の社会状況の中で、本来の家庭教育を再生させ、21世紀の国際社会に向けてしなやかで逞しい子どもを育成する方途をさぐる。	同　上

＝情　操　の　教　育＝　（R）

〔主任講師：片岡徳雄（広島大学教授）
高萩保治（東京学芸大学教授）〕

全体のねらい

現代社会の非人間的なゆがみの多くは、人間の情操の貧しさから来ている。今こそ、豊かな情操をその育成に期待されるところが大きい。ここでは、この重要な情操の形成と教育について、子ども文化や子どもの生活から考える。とくに、子どもの読み物や音楽や遊びの領域をとりあげ具体的に考えてゆく。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	子ども文化と子どもの情操	情操とは何か。情操教育とはなにか。子ども文化とはなにか。そして、子ども文化から情操教育を考えるとはどういうことか。これらの考察を通して、例えば「音楽は好きだが、学校の音楽授業は嫌い」といった情操教育上の問題に迫る糸口を探る。	片岡徳雄（広島大学教授） 高萩保治（東京学芸大学教授）
2	幼　児　の　本	(1)絵本の特性、幼児の発達特性から、絵本を通して幼児に育つものは何かを考える。 (2)よい絵本、情操を育てる本の条件。 (3)家庭および園での保育に、絵本をどのようにとり入れていけばよいかを考える。	植田ひとみ（広島文教女子大学助教授）
3	子　ど　も　の　本 ー今と昔ー	子どもの本は、日本の歴史の上で、どのように現われているか。1)古代・中世はどうだったか、2)近世はどうだったか、3)近代と現代はどうか。いろんなジャンル別に、それぞれの時代を考えてみる。	片岡徳雄
4	子どもの読書生活 ーその影響ー	子どもは、自己の読書生活から、自己形成に関する様々な影響を受ける。1)その影響は、他の自己形成とどのように違うか。2)読書内容によって、どのような影響上の違いがあるか。3)日本と外国との違いについても考える。	同　上
5	子どもの読書生活2 ーその方法ー	読書をしない子どもが増えているという。実態はどうなのか。なぜそうなるのか。こうした問題を考えつつ、子どもに読書生活を確立させるためにはどうすればよいのかを、とくに本の選び方・与え方・読ませ方を中心に考える。	大槻和夫（広島大学教授）
6	文　学　の　授　業	文学の授業には、(1)文学の読み方の指導と、(2)文学の読書の指導の二つが考えられる。これら二つの指導はどのようにすればよいのか。またそれらは情操の教育とどうかかわるのか。こうした問題を、具体的な教材や実践例に即して考える。	同　上
7	子どもの大衆文化 ーアニメ・劇画を中心にー	いまや子どもの情操の基本的トーンは、学校教育よりも、アニメや劇画など映像的マス・メディアを中心とする大衆文化によってかたちづくられているのではないか。ここでは現在の子どもたちの情操の特徴を、子ども大衆文化の内容と関連させながらみていく。	森　　林（広島大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	子どもにとっての音楽とは ー世界の子どもの音楽から	子どもの成長にとって大切な家庭生活と学校生活の中で、音楽とはなにかを考える。そして、外国との関係、とくに外国の学校教育における音楽の特色をとりあげ、日本の教育への示唆を考える。	高萩保治
9	明治・大正の子どもの音楽	西洋のメロディーを借りて出発した唱歌は、時代とともに子どもの歌として位置づいていった。それらを言文一致の唱歌、文部省唱歌、童謡などを通して考えていく。	沢崎真彦 (東京学芸大学助教授)
10	昭和の子どもの音楽	1)昭和の初め、第二次世界大戦に向う、または大戦下の子どもの音楽について、2)戦後、急速に発達したマスメディアによる、子どもの音楽について、3)戦後の、幼児と子どもの音楽について、そのそれぞれの特色を考える。	中嶋恒雄 （山梨大学教授）
11	現代の子どもの音楽	1)おけいこごととしての音楽と、子どもの発達との関係について、2)現代の学校音楽における歌唱教材と器楽観賞について、3)子どもの自発的な遊びにおける音楽について。それぞれの問題点や特色を考える。	同上
12	子どもの遊びー今と昔ー	遊べない、遊びを知らないといわれる今の子どもたちも、テレビゲームにみられるようにまったく遊ばないわけではない。昔の伝承的な遊びと現在の遊びの特性を比較しながら子どもの情操形成において果たす遊びの役割を見直してみよう。	森楙
13	劇遊びからクリエイティブ・ドラマへ	子どもの遊びは劇的な要素をもっている。その点に注目して、劇遊びの、情操教育における教育的意義と実際の指導方法について考察したい。さらに、劇遊びにとどまらず、それをクリエイティブ・ドラマづくりへと発展させていく試みに挑戦していきたい。	倉田侃司 (広島女子大学教授）
14	遊びと授業・行事	「遊び」のゆがみの中で学校教育は何をなすべきか。遊びと授業・行事のからみでその方向性を明らかにする。一つの視点は個を生かす集団づくりである。もう一つは、総合的な創造活動の促進である。現場の実践例や米国「人間科」をその具体例として紹介する。	野村幸治 （広島大学助教授）
15	これからの子ども文化 これからの情操教育	現代の社会と子どもの病理の多くは、子ども文化と子どもの情操のゆがみから来ている。これからの社会の形態的・価値的変容を予想しつつ情操教育の将来について考える。	片岡徳雄 高萩保治

＝青少年文化＝（TV）

〔主任講師：深谷昌志（放送大学教授）
〃　：門脇厚司（筑波大学助教授）〕

全体のねらい

青少年文化を、前半は子ども文化、後半は青年文化とに分けて考察を進めていく。文化論なので、放送教材の中ではロケなどを多用し、印刷教材とデータを紹介する形をとる。したがって、放送と印刷の教材をあわせる形で学習を進めて欲しい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	青少年文化のとらえ方	青少年文化を、青年文化と子ども文化とに分け、それぞれの文化の特性を明らかにする。そして、現代の子どもたちの成長のスタイルと関連させて青少年文化の現状を概観する。	深谷昌志（放送大学教授）
2	玩具の変遷	さまざまな玩具を紹介しながら、子どもの心を豊かに育てる玩具はどういうものなのか考えていく。また、現代の玩具がそうした条件を備えているか検討する。	同上
3	遊びのとらえ方	子どもの人間形成にとっての遊びの意味を発達段階をふまえて考察する。続いて「群れ型」から「孤独型」へ、遊びが変遷したことにより、子どもの発達にどのような歪みが生じたのかを掘り下げていく。	同上
4	テレビとのつき合い	テレビとのふれ合いを、子どもたちはどうとらえているのか。子ども番組の変遷をふりかえりつつ、子どもにとっての望ましい視聴態度とは何かを検討していく。	同上
5	仲間集団のゆくえ	現代の子どもはギャング集団を失い、友をもたずに成長していく。そうした現状をふまえ、仲間集団の中で子どもたちが身につけたものは何なのかを考えていく。	同上
6	子どもたちの金銭観	子どもたちは豊かな社会の中で成長してくる。当然、ものがあるのがあたり前で不足感を知らない。そうした子どもたちの金銭観を子どもの持物などと関連させて考えていく。	同上
7	性差をめぐって	おとなの間では、性差の少ない社会への動きが顕著だが、子どもの間では、性差が拡大する傾向をたどっている。ここでは、少女文化の性質を、女子マンガや交換日記、人形などを手がかりとして掘り下げていく。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	子ども文化の再生	子ども文化を再生するために、どういう方策が必要なのかを、遊び場や児童公園などと関連させて考える。あわせて、子どものすこやかな成長を保証する環境作りの必要性を考えていきたい。	深谷昌志
9	青年期と青年	青年文化を理解するには、その担い手たる青年集団のさまざまな特性を理解しておく必要がある。そこで、まず青年期に特有の身体的・精神的特性をみる。	門脇厚司
10	青年文化論の成立	青年文化を学問的な分析の対象としはじめた時代的背景と青年文化論にみられる代表的な見解を紹介する。また、青年文化の一般的な特質を整理し理解につとめる。	同上
11	近代社会と若者文化	若者（青年）文化は、社会の近代化にともない発生してきた文化といえるが、若者たちは、それぞれの時代に、どのように生き、その成果としてどんな文化を生み出してきたかを歴史的にたどる。	同上
12	現代社会と若者文化の変容	現在のわが国の青年文化を生み出してきた戦後日本の社会的特徴をみつつ、今日の若者文化がどのような質的変化をとげてきたかについて言及する。	同上
13	現代の若者文化・1	―浮遊文化の諸相 今日の若者文化の1つの特徴を“浮遊文化”ととらえ、そうした文化を支える青年の意識や価値観を紹介しつつ、海外との比較もまじえその実態を報告する。	同上
14	現代の若者文化・2	―閉塞文化の諸相 今日の若者文化のあと1つの特徴を“閉塞文化”ととらえ、このような文化を生む若者の気分や生活を考えつつ、海外との比較もまじえその実態を報告する。	同上
15	青年文化と若者の未来	社会が大きく変わりつつある今日、青年文化は今後どのような方向をたどるのか。強化説と消滅説の2つの見解を軸に、若者文化と若者の将来を展望する。	同上

＝ 生 涯 教 育 論 ＝ （R）

―生涯学習社会をめざして―

〔主任講師：麻生　誠（大阪大学教授）〕

全体のねらい

生涯教育理念は、わが国でも漸次、教育政策や教育制度、教育組織、教育課程などに影響を及ぼすようになった。だが、生涯教育は、教育の自由と平等、学習と教育との間の矛盾に代表されるような二律背反的要素を内に含んでいる。このような生涯教育の理念と現実を今日の教育状況と関連させながら、学習者の立場に立って新しい生涯教育学を構想してみよう。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	生涯教育の理念	生涯教育は、人々の自己実現を達成させるために、人々の全生涯を通して人間的、社会的、職業的な発達を援助する教育の仕組みである。ややもすれば言葉だけの美辞句に終わってしまう恐れのある生涯教育理念を歴史的発展のなかに位置づけてとらえ直してみよう。	麻生　誠（大阪大学教授）
2	生涯教育の社会的背景	人間は「生涯にわたって学ばねばならぬ」ということは古くから言われてきた。この意味で、生涯教育は古き理念である。しかし、最近生涯教育論が唱導されてきたのは、この古き理念の新しい意味を引き出すような社会的条件が発生してきたからである。それは何であろうか。	同　上
3	生涯教育と学習要求	生涯教育は、何よりも国民の生涯にわたる学習要求を前提としている。だが、あらゆる人間が生涯教育を享受しうる継続的な学習要求や学習能力を持っているものであろうか。この問題は学習者の立場に立って考えてみよう。	同　上
4	日本の生涯教育のルーツを探る	生涯教育理念は、それぞれの社会や国によってニュアンスが異っている。その理由の一つは、国々の文化的、教育的伝統が異っているからである。わが国の生涯教育のルーツを中江藤樹の思想と実践に探ってみよう。	同　上
5	教育政策としての生涯教育と草の根の生涯教育運動	わが国の国レヴェル、地方自治体レヴェルの教育政策のなかに、どのような生涯教育課題がどのような文脈で現れてきているかを明らかにし、さらにその問題点を考えてみよう。また、それとの関連で、少数民族や障害者などのハンディキャップを持つ人々の生涯教育問題を考えてみよう。	同　上
6	ニューメディア時代の生涯教育	放送は、生涯教育機会を社会に拡散させるのに大きな力を持っている。しかしまた、教育上無視できない限界もあわせ持っている。これら限界を克服し、放送を生涯教育に生かす手だてをニューメディアの登場と関連させて考えてみよう。	同　上
7	生涯教育を欧米に見る(I) ―アメリカの生涯教育―	欧米の生涯教育政策・制度を概観しながら、生涯教育の教育政策や教育制度上の課題を考えていこう。まず、生涯教育の先進国といえるアメリカの生涯教育の特徴をみてみよう。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	生涯教育を欧米に見る(Ⅱ) ーイギリスの 生涯教育ー	イギリスでは、歴史的に学校卒業後、職業的継続教育が整備されており、他方、労働者教育運動から生まれた市民的成人教育があり、これらがイギリスの生涯教育の二本柱となっている。歴史的性格づけの強いイギリスの生涯教育の功罪を探ってみよう。	麻生　誠
9	生涯教育を欧米に見る(Ⅲ) ースウェーデンの 生涯教育ー	福祉国家として名高いスウェーデンの生涯教育は学ぶべき点が多い。高等教育の開放、北欧の伝統的成人教育としての学習サークル、有給教育休暇や奨学金政策などの種々な学習保障活動をみてみよう。	同　上
10	ソフト管理社会における生涯教育	今日のわが国の社会は、ソフトな管理社会といえる。それは、大きな二つの柱によって支えられている。それは学歴社会と消費社会である。このような社会において、人々の人間的発達を支援する生涯教育には、様々な矛盾が生ずる。自己実現を阻害する傾向のなかで、如何にして自己実現を目的とする生涯教育が実現できるか考えてみよう。	同　上
11	生涯教育の体系と行・財政問題	生涯教育論には、行・財政論が欠けていると批判される。誰でもが「何時でも何処でも学習できる」という生涯教育システムの行・財政的基盤を探り、生涯教育システムを確立するには、行政がどう変わるべきかを検討してみよう。	同　上
12	地域社会と生涯教育	私たちの生活は、私たちの生活圏としての地域社会を基盤として行われている。このような地域社会のなかで、地域住民に対してどのような教育機会が提供され、住民の学習要求をどのように充足させているかを、一つの地域事例を取り挙げて考えてみよう。	同　上
13	発達課題と生涯教育	人間の発達過程のそれぞれの時期に現れる達成すべき課題を発達課題という。これらの課題を首尾よく達成することによって健康な人格が形成される。現代日本の発達課題とその解決に生涯教育の果たす役割を考えよう。	同　上
14	成人教育（アンドラゴジー）の理論と技術	これまでの教育学は、子どもを対象とするものであった。生涯教育の時代とともに、成人が対象とする教育方法論や教育課程論が必要となる。このような要請に答えて誕生した成人教育学（アンドラゴジー）である。その成果を紹介しよう。	同　上
15	日本の生涯教育の必要性と可能性を求めて	わが国の生涯教育を支える三本柱である学校教育システム、社会教育システム、職業能力開発システムの実態と問題点を明らかにし、生涯教育の必要性と可能性を考えてみよう。	同　上

＝ 発達段階の心理学 ＝（TV）

〔主任講師：宮川知彰（放送大学教授）
〃　：星　薫（放送大学助教授）〕

全体のねらい

本講では、人生経過を乳児から老年にいたる6段階に分けて、それぞれの発達段階の心理行動の特徴について概述するとともに、養育や訓育、教育上の留意点について考察する。なお、学問としての発達心理学の性格、歴史、研究法、発達と学習の相違、動物と人間の比較、発達障害等の理論的な問題についても概説する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	乳児	本章では、胎生期および乳児期におけるさまざまな発達的特徴を概観し、この時期にある者に対する養育のあり方を、さぐってみたい。	星　薫（放送大学助教授）
2	幼児	人間の発達段階的特徴は、基本的には教育を介した物及び人との関係の重要な変化の中で形づくられるものであろう。だとするならば、幼児期におけるその変化はどのようなものか。ここでは、「対象的行為」及び「ごっこ遊び」を主軸とした生活に焦点をあてて幼児期の発達的特徴を概観する。	野呂　正（宮城教育大学教授）
3	学童	学童期とは、身体・運動の機能、知的機能、人格・情動、社会的行動などの諸面で、発達的にどんな段階と言えるのだろうか。本講では、このことを、家庭と学校の中で育ちゆく子どもを通して実証的に検討し、あわせて望ましい発達に対する教育の在り方を考える。	寺田　晃（東北大学教授）
4	青年	青年期とは、いつからいつまでのことをいうのか、また青年期の「発達課題」は何かについて概述する。	宮川知彰（放送大学教授）
5	壮年	「精神発達」の過程では、新しい「能力」が獲得されていくと同時にこれまであった「能力」が失われたり減衰したりする。壮年期では若き日の何が失われ、何が新たに獲得されるのだろうか。壮年の社会的責任との関連でこの問題を考えてみよう。	宮川知彰 星　薫
6	老年	老年期の生理的、身体的特徴、知的機能、情動および性格などについての最近の研究を概観し、老年期という時代の特徴を、そこに至るまでの経過を踏まえつつ考えてみる。	星　薫
7	人間と人生	これまで6章にわたって人生各期の特徴を概説してきたが、本章は人生経過を全体として概観し、年齢の推移とともに変化する社会的な地位と関係づけながら、人生経過における人格特性の形成・変化の過程を考えてみよう。	宮川知彰

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	発達心理学とは	発達心理学について、ヨーロッパ特にドイツとアメリカとでは、異なった視野・観点をもっているように思われる。この点を紹介するとともに、発達心理学はいかなる科学であるべきかについて、また発達段階設定の意義について考えてみる。	宮川知彰
9	動物における心理発達	進化の過程において、いかにして心理が発生し、また要素的感覚的心理の段階から知覚的心理の段階へと発展していったかを考察する。その際、動物の生活条件とそこにおける動物の活動に留意して、その心理発達を分析する。	松野豊（東北大学教授）
10	動物と人間	人間に固有の心理は社会的起源をもち、媒介的構造をもち、意識性をもって働く。このような人間心理の生物学的前提は何であろうか。また人間の心理は、どのような新たな生活条件と活動の下に生まれたのかを考察する。	同上
11	発達心理のあゆみ	哲学、教育学、心理学、さらに生物学や医学など、隣接する人文、社会および自然の諸科学の発展とあわせて、発達心理学が科学としていかに台頭し、その体系を整えるにいたったか、本講では発達心理学の今日までのあゆみと問題点とについて具体的に検討する。	寺田晃
12	精神発達の研究法	一つの問題を解決するのには、その問題を解決するのに最も適した方法を創案しなければならない場合が多い。それで発達心理学の領域でも幾多の独特な方法が考案されてきた。本講では、それらのうち基本的なものについて概説しよう。	宮川知彰
13	発達の理論	精神が発達するとはいったいどのようなことを指すのであろうか。そもそも「発達」は何か。この問題について諸家の考え方を概観し、できうれば首肯しうる発達理論を選択するとともに、新しい発達理論の建設の可能性をも考えてみたい。	同上
14	発達と学習	今日の子ども達には、「どうせダメだ」という悲観的な発達観にとらわれている者が多いのではなかろうか。本講では、発達と学習との関連についての諸家の見解を概観して、「やればできる」という積極的な発達観の形成に寄与したい。	野呂正
15	発達と障害	心身の障害とはどのような状態をいうのか。本講では、各種の障害型について、定義、行動特徴、診断の技法等を説明すると共に、教育・訓練・養育の内容と方法、指導上の効果を考察し、総じて発達およびその仕組みに対する障害の位置づけを論じたいと考える。	寺田晃

＝社会心理学＝（TV）

〔主任講師：中川大倫（放送大学教授）
〃　：山口　勧（東京大学助教授）〕

全体のねらい

人間の社会的行動の側面を心理学的に検討し、その間の法則性を明らかにしようとするものであるが、今回は、本書をできるだけ応用社会心理学的な体制化の観点からまとめあげたいと考えている。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	社会的行動の動機	社会的行動が展開される場合の動因となる動機ならびにその展開過程を中心に述べる。	中川大倫（放送大学教授）
2	社会的認知　Ⅰ	ここでは主に対人認知の諸問題を扱う。	長田雅喜（名古屋大学教授）
3	社会的認知　Ⅱ	ここでは原因帰属の問題を扱う。	外山みどり（青山学院女子短期大学部助教授）
4	態度と態度変化　Ⅰ	ここでは態度の構造、測定法などを扱う。	山口勧（東京大学助教授）
5	態度と態度変化　Ⅱ	ここでは態度変化に関する諸理論を扱う。	安藤清志（東京女子大学助教授）
6	態度と態度変化　Ⅲ	ここでは、とくに認知的不協和理論などを扱う。	酒井春樹（札幌大学助教授）
7	対人行動　Ⅰ	ここでは、社会的促進、社会的手抜きなどを扱う。	臼樫三四郎（鳴門教育大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	対人行動 Ⅱ	ここでは対人関係の公正さなどを扱う。	広田君美（関西大学教授）
9	対人行動 Ⅲ	ここでは、主に対人コミュニケーションの問題を扱う。	大坊郁夫（山形大学助教授）
10	対人行動 Ⅳ	発達遅滞児に対する援助、高齢者医療における心理的援助など、健康を中心に社会心理学の果たしうる役割について述べる。	白井泰子（信州大学助教授）
11	対人行動 Ⅴ	異文化間接触における対人関係の問題、カルチャーショックの性質、異文化間行動の適性化の方法などについて述べる。	渡辺文夫（東北歯科大学助教授）
12	集団内行動 Ⅰ	ここでは、主としてリーダーシップを扱う。	藪内稔（学習院大学教授）
13	集団内行動 Ⅱ	ここでは、主としてモラールの問題を扱う。	角山剛（東京国際大学助教授）
14	社会的不適応 Ⅰ	ここでは、主として社会的不適応の問題を扱う。	渡辺浪二（立教大学非常勤講師）
15	社会的不適応 Ⅱ	ここでは、主として社会的不適応の問題を扱う。	水口礼治（立教大学教授）

＝心理・教育における測定法＝（TV）

〔主任講師：肥田野直（放送大学教授）〕

全体のねらい

学校や社会において、種々の測定が行われている。それは何を、どんな方法で測っているのであろうか。

測定法の基礎となる原理は何であろうか。また、測定の際にどんな誤差が生じやすいのか、その誤差を除くにはどうしたらよいのか。これらの知識を基礎にして測定値を正しく解釈し、適切に利用する仕方を学びたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	測定とは何か (1)	人間を対象とする測定法にはどんな種類があるだろうか。学校生活や社会生活の中で行われている測定の例を考えてみよう。測定の誤差の性質とその扱い方を通じて、測定の基本的概念を学ぶことにする。	肥田野　直（放送大学教授）
2	測定とは何か (2)	ここでは測定の基本的特性について考える。尺度の種類とその違い、基本量と誘導量の区別、測定の信頼性や妥当性の問題など、後のどの測定法にも共通に当てはまる基本概念を解説する。	池田　央（立教大学教授）
3	学力の測定	一番身近な測定の例として学校における学力の測定を取り上げる。学力測定の方法、種類、結果の表し方、素点と標準点の違い、集団準拠測定と目標準拠測定の区別などについて触れる。	同　上
4	知能の測定	知能測定法の歴史、知能検査はどの様な必要性から生まれてきたのか。またどのような形で発達してきたのか、知能測定の結果はどの様に表示されるか、知能検査の種類、作り方などについて解説する。	同　上
5	パーソナリティの測定	パーソナリティの測定はどんな原理に基づいて行われるのか。その測定法はどんな条件の下に実施できるのか。パーソナリティの測定に生じる測定誤差はどうしたら避けられるか。測定結果はどう解釈したらよいかを考える。	肥田野　直
6	人間関係の測定	人間関係の遠さ近さは心理的距離で表される。それを測定するにはどうしたらよいか。また、集団の凝集度を測定するにはどうしたらよいか、これらの測定法の基礎とその問題点について考える。	同　上
7	態度の測定	態度はどの様にして測定するのか。その代表的な測定方法と、その根底にある基本的な考え方およびその限界について考える。またこれに関係の深い他の測定法についても考える。	池田　央

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	価値観の測定	価値観の多様化といわれる現代における、諸種の測定法、把握法とその問題点についてふれる。歴史的な展開の経緯と最近の測定事例を引用する。	吉田正昭（中央大学教授）
9	認知閾の測定	閾の定義とその測定方法、とくに精神物理学的測定法について解説する。次に光覚閾のほか単語や形の認知閾についても、具体例をあげてその測定結果を紹介し、それをいかなる意味に解釈するかについて検討する。	鳥居修晃（東京大学教授）
10	色の認知とその感情効果の測定	色の認知の仕組みを調べるための測定方法を紹介し、代表的な研究例をあげてその理論上の意味について考える。また、色が感情に働きかける効果について、それを研究するための方法をあげ、検討を加える。	同上
11	運動と形の認知	仮現運動について、その成立条件を研究するための方法につき紹介する。また、静止対象の形の認知と運動対象の形の認知に関する研究例をあげ、それらの成立条件を探るための方法や測定方法について考える。	同上
12	香りと手触りの認定	視覚や頭覚のように認識的側面の強い感覚と異り、嗅覚や触覚は感情的好悪と強く結びついている。従って昔は美的感覚の問題とされてきたが、現代では統計学的ないしは計覚心理的測定がすすんでいる。その一論を紹介する。	吉田正昭
13	味の測定	味と香りは機器測定が出来ぬといわれているが補助道具としてのマイクロコンピュータなどは有用である。	同上
14	重量感の測定	重さの区別機を測定する方法を紹介し、測定結果をWeker の法則に照らして検討する。さらに、同じ重量で体積の違うものの重さを比較判断するときに現われるCharpentier 効果や、重さの順応水準についても、具体的な研究例をあげて考えてみたい。	鳥居修晃
15	測定をめぐる諸問題	測定について種々の角度から考えてきたが、それらに共通する問題や測定しにくい事象について、担当講師全体でまとめを行う。	肥田野直

＝障害児の心理と教育＝（R）

〔主任講師：寺田　晃（東北大学教授）〕

全体のねらい

障害児の教育は、人間の尊厳を問い、教育の本質にせまるものである。本講では、前半に総論として、まずそうした障害児がどんな子どもなのか、診断・判断、研究法などを検討すると共に、後半の各論では、障害の各領域別に、心身の発達的特徴と教育、福祉の在り方などを一連に考え、障害児への一般的な理解を深めたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	障害児とはどのような子どもか	障害児とはどのような子どもなのか、各障害の別に、その定義と類型を、主に心理学的、社会学的、医学・生理学的な見地から総合的に解説する。	寺田　晃（東北大学教授）
2	障害児教育の目的と歴史的発展	障害児に対する学校教育の理念と目的および目標、普通教育との内容・方法・評価面の違い、特殊教育の現状などを述べ、あわせて障害児に関する研究、教育（養育）一般の歴史的なあゆみについて概説する。	同上
3	障害児の研究・教育の課題と方法	障害児の病理（身体・諸器官ほか）、心理（認知、人格・情動、社会的行動ほか）、教育（教育内容、方法ほか）の各分野にわたり、従来の研究・教育の概況と傾向を捉えるとともに、現下の教育・心理の研究の課題性を考え、研究法を指摘する。	田中　農夫男（宮城教育大学教授）
4	障害の原因と診断・判断	主に医学・生理学、心理学の見地から、障害児の心身に関する病理と障害の一般的様相を述べ、かつ医学、心理学による障害の測定・評価の方法ないし診断・判断の実際的技法と問題点などを解説する。	寺田　晃 村井憲男（東北大学助教授）
5	発達と障害　Ⅰ－発達の仕組みと障害	発達とは一般にどんな機構と段階とを経て展開するものであるのかを、個体発生の側面から検討し、従来の発達理論を紹介するとともに、発達に対処して障害がいかに位置づけられるかを考える。	寺田　晃
6	発達と障害　Ⅱ－障害児の家庭・学校および社会	発達における親の役割と意義、障害にかかわる家庭的条件、学校教育・社会生活の諸問題などを概観し、その考察から発達と障害の二次的効果を指摘するとともに、家庭・学校・社会の在り方を検討する。	寺田　晃 仁平義明（東北大学助教授）
7	感覚障害論　Ⅰ－視覚障害児の心理と教育	視覚障害児の身体、認知能力、学習能力、人格・情動、社会的行動などを通して、視覚障害児の心理的な発達と特徴を概観するとともに、主に盲学校での教育の現状と適切化を検討する。	田中　農夫男

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	感覚障害論　Ⅱ－聴覚障害児の心理と教育	聴覚障害児（言語障害を含む）の身体、認知能力、学習能力、人格・情動、社会的行動の各発達と特徴を把握し、主に聾学校教育の現状と最適化を考えることにより、感覚障害論をまとめる。	菅原広一 （国立特殊教育総合研究所室長）
9	身体・運動障害論Ⅰ－肢体不自由児の心理と教育	主に医学・生理学、心理学の立場で肢体不自由児の身体・運動の能力の発達と特徴を捉え、治療教育ならびに職業的リハビリテーションの現状と養護学校教育の最適化を検討する。	田川元康 （和歌山大学教授）
10	身体・運動障害論Ⅱ－病弱児・虚弱児の心理と教育	前章と同様な立場で、病弱児・虚弱児の身体と運動面の障害特徴、心身発達の相互関連性を論じ、健常児への復帰、養護学校教育の現状と指導の最適化を考察し、身体・運動障害論をまとめる。	寺田晃 村井憲男
11	精神発達障害論Ⅰ－知能障害児の心理と教育	知能障害児の身体・運動の能力、認知能力、人格・情動ならびに社会的行動の発達的特徴を述べ、特殊学級、養護学校、施設における教育・訓練・養育の現状と適切化、社会的適応等をまとめる。	寺田晃
12	精神発達障害論Ⅱ－自閉症児の心理と教育	自閉症児の心身諸機能の発達と特徴を論じ、あわせて家庭・学校・施設等での教育・訓練および養育の現状と、指導の適切化、社会的適応等を論じ、精神発達障害論をまとめる。	小松教之 （宮城教育大学教授）
13	情緒・行動障害論Ⅰ－情緒障害児の心理と教育	登校拒否、非行など、いわゆる情緒障害児の心身諸機能の諸特徴を述べ、家庭教育と学校教育の現状、指導および教育相談の在り方などを、非社会的ならびに反社会的な問題行動型について論じる。	大山正博 （東北学院大学教授）
14	情緒・行動障害論Ⅱ－学業不振児の心理と教育	学業不振と学習障害の定義および類型、診断と判断等について述べ、心理的、環境的な側面からの特徴と不振の原因を指摘することにより、家庭教育と学校教育、教育相談等を中心とした指導、措置の適切な在り方を考える。	寺田晃
15	障害児の福祉と教育の展望	障害児の福祉の理念と構造、福祉行政実践の現況等を概観するとともに、第7章から第14章までの各障害型の特徴を総括することにより、福祉と教育の今後の在り方、問題点を展望する。	同上

＝ 犯 罪 と 法 ＝ （R）

〔主任講師：内藤　謙（千葉大学教授）〕

全体のねらい

現体社会における犯罪現象に対して法がどのようにかかわるかを、近代刑法の展開という視点から講義する。犯罪とは何か、刑罰とは何かという基本的な問題の検討が中心になるが、現代社会が犯罪と刑罰について提起しているさまざまの問題を手がかりにして、できるだけ具体的に説明することにしたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	犯罪現象の基本動向	戦後の日本における犯罪現象の基本動向を最近の動向を中心に検討するとともに、犯罪現象の国際比較と犯罪原因論についても若干の考察を試みる。	内藤　謙（千葉大学教授）
2	犯罪現象と法の機能	犯罪現象に対する法の機能を、犯罪現象は、法を超える領域とも、また、刑事法以外の法領域とも、かかわりをもっていることを視野に入れて、近代法の展開という観点から検討する。	同　上
3	犯罪の法的処理過程(1)――警察・検察庁の段階	現在の日本の刑事司法過程で、犯罪はどのように処理されているか、という問題を、制度運用の量的事実の側面を中心に、警察・検察庁の段階について検討する。	同　上
4	犯罪の法的処理過程(2)――裁判所・行刑施設の段階および少年事件の特則	犯罪の法的処理過程の問題を、制度運用の量的事実の側面を中心に、裁判所・行刑施設の段階について検討する。そして、少年事件の特別の処理過程についても考察する。	同　上
5	刑事法と国家	近代・現代の社会では、犯罪に対して刑罰を加える機能をもっているのは、国家だけである。このような国家刑罰権の根拠と限界をどのように考えるべきかを検討する。	同　上
6	罪刑法定主義	近代刑法の基本原理である罪刑法定主義の沿革の実質的・政治的根拠を考察するとともに、罪刑法定主義の内容と現代的意義について検討する。	同　上
7	刑法の機能	近代刑法の機能には、罪刑法定主義と結びつく人権保障機能、および、法益保護機能がある。この法益保護機能の内容を検討し、現代の問題状況と刑法の機能について考察する。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	刑法理論の系譜(1)ー旧派刑法理論の形成と展開	近代刑法理論の展開過程を、ヨーロッパにおける市民社会の成立期に形成・展開された前期旧派理論、それに続くフランス新古展主義刑法理論、ドイツ的な後期旧派刑法理論について検討する。	内藤　謙
9	刑法理論の系譜(2)ー新派刑法理論の形成・展開と「学派の争い」	旧派刑法理論に対抗して１９世紀後半に形成・展開された新派刑法理論の内容と特色を検討するとともに、新・旧両学派の「学派の争い」とその後の動向について考察する。	同　上
10	日本刑法典の史的展開と現代刑法理論の基本動向	日本の旧刑法典・現行刑法典の成立とその特色を、刑法理論の系譜との関連で考える。そして、現代刑法理論の基本動向を、日本、英米、フランス、西ドイツについて概観する。	同　上
11	犯罪論の諸問題(1)ー犯罪論の構成と構成要件該当性	刑法解釈学における犯罪の定義と犯罪論の構成について、その基本的内容と特色を検討する。そして、作為犯・不作為犯、因果関係を構成要件該当性の問題としてとりあげる。	同　上
12	犯罪論の諸問題(2)ー違法性と責任	違法の実質、正当防衛、緊急避難、法令行為・正当業務行為を違法性の問題として検討する。さらに、故意・過失、責任能力、違法性の意識、期待可能性を責任の問題として検討する。	同　上
13	犯罪論の諸問題(3)ー未遂犯と共犯、客観主義と主観主義	未遂犯に関連する問題と、共犯に関連する問題を検討する。そして、犯罪論における基本的な考え方の違いである、客観主義と主観主義の対立について考察する。	同　上
14	刑罰論の基本問題	刑罰の根拠と限界の問題について、応報刑論か目的刑論かという従来の一般的論議を検討し問題解決の方向を考える。そして、刑罰の種類と内容について、日本の現行法を中心に考察する。	同　上
15	刑事政策の現代的問題	法制度の全面改正が問題になっているものとして、自由刑の執行内容を規定する監獄法と保安処分がある。この二つの問題について、改正作業の動向に注目しながら、検討する。	同　上

＝裁判と市民生活＝（TV）

〔主任講師：井上治典（神戸大学教授）
〃　：三井　誠（神戸大学教授）〕

全体のねらい

近時、裁判に対する関心は高まってきてはいるが、日常的な市民生活にかかわる問題領域での裁判の「素顔」は、案外知られていない。また、司法といえば、裁判所の手続きだけを思いうかべる傾向がある。いったい裁判とは何なのか、市民生活にとって裁判所はどのような存在なのかを明らかにしていくことを通じて、司法制度とその作用をみるたしかな「眼」を養いたい。講義の前半部分は民事（井上）を、後半部分は刑事（三井）を取り扱い、最終会で全体のまとめを行う（井上・三井）。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	紛争とその処理手続き	民事の「紛争」とは何か、また紛争を解決する手続きとしては、どのようなものがあるのか。現代社会では、紛争解決の機関としてさまざまなものが用意されており、多様化の傾向をみせているが、そのなかで「訴訟」は、どのような役割と位置を占めているのか。	井上治典（神戸大学教授）
2	民事手続きの流れと原理	紛争が訴訟に持ち込まれた場合、訴訟手続きはどのように展開していくのか。手続きを支え、貫く、基本的な約束ごとを明らかにしながら、当事者を中心とした手続きにかかわる人の問題にも目を向けてみたい。また、仮差押え、仮処分、強制執行も取り上げる。	同上
3	裁判に対する利用者の期待と弁護士の役割	訴訟利用者は、裁判に対してさまざまな期待を持っているが、裁判はいったいどこまでそれに応えられるのか。近代裁判の合理性とその限界を探り、あわせて弁護士と依頼者（本人）との関係についても考えてみる。	同上
4	法廷における対話のあり方 ― 口頭弁論の意味とあり方を考える	訴訟の核心は、法廷における対話・論争にある。口頭弁論は、どのように行われるのか。民事訴訟の現状では、生き生きした弁論が失われてしまっているが、その原因はどこにあり、どうすれば弁論を活性化でき、訴訟らしい訴訟になるのか。	同上
5	訴訟と政策形成 ― 嫌煙権訴訟の分析	近時、社会状況を反映した新型の訴訟（現代型訴訟）が裁判に持ち込まれる傾向が増大してきているが、これらの訴訟はどのような特徴をもち、どのような機能を果たすべきか。いわゆる「嫌煙権訴訟」を題材として取り上げて、事件の経過を追いながら、問題を探る。	同上
6	少額紛争と裁判所 ― 簡易裁判所を考える	日常生活のなかで生じる軽微な事件は、裁判所でどのように取り扱われているのか。簡易裁判所は大衆の裁判所として発足したはずであるが、十分にその要請に応えているだろうか。「少額裁判所」の構想などを見ながら、少額事件の解決手続きのあり方を考えてみる。	同上
7	和解と調停	当事者間の話し合いと了解を基本にした解決手続きとして、和解および調停があるが、それはどのようなものなのか。また、なぜ諸外国からも、近時、日本の調停が注目されてきているのか。和解、調停の運用についても考えてみよう。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	刑事手続きの流れと原理	殺人事件が発生したとしよう。警察が捜査を開始し、検察がこれを引き継ぎ、起訴するか否かを決定する。起訴されれば裁判所のもとで審理が進められ、有罪判決が下されると刑が執行されることになる。このシステムを歴史的・比較法的視点を交えて概観する。	三井　誠（神戸大学教授）
9	捜査と人権	刑事事件の真相を解明するには、捜査により犯人を発見し証拠を収集・確保しなければならない。しかし、捜査が綿密になり、また強力化すればするほど人権侵害を伴う危険性も大きくなる。	同上
10	検察官の役割	刑事司法において占める検察官の役割はきわめて大きい。独占的に起訴不起訴の裁量権をもつだけでなく、捜査、公判活動も積極的である。一人三役、刑の執行も含めると、四役の働きである。これは「検察官司法」と呼称されることもある。これをどう評価すべきか。	同上
11	裁判官と事実認定	正しい事実認定は、国民の裁判に対する信頼を確保する鍵である。裁判官の心血もこの点に注がれる。それでは、刑事訴訟法は事実認定の適正さを担保するためにどのような法則を設けているか。あわせて、令状の発付、量刑など広く刑事裁判官の働きをも眺める。	同上
12	冤罪と刑事弁護	「冤罪は最大の人権侵害である」と指摘される。しかしその跡はたたない。昭和50年代には刑事再審が社会の耳目を集めた。なぜ　罪は生じるのか。その防止及び救済の対策はなにか。これを被告人の防御権及び刑事弁護の視点から捉えかえしてみるとどうなるか。	同上
13	市民の刑事司法への参加	市民と司法の距離は遠いと言われる。たしかに先進諸国ではなんらかの形で市民の裁判関与が認められているのに、わが国にはそれがない。関与を求める市民の声もさまど強いとは思われない。それはなぜか。検察審査会制度を通して、そのあたりの事情をさぐる。	同上
14	刑事事件からみた戦後史	戦後の著名な刑事事件を追跡すると、戦後史を追いかけているような感じを抱かせられる。それほど刑事事件は時代を映す鏡的な側面をもつ。個別事件でなくとも、覚せい剤事犯、交通事犯、公害事犯等、大量現象をつかまえても同じことがいえる。刑事事件をこのような目で見返してみよう。	同上
15	司法制度を展望する	これまでの講義の総まとめとして、民事・刑事の手続きをめぐるさまざまな問題点やそれらの手続きにかかわる人々の意識を整理・分析しながら、将来への展望を試みる。あわせて、これまで取り上げることができなかった問題にも言及する。	井上治典 三井　誠

＝ 日 常 生 活 と 法 ＝(TV)

〔主任講師：川井　健（一橋大学長）〕

全体のねらい

日常生活において重要な役割を果たす民法が施行されて以来、すでに90年近くになる。この間、民法はあまり改正されていないが、社会の変化はいちじるしい。法と社会のズレを調整してきた判例の変遷に留意しながら、現在の日常生活上の重要な問題をとりあげて、民法を説明したい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	民法の意義	民法は、市民社会における財産や家族をめぐる紛争を解決する基準となる法である。民法典のほか判例法や慣習法があることを述べ、民法の解釈や民法の効力についても言及する。	川井　健（一橋大学長）
2	権利とその主体	民法は紛争を解決する便宜的手段として、各種の権利を認めている。権利の実現はどのように行われるのか。また、権利の主体である人の法律上の問題を扱う。	同　上
3	契　　約	契約とは何か。契約自由の原則は、事実上約款により制約されており、公序良俗や強行法規の役割が増大している。契約と信義誠実などについてもふれる。	同　上
4	不動産の売買	不動産の売買による所有権の移転や、所有権の移転を第三者に対して主張するために必要な登記について述べる。また不動産物権変動の公信否定などについてふれる。	同　上
5	動産・債権の売買	動産の売買における所有権の取得の問題や、売主が無権利者であった場合の買主の保護の問題などをとりあげる。また、キャッチセールスや債権の譲渡にともなう問題を扱う。	同　上
6	売買契約の履行	売買契約の履行としての売主の登記移転、引渡し、買主の代金支払などの義務をとりあげる。また、弁済に関連しての相殺や売主と買主の義務、債権の消滅時効の問題などを扱う。	同　上
7	売買契約の不履行	売主や買主が履行を怠った場合や履行が不能となった場合の強制履行、損害賠償の範囲、契約の解除の問題について述べる。また、金銭債権の遅滞などについてふれる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	売買と目的物の瑕疵	売買が行われたとき、権利や物に瑕疵があった場合の売主の責任はどうなるか。瑕疵担保責任と錯誤の関係や保証書の問題などを取りあげる。	川井　健
9	借金を保証	金銭消費貸借契約と利息の関係について述べる。またサラ金問題と関連し、利息制限法や貸金業規制法を取りあげるほか保証や連帯債務、身元保証などについてもふれる。	同上
10	請負と委任	請負契約における注文者の保護の問題として請負人の瑕疵担保責任や約款の果たす役割を述べる。また委任契約では委任と代理との関係、善良な管理者の注意義務や報酬請求権についてふれる。	同上
11	契約の無効・取消	錯誤、虚偽表示、心裡留保などによって契約が無効とされる場合や、詐欺、強迫によって契約が取消される場合の問題をとりあげる。詐欺と善意の第三者の保護についても述べる。	同上
12	所有権	所有権は物権の中心となる権利とされており、これを制限する各種の物権が法定されているほか慣習法上の物権もある。所有権の取得時効や共有の問題も取りあげる。	同上
13	利用による所有権の制限	所有権を制限する物権である地上権、永小作権、地役権のほか入会権の問題をとりあげる。所有権の取得時効や共有の問題も取りあげる。	同上
14	借家	民法の賃貸借の規定が大正10年の借家法によって修正され、賃借権の物権化が認められ、さらに昭和16年の借家法の改正によって賃貸借解約に制限基準が設けられたことを述べる。	同上
15	借地	民法の賃貸借の規定が大正10年の借地法の制定によって修正された。明治42年には建物保護法が住宅問題や土地利用の観点から借地法のあり方を考える。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
16	担保による所有権の制限	金銭債権などを確保する手段として、抵当権や質権などがある。これらが所有権を制限する担保物権であることを説明し、留置権や先取特権のほか、仮登記担保などをとりあげる。	川井　健
17	抵　当	抵当権の設定の要件や効果などを説明する。また、特殊な抵当としての共同抵当や根抵当などにもふれ、関連して、工場抵当法や企業担保法にも言及する。	同　上
18	質	庶民金融として重要な役割を果たしてきた質権を説明する。しかし、実際界では、質権はあまり使われなくなってきており、譲渡担保がこれに代わる役割を果たしている。さらに新しい担保もつぎつぎに考案されている。	同　上
19	過失責任と無過失責任	過失責任の原則とこれを修正する無過失責任、中間責任の問題をとりあげる。債権侵害、医師の責任、安全配慮義務と不法行為との関係も扱う。	同　上
20	人格権の保護	人間にとって、もっとも重要な価値の一つである人格権は民法上どう扱われているか、名誉毀損、報道の自由との関係、プライバシーの問題などを取り上げる。	同　上
21	交通事故	交通事故の被害者の救済として、民法を修正する自動車損害賠償保障法がある。加害者が責任を負う要件、保険金給付の問題、国、公共団体の責任を取り上げ、航空機、列車事故にもふれる。	同　上
22	公　害	イタイタイ病、四日市ぜんそく、水俣病などの公害に対し、裁判所がどのような判断を示してきたかということを説明し、大気汚染防止法、水質汚濁防止法、公害健康被害補償法などを概観する。	同　上
23	欠陥商品と消費者保護	複雑な流通機構のもとで、欠陥商品による被害者救済はどのように行われるかを考える、また森永ひ素ミルク事件など欠陥商品事故を概説し、消費者救済立法の進展を見る。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
24	損害賠償	損害賠償の範囲、損害算定の基準時、過失相殺などの問題を述べる。また、慰謝料についての損害賠償請求権の相続の問題や、補償や保険についても取り上げる。	川井　健
25	結婚	家族についての民法の扱いを概観したうえで、婚姻についての要件や効果を、男女平等、個人の尊厳という原則の下で検討する。また内縁の問題も扱う。	同上
26	離婚	離婚は、どのようにして成立するか。外国の離婚法の動きとともに、日本の裁判所が示している態度を見る。あわせて離婚後の財産分与請求権、子供の監護の問題を扱う。	同上
27	親子	嫡出でない子の地位や養子のあり方などについて検討する。特別養子、菊田医師事件にみられる虚偽出生届、人工受精子、体外受精子の問題も取り上げる。	同上
28	親権・後見・扶養	親権に関し、子の監護や子の財産の管理の問題を扱う。子の引渡請求、後見制度を取り上げる。親族間の扶養の問題では社会保障との関係にふれる。	同上
29	相続	財産の相続はどのように行われるか。相続人、相続分、相続財産や遺産分割を取り上げる。特別受益や寄与分にも言及する。あわせて相続回復請求権、相続の承認と放棄、財産分離などをも説明する。	同上
30	遺言	財産処分の自由は遺言によっても行われる。しかし遺言には厳格な方式が必要とされる。また、一定の法定相続人に対する遺留分は遺言によっても侵されない。これらを説明する。	同上

＝ 取引と企業の法 ＝（R）

〔主任講師：龍田　節（京都大学教授）〕

全体のねらい

現代の経済活動の主な担い手は企業であり、企業をめぐる取引の法律関係を知ることは重要である。また、企業の多くは会社形態をとるから、代表者の権限など、組織の問題が企業の取引に深く関係する。これら企業の組織および取引は、広い意味の商法が定める制度に乗って動く。その基礎的な部分をわかり易く説明する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	企業と取引	1　企業はどのような取引をするか 2　消費者と企業との間の取引 3　企業の取引を法律の目で見ると 4　市民の法と企業の法	龍田　節 （京都大学教授）
2	商品の流通	1　商品が消費者の手に渡るまで 2　販売店・代理店のいろいろ (1)卸売商　(2)代理店　(3)委託販売（問屋） (4)ブローカー（仲立） 3　企業と企業の間の売買	同　上
3	運送と倉庫	1　運送企業と物品運送のいろいろ 2　物品運送契約のしくみ 3　倉庫に物を預ける 4　物の代わりに動く証券 5　事故が起きたときの処理	同　上
4	旅行	1　旅行のプランといろいろの契約 2　運賃の支払 ── 切符さまざま 3　旅の宿と食事 4　事故が起きたときの処理	同　上
5	危険への備え	1　損害保険のいろいろ 2　損害保険契約のしくみ (1)契約に名の出る人　(2)保険料の支払 (3)保険金の額 3　保険の新しい働き ── 責任保険	同　上
6	からだと保険	1　からだに関する保険のいろいろ 2　生命保険契約のしくみ (1)契約に名の出る人　(2)嘘をつかない (3)保険金の受取り 3　けが・病気に備える保険 4　老後の生活と保険	同　上
7	約款に注意	1　約款を使う取引 2　約款がなぜ拘束力を持つか 3　約款をよいものにするために (1)法律による規制　(2)行政官庁の関与 (3)裁判所の役割　(4)消費者取引との約款	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	企業の名称	1 企業に名前をつける 2 紛らわしい名前が使われたとき 3 名前を貸したときの責任 3 営業や商品の名称・標章	龍田 節
9	取引をする権限	1 企業の活動を支える人たち 2 店員とセールスの従業員 3 支店長・部長・課長など 4 社長・専務・常務などと代表取締役 5 権限をよこしまに使ったとき 6 会社の事業目的からはみ出す取引	同上
10	トップ・マネジメント	1 トップは誰が選ぶか 2 トップは何をするか 3 企業の意見決定のしくみ 4 取締役会の役割と手続 5 社長が独断でした行為	同上
11	経営者の姿勢	1 会社の利益と取締個人の利益 2 役員報酬の決め方 3 取締役と会社との取引 4 会社を出し抜くな	同上
12	経営者の責任	1 会社に生じた損害の賠償 2 まわりに迷惑を及ぼしたことの責任 3 会社資本の充実 4 監査役の責任 5 企業の社会的責任	同上
13	経営をチェックする	1 経営に対する監査と是正 2 会社の規模によって違う監査制度 3 会計の監査 4 業務の監査 5 取締役から独立していること	同上
14	株主の声	1 株主は企業のオーナー 2 株主総会は祭典か 3 株主の声を総会に 4 株主のいろいろな権利 5 総会屋と手を切る	同上
15	企業の資金	1 企業の資金繰り 2 返す必要のない資金 ── 株式 3 増資さまざま 4 大衆からの借金 ── 社債	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	株式の売買	1 株主になる道 2 上場株式と店頭銘柄 3 非公開会社の株式 ── 譲渡制限 4 株式の名義書換 5 会社が自社株を買うのは禁物	龍田　節
17	株式の配当と分割	1 株式投資からの収益 2 配当は利益から 3 持株のふえる楽しみ 4 半人前の株式 ── 端株	同上
18	投資のリスク	1 資産運用の狙いどころ 2 株式投資の危険性 3 株式の信用取引 4 商品の債券の先物取引 5 プロまかせの資産運用 6 甘言に乗るリスク	同上
19	会計と開示	1 経理のごまかし 2 損益を判定するプロセス 3 ガラス張りの企業経営	同上
20	会社を作る	1 株式会社の設立 2 会社のいろいろ 3 会社以外の共同企業 4 会社は法人である	同上
21	会社の変動	1 会社の衣替え 2 会社売ります 3 企業の融合と分裂 4 株主やめます	同上
22	企業のグループ	1 横のつながりと縦のつながり 2 親会社と子会社 3 国境をこえた企業戦略	同上
23	倒産	1 行詰まりと再建 2 戦線を縮小して再出発 3 会社が消えてゆくとき	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	お金の流れ	1　物の流れとお金の流れ 2　銀行取引と手形・小切手 3　手形・小切手のしくみと働き	龍田　節
25	手形の振出	1　手形・小切手の振出に必要なこと 2　書いてよいこと悪いこと 3　書かずに放っておくと 4　勝手に署名、勝手に手直し	同　上
26	手形の裏書	1　手形・小切手には足がある 2　支払わなくてよいはずなのに 3　白昼の死角	同　上
27	手形の支払	1　不渡りは命取り 2　支払をする側と求める側 3　権利の上の短い眠り	同　上
28	紙にのった権利	1　紙と権利の結びつき 2　紙は強し、されど怖し 3　紙から権利を切離す 4　クォヴァディス──紙よどこへ行く	同　上
29	貿易のしくみ	1　船の手すりをこえるとき (1)貿易条件　(2)FOB売買　(3)CIF売買 2　信用のネットワーク (1)荷為替　(2)商業信用状 3　ふえる黒字の悩み	同　上
30	企業法の歴史と特色	1　ベニスの商人とナポレオン 2　文明開化とお雇い外国人 3　国の数より多い商事法 4　企業法のアイデンティティ	同　上

＝ 日本の社会と法 ＝（R）

〔主任講師：碧海純一（放送大学教授）〕

全体のねらい

この講義は専門科目である。しかし、60・61・62年度に提供される法律関係の諸科目の充実度に鑑み、この講義は専門課程における教養科目として構想されている。日本の法をサンクロニクに（比較文化的に）かつディ・クロニクに（歴史的に）考察することを眼目とする。日本独特の社会構造と法との関係が基本問題である。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本における法の継受	1 法の継受ー法における自然と人為 2 継受と立法 3 継受法の日本的運用 4 継受と言語 5 ドイツ法と日本 6 戦前の日本におけるエリート養成と陸海軍	碧海純一 （放送大学教授）
2	大陸法系としての日本近代法	1 大陸法系と英米法系 2 成文法と判例法 3 現代日本法の性格 4 裁判の諸類型 5 司法権の独立	同上
3	日本法の史的展望(1)ー古代国家と律令の継受	1 固有法の時代 2 律令法の時代 3 律令法の変質と中世法の萌芽	植田信広 （九州大学助教授）
4	日本法の史的展望(2)ー武家社会の道理と法	1 中世武士の法観念 2 中世法の二つの顔 3 中世から近世へ	同上
5	日本法の史的展望(3)ー幕藩体制下の法と裁判	1 近世国家の権力構造 2 近世法の諸特徴	同上
6	日本の近代化と西欧法の継受(1)ー近代的法制度の成立	1 はじめに 2 明治国家の課題 3 西欧法との出会い 4 明治初期の裁判所制度	碧海純一 海老原明夫 （東京大学助教授）
7	日本の近代化と西欧法の継受(2)ー法典の編纂	1 明治憲法の制定 2 民法典の編纂 3 その他の主な法典の編纂	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	日本の近代化と西欧法の継受(3)－法典起草過程の具体例	1 問題の所在 2 プロイセン憲法闘争 3 井上毅の構想 4 レースラーの見解 5 明治憲法第71条の成立	海老原 明 夫
9	日本の近代化と西欧法の継受(4)－学説の継受	1 「学説継受」の時代 2 「学説継受」の具体例 3 ドイツ法学隆盛の理由 4 ドイツ普通私法における法源と学説	同 上
10	近代日本法の成熟	1 西欧法の「継受」と日本的な法 2 日本的な法学の提唱 3 判例研究の提唱 4 「概念法学」批判 5 社会的弱者の法的救済	碧 海 純 一
11	第二次大戦の終結と日本の法	1 占領初期の法改革 2 新憲法の制定へむけて 3 労働三法と農地改革 4 占領政策の転換	同 上
12	日本国憲法の成立	1 日本国憲法の制定 2 「押しつけ憲法論」 3 国際環境の変化	同 上
13	法の支配	1 法とは何か 2 「法の支配」の原理の背景 3 現代日本と法の支配	同 上
14	立法改革とその限界	1 立法の実効性──法と社会	同 上
15	占領時立法と日本の改革	1 日本法の発展の概念 2 第二次大戦後の日本の社会と法 3 法の継受と立法 4 「法の支配」とフィードバックの概念 5 司法権の強化 6 日本の現行法体制における三権の関係	同 上

＝ 国際社会と法 ＝ (R)

〔主任講師：横田洋三（国際基督教大学教授）〕

全体のねらい

相互依存関係の深まる今日の国際社会においては、いかなる国家もその国限りですべての生活上の必要を充足することはできない。しかし他方では、今日の国際社会は依然として複数の主権国家の併存を前提としており、多様性と不安定性がつねに基調となっている。こうした状況のもとでは、法を通じての秩序の確保が強く要求され、またその法のあり方には、国内社会とは異なる特異性が見られる。このことをふまえて、国際社会における法の意義と役割を、とくに日本とのかかわりを念頭におきつつ、考えることにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	国際社会における法の意義	国際社会において、法が必要とされる事情を考察し、あわせて、国際社会の構造の特殊性からくる法の存在形態の特異性にも目を向ける。	横田洋三 国際基督教大学教授
2	国際社会を規律する法の種類	国際関係を規律する法には、国際法、国際私法、国際組織法など、さまざまなものがある。それらを個々に検討すると同時に、それらの法の相互の関係を明確にする。	同上
3	国際法の成立	国際関係を規律する法の中で中心的位置を占めるものが、国際法である。この国際法の成立のいきさつを、16、7世紀のヨーロッパにさかのぼって検討する。	同上
4	国際法の発展 －実定国際法体系の確立－	初期の国際法は、自然法の強い影響下にあった。しかし、次第に科学的思考の影響を受け、実証法体系へと移行し、19世紀には、実定国際法体系が確立した。この間のいきさつと、その政治的社会的背景を考察する。	同上
5	国際法の新展開 －新国際法秩序の形成－	今世紀に入って、戦争の違法化、国際機構の発達、個人の地位の向上など、伝統的国際秩序を根底からゆるがす現象が生じ、それに伴って国際法体系も大きな変容を余儀なくされている。この間の事情を、一つの必然的歴史の流れとしてとらえる。	同上
6	国際法の基本問題	従来、国際法学者の間で、理論上争われてきた基本問題のうち、(イ)国際法の法的性質、(ロ)国際法と国内法の関係、(ハ)国際法の法源、の3つについて考察する。	同上
7	実定国際法規 (1) －国際法の定立に関する規則－	現行の国際法の諸規則の中から、国際法の定立に関する諸規則をひき出して、検討する。とくに慣習国際法の成立の問題と、条約の締結、効力、実効性などに関する諸規則を考察する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	実定国際法規 (2) ー 外交関係法 ー	国際法の中でも比較的古くから慣習法として形成されてきた外交関係に関する諸規定、とくに、大使、公使をはじめとする外交官の職務、特権、免除などについて検討する。	横田洋三
9	実定国際法規 (3) ー国家に関する諸規則ー	国際法上の重要な主体である国家の成立、種類、領域、主要な権利、義務などに関する実定国際法の規則を検討する。	同上
10	実定国際法規 (4) ー 海洋法 ー	古くから確立し、永い間安定した法秩序を形成してきた海洋法が、近年、大きな変容をとげつつある。伝統的国際法に基づく海洋法をふまえたうえで、今世紀における海洋法の新しい動向に焦点をあてる。	同上
11	実定国際法規 (5) ー 戦争と法 ー	国際法成立の直接の契機を与えた戦争と国際法の問題について、戦争それじたいが合法か違法かという問題と、戦争が起った場合に当事者によって守られるべき規則は何か、という二つの側面から検討する。	同上
12	個人と国際法	従来、国際法は、国家間の関係を規律する法として確立されてきたために、個人については直接規定することがなかった。しかし、最近は、個人の地位の向上とともに、個人について直接規定する国際法規則が増えてきた。これを考察する。	同上
13	企業活動と国際法	近年、企業活動の国際化に伴い、国際法も企業活動や経済関係について、さまざまの規律を及ぼすようになった。こうした企業活動に関する国際法の諸規則を概観する。	同上
14	国際機構と国際法	今日の国際社会は、国際機構の存在を無視しては語れない。これらの国際機構は、国際法を基礎として成立し、国際法に従って行動するとともに、みずから、内部に独自の法体系を形成している。こうした国際機構に関する諸法規を概観する。	同上
15	国際社会の将来と法	今日、地球上の全人類が平和のもとで繁栄を享受するためには、国際法の介在が不可決の条件といっても過言ではない。そこで、国際社会の将来を展望し、そこにおける法、とりわけ国際法の役割とそれに対する日本のかかわりを考察する。	同上

＝ 経 済 活 動 と 法 ＝（R）

〔主任講師：来生　新（横浜国立大学助教授）〕

全体のねらい

現代の資本主義社会における国民の経済活動と行政との関係を法律学的に検討する。本来、資本主義は市場による非人為的な資源配分、自由な企業の理念を持つ。現代の資本主義社会がこのような古典的な資本主義理念にどのような修正を加えているのか、それが国民の福祉とどのように結び付くのかを法律学的に究明したい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	資本主義経済における国家の役割	1　資本主義経済体制 経済体制とは　　資本主義経済体制の特徴 2　資本主義経済体制における市場と国家の関係 資本主義の成立と国民国家の成立　　市民社会、市民法、夜警国家　　資本主義の進行に伴う国家の介入の増大	来　生　　新 (横浜国立大学助教授)
2	現代資本主義経済体制における国家の経済的機能	1　現代資本主義経済体制における市場と国家 現代資本主義の市場と国家　　雇用法による政府の経済的責任 2　国家のアジェンダとノン・アジェンダ 功利主義哲学と自然権思想　　市場の失敗と政府の失敗	同　上
3	経 済 政 策 と 法	1　現代の資本主義経済体制国家における経済政策の体系 経済的効率と他の社会的諸価値　　経済政策とは何か 2　政策手段と方法 経済政策の手段と法　　経済法の概念とこの講義の範囲・方法	同　上
4	経済政策実施の法手段と市場	1　法手段の態様 規制的手段　誘導的手段　直接・間接の経済活動 2　各種法手段と市場の関係 市場構造、市場行動、市場成果　　わが国の市場をとりまく法制度の概要	同　上
5	市場機能の維持と法―独占禁止法の目的と目的達成手段―	1　独禁法の目的規定の解釈 法の解釈と経済政策の手段性　　目的規定の構造　　究極目的の理解　　社会法的な立場からの独禁法理解 2　独禁法の目的達成手段 公正取引委員会と行政処分　　その他の目的達成手段　　公取委中心主義と改善可能性基準	同　上
6	独禁法の基礎概念	1　公正且つ自由な競争 不確定性の問題　　完全競争モデルとその現実的修正 2　事業者 事業者の意義　　公私混合領域における事業者 3　一定の取引分野における競争の実質的制限 一定の取引分野　競争の実質定制限	同　上
7	市場集中の規制(1)－私的独占	1　独禁法による公正取引の確保の意義 公正競争阻害性　　規制の政策的意義と公正競争の意味 2　特殊指定と一般指定 立法の変遷　　特殊指定と一般指定 3　一般指定の行為類型 差別的取扱　　不当対価　　不当顧客誘引　　事業活動の不当拘束　　取引上の地位の不当利用　　競争者に対する事業活動の妨害	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	市場集中の規制(2)－不当な取引制限	1. 定義規定の基本構造 2 共同行為の意義と成立 相互拘束・共同遂行と合意　合意形成のコストと個別当事者の利益　合意の存在の立証方法と排除措置　縦の合意と不当な取引制限 3 一定の取引分野における競争の実質的制限 合意の成立範囲と一定の取引分野　競争の実質的制限 4 公共の利益 従来の議論の対立　行政指導と公共の利益 5 課徴金	来生　新
9	市場集中の規制(3)－不公正な取引方法	1 独禁法による公正取引の確保の意義 公正競争阻害性　規制の政策的意義と公正競争の意味 2 特殊指定と一般指定 立法の変遷　特殊指定と一般指定 3 一般指定の行為類型 差別的取扱　不当対価　不当顧客誘引 事業活動の不当拘束　取引上の地位の不当利用　競争者に対する事業活動の妨害	同　上
10	市場集中の規制(4)－その他の市場集中規制	1 予防的市場集中規制 合併規制　株式保有の規制　役員兼任の規制 2 事業者団体に対する規制 事業者団体規制の位置づけ　規制の概要 3 独占的状態に対する措置	同　上
11	一般集中規制等	1 一般集中規制 一般集中規制とは　市場集中規制政策と一般集中規制の矛盾 2 同調的値上げの理由の報告 政策的意義　報告の徴収　40条の一般的な調査権、43条の公表との関係 3 国際契約に対する規制 規制の概要　国際契約等の規制の政策的意義	同　上
12	適用除外の諸制度競争	1 適用除外制度の歴史と理論的根拠 原始独禁法における位置づけ　昭和28年改正における位置づけ 2 原始独禁法以来の適用除外 自然独占と事業法令に基づく行為　無体財産権の行使　一定の組合の行為 3 政策的カルテル容認法 制度の歴史的変遷　適用除外カルテルの政策的な評価　積極的調整政策（PAP）の理念とカルテル政策	同　上

＝ 労 働 問 題 と 法 ＝（R）

〔主任講師：萩沢清彦（成蹊大学教授）〕

全体のねらい

現代社会において、労働問題はどのような意味をもっているか、どのようなことが問題となっているのか、労働問題を処理するためにどのような法制度が定められているのかを明らかにし、あわせて労働紛争の特殊性とその解決手段を解説して、国民生活と労働法との関係についての理解を深める。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	現代社会と労働問題	1 労働問題という意味 2 現代社会の労働の特色 3 商品としての労働の特色 4 労働者の生存のための労働法 5 憲法と労働法 6 労働法の内容と体系 7 生存権的基本権と労働基本権および労働法の体系	萩沢清彦（成蹊大学教授）
2	雇用の安定と新しい雇用形態	1 労働権と雇用の安定対策 2 失業救済から雇用安定対策へ 3 雇用対策の基本原則 4 労働者の募集、職業紹介、労働者供給事業 5 労働派遣事業 6 職業能力の開発 7 雇用保険事業 8 労働市場の開発 9 高齢者の雇用安定 10 身体障害者の雇用の促進 11 失業給付 12 失業対策事業	同 上
3	労働契約と労働条件	1 労働契約とは何か 2 労働契約と労働基準法 3 最低基準の原則 4 労働契約の締結 5 労働条件の原則	同 上
4	労働契約と就業規則・労働協約	1 労働条件の決め方 2 就業規則の作成・変更の手続 3 就業規則の効力 4 就業規則の変更と労働条件 5 就業規則と労働協約	同 上
5	賃金額の決め方と支払方法	1 賃金とは何か 2 賃金額の決定 3 賃金支払の確保 4 休業手当 5 企業の倒産と賃金	同 上
6	労働時間制度	1 労働時間制度の問題点 2 労働時間 3 休憩 4 休日 5 労働時間制の例外	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
7	女子および年少者の労働問題	1 女子労働問題の変化 2 男女雇用機会均等法の成立 3 女子の労働条件 4 雇用機会均等の確保 5 年少労働者の保護	萩沢清彦
8	労働災害の防止と補償	1 労働災害対策問題 2 労働安全衛生法 3 労災保険制度	同上
9	人事異動、服務規律、解雇	1 人事異動 2 服務規律 3 解雇	同上
10	労働組合	1 労働組合の設立 2 労働組合の組織形態 3 労働組合の組織機構 4 労働組合の統制	同上
11	団体交渉	1 労使間交渉の重要性 2 労使間の交渉方式 3 団体交渉の形態 4 団体交渉拒否の正当理由と不当労働行為 5 団交拒否紛争の解決	同上
12	労働協約	1 労働契約の機能 2 労働契約の成立 3 労働協約の効力 4 平和義務 5 労働協約の効力拡張 6 労働協約の終了	同上
13	争議行為	1 労働争議と争議行為 2 争議行為の正当性 3 争議行為の類模型 4 争議行為と賃金 5 使用者の争議行為 6 争議行為と第三者	同上
14	労働委員会と不当労働行為	1 労働委員会制度 2 労働委員会の組織と権限 3 不当労働行為	同上
15	労働紛争解決の手続	1 労働争議の調整 2 男女雇用機会均等紛争の解決 3 労働民事紛争の解決 4 不当労働行為の救済手続 5 労働保険審査	同上

＝ 政 治 思 想 Ⅰ ＝（R）

〔主任講師：佐々木　毅（東京大学教授）〕

全体のねらい

政治思想は日本国憲法の前提にしている政治についての考え方を理解する上で重要な役割を持つ。従ってこの点に可能な限り注意しながら講義を進めると共に、近代の民主主義をめぐるさまざまな批判や問題点に言及し、それらを考えていくための素材を提供することを目的にしている。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	ヨーロッパ政治思想の伝統(1)	ギリシャに生まれたポリスの政治学はヨーロッパの政治思想の骨組を形成する上で大きな影響力を持った。後代との関連で重要と思われる論点を概括的に論じる。	佐々木　毅（東京大学教授）
2	ヨーロッパ政治思想の伝統(2)	ポリスの政治学とともにキリスト教や中世の伝統も重要な役割を持っていた。宗教的権威対世俗的権力、法の支配などのテーマに即して重要な論点を解明する。	同　上
3	マキァヴェッリの政治思想	近代政治思想は古典・古代及び中世キリスト教世界の政治学を批判し、かいたいするところからはじまる。ここではルネサンスと、政治思想に新局面を開いたマキァヴェッリを取り上げる。	同　上
4	宗教改革と政治思想の展開	宗教改革は大衆を巻き込みつつ社会を変革するエネルギーを放出した点で、近代政治思想成立に重要な役割を果たした。ルターとカルヴァン、寛容と抵抗権などからこの問題を見ていく。	同　上
5	主権論と絶対主義の政治思想	ボダンによって提起された主権という新しい概念が王権神授説として定着していく過程を分析する。その背景となるフランスの宗教戦争についても触れる。	同　上
6	ピューリタン革命の政治思想	近代政治原理の母体となったピューリタン革命は多様な政治思想やユートピアを含んでいた。このうちミルトンと独立派、水平派、ハリトンの共和主義などを中心に解説する。	同　上
7	ホッブズの政治思想	伝統的な政治学はホッブズによって革命的転換が行われた。自然権と自然法、社会契約と政治社会、政治権力の成立などについての考え方を紹介しながら、どのような意味で革命的であったかを明らかにする。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	ロックの政治思想	近代政治原理の生みの親と言われるロックの自然法論、所有権論、社会契約論、革命論などを紹介し、政治思想の全体にアプローチする。	佐々木　　毅
9	モンテスキューの政治思想	三権分立論で有名なモンテスキューの政治思想の核心に迫る。法の見方、三政体、三権立論の背景にある政治的自由についての見方などを紹介する。	同　上
10	文明社会と政治思想	十八世紀ヨーロッパは物質的に豊かな文明社会に到達したと同時代の人は論じた。フランス啓蒙、スコットランドけんもうの文明社会論と彼らの文明社会に対する評価、態度を問題にする。	同　上
11	ルソーの政治思想	ルソーはフランス啓蒙の一翼を担うと言われるが、文明社会について独自の評価をし、独自の政治理論を組み立てた。「学問芸術論」「不平等起源論」「社会契約論」を中心に紹介する。	同　上
12	アメリカ独立革命の政治思想	近代民主主義の制度化の一例としてのアメリカを取り上げ、ペインと「ザ・フェデラリスト」に見られる民主主義論の特徴を明らかにする。	同　上
13	保守主義の政治思想	アメリカやフランスの革命に対し、民主主義に疑問や批判を投げかける思想があらわれてきた。保守主義の創始者バークと十九世紀最大の政治哲学者ヘーゲルの思想を中心に紹介する。	同　上
14	社会主義の政治思想	文明しこかいのあり方に疑問を持ち、経済制度の再編を唱える社会主義が登場してくる。サン・シモン、フーリエ、オーウェンに触れさらにマルクスの政治思想に焦点を当てる。	同　上
15	自由主義の政治思想	十八世紀の二つの革命の原則を容認しつつも、自由を制限する社会主義との対決も課題とする自由主義の流れが出てきた。トクヴィルとミルを取り上げ、今日の政治理論への展望とする。	同　上

＝政治思想Ⅱ＝（R）

〔主任講師：渡辺　浩（東京大学教授）〕

全体のねらい

近代日本社会とその政治の解明には、西洋渡来の制度文物だけではなく、それを受容し、しばしば変容させた日本の側の条件の理解が必要である。本講義は、徳川日本における政治思想の展開を解説することによってその一助となること、そして同時に、広く政治について考えるための刺激と素材を提供することを目標とする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	時代の概観	徳川時代の日本、それはいかなる社会であり、そこにおける思想とはどのようなものだったのか。思想の背景をなす当時の社会・政治の状態を回顧しつつ、思想史の全体的な流れを解説し、以後の講義への展望を提供する。	渡辺　浩（東京大学教授）
2	儒学の政治思想	徳川時代の知識人の政治思想の主流は儒学である。その影響は次第に庶民にも及んだ。この回は、儒学の一般的な政治観を、君・臣・民・天・命・革命・禅譲・放伐・徳・修己治人等の観念に触れつつ、解説する。	同上
3	武士と忠誠	武士が支配身分だったことは、中国・朝鮮等と対照的な日本史の顕著な特色である。この回は、戦国武士及び徳川時代の忠誠・規範意識とその影響を、「武士道」論や赤穂事件論にも触れながら、論じる。	同上
4	武士と「仁政」	政治とは何か、特に、統治は誰のためになされるのかという問いへの答えは、決して自明でない。この回は、この問いに関わる徳川時代の人々の議論を紹介する。儒学の「革命」論はその一つの焦点である。	同上
5	伊藤仁斎の政治思想	京の町人儒者、伊藤仁斎とその子東涯による新しい儒学、いわゆる仁斎学の内容を説明する。それは、真面目で暖かな思いやりの態度を全ての人の倫理として強調し、それを政治においても実行すべきだとするものである。	同上
6	荻生徂徠の政治思想	幕府に近かった荻生徂徠は、天下国家を治めるために儒学があるとして独自の思想体系を構築し、それに基く政策論をも展開した。その思想は知識人の世界を一時席捲し、巨大な影響力を持った。この回は、その内容を説明する。	同上
7	「家」と「天下」	徳川時代人が頭に描いた政治社会像は、しばしば、いわば過去から未来へ延びる筒状の「家」が無数にピラミッド状に積み上げられた構造を持つ。この回は、日本の「家」の特質を論じつつ、その倫理・政治思想との関連を探る。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	反文明とユートピア －安藤昌益－	文明は人類にとって恩恵であろうか。これを害悪と見、それを支える思想と対決し、太古の理想社会への復帰を夢みた人々もいる。この回は、賀茂真淵等にも触れつつ、特に安藤昌益の思想を解説する。	渡辺　浩
9	叛逆の論理 －山県大武・大塩中斎－	特に徳川時代人にとって、時の政治体制に正面から叛逆することは、知的精神的にも至難だった。しかし、自己の築いた思想を足場に、実際にそれを試みた人々もいる。この回は、特に山県大弐と大塩平八郎について論じる。	同　上
11	「尊王論」の前提	徳川時代、天下様（将軍）と天子様（天皇）との関係はすこぶる曖昧で、これをめぐって種々の議論が発生した。それを経る内に、次第に、いわゆる尊王論が昂揚していったのである。この回は、その過程をたどる。	同　上
10	華夷思想と日本国観	徳川時代人は、世界とその中における日本の位置について、いかに理解し、どう説明したのだろうか。この回は、中国渡来の華夷思想を一つの焦点としつつ、当時の対外観及びその関連における日本国観について論じる。	同　上
12	村人達と「一揆」	1945年まで、「国体」は、日本の重要な政治用語だった。その直接の淵源は会沢正志斎・藤田東湖等の後期水戸学にある。本来徳川体制の維持強化を目指しながら、機能においてその墓穴を掘ったこの逆説的な思想を解説する。	同　上
13	本居宣長の政治思想	いわゆる「もののあはれ」の文学論の首唱者、『古事記伝』の著者、伊勢国松坂の医師本居宣長の国学は、政治思想としても興味深く、かつ歴史的に重要である。この回は、本居宣長の政治思想の内容を解説する。	同　上
14	「国体」の逆説 －水　戸　学－	徳川時代、人口の圧倒的多数は村人だった。彼等にとって、政治とは、正義とは何であったのか。興味深いがすこぶる難問である。そこで特に百姓一揆とその指導者の史料に材をとって例示的な説明を試みる。「世直し」騒動にも言及する。	同　上
15	西洋観と「開国」	徳川時代人は、西洋をどう見ていたのか。洋学者を含めた当時の人々の西洋観とその変化をたどり、更にペリー来航以後の「開国」をめぐる諸議論を紹介・解説する。	同　上

＝ 現 代 政 治 理 論 ＝ （TV）

〔主任講師：阿部　斉（放送大学教授）〕

全体のねらい

政治理論は、今日の政治的現実に適切な説明を与え、今後の政治的変化を的確に予測する上で、大きな役割を果たす。現代の政治理論は、大きく分ければ、ヨーロッパで発展した伝統的理論と、大戦後にアメリカで発展した行動論的理論とに分けられよう。以下、これら二つの流れの双方において、政治理論を概観することにしたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	現代国家の理論	19世紀までの代表的な国家理論である一元的国家論やマルクス主義的国家論との対比させながら、バーカーやラスキの唱えた多元的国家論を考察し、あわせて現代国家の理論的位置づけを明らかにする。	阿　部　　斉（放送大学教授）
2	マルクス主義の政治理論	マルクス主義は19世紀の代表的な政治理論のひとつであるが、今世紀に入るとともに、社会的経済的現実の変化に対応して、新たな理論的発展を遂げた。ここでは、レーニン、ベルンシュタイン、グラムシらの政治理論を検討し、マルクス主義の現代的意義を確かめる。	同　上
3	自由主義の政治理論	自由主義は今日なお西欧の政治哲学の根幹を成している。現代の自由主義に大きな影響を及ぼしたトクヴィルやミルのほか、今日の自由主義哲学を代表するバーリン、アメリカ的自由主義の特質を解明したハーツの理論を検討する。	同　上
4	エリートの理論	マルクス主義と自由主義に対抗する理論として生まれたエリート理論は、平等を前提とする自由民主主義の政治制度のもとで、いかなる意義を持つであろうか。パレート、モスカ、ミヘルス、ミルズとエリート論の系譜をたどりながら、それぞれの特徴を明らかにする。	同　上
5	大衆社会の政治理論	エリートと対抗関係に立つのは大衆であるが、大衆の政治的特性の分析も現代政治学の重要な課題である。ウォーラス、リップマン、デューイ、リースマンらの理論をとりあげ、それぞれの意義を明らかにする。	同　上
6	政治権力の理論	第二次世界大戦後、アメリカでは心理学、社会学、統計学などと密接に結びついた新しい政治学が興隆した。その出発点となったメリアムの政治学とそれを継承したラズウェル、さらにダールの政治学を政治権力の理論に焦点を合わせながら検討する。	同　上
7	政治システムの理論	現代政治学の特色の一つはシステム論の導入である。その導入に先駆的役割を果たしたイーストン、政治システム論を構造・機能分析によって展開したアーモンド、さらにドイッチュのサイバネティクス・モデルなどを紹介し、システム論の意義を検討する。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	意思決定の理論(I)	第二次大戦後のアメリカ政治学の二本の柱は、権力論と意思決定論であった。ここではまず、合意的意思決定を扱う代表的な理論の一つであるゲームの理論をとりあげ、囚人のディレンマゼロサム・ゲームなどを紹介し、その政治学的意義をさぐる。	阿　部　　斉
9	意思決定の理論(II)	ロールズの「正義論」をとりあげた後、組織内における意思決定論の特質を究明したサイモンの理論、さらにそれを発展させたリンドブロムのインクリメンタリズムを紹介し、政治的意思決定過程における政治的なものの特質を解明する。	同　上
10	意思決定の理論(III)	現代社会で最も多い意思決定の方法は多数決である。しかし多数決はかつてコンドルセも指摘したようにさまざまなパラドックスを持っている。アロウの一般可能性定理を中心に、多数決の問題点を追求する。	同　上
11	政治参加の理論	政治参加は現代民主政治の最も重要な特徴の一つである。しかし、政治参加は決して平等に行われているわけではない。だれが最もよく政治に参加するかを明らかにしたヴァーバ、ナイ、キムらの研究を通して、政治参加の問題点を探る。	同　上
12	集団行動の理論	利益集団の圧力活動にみられるように、集団行動は、今日の政治過程における最も重要な要因の一つである。集団行動の政治的意味について、古典的成果を残したベントレイからトルーマン、オルソンに至る一連の研究を検討する。	同　上
13	投票行動の理論	利益集団と並んで政治過程で中心的な役割を果たすのは政党と有権者である。ここではサルトーリのたてた政党制分類のためのカテゴリーや不完全情報による不覚実性の問題を導入したダウンズの合理的投票行動論をとりあげ、それぞれの問題点をさぐる。	同　上
14	民主主義の理論	理念的民主主義と現実の政治との間には緊張・対立の関係がある。この点を指摘したクリックの政治概念、アメリカ的民主政治の経験を理論化したダールのポリアーキー論、さらにレイプハルトの多極共存型民主主義の理論を紹介し、民主主義の問題点を明らかにする。	同　上
15	現代政治理論の課題	第二次大戦後、アメリカを中心に発展した行動論的政治学は多くのすぐれた成果を生みだした。しかし、行動論的政治学は万能だろうか。イデオロギーの問題やアレントの批判などを通じて行動論的政治学の限界を見極め、現代政治理論の問題をさぐる。	同　上

＝ 現 代 の 政 治 生 活 ＝ （ＴＶ）

〔主任講師：堀江　湛（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

政治は我々の日常生活と決して無縁ではない。それどころか、今日、政治は我々の生活の隅々に至るまで深い関わり合いを持っている。政治は、一方で急速に国際化しつつある。他方、政治は経済や社会活動とも密接に関連し、運動するようになった。これら政治生活の諸側面を国家や、政府、国会、政党、選挙、公共政策やマスコミ、世論などと関連づけながら考察していく。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	政治生活の拡大と国際化	(1) 政治と社会生活のかかわり (2) 金のかからない政府から巨大政府へ (3) 国際要因の政治に及ぼす影響	堀江　湛 （慶應義塾大学教授）
2	政治の性格と国家・政府の役割	(1) 政治とは何か (2) 政治権力と正統性 (3) 新しい正義論と最小国家論	同　上
3	現代国家の構成原理と政治発展	(1) 国家の成立と政治とのかかわり (2) 現代国家の構成原理としての立憲制 (3) 権力分立制と行政国家 (4) 代議制と民主集中制 (5) 政治発展と比較政治学	同　上
4	望ましい政治生活のあり方	(1) イデオロギー (2) 権威主義的パーソナリティー (3) 自由主義 (4) 民主主義 (5) 社会主義	同　上
5	合意形成の主体としての政党	(1) 派閥から政党へ (2) 議員政党から大衆政党へ (3) わが国における政党の誕生 (4) 現代の政党システム (5) 政党政治のパターン	同　上
6	集団利益と公共政策を媒介する圧力団体	(1) 利益集団と政治過程 (2) 伝統的利益集団と新しい公共利益集団 (3) 利益集団自由主義と集団利益の過剰代表 (4) 米国におけるロビイスト	同　上
7	国民の政治意識とマスコミ	(1) 政治的社会文化 (2) 権威主義・疎外・アノミー (3) 政治文化と価値観の転換 (4) マスコミと世論	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	政治参加の主要な装置としての選挙	(1) 民主的選挙の四原則と普通選挙 (2) 平等・直接・秘密選挙 (3) 代表選出の方法	堀江　湛
9	外交政策の形成と安全保障	(1) 投票行動研究の前史 (2) コロンビア・グループとミシガン・グループの研究 (3) シュミレーションによる投票行動予測 (4) 投票行動の数理的アプローチ (5) 投票行動研究における新しい展開 (6) わが国の投票行動	同　上
10	公共政策の形成と国会の役割	(1) 行政国家化と国会の比重 (2) 国会の組織 (3) 法律の審議 (4) 予算と国会審議 (5) 国会における立法過程 (6) 与党自民党の部会と族議員	同　上
11	公共政策の遂行と行政の役割	(1) 行政裁量権の拡大と行政責任 (2) わが国行財政の特色 (3) 予算の編成過程	同　上
12	公共政策形成の効率化と危機管理	(1) 行政委員会と審議会 (2) 審議会政治とネオ・ポラティズム (3) デモクラシーと危機管理	同　上
13	外交政策の形成と安全保障	(1) 平和の維持と国際連合 (2) 第二次大戦後の国際政治の動向 (3) 平和の維持	同　上
14	公共政策形成の一環としての司法過程	(1) 裁判と政治 (2) 違憲立法審査権 (3) 最高裁判事の司法行動	同　上
15	地方自治と都市行政の課題	(1) 公共政策と地方自治 (2) 米国の地方自治とシティー・マネーズャー (3) わが国の地方自治 (4) 都市行政の課題	同　上

＝ 現代の国際政治 ＝（TV）

主任講師：神谷不二（慶應義塾大学教授）
〃　　：高橋和夫（放送大学助教授）

全体のねらい

戦後の国際政治の展開を鳥瞰し、現代史を規定してきた諸要因を考え、さらにその将来を占ってみる。詳細な部分像ではなく簡潔な全体像を、事実の羅列ではなく分析のための体系的な枠組を提示したい。言いかえるならば学生自らが国際政治を考えていく上での案内図を描き出すことが本コースのねらいである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	第二次大戦後の世界	戦後の国際政治を、(1)米ソ超大国の対立と核戦略の展開、(2)アジア・アフリカの独立、(3)国際的な経済的相互依存の深化の三つの流れから概観し、コースの全体像を提示する。	神谷不二（慶應義塾大学教授） 高橋和夫（放送大学助教授）
2	ヨーロッパの冷戦	ポーランドの悲劇に始まるヨーロッパにおける冷戦の展開を課題とし、米ソ関係が大戦中の同盟から戦後の対決へと変貌を遂げる推移を振り返りその意義を考える。	同上
3	板門店からキューバへ	朝鮮戦争以後キューバ危機までの米ソ関係を取り扱う。特に米ソが核兵器とその長距離運搬手段を保有したことの軍事的、政治的意味を探り、両超大国の核戦略の展開を考察する。	同上
4	デタント	キューバ危機以降の米ソ関係を概説する。ニクソン、キッシンジャーのデタント、ソ連軍のアフガニスタン介入、レーガンのＳＤＩなどを現代史の中に位置づける。	同上
5	アジア・アフリカの独立	世界の人口の大半を占めるアジア・アフリカ地域の独立とその後の苦悩を振り返りつつ、米ソの世界的対立を背景として推移してきた第三世界の動向に焦点をあてる。	同上
6	インドシナ戦争とASEAN	米ソ日中の利害の錯綜する東南アジアは、西側寄りのASEANと共産勢力の支配するインドシナに二極分解した。その過程を分析し、国際政治におけるこの地域の役割を論ずる。	同上
7	中ソ対立と米中接近	共産圏の二大国間の対立は、米中の接近という事態を導き出した。この中ソ対立と米中接近の跡をたどり、モスクワ・ワシントン・北京間の外交的三角関係の将来を占う。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	ドル支配の没落と混乱	戦後の貿易体制を支えてきた通貨制度、ブレトンウッズ体制の成立と発展、そしてその崩壊について述べる。また1970年代以降に採用された変動相場制、フロートの功罪を考える。	神谷不二 高橋和夫
9	戦後の貿易体制	戦後の日本、ヨーロッパの経済復興と発展を可能にした自由貿易体制の成熟と崩壊について説明する。また姿を現しつつある新しい貿易体制についても言及し、体制変革の要因を論ずる。	同　上
10	多極化の時代	日本、ヨーロッパの経済発展により米国の隔絶した優位は過去のものとなり、世界は経済的には多極化の時代に突入した。その要因を探り、政治的意味を明らかにする。	同　上
11	多国籍企業	戦後顕著になった企業の多国籍化の実態を解説し、その原因を考える。また多国籍企業が国際政治の場において果たす役割に関する論争の推移を紹介し、その将来を展望する。	同　上
12	南北問題	先進諸国の生活水準の向上する中、第三世界の遅れが目立っている。後者の貧困の問題が国際政治の重要な議題となってきた。その実態と原因に関する論争を紹介する。	同　上
13	石油と国際情勢	世界経済を揺り動かしたOPECによる石油価格の値上げ攻勢と、その成功が誘発した第三世界の国際経済秩序の変革について解説し、その政治的意味に光をあてる。	同　上
14	国際連合	国際政治の力学の産物として国際連合及びその他の国際機関をとらえ、諸機関の成立と発展を解説し、その国際政治での役割りに評価を与える。	同　上
15	国際政治の理想と現実	宇宙開発のもたらした人類は一体であるとの崇高な認識と国際政治の冷厳な現実を対比し、本書の三つの柱である「東西関係」「南北問題」「国際経済」について総括を試みる。	同　上

＝日　本　の　政　治＝（TV）

〔主任講師：阿部　斉（放送大学教授）〕

全体のねらい

基本的なねらいは、日本の政治についての体系的理解を深めることにある。受講者はすでに日本の政治について断片的部分的知識を持っていると想定されるが、それは必ずしも日本の政治を科学的客観的に理解していることを意味しない。そこで、この講義では受講者の日本の政治に関する常識を前提としながら、比較政治論および現代政治論の学習成果を活用しつつ、日本の政治の特性を明らかにしていくことにしたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	明治国家から現行憲法体制へ	政治と国家について簡単な概念規定を試みた後、明治国家をその近代性と前近代性との両面から捉え、それぞれが今日の日本の政治にいかなる影響を残しているかを検討する。次いで、第二次大戦後の民主化政策をとりあげ、その成果と限界とを明らかにする。	阿　部　　斉 （放送大学教授）
2	国　会　の　機　能	日本の議会の法制度上の特徴を明らかにすることから始めて、二院制の意義と実態を検討し、次いで議会の機能を列挙する。さらに、立法国家から行政国家への転換に伴う議会機能の低下を分析した後、代表制の二類型としての国民代表制と地域代表制に言及する。	同　上
3	日　本　の　立　法　過　程	議会における法案の審議過程を概観した後、日本の立法過程の特色として、内閣提出法案の優位と委員会中心主義とをとりあげ、次に日本の立法過程において官僚が果たしている役割を明らかにし、さらに、国会の果たす立法機能が結局は何であるかを検討する。	同　上
4	議　員　内　閣　制	大統領制と対比される議院内閣制の特質を明らかにした後、日本の内閣制度の発達を概観し、次いで一党優位政党制のもとで、わが国の議院内閣制がいかなる特徴を持つかを検討し、最後に議院内閣制と行政官僚制との間の関連を考察する。	新　藤　宗　幸 （立教大学助教授）
5	福祉国家化と行政機能の拡大	福祉国家がいかなる文脈で登場したかを明らかにした後、戦後経済発展がどのように社会保障の拡充と関連しているかを検討する。さらに、福祉国家化が自治体行政機能の拡大をもたらしたこと、経済成長の鈍化とともに日本型福祉社会論が登場したことを指摘する。	同　上
6	日　本　の　官　僚　制	官僚制は多義的であるが、ここではウェーバーに準拠して、日本の官僚制を考察する。明治以後の官僚制の形成過程を検討し、次いで戦後の原理の転換と公務員の登場にふれ、さらに、官僚制による行政指導の意味と意思決定方式としての稟議制をとりあげたい。	同　上
7	審　議　会　の　役　割	行政国家化の進行とともに、審議会の役割が重要になる。日本での審議会の発展を概観した後、審議会が政策形成過程で果たす役能を明らかにし、次いで最近の政策決定システムの変化が審議会に及ぼした影響を論じ、最後に目下注目されている私的諮問機関にふれる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	利益集団と行政	まず、利益集団台頭の背景を考え、次に利益集団と政治文化との関連を明らかにする。次いで、わが国の政治過程で利益集団が果たす役割を検討し、さらに戦後政治における利益集団と政党との関係、利益集団の多元的構造、日本型ネオ、コーポラティズムにふれる。	新藤宗幸
9	補助金の行政と政治	補助金の概念を明らかにした後、補助金の規模と交付対象を考察し、次いで、補助金の交付決定までの手続きを検討して、政治の影響がどこに現われるかを探り、さらに自治体行政に及ぼす補助金の影響をみる。最後に、補助金改革の方向にも言及したい。	同上
10	日本の予算政治	予算の意義と機能について概観した後、日本の予算制度の概要を述べる。次に予算編成がどのように行われるかについて、大蔵省と各省庁の接衝段階のそれぞれの段階で説明する。終りに、財政危機下の予算政治の課題にも言及したい。	同上
11	行政改革	行政改革概念の多義性についてふれた後、第一次臨調の果した役割を検討し、さらにその後の行政改革と「小さな政府論」の台頭について述べ、こうした文脈の中で第二次臨調の果たした役割を明らかにする。最後に政治シンボルとしての行革にもふれたい。	同上
12	日本の政策形成過程	政策の概念規定から始めて、政策形成の主体を明らかにし、次いで政策形成過程研究の焦点を探る。その上で「戦略的政策」と「実施政策」を区別し、「戦略的政策」の形成にあずかるエリート集団を分析した後、「実施政策」における官僚と政権党の役割にふれる。	同上
13	日本の選挙制度	日本の選挙制度の中心となる中選挙制について、小選挙区制及び比例代表制との比較を試みる。次に、参議院選挙における比例代表制に簡単にふれ、さらに日本の選挙制度の最大の課題とされる定数不均衡と、諸外国に比べてユニークな規定を持つ選挙運動を論ずる。	川人貞史（北海道大学助教授）
14	日本人の投票行動(1)	まず、投票行動の分析が今日の政治学において占める位置を明らかにした後、デモグラフィと投票との関連を探る。まず、各党得票率と選挙区特性との関係、職業と政党への投票との関係を分析し、次いで社会的済的地位と投票との関係について若干の仮設を検証する。	同上
15	日本人の投票行動(2)	有権者の意識調査によって明らかにされる政党支持の構造をとりあげる。まず、日本人の政党支持には、政治関与度と政党離れ度という独自の次元があることが指摘され、次いで政党支持率の変化と得票率の変化との間の関連、政策争点と投票との関係が分析される。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	日本の政党	日本の政党制の特徴が、「1955年体制」と「一党優位政党制」という二つの面から明らかにされた後、自由民主党、日本社会党、民社党、公明党、共産党の各党について、それぞれの党の歴史、特質、課題などが指摘される。なお、新自由クラブと社民連にもふれる。	川人貞史
17	後援会組織	今日の日本の選挙と政党を考える上で最も重要なものの一つは、後援会活動である。そこで、後援会がなぜ組織されるようになったかを明らかにすることから始めて、後援会活動の形態、後援会がわが国の政治に対して及ぼしている影響を探る。	同上
18	マス・メディアの政治機能	現代の政治でマス・メディアの果たす機能はきわめて大きい。マス・メディアの政治機能を概観した後、新聞の日本的特質を探り、次いでテレビの果たす政治的機能を検討する。さらに、マス・メディアが世論形成に果たす役割を探り、雑誌が持つ機能にも言及する。	阿部斉
19	地方自治の歴史	近代国家における地方自治の意義についてふれた後、日本の地方自治の歴史を概観する。まず、明治地方自治の論理と構造を明らかにし、次に1920年代の都市化と工業化が地方自治に及ぼした影響、戦後改革と地方自治、高度経済成長期の地方自治などに言及する。	新藤宗幸
20	地方自治の現状	地方自治体の諸類型にふれた後、日本の特徴ともいうべき二元的代表制をとりあげる。次に、国と地方との関係に大きな意味を持つ機関委任事務の現状を探り、さらに都市型社会と自治体の政策との関連を検討し、最後に地方の時代における集権化の逆説にふれる。	同上
21	地方議会と地方選挙	二元代表制の下における地方議会の意義と役割を明らかにした後、都市化に伴う多党化の進行とそれが地方議会に及ぼした影響をとりあげ、さらに政策形成過程において地方議会の果たす役割、地方議会を活性化するための市民の役割などにも言及する。	同上
22	住民参加と市民参加	現代社会における政治参加の意義を探りながら、住民運動と参加デモクラシーの関連を検討する。また、住民運動は日本の政治文化を変容させ、自治体改革を促す契機にもなった。住民運動や市民参加が市民的政治文化を生み出す可能性にもふれたい。	同上
23	日本の民主主義	日本における民主主義の起源を探った後、明治憲法の枠内で最も民主的な政治が行われた大正デモクラシーを概観し、次いで戦後の民主主義の発展の過程を追う。さらに、民主主義にみられる日本的特徴を明らかにし、「官僚政治」の伝統との関連も考察したい。	阿部斉

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	日本の自由主義	日本の自由主義の起源にふれた後、天皇制国家のもとで自由主義がいかに後退をよぎなくされていたかをみる。また、第二次大戦後は私化の進行と過剰な自由のもとで、自由主義も変質を逐げざるをえない。最後に、日本の保守政治にみられる経済的自由主義にふれる。	阿部　斉
25	日本のナショナリズム	ナショナリズムの意義と起源にふれた後、明治国家のナショナリズムを検討し、その超国家主義への移行を考察する。次いで、敗戦によるナショナリズムの崩壊と分散の過程を明らかにし、日本のナショナリズムの現状をみながら、その再生の可能性を探る。	同上
26	保守主義の政治	日本の政治はしばしば保守と革新の対抗関係において捉えられる。保守と革新の意義を明らかにした後、日本人の保守性の理由を探り、さらに革新勢力の伸張と停滞をもたらした要因を検討する。最後に、保守政党はいかなる形で日本を統治してきたかに言及したい。	同上
27	日本の政治文化	日本の政治文化を論じた代表的な政治学者としそ丸山真男と京極純一をとりあげ、それぞれの理論を簡単に紹介する。丸山については、歴史意識の「古層」と個人析出の類型とをとりあげ、京極については、集合体コスモスと相　コスモス、タテマエとホンネにふれる。	同上
28	日本人の政治意識	ＮＨＫの放送世論調査所のデータに基づいて、日本人の政治意識を具体的にとりあげる。テーマとしては、現行憲法体制の正統化、政治的関心度の推移、政治活動と政治参加をめぐる意識の変化など。このほか、政党支持率と内閣支持率の問題にも言及したい。	同上
29	平等化と平等主義	平等化と平等主義は、今日の先進諸国の政治が直面している共通課題の一つである。まず、日本における平等化の推移をふり返った後、平等主義社会の政治の特徴にふれ、次に、平等主義社会に残存する差別の問題を考える。さらに、平等主義社会の教育にもふれたい。	同上
30	日本の政治的課題	日本の政治的課題として、一党優位政党制化での政権交代の可能性、平和憲法下での自衛隊と安全保障、福祉国家下の大きな政府の行きづまりと小さな政府論の台頭、平等主義社会に残存する差別の解消、自律的市民育成のための政治教育といった問題をとりあげる。	同上

＝ 先進諸国の政治 ＝ （R）

〔主任講師：河合秀和（学習院大学教授）〕

全体のねらい

「一国についてしか知らないものは、その国についてさえ実は知っていない。」この講義は、いわゆる先進諸国の政治 ── その政治的発展と現代の政治過程、政治文化の比較を通じて、各国の政治についての知識を深めると同時に、政治とは何かについての理解を深めることを目的としている。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	比較政治と国民国家	この講義では、もっぱら国と国を比較しながら比較政治論を進める。国家と政治、近代国家の成立、国民国家の誕生、先進諸国の国家群、などについてこの章でふれる。	河合秀和（学習院大学教授）
2	比較の枠組	歴史的方法と構造的方法、国家主義・自由主義・民主主義・社会主義、政治的要求と政治機構、前期と後期の社会、階級という観念、コーポラティズム体制、などにふれる。	同上
3	イギリスの場合 Ⅰ	もっとも早かった先進的発展、四つの民族と四つの地域、早期の統一、法の支配、議会、内閣、議会制民主主義の成立、保守党・労働党、政治の長い連続性などにふれる。	同上
4	イギリスの場合 Ⅱ	バジョットのイギリス憲法論、政党の役割、首相の権限、閣僚と首相、法案、最高法廷にない違憲立法審査権、拮抗する労働党と保守党、利益団体、などにふれる。	同上
5	アメリカの場合 Ⅰ	世界史上最初の新興国家、自由で平等、経済的に豊か、人民の人民による人民のための政治、連邦制と三権分立制、「弱い政府」から「強い政府」へ、などにふれる。	同上
6	アメリカの場合 Ⅱ	大統領の指導力が強化、大統領制度の特色、連邦議会、政党の実状、議員採決の実態、連邦最高裁判所の違憲・合憲の判定、議会による大統領の弾劾などにふれる。	同上
7	フランスの場合 Ⅰ	フランスの「偉大さ」、知識人層の役割、大革命の進展とナポレオンの独裁、未完の革命、憲法の改正、ドゴールの登場、小財産所有者の国、小政党の乱立、などにふれる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	フランスの場合　Ⅱ	軍部の叛乱、第五共和制憲法の制定、中道に有利な選挙制度、大統領優位のもと政党選択が単純化、元老院は地方名望家の砦、ドゴールの失脚とその後、などにふれる。	河　合　秀　和
9	ドイツの場合	「上からの」統一、邦とプロイセン、ビスマルクの弾圧政策、世界観政党、ワイマール共和国憲法とヒットラーの登場、敗戦と国の分割、などにふれる。	同　上
10	西ドイツの場合	ドイツ連邦共和国の発足、選挙制度、連邦憲法裁判所、連邦議会選挙における各党得票率と連立関係、アメリカと競争する経済大国への成長、などにふれる。	同　上
11	ＥＣの場合	国民国家の直面する諸問題、ヨーロッパ経済共同体の設立、ヨーロッパ石炭・鉄鋼共同体の発足、ヨーロッパ共同体（EC）の組織、ヨーロッパ理事会・議会、その他にふれる。	同　上
12	ソ連の場合　Ⅰ	社会主義政権の成果、ロシア帝国の終焉、レーニンの革命政権樹立、新経済政策ネップの採用、スターリンの一国社会主義、スターリン以後の後継政権、などについてふれる。	同　上
13	ソ連の場合　Ⅱ	ソ連共産党綱領、メンシェヴィキ派とボルシェヴィキ派、プロレタリアートの独裁、上意下達の組織、各級ソヴィエトの代議員の選挙、党と国家の分離、などにふれる。	同　上
14	日本の場合　Ⅰ	比較政治研究の実験室、イギリスと日本の相違、外からの影響と近代的発展、古代国家の成立、日本の封建制、明治新政府の樹立、憲法の公布、軍部の台頭、などにふれる。	同　上
15	日本の場合　Ⅱ	近代日本の政治的文化の特徴、新憲法の制定、世界史上もっとも成功した占領、憲法と軍備について暗黙の国民的合意、日本の政党の歴史、官界、政界、財界などにふれる。	同　上

＝第三世界の政治＝(R)

〔主任講師：小田英郎（慶應義塾大学教授）

全体のねらい

第三世界を構成するアジア、アフリカ、ラテンアメリカの各地域について、「序論」で述べるような共通の角度から分析、考察を進め、各地域の共通性と特殊性を把握しつつ、第三世界の全体像をえがきだすことをめざす。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論 ―第三世界をどうみるか―	第三世界の概念を説明したうえで、現代における第三世界の比重の増大に触れ、さらに伝統と近代化の相互関係、国民的統合、イデオロギーと政治・社会体制、国際社会に対するイメージと対外行動、などから、各地域の特殊性と共通性を検討する。	小田英郎 （慶應義塾大学教授）
2	中国 (1) ―革命と近代化―	近代化を目標とする中国が、いかにして伝統の克服をめざして苦悩しているかを、国民的統合の問題にも触れながら論ずる。	岡部達味 （東京都立大学教授）
3	中国 (2) ―政治と国際関係―	国内経済改革と対外開放政策のもとで進行する政治改革、および、それらを円滑に遂行するための対外政策について論ずる。	同上
4	東南アジア (1) ―独立と国民的統合―	人種、言語、宗教、文化……世界のなかでもっとも多様性に富むといわれるこの地域の植民地支配からの独立と国民的統合の努力のあとを、ベトナム戦争などにも触れながら考察する。	松本三郎 （慶應義塾大学教授）
5	東南アジア (2) ―イデオロギー、政治体制、国際環境―	東南アジア諸国の近代化過程に現われたさまざまなイデオロギーや政治体制と業績を考察し、さらにその複雑な国際環境を、とりわけ日本との関係に注目しつつ分析する。	同上
6	南アジア ―苦悩するインド亜大陸―	10億の人口の圧力と貧困にあえぐ南アジア諸国のきびしい現状を、混合革命方式で国家建設をはかってきたインドと、これと宿命的対決をつづけるパキスタンを中心に考察する。	同上
7	中東 (1) ―古さと新しさのモザイク―	幾多の帝国の盛衰史のなかで豊かな文明と地域的、宗教的一体性を生みだしてきた中東の「古い」歴史を概観し、さらにヨーロッパ列強による「分割」と独立達成にいたる経緯を、現代中東政治との関連において考察する。	青木一能 （日本大学助教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	中　東　(2) －紛争と対立の図式－	現代中東の重要争点である中東紛争の背景と展開に論及したのち、70年代後半以降の多発する紛争と対立を通して、中東政治の多元化と複雑化について考察する。	青　木　一　能
9	中　東　(3) －国家建設の模索と変動－	社会主義体制から君主制にいたる多様な政治体制下の中東諸国が、それぞれに国家建設を模索する状況を考察し、石油産出地域・中東と国際社会との相互作用といった問題を考慮しつつ、中東政治の変動状況を検討する。	同　　上
10	アフリカ(1) －歴史的復権の志向とナショナリズム－	歴史的復権への志向が現代のアフリカにおいてなぜ強いのか、それはナショナリズムやイデオロギーや政策にどう反映しているか、といった問題を、植民地時代を振り返りながら考察する。	小　田　英　郎
11	アフリカ(2) －近代化と政治体制－	アフリカ的社会主義、一党支配体制、軍部支配体制など、国家建設や近代化の過程で出現したイデオロギーや政治体制を考察し、あわせて南部の白人人種主義体制（アパルトヘイト体制）にも論及する。	同　　上
12	アフリカ(3) －団結と対立－	アフリカ大陸諸国の連帯・団結をめざす反面、国家的自己主張で対立し、多元化の度合を高めるアフリカ圏内の国際関係、および非同盟運動を軸とした第三世界連帯運動への対応を考察する。	同　　上
13	ラテンアメリカ(1) －政治の伝統と風土－	植民地時代以来の統治理念や、独立後の国家形成の特徴、および個人独裁的な統治形態などの検討を通じて、この地域の政治の伝統と風土に迫ってみる。	加　茂　雄　三 （青山学院大学教授）
14	ラテンアメリカ(2) －社会改革と政治体制の近代化－	20世紀に入っての中間層や大衆の登場を契機とする社会変動と、それに対応していった政治体制の近代化について、軍部の役割にも論及しつつ考察する。	同　　上
15	ラテンアメリカ(3) －国際政治の展開－	対米関係の歴史と現段階、1960年代以降の国際政治の多面化、および地域自決主義の動向などに論及しつつ、国際政治の面でのこの地域の政治について考察する。	同　　上

＝ 政 治 史 Ⅰ ＝ （R）

〔主任講師：山口　定（大阪市立大学教授）〕

全体のねらい

ドイツ第二帝制の成立から第二次世界大戦前夜にいたるヨーロッパ現代政治史のなかから、できるだけ現代的意味のあるテーマを選んで講述する。かつてのようにヨーロッパを「学びとるべき模範」とするのでもなく、また今日一部に見られるように、「かつての先進国」として軽く見るのでもなく、批判的摂取の対象として考え直してみたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	ドイツ第二帝制の成立	1871年のドイツ第二帝政の成立は、現代ヨーロッパ政治史の起点であるばかりでなく、ビスマルクの強力な指導力とプロイセンの軍事力による「国民的統一」の達成、その後の目覚ましい産業の発展を考える時、「後発国型近代化」の一原型といえる。	山口　定（大阪市立大学教授）
2	イギリスにおける議会制民主主義の確立	19世紀の三回にわたる選挙法改革とそれを通じての近代政党の成立によって生まれる古典的議会制民主主義の諸相を明らかにし、それを可能にした社会的・経済的・文化的諸条件を考える。	同　上
3	第一次大戦前の労働運動と社会主義運動	イギリス労働党・ドイツ社会民主党・それにフランスの三分裂を比較しつつ、労働者政党の諸類型、労働運動、社会主義運動と政治のかかわりあいの歴史的特質について考察する。	同　上
4	「帝国主義」とその国内体制	イギリス、ドイツ、フランス王国の「帝国主義」政策の性格の違いをそれぞれの国の内政のあり方や社会構造の相違と関連させながら説明し、あわせて、第一次大戦の悲劇がなぜ起ったかをとくにドイツの対外政策の展開の跡を追いつつ明らかにする。	同　上
5	ロシア革命―後進国革命の悲劇―	ロシア革命が「社会主義」革命になったのはなぜなのか、また後進国で「社会主義」革命が成功したときにどのような問題が生じるのか。ロシア社会構造の特質の解明と関連させて考える。	同　上
6	イタリアにおけるファシズムの勝利	1922年10月のムッソリーニ内閣成立をファシズム型「直接行動の政治」の勝利と考えイタリア統一（1861年）以後の政治の特質のなかに探る。	同　上
7	ヴァイマル共和制の不安定	「戦間期」における「議会制民主主義の危機」の古典的事例とされるヴァイマル・デモクラシーについて、その不安定条件を制度的諸要因と政党政治のあり方のなかに探る。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	世界恐慌と社会民主主義	イギリス労働党・ドイツ社会民主主義の連合権などの社会民主主義政権の恐慌への対応の失敗と「スウェーデン－ニューディール」の成功との対比によって一つの歴史的岐路を示す。	山口　定（大阪市立大学教授）
9	保守派の恐慌対策	恐慌対策をめぐって坐折したのち、政権の座についたのはイギリスもドイツも保守派であった。イギリスでは成功し、ドイツでは坐折した。両国の保守派の政策を比較しつつ考える。	同　上
10	ナチスの台頭と政権掌握	ヒトラー内閣の成立は巨大なファシズムの大衆運動の登場によって可能となったものであったが、この大衆運動の成立の条件と、それを支えた思想・政権掌握時の諸事情を考察する。	同　上
11	ヴェルサイユ体制の矛盾とその展開	第二次大戦は、ヴェルサイユ体制にはらまれた諸矛盾が、世界恐慌によって爆発した結果であると考えられる。ここではこの戦後体制の出発点での諸矛盾とドイツ問題を中心にして考える。	同　上
12	スターリン独裁体制の成立とその波紋	スターリンの独裁権掌握とその後の暗黒政治の展開の背景には何があったのか、という問題を「一国社会主義」論と「後進国革命」のたどった道という観点から考察する。	同　上
13	二つの人民戦線政府とその苦悩	１９３６年にスペインとフランスに相ついで成立した人民戦線政府は、ともに経済政策の失敗などにより窮地に追いこまれる。この苦悩を明らかにし、第二次大戦との関係を考える。	同　上
14	二つのファシズム体制 ― その虚像と実像	イタリアとドイツにおけるファシズム体制のらん熟した姿はいまようやく解明の途上にある段階といってよい。その実相を明らかにし、そこにあらわれた諸問題の現代的意義を考える。	同　上
15	ソヴィエト外交と宥和政策	ヒトラー内閣成立後、ソヴィエトは外交政策を転換し、国際連盟に加入し仏ソ相互援助条約を締結する。しかし、イギリス、フランスの宥和政策の展開は結局、スターリンとヒトラーの提携という逆転劇を通じて戦争への道を最終的に開いてしまう。	同　上

＝ 政 治 史 Ⅱ ＝ （R）

〔主任講師：五百旗頭　真（神戸大学教授）〕

全体のねらい

明治維新から現在に至る日本政治外交史を講述する。はじめに、近代日本が背負うことになった基本的課題を総説し、ついで、時代区分しつつ歴史的展開をたどる。国内政治の変動を縦軸とし、国際環境の変化への対応を横軸として、両者の関連の中で近現代史を見て行きたい。古い時代に劣らず、新しい時期にも注意を払いたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	第Ⅰ部　近代日本の基本問題 西洋文明の挑戦と対応	学習すべき西洋社会の力の秘密、日本の独自性を守る方途、価値感と政策論の双方における欧化主義と「日本への回帰」主義への分裂、および両者の時期的移行などを見る。	五百旗頭　真 （神戸大学教授）
2	地理的・歴史的条件	近代日本が置かれた極東の島国という地理的条件の持つ政治的意味を検討し、また儒教的秩序観の支配する社会から、帝国主義時代の世界に船出した日本人の国際認識を検討する。	同　上
3	第２部　「日本帝国」の発展と挫折 明治初期の「内治優先主義」	新政府は、一方で武力反乱を鎮圧し、他方で征韓論のような対外的冒険策を退けて、国内統合を固めつつ新国家の基盤確立を計る。大久保利通を中心とする「内治優先主義」を検討する。	同　上
4	明治体制の成立	明治立憲制は自由民権運動などにより内圧化された国際的潮流を反映しつつも、新政府内の諸要請を制度化していた。その長期的制度としての問題点を考察する。	同　上
5	日清・日露の時代 －「帝国」としての発展－	明治後半期の日本が、帝国主義的時代環境に対応する中で、予想をこえる戦勝をはずみとして、アジアにおける「遅れて来た帝国」に成長する過程を考察する。	同　上
6	「藩閥支配」から政党政治へ －過度期の日本－	明治後半の対外戦争を終えたあと、その潮流は明白となった。大正政変の時期を中心に、新旧勢力が妥協しつつ新しい政治形態を模索する状況を講述する。	同　上
7	政党政治と国際協調 －大正デモクラシー－	第一次世界大戦以後の時代は、通常現代史と呼ばれている。それは、社会の大衆化と国際化、科学技術の発展などを特徴としている。日本の政治がこのインパクトをどう受けとめたかを、検討する。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	軍部の時代 －1930年代－	政党政治が、なぜもろくも崩壊したのか。陸軍はいかにして軍部支配を押し進めたか。満州事変によって解き放れた「軍事発展ドライブ」と、「革新運動」を講ずる。	五百旗頭　真
9	「帝国」の破局	日中戦争が拡大する中で、対外軍事行動と国内の軍部支配が結合され、一つの体制が形成された。三国同盟から真珠湾攻撃に至る時期の日本の外面的な勇壮さと実質的破局の背理を考察する。	同　上
10	第3部　戦後日本「通商国家」の発展 対日占領政策	処罰的破壊論と友好国としての再建論がアメリカ国内で対立する中で、非軍事化と民主化とを軸とする対日占領政策が形成される過程を検討する。	同　上
11	「通商国家」としての国際復帰	敗戦後日本の政治は、各種路線が競合し、それぞれの立場を代表する政権が現れた。その中で吉田茂を中心とする経済復興の路線が主流をなし、日本は「通商国家」として国際復帰するに至る。	同　上
12	「55年体制」と政治危機	1955年に成立した戦後国内政治の基本的構成について概説する。「1$\frac{1}{2}$体制」を支えた政治基盤、政治的分極化、およびその帰結としての「60年安保」を検討する。	同　上
13	「通商国家」の発展 －1960年代－	池田勇人の、政治問題の回避策と経済的積極策は「通商国家」路線を定着させる。60年代の経済成長をもたらした国内的・国際的条件、およびその間における国内社会の変化を講述する。	同　上
14	「経済大国」の動揺 －1970年代－	国際的激変が、70年代初頭の日本を襲い、「経済大国」の脆弱性が露呈される。国内でも多党化と保革伯仲状況が進展する。このような流動化の中で、日本の政治と経済がどう対応したかを検討する。	同　上
15	日本政治外交の問題点	明治以来、100年をこえる歴史の中で、我々は何を得、何を失ってきたか。現在、どのような歴史的地点に立っているのか。国際環境は、我々にどのような課題を負わせているか。	同　上

＝ 行 政 学 ＝ （R）

〔主任講師：西尾　勝（東京大学教授）〕

全体のねらい

現代国家は職能国家・福祉国家・行政国家である。政治権力の正統性は、民意の代表性と共に、行政活動の成果に依存しているが、この行政活動の担い手こそ行政官僚制である。そこで、この講義では、行政官僚制の置かれた位置とその行動の仕組みについて理解を深めることを、主なるねらいとする。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	行政学の背景：現代国家の特質	産業革命と都市化、普通選挙の実施による大衆民主主義の成立、そして総力戦の体験などにより、行政活動が膨脹し、所得再分配政策が導入された。これに伴ない、政治的に中立の専門的な行政官僚制の整備が必要となり、また行政府が政治指導の中枢となるにいたった。	西尾　勝（東京大学教授）
2	行政学の対象：三つの「行政」概念	行政という概念は多義的であるが、おおむね三つの用語法に区分できる。それぞれの歴史的な背景を説明しながら、行政学の研究対象の中核にあるものが何であり、その広がりの範囲がどこにまで及ぶか、という点について解説する。	同　上
3	行政活動の類型	この講義では、個々の政策の実施過程に生ずる具体的な問題について解説する余裕がないので、ここで、現代国家の行政活動がいかに多種多様であるかという点を理解していただくために、行政活動へ全体をいくつかの角度から類型区分してみる。	同　上
4	行政活動の分担(I)中央集権と地方分権	この回から、行政活動の仕組みの説明に入る。行政活動は国（連邦と州）と自治体とで分担されていること、と同時に、現代国家では国と自治体との間に密接な連携関係が形成されてきていることを説明する。	同　上
5	政治活動の分担(II)戦後日本の中央地方関係	国と自治体との分担と連携の具体的な姿を戦後日本について説明する。このなかで、特殊法人、出先機関、機関委任事務、地方交付税、補助金等の諸問題に論及する。	同　上
6	政治家と行政官の関係	同じ議院内閣制を採用している国々でも、そこにおける政治家と行政官との関係のあり方は様々である。ここで、日本が官僚政治の国と言われてきた所以を説明すると共に、最近の党高政低、政高官低と称される現象の意味についても論及する。	同　上
7	官僚制の特質	これより、行政官で構成される官僚制の考察に移る。はじめに、マックス・ウェーバーの官僚制論に依拠して、近代官僚制の特質について説明する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	官僚制の機能（I）：規律と裁量	行政官は政治家の侍女である。行政官僚制の行動は法令、予算、計画等によって規律されている。これが法治と行政原理である。だが、その一方で、行政官僚制には広範な裁量領域が残されている。行政官は一定の規律に服しながらも、創造的に活動することを期待されている。	西尾　勝（東京大学教授）
9	官僚制の機能（II）：命令と服従	規律されている側面においては、上命下服のダイナミックスが発生する。この秩序を維持するためにいかなる工夫がなされているか解説する。	同　上
10	官僚制の機能（III）：決裁と補助	もう一方の裁量領域に着眼すれば、情報の上昇が重要である。上司の決断を適切なものにするために、部下がいかに助言し補佐するかという問題である。これに関連して、日本における稟議制について説明する。	同　上
11	官僚制の機能障害	ここでは、法規万能主義、繁文縟礼、権威主義、セクショナリズムなど、一般に官僚主義とか官僚制の病理などとして指摘されている諸現象がどうして生ずるかを説明する。	同　上
12	政策構造と政策過程	これより、行政官僚制の仕事の側面、すなわち政策案の立案と政策の実施活動とについて、総論的な説明を行なう。その第一段として、ここでは、法令、予算、計画の相互関連について解説する。	同　上
13	予算編成と会計検査	政策過程の一例として、政策過程のなかでももっとも重要なものであるところの予算過程を取り上げ、予算編成と会計検査の仕組みについて説明する。	同　上
14	行政活動の評価基準	前回の会計検査の話から発展させ、行政活動の評価基準として、合法性、有効性、能率性、適正手続等について解説する。	同　上
15	行政統制と行政責任	最後に、話を原点に戻し、行政活動の民主的統制と行政官の責任について論じる。これに関連して、市民参加、情報公開といった現代的な課題についても論及する。	同　上

＝ 近 代 経 済 思 想 ＝ （ＴＶ）

〔主任講師：西部　邁（放送大学客員教授）〕

全体のねらい

ギリシャ以来の経済思想の流れを、その学説的内容とその時代背景とのかかわりの中で考察し、とくにここ二百余年における近代経済学がいかなる思想的変遷をとげてきたかを明らかにする。講義の前半部分はいわゆるケインズ経済学までの経済思想を扱い、後半部分はそれ以降のいわば現代経済思想の多面的な様相について言及する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	経済思想とは何か	科学と思想 理論と実践	西部　邁 （放送大学客員教授）
2	前近代の経済思想	家政の法 公正の法 自然および契約の法	同　上
3	重商主義の経済思想	国家の哲学 保護の哲学 貨幣の哲学	同　上
4	重農主義の経済思想	生産の理 自由の理 理性の理	同　上
5	古典派経済思想の成立	労働の理論 交換の理論 価格の理論	同　上
6	古典派経済思想の展開	比較の方法 葛藤の視角 過剰の予感	同　上
7	古典派経済思想の変形	搾取の暴露 資本蓄積の矛盾 イデオロギーの暴露	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	歴史主義の経済思想	国民の観念 社会政策の構想 方法の意識	西部　邁
9	新古典派経済思想の成立	効用価値の理論 限界分析の方法 一般均衡の仮構	同上
10	新古典派経済思想の発展(1)	需要と供給 短期と長期 産業と厚生	同上
11	新古典派経済思想の発展(2)	資本の理論 利子の理論 企業利潤の理論	同上
12	制度主義の経済思想	解釈の立場 実践の立場 観察の立場	同上
13	ケインズ的経済思想の予兆	不完全競争の理論 失業および通貨の問題 乗数の理論	同上
14	ケインズ的経済思想の成立	マクロの視野 所得の決定 市場の硬直性 将来への期待	同上
15	ケインズ的経済思想の変遷(1)	マクロ動学の方向 混合体制の方向 計量化への方向	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
16	ケインズ的経済思想の変遷(2)	成長論 分配論 消費および投資の巨視的実証	西　部　　邁
17	新古典派総合の経済思想	新古典派総合の枠組み 経済政策の矛盾 不均衡の遍在	同　上
18	成長の経済思想	新古典派の成長観 ケインズ派の成長観 ミクロの成長観	同　上
19	技術進歩の経済思想	生産性の上昇 技術進歩の形態 技術進歩の発生因	同　上
20	発展の経済思想	歴史的段階論 数量的段階論 工業化の段階	同　上
21	貨幣の経済思想	貨幣数量説 貨幣国定説 資産選択の理論	同　上
22	期待の経済思想	先物市場 期待効用 期待の弾力性 静態的期待形成 適応的期待形成 合理的期待形成	同　上
23	厚生の経済思想	平等主義 効率主義 契約主義	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	公共性の経済思想	市場の失敗 公共的諸問題	西部　邁
25	民主主義の経済思想	多数決の問題 社会的選択の問題	同上
26	自由主義の経済思想	功利主義者の自由 福祉主義者の自由 新自由主義者の自由	同上
27	国家の経済思想(1)	計画主義 参加主義	同上
28	国家の経済思想(2)	国民国家 国際経済機構	同上
29	数の経済思想	数理化 統計化	同上
30	総合の経済思想	学際的接近 超学的接近 解釈学的接近	同上

＝経済発展論＝（TV）

〔主任構師：嘉治元郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

世界諸国および諸地域の長期的経過発展について、理論的ならびに実証的な分析を行なう。
主として市場経済の成立している経済における発展をとりあげる。
具体的には、我々にとって身近かな日本経済の長期的な変化について明らかにし、その将来を展望する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	経済発展とは何か	経済発展 economic development という言葉の意味を明うかにし、どのような尺度でそれを測るべきかを論じる。	嘉治元郎（放送大学教授）
2	発展段階説の概観	経済発展を幾つかの段階として歴史的にみる考え方について説明する。	同上
3	現代の経済発展論	現代の経済理論において、近・現代の経済発展がどのように論じられているかを明らかにする。	同上
4	経済発展の諸要因	経済発展をもたらす諸要因について概観し、それぞれの役割について概略説明する。	同上
5	人口動態と経済発展	人口の変化が経済発展とどのように関わっているかという点について論じる。	同上
6	投資と経済発展	各種の投資とその背後にある貯蓄とが、経済発展とどのように関わっているかという点について論じる。	同上
7	技術革新と経済発展	技術革新 innovationとは何かを明らかにし、それと経済発展とがどのように関わっているかという点について論じる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	生産性の上昇	生産性という概念について明らかにする。そして生産性の上昇が経済発展において、どのような意味をもつかを説明する。	嘉治元郎
9	経済発展と対外経済関係	一国の経済発展と、その国の対外経済関係とが、どのように関わっているかを説明する。	同上
10	経済発展と経済政策	市場経済の体制をとる国の経済発展に関する政府の役割について論じる。	同上
11	発展途上国 ― 南北問題	現代の国際社会における「発展途上国」の地位を論じ、それと先進国との関係、いわゆる南北問題について説明する。	同上
12	現代世界の経済発展 ― 東西問題	現代の国際社会には、市場経済の体制をとる国々と、計画経済の体制をとる国々とが併存しているが、この両者の関係、いわゆる東西問題について、経済発展の観点から論じる。	同上
13	日本の経済発展	過去一世紀の間、とりわけ第二次大戦後の期間における、我が国の経済発展について、理論的に証明する。	同上
14	先進国問題	既に高度に発展した国々の直面している経済問題について論じる。	同上
15	超長期の展望	世界経済の今後の発展について、超長期の展望を試みる。	同上

＝ 産 業 組 織 論 ＝（TV）

〔主任講師：植草　益（東京大学教授）〕

全体のねらい

産業組織論では個別の産業が特定の時点でいかなる構造をもち、その下で各企業がいかなる行動をとり、いかなる経済成果を実現しているかを分析するとともに、企業の行動や産業に対する公共政策がその産業の構造を長期的にどのように変化させてゆくかを解明することをねらいとしている。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	産業組織論の課題と体系	まず産業とはなにかを説明し、そのなかで産業分類の方法について説明する。次に個別産業の分析の方法としての産業組織論の体系を説明し、さらに産業組織に重要な関連をもつ現代技術、産業構造、企業組織および産業に対する公共政策について概観する。	植草　益（東京大学教授）
2	産業構造の変化	産業組織論の具体的内容に入るまえに、産業組織論と重要な関連をもつ産業構造の変化と最近の技術革新の動向について論じる。ここではおもに戦後日本の産業構造の変化（重化学工業化、サービス化および情報化）と最近の先端技術開発の動向を論じる。	同　上
3	現代企業の組織	現代企業は所有の形態、企業規模、生産形態、企業結合の形態などにより、多様な形態に分類できる。それらの企業形態の分類を示すとともに、日本の企業組織の特徴をおもに産業組織との関連で考察する。	同　上
4	規模の経済性と範囲の経済性	現代の大企業はその主要製品について大量生産を実現するとともに、多品種にわたって垂直的、多角的に生産している。その実態を分析するとともに、その基礎としての規模の経済性と範囲の経済性について論じる。	同　上
5	売　手　集　中	産業組織論の体系に入って、まず売手集中についてその測定方法を示し、主要産業における売手集中の水準および時系列変化を説明する。さらに売手集中の水準を決定する要因について説明する。	同　上
6	製　品　差　別	製品差別の概念、製品差別を形成する要因、主要産業における製品差別の程度を論じ、さらに製品差別を形成する重要な要因としての広告についてその意義と問題点を論じる。	同　上
7	参　入　障　壁	参入障壁の概念、参入障壁の形成要因および参入阻止行動について論じ、現在の技術革新の進展過程で産業融合が進み、市場の国際化が進展するなかで、参入障壁が低下している実態に触れる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	現代企業の価格設定原則	現代の企業はいかなる価格設定原則を採用しているかを考えるため、価格設定原則に関する諸仮説を検討する。おもにフル・コスト原則、参入阻止価格、目標価格設定等を検討して長期利潤最大化仮説を論じ、それと売上高最大化仮説との異同を考える。	植草　益
9	寡占価格	現代の主要産業においては寡占が支配的市場形態である。寡占における価格形成について、クールノ以来の理論をサーベイし、現代における寡占の価格形成について論じる。また寡占における生産効率の向上と価格変化の実態に触れる。	同上
10	カルテルとプライス・リーダーシップ	寡占ばかりでなく原子的競争市場において各企業が協調的行動をとると、独占と同じ価格形成が可能となる。この協調形態の典型としてのカルテルとプライス・リーダーシップについて論じる。	同上
11	資源配分効率	特定産業における市場支配力や複数市場における多角的市場力が存在した場合には、資源配分効率が歪められる可能性をもつ。はたして現代において独占的市場支配力によって資源配分非効率が発生しているか否かを検討する。	同上
12	技術進歩	技術進歩は経済発展の原動力である。産業においていかに技術進歩が追求されているかを考えるため、技術進歩の概念、技術進歩の測定方法、技術進歩の基礎としての研究開発活動について概観する。	同上
13	独占禁止政策	これまでみてきたように、経済の成長・安定・進歩を実現するためには、市場機構にのみ全面的にゆだねておくことはできない。市場の不完全性による失敗が存在する。「市場の失敗」に対処するための産業に対する公共政策の1つとして独占禁止政策を論じる。	同上
14	直接規制政策	産業に対する公共政策の第2の形態としての自然独占分野（おもに公益事業）における政府の規制政策について、おもに価格規制のあり方を論じる。特に総括原価方式、限界費用価格形成、二部料金、ラムゼー方式などについて論じる。	同上
15	産業政策	産業に対する公共政策の第3の形態としての産業政策は多様な政策を含むが、おもに新産業の保護育成と衰退産業の構造調整について論じる。	同上

＝国　際　経　済　学＝(R)

〔主任講師：嘉治元郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

国際経済学の主要な内容について解説し、世界経済の現状について理論的に分析を加える。そのことを通して、我が国の国際社会における地位と役割を明らかにする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	国際経済学とは何か	現代の経済理論の体系の中で、国際経済論の占める領域を説明する。それによって、この論義の内容を示す。	嘉　治　元　郎 （放送大学教授）
2	国際貿易の理論	比較生産費説について解説する。	同　上
3	自　由　貿　易　論	自由貿易が当事国に経済的利益をもたらすという考え方について論じる。	同　上
4	保　護　貿　易　論	貿易に制限を加えることによって、自国の産業を保護するという考え方について論じる。	同　上
5	国内経済と対外経済関係	巨観的（マクロ）経済理論にもとづいて、一国の経済とその対外経済関係との関連について論じる。	同　上
6	貿　易　外　取　引	いわゆる易易外取引の内容を明らかにし、サービスの国際取引の特長について論じる。	同　上
7	国際資本移動	国際的な資本の移動について、理論的ならびに政策的に論じる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	経済発展と対外経済関係	一国の経済発展に伴なって、その対外経済関係に、どのような変化がおこるかという点について論じる。	嘉治元郎（放送大学教授）
9	国際金融の理論	国際金融とは何かを、現実に則して、理論的に明らかにする。	同上
10	国際金融の機構	金本位制と対比させながら、現在の国際金融の機構について説明する。	同上
11	外国浮替の理論	外国浮替とは何かについて理論的ならびに実証的に説明する。	同上
12	国際収支の均衡	一国の国際収支の赤字式浅いは黒字がどのようにして均衡化されるがということについて説明する。	同上
13	移民問題	国際経済論の観点に当って移民 — 人の国際移動 — の問題を論じる。	同上
14	国際経済の現状	第2次大戦後の国際経済の発展について理論的分析を加え、その将来を展望する。	同上
15	日本経済と世界経済	我が国の経済の、国際経済社会における地位と役割について論じる。	同上

＝ 日 本 経 済 史 ＝（TV）
－ 近 代 －

〔主任講師：三和良一（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

近代日本の資本制社会は、前近代社会とくらべてどのような特質を持つかを考え、つぎに、近代の日本経済の発展過程を追う。そのなかで、(1)再生産の構造はどのように段階的な変化をとげたか、(2)構造変化と成長をもたらした要因はなにか、(3)日本経済の構造と成長力は他の諸国と比較してどのような特質を持つかを考えよう。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	資本制社会論	近代日本の経済史を学ぶための準備作業として、資本制社会の歴史的特質をまず明らかにしょう。ここでは、近代社会がそれ以前の社会とくらべると、経済成長率が極めて高いのはなぜであろうかという問題を中心に考えてみよう。	三和良一（青山学院大学 教授）
2	幕末の経済と開港	封建社会としての幕藩体制は、開港以前の時期にすでに商品経済の発達とともに変質しつつあった。世界資本主義との接触によって、資本制社会への移行の前提条件が急速に熟していった。開港の経済史的意義を検討しよう。	同 上
3	明 治 維 新	明治維新は、どのような点で、近代資本制社会の誕生を促したと評価できるのか。土地所有制度の変化、「営業の自由」の保証の２点を中心に、地租改正・秩禄処分・その他の諸改革の内容を検討することにしよう。	同 上
4	殖産興業と松方財政	おくれて近代化を開始した日本の場合、資本制経済を発達させる上で政府の果すべき役割は大きかった。資金・労働力・技術・企業者など必要な要素が社会的に形成される際に、殖産興業政策と松方財政は、いかなる効果を持ったであろう。	同 上
5	近代産業の発達(1) ― 軽工業 ―	産業革命によって、資本制社会は本格的な再生産の仕組を確立させた。後進国日本の産業革命は、どのように展開したであろう。衣料品生産部門の中心である綿工業と外貨獲得のための輸出産業の中心である製糸業をまず検討しよう。	同 上
6	近代産業の発達(2) ― 重工業 ―	資本制的再生産には、生産財の供給確保が不可欠である。日本は、ひとまず、生糸輸出が生産財輸入を可能にするというかたちで出発したが、軍事的要請から重工業の育成も重大課題であった。重工業・鉱業・運輸業などの発達を検討しよう。	同 上
7	日清・日露戦争と日本経済	日清・日露の戦争は、それぞれ日本経済に大きな影響を与えた。金本位制を採用し、植民地を領有して資本主義列強の一翼に列するにいたった日本が、明治末期にどのような再生産構造を持ったか、地主制・財閥も含めて分析しよう。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	第1次世界大戦と日本経済	第1次世界大戦は、日本経済を新しい局面にみちびいた。先進諸国のアジアにたいする経済的圧力が弱まった時期に、日本は、輸出軽工業と同時に、重化学工業を拡大するチャンスをつかんだ。大戦ブームはなにをもたらしたであろう。	三和良一
9	1920年代	1920年代は危機の時代であった。企業は低い利潤率に悩み、日本経済は国際収支の激しい不均衡におちいり、労働争議・小作争議が多発して社会体制を揺り動かした。危機をもたらした原因はどこにあったのであろうか。	同上
10	昭和恐慌	危機への対応策として金解禁と緊縮政策を柱とする井上財政が登場した。日本経済のスパルタ式ハードトレーニングが開始された時、世界経済は大恐慌の時代に突入した。井上財政の経済史上の位置を確定しながら、昭和恐慌を分析しよう。	同上
11	高橋財政	井上財政のあとをうけた高橋財政の課題はふたつあった。日本経済を昭和恐慌から脱出させることと満州事変いらいの軍事費膨張にいかに対応するかである。「現代資本主義」の時代をひらきながら苦闘する高橋財政の姿を見よう。	同上
12	戦時経済	日中戦争から太平洋戦争へとつづく戦争の時代に、戦時動員を極端にまで進めた日本経済は、ついに再生産を維持できない状況におちいった。戦時経済の崩壊過程を追いながら、戦時統制が産業構造・金融構造に与えた影響を検討しよう。	同上
13	戦後経済改革	日本を占領した連合国の基本政策は、日本の非軍事化であった。非軍事化政策の一環として、経済面でも、財閥解体・農地改革・労働改革を柱とする「戦後改革」が進められた。「戦後改革」は、日本経済をどのように変容させたであろう。	同上
14	経済復興	戦争経済の負と正の遺産を継いで日本経済は復興の途についた。占領政策の転換や朝鮮戦争の特需を手がかりとしながら日本経済は、戦前とは異なった再生産の構造を備えて再建された。復興のなかで高度成長の芽が育つのに注目しよう。	同上
15	高度経済成長	1950年代中頃から、日本経済は、日本近代史の上でも、国際比較の点でも、比類のない高度成長をとげた。IMF体制の安定・技術革新・資源の安定供給を前提にした高度成長の時代を分析し、つぎに新しく発生した諸問題を展望しよう。	同上

＝ 欧 米 経 済 史 ＝（R）

〔主任講師：関口尚志（東　京　大　学　教　授）
　　梅津順一（青山学院女子短期大学助教授）〕

全体のねらい

比較史的な観点から、中世末以降の欧米諸国における資本主義経済の成立と展開の特徴を明らかにするなかで、1.近代資本主義の独自性、2.社会制度と経済発展、3.国民経済と世界経済、4.宗教意識と経済行為、5.産業革命の諸類型、6.資本主義の構造、といった諸問題を取り上げる。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	序　　説	欧米諸国と日本との歴史的接触をたどりつつ、近代資本主義の世界史的意味を考え、資本主義の出発点となった中世ヨーロッパ経済の特徴を、徳川時代の日本経済と比較しつつ考える。	梅津順一（青山学院女子短期大学助教授）
2	商業革命とヨーロッパ経済	大航海時代を背景とする、ヨーロッパ経済の世界的進出と、東インド貿易と新大陸貿易の実態、ヨーロッパ的世界経済の変貌と南欧諸国の盛衰を考える。	同　上
3	北西ヨーロッパ諸国の台頭	16世紀末におけるオランダとイギリスの世界経済への進出とその背景、両国の国民経済の構造的特徴を考える。	同　上
4	近代ヨーロッパにおける農村工業と都市工業	近代資本主義の発展における農村工業の役割に注目し、その展開の姿をたどりつつ、旧来の都市工業との抗争を考える。	同　上
5	近代ヨーロッパにおける国民国家と経済政策	イギリスとフランスの比較を通して、近代国家の経済政策の内容と、経済発展に対する影響を考える。	同　上
6	市民革命と資本主義の精神	イギリス市民革命の経済史的意味を考えるとともに、近代資本主義の発展の担い手となった社会層と宗教意識の問題を考える。	同　上
7	アメリカ植民地の経済的展開	南北アメリカ植民地の経済的展開の特徴を、本国経済との関わり、入植者の階層、植民地の経済構造などを比較しつつ考える。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師 （所属・氏名）
8	イギリス産業革命の世界史的意義	イギリス産業革命が、市民革命、保護主義、中産的生産者層の広範な形成を背景とした、イギリス独自の個性的な産業変革であるとともに、その後の世界史の展開に、さまざまな意味で、決定的な影響を与えるものであったことを考える。	関口尚志 （東京大学教授）
9	産業化の波及と後進資本主義の経済構造	イギリス産業革命の影響下に展開する後進諸国の産業化を、アメリカ型（仏・米）とプロシア型（独・露・日）について検討し、後者のばあい、社会の近代化が不徹底ななかで産業化と経済成長がみられるなど、先進国にない独自な構造と問題をともなうことを考える。	同上
10	19世紀の世界資本主義	「世界の工場」イギリスを頂点に、欧米諸国や非西洋諸地域を周辺に配して構成された19世紀の国際分業システムを検討し、自由貿易が経済強国に有利な体制であったことや、経済摩擦が政治的・文化的摩擦でもあったことを具体的に考える。	同上
11	「大不況」と資本主義の構造変化	19世紀末「大不況」の実態と原因を検討し、長期にわたる価格の低迷と投資の沈滞のなかで、自由貿易体制が崩壊し、関税障壁と、これに保護された生産の集積、集中を土台に、独占と帝国主義の時代が到来した経緯を考える。	同上
12	イギリスの産業的停滞とアメリカ型大量生産体制の展開	大不況からの脱出と20世紀初頭にかけての新興産業の抬頭の過程で、イギリス産業の相対的停滞と、ドイツおよびアメリカ産業の躍進が著しい。「イギリス病」の歴史的根源と、アメリカ型大量生産体制の歴史的基盤を、両国の社会構造を対比しつつ考える。	同上
13	帝政ドイツ・旧ロシアの経済と社会	帝政ドイツの高度な技術的・経済的発展を、他面におけるドイツ社会の伝統的・コンカー的構成、およびこれを基盤とする「政治寄生的資本主義」の優位との関連で検討し、さらに、ドイツとの対比において、ツァーリ制ロシアの社会とその工業化の特質を考える。	同上
14	ファシズムと世界大戦期の欧米資本主義	ファシズム、とくにナチズムの社会的基盤を、ドイツ革命・ウイマール民主主義、そのもとでのインフレ・高度成長・大恐慌という経済変動との関連でとらえ、また、両大戦前後の各国資本主義の動向を、「国家と経済」を焦点に考える。	同上
15	近代化と現代資本主義	講義をふりかえり、欧米における近代「市民社会」形成史がいかに「現代資本主義」の構造と問題を深く規定しているかを考え、また、欧米「近代化」の歴史的経験に照らして、現代資本主義の世界システムに組み込まれた「低開発」諸国が直面する根本問題を考える。	同上

＝ 財 政 と 金 融 ＝ （TV）

〔主任講師：貝塚啓明（東京大学教授）〕

全体のねらい

通常のカリキュラムでは財政と金融とに分けて講義が行われるのに対して、ここではできる限り統一した形で内容を盛り込む。理論的な分析の応用という点で一貫性を保つが、なるべく具体的な問題にも話題が及ぶよう配慮する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	財 政 と 金 融 ― 問題の例示 ―	経済は、生活を営んでいるわれわれのすべてを包み込んでいて、日常的であるため、かえってその全体像や問題の所在がはっきりしない。まず、話の糸口として、財政と金融によって大きな問題が生じた事例を示しておく。	貝 塚 啓 明（東京大学教授）
2	民間部門と公共部門	私企業体制を中心とする資本主義経済においても、政府は必要不可欠な役割をもっている。公共部門は長期的に拡大化傾向を示し、多様な活動を行っている。ここでは公共部門の拡大を統計から跡づけ、公共部門の行動原理を民間部門との対比で説明する。	同 上
3	財政金融と経済政策	公共部門の運営は政府が行っているのであるから、政府が政策目標を追いかけているすれば、当然経済政策としての側面をもつ。一般的な交換手段である貨幣は中央銀行によってコントロールされているから、当然経済政策の重要な手段となる。	同 上
4	日本の財政システム ―予 算―	公共部門の運営は、予算制度を通じてなされる。予算は、通常１年を単位としており、その年度の支出計画（才出の上限）と収入（才入）の見積りを示したもので、議会（国会）の議決を経て成立する。ここでは中央政府について予算の概要を説明する。	同 上
5	日本の財政システム ―租税と公債―	予算の才入面は、租税収入と公債収入に分かれる。ここでは、租税収入の構成と主たる税目の概略、および公債制度の概略を説明する。	同 上
6	日本の財政システム ―地 方 財 政 ―	これまでの説明は、単一の政府を前 にして議論してきたが、現実の公共部門には、複数のレベルの政府が存在する。日本では、国、都道府県、市町村の三つの政府のレベルがあり、その相互関係は複雑である。	同 上
7	公 共 支 出 の 役 割	政府活動が必要不可欠になるのは、民間部門において市場の失敗が生ずるからである。特に社会のすべての構成員にとって共通に消費される財、サービス（公共財）が存在し、民間部門がこれを供給しえないことが最小限政府活動の存在理由となる。	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	多様な公共支出	現実の公共支出は、多様な内容をもっている。すなわち、防衛、警察、司法、一般行政などの純粋な公共財、一般道路（街路）、河川改修などの準公共財、さらには、高速道路、鉄道などの私的財に公共支出が支出され、また所得再分配のための移転支出がある。	貝塚啓明
9	公共支出と所得再分配	公共部門は、資源配分上必要な活動を行うとともに、所得再分配上も重要な役割をもっている。すなわち、その経済社会において必要最低限の生活水準を政府が保障し、そのために社会保障のシステムが機能している。	同上
10	租税体系	公共部門の財源調達のうちで大きな比重を占める租税をどのような形で課税するかは重要な問題である。どのような経済指標を基準にして課税するのが公平で中立的な課税方式であるのか。所得、消費、資産などが課税ベースとしてもつ長所・短所を説明する。	同上
11	所得税	現在、ラテン系諸国を除いて先進諸国の租税の中核をなすのが（個人）所得税である。簡単に所得税の仕組みと現行所得税がかかえる問題点を説明する。	同上
12	法人税	日本の国税収入においてかなり大きな比重を占める法人税は、法人利潤（法人所得）を課税対象（標準）とする。ここでは法人税の仕組みとその経済効果を説明する。	同上
13	間接税	転嫁することを前提として課税されるのが間接税である。現在の日本の税制では、特定の個別品目にのみ課税される個別消費税が主たる間接税である。ヨーロッパ諸国では、消費一般に広く課税される付加価値税が重要な税収入となっている。	同上
14	公債発行をめぐる問題点	日本の財政は、現在大幅な赤字を示し、これを公債発行によって調達している。公債発行は、経済を安定化させる役割をもつとはいえ、インフレーションの危険性、民間資金の圧迫、財政規律の低下をまねくという悪影響が生じうる。	同上
15	金融市場と金融取引	交換経済における貨幣と金融の機能を説明し、資金余剰部門から資金不足部門へ資金がどうように流れてゆくかを明らかにする。この流れを仲介するのが銀行をはじめとする金融仲介機関である。	岩田規久男（上智大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	日本の金融システム	日本の金融市場における非金属部門を(1)公共部門(2)法人部門(3)個人部門(4)海外部門に分けて、これらの部門間を資金がどのように流れているかを説明し、その過程での各種の金融機関の役割や企業の資金調達の方法を具体的に説明する。	岩田規久男
17	国際金融	一時的な貨幣の過不足を調整する場である、短期金融市場と実物資産の蓄積のための資金を調達することを目的とする、資本市場について、それぞれの現状を説明する。	同上
18	貨幣の供給(1) —ハイ・パワードマネーの供給—	中央銀行の債務である現金通貨と民間金融部門が保有する中央銀行への預け金はハイ・パワードマネーと呼ばれ、一国の貨幣量を決定する重要な変数である。このハイ・パワードマネーがどのようにして供給されるかを説明する。	同上
19	貨幣の供給(2) —預金通貨と信用創造—	一般的な交換手段である貨幣は現金通貨と預金通貨とから成る。ここでは、預金通貨が銀行によってどのように供給されるかを説明する。さらに、預金通貨が人々によって広く交換手段として用られるための条件を、金融自由化との関連で考える。	同上
20	貨幣需要と利子率の決定	利子率は貨幣の供給と需要とによって決定される。ここでは、貨幣の需要はどのような要因に依存するかを説明した後に、流動性選好理論による利子率の決定メカニズムを明らかにする。	同上
21	マクロ経済と金融財政(1) —ＩＳ・ＬＭ分析—	ＩＳ・ＬＭ曲線を説明した後に、中央銀行による貨幣供給量の調節が、国民所得に対してどのような影響を及ぼすかを明らかにする。	同上
22	マクロ経済と金融財政(2) —インフレーションと失業—	現代の経済は、インフレーションと失業の併存というスタダフレーションの問題をかかえている。スタダフレーションに対して金融政策は果して有効かどうかを検討する。	同上
23	マクロ経済と金融財政(3) —国債と民間投資—	政府支出が国債の発行によって資金調達されると、民間の投資支出が締め出される、という国債の民間投資締め出し効果が、国債が大量に発行されている今日、大きな問題になっている。この効果が、どのようにして生ずるかを明らかにする。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
24	日本の銀行行動(1) —個別銀行の行動—	日本の金融政策は従来、銀行の行動に影響を及ぼすことを通じて行われてきた。そこで、銀行の行動を簡単なモデルを用いて説明する。	岩　田　規久男
25	日本の銀行行動(2) —インターバンク・マネー・マーケットの役割—	銀行間の資金の貸借市場であるインターバンク・マネー・マーケットは、金融政策の波及経路を知るうえで重要である。そこで、ここでは第24回の銀行行動の理論を用いて、日本のインターバンク・マネー・マーケットの機能を説明する。	同　　上
26	金　融　政　策	銀行行動の理論を用いて、日本の金融政策の波及メカニズムを明らかにする。また、今後、金融自由化が進むにつれて重要性を増すと思われる公開市場操作についても説明する。	同　　上
27	日本経済と財政金融(1) —経済発展と財政金融—	これまでの講義を基礎に　現実の日本経済に即して財政金融の役割を説する。ここでは、明治以降の急速な日本の経済発展において、政府が財政面を通じて積極的にとった成長政策と間接金融優位の金融システムが経済発展に果した役割を検討する。	貝　塚　啓　明
28	日本経済と財政金融(2) —インフレーションと財政金融—	財政金融政策の如何は、インフレーションの原因となりうる。第二次世界大戦直後のハイパー・インフレーション、最近の第一次石油危機直後のインフレーションは、財政金融政策をひきがねとしている。	同　　上
29	日本経済と財政金融(3) —金融の自由化・国際化—	昭和50年度以降、国債の大量発行をきっかけに金融システムに大きな変化が生じている。この変化は、金融の自由化・国際化といわれることが多いが、ここでは自由化・国際化のもつ意義と今後の展望を示す。	同　　上
30	日本経済と財政金融(4) —財政再建と行政改革—	昭和50年代に入って日本の財政は大幅な財政赤字を示し、財政再建が唱えられてきた。他方、行政改革が異る発想の下で進められている。ここでは、財政再建と行政改革における考え方の差異を説明し、公共部門の役害に即して、二つの政策の将来展望を示す。	同　　上

＝社会学の理論Ⅰ＝（R）

〔主任講師：塩原　勉（大阪大学教授）〕

全体のねらい

社会学は間口の広い、性格のつかみにくい学問である。げんに社会学の内部には様ざまな立場がある。しかし、社会学が全体として受入れ共有してきた基本的な考え方と理論がある。そのような考え方と理論の特色を明らかにしたい。いわば社会学原論である。なお後編Ⅱでは、現代社会学の内部の様ざまな立場について論ずる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	社会学の基本概念	ある学問の特色は、そこで活用される基本的な概念によく表われる。ミクロな社会現象をみるための概念から、マクロなそれのための概念まで、社会学の基本概念を紹介する。	塩原　勉（大阪大学教授）
2	社会的行為	1人の人間が他の人間とのかかわりで行なう社会的行為は、一切の社会現象の基本単位であり、社会学の基本概念である。社会的行為の仕組み、構成要素、タイプ、行為者などに言及する。	同上
3	社会規範と逸脱	社会的行為が実際に規則正しく行われるのは、人びとが社会規範にしたがうからである。しかし、他方では、規範の欠如や逸脱の発生も日常茶飯事である。社会規範の種類、アノミー、逸脱行動などに注目したい。	同上
4	社会的相互作用	2人以上、複数の人びとの間の相互行為は、社会的相互作用と呼ばれる。それはシンボリックな性格をもっている。象徴的相互作用と役割りについて考察する。	同上
5	社会的交換	社会的相互作用を具体的にみると、まず交換による結合が重要である。日常生活は無数の社会的交換の織りものである。社会的交換の諸相を明らかにし、交換から他のタイプの相互作用が派生する場合のメカニズムにも論及しよう。	同上
6	闘争と支配	社会生活は親和と結合のみではなく、対立と分離を含んでいる。まず闘争が社会生活に及ぼす影響を説明し、ついで支配服従という相互作用をとりあげ、正当支配と呼ばれるものが、どのように成立するかを分析する。	同上
7	意思決定と準拠集団	人間は不十分で不確実な情報の下で意思決定をしている。その場合、ある範囲の他者たちと自分ないし自分たちを比較することによって判断を下す。このような他者たちを、自分の準拠集団という。準拠集団の理論を論じたい。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	社会集団	社会生活は様ざまな集団によって構成され運営されている。社会集団は社会学のもっとも戦略的な概念である。社会集団とは何か、どのような集団類型が考案されてきたかを紹介する。	塩原　勉
9	組織の動態	集団の内部には、共同目標の達成のために諸活動を調整する組織がある。今日では、大きい組織は官僚制と呼ばれる仕組みを持っているが、現実には変形したり、目標さえも変化させたり、複雑な動きを示す。その動態をみよう。	同上
10	組織と環境	組織がダイナミックに動くということは、組織と環境との間に相互作用があるからである。組織の構造と環境条件との間に、どのような適合関係がつくられる傾向があるかを調べてみよう。	同上
11	社会構造	社会全体の構造をどのように把握するかは、巨視的社会学の大切なテーマである。複雑な構造をみるには、社会をいくつかの部分に分割したり、構造を組立てる構成要素を分析するという工夫が必要になる。社会システム論を役立てよう。	同上
12	階級と階層	全体社会は社会的資源の配分と人員の配置をめぐって構造化されている。配分と配置の構造は不平等と格づけによって特徴づけられており、対立をはらんでいる。不平等構造の問題を中心に取り上げる。	同上
13	社会変動	社会構造の変動は、社会変動と呼ばれる。社会がどこからどこへ変わってゆくかということは痛切な関心事であるから、社会学では多くの社会変動論が提唱されてきた。主要な変動論を、その社会的背景との関連で整理し紹介しよう。	同上
14	運動と計画	社会変動は自動的にすすむわけでない。なんらかの意図をもつ諸主体の作用をうける。社会学には集合行動という独特の運動概念があるが、この問題も含めて、社会変動の中の集団的な変動主体を論ずる。	同上
15	社会学の性格	以上の議論をふまえて、社会学とは結局どのような性格の学問なのか、を総括的に考えてみよう。あわせて社会学の方法についても触れよう。要するに、社会学論である。	同上

＝社会学の理論Ⅱ＝（R）

〔主任講師：塩原　勉（大阪大学教授）〕

全体のねらい

前編『社会学の理論Ⅰ』では、社会学原論をとりあげた。本編Ⅱでは、社会学の主要な学説を紹介することにしたい。社会学の過去と現在という形をとり、前半で社会学の歩みをふりかえり、後半で今日の社会学の諸ラダイムを整理して、社会学のさまざまな考え方を全体として概観してみよう。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	プロローグ：社会学の歴史	パラダイムの革命といった科学史の立場や、科学そのものを社会学的に分析しようとする科学社会学の立場から、社会学の歴史を眺めてみると、なにがみえてくるだろうか。	塩原　勉（大阪大学教授）
2	産業化への対応	社会学は市民革命と産業革命という激動の時代に誕生した。創成期の社会学を代表し、しかも対立しあう考え方をもったサン＝シモンとコントをとりあげてみよう。	田中清助（大阪大学教授）
3	社会の弁証法	産業革命の渦中からもうひとつの巨大な思想が形成された。それはコントのソシオロジーに対抗するマルクスの社会理論である。マルクスの社会認識について考えてみる。	同上
4	連帯とアノミー	社会学の第2世代の代表者のひとりはデュルケムである。彼によって社会学はどのように性格づけられ、そして市民社会はどのように診断されたのか、を考えてみる。	大村英昭（大阪大学助教授）
5	エートスと合理化	世界史の合理化をベースにして、経済・政治・宗教・その他、ほとんどすべての生活分野に言及した壮大な社会学をつくったのは、ヴェーバーであった。彼の社会理論を紹介する。	厚東洋輔（大阪大学助教授）
6	相互作用と流動社会	いちはやく流動社会の将来を見抜いていたのは、都会人ジンメルではなかったか。そして彼の社会学は米国のシカゴ学派に影響を及ぼした。ジンメルとシカゴ派について検討してみよう。	塩原　勉
7	知識とイデオロギー	人間が構築した概念やイデオロギーを研究する社会学は、ひろい意味で知識社会学と呼ばれる。この分野を代表するシェーラーとマンハイムをとりあげる。	徳永恂（大阪大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	進歩の弁証法	１９３０年代に一群の社会学者がフランクフルト大学・社会研究所によって活動を始めた。ナチスに追われ亡命し抵抗し、戦後も多くの仕事をなし遂げた。フランクフルト学派の批判理論を紹介する。	徳永　恂
9	機能主義的世界	１９５０年代に最大の影響力をもった社会学者はパーソンズだった。彼は行為理論から出発して、機能主義と社会システム論を合体させた。パーソンズの社会学について検討しよう。	厚東洋輔
10	生活世界とドラマ	日常のミクロの相互作用や生活世界への関心が１９６０年代後半から強くなった。その中心には象徴的相互作用論とリアリティ構成の社会学がある。これらに特徴的な考え方をみてみよう。	井上　俊（大阪大学教授）
11	組織と運動	今日のフランス社会学を代表するクロジエの組織論とトゥーレーヌの運動論をとおして、現代フランスの社会学的思考の重要な諸側面を照射してみよう。	杉山光信（東京大学助教授）
12	構造化とパワー	今日の社会学はマクロな社会現象にも関心をもっている。イギリスの社会学者ギデンズの階級構造論やパワー論をとりあげ、あわせて現代イギリス社会学の動向をみてみよう。	宮本孝二（大阪大学助手）
13	世界の複雑性とシステム	斜陽のパーソンズ流システム論に対してパラダイム転換をはかり、システム論を再生しようとしているのはルーマンである。彼の社会認識とシステム観を点検する。	山口節郎（大阪大学助教授）
14	コミュニケーション行為と合理性	ルーマンの好敵手であり、フランクフルト学派第２世代の旗手はハバーマスである。真に人間を結合させるコミュニケーション行為の復権をめざす彼の批判理論を考える。	同上
15	エピローグ：現代社会学の課題	ポスト産業社会への移行期にある今日、社会学はどのようにして課題をみさだめ、自己革新をはかることができるだろうか。	塩原　勉

＝社会構造と社会変動＝（R）

― 近代化の理論 ―

〔主任講師：富永健一（東京大学教授）〕

全体のねらい

マクロ社会学理論の視点から、産業化と近代化の解明に一貫した理論的説明を与えることがこの講義の目的である。産業化と近代化は西洋17世紀にはじまって世界をすっかり変えてしまった社会変動である。この社会変動の性質を、構造 ── 機能分析の視点（社会変動とは社会構造の変動であるから）に立ちつつ詳細に分析してみたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	Ⅰ　序論 近代化と産業化：問題の出発点	キー・ワード（その1）：産業化 キー・ワード（その2）：近代化 近代産業社会の概念	富永健一 （東京大学教授）
2	近代化・産業化への「先発」と「後発」：日本の位置	近代化と産業化における先発と後発 近代化と産業化における西洋と東洋 非西洋後発社会の近代化と産業化	同　上
3	Ⅱ　社会構造へのアプローチ 社会構造とは何か	「理念型」としての近代産業社会 社会構造の概念 社会構造の変動としての社会変動	同　上
4	社会のミクロ分析対マクロ分析	社会実在論と社会名目論 ミクロ分析 ── 行為理論的アプローチ マクロ分析 ── システム理論的アプローチ	同　上
5	社会の基本類型	ここでの社会とは「狭義の社会」を意味する 全体社会と部分社会 社会の基本類型	同　上
6	近代産業社会の社会構造（総論）	構造分化 ── 家族と組織との分離 組織と市場 地域社会と地域行政組織	同　上
7	Ⅲ　近代産業社会の社会構造(各論) 家族・親族の構造	家族と親族 家族の諸類型と核家族の意味 家族・親族としての機能縮小とゲマインシャフトの最後の拠りどころとしての核家族	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	組織の構造	機能集団としての組織 組織の構造分析 近代産業社会の構造要素としての組織	富永健一
9	地域社会の構造	生態学的アプローチ 村落 都市	同上
10	社会階層の構造	不平等の構造化 身分・階級・社会階層 階層的地位形成の過程論的・多元論的特性	同上
11	国家と国民社会の構造	国民社会 国民国家 世界社会の問題	同上
12	Ⅳ 社会変動へのアプローチ 社会変動とは何か	何が変動するのか 社会成長・社会発展・社会進歩 社会変動の諸類型	同上
13	近代化理論・1 進歩の理論	近代的精神の基礎：啓蒙主義 実証主義・経験主義 「進歩の観念」	同上
14	近代化理論・2 進化の理論	古典社会進化論（その１） 古典社会進化論（その２） ネオ社会進化論へ	同上
15	近代化理論・3 発展の理論	産業化・近代化の社会構造的諸次元 ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ（テンニエス） 伝統的支配から合法的支配へ（ヴェーバー）	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
16	構造―機能理論と社会変動	構造と機能 構造―機能分析の論理 社会変動の理論化	富永健一
17	社会変動における発展段階（総論）	ネオ社会進化論の理論枠組 社会進化の発展段階図式 社会進化の発展段階と社会構造の変動	同上
18	V　社会変動における発展段階（各論） 家族・親族の変動	未開社会における家族・親族 農業社会と家父長制家族：「家」制度 日本社会における家と同族	同上
19	組織の変動	農業社会段階における組織 近代産業社会前期における組織 近代産業社会後期における組織	同上
20	地域社会の変動	農業社会前期における都市と村落 農業社会後期における都市と村落 共同体の解体としての近代化	同上
21	社会階層の変動	農業社会前期における社会階層 農業社会後期における社会階層 近代産業社会における社会階層	同上
22	国家と国民社会の変動	近代以前の国家の諸形態 近代産業社会における国民社会と国民国家 高度産業化と福祉国家化	同上
23	VI　世界史の中での近代化と産業化 社会変動の構造―機能主義的解釈	社会進化の共通の方向性 社会進化についての構造―機能理論的解釈 なぜ世界は一様に進化しなかったのか ―― 予備的考察	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	社会進化の動因：「内在的」発展対「伝播的」発展	内生因 ── 先発国における「内在的」発展 外生因 ── 後発国における「伝播的」発展 後発国における社会発展の成否をきめる諸条件	富　永　健　一
25	非西洋後発社会における近代化と産業化・1 ：日本の場合	日本の伝統社会 幕末・明治維新における近代主義対伝統主義 明治・大正・昭和における近代化と産業化	同　上
26	非西洋後発社会における近代化と産業化・2 ：中国の場合	中国の伝統社会 清末・辛亥革命と中華民国のもとでの近代化と産業化 中華人民共和国のもとでの近代化と産業化	同　上
27	非西洋後発社会における近代化と産業化・3 ：日本と中国の比較	伝統社会の構造についての日中比較 近代化段階における社会変動の日中比較 近代化段階における国際環境についての日中比較	同　上
28	Ⅶ　未来へ向けての展望 ポスト工業社会と情報化社会	ポスト工業社会 情報社会 情報社会は知識社会と言えるだろうか	同　上
29	高齢化社会と福祉国家	人口構成の高齢化 人口の高齢化と社会の構造変動 国家と自治体の役割	同　上
30	回顧と展望：19世紀から20世紀への遺産と20世紀から21世紀への遺産	19世紀から20世紀への遺産としての社会主義 社会主義の思想と運動の正統派としてのマルクス主義 21世紀へ向けての20世紀の遺産は何か	同　上

＝ 地 域 と 生 活 ＝ （ＴＶ）

〔主任講師：加藤秀俊（放送教育開発センター所長）〕

全体のねらい

人間は、大地とはなれて生活することはできない。その大地に根をおろした人びとは、おのずから地域社会を形成した。この番組では自然的環境や風土の中での人びとのさまざまな生活のありかたを多様な角度からさぐる。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	地域社会をさぐる	「地域」とはいったいなにを意味するのであろうか。また、地域研究がなぜ必要なのか。さらに、地域研究の方法はどのようなものなのか、「地域と生活」への手がかりを考えてみることにする。	加藤秀俊（放送教育開発センター所長）
2	盆地の世界	日本列島には無数の盆地がある。それらの盆地は、そとにむかって閉ざされた小宇宙であるといってもよい。そしてそこでは、ゆたかな想像力によって民話も生まれた。放送では日本民俗学の成立にもふれる。	同上
3	杉と地域社会	日本の国土の７０％は山林であり、その山林のなかにもたくさんの地域社会がある。日本の林業の現在の状況をふまえながら、主として日本を代表する杉をとりあげる。	同
4	島の社会	日本は文字どおりの島国である。だがわれわれの多くは、いわゆる「離島」に生活する人びとの姿を知らない。本州に近接した島でさえ、そこには小さな島の地域社会がある。その問題をさぐることにする。	同上
5	雪国日本	太平洋がわに住む人間には想像もできないような積雪地帯が日本海がわにはひろがっている。その雪国のなかでの地域生活はいったいどのようなものなのだろうか。雪と人間生活のかかわりを考察する。	同上
6	地域と住まい	日本の風土的条件は地域によって大きなちがいをもっている。そのちがいが、もっともきわ立って反映されているのは住居であろう。その住居のさまざまを各地でとらえ、研究してみたい。	同上
7	村おこし	日本の人口移動は急激な都市化の波のなかで加速化し、いわゆる「過疎」の村がほうぼうにできてしまった。しかし、そういうなかで、村の再活性化がおこなわれている。その実態を研究する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	市と鍛冶	地域と地域のあいだには、物資や情報の交流がふるくからあった。その典型として、「市」と、野鍛冶のふたつを題材にしながら地域間交流の形態をさぐってみることにしたい。そしてその伝統のうえでの現代をも考察する。	加藤秀俊
9	のびる郊外	大都市への人口集中と、ぼう大な数の通勤者の誕生によって、「郊外」というものが生まれはじめた。さいきんでは、「超郊外」とでもいうべき状況さえみられる。いったい「郊外」にはどんな問題があるのかを考察する。	同上
10	街道の役割	地域と地域とをむすぶのは道路である。現在では鉄道や高速道路が発達し、交通は便利になったが、むかしは、日本の主要な地点を街道が通っていた。宿場町という町もできあがった。中山道の例で考察する。	同上
11	高齢者と地域	日本はいまや世界一の長寿国になった。そのように変貌してゆく社会のなかで、高齢者の果たすべき役割は大きい。地域社会形成者、そして文化の伝承者としての老人の姿を学習する。	同上
12	地域のイメージ	それぞれの地域には、それぞれのイメージがつきまとう。いったい、なにがイメージをつくるのか、そして、イメージと人間とのかかわりはどのようなものなのか、をとらえてみることにする。	同上
13	ひろばと生活	地域社会、とりわけ都市生活のなかでは、人間どうしの出会いの場としての「ひろば」が大きな意味をもつ。日本の都市の「ひろば」の歴史と現代とを再検討しながら、現代生活を研究する。	同上
14	地域と食生活	第6章で日本の諸地域と住居形態をみたが、ことなった地域それぞれは独自の食文化をも形成してきた。その地域差と背景にある歴史とを研究しておくことは、日本を知るためのだいじな手がかりである。	同上
15	現代都市の祭	むかしの村落共同体には、さまざまな祭礼があった。しかし、都市のなかにも祭の伝統はあるし、また、あらたな祭を形成してゆく力もはたらいている。都市の人間にとっての祭の意味と役割をかんがえて結びとする。	同上

＝ 地 域 社 会 学 ＝ （ＴＶ）

〔主任講師：加藤秀俊（放送教育開発センター所長）〕

全体のねらい

地域社会の成立は比較的あたらしいが、原初的村落から都市にいたる、もろもろの地域社会には、歴史的背景や行政をふくめてそれぞれの特色がある。この番組は地域社会の構造・組織をあきらかにすることを目的とする。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	地域社会学への招待	地域社会学という学問分野がつくられたのは比較的あたらしいことだ。どのようにしてこの学問が成立したのか、またその意味はどこにあるのか。それを国際比較的な視野からもとらえることにする。	加藤秀俊（放送教育開発センター所長）
2	農耕と定着	人類がムギ、イネなどの栽培植物を発見してから、人びとの特定地域への定着性は急激に向上した。その過程を考古学的な視点をまじえつつ考察し、日本における村落の起源をたずねる。	同 上
3	地域と血縁	初期の村落は、おそらく人数のすくない血縁集団であったとおもわれる。そのことは一村同姓といった共同体がこんにちも健在であることからもうかがわれるであろう。そのような視点から血縁集団と地域の関係をかんがえる。	同 上
4	土地と神さま	日本のそれぞれの地域社会、そして分割された「土地」には土地神がいらっしゃる。氏神から土地神（うぶすながみ）などの系譜をたどり、同時に、土地神と人間とのかかわりを研究する。	同 上
5	村・町・都市	人間がつくりあげた地域社会は、小さな農村共同体から、さらにそれが拡大した町、そして、こんにちでは巨大都市にまでふくれあがった。こうした集落、ないし居住様式を比較検討する。	同 上
6	地域と宗教	第４章でみた土地神のほかに、高等宗教の成立・浸透によって形成されてゆくことがある。ここでは日本の代表的な仏教、浄土真宗教団と地域のかかわりをとりあげる。	同 上
7	地域と水域	日本列島は小河川の網の目のうえに成立している。その小河川は、生活用水であるとともに、農耕に欠かすことのできない灌漑用水としても決定的に重要だ。水域と地域はどのような関係にあるのかを考察する。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	現代の農村社会	1980年代の日本農業は大きな転換期をむかえつつある。これまでの日本の農政そのものが見直しの時期にさしかかっているといってもよい。主として水田稲作の農業社会と農家の生活を検討する。	加藤秀俊
9	現代の漁村社会	日本は海にかこまれた国である。そのゆたかな海洋資源は、そのまま日本人の栄養資源でもあった。しかし、漁村もまた大きく変貌しつつある。その実態をひとつの個別事例をつうじてかんがえる。	同　上
10	現代の山村社会	かつて、ゆたかな日本の森林はさまざまな恩恵を日本人にもたらした。現在でも、木はわれわれの生活と密着している。山村のなかで木を材料にしてそれを加工する人びとの姿をとらえなおしてみたい。	同　上
11	開拓地の地域社会	農業の生産性の向上と人口増加とのあいだには相互的な因果関係がある。耕作面積を増加させるために、江戸期から新田開発がすすみ、明治から現代までの近代日本にも開拓地ができあがった。諸相をみる。	同　上
12	都市の近隣社会	都市には巨大な人口集積があるが、その巨大な人口も地域的に細分化してみると、町内会などの近隣社会が機能していることに気がつく。都市化時代をむかえつつあるこんにち、この都市内地域社会に焦点をしぼる。	同　上
13	歴史のなかの地域社会	あらゆる地域社会は歴史の産物であり、その延長である。ここでは日本の都市の原型のひとつとしての城下町にその例をとって、歴史的伝統がどのように現代の地域社会にうけつがれているかを考察する。	同　上
14	未来への挑戦	前章にみた過去からの延長としての現在と対照的に、こんどは、現在から未来に延長線をひいて、さまざまな地域社会がどのような未来設計をおこなっているかを検討してみる。そこには自治体の努力がみられる。	同　上
15	主張する地域社会	未来を見つめ、あらたな地域社会をつくってゆく主体はあくまでもそれぞれの地域に住む市民たちである。その市民たちがみずからを主張する姿をとらえて、地域の将来を考える。	同　上

＝アジアの社会＝（TV）

〔主任講師：祖父江孝男（放送大学教授）〕

全体のねらい

アジアの社会を総合的に理解することを目的として、稲作と米食について主に東アジアに焦点をあてながら、地理学、農学、言語学、気象学、経済学、宗教学、歴史学、文化人類学、生物学など隣接諸学の成果をふまえながら学際的、総合的に理解をすすめる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	アジアの社会を学ぶ	＊アジアのイメージをとらえる。 ＊稲を通してアジアの社会を考える視点について理解する。 ＊本講義の成立について理解する。	祖父江 孝男（放送大学教授）
2	長い米・丸い米～米と人とのかかわり～	＊稲の代表的な品種分類と、その地域的分布を知る。 ＊作物としての稲の意味について考える。 ＊稲を表す言葉について、国別に見る。	同上
3	ライスロード	＊稲の起源について、現在どういった考えが提出されているかを知る。 ＊稲のアッサム・雲南地方起源説について考える。 ＊日本への稲の伝播の経路と、稲作文化について考える。	同上
4	モンスーンと稲作～水と人とのかかわり～	＊アジアの稲作地域全体に影響を与えるモンスーン気候について理解する。 ＊モンスーン気候が地域によって異なる影響を与えていることを理解する。 ＊稲作における水管理の重要性について理解する。	同上
5	遠永の連作～土と人とのかかわり～	＊水田の土壌的メカニズムについて理解する。 ＊水田によって稲の連作が可能になり安定した収穫を得られるようになった点について考える。 ＊水田の国土保全の役割について理解する。	同上
6	稲を育てた人々	＊日本における稲作の実際について理解する。 ＊気候条件の違いによる稲作拡大の努力の違いを理解する。	同上
7	稲作と宗教	＊日本の村の共同体結合の上で、宗教がどういった機能を果たしているかを理解する。 ＊稲作にまつわる宗教行事について考える。 ＊稲作社会の世界観と宗教との関連について理解する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	わらの民俗と信仰	*日本の農村におけるワラの利用について概観する。 *ワラの利用が広範になされていることの意味について考える。 *ワラの信仰生活における利用について考える。	祖父江　孝　男
9	米の利用と食文化	*コメの社会生活における多面的な利用について考える。 *各地域におけるコメの食べ方の相違について考える。 *食事文化の多様性と社会的意味について考える。	同　上
10	稲作と共同組織	*農村における稲作による共同組織について考える。 *農村の共同体組織が、日本社会の経済的発展に応じてどう変化してきたかを考える。	同　上
11	米と経済	*各国におけるコメの需要と供給について、その市場での関係について理解する。 *コメの国内市場と国際市場の関係について考える。	同　上
12	アジアの農村 ～タイ～	*東南アジアにおける稲作の特徴について理解する。 *タイのデルタ地帯における稲作の特色を理解する。 *稲作形態の違いが社会関係にどういった影響を与えるかを理解する。	同　上
13	アジアの農村 ～フィリピン～	*フィリピンの稲作農村における経済システムについて考える。 *フィリピンの農村と都市との関係について考える。	同　上
14	アジアの農村 ～インドネシア～	*インドネシア農村におけるコメの分配の重要性について理解する。 *コメの流通の機構について理解する。 *分配のメカニズムの社会的意味について理解する。	同　上
15	アジアの農村 ～韓国・日本～	*韓国と日本の稲作社会の比較を行う。 *東アジアの社会の特質について考える。 *講義全体のまとめを行う。	同　上

＝ 犯 罪 と 刑 法 ＝（R）

〔主任講師：内藤　謙（千葉大学教授）〕

全体のねらい

現代社会における犯罪現象に対して刑法がどのように対応しているかを、近代刑法の展開という視点から検討する。犯罪とは何か、刑罰とは何かという基本的な問題の考察が中心になるが、現代社会が犯罪と刑法について提起しているさまざまの問題を手がかりにして具体的に説明することにしたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	犯罪現象と法の機能	犯罪現象に対する法の機能を、犯罪現象は、法を超える領域とも、また刑法を中心とする刑事法以外の法の領域ともかかわりをもっていることを視野に入れて、近代法の展開という観点から考察する。	内藤　謙（千葉大学教授）
2	刑法の基本問題―刑法と国家	近代・現代の社会では、犯罪に対して刑罰を加える権能をもっているのは国家だけである。そこで、刑法の基本問題として、このような国家刑罰権の根拠と限界をどのような方向にむかって考えるべきかを検討する。	同　上
3	罪刑法定主義	近代刑法の基本原理である罪刑法定主義の沿革、実質的・政治的根拠を考察するとともに、罪刑法定主義の内容と現代的意義について検討する。	同　上
4	刑法の機能	近代刑法の機能には、罪刑法定主義と結びつく人権保障機能と法益保護機能とがある。この法益保護機能の内容を検討するとともに、現代の問題状況と刑法の機能について考察する。	同　上
5	刑法理論の系譜と「学派の争い」	近代刑法理論の展開過程を、「旧派」刑法理論と「新派」刑法理論との間の「学派の争い」とその後の動向を中心に考察する。	同　上
6	日本刑法典の史的展開と現代刑法理論の基本動向	日本の旧刑法典・現行刑法典の成立過程とその特色を、刑法理論の系譜との関連で考察する。そして、現代刑法理論の基本動向を、日本、英米、フランス、西ドイツについて概観する。	同　上
7	犯罪論の構成と構成要件該当性―犯罪総論の諸問題(1)	刑法解釈学における犯罪の定義と犯罪論の構成について、その基本的内容と特色を検討する。そして、作為犯・不作為犯、因果関係を構成要素該当性の問題としてとりあげる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	違法性と責任―犯罪総論の諸問題(2)	違法性の実質、正当防衛、緊急避難、法令行為・正当業務行為を違法性の問題として検討する。さらに、故意・過失、責任能力、違法性の意識、期待可能性を責任の問題として検討する。	内藤　謙
9	未遂犯と共犯、客観主義と主観主義―犯罪総論の諸問題(3)	未遂犯に関連する問題と、共犯に関連する問題を検討する。そして、犯罪総論における基本的な考え方の違いである、客観主義と主観主義の対立について考察する。	同　上
10	個人的法益に対する罪(1)	殺人・傷害・誘拐・名誉毀損など個人の生命・身体・自由に対する罪について概観する。そして安楽死・尊厳死がどのような視点から刑法上の問題にもなるかを検討する。	同　上
11	個人的法益に対する罪(2)	窃盗・強盗・詐欺・横領・背任など個人の財産に対する罪について概観する。そして、最近の刑法一部改正で規定されたコンピュータ犯罪についても説明する。	同　上
12	社会的法益に対する罪	騒擾・放火など公衆の生命・身体・財産に対する罪、文書偽造・通貨偽造など取引手段の信用に対する罪、わいせつ文書頒布など性的感情に対する罪について概観する。	同　上
13	国家的法益に対する罪	公務執行妨害・偽証など国家の作用に対する罪、収賄・職権濫用などの国家機関による罪、内乱のような国家の政治的基本組織に対する罪について概観する。	同　上
14	刑罰論の基本問題	刑罰の根拠と限界の問題について、応報刑論か目的刑論かという従来の一般的論議を検討し、問題解決の方向を考える。そして、刑罰の種類と内容について、日本の現行法を中心に考察する。	同　上
15	刑事政策の現代的問題	自由刑の執行内容をどのように形成するか、保安処分の新設問題をどのように考えるか、という二つの問題を中心にして、刑事政策の在り方を検討する。	同　上

＝日本政治思想＝(R)

〔主任講師：松沢弘陽（北海道大学教授）〕

全体のねらい

現代日本の病いとして指摘される＜政治の貧困＞において、問われている＜政治＞とは何だろうか。私的・個的な利益・意見の分化を、自主的に公的なものにまで統合する営みがその中心であろう。そのような＜政治＞の成熟を阻んだ戦前日本の政治体制のもとで＜政治＞の問題と格闘した事例から、＜政治＞について学びたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	はじめに	われわれの＜政治＞についての判断と行為の貧困が指摘されること久しい。この貧困をもたらした最大の条件は戦前の政治体制だが、逆にその体制のもとで＜政治＞の問題ととりくんだ事例から、われわれにとって＜政治＞とは何かを、よりよく学ぶことが出来よう。	松沢弘陽（北海道大学教授）
2	国民国家の形成と明治啓蒙思想	日本は明治維新によって国民国家形成への歩みを始めたが、新政府の法律革命は、国家の外枠の創出にとどまった。こゝに制度の変革と民衆の意識とのズレを埋める文化革命を課題として登場したのが、知識人たちによる啓蒙思想である。	同上
3	福沢諭吉と「ネーション」の創出	国民国家の外枠を充たす内実 ― 「ネーション」の創出という思想的課題と深くとりくんだのが福沢諭吉であった。彼は天賦人権論によって個人の解放と独立を促がすとともに、自由独立な個人が主体として「ネーション」を創る、自発的集団形成と政治機構を模索した。	同上
4	啓蒙から自由民権へ ― 思想的継承と反逆	啓蒙思想が民衆をとらえた時、それは巨大な政治・文化運動を呼び出した。それが自由民権論である。自由民権論は天賦人権論を武器として「有司擅政」を批判し、政治参加を要求し、やがて現在の支配の正統性を問うとともに自から新らしい体制の構想を始めた。	同上
5	中江兆民の政治社会構想 ― 自由民権論の挫折をこえて	自由民権論の政治運動としての高揚が反面に思想的停滞をもたらした時、政治思想に展望を切り開いたのが中江兆民である。人間の「生産的動物」から「政治的動物」への自己変革、それを支える政治家・政党・議会、そして自由の哲学的根拠づけが彼の終生の課題であった。	同上
6	立憲政治の開幕と日本の過去と将来	1889年に約束された帝国議会開設の接近とともに再び政治の季節が訪れた頃、政府主導の国民国家形成の歪みもあらわになりつゝあった。自由民権論を経験したが新しい世代に属する知識人たちが、日本の過去から将来にわたって斬新な構想をうち出す。	同上
7	徳富蘇峰と「平民主義」	A＝スミス、マンチェスター主義そしてスペンサーの社会進化論と、日本国内の「実業」の勃興に拠って、日本も「生産機関」が支配する自由平等の「平民的社会」へ必然的に進むとし、市場と商人をモデルに政治社会を構想したのが、徳富蘇峰の「平民主義」であった。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	陸羯南と「国民主義」	陸羯南も「実業」層が「国民」の構成分子となることを求めた。しかし彼の「国民」は、多様な分子が「徳義」によって結びつく有機体であった。立憲政の機構も法律によるのみでなく、それを支える「徳義」によって始めて、十全な機能を営むはずのものであった。	松沢弘陽
9	「社会問題」の脅威と明治社会主義	日清戦争後の「社会問題」の脅威から国家と立憲政を守るべく、明治の社会主義が登場する。それは、あるいは少数「志士仁人」の無私献身と啓蒙を通じて、あるいは大衆の自治と公共心の実習によって、私益と公益が矛盾なく一致する社会を構想した。	同　上
10	「亡国」と「復活」―― 田中正造の政治思想	日露戦争中から戦後にかけて、足尾鉱毒公害のために谷中村が亡びるのを渦中で経験した田中正造は、そこに日本の「亡国」のしるしを見た。彼は、自然と村の自治と「公共心」の「復活」、天地の理法を具現した憲法の実現の上に、日本の「復活」を待望したのであった。	同　上
11	大正デモクラシーの政治思想 ―― 人格・民衆・社会の発見	日露戦争後から1910年代を通じて、明治国家体制を批判するとともに、それを支えて来た国体論的・天皇主権的法理論から政治の理論を解放・独立させ、人格・民衆・社会を基礎に政治社会の理論を構成したのが、吉野作造ら政治学・公法学の大学教授たちである。	同　上
12	大正デモクラシーの制度改革論	大正デモクラシーの政治思想家にいちじるしいのは、政治の原理論にもとづいて、普通選挙・政党内閣制を基礎とする政治制度の改革を提言したことであり、特に貴族院・枢密院・軍部の改革論は、帝国憲法の実質改憲（中江兆民の「憲法の点関」）を意味した。	同　上
13	マルクス主義の生成 ―― 経済学者河上肇の政治思想	明治社会主義のうちにすでに受容されていたマルクス主義を一つの理論体系に発展させたのは河上肇であった。河上の場合も、出発点は国民国家を脅かす「貧乏」の克服であり、やがて彼は現存国家の革命の彼方に、自由な人間の連合による自由な社会を構想するにいたる。	同　上
14	革命の理論と社会科学としてのマルクス主義	ロシア革命とユミンテルン成立の衝撃によって、日本のマルクス主義は、革命の戦略戦術論と、現存国家の経済的基礎の分析のための「社会科学」に収斂してゆく。それが日本における政治についての思考に及ぼした影響は、功罪ともに巨大であった。	同　上
15	む　す　び	第２回から14回までにとり上げた人びとと彼らが取りくんだ政治の問題を、相互に関連づけて概観し、現代に通じる面に光をあてる。その上で、現代の私たちにとって思想の歴史を学ぶことの意味を、＜政治＞とは何であるかを考える。	同　上

＝ 西 欧 政 治 思 想 ＝(R)

〔主任講師：田中治男（東京外国語大学教授）〕

全体のねらい

この講義は欧米における政治思想の発展を古典古代と呼ばれるギリシアから現代にいたるまで概説するものであるが、その際、思想家個々人の紹介は最小限にとどめて、政治社会・政治生活を構成し、かつ説明するものとして提起されてきた諸概念を、おおむね歴史的順序に従って叙述し、解説するという方針をとりたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	序 ― 政治思想史のテーマ：権力と自由 ― 民主主義理論の歴史的背景	政治社会の基本的原理を権力と自由という二つのものとして捉え、この両者がいかに対立し、また調和しうるかを探求するところに政治思想の課題があるとみる。それはまた、今日的テーマとしての民主主義がその内包を理論的に豊かにしてゆく過程でもあった。	田 中 治 男 (東京外国語大学教授)
2	Ⅰ. 政体論と理想国家論	古代ギリシアの政治的思考のエッセンスをさまざまな政体についての考察とそれらを越えた理想的国家の追求とに認めて、政治生活の自覚的把握が、ポリスの中での実際的経験とそれの哲学的反省とを通じて深められていったことを学ぶ。	同 上
3	Ⅱ. 自然法および神法の観念の生成とその意義	人間の具体的関係から成り立つ政治社会をより高い次元から規律するものとしての自然についての観念は古典古代の思想の中で育っていたが、これにはさらにキリスト教的な神の観念が加わって、中世から近代にかけて大きな影響をもった自然法思想が出てくる。	同 上
4	Ⅲ. 国家理性の観念と主権理論	ルネサンス期以降登場してきた近代国家を維持し、指導する力に対する要請と、これについての考察が、国家理論に新たな様相を与えることになった。これには、マキアヴェリとボーダンの名が結びつけて論じられる。だがその問題提起の意義は現代にまで及ぶ。	同 上
5	Ⅳ. 宗教改革の政治思想：内面的信仰と抵抗原理	カトリックの信仰箇条に対する挑戦から始まった宗教改革は、中世以来の政治的支配原理とその上に成り立つ政治秩序それ自体をも覆すという現実的帰結を伴った。16、17世紀の宗教戦争を通じて、権力と自由というテーマは良心の内面における葛藤としても現れた。	同 上
6	Ⅴ. 近世的自然法理論の意義と限界	宗教改革以後の状況から出てきた近世的世俗的自然法は、近代国家とその中枢に立つ君主権力とに合理的な法的規範を与えようとするものであったが、同時に、この時期からますます既成体制となっていく政治的支配秩序の大枠を抜け出ることはできなかった。	同 上
7	Ⅵ. 社会契約説と人民主権論 (1) 概説 ― ホッブス	契約説的政治理論は、自由・平等・独立の個人から出発して、政治社会が形成される筋道を論理的に構成しようとした。ホッブズは、人間がその自己保存本能を基に自然的能力を発揮する自然状態から、契約を通じて権力の秩序を創設する過程を原理的に論証した。	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	(2)　スピノザ ── ロック	ホッブズの方法を継承しながら、自然権と自然法の関係、合意と主権の理論、国家権力の目的と機能について、実り豊かな思想を展開したロックが、同じイギリスにおける政治的発展を背景に考察の対象となるが、同時期のオランダのスピノザも看過しえない。	田中治男
9	(3)　ルソーおよびその後	社会契約と形成された政治社会を導く一般意志とについての理論、主権の不可分性とその人民への帰属という観点がルソーの思想の特質であるが、そこに含まれる二律背反性は、一方に革命への方向性を与えるとともに、他方その理論の妥当性への批判をも生み出した。	同　上
10	Ⅶ. ブルジョワ革命と近代政治機構論 (1)　イギリス革命期	前三回では主として原理的レベルで問題を考えたのに対し、ここでは17~18世紀の政治革命の状況の中で新しい安定的秩序を思考する機構論的思考を取上げる。ハリントン、シドニー、そしてロックに代表されるイギリスの政治思想はその代表的な事例なのである。	同　上
11	(2)　フランス啓蒙期から大革命へ	フランスの啓蒙思想は旧体制と批判的に対決しつつ多様な展開を見せているが、ここではヴォルテール、モンテスキュー、ディドロらの政治論を検討するとともに、さらに大革命期の憲法論争を手がかりに、人権思想と権力分立理論の19世紀以後への影響をも考える。	同　上
12	Ⅷ. レパブリカニズムおよびデモクラシーの新しい伝統 ── アメリカの場合	独立宣言と合衆国憲法とを通じて表明された新興アメリカの政治理想を、その19世紀中葉までの現実的展開の中で、性格づける。ジェファソンの民主主義観、「フェデラリスト」の政府論、ジャクソン大統領期の政治的現実、リンカーンの政治理念等を中心に検討する。	同　上
13	Ⅸ. 19世紀の思想状況：保守主義・自由主義・社会主義をめぐって (1)　イギリスとフランス	フランス大革命以後のヨーロッパにおける政治イデオロギーの対立・葛藤はそのままわれわれの時代への遺産となっている。バークに始まる保守主義、ベンサム、ミルを代表とする功利主義及び自由主義、それらのフランスでの発現形態 ── これらを主に取上げる。	同　上
14	(2)　ドイツ，その他	政治的後進国とされるドイツも、19世紀における思想的寄与は重要である。カント、ヘーゲルの政治哲学は国家理論に深い影響をもつ。マルクスの社会主義理論はその根を英仏独の思想にもちつつ、広く普及した。他方、立憲的自由主義は各国共通の財産となっていった。	同　上
15	Ⅹ. 民主主義の政治理論をめざして ── 大衆化時代の問題	本講義全体に内在するテーマとしての民主主義理論の現代における課題を展望するため、トクヴィルの問題提起を手がかりに、今世紀において顕著な大衆化現象の政治的帰結を考え、欧米の何人かの政治思想家ないし政治学者の議論をこの文脈において検討する。	同　上

＝ 現代の政治理論 ＝(TV)

〔主任講師：曽根泰教（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

本書は、現代の政治理論を広く概観することを目指すが、政治の中心を「構成員すべてに関わりをもつような決定を作り出すシステム」として理解する。そこで、民主主義の理論、決定のルール、選挙の制度などの、ルールの側面と、そのルールのもとで動く現実の政治を、ゲームとして捉え、政策の形成過程から考える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	現代政治理論の広がり	日常的な生活に占める政治の役割は、一般に、小さいと考えられているが、「政府」の全体の経済に占める割合の多さ、政治の場で解決される問題（経済摩擦、税制改革）は多数ある。政治的選択と現代の関連を焦点とする。	曽根泰教（慶応義塾大学教授）
2	「政治理論」は蘇ったか	P・ラスレットが、ひとたび死んだといった、政治理論は蘇ったのか。政治理論が死んだ理由、蘇った理由から、今日の理論の役割、政治哲学と経験理論、政策分析の関連を探る。政治心理学、政治社会学、政治経済学	同上
3	エリート論から民主主義へ	強力なエリート論者たちの民主主義批判の中から理論的な問題点（少数者の決定、正統性、統治と非統治）の問題を考え、今日の、テクノクラートにいたるまでの問題を整理する。（パレート、モスカ、ミヘルス）	同上
4	現代の民主主義理論	現代の民主主義の理論をシュンペーターからダールのポリアーキーまでの中で位置づけ、それぞれ特徴と批判者たちの考えの紹介を行なう。理論的発展（Downs，Hirschman，Olson）批判者（Macpherson，Lowi，Lijphart）の系統図	同上
5	集合的選択（投票と市場）	民主主義の選択理論を突き進めると、アローの提起した、社会的選択の問題にぶつかる。決定のためのルール設定はどうしたらできるのか、合理的、最適な方法は何か探る。（決定ルール、循環エッシャーの階段）	同上
6	多数決と問題点（インテンシティ）	多数決が最適であるとしても、なお残る問題がある。それは、少数者のインテンシティの問題であり、政治学的な解決策、経済の解決などを紹介する。投票一般の問題、平等、代表制とも関連させて考える。	同上
7	全員一致とコンセンサス	多数決に対するものとして、合意に基づく全員一致（社会契約）、コンセンサスなどの理論的問題を紹介する。また、今日的ヨーロッパ型の民主主義も考える。（多極共存型民主主義、コンセンサス型モデル、コーポラティズム）	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	自由主義的政治（代議制のモデル）	選挙を一つのルールとして考えるとどの様なゲームがなされるかを考える。世界の選挙制度、選挙区と政党制、小選挙区の三乗法則、比例代表制の計算法。有権者の投票行動の説明のための各種モデル。	曽根泰教
9	「政府」概念の再検討	政府をどう考えるのか、小さな政府、大きな政府の基準は何か。市場と選挙、交換と選択政府の役割はどうして出てくるのか（資源配分、再分配、安定・成長、規制）、ミニマリストの考えは何かをさぐる。	同上
10	政治の過程、政策過程 意思決定者としての個人と組織	人は情報をどの様に、認知して、どのような過去の記憶を基に、判断し、決定をするのか。個人における決定の枠組みと、集団における決定上の持つ問題について考える。（認知心理学、集団思考の幻想、歴史の教訓）	同上
11	政策過程のモデル（ブラックボックスからプロセスへ）	まず、アリソンの三モデル、その他のモデル（ダイ）の紹介を通じて、政策過程の概念によって現実政治を考える枠組みを明らかにする。公共政策の決定とその相互作用の関係についてのプロセス。	同上
12	政治経済モデル（市場、投票、政府）	政治を公共選択論の立場からみると、どうなるかを、政治家（ダウンズ）、利益集団（オルソン）、有権者・消費者（ハーシュマン）で考えてみる。そのほか、官僚制、組織過程、マーケティング、広報も触れる。	同上
13	マクロの政治的構成	政治の体制（体制移行）および、現実の政治分析上の有力概念である、多元主義および、コーポラティズムの概念を説明する。審議会、労働団体、また、今日的な政策とこれらの解釈の関係を示す。	同上
14	政策のアウトプットと評価	規範的な考え方（正義、福祉、自由、平等）および、政策分析に使われる、いくつかの分析方法と、その評価基準を示す。目的と手段、政策の位置づけ、比較政策の考え方を通じて、社会科学の実験の可能性を考える。	同上
15	現代政治学の問題と将来	現在の政治学で答えられること答えられないこと。予測と説明、国家再論の理由、政治の復権、今後の方向性（総論と各論、規範と経験科学、認識と政策）。今後考えられる、進むべきフロンティアのいくつかを示す。	同上

＝日本政治史＝(R)
1853〜1987

〔主任講師：北岡伸一（立教大学教授）〕

全体のねらい

幕末以来の日本の内政と外交を講義する。歴史的事実の説明は最小限度にとどめ、各時代の政治権力の構造と変容の説明に力点を置く。また国際政治史や比較政治の視点を重視して、世界史の中に近代日本を位置づける。聴講者諸君が日本政治の特色を歴史的に把握し、今日の政治権力を見る目を養う一助となれば幸いである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論・幕藩体制の政治的特質	江戸時代の日本は、欧米の近代国家と比べ、また他の前近代社会と比べ、どのような特徴を持っていたのか、そしてそれは、日本の近代化にどのような影響を及ぼしたのか。	北岡伸一（立教大学教授）
2	西欧の衝撃への対応 ― 1853〜67	ペリー来航からわずか15年で、200年を越す安定を誇っていた幕府が滅びたのは何故か、尊皇攘夷運動のダイナミクスを、幕藩体制の文脈の中で分析する。	同上
3	明治国家の形成 ― 1868〜77	旧政権の打倒に成功した新政権は、より困難な課題である近代国家の建設にただちに着手した。しかしその強引な中央集権化や西欧文明の導入は、当然各方面の反発を呼び起こすこととなった。	同上
4	対外関係の処理 ― 1868〜77	東アジアの伝統的な国際秩序は、近代のネイション・ステイト・システムとは著しく異質なものであった。この中に近代国家を樹立することは、大きな摩擦なしには不可能であった。それは対外関係を緊張させ、同時に国内の反政府運動の源泉となる。	同上
5	明治憲法の成立 ― 1878〜90	西南戦争ののち、反政府運動は民権運動に収斂していった。国民の政治参加のある程度の拡大は、政府にとっても大きな課題であった。民権運動の高揚から明治十四年政変をへて憲法制定にいたる政治過程を分析し、さらに明治憲法の理念と実態を分析する。	同上
6	議会政治の定着 ― 1890〜1904	立憲政治を作動させ定着させることは、憲法の制定よりもはるかに難しい。超然主義を唱え、政党との提携を否認していた藩閥政府が、なぜ政党と妥協することとなったのだろうか。藩閥―民党関係を再検討することにより、この問題を考える。	同上
7	日清・日露戦争	対外的独立の達成は明治国家の最大の課題であった。しかし独立とは当時にあっては何を意味したのであろうか。条約改正、朝鮮問題から日清日露戦争に至る道を説明する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	帝国主義の発展 ― 1905～18	日露戦争で一応国家的独立を確固たるものとした日本帝国は、満洲権益の確立をめざし、列国とくにアメリカと対立関係に入る。さらに中国革命や世界大戦の勃発の中で、日本は様々な対外膨張政策を展開する。	北岡伸一
9	政党政治の発展 ― 1905～18	帝国主義の発展の時代は、同時に政党政治の確立の時代でもあった。日露戦後の西園寺内閣から世界大戦末期に成立する原敬内閣まで、政党の力は着実に進展していった。このような政党政治の発展を、政友会を中心として説明する。	同上
10	ワシントン体制と政党政治―1918～31	大戦後、アメリカの巨大な影響力の下に成立したのがワシントン体制であり、国内でこれと対応していたのが政党内閣の政治であった。これらは何故成立し、何故崩壊したのか。1920年代東アジアの安定の条件を考える。	同上
11	軍部の台頭 ― 1931～36	満洲事変から二・二六事件に至る内政と外交を論ずる。軍部はどのようにして権力を掌握したのか。そのことが内政と外交において持った意味を、新たな角度から分析する。	同上
12	戦時体制 ― 1937～45	日中戦争の勃発によって日本は本格的な戦時に突入した。中国との長期戦を戦い続けるため、新たに強力な国家統合が模索されることになる。一方で和平への様々な努力が繰り返されるが、結局日米戦争へと事態は発展してしまう。	同上
13	敗戦・占領・講和 ― 1945～55	敗戦と占領の中で、日本は何を強いられ、何を選び取ってきたのか。ポツダム宣言の受諾から講和・独立、さらに日ソ国交回復あたりまで、冷戦の文脈の中に日本が歩んだ道を位置づける。	同上
14	高度成長期の政治 ― 1955～72	1955年、左右両派社会党の統一と保守合同によって、いわゆる五五年体制が成立する。また1960年日米安保条約の改定により、対外政策の枠組も完成する。55年頃から始まる高度成長を背景として、内政中心の特異な政治が展開される。	同上
15	高度成長以後の政治 ― 1972～87	1970年代前半の高度成長の終焉とともに、これと対応していた政治も終わることとなった。池田・佐藤両内閣のあと、国際関係の急変に日本政治がいかに対応したか、あるいはしえなかったかを分析し、あわせて今後の政治を展望する。	同上

＝西欧政治史＝(R)

〔主任講師：犬童一男（神戸大学教授）〕

全体のねらい

近代から現代への西欧における議会制民主主義の形成と展開は、各国の歴史的諸条件によって多様であったことを主に講述する。19世紀の民主化から戦後の福祉国家にまでわたるが、その間の民主化の停滞や独裁にも言及し、日本やその他の国の政治を学ぶ上でも有益な素材が提供できるようにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	西欧における政治の発展	国民国家の政治的近代化を参政権などが実現するとともに、為政者に対する異議申立てが許容される民主化として位置づけ、そこに到達する漸進、革命、停滞の３コースについて参察する。	犬童一男（神戸大学教授）
2	イギリスの古典的民主主義	これは地主支配の議会寡頭制の次の段階であるが、その成立と特質を第１次選挙改革を焦点にして論ずる。この体制は「議会の黄金時代」としてみられる面もあるが、チャーチスト運動も発生したので、その実体を検討する。	同上
3	イギリス議会制民主主義の確立	第２次及び第３次選挙改革が大衆民主主義をもたらし、政党政治の姿を大きく変え、政党政府が立法上の優位をしめる現代的政治体制への出発点となったことを論ずる。	同上
4	フランス議会制民主主義の形成	大革命以来の相次ぐ政体の変遷で民主政の形成に80年余りを要したのは、政治的にも分断化された社会だったことを考察し、第３共和制下にその分裂性の減少と強い組織をもつ統治政党なき多党制の民主主義が形成されたことを述べる。	同上
5	ドイツ第２帝制の成立と展開	政治的統一の過程と第２帝制の政治構造を概観し、ビスマルク時代を中心に第２帝制の国内政策や勢力均衡の対外政策が、どのような性格のものだったかを考える。	同上
6	帝国主義時代の民衆運動	多様な民衆運動の中で全ての国で展開された政治的労働運動を論ずる。第２インタナショナル結成の背景、社会主義政党の成長と修正主義論争にふれ、リーダーたちの軍事同盟や植民地問題など国際認識に問題はなかったか考える。	同上
7	帝国主義時代の国内体制と第１次大戦	第１次大戦が勃発した主たる責任は、その帝国主義政策が国内の広い支持をえていたドイツにあったことを明らかにするが、英仏の帝国主義政策も議会の統制や国内の抵抗を受けることなく行われていたことから、各国の国内体制を考える。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	イタリアのファシズム体制の成立	1922年のムッソリーニ政権成立の4年後に議会制民主主義を否定したファシズム体制が完成した。その成立過程を未発達の戦前民主主義を引きついだ大戦後のイタリア議会政治の危機状況から分析する。	犬童一男
9	イギリス労働党の成長	1920年代にこの党は2度も少数派で政権を担当した。その急成長を可能にした大戦中の党改革と戦後の政治状況そして最初の政権について、他の国の同様な事例にも言及して考える。	同　上
10	大恐慌とイギリスの政治過程	戦間期の大恐慌のときのイギリスで経済危機に対処する政策過程において、有効な打開策をとれなかった労働党内閣と一応成功した挙国一致内閣の対応を分析する。ドイツやスウェーデンの場合とも比較して考える。	同　上
11	ワイマル共和国の崩壊	ワイマル体制はナチスの台頭の結果消滅した。大恐慌下の不安定化から崩壊への過程を眺めるとともに、それを生み出した根本的原因であるヴェルサイユ体制について考える。また帝政期以来の権威主義的文化について考える。	同　上
12	二つの人民戦線政府	1930年代半ばに醸成された反ファシズムと民主主義擁護の運動からスペイン、フランスに人民戦線政府が成立した意味を考える。そして内戦からまた内外政策の不一致から崩壊に追いこまれた人民戦線政府の問題点を探る。	同　上
13	第2次大戦下の国内政治体制	イギリスではチャーチル連立政権に労働党が入って戦後の福祉国家の準備がなされ、大戦末期にフランスでは抵抗運動に基づく臨時政府が出現し、イタリアでも抵抗運動が拡がってファシズム体制が瓦解したことについて考える。	同　上
14	戦後政治体制と福祉国家	先ずイギリス労働党政権による先駆的な福祉国家の形成を紹介し、次にフランス第4共和制、イタリア共和国、ドイツ連邦共和国の成立を眺めるとともに、これらの国でも50年代に福祉国家が成立したことを明らかにする。	同　上
15	小国における民主主義	西欧の小国群には連立政権下に民主化が進み、福祉国家も発展している国が多いことを紹介し、その中で同質的社会の北欧型と異質な下位文化の社会をもつオランダ、ベルギーなどの多極共存型の二つの民主主義を形成の側面から探る。	同　上

＝現代の経済学＝(TV)

〔主任講師：嘉治元郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

現代の経済学の理論体系を概説し、日本経済の現状について考える手段を提供する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	現代経済学の体系	現代経済学の基本的性格を説明し、その内容についての概観を与える。	嘉治元郎（放送大学教授）
2	消費者の行動	無差別曲線（無差別図）を用いて、消費者行動の理論を説明する。	同上
3	生産者の行動	企業の行動を利潤極大化の原理にもとずいて説明する。	同上
4	競争市場の役割	競争的市場が、経済社会において果している役割について説明する。	同上
5	独占・寡占	完全競争の場合との対比において、独占的立場にある企業の行動について説明する。	同上
6	市場の失敗	いわゆる市場の失敗の現象を、外部経済、公共財の存在などの事例に則して説明する。	同上
7	巨視的経済モデル	一国の経済を示すマクロ（巨視的）モデルについて説明する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	消費と貯蓄	マクロモデルにおける消費関数、貯蓄関数について説明する。	嘉治元郎
9	投資	マクロモデルにおける投資について、その需要面と供給面から論じる。	同上
10	景気変動	一国の経済活動水準の循環的な変動について説明する。	同上
11	経済成長	一国の経済活動の長期的な成長について説明する。	同上
12	経済政策の目標	混合経済体制の下での、政府の役割について論じる。	同上
13	財政	財政々策の理論と、財政の経済に関する関係を説明する。	同上
14	金融	金融の役割と、金融政策の意義について説明する。	同上
15	国際経済関係	一国の対外経済関係について、理論と政策の両面から論じる。	同上

＝日本経済史＝(R)

〔主任講師：三和良一（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

近代日本の経済成長は、国際的に比較してみて、際立って急速なものであった。封建社会から資本制社会への移行期、資本制社会の確立期、そして資本制社会の変質期において、日本経済はどのような特質を示したかを見るなかで、急速な経済成長をもたらした要因とその国民生活や国際関係への影響を検討してみよう。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	資本制社会論	近代日本の経済史を学ぶための準備作業として、資本制社会の歴史的特質を明らかにしよう。資本制社会が、それ以前の諸社会とくらべて、経済成長率が極めて高い原因を、共同体・身分的支配・再生産調整機構の三つの面から考えてみよう。	三和良一（青山学院大学教授）
2	幕末の経済と開港	商品経済の発達とともに農民層の分解が進み、封建社会としての幕藩体制の構造は変化した。開港による世界資本主義との接触は、資本制社会への移行の前提条件を急速に成熟させると同時に、半植民地化の危機をもたらした。近代化の初期条件を検討しよう。	同上
3	明治維新	明治政府は、中央集権体制の確立に成功し、封建的身分支配を解体した。地租改正と秩禄処分、その他の改革によって、資本制社会が成立するための基本的条件が整えられる過程を見ながら、明治維新の経済史的意義を考えよう。	同上
4	殖産興業と松方財政	資本制社会の成立には、資金・労働力・技術・企業家などの要素が社会的に形成される必要がある。後発国日本の場合には、政府が政策的にそれらを導出する役割を果たさねばならなかった。殖産興業政策と松方財政の効果を検討しよう。	同上
5	近代産業の発達(1) ―軽工業―	資本制社会は、生産過程に機械を導入した産業革命をへて確立する。日本の産業革命は、当時の先端技術の導入による後発国型産業革命であった。まず、衣料生産部門の中心である綿工業と外貨獲得のための輸出産業の軸となる製糸業の発達を見よう。	同上
6	近代産業の発達(2) ―重工業―	輸出繊維産業の発達によって、日本経済が資本制的再生産の仕組みを確立するために必要な生産財の供給はひとまず確保された。繊維産業のほかに、石炭業と軍需工業が機械制生産体制を整えた時期に日本の産業革命は完成したと考えることができる。	同上
7	日清・日露戦争と日本経済	日清・日露の戦争が日本経済にあたえた影響は大きい。日本は、金本位制を採用し、植民地の経営に乗り出して、資本主義列強の仲間入りした。明治末期の日本経済の再生産構造を、財政・財閥・地主制も含めて分析しよう。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	第1次世界大戦と日本経済	第一次世界大戦は、国際収支の危機に見舞われていた日本にとって、絶好の機会となった。先進諸国の輸出圧力が弱まった時期に、日本は、アジア市場に進出するとともに、重化学工業を発達させた。大戦ブームとその後の反動恐慌の時代の姿を見よう。	三和良一
9	1920年代	第一次世界大戦後、世界経済の基軸国は交替し、現代資本主義への変容が始まった。日本経済は、国際収支の不均衡におちいり、企業は低い利潤率に悩まされ、労働争議・小作争議が頻発して、危機的な状況を迎えた。危機の原因を分析し、それへの対応を見よう。	同上
10	昭和恐慌	1920年代の危機への対策として金解禁と緊縮政策を柱とした井上財政が登場したが、時を同じくしてアメリカの恐慌を引き金に世界恐慌が始まった。日本経済は、深刻な不況に見舞われた。井上財政の経済史上の位置を確定しながら、昭和恐慌を分析しよう。	同上
11	高橋財政	高橋財政は、金本位制を放棄して現代資本主義的な景気政策を展開した。日本は、低い為替レート、軍事費と公共投資などによって恐慌から脱出したが、経済摩擦の激化、軍部勢力の伸長で、重大な岐路に立たされた。苦闘する高橋財政の姿を見よう。	同上
12	戦時経済	世界のブロック経済化に対応して、日本は軍事力を発動して円ブロックを構築しようとした。戦争の拡大のなかで、統制経済は強化されたが、軍需生産の肥大化は日本経済の再生産を困難にした。戦時経済の崩壊過程を検討しながら、日本経済の構造変化を見よう。	同上
13	戦後経済改革	連合国に占領された日本は、非軍事化のための「戦後改革」を強制された。「冷たい戦争」の開始で対日占領政策は変化したが、改革の影響は大きかった。財閥解体、農地改革、労働改革の三大経済改革は、日本の経済構造にどのような変化をもたらしたであろう。	同上
14	経済復興	戦時経済の負と正の遺産を引き継いで、戦後の経済復興は開始された。悪性インフレーションを抑えて、生産を回復させる努力が続けられた。朝鮮戦争による特需ブームを手掛かりに、日本経済が、新しい成長の軌道に乗る過程を見よう。	同上
15	高度経済成長	1950年代中頃から1970年代初めまでの時期に、日本経済は未曽有の高度成長を実現した。高度成長を可能にした要因を分析しながら、その後の低成長への転換の原因を考えよう。そして、急速な経済成長がもたらした正と負の効果を検討しよう。	同上

＝ 近代日本の生活と社会 ＝（TV）

〔主任講師：大濱徹也（筑波大学教授）
　　熊倉功夫（筑波大学助教授）〕

全体のねらい

日本人の生活は、明治維新以来、今日に至るまで大きく変化してきた。その変化は西欧化という側面や合理化機能化といった様々な面をもっているが、しかし生活の実態を支えてきたのは伝統的な生活感覚だった点も見逃せない。日本の近代生活と伝統的社会、地域、日本人の心意とがいかに結ばれ、また切り離されてきたかを考える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生活のリズム ―村と町―	太陽暦の採用による国家祝祭日の制定は旧来の生活暦がもつ秩序を否定したものであった。旧暦と新暦の間でゆれうごく民衆の心情をさぐり、町や村における新しい生活暦の形成過程をあとづけることをとおし、日本人の生活観のありかたを考えてみよう。	大濱徹也（筑波大学教授）
2	開拓地の生活と祈り	内国植民地北海道は各地からの移住者の手で開拓された。開拓地における生活習俗の諸相を、寺社・教会講社の形成や霊場建設・馬頭碑等の建立として表出された信仰のありかたとかかわらせて検討することで、日本人の生活意識をさぐってみよう。	同上
3	村の記念碑	町や村にはさまざまな記念碑がみられる。馬頭碑、津波碑、耕地整理碑、忠魂碑のような戦争記念碑等々。これら記念碑をてがかりとなし、地域民衆の生活と歴史を具体的にほりおこすことで、時代人心のありかたを考えてみよう。	同上
4	世間とつきあい	世間体という言葉があるように、日本人の行動規範のなかには、自分をとりかこむ集団あるいは社会の目が意識され、世間から笑われぬように行動しようとする。その世間とは何か。つきあいという人間関係と世間との関連も考えてみよう。	熊倉功夫（筑波大学助教授）
5	良妻賢母	日本の教育は「良妻賢母」主義であったといわれている。「良妻賢母」とは何かを、女子教育者の論説にさぐるのみならず、具体的な教育の諸相と女学生の姿をふまえて検討することで、日本における「女学」形成への模索を考えてみよう。	大濱徹也
6	礼儀作法の近代化	江戸時代の武家儀礼が崩壊して、近代の日本人は、それにかわる新しい礼儀作法を作ろうとした。それは、別の言葉でいえば、伝統的な生活の型の喪失でもあった。近代になって書かれた膨大な礼儀作法書を見ながら、伝統的な行儀の観念と近代化の葛藤を考える。	熊倉功夫
7	箱膳からちゃぶ台へ	食卓の変化で最大の問題は、千数百年続いてきた銘々膳（1人づつ1つの食台を持つ形式）を捨てて、家族が1つの食卓（共同膳）を囲むようになったことである。そこに食事内容の変化や、食卓の思想の変化も見てとれるであろう。食器の問題も併せて考えたい。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	住いと台所	生活様式の変化は、身の回りの世界で考えたとき、住いの問題にぶつかる。なかでも外からの客をむかえる応接間と、女性の働き場所であった台所は大きく変化した。水道や電気、ガスの使用で、どんな風に変ったのか。具体的な事例を通して実態を窺う。	熊倉功夫
9	田園都市	工業化がもたらした都市問題をふまえ、「田園都市」構想がもつ虚像と実像を具体的にあとづける。近郊農村の変化、都市住民の動態等をふまえ、田園都市論が提起された時代の人心、とくに青年像をとおして都市と農村の問題を考えたい。	大濱徹也
10	サラリーマンの誕生	俸給生活者を中心とする都市生活者の哀歓を職業・日常生活・娯楽等の諸相をとおしてさぐる。新参の都市生活者たる新住民と旧住民との関係を町内会や祭りをめぐる問題等で検討することで、都市民の意識を考えてみたい。	同上
11	酒と煙草の文化	最も伝統的な嗜好品である酒と煙草も、近代化のなかで変化する。それぞれがもっていた儀礼的な性格はどうなったのか。酒場が出現して、酒の飲み方はいかに変化したか。大衆社会の出現と、伝統的な行動様式とのせめぎあいがここにも見えるだろう。	熊倉功夫
12	ならいごとの社会学	女性の趣味としてのならいごとの世界は、今や巨大な産業となっている。それは伝統芸能が近代化のなかで発見した重要な機能だったのである。また家元制度の発展も、ならいごとの興隆と深い関係をもっている。家元制度の奥にある日本人の社会心理も考えてみる。	同上
13	和服と洋服	近代に入って日本人が装うとき、公的な場は洋風に、私的な場は和風に、という原則をもって処理してきた。しかし戦中・戦後、ますます洋風は私的な世界にまで入ってきたように思える。そうした和洋の対立を超えて、日本的な折衷の道が求められた点に注目したい。	同上
14	戦争と生活	兵士とその家族をめぐる問題として、「戦争の時代」を考える。とくに、兵士の生活、戦場の兵士、留守家族の生活、未亡人問題等々をとおし、日本人にとっての軍隊と戦争を検討することで、戦争体験をどう継承すべきかを考えてみたい。	大濱徹也
15	現代日本人の生活と社会	とりあげた各テーマは、近代日本の生活の一部である。各テーマは軒に下るつららのように、それぞれの歴史をたどっているので、長いのも短いのもあり、形もさまざまである。最後に、各テーマの共時的な問題を考え、現代の日本人の生活への見通しが考えたい。	大濱徹也 熊倉功夫

＝社会学研究法＝（TV）

〔担当講師：甲田和衛（放送大学副学長）
　　高坂健次（関西学院大学教授）〕

全体のねらい

社会学研究法とは、社会学説史と対をなす社会調査法のうち、後者すなわち経験社会学の方法をさす。経験社会学の採択している方法は、社会事象の量化と事後実験である。この両者にみあう社会事象はきわめて限定されている。まず、なぜ限定されるかについて考えたい。そこから社会学が歴史学や心理学とどう異なるかがおのずからあきらかとなる。そこで社会学は分析のためのデータを広い意味での人類学に求め、それに統計学・数学を適用しようとする。ついで直接、社会調査を実施することはいうまでもない。その結果はまだ全体社会とよばれるものを説明するにはいたっていない。しかし、婚姻、社会的移動、階層などの人間の選択行動と社会制度との関係の説明が、歴史学、人類学あるいは心理学などといささかは異なり、社会学的説明といわれるものを提出しえたかどうかが、この研究法の課題である。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	社会学的変数	社会学の対象のうち数理社会学のアプローチの可能な分野についての解説、とくに使用できるデータは社会人類学が中心となる。	甲田和衛（放送大学副学長）
2	インセスト・タブー	Freud以降のインセスト・タブーをめぐる解釈の未解決について	同上
3	近親婚	許される婚姻についてFrazer 以降の問に答える	同上
4	婚姻規制	Levi-Strauss の交換理論の成立の可能性について	同上
5	親族の呼称とセマンティクス	Morgan 以降の親族呼称のもつ問題と近時のエスノセマンティクスについて	同上
6	インドの近親婚	南インド調査から。	同上
7	家族・親族・系譜空間	縁組み理論と出自理論の対比、とくに親族から家族を規定する。系譜空間へのアプローチ	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	年齢階梯制	年齢階梯の安定条件を吟味し、モデルとは何か、derivationとはどういうことか。主なる出典はOlinik, An Introduction to Mathematical Models in the Social and Life Sciences, 1975やMurdockの文献となる。	高坂健次 （関西学院大学教授）
9	呪術と不安	Malinowskiの集合的不安と呪術の関係についての議論をA Stinchcombの整理にヒントを得てとりあげたいと思います。これは微分方程式モデルの形をとる。	同　上
10	ホーマンズ＝サイモンモデル	9と10はモデルとしての共通性ばかりでなく、機能論的な考え方、システム論的な考え方においても共通性をもつ。	同　上
11	親族構造の代数学	親族構造や婚姻規則に関してマトリックスや代数学的なモデルの構築可能性をとりあげる。	同　上
12	教育の機会均等	トピックの意外性によって形式性に着目することの特長点を強調したいと思います。	同　上
13	階層のイメージ	reality（社会構造と相互作用）とイメージの関わりについてファランのモデルを発展させ、かつ、日本の「中流意識」論という経験的問題へのモデル構成法の有効性を論じたい。	同　上
14	相対的収奪の問題	relative deprivationの問題や社会的ジレンマの問題などをとりあげる。	同　上
15	数理社会学と社会学研究法（まとめ）	全体のまとめ、とくに社会学に数理社会学的方法を導入することの問題点と今後の見通しについて。	同　上

＝芸能と社会＝(TV)

〔主任講師：小沢昭一（劇団しゃぼん玉座主宰）〕

全体のねらい

テレビの発達、普及によって芸能は、社会の前面に押し出てきました。その結果、社会に於ける芸能のしめる位置、そして役割にも変化がおこっていると思われます。この際、社会と芸能との関係を本質的に考察し、あわせてその将来を展望してみたいと思います。折りにふれては、講師が芸能人であるので、その立場から……。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	芸能の発生	芸能は社会のどのような要求に応じて生まれたのであろうか。また芸能は社会にほんとうに必要であろうか。	小沢昭一（劇団しゃぼん玉座主宰）
2	祝祭と芸能	古代的な祭祀、祝禱のなかから芸能が独立してゆく過程を考えてみる。そして、その芸能はどうけつがれ、今日のムラに生きているのであろうか。あるいは消えていったのであろうか。	同上
3	労働と芸能	労働の円滑化のため、また労働後の慰安のため、労働の周辺より芸能が生まれたことを考察し、その効用を、例えば線路工夫、ヨイトマケの唄、あるいはソロバンの読み上げなどにそくしてかんがえてもみよう。	同上
4	なりわいとしての芸能	職業芸能の成立過程と歩みを、大道芸 — 例えば萬歳を中心に考察する。 かって芸能は「好きで」はじめた仕事ではなかった。「やらざるを得ない」稼業であった。	同上
5	芸能者と差別	芸能史は被差別部落の歴史をぬきにしては考えられない。被差別の土壌から芸能者は生まれ、反撥のエネルギーを芸能に託した事実を点検したい。	同上
6	市と芸能	市に於いて物を売る、その人寄せ、説得、信用獲得のための行為がしばしば芸能的であった。また多くの芸能が市をになう香具師の支配下にあった。その歴史と政況、さらに物を売るための商い芸、宣伝芸として、チンドンヤからＣＭまで考察をすすめてみよう。	同上
7	宴と芸能	むかし人は、男女で寄り集まり互いに歌をよみあい、舞踏をし、配偶者をさがしたという。その歌垣から、まつりの宴会（神楽は元来祭りの宴会の歌舞として生まれた）、そして後のさまざまな祝宴にいたるまで、そこでおこなわれる芸能の効用と、今日のカラオケまでの余興の伝統を考える。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	宗教と芸能	呪術者であった山伏は、その呪術のデモンストレーションとしての神楽を行い、信奉者を獲得した。また仏教の布教に芸風説教の果たした役割は大きい。説教、絵解きの世界をみながら、芸能化した布教方法が効果的であったという点を考えてみたい。	小沢昭一
9	芸能の実用性	寄席や講釈場で、人々は落語や講談によって耳学問をした。劇場で歌舞伎をみて、たとえ通俗的だろうと歴史を知った。 また、たとえばゴゼの来訪によって、芸能を楽しむと同時に他国の事情を聴いた。 情報としての芸能はいまどうなったのか。	同上
10	芸能の悪所性	水清ければ魚住まず、芸能の育まれた環境は必ずしも清浄はない。芸能がアウトロー的世界にあればこそ、その反秩序的な魅力が人々をひきつける。その問題の追求。 また遊郭など、他の悪所との関連にも目を配らねばなるまい。	同上
11	芸能の盛衰過程	浪花節あるいは漫才を例にとり、一つの芸能の栄枯盛衰の跡をたどりながら、芸能と社会の密接な関わり合いについて、細かく点検してみたい。民衆の芸能に求めるものが何であるかを、追求出来るかどうか。	同上
12	余暇生活に於ける芸能	趣味としての芸能も、鑑賞型と参加型とにわけられる。近年はいちじるしく参加型が優勢といわれ、その結果“素人の時代”の到来などともいわれている。演者と観客の問題から、クロウトとシロウトとの関係、さらには“一億総タレント時代”を考えてみたい。	同上
13	スポーツと芸能	相撲はつい近年まで、芸能の仲間であった。今やかえって相撲の世界に芸能的な名残りが濃厚である。一方、著しく芸能化するプロ野球にもめを向け、スポーツと芸能の境界を洗い直してみたい。 体操も新体操も水泳ももはや曲芸？	同上
14	現代社会の芸能への関心（芸能人と社会）	いわゆる立身出生の目標が「末は博士か大臣か」から「末は歌手かタレントか」になったなどといわれるほど、社会の芸能への関心がつよい。たしかに社会に於ける芸能の比重はおもくなり、またあらゆるものが芸能化している。この問題を現役の芸能人としても考えたい。	同上
15	これからの社会と芸能	芸能史は芸能が完成と破壊をくりかえしていることを示している。人々は芸能を愛好し育て、やがて、冷酷に放棄します。われわれの社会は、芸能をこれからどうしようとしているのでしょうか。日本芸能実演家団体協議会では「芸能の社会的機能にかんする基礎研究」をスタートさせました。	同上

＝経営管理Ⅱ＝（TV）

－経営管理技法の体系－

〔主任講師：小林靖雄（放送大学副学長）〕

全体のねらい

経営管理Ⅰは、高度産業社会における現代企業の経営のあり方を、経営理念、政策・戦略、管理体制、組織、経営管理の原理等にわたって明らかにしている。それに続いて本講義では、企業経営の構造的体系に即しながら、経営管理の具体的手法を説明し、実践論としての経営管理の内容を理解してもらうことが、ねらいである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	経営管理の機能と構造	一般に経営管理の機能は、企業活動の計画、組織、指導、統制であると説明される。まずそれぞれの内容を理解し、さらに対象領域別管理、物的・合理的管理と人的・社会的管理、経営構造管理と業務活動管理の考え方を説明する。しかも経営管理はそれらの総合化として初めて現実に機能することをのべる。	小林靖雄（放送大学副学長）
2	経営管理の歴史的発展	経営管理発展の歴史を主としてアメリカについてのべる。すなわち19世紀末からのテイラー・システム、フォード・システム、人事管理、予算統制、原価管理、人間関係論、統計的品質管理の展開と今次大戦後の新しい展開をのべ今日の経営管理が長年の歴史的発展の所産であり、今後の日本企業の経営管理の発展は国際交流によって得るところが大きいことをのべる。	同上
3	経営管理組織(1)	経営管理組織は管理上の機能として静態面と動態面の両面から考察される。本章では、管理の全体を展望するため、静態的組織形態を、トップ・マネジメント組織、部門管理組織、事業部制組織委員会組織、プロジェクト・チーム等について、特徴的に考察する。	同上
4	経営管理組織(2)	経営管理組織の動態面、すなわち組織形成の原則の問題をとりあげる。具体的には管理の限界、命令単一の原則、例外の原則、責任と権限の原則をとりあげ、それらの結合により組織がいかに水平的・階層的に分化し、かつ統合されていくかをのべ、あわせて近年の行動科学的考察の貢献をのべる。	同上
5	経営戦略と経営計画(1)	企業が環境変化に適応するための経営戦略の問題を、主として多角化問題としてとりあげ、企業買収、子会社設立にもふれる。また長期の視点の考察を必要とする経営構造計画のうち、まずプロダクト・ライフサイクルの視点と製品計画、海外事業戦略について説明する。	同上
6	経営戦略と経営計画(2)	経営構造計画のうち、技術研究開発計画、設備投資計画、要員計画をとりあげ、さらにそれらを織り込んだ長期経営計画の内容を概説する。その重要性は、第15章の総合管理と密接な関連をもつ。	同上
7	生産管理(1)	第7章と第8章とで、物的合理化を中心とする経営管理の内容をのべる。本章では、そのうち技術的管理、すなわち時間管理、品質管理、物量管理という、技術的生産管理の特徴を説明する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	生産管理 (2)	「かね」の数値、すなわち貨幣価値による評価数値に基づく経済的生産管理をとりあげる。具体的には原価管理の内容を説明するが、それは前章の技術的管理と密着して理解される必要がある。あわせて利益管理との関係にもふれる。	小林靖雄
9	労務管理 (1)	まずわが国企業の労務構造の特徴を統計により考察する。労務管理は経営を構成する人的従業員の管理であるが、本章では、まず経営内の従業員の物的な人事管理にはじまり、ついで人間関係論の抬頭、行動科学的考察との関連について論じ、今後の発展方向を考える。	同　上
10	労務管理 (2)	技術的生産管理システムとしてのティラー・システムが、いかに賃金問題と結びついて展開されたかという問題を糸口として、賃金問題と労使関係、賃金と労働生産性との関係、終身雇用と年功序列賃金制度、その最近の変化についてのべる。	同　上
11	マーケティング管理	企業が販売市場との接点において展開するマーケティング活動の管理を、需要予測、広告・宣伝計画、販売チャネル、物流システムの管理についてのべ、さいごに販売活動の統制の特質について説明する。	同　上
12	財務管理 (1)	財務管理には、資本調達管理と、総合的経済的管理の２面があるが、本章は資本調達管理をとりあげる。まずわが国資本構成の特徴を、国際比較により明らかにし、ついで企業財務の基本原則をのべ、さらに長期資本調達、短期資本調達、収支計画における資金繰り管理におよぶ。	同　上
13	財務管理 (2)	総合的経済的管理としての利益管理ついて、まず損益分岐図表を中心に、限界利益計画の内容を説明する。また、その利益計画との関連で、予算統制の内容を説明する。	同　上
14	経営管理とコンピュータ	経営におけるコンピュータの利用は、生産面でのＮＣ工作機械の利用、ロボット化、Ｆ・Ｍ・Ｓの採用等でも著しいが、他方経営管理事務のコンピュータ化はいわゆるオフィス・オートメーション（Ｏ・Ａ）として展開されており、その内容と問題点をのべる。	同　上
15	総合管理と日本の経営	前章までの経営管理の各面の内容を総合的経営管理の立場で統括する。その具体的内容は、実体的管理をともなった長期経営計画の策定とそのフォロー・アップとして把えられる。また日本の経営管理がもっている特長、日本の経営土壌との関係を考察し今後の努力の方向を考察して結びとする。	同　上

＝経　営　戦　略＝(R)

〔担当講師：河野豊弘（学習院大学教授）〕

全体のねらい

経営戦略とは、企業が環境にどのように対応し、どのような製品やサービスを提供するかを決定することである。即ち製品構成を決定し、そのための新製品を開発し、後方への垂直的統合や前方への垂直的統合をどうするか、海外に子会社を設けるか否か、競争戦略をどう進めてゆくかなどを決定することである。

戦略的意思決定は前例のない一回限り意思決定であり、企業の業績に大きな影響を与える。そのような意思決定をどう行なうか、をこの科目では研究する。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	経営戦略の意義と戦略的意思決定	経営戦略の意義 経営戦略の重要性 戦略的意思決定の特長 戦略的意思決定のタイプ 長期計画の立案 要約	河野豊弘 （学習院大学教授）
2	環境の分析 ― 機会と脅威	戦略情報の意義　　戦略情報の体系 環境情報の体系 アウトサイド・インとインサイド・アウトと 情報の収集・処理・伝達のプロセス 公式情報と非公式情報 予測の方法　　要約	同　上
3	自社分析 ― 強みと弱み	自社分析の目的 自社分析の体系 比較の基準 ＰＰＭ分析 自社資源の分析 企業文化 要約	同　上
4	戦略発想と目標設定	意義 戦略のアイデア形成 目標設定 要約	同　上
5	製品構成と多角化	製品市場戦略の領域 製品構成の原理 製品構成の類型 製品構成と組織構造 要約	同　上
6	新製品開発	新製品の意義と成功条件 新製品開発の成功要因と失敗要因 開発のプロセス 最初のアイデアの形成 方針の類型 新製品のための意識改革とコンセンサス 要約	同　上
7	垂直的統合	概念と類型 統合の原理 統合の不利 統合に適する場合 要約	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	多国籍企業経営	多国籍企業経営の概念と目的からみた類型 有利性の原理 多国籍企業経営の不利 多国籍企業経営の適する領域 多国籍企業経営の成功要因 多国籍企業の問題点 要約	河野豊弘
9	体質の強化	体質とは 要員計画 能力強化の戦略 企業文化の変革 要約	同上
10	戦略の評価	評価の困難性と必要性 評価の種類 評価項目の原理 評価の評価 戦略的評価 要約	同上
11	戦略の実行	問題の所在 戦略の実行とは―上からみて 戦略の実行の過程―下からみて 実行計画の要素 実行への動機づけ 利害対立をとく 実績検討と計画の改訂　要約	同上
12	戦略の立案と実行の組織	トップマネジメント 企画室 開発部門 プロジェクトチーム 社内ベンチャー制度 SBU 組織の創造性　要約	同上

＝ 人事・労務管理 ＝ (R)

〔主任講師：津田真澂（一橋大学教授）〕

全体のねらい

実務経験を欠く人々に人事労務管理を理解しやすいように講義することは非常にむずかしい。そこでこの講義では全体を3部に分け、第1部では企業経営全体の中における人事労務管理の役割を明らかにし、その上で第2部で人事労務管理の内容を説明する。また第3部で人事労務管理にとって重要なトピックを取り上げることにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	人事・労務管理の意義と課題(1)	開講にあたって（学習の意義） 人事労務管理の定義 人事労務管理の対象 人事労務管理の位置（経営のサブシステムとしての位置と役割）	津田真澂 （一橋大学教授）
2	人事・労務管理の意義と課題(2)	経営の組織と管理 経営システムの国際比較 人事労務管理の国際比較 従業員意識の国際比較	同上
3	日本の経営システム	日本の経営システムの性質 日本の人事労務管理の性質 日本の企業の性質 日本の企業経営の歴史（戦後）	同上
4	人事制度	人事労務管理の骨格としての人事制度 経営組織 資格制度と職位制度 人事評価制度 専門職制度	同上
5	人事配置	採用 配置 異動（出向をふくむ） 要員管理 昇進・昇格制度	同上
6	就業管理	教育訓練の意義と役割 教育訓練の体系と計画 教育訓練の実施と評価 管理者教育	同上
7	労働時間	労働時間の制度と種類 休日制度 休暇制度 労働時間の国際比較 女子・未成年者の労働時間	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	人事評価	賃金・給与の意義 賃金・給与の種類 基本給、職務給、業績給、能率給 諸手当・賞与 人件費 賃金・人件費の国際比較	津田真澂
9	賃金・給与の管理	従業員福祉制度の意義 従業員福祉制度の種類 住宅制度ー寮、給与住宅、持家制度 文化・体育・レクリエーション 中高年従業員の心身の健康の問題	同上
10	従業員福祉	解雇、日本の雇用慣行 定年制 退職金 企業年金 再就職制度	同上
11	定年管理と退職金制度	労使関係制度 労働組合 団体交渉と労働協約 企業内組合 労使協議制	同上
12	労働組合関係管理	職場の人事労務管理 職場集団の活動 小集団活動、ＴＱＣ、ＱＣサークル 欧米諸国の職場、勤労意欲	同上
13	従業員意識調査	従業員の高令化・高学歴化の問題の意義 人事労務管理の諸施策ー役職定年制、能力主義管理、選択定年制、専門職制度、定年前教育、定年延長 公的雇用援助制度の利用 定年制の国際比較	同上
14	非常用従業員管理	情報技術革命の意義 情報技術革命の進展の状況と展望 情報技術革命の人事労務管理にあたえる影響	同上
15	人事・労務管理の今後の課題	臨時従業員の意義ー臨時工、季節工、社外工 パートタイマーの管理 派遣社員の管理 最低賃金制の役割	同上

＝労働経済学＝(R)

〔主任講師：古郡鞆子（明海大学教授）〕

全体のねらい

このコースではまず労働力の供給、需要、賃金決定のメカニズムに関する近代経済学の基礎理論を学ぶ。

次に、現実の経済と労働市場に目をむけて、労働市場で実際に生じている諸問題を経済理論と結びつけて考える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	労働力の構造と変動	人口と労働力率 労働力率の推移 労働力の中高年齢化 労働時間 労働の質	古都鞆子 （明海大学教授）
2	労働力の供給	労働と余暇の選択 労働供給のタイプ 経験的観察 社会全体の労働供給 労働時間短縮の雇用効果	同上
3	家計の労働供給	経済主体としての家計 景気変動と労働供給 経験的観察 税制と労働供給	同上
4	労働力の需要	労働の限界生産力 企業の労働需要 産業の労働需要 労働力需給の動向	同上
5	技術革新と労働需要	資本と労働の代替 技術進歩と雇用変化 マイクロエレクトロニクスと雇用問題 ワークシェアリング	同上
6	労働市場と賃金決定	賃金決定の理論 労働市場の均衡 技術者の不足 賃金決定の制度要因 賃金決定の実情	同上
7	賃金と人的資本	経済成長と人的資本 学校教育投資 職場訓練（OJT） 特殊訓練と内部労働市場	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	失業	失業の概念 失業のタイプ 失業と欠損の関係 労働市場の構造変化 労働市場のストックとフローモデル	古都鞆子
9	潜在失業と不完全就業	失業の潜在化 不完全就業の理論 不完全就業の実態 潜在失業者の測定	同上
10	労働市場と労働組合	労働組合の機能と形態 日本の労働組合の組織状況 団体交渉 労働争議の経済モデル ストライキの発生状況	同上
11	賃金格差	賃金格差の形成要因 企業内賃金格差 企業間賃金格差	同上
12	労働市場と男女差別	差別の概念 差別の実態 差別の経済理論（性の経済学） 女子労働の将来	同上
13	労働力の移動と労働市場	労働移動 職さがしの理論 日本の労働市場と労働移動 今後の労働移動	同上
14	マクロ経済における労働	ケインズによる失業と完全雇用 労働分配率とその実態 フィリップス曲線	同上
15	経済発展と労働	実質賃金の上昇 所得分布 経済成長と就業構造の変化 高齢化社会の雇用問題	同上

＝ 企業と会計Ⅰ ＝（TV）

管 理 会 計

〔主任講師：西澤　脩（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

企業会計には、財務会計と管理会計の二大領域がある。財務会計は、財務諸表を作成し、企業外部の利害関係者に報告することを目的とするのに対し、管理会計は、企業内部の経営者や管理者に必要な会計情報を提供することを目的としている。このような管理会計の全領域にわたって最新の原理と技法について論述する。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	管理会計の意義	管理会計は、経営管理者が経営計画を設定したり経営統制を実施するのに有用な会計情報を作成し提供することを使命としている。このため、会計法規や貸借理論には必ずしも拘束されず、経営管理に最も役立つ会計が最善とされ、不断に進歩・改善が図られてゆく。	西澤　脩（早稲田大学教授）
2	経営分析と経営比較	管理会計は、企業の現状分析から着手される。その用具が経営分析で、その中心は財務諸表分析である。損益計算書や貸借対照表を分析し、経営成績や財政状態を診断するには、まず各種の経営比率を算定し（経営分析）、次に標準値や前期実績と比較する（経営比較）。	同　上
3	利益計画の設定	経営分析・比較の結果を参照して、次期における目標利益を決定し、それを実現するための売上高と費用の大枠を見積る。これが利益計画の設定である。ここでは、費用を変動費と固定費に分解した後、図表や算式を使用して、費用・売上・利益の相関分析を行なう。	同　上
4	資金計画の設定	利益計画が設定できれば、その資金面の裏付けを行なうため資金計画を設定する。資金の中心は現金資金であり、月次の資金繰計画を設定する。さらに運転資金の年間計画を設定するため、資金運用表を作成し、運転資金の調達源泉と運用先及び増減額を明示する。	同　上
5	予算管理の新展開	利益計画と資金計画が設定できれば、それに基づいて詳細な企業予算を編成し、その実現に努める。これが予算管理である。旧来の予算統制では、差異分析による責任追求を偏重したが近代予算管理では、予算目標達成の動機づけを重視することが肝要である。	同　上
6	設備投資の経済性計算	経常予算のほか資本予算も編成される。資本予算の焦点は設備投資の経済性計算であり、十分な経済性を確認した上で設備投資を決定すべきである。経済性計算では、特定の投資だけを対象とし、全耐用期間中の現金流入額を割引計算する手続が新たに必要となる。	同　上
7	在庫管理の諸方法	設備投資と並んで重要なのが在庫投資である。在庫投資の管理に当たっては、棚卸しを行なって、在庫の推移と有高を把握する。次いでＡＢＣ分析を試み、Ａ在庫には経済的発注数量や発注点を設定し、科学的に管理するがＣ在庫の管理は割愛する方が経済的となる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	販売業績の評価法	販売業績は、売上高の多寡ではなく販売利益の大小で測定し評価すべきである。そのためには、販売費分析を試み、製品や地域毎に売上総利益から販売費を控除して貢献差益を算出する。このような貢献差益法を使用すると、従来の純利益法の欠陥を排除できる。	西澤　脩
9	研究開発費の管理	新製品販売によって企業成長を図るには、研究開発を重視しその管理を徹底させるべきである。そのためには、研究開発の原価計算によって研究開発費の実態を把握した後、研究プロジェクト別に計画設定と予算管理を試み、最後に費用効果分析でその効率を測定する。	同　上
10	製造原価の管理	製造原価を管理しその削減に当たるには、製造原価計算の徹底が前提となる。原価管理を推進するには、実際原価計算のほか、標準原価計算、直接原価計算、標準直接原価計算が必要となる。その外、特殊原価調査によるコストダウンもぜひ推進すべきである。	同　上
11	物流費の管理	コストダウンの宝庫として、近年物流費の削減が社会的関心を集めている。輸送費や保管費などの物流費に対して、原価計算や予算管理や採算分析を適用すると、大幅な原価削減が可能となる。その結果、売上高を急増させたのと同一の利益効果が実現できる。	同　上
12	生産性分析と成果分配	投入と産出の比が生産性である。産出を付加価値で測定し、投入を人数で把握すると労働生産性が判明する。生産性が向上し、付加価値が増加すれば、その成果を関係者に分配すべきである。特にラッカープランを活用すると、生産性向上の意欲を高めることができる。	同　上
13	ゼロベース予算の導入	低成長時代の管理方式として、ゼロベース予算（ＺＢＢ）が登場した。従来の既得権主義による弊害を打破し、グランドゼロから予算を編成する方式がこれである。ＺＢＢを導入するとゼロ思考による経営革新が断行でき、マンネリ経営を排除することができる。	同　上
14	事業部制による利益管理	分権管理の完成形態として、事業部制が開発され実践されている。事業部を「会社の中の会社」として利益管理を行なうには、事業部制会計を導入し、事業部利益の形で業績を評価すべきである。そのため、新しい利益管理技法を開発し採用することが必要となる。	同　上
15	これからの管理会計	果たして管理会計は、２１世紀に向ってどのように発展してゆくだろうか。管理会計と隣接諸学との学際研究が強力に展開されることは疑いない。情報会計、意思決定会計、人的会計などがそれであるが、最も注目されるのは行動会計―特に動機づけ会計であろう。	同　上

＝企業と会計Ⅱ＝（R）
税務会計
〔主任講師：富岡幸雄（中央大学教授）〕

全体のねらい

企業の会計には、財務会計と管理会計のほかに、税務会計がある。企業の税務会計は、課税の基準となる課税所得の計算、課税財産の評価を目的としている。この税務会計の仕組みと体系を、企業の組織形態と経営行動の実際に即応しながら具体的に論述する。その際に、企業の合理的な税務対策への役立ちをも配慮していきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	企業経営と税金問題―税務会計の意義と役割―	企業の経営において税金を無視することができないとともに、我が国の企業経理の実際は、税法規定や税務上の取扱から大きな影響を受けている。税金の意味と種類、企業の経営形態と所得課税の態様、法人税制の仕組み、企業経理と課税所得の計算の関係等を説明する。	富岡幸雄（中央大学教授）
2	営業活動と税務	企業の主たる経営活動である販売・請負・役務提供により獲得される収益の計上の仕方につき、それぞれの取引形態に区分して解明する。割賦販売・延払条件付販売、建設請負、不動産の仲介斡旋報酬、技術役務の提供報酬等については、特別な税務上の取扱がある。	同上
3	財務活動と税務	企業の本業以外の活動である証券投資・金融投資・不動産投資等による収益の計上が問題になる。株式投資の法人間配当の無税をはじめ、貸付金利子、固定資産譲渡益、受贈益、債務免除益、受取保険金、還付金収入等については、課税上、特別な取扱がある。	同上
4	在庫投資と税務	企業の在庫投資である商品・製品など棚卸資産の経理は課税上重要である。商品・原材料等の購入品の取得価額、製品　半製品・仕掛品等の生産品の製造原価による取得価額の決定、売上原価を計算するための在庫品の期末決算評価の仕方が問題となる。	同上
5	設備投資と税務	企業の設備投資である土地・建物・機械装置など固定資産の経理も課税上重要である。固定資産の取得価額の決定、修理・改良等の支出の処理、通常の減価償却費の計算のほか、特別償却や投資税額控除など投資減税、特別の場合には圧縮記帳の経理処理がある。	同上
6	人事給与費と税務	企業の支出する給与は、受給者の身分・給与の支給形態・経理方法により課税上の取扱が異なる。役員報酬・従業員給料、役員賞与・兼務役員賞与・従業員賞与、役員退職給与・従業員退職給与のほか、退職金共済、退職年金とともに、福利厚生費の解明が必要である。	同上
7	販売促進費と税務	企業の支出する販売関係費は、その支出の態様、支出の基準、経理方法により課税上の取扱が異なる。売上割戻し・広告宣伝費・景品費・販売奨励金・情報提供料・現地案内費・諸種の会議費と、課税対象となる交際費とを区分することが重要となっている。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	特殊諸経費と税務	企業が支出し又は負担するもののうち、損金計上の時期・限度・制限につき多様なルールの存在する項目がある。試験研究費・開発費、新株発行費・社債発行費、営業権の取得費、貸倒損失、寄付金、租税公課、各種保険料、海外渡航費、損害賠償金等である。	富岡幸雄
9	引当金設定と税務	企業は適正な期間費用を計算するため見積将来費用を引当金として設定する。税法が損金設定を認めているのは貸倒引当金、返品調整引当金、賞与引当金、退職給与引当金、特別修繕引当金、製品保証等引当金である。ほかに、特別なものに価格変動準備金等がある。	同上
10	関係会社と税務	企業経営の発展は、その組織形態として、親子会社・系列会社・グループ会社を形成している。この関係グループ会社間には、特有な取引や資本取引があり、金銭・減価償却資産・土地等の賃貸借、人件費・管理費等の経費分担等をめぐる特殊な税務問題がある。	同上
11	国際活動と税務	経済の国際化の進展と国際的事業活動の拡大による国際税務問題が重大化している。海外に進出している日本企業に対する国際二重課税の排除、日本に進出している外国企業に対する課税、タックス・ヘイブンやトランスファー・プライシングの規制問題がある。	同上
12	同族会社と税務	少数の大株主により経営が支配されている同族会社はオーナー型企業が多い。この同族会社には、留保金課税・行為計算の否認・特別取扱ルールがある。会社役員間の金銭貸借、土地建物の貸借・売買など、課税上、問題となり特別に留意を要する課題が多い。	同上
13	個人企業と税務	個人企業は事業所得に所得税が課税される。事業所得の計算は、収入金額・必要経費とも法人企業とは異なっている。正確な記帳に基づく誠実な申告納税をする青色申告制度の精神と要件・特典、みなし法人課税制度の仕組み・課税上の理解が必要である。	同上
14	事業承継と税務	オーナー型企業の経営者の世代交代期を迎え企業相続に対する相続税が深刻な問題となっている。事業承継税制の創設による中小企業の相続税制の改善がなされ同族会社の株式評価方法・個人の小規模宅地評価が改正された。取引相場のない株式の評価が重要である。	同上
15	企業税制の改革問題―これからの税務会計の課題―	現行の税制・税務会計制度の問題点と改革課題を考える。現行の法人税制とその問題点、企業の経済的実態に適合するように法人税制を改革し中小企業税制と大企業税制の区分構築、税務会計制度の見直しによるタックス　エロージョン（課税の侵食化）の解消をめざす。	同上

＝マーケティング＝（R）

〔主任講師：大沢　豊（大阪大学教授）〕

全体のねらい

マーケティングという言葉はいつ頃から使われ始めたのか、現在それは一般にどのように理解したらよいのか、さらに学問としてのマーケティング論は、どのように体系づけられるのかを明らかにし、その上で企業のマーケティング活動をとりまく環境と、意思決定者の直面する諸問題を理解し、分析していく上での基礎的な知識について論ずる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	マーケティング思想の発生と展開	マーケティングという用語の発生のいきさつをたどり、それが企業の具体的な行動を指すものではなく、一つの理念であることを明らかにする。初期のマーケティング理念と現代マーケティング理念との差を、歴史的に検討する。	大沢　豊（大阪大学教授）
2	マーケティング論構成の視点	学問としてのマーケティング論を体系づけようとするとき、いろいろな視点に立ってそれを構成していくことができる。米国において一般的なマネジリアル・マーケティングもその一つであるが、もっとマクロな立場で議論を組立てていく。	同　上
3	マーケティング環境とマーケティング手段	マネジリアル・マーケティングの立場で企業のマーケティング活動をとらえようとするとき、マネジャーにとって与件として考えられなければならない環境と、意思決定の対象となりうる手段とを区別して考案するのが、もっとも便利である。	同　上
4	政府による規制 －マーケティング環境１－	自由主義経済を基幹とする国々では、何らかの形で競争を制限する行為を禁止する法律をもっている。世界各国の競争制限禁止政策を見るとともに、わが国の独禁法の沿革をたどり、その法律の意図するところを明らかにする。	同　上
5	流通機構の形成と商慣習 －マーケティング環境２－	不公正な取引方法に関する禁止規定、景品や表示の問題に対する規制の内容について、事例をあげながら考察する。	同　上
6	市場と競争 －マーケティング環境３－	一企業の立場で、流通機構を変えていくことはできない。それは歴史的、風土的、あるいは法制的に影響を受けながら変遷をくりかえしていく。日米の流通機構の比較を通じて、日本の流通機構の特質を考察する。	同　上
7	消費者行動 －マーケティング環境－	日本的取引慣行として、どのようなものが挙げられるか。いくつかの事例を見ながら、取引慣行というものがその国の風土と深いかかわり合いをもっていることを明らかにする。大規模小売店舗に対する規制など、日本における国の流通政策の違いについて論じる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	情報の収集と分析 －市場調査－	マーケティング担当者は、競争企業の意思決定を左右することはできない。競争市場での成果を記述するモデルについて概説する。	大　沢　　豊
9	情報の収集と分析 －需要予測－	消費者はマーケティング担当者の最終目標である。その消費者は経済学で仮定するような合理的行動をとるとは限らない。しかもすべてが同質であるとはいえない。市場細分化は異質的な市場に対応する企業の適応であるといってよい。	同　上
10	情報の収集と分析 －市場調査－	意思決定に必要とされる情報は社内で得られるとは限らず、調査によってこれを入手しなければならないことが多い。市場調査技術は、対象の選択（標本調査論）と質問票の作成の両面で、プロフェッショナルな知識の上に成立っている。	同　上
11	情報の収集と分析 －需要予測－	将来の不確定な状況について、何らかの形で予測を行なうことが要求される。短期的な予測と長期的な予測とでは、自から異ったタイプの手法が適用される。コンピュータの発達によって予測技術は進歩しつつある。	同　上
12	新製品開発	現在の企業では、単一の製品またはサービスのみを提供していることは極めて稀である。製品開発は、市場細分化のための戦略と、多様化を目指した戦略とが考えられる。製品の特性をどう把えたらよいか、製品属性分析の手段にもふれる。	同　上
13	広告計画	広告実務においては、広告活動を他のマーケティング変数と切り離して論ずることが多い。ここではそれらの実務で多く利用される基準とその問題点を考え、同時により総合的な立場からの意思決定モデルに言及する。	同　上
14	価格政策と地域マーケティング	個々の企業にとって価格決定の自由度はその市場が競争的であるか寡占的であるかによって異なる。価格決定の実務的基準のいくつかを概説する。 地域マーケティングでは消費者の空間的行動を分析するためのモデルを考察する。	同　上
15	企業と消費者	ケネディ大統領による消費者の権利の保護の提唱以来、国や公共団体による施策がとられてきている。国や企業はその権利を保護する責任を負うと同時に、消費者の側でもそれに応じた知識を自ら身につける義務があろう。	同　上

＝経営組織論＝(R)

〔主任講師：森本三男（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

経営組織の構造と行動に関する諸問題を理解してもらうよう努める。全体の前半部分は主として理論的命題の説明に充当し、後半部分は主として実践的課題の分析に向けている。現代が組織社会であることに留意することとともに、組織が変動する環境に主体的に適応する動態的システムであることを重視する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	経営組織の意義	個人と協働 協働システムと組織 経営と経営組織 経営組織の3要素 3要素と組織の諸問題領域 組織の環境適応	森本三男 （青山学院大学教授）
2	経営組織論の発展と系譜	理論展開の潮流 各種の組織理論(1) ― 古典的組織論 各種の組織理論(2) ― 人間関係論 各種の組織理論(3) ― 現代組織論 各種組織論の分類	同上
3	経営組織の構造(1) ― 設計原理	組織構造の意義と次元 組織原則(1) ― 課業分担の設計原理 組織原則(2) ― 伝達システムの設計原理 組織原則に対する批判 組織原則から組織戦略へ	同上
4	経営組織の構造(2) ― 組織形態	組織単位と組織形態 経営組織におけるラインとスタッフ 組織形態の発展的分類 各種組織形態の特質 現実の組織形態	同上
5	経営組織の行動	組織行動の意義 意思決定 リーダーシップ 組織影響力 葛藤とその解決	同上
6	経営組織と環境	外界と環境 組織環境の構成要因と構造 環境主体の重要性 環境適応行動の特質	同上
7	経営組織の有効性	組織有効性の意義と展開 組織有効性の目標モデル 組織有効性のシステム・モデル 組織有効性と組織開発 日本における組織開発 組織開発から創造性開発へ	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	経営組織の成長	組織成長の意義 組織成長の規模的接近 組織成長と組織学習 組織成長の細胞分裂モデル 組織成長の構造均衡モデル(1) 組織成長の構造均衡モデル(2) 組織成長の変容モデル　組織成長の鬼火モデル	森本三男
9	経営の組織戦略	経営組織と戦略 経営戦略と組織構造 設計戦略(1) — 技術と組織構造 設計戦略(2) — 規模と組織構造 組織間関係戦略 統合化戦略	同上
10	経営組織の環境適応	組織環境の変化の様相 OAと経営組織 情報プロセッシング・アプローチ 組織内諸制度の変革 キャリア開発	同上
11	経営組織の中枢機能	組織の中枢機能 経営者組織としての取締役会 経営執行委員会(イ)と常務会(ロ) 本社の機能と組織 研究開発組織	同上
12	経営組織の動態化	組織動態化の意義 組織の簡素化 — 課制廃止 組織の弾力化 — プロジェクト組織 組織の多元化 — マトリックス組織	同上
13	経営組織の人間化	組織の非人間化現象 職務設計の人間化(1) — 職務拡大 職務設計の人間化(2) — 職務充実 小集団活動 意思決定参加	同上
14	経営組織の国際比較	国際比較の意義と方法 定性的差異分析による国際比較 主観的測定手段による国際比較 客観的測定手段による国際比較 普遍理論の命題による国際比較 総合的国際比較	同上
15	経営組織の国際化	経営の国際化と組織問題 国際化による組織構造の変容 グローバル構造と経営戦略 日本的組織特性 日本的経営の海外移植	同上

＝経　営　科　学＝(R)

〔主任講師：大澤　豊（大阪大学教授）〕

全体のねらい

企業が生産、販売、財務などのそれぞれの領域において合理的な意思決定をしようとすれば、企業経営を取りまく経済環境をはじめ、その決定に影響を与えるさまざまな要因を分析し、それらを表現する数量的なモデルを構築し、その上でいろいろな代案を検討することが必要である。この種のモデルがどのように役立つかを、数値例を使って、実際に電卓などを利用して計算しながら、具体的に議論していきたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	企業経営における意思決定の科学	「経営科学」という言葉は、一般にはオペレーションズ・リサーチ(OR)と同義語として扱われることが多い。本書では企業行動の経済分析も含めて、企業経営における意思決定の経済的側面に重点をおいたモデルに焦点を合わせ、数値例を実際に計算しながら理解していく。	大澤　豊（大阪大学教授）
2	企業活動の経済モデル	いく種類かの生産要素を結合することによって製品が生産され、市場に供給されていく。企業活動を経済学的立場から考察する上でのもっとも単純化されたモデルをとりあげ、そこに含まれる基本的な概念を明らかにする。そして利潤最大化のための「限界分析」を検討する。	同　上
3	生産関数と資金制約	生産関数が与えられれば、いろいろな生産量に対応して最適な生産要素の投入量がきまる。実証分析でしばしば使われるコブ・ダグラス型の生産関数を導入し、その場合の費用関数を数値例によって計算する。さらに資金制約がある場合についての最適政策を考える。	同　上
4	広告と研究開発	需要関数に価格だけではなく、広告費の支出による影響をも含めてモデル化することも可能である。広告投資により製品の差別化を図り、あるいは研究開発投資によりコスト・ダウンを図ることは、企業が需要関数や費用関数を自社に有利になるように制御するための行動である。	同　上
5	企業の経営方程式	経営方程式とは、企業が総資産回転率、内部留保比率、売上高成長率、資本金比率についてある一定の経営政策を継続的に採用したときの、その企業の自己資本比率を与える関係式である。これにより長期経営計画立案に際しての変数間の整合性をみることが可能である。	同　上
6	線形計画法Ⅰ——線形計画モデルの構成	現実の姿を数量的モデルとして表現しようとするとき、いくつかの仮定をおいた上でモデルがつくられることになる。線形計画モデルの前提を示し、図による解法を説明する。	小山昭雄（学習院大学教授）
7	線形計画法Ⅱ——計算による解法	線形計画問題の基本的な解法である単体法の考え方を数値例によって示す。それが単体表とよばれる計算表で計算されることを説明する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	線形計画法Ⅲ ― 双対性とその意味	与えられた問題に双対問題とよばれる別の問題を結びつけ、両者の間の関係を説明し、双対問題のもつ意味を考える。	小山昭雄
9	線形計画法Ⅳ ― 輸送問題	線形計画問題の1つの特殊なケースである輸送問題について、その定式化の仕方と解法を説明する。	同上
10	ゲームの理論Ⅰ ― ゲームの一般的構造	競争条件下での利害の対立する状況を分析するために、どのようなモデル化が可能であるかを考える。	同上
11	ゲームの理論Ⅱ ― ゼロ和2人ゲーム	もっとも基本的なゼロ和2人ゲームについて、合理性の判断基準をどのように選ぶべきかを考え、その基準のもとでどのような帰結が得られるかを示す。	同上
12	ベイズ決定理論Ⅰ ― 不確実な条件下での意思決定	環境条件に不確実性が存在する場合、そのもとでの行動基準はどのように選ばれるべきかを考える。	同上
13	ベイズ決定理論Ⅱ ― 情報のもつ価値の評価	環境条件にかかわる情報が新たに追加されるとき、その情報がどれだけの価値をもつと評価されるべきかを考える。	同上
14	シミュレーションⅠ ―モンテ・カルロ法	いろいろなタイプのシミュレーションの技法の適用領域を分類した上で、モンテ・カルロ法の応用例について自分で計算することを試みる。円周率を導出するための計算と待ち行列のシミュレーションの問題をとりあげる。	大澤豊
15	シミュレーションⅡ ― システム・ダイナミックス	企業、産業あるいは一国の経済など、社会システムの機能を記述し、分析する目的で、システム・ダイナミックスとよばれる手法が登場してきた。簡単な在庫管理システムを例に、どのような考え方でモデル化が行なわれるかを理解することを試みる。	同上

＝生産管理とOR＝(TV)

〔主任講師：秋庭雅夫（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

生産に当って、市場の要求に適合する製品の産出、材料・動力・設備などの効果的な活用、作業者の人間性尊重などの課題に応えるために、生産とその管理の活動を適切に計画し、運用していくための考え方、方式、方法を説き、また、それらを統合するシステムについて示す。さらに方法論としてのORの概要を紹介する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生産管理	生産とは何か。生産管理とはどのようなことをするのか、特性（品質、数量、時間、金額）の管理と過程（材料投入、工程稼働、製品産出）の管理とを組み合わせた考え方ととらえ方を示す。	秋庭雅夫（東京工業大学教授）
2	生産方式	生産管理のとらえ方に基づいて、各種の生産方式の区分体系の考え方を示し、また、それぞれの生産方式の特徴を説く。さらに、今までの生産方式の移りかわりと、現在の課題を示す。	同上
3	製品企画と品質管理	市場の要求を分析し、そこから製品に何が期待されているのかを導き出す方式とその結果を示す。さらに、管理図法、抜取検査など品質管理の基本を示す。	同上
4	工程分析	工程図記号に基づく工程図の作成方法を示し、生産工程の改善への活用方法を例示する。	同上
5	作業管理	作業分析、既定時間法、標準資料法などを示し、作業方法・時間の設定と標準化について説く。それに関連して、複式活動分析の考え方と活用のしかたを示す。	木村俊郎（国際協力事業団）
6	待ち行列と設備能力の決定	設備能力の決定問題について、待ち行列モデルと確率モデルの導入の必要性を説く。一般の待ち行列問題に対するモンテカルロシミュレーションによる解方法およびM／Mについて説く。	横山雅夫（放送大学助教授）
7	ラインバランシング	作業負荷を平準化するためのラインバランシングの手法について説く。ラインバランス効率、山崩しの考え方とともに、ジャックソンの列挙消去法および位置重み値を用いる方法について説く。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	線形計画法による生産計画	生産計画における意思決定の線形計画法によるモデル化をとりあげる。具体的解法の手段として、図式解法、シンプレックス法による解の求め方について説く。	横山雅夫
9	スケジューリング（ジョブ・ショップ・タイプ）	複数の仕事をいくつかの機械で処理するときの日程計画について説く。ガントチャートによって問題の意味を説く。また、ジョンソンの解法について例示する。	同上
10	スケジューリング（プロジェクト・タイプ）	プロジェクトに含まれる仕事の先行順位が与えられたときの進度管理を行なう手法としてPERTをとりあげる。アローダイヤグラム、日程計算、クリティカルパス、人員配置、3点見積り、時間短縮の求め方とその意味を説く。	同上
11	作業割当と輸送計画	最適割当問題、輸送問題をとりあげ、それらの実際的意味を解説するとともに、わずかの計算努力で解くことのできるハンガリア法などのアルゴリズムについて説く。	同上
12	資材調達	資材調達に関する各種資材発注方式について示す。また、それと関連して、安全在庫数量の各出算出方法について示す。さらに、外注への考え方と管理の課題を示す。	秋庭雅夫
13	在庫管理	なぜ在庫されているかの理由を体系的に明らかにし、在庫ゼロ方式への取組み方を示す。また、生産計画と在庫管理とのかかわりあいを示すとともに、大量効果に基づく経済的発注数量の求め方について説く。	同上
14	生産合理化	目標を重点的に展開して生産を合理化する方式、対策の体系的な選定について示す。	同上
15	生産自動化	生産自動化の構造を示し、トランスファ方式、群管理方式などの方式ならびに機器を例示する。さらに、自動化の経営効果とそこでの課題について説く。	同上

＝ 経営分析と財務管理 ＝(R)

〔主任講師：小林靖雄（放送大学副学長）〕

全体のねらい

企業の資本調達および運用の管理という広い立場で財務管理を扱う。経営分析についてもこの財務管理との関連で考察する。基礎的、原理的考察を中心とするが、随所で、日本の企業の財務問題にもふれて説明する。本科目の履修には、会計学に関する基礎知識をもっていることが望ましい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	財務管理の意義と経営分析	財務管理には、資本調達および処分という財務活動の管理という狭い解釈と、資本運用全体にわたる管理という広い解釈があるが、本講義では両者を総合して財務管理とする。その場合、内部管理目的の経営分析はその一部分となる。なお近年の財務的意思決定を中心とする新しい財務管理の研究もとり込んで説明し、またわが国企業の財務構成の特徴を、製造業と卸売・小売業とについて概観する。	小林靖雄（放送大学副学長）
2	企業財務の基本原則	企業財務に関する古典的原則を、財務流動性（財務均衡）の原則、財務安全性の原則、財務経済性の原則について説明し、そのうち財務安全性と財務経済性の要求との調整について、資本コストと財務危険との調整として論ずる。	同上
3	長期資本の調達	株式会社企業における長期資本の調達について、株式、社債、長期借入金による資本調達につき、その内容を説明する。	同上
4	短期資本の調達と資金繰り	短期資本の調達について、まず正味運転資本の概念を説明し、ついで短期借入金、買掛金、その他の短期負債による資本調達を説明する。さらに資金予算の編成および資金運用表について概説する。	同上
5	内部資本調達	内部資本調達としては、留保利益と毎期の減価償却費が主要なものであるが、特に減価償却費に相当する部分の資金化とその設備投資への充当による“ローマン・ルフチ効果”について、その内容を説明する。	同上
6	資金の時間的価値	資金が時間的価値を持つ理由を述べ、現在価値と終時価値の計算方法を述べる。ついで、資金の流れの時間的調整を行う方法を取り上げ、この資金の流れが無限に続く場合を取り上げる。	古川浩一（東京工業大学助教授）
7	設備投資の意思決定(1)	確実性の状況の下での設備投資の経済的評価の方法として、原価比較法、会計的利益率法、回収期間法、現在価値法、内部収益率法、収益性指標法の算定方法を取り上げる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	設備投資の意思決定(2)	設備投資は、その結果を必ずしもはっきり経済的に評価しにくい問題をもっている。そこで、不確実性と関連をもつ回収期間法を再検討し、リスクに関連する情報を設備投資の評価の中にどのように取り入れるかを検討し、予算制約がある場合の問題を取り上げる。最後に、設備投資のもつ戦略的な意味を検討する。	古川浩一
9	経営分析の意義と発展	経営分析の発展を概観し、その進め方を述べる。そして、経営分析の重要な資料である貸借対照表と損益計算書とについて、その基本的な特性を検討する。	同　上
10	収益性と生産性分析	企業の収益性を分析するために、各種の売上高利益率の求め方と意味を取り上げ、ついで各種の資本利益率の求め方と意味を述べる。また、生産性分析の方法を述べる。これらの方法はわが国の資料を用いて説明される。	同　上
11	財務流動性と安全性分析	企業の支払能力を短期流動性と長期流動性ないし安全性の分析方法として取り上げ、各種の比率の求め方とそれらの意味を述べる。ついで、回転率と回転期間の分析方法に触れる。	同　上
12	企業評価と資本市場	企業が資本市場でうける評価は企業の資本調達能力にも関連する。企業が資本市場でどのように評価されるかを、完全市場という分析のための仮定的な市場を想定して検討し、企業の資本構成がその価値にどのような関係をもつかを述べる。	同　上
13	企業合併と財務	企業合併は企業間の提携よりも密接な結合で、当事者企業にメリットを与えると同時に、財務面でも難しい問題も投げかける。	村松司叙 （成蹊大学教授）
14	為替レート変動と国際財務	今日では多くの企業が国際的活動を営み、そこで最初にぶつかるのが外国為替レートの変動問題であるが、この問題をとりあげる。	同　上
15	ま　と　め	前章までの諸考察をまとめ、特に諸外国との比較により、日本の企業が直面し、かつ解決すべき財務管理上の問題点について説明し、まとめとする。	小林靖雄

＝産　業　社　会　学＝(R)

〔主任講師：松島静雄（日本大学教授）〕

全体のねらい

今日の産業社会学は戦前の経営社会学、職業社会学等と異り、人間が人為的意図的に構成したアソシエーション、就中社会生活に重要な意味を持つようになった企業及び労働組合等の集団的特徴を分析する所に特色がある。ここでは従来の成果を示しつつ、主として企業経営、あわせて労働組合の集団的特徴を考えて行く。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	産業社会学の性格	①産業社会学の発生、②産業社会学の対象、③産業社会学の方法	松島静雄（日本大学教授）
2	企業と組織(I)	①組織の概念、②ウエーバーのビウロクラシー論、③義務と権限の分配、階層性の論理、規則の優位性、技術的有用性	同　上
3	企業と組織(II)	①フィヨールの組織論、②ライン・タイプとライン・スタッス・タイプ、③テイラーと職能組織、④組織の基本的性格、⑤職位、職務、職種	同　上
4	企業組織と人間(I)	①組織人としての行動の要請、②公人と私人の態度の使い分け、③組織の重層化の悩み、④繁文縟礼、能率の低下、⑤人間歯車となり全体的目的が理解され難くなる。	同　上
5	企業組織と人間(II)	①従業員の自己疎外、②組織の顕在的機能と潜在的機能、順機能と逆機能、③マグレガーのX理論とY理論、④余暇志向の増大、⑤感情の論理の回復と人間関係	同　上
6	人間関係論の発生とモラール	①ホーソン工場の実験―照明実験、②労働科学、③継電器の実験、④従業員の態度とモラール、⑤インタビュー	同　上
7	人間関係とインフォーマルな組織	①配電器巻線作業観察室の実験、②人間関係とインフォーマルな組織、③インフォーマルな組織の性格、④集団の実態概念としての人間関係	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	小集団論と行動科学	①組織と人間、②経営哲学としての人間関係、③小集団論の発生、④グループ・ダイナミックスと小集団の性格、⑤行動科学の発達	松島静雄
9	リーダーシップ	①ヘッドシップとリーダーシップ、②リーダーシップの調査、③リーダーシップの性格、④企業のリーダーシップと組合のリーダーシップ	同　上
10	企業・労働組合と地域社会	①ホーソン工場の実験への批判、②労働組合、労使関係の研究、③ウォトーナー・ローのヤンキーシティのストライキの研究、④地域社会と企業、⑤フォーマルな組織とインフォーマルな組織の統合	同　上
11	企業経営の日本的特質(I)	①集団主義的、②終身雇用、③年功賃金、④その他の特質	同　上
12	企業経営の日本的特質(II)	①日本人の人間関係の特色、②職場運営の日本的特質、③大企業と中小企業、④日本的経営の意味	同　上
13	日本の労働組合運動	①日本的経営の成立時期、②労働運動の第１の高昂揚期、③第２の高昂揚、④労働組合運動と日本の労使関係、⑤企業別組合の優位性	同　上
14	技術革新と日本の企業	①ＭＥの発達、②昭和30年代の技術革新と今回のＭＥ化、③労働の質の変化、④技術革新と職場組織、⑤日本的経営と技術革新	同　上
15	日本的経営の今後	①日本社会の高齢化、②昇進の能力主義化、③職務遂行能力にリンクした賃金へ、④変革のない終身雇用、⑤日本における能力主義	同　上

＝産業地理学＝(TV)

〔主任講師：竹内啓一（一橋大学教授）〕

全体のねらい

地表において展開されている経済活動は、空間的位置関係について見る場合、全く無秩序に展開されているわけではない。また、国民経済というものは、その内部を生産要素がまったく自由に移動する均質な空間でもない。ある場所で、ある経済活動が営まれるのはどのような理由によるのか、そして、その経済活動は他の場所の経済活動とどのような関係をもっているのか、そして、このような関係を通じて空間の構造化、あるいは空間組織の形成がどのようにしてなされているのか、これらのことを理論と現実の分析とから考察するのが産業地理学である。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	産業と地理	産業地理学とは何かということを、経済活動がもっている空間的側面と、古くからの学問である地理学との関係から考える。	竹内啓一（一橋大学教授）
2	経済的地域分化	経済活動の不均等な発展は経済的地域分化を生ぜしめ、国内的、国際的な地域問題をひきおこす。ここでは、経済的地域分化の諸理論を検討する。	磯部啓三（成蹊大学講師）
3	中心地と地域の重層構造	経済地域内部が、また、経済地域相互がどのように組織されるかという点を、中心地理論を取り上げて検討し、その有効性と限界を考える。	同上
4	工業の地域的構成とその変動	工業活動の形成を、いくつかの国民経済を事例にして考察する。その際、各国民経済の世界史的位置づけ、再生産構造の特色の理解を踏まえて、工業の地域的分化の実態の確認し、それを説明する諸理論の有効性と限界を考える。	山本健児（法政大学助教授）
5	農業の地域的構成	農業活動の地域的分化を、いくつかの国民経済を事例にして、考察する。広義の農業の特色を念頭において、農業の地域分化を説明するための理論の有効性と限界とを考える。	同上
6	商業・サービス業の空間組織	取り引きされる財貨、サービスをいくつかに分類しながら、その空間的移動が、国民経済、あるいは大部分圏内部でどのようにして重層的、階層的な空間組織を形成しているかを分析する。	竹内啓一
7	通信・交通と空間組織	交通、通信は、近年の情報革命によって、その産業としての性格が急速に変化してきている。また、交通、通信ともに、インフラストラクチャーに大きく負うが、同時に、これらの施設が大きな外部経済をつくり出す。以上の視点がここで問題になる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	労働力の空間的移動	労働力の空間的移動が、なぜ発生するかを経済学的に考え、それによってもたらされる諸問題を検討する。	山本健児
9	国内の地域格差	国民経済を構成する諸地域の間の経済的格差について、いくつかの事例をもとにして考察し、これを説明するための諸理論の有効性と限界とについても考察する。	同　上
10	国際的な地域格差	国家の間の経済的格差には、産出高あるいは所得の水準のみでなく、さまざまな社会的ストックあるいは広義の福祉も考慮にいれて研究させなければならない。	竹内啓一
11	都市における空間的不平等	都市は経済活動の装置であるとともに住民の社会生活の場でもある。しかし、その内部には不平等が存在し、この不平等が、空間的な形をとって現象することがある。この問題について、理論的および政策論的考察をする。	磯部啓三
12	権力と産業地理	政治権力はそれ自体さまざまな性格の空間組織を形成し、それを通じて、産業の空間的構成を規定するが、移動、立地などの空間的側面をもつ経済的意志決定にも直接的影響を与える。	竹内啓一
13	エコロジーと産業地理	人間の活動は、自然界の物質体謝の一部をも構成している。人間活動をそのような側面でとらえた論理であるエコロジーの論理とも結びついた広義の産業地理を分析する視点を考える。	同　上
14	文化と産業地理	観光関連産業やファッション産業のようにある特定の価値観にもとづく人間行動を前提にして成立している産業がある。このような文化的価値観と産業との関連を、いくつかの事例をもとにしながら考察する。	磯部啓三
15	経済体制と空間組織	分権的か集権的か、市場機構がどの程度まで重要な役割をになっているか、これらの点での経済体制の相違によって、経済活動の空間的関連の様子がどのように相違するかということを、地域政策のあり方をも関連させて考察する。	竹内啓一

＝産　業　と　情　報＝(R)

〔主任講師：加瀬滋男（放送大学教授）

全体のねらい

近時企業環境の複雑化に伴い、経営に関する情報の重要性は、以前にも増して広く認識されるようになった。他面、情報の処理や伝達の技術も、文字どおり日進月歩の様相を呈しつつある。この時流に沿い、企業内外の技術情報を中心に産業と情報の関連を論述する。また随時、一般産業人の情報に対する望ましい心構えにもふれる。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	情報概論(1) ー情報とは何かー	情報一般、ビジネス情報についての若干の特徴を述べ、本講義を進める上でのイメージとコンセンサスの確立を試みる。	加瀬滋男 （放送大学教授）
2	情報概論(2) ー情報活用ー	情報の探索と収集の具体的方法、収集から活用を経て、保管・管理に至るまでの実際的手法を解説する。	同　上
3	情報の収集(1) ー技術情報の種類ー	技術情報の種類を、形式・生産場所・加工度から分類し、1次情報の種類と特徴に関しては、特に詳しく講述する。	同　上
4	情報の収集(2) ー情報調査ー	情報調査の要点を論ずるほか、2次・3次情報の活用法を示唆する。主な総合情報機関や各種の文献・資料も紹介する。	同　上
5	情報の収集(3) ー情報検索ー	情報検索の発展過程と内実につき説き、次に情報検索に関連してデータベースの基礎的事項を略説する。	同　上
6	情報の創出(1) ー情報産出の意義ー	情報の研究・開発に対する個人や企業の責任の重要性を強調し、研究者や技術者も情報流通活動に積極的参加を促す。	同　上
7	情報の創出(2) ー新情報の産出例ー	最近新素材として脚光を浴びているファインセラミックスの重要特性である曲げ強さデータの解析例に、情報の創出を解説する。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	情報の創出(3) －関連情報への 展開－	前章で提起された新しい情報から、関連情報の産出へと展開されて行った事例を呈示する。	加瀬滋男 （放送大学教授）
9	オフィスオートメーション(1) －ＯＡの内容と その影響－	ＯＡの目的・対象・手段について述べ、OAの目ざすところを明らかにする。日米のＯＡの相違およびＯＡの影響にも話を進める。	魚田勝臣 （慶応義塾大学 非常勤講師）
10	オフィスオートメーション(2) －ＯＡ機器の 活用－	ＯＡ機器の主なものを概説し、通信手段・通信規約の標準化にもふれる。また、ＯＡへのアプローチの方法について解説する。	同　上
11	オフィスオートメーション(3) －ＯＡの近未来 像－	ＯＡ機器の変化の傾向について論じ、飛躍のために基礎的な研究の確立と日本独自のＯＡの展開の必要性を強調する。	同　上
12	情報の伝達(1) －データ通信－	各種データ通信サービスの要点を概説し、電気通信事業法を解説してから、最近とみに叫ばれてきたＶＡＮ（付加価値通信網）にも言及する。	加瀬滋男 （放送大学教授）
13	情報の伝達(2) －行政面における 電気通信の長期 構想－	電気通信システムに関する国（郵政省）の構想を要約し、あわせて情報通信産業の強化策の概要も解説する。	同　上
14	情報産業(1) －産業人と 情報産業－	産業人が情報産業を理解することの意義を強調してから、情報処理技術者試験を例示して読者の情報へ向けての関心を高め意欲を鼓舞する。	同　上
15	情報産業(2) －産業の情報化と 情報の産業化－	総合商社の新情報商社への転針を例に新情報産業の胎動を瞥見するほか、諸産業の情報部門にふさわしい人材の育成にも論及し、本講義の趣旨を総括する。	同　上

＝産　業　と　企　業＝(TV)

〔主任講師：黒沢一清（東京工業大学名誉教授）〕

全体のねらい

産業という巨視的現象も、他方企業という微視的・主体的存在も、それぞれ専門的に研究され得る対象であるが、本講では、こうした産業と企業との、まさに相互作用領域をユニークな対象とし、そこに現われる生いきとした現象を把握する方法と理論とを与えようとする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	序　論：産業－企業系研究の方法	産業－企業系が多元・重層構造をもった実体であることが述べ、これを把握するための方法論を展開する。	黒沢一清（東京工業大学名誉教授）
2	産業－企業系の構造(1)	メタ構造を、人間と自然との相互作用系及び人間と人間との相互作用系との交絡構造として把握する。	同　上
3	産業－企業系の構造(2)	産業－企業の相互作用系の重層的な仕組みを解明する。	同　上
4	産業組織－企業系	産業と企業との相互作用関係の在り方を把握し、業界で生起する諸問題が、解決されてゆく過程を解明する。	同　上
5	産業－企業系の成果の構造連関	社会経済－産業－企業を結ぶ経済成果としての付加価値の性格を中心に、経済成果分析の方法を論じる。	同　上
6	産業－企業系における生産性・収益性の関係とその分析	産業レベルの経済成果と企業の主体性を表現する経済成果とを統合・連結した成果分析体系を考える。	同　上
7	独占禁止政策と企業	独占禁止政策の構造を解明し、近年に行われた大型合併の例をとりあげる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	中小企業政策と企業	経済的・社会的劣勢のために、相対的に低い経済的社会的地位に追いやられる。中小企業への政策を論じる。	黒沢一清
9	中小企業の組織化・共同化	中小企業者による協同運動を制度的に支持する諸制度がある。制度と運動、及びそこにおける基本問題を考える。	同上
10	産業－地域社会－企業系	従来の工業立地論を反省し、現代的条件を考える。	同上
11	プロダクティヴィティ・スキームと産業－企業系	プロダクティヴィティ・スキームの世界的・日本的な経験を総括して、現代の基本問題を考える。	同上
12	労働生産性・賃銀および価格の関係をめぐる産業－企業系の基本問題	生産性・賃銀及び物価の問題を取り上げる。	同上
13	伝統産業－近代産業系における企業	近代産業系における日本固有工業の存在意義を解明する。	同上
14	産業と企業の国際競争力（その１）	統計資料を活用して、先進産業諸国間及び発展途上諸国間の産業水準での比較研究を行う。	同上
15	産業と企業の国際競争力（その２）	企業レベルでの国際競争力の計測論的接近を試みる。	同上

＝産　業　と　資　源＝（R）

〔主任講師：黒沢一清（東京工業大学名誉教授）〕

全体のねらい

産業と資源との交互作用域に発生している諸現象をどのように理解し、そしてその問題の解決のために、どのような方針を打ち出すことができるかを考える。この複雑きわまりない現象の背後に横たわる仕組みを明らかにし、それの動態を支配する法則性を解明し、産業活動における資源問題解決の洞察を与えようというのである。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	産業ー資源系研究の方法	産業資源問題とは一般にどういうものであるかを概観し、この問題を扱う学問的立場の特徴を述べる。メタ資源論がその一般的な立場である。	黒沢一清（東京工業大学名誉教授）
2	産業ー資源系の構造ーその1：構造へのヴィジョン	世上一般にみられる資源問題の取り上げ方を吟味して、我々のメタ資源論のヴィジョンを示す。	同上
3	産業ー資源系の構造ーその2：メタ産業論のカテゴリー体系	我々のメタ資源論がその上に展開される理論的な土台としての、産業社会への最も根源の水準を認識するカテゴリー体系を与える。	同上
4	産業ー資源系の構造ーその3：資源、資源論のためのメタ構造とそのカテゴリー体系	前章の方法をより具体的に、資源問題の背後に横たわるメタ構造に応用し、展開する。	同上
5	産業ー資源系の構造ーその4：技術と資源の構造連関(1)	産業資源とは、産業の組織的・技術的状態を媒介として把握された資源である。そこで技術の構造及び資源の構造が解明されなければならない。	同上
6	産業ー資源系の構造ーその5：技術と資源の構造連関(2)	前回にひきつづき、資源概念の構造的内容の認識を深め、それによって資源問題の意味理解に進む。	同上
7	資源問題の基礎を支配する諸原理と関係	資源問題を支配する原理の複合性が、ある種の階統的な構造をもって仕組まれていることを解明する。エントロピー増大法則、エコロジー法則、人間社会を規律する法則などの関係である。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	無機系鉱物資源と産業	無機系鉱物をめぐる科学・工業・産業及び市場・消費の関係の仕組み、そしてそこに生起する産業資源問題を論じる。	黒沢一清
9	地下埋蔵の炭化水素系資源と産業	石炭・石油・天然ガス等の地下埋蔵の炭化水素資源をめぐる産業資源問題を論じる。いわゆる石油危機問題をどう理解すべきであるか。	同上
10	エネルギー資源と産業	産業の血液といわれるエネルギーの問題を、化石燃料問題・大自然エネルギー利用問題等に即して論じる。	同上
11	生物資源と産業	生物圏は、人間の生物的存在を支える直接の土台である。この生物再生産の循環系の中での、生物資源ー産業系の仕組みを考察する。	同上
12	企業における資源問題とそれへの適応運動 ーその1：経営生産力と経営資源	企業という産業の行動主体の立場での資源とは何であるかを考察する。まずは経営生産力と経営資源との構造を解明する。	同上
13	企業における資源問題とそれへの適応運動 ーその2：経営体の適応運動	産業水準及び社会の水準で生起している資源・エネルギー問題への企業の適応行動の姿を、経営者層の意識調査を通して考察する。	同上
14	資源と産業構造	資源と産業構造とは、資源問題を媒介に相互に作用しあう。第2次大戦後の事情のもとに展開した資源多消費型産業構造が、いまや資源節約型、高次加工型産業構造に転換しつつある。そこに生まれている基本問題を考える。	同上
15	総　　括	以上14回の講義を総括する。我々の研究方法の背景にあるヴィジョン、国際関係の中での日本の位置づけと債務、資源問題と環境問題の統一的理解。そして国土資源と国民資源という民族の主体性を支える資源への我々の実践、などがその軸である。	同上

＝産業と環境＝（TV）

－産業－環境系の構造論的解明－

〔主任講師：黒沢一清（東京工業大学名誉教授）〕

全体のねらい

本講義は、産業とそれの環境との相互作用域を対象として、そこに生起する現象を構造的に把握し、問題の解決への洞察を得るための基礎能力を養うことを課題としている。産業と環境の問題を、産業にとっての環境としてだけでなく、同時に、むしろ人間にとっての環境の交叉域を、産業と環境というフィールドで問題にしようというのである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	産業－環境系研究の方法	産業と環境との相互作用域に生じる現象をその日常性において観察し、我われの研究対象の特徴を示し、かつはこのような現象を研究することの現代的な意義を考える。	黒沢一清（東京工業大学名誉教授）
2	産業社会のメタ構造	産業－環境系が、産業社会の中に占める構造的な位置を示し、これを把握するための方法としての構造論の概要を示す。まず最初として、産業社会の根源（メタ）構造を規定する。	同上
3	産業社会のメタ原理	産業社会のメタ構造の規定を受けて本章では、そうしたメタ構造を規律している原理、すなわちメタ原理を論じる。	同上
4	産業社会の一般構造	産業社会のメタ構造の内容を、多元・重層構造として描き、この一般的な意味内容を説明する。	同上
5	S－Fスキームの論理と操作	実体－構造－形態－機能という4つの次元をもって構成されるS－Fスキームの論理と、これをオペレーションする方法を述べる。	同上
6	産業－環境系の構造	以上に議論されてきた産業社会の一般構造をふまえて、いよいよ我われの産業－環境系の構造を確定しなければならない。ここでは人間－環境系の基礎の上に、この系と産業－環境系とが統一される構造が示される。	同上
7	意味論的環境	環境を産業・人間にとって外的なモノ、と見る段階から、本章では、それを人間のタームで意味理解されたモノと見る、つまり意味論的環境の議論に入る。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	人間－環境系の総合及び文化環境	前章の意味論の一般的理解の上に、ここでは人間－環境系の全体構造を示す。	黒　沢　一　清
9	環境管理の原理	産業－自然環境系を支配する最も基本的な諸法則を規定し、それらの間の構造的関連性を明らかにする。法則の階層性と止揚関係である。	同　上
10	海の産業とその環境問題	産業－環境系の視野からのユニークな産業分類を示し、まずその中の最も基本的産業としての海の産業の環境問題を議論する。海と人間を媒介する漁業の意義である。	同　上
11	緑の産業と環境問題	緑の産業、すなわち林業のもつ環境論的諸問題の基礎を考える。森林と人間を媒介する林業の意義である。	同　上
12	生命の産業と環境問題	以上の諸章では、人間の外的環境と産業との関連を主として議論してきたが、本章では人間の内的環境とこれにかかわる産業としての生命産業との関係を考える。医療及び医薬品産業である。	同　上
13	産業－地域社会系	産業を一般的に取り上げてそれの環境問題を考察してきたが、本章ではそれらをさらに特定の地域の上でいっそう具体的に考察する。地域社会というフィールドが基礎である。	同　上
14	人間－産業－自然コンプレックスのシステム・シミュレーション	住民、各種産業、自治体等の、具体的な地域における複合体。これこそが人びとの眼前に展開されている最も具体的な“環境”である。そこに現われる問題としての環境の背後にある構造をモデルに描き、これを用いて実験を試みる。システム・シミュレーションの意義と役割りについて論じる。	同　上
15	産業環境系研究の総括と展望	本講義の全体を総括して、この講義から我われはいったい何を学んだのか、そしてそうした知識がこの社会でどういう意味を持つのか、我われはこれによって、どのような産業的・生活的課題を課されることになるのか、等を考える。	同　上

＝交　通　と　通　信＝(TV)

〔主任講師：岡野行秀（東京大学教授）〕

全体のねらい

一国の経済、世界経済の発展にとって、交通・通信は欠くことができない。国内的にも、また国際的にも、資源は地理的に偏在しており、これらの資源を有効に利用し、分業と協業を行なうためには、交通と通信の発達が前提になる。産業の発展と生活水準の向上にとって、交通と通信がどのような役割を果たすかを明らかにする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	交通と通信の役割	1. 交通と通信の意義 2. 交通と通信の関係 3. 経済活動と交通・通信	岡野行秀（東京大学教授）
2	交通の発達と地域開発	1. 地域開発における交通の役割 2. 交通の改善の影響 3. 交通条件と地価（地代）	同　上
3	交通（サービス）の需要	1. 空間的移動の需要 2. 派生需要とその性質 3. 交通（サービス）の需要に影響を与える要因 4. 交通（サービス）の需要の変動	同　上
4	交通手段の特性	1. 2つの特性 — 交通（サービス）の質と費用構造 2. トリップの費用 3. 交通サービスの費用構造 4. 各交通手段の費用構造 5. 混雑の費用	同　上
5	運賃・料金の決定	1. 運賃・料金の機能と役割 2. 運賃・料金の規制 3. 運賃形態 4. 運賃・料金規制の問題点 5. 道路の費用負担	同　上
6	交通市場の変化	1. 輸送構造の変化 2. 貨物輸送 3. 人の輸送 4. 交通市場の変化 — 競争市場へ	同　上
7	主要諸国の交通政策	1. 交通政策の目的と枠組み 2. 主要諸国の交通政策 3. 交通調整 4. 交通政策の評価	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	現代の交通問題	1. 鉄道の再編成 — 国鉄の分割・民営化 2. 規制緩和 3. 都市交通 4. 人口稀薄地域の交通 5. 外部不経済の問題 6. 展望	岡野行秀
9	通信の発達と経済社会	1. 電気通信の役割 2. テレコム・ネットワーク 3. テレコム・サービスの種類 4. 社会へのインパクト 5. テレコムの政策課題	南部鶴彦 （学習院大学教授）
10	通信需要	1. 市場と取引の形態 2. 電話需要の形態 3. 電話需要の今後	同上
11	通信サービスの供給	1. テレコム・ネットワークの3要素について 2. ネットワークの形状について 3. ネットワークと規模の経済性について 4. テレコム・ネットワークの特異性について	同上
12	通信料金の問題	1. 市場メカニズムと競争 2. 規模の経済性と供給 3. ネットワーク型消費と需要 4. 固定費用と平均費用 5. 独占と規制	同上
13	政府規制の問題	1. 供給の形態 2. 規制の特色 3. 内部相互補助の問題	同上
14	海外の規制制度	1. 各国の特色 2. アメリカ 3. イギリス 4. フランス	同上
15	通信の将来と通信政策	1. 国際電気通信の特色 2. 国際通信のネットワーク 3. 国際通信料金 4. 国際機関 5. 通信の将来と政策課題	同上 （岡野行秀）

＝流　通　と　商　業＝(R)

〔主任講師：鈴木安昭（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

われわれの生活にも、また企業の生産活動にも、流通活動は不可欠である。その中心的な担い手である商業は就業人口の二割余が従事している。そのような重要性にも拘らず流通や商業は十分理解されていないどころか誤解されてもいる。本講座ではそれらを理解するための基礎知識を平易に解説することを目的としている。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	流通の社会的役割と流通機構	流通は必要悪で無い方が良いのだろうか。それとも流通は望ましい社会的役割を果しているし、今後も一層必要性を増してくるのだろうか。まず流通とは何かという基礎から始め、そのための社会的な仕組みに注目する。	鈴木安昭（青山学院大学教授）
2	流通機能(1)	流通の社会的役割の達成には流通機能が遂行される必要がある。社会的分業の結果として生産しない財は購入して所有権を入手しなければ消費できず、また購売を目的として生産が行われるが、そこには危険が伴うことも理解する。	同　上
3	流通機能(2)	消費したい場所、消費したい時に生産されることは少ない。この生産の地点と消費の時点の懸隔（へだたり）は輸送され、保管されることによってうめられる。さらにその過程において、集められ、分割され、あるいは新しい組合せが作られる。	同　上
4	流通機能(3)	消費に関する情報をもとに生産され、生産された商品に関する情報を伝達して消費の意欲を換起する。それに対して消費者から購入の意図が情報として伝達される。こうして情報を伝達することが流通の不可欠の要素となる。	同　上
5	流通機能担当者の分化と統合	流通機能は多くの担当者に多様に分化して遂行されるとともに分化していたものが統一される。そこには不可欠の生産者と消費者とともに卸売業者と小売業者、さらに輸送業者や広告業者など専門機能業者が参加する。	同　上
6	消費者と流通	われわれの生活にとって流通活動はどのような意義があり、また福祉とはどのような関係であるか、消費者の買物場所選択行動の基礎にあるもの、消費者の買物費用、そしてそれらが小売業に与える影響などを学ぶ。	同　上
7	生産者と流通	生産者は財の生産に必要な原材料や機械・設備の購入に関して、そして生産した財の販売において流通機構と深いかかわりをもつのみでなく、生産した財の最終的な販売にいたるまでも管理の対象とするにいたった。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	商業の存立基盤	生産者と消費者の中間の部門として商業部門が存立し、しかもそれが存立するほうが社会的に合理的である場合の根拠は何だろうか。さらに商業内部が多段階になる場合も考察しなければならない。	鈴木安昭
9	小売業の役割と機能	流通機構のうちわれわれ消費者にとって最も身近かな存在である小売業の果す社会的役割を確認し、その果している流通機能を整理してみよう。	同上
10	小売業の構造	小売業は多様な単位を構成要素として成立っている。その全体と変化の方向を把握するために、それを規模別、業種別、地域別そして形態別に整理し、それらの変化を、環境諸要因とかかわらせて学ぶ。	同上
11	小売業の諸形態(1)	小売業の店舗、企業そして企業間の組織には多様な形態がある。百貨店、スーパー、専門店チェーン・ストア、中小小売業者、ボランタリー・チェーン、フランチャイズ・システム、商店街、ショッピング・センター、生活協同組合などの諸形態の特徴を知るばかりでなく、そのような諸形態がなぜ生ずるのか、同一名称で呼ばれていればそれらは同質なのか、新形態の出現についての試論にはどのようなものがあるかなどを論ずる。	同上
12	小売業の諸形態(2)		同上
13	卸売業の役割と機能	卸売業は一般的には小売業よりも理解し難いものであろう。ここでは卸売業が果している会社的役割とその機能を整理し、さらにその存立基盤に影響を与える諸要因を考察する。	同上
14	卸売業の構造と諸形態	卸売業には巨大な総合商社から、食品など業種別総合卸売業者、地場産業と密接に結びついた産地的な市場を対象とした零細卸売業者、輸出あるいは輸入を地域的品目別に扱う専門商社など多様な構成要素が存在する。	同上
15	流通・商業に対する公共政策	流通・商業のあり方に対して、政府や地方公共団体は公権力によって介入している。それらはより望ましい方向を目指して、民間の経済主体の行動を規制し、助成し、あるいは紛争の調整を行っている。	同上

＝ サービス産業論 ＝(R)

〔主任講師：磯部浩一（放送大学教授）
古郡鞆子（明海大学教授）〕

全体のねらい

われわれはサービス産業を、勿論１つの産業として研究する。然し、高度成長をへて成熟段階に達した現代産業社会には、産業構造の大きな変動が進展している。その変動要因の１つはサービス経済化である。われわれはサービス経済化の実態と意義を明らかにし、サービス経済化とサービス産業の関連とサービス産業そのものを研究する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	サービス産業の分析	分析の対象領域を、狭義のサービス業から、理念的に物財産業に対応する広義のサービス産業まで広く設定する。分析の視点はミクロ的視点からマクロ的視点を含み、かつ、歴史的視点に立つ。社会全体におけるサービス生産の社会的分業の展開過程の背後にある変動要因の１つをサービス経済化として規定する。次に、分析の基礎となるサービスの意味、性質、種類などについて検討。	磯部浩一（放送大学教授）
2	第三次産業の長期的動向	広義のサービス産業は、統計的には第三次産業として、近似的に把握できる。わが国の第三次産業の就業者構成比は、第二次世界大戦後に著しく増大したこと、経済発展と第三次産業の関連についての統計的分析の成果を明らかにする。	同上
3	サービス産業の成長	第三次産業のなかに含まれる狭義のサービス業に注目しながら、第三次産業のなかでも、とくにサービス業の就業者構成比の増加傾向の大きいことを明らかにする。家計消費における「モノ」離れとサービスへの移行化傾向、サービス経済化傾向が低成長経済のもとでも継続していること、その理由を明らかにする。	同上
4	サービス経済化と産業構造	サービス経済化の進展にともなう問題点、進展の実態と限界を明らかにし、サービス経済化のメカニズムを再検討する。産業のソフト化についてもふれる。	同上
5	サービス産業の分類	サービス産業は現在、生成分化の変化の過程にある。サービス産業の現状を分析するためには、現行の利用しうる統計では十分でない。現行の日本標準産業分類における問題点を検討し、今後の分析のために必要な統計のあり方を考察する。	古郡鞆子（明海大学教授）
6	就業構造のサービス経済化	サービス経済化の進展状況を就業構造の側面からとらえる。産業別・職業別就業構造の変化を概観し、サービス経済化の実態、サービス雇用の特徴などを明らかにする。	同上
7	サービス経済の労働問題	サービス経済化に伴い、労働市場では構造変化が起きている。ここでは、就業形態の多様化、労働力の流動化・２極分化・不分明化などの問題をとりあげる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	サービス経済化のインパクト	サービス経済化の雇用へのインパクトを考える。サービス経済化のメカニズム、労働生産性上昇の阻害要因、サービス経済と景気変動の関係などについて論じ、サービス経済の評価を行う。	古郡鞆子
9	サービス経済化と雇用対策	本格化するサービス経済社会に向けての具体的な労働対策を考える。労働需給のミスマッチを解消するための対策、変化に適応できる人材の開発の問題などをとりあげる。	磯部浩一
10	家計のサービス経済化	サービス経済化は家計のなかでも進展している。家計の消費と貯蓄の動向、家計消費のサービス化の実態と背景を明らかにし、今後の消費の方向を探る。	古郡鞆子
11	政府とサービス経済化	医療、教育、福祉などの公共サービスの実態と問題点を明らかにする。公共サービスの特性、公共サービスにおける政府の基本的役割を考え、公共サービスのあり方を検討する。	同上
12	企業とサービス経済化	企業のサービス経済化への関連、対応の経過を考察する。はじめに製造業のサービス経済化への対応、ソフト業務の内生、外生の状況をとり上げる。最後に、全産業について対事業所サービスについてふれる。	磯部浩一
13	サービス産業の盛衰と先端業種	業種別サービス業の成長と衰退を明らかにする。最初にサービス業の規模別構成、中小サービス業の流動性と成長性、サービス業の低成長業種と成長業種、さらに、サービス業の先端業種をとりあげる。	同上
14	サービス経済化と国際経済	国際経済的視点からサービス経済化を比較するには、多くの制約点がある。この点を前提としたうえで、主要諸国のサービス経済化の進展状況、サービス経済化の内容、そしてサービス消費支出の国際比較とを行う。次に、サービス貿易の具体例と定義をとり上げ、サービス貿易の現状を説明する。	同上
15	サービス産業の展望	展望を行うための前提を明らかにしたうえで、サービス経済化の限界、物財生産部門のサービス化、ソフト化、さらに産業の「融合化」現象をとりあげる。次に展望の手がかりとして参考になる調査結果を紹介し、ついで、サービス産業における企業規模の問題、消費者のあり方などにふれる。	同上

＝中　小　企　業　論＝(R)

〔主任講師：磯部浩一（放送大学教授）〕

全体のねらい

1970年代以降、世界各国の中小企業に対する国民的関心は大きな高まりを見せている。わが国のこれまでの特殊・日本的と考えられていた中小企業問題は、日本経済が先進国段階に到達した現在、国際的視野からとらえ直す必要がある。出来る限りこの観点を加味することが、この中小企業論の狙いである。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	中小企業論の課題	研究的視点から中小企業の全体像を客観的にとらえ、経営と政策の対応に役立つ基礎的認識を与える。	磯部浩一（放送大学教授）
2	中小企業問題の展開と政策の推移	中小企業問題の荷い手である中小企業者、行政当局、研究者が、どのように問題を認識し、分析し、政策的対応をなしたか、その推移を明らかにする。	同　上
3	中小企業理論の形成	中小企業問題の社会的意識化の過程において、いかなる政策的対応がなされたか。その根拠となった問題分析の理論はどのようなものであったか。また、どのように理論形成は進展したかを明らかにする。	同　上
4	中小企業の定義	中小企業を調査するためには、中小企業の主義が必要であり、中小企業の施策には法律的な定義が必要である。中小企業研究は、中小企業とは何か、という質問で始められ、研究の到達点においても、同じ問がなされる。動態的な国民経済の中の構造的存在が問われる。	同　上
5	中小企業の地位と役割	中小製造業、中小商業、中小サービス業者の国民経済構造において占める地位、生産、下請、流通、輸出、雇用において占める役割を明らかにする。	同　上
6	日本経済の構造的特質と中小企業	大企業との相互関連の中で製品・労働・金融・資本市場における中小企業の特質を明らかにし、その役割と問題性とを、とくに1970年代以降の国際的観点で明らかにしたい。	同　上
7	流通機構と中小企業	流通機構と中小工業、中小商業（卸・小売業）の流通問題を明らかにし、対応策としての組織化にもふれる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	中小企業の存立条件と存立分野	中小企業が大企業に敗退しないで存続し、または成長している条件と、大企業の中小企業への進出対応策について検討する。	磯部浩一（放送大学教授）
9	中小企業の存立形態と下請・系列	下請としての中小企業の存立形態への性質、独立形態との比較、問題点の分析、国際競争力における役割などについて考察する。	同上
10	中小企業の経営者	他企業に従事して経験をつんだ創業者と、二代目の継承者は意識行動に差がある。両者の比較や、大企業の経営者との比較をする。 ベンチャービジネスにもふれる。	同上
11	中小企業の経営Ⅰ	その特質を、企業規模の中小性について経営・財務管理・マーケティングなどの諸側面において考察する。	同上
12	中小企業の経営Ⅱ	その特質を業種的側面から考察する。伝統型産業と近代工業型業種の経営比較をとりあげる。サービス経済化の進展にともない、中小サービス業の経営にもふれる。	同上
13	環境変化と中小企業	経済の構造的変動、公害問題、都市化、地方の時代、高齢化社会の到来、サービス経済化、情報化、国際化などの諸要因と中小企業との関連、対応について考察する。	同上
14	中小企業の組織化	経済構造の変動が進展しつつある現在において、中小企業者の自動組織としての中小企業の組織化の課題と問題点を検討する。	同上
15	中小企業政策	明治以後の政策形成、とくに第２次大戦後の過程を考察し、先進国段階に到達した現状における問題点と２１世紀にむけてのビジョンを考察する。	同上

＝ 技術史・技術論 ＝(TV)

〔主任講師：吉田光邦（京都大学名誉教授）〕

全体のねらい

社会や産業の構造をつくる主要な枠組としての技術の意味、またその歴史的な変化を紹介する。できる限り現実の産業史遺物、また歴史的テキストを紹介して、具体的な姿を示すことにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	技術の意味	代表的な中国、ヨーロッパの技術についての考え方を紹介。人類史のなかでの技術のあり方について述べ、特にヨーロッパの特徴である永久機関の考え方を説く。	吉田光邦（京都大学名誉教授）
2	日本の技術史－鉱業の場合(1)－	金、銀は人類の文明史のなかで特別の価値をもってきた。しかも金、銀の物理的性質からその製錬技術はほぼ共通する。生野銀山跡を例として、生産技術の内容を紹介。	同上
3	日本の技術史－鉱業の場合(2)－	鉄、銅は実用金属として人類の文明とともに歩んできた。銅の製錬はほぼ世界に共通する。しかし鉄はその産出状態によって特殊の生産技術を生んだ。日本では砂鉄を利用した独自のタタラ製錬法が発達。	同上
4	日本の技術史－農業の場合	栽培農業は人工による食物生産技術として、人間の技術意識に大きく関連する。そのため、日本や中国では多くの農業テキストがつくられてきた。江戸期以来のそれらを紹介して具体的な様相を紹介。	同上
5	手工業 (1)	木は世界のどこにでも存在する自然素材である。同時に木工技術は、その木のもつ特性、風土に強く影響される。自然に巧妙に対応してゆく技術としての木工を、江南（京都）の木工を例として説く。	同上
6	手工業 (2)	西アジア、ヨーロッパは、アマ、羊毛を繊維の素材とし、インドはワタ、中国や日本は、アサ類、蚕糸を素材とした。そこで各地で独自の繊維製作技術が発達する。しかし織物となれば、その技術は世界に共通である。	同上
7	ヨーロッパの技術史－手工業	中世ヨーロッパの諸都市には、多くの職人ギルドがおり、工房も多く存在した。それらの実態と、技術の内容の紹介。「百科全書」をはじめとする技術書の紹介を試みる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	錬金術	卑金属を貴金属に変えるという錬金術は、ヨーロッパの技術思想を語る重要なもの。ここから多くの化学的技術が生れた。その内容を紹介するとともに、中国の錬丹術を比較する。	吉田光邦
9	機械技術	機械とエネルギーの問題は、ヨーロッパの技術思想の重要な特徴である。永久運動は、つねにヨーロッパ技術の目標であった。ゾンカ・ラメリなどの技術テキストと、永久運動の分析。	同上
10	産業革命	技術革新は産業革命を生んだ主要要素のひとつである。蒸器機関による新エネルギーの発見と、その応用による産業と社会構造の大きな変化について述べる。	同上
11	技術教育	徒弟教育は手工業時代の重要な教育システムであった。それは東西ともに同じである。それはやがて学校システムによる教育体系として成長する。	同上
12	量産の技術	19世紀になって部品の相互可換性が高まるにつれて、量産システムが成立した。それは食品にはじまり、兵器、そして名高いフォードのシステムとなる。それは現代の大量消費の時代を生んだ。	同上
13	日本近代と技術(1)	江戸時代の末、外圧の影響によって幕府は軍事技術を中心とした工業化を進めた。お雇い外国人、プラント輸入、また自力開発などが平行する。明治の新政府も同様の方針をとり、工部省はその中心となった。	同上
14	日本近代と技術(2)	農業社会としての日本を近代化し、ついで工、商を発展させようとする方針は内務省によって実行された。富国強兵、殖産興業のラインである。富岡製糸所など、国営工業による国家指導型の工業化の歩みを述べる。	同上
15	技術と社会	第2次大戦後の技術革新は、コンピュータ、ロボットなどを中心として、激しい勢いで展開し、それは多くの変化や社会や産業のなかに生んでいる。主として現代技術の問題を論ずる。	同上

＝産業技術の動向］＝(TV)

〔主任講師：黒沢一清（東京工業大学名誉教授）〕

全体のねらい

近年に顕著な先端的産業技術の動向の典型的な形態を取り上げて、それらの諸特徴と成果、その将来への可能性及び社会的・経済的ならびに文化的関連性について考察する。産業技術の進歩の意味、及び技術と社会とのかかわりにおいて見られる諸問題に講義の焦点があてられる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	産業－技術系研究へのヴィジョン－現代の産業技術の諸問題	現代の産業技術の典型的な例をあげ、それらが提起する諸問題を題材に産業－技術系研究へのヴィジョンを示す。	黒沢一清（東京工業大学名誉教授）
2	産業－技術系の構造－産業社会のメタ構造(1)	我々の研究課題の構造を解明する。まず最初にこの産業社会のメタ構造を一般的に論じ、それの人間－自然系の構造を解明する。	同上
3	産業－技術系の構造－産業社会のメタ構造(2)	前章にひきつづいて、ここでは人間－人間系の構造、情報系とその構造を論じ、産業社会のメタ構造の全体を示す。	同上
4	産業－技術系の構造－技術の構造(3)	本章では前章までの議論を前提として技術の構造を示す。技術とは何か、生産技術と社会・人間性との関連性が構造論の水準で論じられる。	同上
5	自動化技術と産業	自動化の、産業技術進歩における位置づけとその課題、自動化の技術・工学的基礎、さらに産業目的・社会目的と自動化技術の関連性。最後に、いわゆる省力、省エネ、品質、技能、労働力市場等との関連性、などについて論じる。	森政弘（東京工業大学名誉教授）
6	自動化と人間性	自動化は経済的にも社会的にも重要ではあるが、英知をもって自動化を推進しなければ非人間化をまねく。自動化と人間化という、普通には対立相剋する２つを、いかにして両立させ合一化してゆくかに関する、実例と哲理について説明する。	同上
7	産業用ロボットと産業問題	産業用ロボットの工学的原理と課題、産業における普及場面とそこにおける諸問題、効率、省力、保全、労働問題等。	長谷川健介（東京工業大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	ファクトリー・オートメーション	ＦＡの工学上の基本問題。ＦＡの産業への実現上の基本問題。生産力、生産コスト、省エネ、省力、労働問題、管理上の諸問題等。	古川勇二（東京都立大学教授）
9	自動包装と産業	包装と自動化の工学上の基本問題。包装自動化の意義と産業上の諸問題。	中井英一（ボッシュ包装機㈱代表取締役）
10	ＩＣと産業	ＩＣ技術の技術史上の意義、産業生産力とＩＣ。生活とＩＣ。産業組織。国際競争と摩擦。	大道康則（㈶機械振興協会・経済研究所主任研究員）
11	メカトロニクスと産業	メカトロニクスの進展状況。産業生産力とメカトロニクス。社会的、経済的及び文化的諸問題。	同上
12	プロセスオートメーションと産業	プロセス産業とは何か、プロセスオートメーションの手法、技術の変遷と今後の課題について述べる。	杉田昌賢（横河電機常務取締役）
13	先端技術と産業政策(1)	先端技術の将来動向、先端技術産業の地域社会における存立意義、および先端技術産業の立地特性の吟味。	土屋勉男（三菱総合研究所・産業経済研究室室長）
14	先端技術と産業政策(2)	産業技術基盤と産業政策の視点、先端技術の諸類型、地域産業政策のあり方とその現代的課題。	同上
15	総括	15回にわたる現代の先端技術、産業化及び産業の社会への影響についての諸問題を総括する。	黒沢一清

＝産業技術の動向 Ⅱ＝(TV)

〔主任講師：道家達将（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

今後の日本の産業技術の発展の保障は、日本における基礎科学・基礎技術の創造的発展が達成されるか否かにかかっている。日本の最先端の研究室で行なわれている研究の幾つかを紹介し、産業技術の動向を総合的に展望してみることにする。この研究は日本だけでなく人類の幸福のために必要であることが御理解いただけよう。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	材料工学(Ⅰ) 有機材料工学	高分子工学、有機新素材の研究は、このところ著しく進んでいる。どのような原料からどんな新材料が生まれ、それが、どんな性質をもっていて、どこに使えるのかといったことを、具体例をあげて述べる。	道家達将 （東京工業大学教授） 高久明 （東京工業大学教授）
2	材料工学(Ⅱ) 無機材料工学	金属工業、無機材料工業の研究も一変しつつある。新しい金属つまり、これまでに知られなかったような合金や、金属ともセラミックスともつかぬもの、不思議な働きをするニュー・セラミックス、さらには、有機と無料の複合した新材料などの研究を紹介する。	道家達将 後藤和弘 （東京工業大学教授）
3	機械工学Ⅰ 自動制御	今や自動制御は、生産機械はもとより、オフィスや日常生活機器の中になくてはならぬものになっているが、自動制御の本質が何かこれからどのようになっていくかはよくわかっていない。ロボットなどを例に使いながら自動制御研究の現状を紹介する。	道家達将 梅谷陽二 （東京工業大学教授）
4	機械工学Ⅱ 医工学	心臓移植つまり、ある人間の心臓を別の人間に移殖するなどということをせずとも、人間の心臓より性能の良い人工心臓はできないものか、心臓に限らず関節にしても、他の内臓にしても、人工的につくることは可能である。その第一線の状況を示す。	道家達将 笹田直 （東京工業大学教授）
5	化学工学Ⅰ 合成化学	私たちの衣も住も、生産の場も日常生活品も、すべてに合成品が使用されており、合成化学が果す役割は大きい。その合成化学は大きく変わろうとしている。これまでのように高温だったり、過激な反応でなく、ソフトでまるで生物体内みたいである。そこに働くのは高度な触媒である。	道家達将 森川陽 （東京工業大学教授）
6	化学工学Ⅱ 生物工学	ものをつくるのに、生物体内で起っているような反応を使う。また、すでに発酵工業で使われているように微生物を使う。その微生物も、これまでにない能力をもったものを使う。安全性が保障されねばならない。その研究の現状を述べる。	道家達将 相沢益男 （東京工業大学教授）
7	電子工学(Ⅰ) 太陽電池	太陽光を電流にかえる。それはもう実現している。まだ効率が悪いという欠点がある。それが克服されれば、こんなきれいなエネルギーはない。その研究の第一線を紹介する。	道家達将 高橋清 （東京工業大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	電子工学Ⅰ 合成化学	光通信はすでに現実のものとなりつつある。光通信とは何か、どこがどのようにすぐれているのか、現実にどのように使われるのか、今後どのようになっていくのか。光通信工業の研究の現状を紹介する。	道家達将 古屋一仁 （東京工業大学教授）
9	システム工学 ゆらぎ現象	自然の動きも、人間の行動、とくに人間が心地良いと思う現象もすべて機械のような等間隔、等速の運動に貫かれているのでなく、ゆらいでいる。その例は、風のそよぎであり、木材の木目の間隔に見られる。人間のシステムの不思議さを紹介する。	道家達将 武者利光 （東京工業大学教授）
10	情報工学(Ⅰ) パターン認識	人間は見えるものをパターン認識している。パターン認識を数学的解析することによって、文字を読みとる機械、言語を聞きわける機械、翻訳機械などが可能になる。その研究の基礎の最先端を紹介する。	道家達将 飯島泰蔵 （東京大学教授・東京工業大学名誉教授）
11	情報工学(Ⅱ) ホログラム	たった一枚の写真を、ふつうに肉眼で見るだけで、その中にうつっているものがとび出して、つまり立体的に見える。そのからくりは何か。それは、何に応用できるのか。ここでは、医学にさまの工業に理用できる最先端の研究を紹介する。	道家達将 辻内順平 （東京工業大学教授）
12	エネルギー工学(Ⅰ) ＭＨＤ発電	エネルギーがなくては生きていけない。石油はいずれなくなる。エネルギーをどうするか、とりあえず節約して使うことを考えたとき、その工学的なしかけとして、ＭＨＤ発電なるものが限定されている。その内容を紹介する。	道家達将 垣花秀武 （上智大学教授）
13	エネルギー工学(Ⅱ) 核融合	エネルギー問題は核融合炉ができれば解決するという。しかし問題点も多い。その研究の現状と未来について述べる。	道家達将 垣花秀武 （上智大学教授）
14	環境工学(Ⅱ) 景観工学	景観工学とは聞き馴れないことばである。しかし、人間は、美しいものを見ると心が安らぎ、生きる元気が出る。これまで、私たちは、地域づくりに、こういう考えをもってやってきたのだろうか。景観工学の研究の現状を述べる。	道家達将 中村良夫 （東京工業大学教授）
15	環境工学(Ⅱ) 都市工学	人間は都市に集中しつつある。しかし、そこは本当に住みやすいのか。人間にとって、住みやすい都市づくりの基礎となる都市工学の研究について述べる。	道家達将 渡辺貴介 （東京工業大学教授）

＝システム工学＝(TV)

〔主任講師：浅居喜代治（大阪工業大学教授）〕

全体のねらい

大規模・複雑なシステムの計画・設計・運用のためのシステム工学への理解を深めるために、まず、その発達の歴史・アプローチ・応用例を示したのち、次にアプローチの順に各段階での方法論を説明し、終りに最近の総合的な実際例を挙げて、系統的かつ具体的に講義を進め、システム概念の把握と、システム思考の基礎を与えようとする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論 システムとは	システム工学の概要 システムの定義・特性・考え方	浅居喜代治 （大阪工業大学教授）
2	種々のシステム	システムの分類 種々のシステムの例	同上
3	システム工学とは	システム工学の発達・考え方・他のシステム科学や技術との比較	同上
4	システム工学のアプローチ	システム工学のアプローチと方法論の概説	同上
5	システムの表わし方（モデリング）	システム表現の考え方と注意 数学的モデルと図的モデル	平井一正 （神戸大学教授）
6	種々のシステムモデル	システムモデルの分類 モデルの例	同上
7	構造モデル	構造モデルの意義と作成	寺野寿郎 （法政大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	ファジィモデル	ファジィモデルの意義・理論・種類 モデル作成上の注意	寺野寿郎
9	システムの特性と解析(1)	システムの基本的特性（安定性・可制御性・可観測性・感度）の意義と解析法	北森俊行 （東京大学教授）
10	システムの特性と解析(2)	システムの基本的特性（信頼性・保全性・安全性など）の意義と解析法	同　上
11	良いシステムの求め方 （システム最適化）	種々のシステム最適化法	浅居喜代治
12	シミュレーションと試行法	シミュレーションの方法 種々の試行法	同　上
13	システム・ダイナミクス	システムダイナミックスの考え方と理論 動的モデルへの適用	榛沢芳雄 （日本大学教授）
14	都市システムへの応用	システムダイナミックスによる都市モデル シミュレーションによるシステム計画	同　上
15	ＯＡ、ＦＡのシステムへの応用	ＯＡ、ＦＡなどのシステムの計画・設計・運用 本書の内容の要約	浅井喜代治

＝人　間　工　学＝(TV)

〔主任講師：加藤一郎（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

人間工学というのは発生的に二つの面をもっている。労働科学と経営工学がそれである。

しかし時代は推移しつつあり、大きな転回をみせようとしている。それは人間福祉への傾斜である。もちろん人間工学も新たな変化に対応しつつあるが、私は少し視野を広げ、人間と人間のあり方に焦点を合わせたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	人間工学とは ── 人間尺度	人間は工学とどのようにかかわってきたか。人間機械論から人間システム論に至る人間と機械の問題について述べ、これからの展開に対する理解を深める。	加藤一郎 （早稲田大学教授）
2	ブラックボックスとしての人間 ── 自動人形	人間機械論は、人間を外部からながめ、一種の機械として理解してゆくのが特徴である。技術の進歩にささえられて変遷し近代に至るその歴史と現状を展望する。	同　上
3	内側からみた人体 ── 生理工学	学問の分化と共に、人間を内側から理解することに重心が移った。レオナルドの解剖から近代の電気生理学に至る流れは、生理工学として現代的展開をみせはじめた。	同　上
4	脳のサイバネティクス ── 人工知能	人間の頭脳とコンピュータの間には大きなギャップがあるが、その一部を代行させることはできる。人工知能の開発と、それによる脳機能の理解の試みについて述べる。	同　上
5	情報チャンネルとしての皮膚 ── 官能検査	皮膚感覚の特異説は根拠のうすいモデルとなりつつある。これを例に、仮説・検証のプロセスを呈示する。代行情報チャンネルとしての応用と官能検査の人工化などにふれる。	同　上
6	発声のメカニズム ── 人工の口	言語が人間システムの中でもつ特質と、言語の構造、言語の習得、思考と言語の関係、さらに、音声発生の機構と、人工的に音声を発生させる方法について述べる。	白井克彦 （早稲田大学教授）
7	聴覚のメカニズム ── 人工の耳	聴覚の機構と、その心理現象を含めた複雑な機能について、工学的な立場から考察する。さらに、音声の理解と人工の耳の可能性について言及する。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	視覚のメカニズム ── 人工の目	われわれは物を見てその形を知り、意味を理解し、色彩豊かな3次元の空間を知覚する。このたくみな視覚のしくみと、視覚障害者に対する技術補助の問題について述べる。	大頭　仁 （早稲田大学教授）
9	身体リズムのメカニズム ── 電気刺激	人間の体内では、神経によって情報が伝達されている。神経に電気刺激を与えて心臓や腸管などのリズムを制御し、痛みをおさえるなど、人工的な身体制御も可能である。	内山明彦 （早稲田大学教授）
10	血液循環系のメカニズム ── 人工心臓	血液循環系を構成している心臓、血管、血管網、肺などのメカニズムと機能を工学的に解説し、あわせて心臓病治療と医工学、人工臓器の現況についても言及する。	土屋喜一 （早稲田大学教授）
11	骨と筋のメカニズム ── 人工関節・筋	骨生成の電気機械的メカニズム、筋の構造特性などの特有な性質をしらべる。また、これらの代替機器としての人工関節や人工筋についても紹介する。	加藤一郎 （早稲田大学教授）
12	手のメカニズム ── 人工の手	手の感覚系・運動系はともに人間特有のシステムをもつ。その巧緻性について、機械的構造や運動制御について調べる。また、義手やロボットについて現状を述べる。	同　上
13	足のメカニズム ── 人工の足	2足歩行の意義と問題点をさぐる。歩行の分析と、その正常・異常について考える。歩行機械によって足のメカニズムを解明し、義足への技術波及にまでふれる。	同　上
14	内面からみた人間 ── 心理工学	人間は心と体をもつ。心理学的知見をもとに、意識と情動の問題に工学的像を与え、バイオフィードバックを例に心と体の問題を考える。	同　上
15	人間と機械の共生 ── サイボット社会	人間とロボットが共生する社会における人間学としてサイボトロジーを提唱する。21世紀へ向けてホモ・ファーベルからホモ・ルーデンス、ホモ・サピエンスへの道を探る。	同　上

＝情　報　工　学＝(TV)

〔主任講師：都倉信樹（大阪大学教授）〕

全体のねらい

電子計算機の本質および実際を見極めるため、その仕組・原理・構成などをハードウェア、その利用法・プログラムなどのソフトウェア、ならびに応用技法等について基礎的な内容を講述する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	計算機概説(1)	いま計算機はどんなところで、どのように用いられているかを紹介しながら、計算機が多方面で活用されていること、いろいろの種類のものがあることを見て、計算機とはなにかに話を進める。	都倉信樹（大阪大学教授）
2	計算機概説(2)	計算機はデータ処理機械である。そのデータをどう表現し扱うのかについて説明する。また、計算機の内部を覗いてみる。	同　上
3	ゲートからALUまで(1)	計算機は一見複雑極まりないが、実際は簡単な要素から組み立てられており、想像よりは簡単なものである。もっとも基本の要素であるゲートから出発して、順々に計算機の回路を構成していく。	同　上
4	ゲートからALUまで(2)	計算機のなかで、データを加工するALUという部分について、その構成、設計についてのべる。	同　上
5	計算機の仕組と動作(1)	計算機の中での時間、フリップフロップなどの説明から入り、バス、記憶装置と説明を進める。前回までで計算機の基本的な構成はできあがったので、これをどのように動かすのかを説明する。バスの動作、プログラム内蔵方式計算機、具体的な計算機の命令、その実行の仕方、そして、計算機の制御回路の説明をする。	同　上
6	計算機の仕組と動作(2)		同　上
7	IC、VLSI、マイクロプロセッサ	最近の計算機の進歩は多くの関連技術の進歩に支えられている。その中でも最も重要なICやマイクロプロセッサについて考えてみる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	プログラムと言語(1)	プログラムを作るという作業の例を通して、その記述の仕方を順に見ていく。流れ図などの概略を記述するもの、アセンブリ言語、そして、コンパイル言語と進む。種々の処理系についても述べる。	都倉信樹
9	プログラムと言語(2)	高級言語の機能、構文の記述法などについて、説明する。言語の変遷、人間の言語との違いなども考えよう。	同　上
10	アルゴリズム(1)	プログラム作成の主要なステップの一つはアルゴリズムの検討・設計である。いくつかの主要な例について、アルゴリズムの考え方、および、その評価の仕方などを述べる。	同　上
11	アルゴリズム(2)	複数個のプロセッサにかかわるアルゴリズムについて考える。わりこみの概念についても説明する。	同　上
12	ソフトウェア(1)	ソフトウェアとはなにか、ソフトウェアを作成することはどういう作業なのか、なにが問題なのか、ソフトウェアに関するいくつかの問題を説明する。特に、ソフトウェアの品質について考えてみよう。	同　上
13	ソフトウェア(2)	ソフトウェアのいま一つの問題は、生産性の問題である。どういう問題があるのか、どうすればよいのだろうか、未解決な問題が多いが、その研究の状況をまじえ、ソフトウェア開発の問題を考えてみよう。	同　上
14	計算機にできること、できないこと	計算機はどういう能力をもっているのだろうかという基本的な問題を考えよう。計算機にできないことはなにかについても説明する。	同　上
15	動向と展望 ── さらに勉強するために ──	この講義で扱った内容が情報工学全体の体系のなかに占める位置を示し、カバーできなかった事柄について補足し、あるいは、各人の興味に沿って引続き勉強するための案内もしたい。	同　上

＝計　測　と　制　御＝（TV）

〔主任講師：森　政弘（東京工業大学教授）
小川鑛一（放送大学助教授）

全体のねらい

希望通りの結果や経過や状態を得るために必要な操作を施すことを制御という。このためには、現状や結果を計測することが必要で、計測なしには制御は成り立たないといえる。本講義では、これらを踏まえ社会における計測と制御の活躍状況の解説を背景に、計測と制御を学んでゆくための必要最小限の工学的基礎事項を説明する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	計測と制御の役割	計測と制御は車の両輪のごとく、どちらか一方が欠けても成り立たない。ここでは、これから学習する、計測と制御という学問分野を一瞥し、いかに産業と技術の分野に係りがあるかを考える。	森　政弘（東京工業大学教授） 小川鑛一（放送大学助教授）
2	計測の意味と計測結果の利用法	人類誕生と共に測ることは行なわれ、その内容、手段、方法を変えながら、今日もなお行なっている。ここでは、計測に関する基本原理、方法、問題点、などの概要について述べる。	同　上
3	物理量とセンサ	計測対象の物理量を人間にとって、あるいは機械にとって処理しやすくて、感知可能な量に変換する必要がある。センサとはこのような物理量の変換を司るデバイスであることを述べる。	同　上
4	センサの応用	センサの種類、その応用はきわめて広い。ここでは、歪ゲージをセンサの例として取り上げ、一つのセンサでも工夫により、いろいろな物理量を測れることが可能なことを示す。	同　上
5	制御のすばらしさ	部屋の温度を一定に保つことを例に上げ、制御の二大基本方式であるフィードバックとフィードフォワードについて、やさしく説明する。	同　上
6	シーケンスの意味とシーケンス制御のあらまし	物事を行なう場合、必ず順序というものがある。それを順序通りに実行させることがシーケンス制御である。ここでは、シーケンス制御の概念について考える。	同　上
7	シーケンス制御回路	シーケンス制御を行なうには、それに合ったシーケンス回路が必要となる。ここでは、シーケンス回路の基礎とその考え方について学習をする。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	シーケンス制御の応用	ここでは、工場やエレベータなど実際の場面で実用されているシーケンス制御について学習する。	森　政弘 小川鑛一
9	人間による制御の限界	人間のあらゆる行動は、シーケンス制御とフィードバック制御であるといえる。しかし、これら人間の行なう制御には、限界がある。この限界を認識し、機械が行なう制御とを対比する。	同上
10	制御理論入門 －ラプテス変換と伝達関数－	ある対象を制御するには、その対象の特性、安定不安定の概念、既知の入力に対するその対象の振る舞い（応答）を知る必要がある。ここでは、それらの特性を知るための手段と方法について学習する。	同上
11	フィードバック制御系の特性と周波数応答	1次遅れ系、2次遅れ系など簡単な系についての応答の計算例を示す。つづいて、新しい制御理論に基き実際に制御されている場面を垣間見ることにする。	同上
12	サーボ機構	機械制御にはサーボ機構が重要である。ここでは、航空機や船舶の舵の駆動、NC工作機械の位置決め、ロボット手足の駆動などに広く応用されているサーボ機構について学習する。	同上
13	プロセス制御	制御にはプロセス制御という一分野がある。これは、石油精製や溶鉱炉のようなプロセスにおいて実施されているので、その実際を学習する。	同上
14	制御用機器	制御を実施するためには、それなりの専用の装置や機器が使用される。ここでは、制御装置、制御機器、検出器などについて実物を参考にしながら学習する。	同上
15	まとめ	ここでは、15回にわたる講義内容をまとめる。	同上

＝ 設 計 工 学 ＝ （TV）

― 解 析 と 総 合 ―

〔主任講師：阿武芳朗（東京理科大学教授）〕

全体のねらい

本講では、設計の学問ならびに工業技術における位置付けとその意義、および設計の思考過程、行動実行過程、また、その評価、管理について論じ、社会に貢献し得る設計とはいかなるものかを会得させるための教養講義とする。前段（1～5回）は設計工学の基礎事項、中段（6～12回）は、設計目的の具体化のための技術的基本事項を、後段（13～15回）は設計の評価ならびにその管理事項について述べる。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	設 計 概 説	1. 設計の本質 2. 設計の思考過程 3. 工学的設計と製品設計 4. 製品開発	阿 武 芳 朗 （東京理科大学教授）
2	設 計 と 創 造 性	1. 創造性の役割 2. 創造思考とその特性 3. 特許制度における発明 4. 創造性訓練 5. 創造的エンジニヤに必要な特性	同 上
3	言葉としての図面(I)	1. 図面の必要性 2. 第一角法と第三角法 3. 寸法記入 4. 寸法の許容限界の記入 5. 図面に必要なその他の情報	塚 田 忠 夫 （東京工業大学教授）
4	言葉としての図面(II)	1. 図面情報の集約化 2. 幾可公差の必要性 3. 公差を融通し合う考え方 4. 表面粗さ 5. 省略図 6. 図記号による系統図 7. コンピュータによる製図	同 上
5	設計とコンピュータ（CAD）	1. 設計図とコンピュータのかかわり 2. CADの概要 3. CADのシステムの構成 4. コンピュータとの対話 5. 形状を表すデータの扱い 6. モデリング 7. ソフトソリッドモデルのデータ構造	同 上
6	機 械 要 素	1. 機械要素の分類 2. 締結要素 3. 案内要素 4. 伝達要素 5. エネルギー吸収要素 6. 液体伝導要素 7. 標準規格および機械設計	舟 橋 宏 明 （東京工業大学 助教授）
7	解 析 と 総 合	1. 設計と総合 2. 設計と分析 3. 設計と解析 4. 最適化	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	運動の変換・伝達(I)	1. 運動の自由度 2. 運動の変換・伝達の基本形成 3. 機構の自由度 4. 機構の数の総合	舟橋宏明
9	運動の変換・伝達(II)	1. 機構の量の解析および総合 2. リンク機構 3. カム機構 4. 出力運動の変更	同上
10	材料と加工	1. 設計と工作法 2. 材料選択の段階 3. 除去加工工程の制限事項と工程設計	阿武芳朗
11	強度と剛性を考えた設計	1. 材料の剛さと強さ 2. 剛性設計 3. 強度設計 4. 強度設計における配慮事項	塚田忠夫
12	精度設計	1. 精度設計の考え方 2. 精度鈍感設計 3. 精度鈍感設計概念の具体例 4. 精度設計に対する設計者の任務	同上
13	設計と信頼性	1. 信頼性の定義 2. 信頼性の数式的表現 3. 機械システムの寿命曲線 4. 機械システムの故障現象 5. 信頼性達成のための設計	阿武芳朗
14	設計と経済性	1. 生産性と生産価値 2. 工業製品の価値と費用の発生 3. 製造原価 4. 原価の低減 5. 価値分析	同上
15	設計管理	1. 設計の業務 2. 設計の図面管理 3. 設計の情報管理	同上

＝物　質　工　学＝（TV）

主任講師：町田周郎（放送大学教授）
東　千秋（放送大学助教授）

全体のねらい

自然界に存在する物質（元素から化合物まで）のもつ各種の性質に関する基礎知識をもとに、自然界の物質を物理的、化学的および生物学的手法により人工的に処理し、人類に有効なエネルギーや材料として活用する過程について説明する。特に物質および材料の各種の性質の調べ方や新たに要望される性質とそれを生み出す手法等を現状における新材料・新技術等を例に解説する。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	物質工学の基礎Ⅰ ―人間と地質工学	1. 文明と材料 2. 地球の資源 3. 物質工学への導入 4. 物質工学の構成 5. 物質工学の展望	町田周郎 （放送大学教授） 東　千秋 （放送大学助教授）
2	物質工学の基礎Ⅱ ―物質の成り立ち	1. 原子の構造 2. 原子の結合 3. 分子間の結合 4. 物質の状態 5. 物質の成り立ち	同　上
3	物質工学の基礎Ⅲ ―資源から単一物質へ	1. 元素とその用途 2. 元素とその資源 3. 単体の製造法 4. 無機化学製品 5. 無機物質の高純度化法 6. 石油化学 7. 化学工業の特徴	同　上
4	物質工学の基礎Ⅳ ―低分子物質から高分子物質へ	1. 合金 2. セラミックス 3. 高分子	同　上
5	物質から材料へⅠ ―力学材料の世界(1)	1. 応力とひずみ 2. 力学材料の強さと温度 3. 力学材料の構造欠陥と強さ 4. 力学材料の複合化	同　上
6	物質から材料へⅡ ―力学材料の世界(2)	1. 金属材料の強化および機能性 2. 形状記憶合金 3. 超塑性合金 4. アモルフォス合金 5. エンジニアリングプラスチック	同　上
7	物質から材料へⅢ ―電子材料の世界(1)	1. 導電 2. 導電性材料 3. 絶縁材料	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	物質から材料へⅣ ―電子材料の世界 (2)	1. 半導体材料 2. 超伝導材料	町田周郎 東　千秋
9	物質から材料へⅤ ―電子材料の世界 (3)	1. エネルギー変換 2. 光電エネルギー変換 3. センサー	同　上
10	物質から材料へⅥ ―磁性材料の世界	1. 磁性 2. 磁気ヒステリシス曲線と磁性材料 3. 磁性材料の進展	同　上
11	物質から材料へⅦ ―光学材料の世界 (1)	1. 光と物質の相互作用 2. 発光材料 3. 受光材料 4. オプトエレクトロニクス集積回路	同　上
12	物質から材料へⅧ ―光学材料の世界 (2)	1. 物質と光透過 2. 光学レンズ 3. 光ファイバー 4. 光選択透過フィルム 5. 液晶材料	同　上
13	物質から材料へⅨ ―機能性高分子材料の世界	1. 機能性高分子の種類 2. 感光性高分子材料 3. 物質分離機能をもつ高分子材料 4. 酵素機能をもつ高分子材料	同　上
14	物質から材料へⅩ ―生体材料の世界	1. 生体と材料 2. 主な医用材料 3. 免疫学	同　上
15	ま　と　め ―将来への展望	1. 物質工学の現状 2. 物質工学の夢 3. 物質工学の問題点 4. 物質工学と倫理観	同　上

＝エネルギー工学＝（TV）

〔主任講師：丹生慶四郎（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

エネルギーの使用が、人間の生活や生産活動と密接に関係していることを、1日の生活、エネルギー使用の歴史、エネルギー経済、エントロピーの立場から調べてみる。次にエネルギー資源について、今後の見通しを含めて考察し、最後に、各種エネルギー間のエネルギー変換に関し、詳細に調べる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生活とエネルギー	1. 火と人間 2. 生活の中のエネルギー 3. 石油と文明	丹生慶四郎 （東京工業大学教授）
2	エネルギー使用の歴史	1. 再生可能なエネルギー 2. 産業革命 3. 化石燃料 4. 資源予測	同上
3	エネルギー経済	1. 終戦直後の日本の石炭増産 2. 油田の発見と石油価格 3. 日本のエネルギー多消費産業への傾斜投資と経済発展 4. エネルギー消費弾性値	同上
4	エネルギー資源Ⅰ 自然エネルギー	1. 太陽エネルギー 2. 風のエネルギー 3. 海洋のエネルギー 4. 地熱エネルギー 5. 地震	同上
5	エネルギー資源Ⅱ 原子力1：核分裂	1. 特殊相対性理論と原子力 2. 質量欠損 3. ウラニウム 4. 原子炉 5. 海水中のウラン	同上
6	エネルギー資源Ⅲ 原子力2：核融合	1. 第2の火「原子力」 2. 核融合反応 3. クーロンポテンシャルと核力 4. 熱核反応 5. 自己点火温度 6. ローソン条件 7. 磁場閉じ込め　8. 慣性閉じ込め	同上
7	エントロピー1 巨視的考察と熱機関	1. エネルギー変換　2. エントロピー 3. カルノーの熱機関 4. 非可逆過程とエントロピー増加 5. 熱力学の第1法則と第2法則 6. 膨張とエントロピー増加 7. 混合とエントロピー増加 8. 高熱源とエントロピー　9. 開放系	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	エントロピー2 微視的考察	1. 微視的考察とエントロピー 2. 平衡分布と最大確率 3. エントロピーと経済 4. エントロピーと情報	丹生 慶四郎
9	エネルギー変換1 力学エネルギー	1. エネルギー変換 2. 力学エネルギー	同上
10	エネルギー変換2 熱エネルギー	1. 熱エネルギーから力学エネルギーへの変換 2. 冷凍サイクル 3. 熱エネルギーの伝達 4. 熱エネルギーから電気エネルギーへの変換	同上
11	エネルギー変換3 化学エネルギー	1. 燃焼 2. 電池 3. 水素 4. 生物	同上
12	エネルギー変換4 電気エネルギー	1. 電気エネルギーから力学エネルギーへの変換 2. 電気エネルギーから熱エネルギーへの変換 3. 電気エネルギーから光エネルギーへの変換	同上
13	エネルギー変換5 光・放射線エネルギー	1. 光エネルギーから電気エネルギーへの変換 2. 光エネルギーから化学エネルギーへの変換 3. 放射線エネルギーから電気エネルギーへの変換	同上
14	エネルギー変換6 核分裂エネルギー	1. 核分裂反応 2. 原子炉 3. 熱中性子炉 4. 高速増殖炉	同上
15	エネルギー変換7 核融合エネルギー	1. 核融合反応 2. 磁場閉じ込め方式 3. 慣性閉じ込め方式 4. 核融合炉	同上

＝都　市　計　画＝（TV）

〔主任講師：石原舜介（東京理科大学教授）
　　阪本一郎（放送大学助教授）〕

全体のねらい

現在の都市問題に対処し将来に向けて都市をより住み良いものにしていくためには、都市に参加する人々が都市について深い認識を持つことが不可欠である。本講義は、都市計画の法律制度を解説するものではなく、また、都市計画の全体像を示すものでもない。今日の都市が抱える代表的課題を取り上げ、都市そのものへの理解を深めつつ都市計画の基本的考え方を学ぶことをねらいとする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	都市をとりまく環境の変化	産業構造変化や社会的価値観の変化など都市をとりまく環境の変化は、都市に様々な形の影響をもたらし、大都市集中化、過密化、郊外化、大都市衰退化等の現象を引き起こしている。これらを背景として生ずる都市問題について概説し、問題提起を行う。	石　原　舜　介（東京理科大学教授）
2	土地利用のコントロール	土地利用のコントロールは都市の諸活動の軋轢を調整し環境を保全するための代表的な方法である。諸外国の例を比較しつつ、コントロールの内容、役割、問題点を説明し、変化の激しい都市への適用に相応しい姿を述べる。	同　上
3	土地利用の基礎	都市を認識する上での中心的概念である土地利用についての基礎的説明を行う。特に密度指標について、数値と実態を対応させながら、その都市計画上の意味について述べる。	阪　本　一　郎（放送大学助教授）
4	土地利用のしくみ	一見無秩序に見える都市の土地利用も、その中にいくつかの法則性を見出すことができる。ここでは主に経済学の均衡論の立場から、土地利用が決定されるしくみを説明し、土地の相互関連性や外部経済性について論ずる。	同　上
5	土地利用の推移	都市はダイナミックに動いている。形成された市街地は過去から将来に向けて変容を続けている。その変化の様相を示し、変化のしくみについて説明するとともに、土地利用の将来予測や大規模事業のインパクトにも言及する。	同　上
6	土地価格の形成	地価高騰は主要な社会問題の１つとして広く認識されているが、地価そのものについての認識は多様であり、高騰の理由については様々な説がある。土地の利用価値と資産価値の２側面に注目し、地価がどのように形成されるかということの学習を通じて、都市の土地に対する認識を深めたい。	同　上
7	土地の供給	都市内の土地供給が停滞している。土地の実質的な供給方法として、農地の宅地化や海岸の埋立等による新規市街地の形成と、既成市街地での土地の高度利用がある。これらについてその進行上いかなる問題があり土地供給が停滞しているのかを解説し、あわせて土地課税政策をはじめとする種々の土地政策を検討する	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	公共投資と都市振興	都市を支えている各種基盤施設は公共投資により整備されたものである。公共投資の内容とその考え方を簡単に説明し、さらに公共投資が周辺地域に及ぼす影響とそこから派生する問題に言及する。	石原舜介
9	宅地開発と開発利益	開発にともなう公共施設の整備はしばしば都市財政の過大な負担となるが、これを開発者に負担させ結果として開発利益を社会に帰属させることが考えられる。その手法として、区画整理や宅地開発指導要綱等がある。そのしくみと問題点を述べる。	同上
10	都市再生の課題と方法	都市は誕生した時から、物的老朽化と新しい社会の要請による社会的機能的陳腐化の宿命をおっている。新開発や新都市の建設で都市化に対応するとともに、一定の年月を経た市街地は再生されなければならない。世界大戦後本格化した都市再開発について、住宅及び住環境の改善、新施設の導入、自動車時代への対応、インナーシティ問題、都市産業の振興といった、都市再生の課題と対応を時間の流れに沿って整理する。	深海隆恒（東京工業大学助教授）
11	コミュニティ・デベロップメント	現代都市の特徴は、国民の大部分が市民であり、したがって、都市は働く場であると同時に住む場でもあることである。居住環境の改善は、住宅そのものの改善から居住するという面からみた都市の再構築という広がりを持ったものとして展開している。各国で行われた経験と我が国の試みを示し、都市居住の空間を論ずる。	同上
12	都市産業の振興	働く場としての都市は、第3次産業の栄える地域でもある。働く場としての都市を考え、新しい産業社会に対応するための都市再生の試みを示し、より創造的な社会を求めるための都市再生のあり方を論ずる。	同上
13	快適環境の創造	衛生的で便利であり、かつ、Amenityのある都市作りは都市計画の目標でもある。近年我が国でも、美しく、人々の賑わう、そして、外から人に見せられる都市空間が強く求められている。これらの試みを示し、快適環境を創造するためにはどのような知恵が必要であるかを論じたい。また、今後の社会における平和で安心できる社会と都市空間を論ずる。	同上
14	都市災害への対応	都市の過密化と都市システムの高度化は、災害時の被害を増大させるだけでなく、新しい形の被害発生の危険性を高めている。ここでは特に地震災害をとりあげ、都市にはどんな危険があるか、もし地震が起こったらどんな被害が発生するかについて概説した後、現在静岡県や東京都で行われている種々の防災対策について解説する。	梶秀樹（筑波大学教授）
15	都市計画の新たな視点	今、都市は如何なる選択を迫られているか、そしてその選択は何をもたらすのか。これらの点を論じ、全体の講義のしめくくりとする。	石原舜介

＝経　営　管　理＝（TV）

〔主任講師：森本三男（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

現代企業における経営管理の内容を体系的に理解し、実践のための基礎能力を育成する。経営管理の内容は多面的であるが、大別すれば、細分化された生産管理、財務管理、労務管理などの各論と、それらの共通基盤となる総論になる。本講義では、総論相当部分を学習する。経営管理が主体的実践行動であることを重視する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	経営管理の意義	経営管理の課題は、経営目的達成のためにイノベーションと効率化をはかることである。それは、各種経営資源を対象にした計画・組織・コントロールのような機能によって合理的に遂行され、そこに複雑な体系が出現する。本章では、経営管理の機能と体系を学ぶ。	森本三男（青山学院大学教授）
2	経営管理の発展	経営管理の発展は、大略3期から成る。1930年頃までの古典的経営管理、1950年頃までの新古典的経営管理、それ以降の現代的経営管理である。本章では、それぞれの問題意識、技法、システム、特徴を学習する。現代の中に古典や新古典が生きている点に留意する。	同上
3	経営管理と意思決定	戦略や計画の策定、組織の設計など、経営管理のあらゆる問題は、意思決定に還元される。また意思決定は、主体性を発揮する行動の核でもある。このような点から、経営管理の統一視点を意思決定に求める。本章では、意思決定の前提、過程、型、技法を学ぶ。	同上
4	経営管理と情報	意思決定には情報が不可欠であり、意思決定の結果は情報として関係者に伝達される。このようにみれば、経営管理は意思決定と情報伝達のネットワークとしてとらえられ、その機能は、情報の収集、処理、伝達の巧拙によって左右されることになる。	村松司叙（成蹊大学教授）
5	経営者・管理者の役割	経営管理の主体は、経営者と管理者である。彼らは、意思決定によって経営の目標、理念、戦略、計画、組織を策定し、変革し、行動をコントロールする。本章では、経営管理の構造に即して経営者・管理者の役割を明らかにし、必要な資質と行動基準に論及する。	森本三男
6	イノベーションと研究開発	経営管理の課題であるイノベーションとは、経営に関するすべての抜本的変革をいうが、その中心は、製品ないし事業の変革（プロダクト・イノベーション）と生産方法の変革（プロセス・イノベーション）であり、それらは研究開発によって生み出される。	古川浩一（東京工業大学助教授）
7	経営戦略 (1)	企業による資源運用の基本原理を、経営戦略という。経営戦略は、対象とする資源の種類やカバーする行動領域の範囲などにより、各種のものに分けられる。本章では、経営戦略の特質や種類をまず学び、ついで多角化を中心にした内部戦略を学習する。	村松司叙

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	経営戦略(2)	内部資源の運用基本原理である内部戦略に対照されるのは、外部資源に関連した外部戦略である。本章では、主として外部戦略を勉強する。その主要内容は、M&A（合併および買収）、合弁、提携、集団形成、連合などである。	村松司叙
9	経営管理と計画(1)	戦略を展開するために、計画が策定される。計画は、時間的限定のいた具体的行動予定であり、行動の主体（誰が）、時間的限定（いつ）、具体的行動内容（何を）を明らかにする。本章では、経営計画の特質、種類、体系と、長期経営計画を学習する。	古川浩一
10	経営管理と計画(2)	長期経営計画と対照され、その内容を詳細化したものが短期経営計画である。それは、日常の業務執行行動にとって不可欠であるばかりでなく、必要に応じて多くの種類を生み出している。本章では、短期経営計画の内容と策定技法について説明する。	同上
11	経営管理とコントロール	企業の行動は、計画通りに展開されるとは限らない。そのため、行動の業績を不断にチェックし、その是否を分析し、必要に応じて補正する機能が不可欠となる。この機能がコントロールである。経営管理におけるコントロールの原理と技法を、本章で説明する。	同上
12	経営管理と組織	計画を遂行するため意識的に調整された協働のシステムが組織である。経営管理のための組織が経営管理組織である。本章では、経営管理組織の特質、要素、設計原理、形態などの構造面と、動態化、活性化などの機能面の双方を学習する。	森本三男
13	リーダーシップとモチベーション	最も重要な経営資源は人間である。人間は人格や主体性をもっているから、その管理には特別な配慮が必要になる。その柱となるのは、人間を統合するリーダーシップと、人間の活動力を高めるモチベーション（動機づけ）である。本章では、これらを学習する。	同上
14	資本の調達と運用	人的資源と並ぶ重要な経営資源は、財務的資源すなわち資本である。必要な資本を必要な時に低いコストで調達し、それを有効に運用することは、経営管理の基本要件である。この要件を満たすための財務の原理、方法、手段、技法を、この章で習得する。	村松司叙
15	経営管理の国際化	日本企業の当面している最大の課題は、国際化である。国際化は、日本的経営とよばれる従来の経営管理を、大きく変化させようとしている。変化の方向、内容、望ましい国際化した経営管理のあり方などを、この章で展望する。国際化は文化の問題である点に留意。	同上

＝企業と人材＝（R）

〔主任講師：石田英夫（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

日本が経済的に成功を収めた要因のひとつとして、人材の育成と活用の巧みさをあげることができる。このコースでは、日本の企業がどのようなしくみで人材を管理しているか、現代の人材管理の主要な問題はなにかを明らかにし、新しい潮流を展望する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本の経営と人材	「企業は人なり」という言葉があるが、これはわが国の経営者が共通に持っている人材観を表している。日本の経営の強みとして、組織の柔軟性とヒラの労働者の労働意欲の高さがあげられる。それは日本人の弾力的な職務観と平等主義の思想から説明できる。	石田英夫（慶應義塾大学教授）
2	人材管理システム	日本企業の人材管理を、環境－理念－戦略－制度・慣行－目的・成果というシステムとしてとらえ、欧米との比較を念頭におきながら、日本の特色を説明する。人材管理の目的はヒトの能力・意欲・集団意識の向上を通じて生産性と品質をあげることにある。	同上
3	人材戦略	日本企業の人材に関する基本戦略は「内部化」戦略であり、それは企業の人材ニーズを満たすために外部労働市場に頼ることをできるだけ少なくするという方針である。しかし近年、そのベースをなす長期的雇用慣行を修正する動きが見られる。	同上
4	採用・異動・教育	人材の内部化戦略の下で、企業は新卒採用を重視し、若者にとって就職は一回限りの勝負になり、いろいろな問題を引きおこす。ひとたび入社すると、比較的幅広い職務の異動が行われ、それが仕事をしながらの訓練（OJT）として重要な意味をもつ。	同上
5	人事評価	人事評価は昇進・昇格という賞罰目的だけでなく、適性の発見や配置のためのカギとなる。わが国の人事評価は年功重視の全人格的評価と言われるが、勤続だけでなく能力・業績も考慮され、長い目で見ると能力主義的な評価と言える。	同上
6	管理職と専門職	低成長と高齢化のはざまで、かつてのように大多数の人が管理職のポストにつける可能性はなくなった。キャリア開発も従来のように管理職志向一本槍ではなく、専門職などのコースを設けてキャリアの多様化をはかり、多くの人の意欲づけをねらっている。	同上
7	賃金と福祉	適正な賃金水準を維持するとともに、賃金を公平に配分する賃金体系が必要である。年功賃金体系から職務給や能力主義賃金への移行が説かれてから久しいが、職能給体系が普及している。従業員福祉は高齢化と社会意識の変化への対応が望まれている。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	労働時間と休暇	わが国の労働時間は先進国の中で最も長い。有給休暇は6割程度しか消化されず、残業は恒常化しており、残業代が支払われない「サービス残業」も多いと言う。こういう事態は貿易摩擦がらみで、人間的な生活を犠牲にした競争力強化と外国から批判されている。	石田英夫
9	労働組合と労使関係	わが国の労働組合は企業別組合をベースとしており、過去20年間、経営者主導の協調的労使関係が維持されてきた。組合組織率は低落傾向にあるが、昭和62年秋、労働界の大同団結に向けて「連合」が発足した。労働組合の活性化と交渉力の回復につながるか注目される。	同上
10	経営参加と小集団活動	わが国には労働者重役制のような制度こそないが、労使協議制が普及し、小集団活動など職場での労働者の参加も活発であり、経営参加の先進国だと言えよう。産業民主主義の推進と職場の活性化に向けて経営参加の深耕がのぞまれる。	同上
11	男女雇用平等	女性の職場進出はめざましい。勤続は伸び、就業意欲は向上しているが、管理職の地位にある女性は非常に少ない。雇用における男女差別を廃止し、平等な扱いを促進するための雇用機会均等法が施行され、新たな段階に入った。今後の動きが注目される。	同上
12	高齢化と人材管理	日本の人口は今後長期間にわたり高齢化がハイピッチで進む。当面60歳、更に65歳への定年延長、ピラミッド型の人口構成を前提にした年功制度の大幅修正、退職金・年金制度の再検討、従業員の高齢化に対応した職務設計と仕事の再配分など課題は多い。	同上
13	経営戦略と人材	経営戦略の優劣が問われる時代になって、経営戦略と人材計画の連動が必要になっている。戦略課題の中で研究開発と新規事業開発は最も重要なものである。それを担い、成功させる革新的な人材をいかに育成し、評価し、報いるべきか重要な検討課題である。	同上
14	国際化と人材	日本企業の国際化・グローバル化が進行している。海外での生産・販売・経営を担う人材の育成、本社での外国人の雇用、国境を超えた人材の再配置、世界的視野にたった人事・労務政策の再検討など、国際化時代の人材管理の新たな課題は多い。	同上
15	日本型人材管理の展望	21世紀に向けて、日本型人材管理はいかに変容を迫られるか。現場労働者の能力・意欲を重視する労務管理は世界のモデルとなりうるが、個性の抑圧、私生活無視の働き振り、男女差別などの側面は労働生活の質（QWL）の向上のために変えてゆく必要がある。	同上

＝ マーケティング ＝（TV）

〔主任講師：八巻俊雄（東京経済大学教授）〕

全体のねらい

マーケティングはマーケット（市場）をつくるということばから発生した企業経営の考え方である。需要のつかみきれなくなった大恐慌以後が特に関心を集めた。その基本的考え方は消費者志向ということである。それまでの企業志向の考え方と180度異なる。本講では日本企業のマーケティングの実践を紹介しながら理論的理解も深める。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	マーケティングとは何か	マーケティングの基本的考え方は消費者志向（Consumer Oriented）ということである。消費者志向はただ消費者に頭を下げ、お世辞をいうことではない。それが企業者志向とどう違うかをまず事例をまじえて説明する。	八巻俊雄（東京経済大学教授）
2	企業競争とマーケティング及びマーケティング理論史	マーケティングは需要を上回る供給体制となった資本主義社会の成熟期に生まれた。企業競争も価格競争から非価格競争へ移り、またマス・メディアの発達もあって、セールス中心の売り方から広告へ重点を移しつつある。	同上
3	マーケティング戦略、市場細分化と戦略ドメインの決定	このところ需要は高度化し、つかみにくくなっている。消費者研究を進めていくと市場は限りなく細分化されていく。地理的、人口学的、経済学的、社会学的さらに心理学的に細分し、どこに自社、及び自社製品を位置づけるか、戦略ドメインの決定をどうするか。	同上
4	需要予測と消費者行動	消費者志向の第一歩は需要予測である。マーケティングのスタート時は心理学が使われ、次いで社会学、文化人類学、意味論なども応用されるようになった。コンピュータ利用で、需要予測は大がかりになり、またこまめになっている。実例に即した需要予測を紹介。	同上
5	製品開発から商品開発まで	需要予測にもとづいた製品づくり、次いで商品開発について解説する。需要予測から想定される商品を500とすると、このうちテスト・マーケティングに回る商品が100で実際に売り出される商品は10という。製品計画と商品化とは異なる点も理解してほしい。	同上
6	マーケティング戦力とその配分	マーケティング戦力には価格、商品、流通、プロモーション、セールス、ＳＰ、広告などがある。各戦力の力を説明し、その配分をどうするか。商品のライフサイクルによって、競争条件によって各戦力の配分は変わってこよう。	同上
7	価格決定	価格を決める要因は原価と需給関係できめる。その兼ね合いに苦心する。原価以下では利潤が出ない。かといって消費者意識で高いと思われるような価格では売れない。短時日で原価を回収するか長期間で回収するかによっても価格の決定は変化する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	流通戦略	直販組織を使えればそれにこしたことはない。しかし、これには多額な費用がかかり、販売店が利益を確保できるかがかぎを握っている。合販組織ではどう自社製品のシェアをふやすかがかぎを握っている。いずれにしてもその維持、拡大をどうするかが問題である。	八巻俊雄
9	セールスマン活動の人間関係学	マーケティング戦力の中で最も古くから存在し、かつ基本をなす戦力である。セールスマン配置、管理とセールスマン活動とに分かれる。セールスマン活動の基本は人間関係である。初めての顧客を百年の知己にしてしまう技術は一流セールスマンの秘伝でもある。	同上
10	ＳＰ．イベント	マーケティング戦力の中で人間（セールス）と物（広告）の中間にあって、強力な役割を果たす活動がＳＰ（セールスプロモーション）である。おまけ（プレミアム）サンプリング作戦、マネキン、展示会、見本市など豊富な手段が使われている。	同上
11	広告、クリエイティブと媒体選択	広告はターゲット（対象）をきめてからスタートする。ターゲットに向けて商品の持っているコンセプトをどう伝えていくかが基本である。伝える手段は媒体が担う。これにはマス媒体からミニ媒体まで多様である。	同上
12	顧客管理とアフターサービス	マーケティングは顧客志向の経営である。商品を売ったあとどう顧客のロイヤリティを保持していくかが問題である。耐久財と包装商品では対応策が異なるが、それだれ基本は顧客志向ということである。	同上
13	マーケティング組織と人材	以上のようなマーケティングを展開するうえにどのような社内外の組織を作っていったらよいか。販売会社をメーカーと同一にした場合の利害得失、作戦部門と営業部門のウエイトは、また営業部門は商品別か顧客別かなどを検討する。	同上
14	マーケティング法	マーケティング活動はシェア拡大を目ざす経済行動でもある。したがってマーケティング活動は独占禁止法、その下部法の景品と表示に関する法律の規制を受ける。ほかに特許法、商標法、あるいは業界ごとに配慮しなければならない法規制、自主規制がある。	同上
15	マーケティングの新潮流	エレクトロニクスとコンピュータの発達によって、消費者をとらえる方法、これにアプローチする方法も大がかりになった。このためのデータ・ベースの利用、処理技術など、各項でふれられなかった問題についてふれる。ほかに無店舗販売、ニューメディアを扱う。	同上

＝生　産　管　理＝（TV）

［主任講師：秋庭雅夫（東京工業大学教授）
　　横山雅夫（放送大学助教授）］

全体のねらい

生産に当たって、市場の要求に適合する製品の産出、材料・動力・設備などの効果的な活用、作業者の人間性尊重などの課題に応え、また自動化にも対応できるように、生産とその管理活動の体系を適切に計画し運用していく考え方、技法を説く。

回	テ　ー　マ	内.　　容	担当講師（所属・氏名）
1	生産管理の意義と生産方式	生産とは何か。生産管理に期待するものは何か。生産活動をどのように体系的にとらえるのか。そこではどのような生産方式がとられ、その方式がどのように移り変わっているのか、現在の生産管理の意義と課題を示す。	秋庭雅夫（東京工業大学教授） 横山雅夫（放送大学助教授）
2	製品企画と品質管理	市場の品質に対する要求を技術的・統計的に分析し、製品に何が期待されているのかを導き出す方式とその結果を示す。さらに、そのような品質の製品をどのように造り出していくのか、品質管理の基本と技法を示す。	同　上
3	工　程　分　析	工程図記号とそれに基づく工程（分析・計画）図の作成方法を説明し、これを生産工程の分析・設計・改善にどのように活用するのかその考え方、取り組み方を示し、生産現場での適用例を示す。	同　上
4	作　業　管　理	適切な作業方法を設計するための動作分析・作業分析などの方法技術、標準作業時間を設定するための既定時間法・標準資料法などの作業測定法、それらに関連して複式活動分析法の考え方と活用の仕方を示す。	同　上
5	線形計画法による生産計画	生産計画における意思決定の方法として、線形計画法によるモデル化を取り上げ、そこでの計画の仕組みを解説する。また具体的解法の手段として図式解法、シンプレックス法による解の求め方について説く。	同　上
6	ライン・バランシング	流れ作業において、作業負荷を平準化、効率化するためのライン・バランシングの基本について説く。また、ライン編成効率、山崩しの考え方とともに、位置重みづけ法の手法を示す。	同　上
7	スケジューリング（ジョブ・ショップ・タイプ）	複数の仕事をいくつかの機械で処理するときの日程計画のたて方について説く。そのさい用いられるガント・チャートにより日程問題の意味を説明し、またジョンソンの解法を示す。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	スケジューリング（プロジェクト・タイプ）	プロジェクトに含まれる仕事の順序関係が与えられたとき進度管理を行う手法としてPERT・CPMを取り上げ、アロー・ダイヤグラム、日程計算、クリティカル・パス、人員配置、時間短縮に関する方法とその意味を説く。	秋庭雅夫 横山雅夫
9	待ち行列と設備能力の設置	設置された設備能力と到着した仕事の待ちとの関係をモデル化し、その一般化への展開を図る。さらに設置能力の水準が仕事の待ちに与える影響をモンテカルロ・シミュレーションの適用によって分析する。	同上
10	調達・加工・産出を通した資材の流れ	資材調達・生産加工・製品産出におけそれぞれの活動を通して、資材の流れを一貫して管理する考え方を示し、そのさい用いられるグループ・テクノロジーやMRPなどの手法について説く。	同上
11	資材発注と在庫の管理	資材調達に関する各種発注方式、経済的発注数量の考え方および方式について示す。また、それと関連して外注の目的、在庫を持つ要因を考え、在庫ゼロ方式など生産計画と在庫管理とのかかわりあいを説く。	同上
12	物流と輸送計画	産出した製品を消費者まで配送する物的流通システムの構成と、そこでの効率的な配送を行うための輸送問題の意味と原理、また輸送計画の解法について説く。	同上
13	作業環境と労働科学	最近の生産形態の変化に伴う作業環境の各種問題を考え、またマン・マシン。インタフェイスの設計及びそこでの労働科学の役割・対応ならびに現在の課題について示す。	同上
14	生産合理化	生産合理化の総合目標を設定し、その目標を生産各部門に重点的に展開して具体的な業務目標を決め、そのための施策を生産活動全般にわたって求め、生産性を体系的に向上させていく取り組み方を例示する。	同上
15	生産自動化	生産自動化の傾向と、トランスファ方式、群管理方式などの自動化への取り組み方並びに自動化機器とその活用状況を例示する。さらに自動化の経営に与える影響とそこでの問題点について説く。	同上

＝財　務　会　計＝（TV）

〔主任講師：若杉　明（横浜国立大学教授）〕

全体のねらい

企業の実施する会計は財務会計、管理会計および税務会計から成る。財務会計は、企業が株主や債権者などの利害関係者に、受託責任等に基づいて、その経済的意思決定に役立つよう、必要な会計情報を測定・伝達する領域である。この財務会計の社会的意義、仕組み、原理などにつき、基礎にある考え方にふれながら述べてゆく。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	企業会計と会計学	企業の情報測定・伝達システムである企業会計がどのような性格を有し、社会的役割を果たしているかについて述べ、さらに企業会計の学である会計学の体系を明らかにして、そこにおける財務会計の位置づけを行う。	若杉　明（横浜国立大学教授）
2	企業内容開示制度	財務会計は企業内容の開示制度にほかならない。そこで開示制度を構成する商法会計および証券取引法会計に関し、その基礎原理、目的、理論的性格などについて述べる。	同　上
3	企業会計の職能	企業会計が社会的制度として存在意義をもつのは、これが種々の職能を果たしうるからである。そこで会計のもつ、測定、伝達、財産保全、計画設定、業績評価、社会的統制等の各種の職能について取扱う。	同　上
4	一般に認められた会計基準	財務会計は、法令に基づいて行われる制度会計を中核とする。制度会計において法令に定めのない部分は一般に認められた会計基準に準拠することになっている。そこでこの会計基準の性格、役割り、具体的内容等について明らかにする。	同　上
5	財　務　諸　表	財務会計において、企業の財務内容の開示は財務諸表、すなわち貸借対照表、損益計算書などによって行われる。財務諸表の性格、役割り、体系、限界などについて取扱う。	同　上
6	収益力の測定と損益計算書	企業の財務報告の内容は多様であり、その1つの柱として企業の収益力の表示がある。企業の収益力は各種の利益数値によって表される。損益計算書は企業利益の算定表示を役う財務表であり、そこでこの計算表の性格構造、構成等に言及する。	同　上
7	期間損益計算の構造と諸原則	損益計算書において行われる利益の計算表示は、一定の理論に基づく計算構造と計算原理に基礎づけられている。そこで利益計算構造の特質と計算原理について述べ、またこれらの原理の相互関連にふれる。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	財政状態の測定と貸借対照表	企業の財務報告の柱の１つとしての企業の財政状態の測定・伝達に言及する。そしてそのための財務表である貸借対照表の性格、構造、構成等について明らかにする。	若杉　明
9	資産の貸借対照表価額の算定	貸借対照表に記載される資産は、一定の評価原則に基づいて、会計数値として表される。そこで資産の評価の基本原則について述べ、さらに個々の資産ごとの評価方式に関する商法や会計基準の規定を解説する。	同上
10	減価償却	固定資産は、時の経過、経営目的のための使用等によってその価値を次第に減少してゆく。そこで固定資産の取得原価は減価償却の方法によって、一定の会計期間に配分される。この減価償却の特質、具体的方法、これのもたらす効果等について述べる。	同上
11	繰延経理	会社の創立費、開業費、研究開発費などの諸支出で相当額にのぼるものは、これをすべて当期の費用に計上すると、当期の収益力の表示がゆがめられることがある。そこでこのような場合にこの支出を資産化して、数期間に費用配分する方法が選択適用される。	同上
12	引当経理	将来の期において実現する費用や損失などで、その原因がそれ以前の期に生じているものについては、関連する期に見越計上される。このような引当経理とよばれる会計処理法の性格、目的、効果等に言及する。	同上
13	資本の会計	企業の元手たる資本が調達されたり、他の形態に転換される場合の会計処理法、貸借対照表における表示法などについて明らかにする。具体的には資本金と資本剰余金をめぐる会計上の諸問題について取扱う。	同上
14	利益処分と剰余金の会計	企業の獲得した利益は、法人税等の支払い、配当金、役員賞与などとして企業外に流出するが一部は社内に留保されて、将来の資金的必要に備えられる。そこで利益処分とこれに関する会計処理に言及する。	同上
15	企業集団の財務報告―連結財務諸表制度	今日の企業は個々に独立の会社がグループを形成して一体となって経営活動を展開する。かかる企業グループの財務報告のための連結財務諸表制度につき、その特質、計算原理、開示方法などについて述べる。	同上

＝ 数 理 計 画 法 ＝（TV）

〔主任講師：加瀬滋男（放送大学教授）
横山雅夫（放送大学助教授）〕

全体のねらい

数理計画法と総称されている多くの技法のうち、特に線形計画法（LP）について講述する。具体的には、その根源的な計算手法を解説するとともに、応用例も数多くとりあげＬＰの有効性を認識させる。あわせてＯＲや経営科学における基礎的知識の習得にも寄与しようとするものである。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	数理計画法概説	経営や行政上の計画問題における数理的アプローチの内容を述べ、典型的な応用を例示しつつ数理計画法の全般を概説する。	加瀬滋男（放送大学教授）
2	ＬＰの具体例	若干の解説的な問題として生産計画問題、混合問題、輸送問題等をとりあげて、それらのモデルを紹介し、ＬＰの汎用性を示唆する。	横山雅夫（放送大学助教授）
3	ＬＰの構造	ＬＰの各種形式を列挙し、さらに平易な図解によりＬＰの構造に対する読者の十分な理解を誘導する。	同上
4	シンプレクス法〔1〕	シンプレクス法の核心を成すシンプレクス表の意味と作成につき基礎的概念を略説して、ＬＰの基本に関する興味を喚起する。	同上
5	シンプレクス法〔2〕	シンプレクス表での諸計算の意義と実際を詳述し、シンプレクス法を実施に移す際の知識を涵養する。	同上
6	各種の特殊解法	簡易シンプレクス法および特別な制約条件の場合における解法を略述し、ＬＰの柔軟性を強調する。	同上
7	2段階シンプレクス法	ＬＰの応用可能範囲を広げる2段階法の根拠と手法を説き、ＬＰの普遍的応用を呈示することによってその妙味を紹介する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	実　用　例〔1〕	ＬＰを実用して成果を収めつつある数社の実態を紹介し、それらの現状を通して読者のＬＰに対する理解を深化する。	横　山　雅　夫 高　井　英　造 （三菱石油㈱ 企画二部次長） 加　瀬　滋　男
9	実施上の検討〔1〕	現実の問題に最適解を適用するに際し、留意すべき若干の事項を論ずる。また条件の変化に基づく解の転化にも言及する。	加　瀬　滋　男
10	実施上の検討〔2〕	条件の変化に伴う最適解の転化を越えて、最適解そのものを再検討する方法を考察する。それに関連しシャドウプライスを解明する。	同　上
11	モデルの改変	問題自体のかなり大幅な変転に即応するための便法を探求する。ただし現実的というより理論的な立場からの論述である。	同　上
12	双対問題と整数解問題	ＬＰにおける双対性を介して最大化問題と最小化問題の関連を説き、さらに整数計画法の一端を例示する。	同　上
13	特殊問題の解法	シンプレクス法によらない特殊問題として、割当問題を含む輸送問題の解法を述べ、あわせてネットワーク問題にふれる。	同　上
14	実　用　例〔2〕	ＬＰの実践的見地からの石油精製問題における検討例により、シャドウプライスの有用性を立証する。	高　井　英　造
15	総　　括	本講における補遺的事項ならびに数理計画法の未来像等につき、各講師がそれぞれの意見を開陳し、読者の学習意欲を高揚する。	加　瀬　滋　男 横　山　雅　夫 高　井　英　造

＝産　業　と　企　業＝（R）

〔主任講師：黒沢一清（東京工業大学名誉教授）〕

全体のねらい

マクロな水準で認識される産業の仕組みの形成と発展と、マイクロな水準の行動主体である企業の活動との相互作用関係域をユニークな対象として考察する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	産業―企業系研究の方法	産業―企業系が多元・重層構造をもった実体であることを述べ、これを把握するための方法を論ず。	黒沢一清（東京工業大学名誉教授）
2	国民経済―産業系の計量システム；（その１）一般的フレーム・ワーク	国民経済の再生産構造を、各種産業の再生産システムとその構成、及び国民総生産が人口１人当り所得へと変換されるというこれら二つのサブ・システムをもって構成する。これをCILINシステムと呼ぶ。	同　上
3	国民経済―産業系の計量システム；（その２）日本の例の計量分析	CILINシステムの日本のケースへの応用を示し、この体系の産業―企業系問題における理論的、実践的意義を考える。	同　上
4	国民経済―産業系の計量システム；（その３）国際比較	CILINシステムの国際比較への応用を示し、一国の経済的・産業的発達へのマクロ―セミマクロな水準での戦略情報を考える。	同　上
5	産業―企業系を連結する付加価値生産性；（その１）理論	国民経済、産業及び企業を貫く経済成果指標である付加価値によって、マクロ―セミマクロ―マイクロを連結する生産性分析の体系を考察する。まず本章では一般理論を解明する。	同　上
6	産業―企業系を連結する付加価値生産性；（その２）実態分析例	前章で与えられた理論を日本の経験に応用して、実践上の諸問題を提起して、ここにおける産業―企業系分析を試みる。	同　上
7	産業―企業系を連結する生産性・収益性分析システム；（その１）理論	総コスト収益性及び総投入生産性を結合したシステム（AIPRシステム）をもって、産業水準と企業水準での、収益性と生産性とをシステマティックに分析する方法を解説する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	産業―企業系を連結する生産性・収益性分析システム；（その２）応用	AIPRシステムを日本のケースに応用し、さらに日本と米国の幾つかの工業に適用し、これによって、日本における産業－企業系問題の基本問題のひとつを考察する。	黒沢一清
9	産業と企業の国際競争力の構造と分析；（その１）巨視的特性	日本の製造業の生産性と収益性の国際水準での比較を行い、そこにみられる日本の産業的・企業的特性を浮き彫りにする。まずは巨視的な諸特徴を考察する。	同上
10	産業と企業の国際競争力の構造と分析；（その２）微視的特性	前章にひきつづき、企業経営水準の諸特徴を考察する。	同上
11	企業生産力の構造とホワイトカラー生産性；（その１）一般的構造	現代企業の生産力構造を解明し、とりわけ未来的展望において重要になる知識集約型スタッフ（ＫＩＳ）の生産性の構造と機能を考察する。	同上
12	企業生産力の構造とホワイトカラー生産性；（その２）経営資源の構造	企業生産力構造の基礎である経営資源の構造を考察する。企業－社会系の土台である。	同上
13	企業生産力の構造とホワイトカラー生産性；（その３）経営者及び管理者生産性の構造	企業生産力構造のサブシステムとしての、経営者生産性及び管理者生産性の構造を考察する。	同上
14	企業生産性と本社機構の生産性の連結モデル	本社はＫＩＳによって担われる企業経営の中枢機構である。本章ではこの本社機能の生産性を大局的＝統計的に把握する一方式を考え、これをもって日本と米国の製造業の状況を比較する。	同上
15	プロダクティヴィティ・スキーム；本講義の総括	一国の経済・社会の発達は、その国民の福祉のみならず、また国際社会のそれの、維持と向上に寄与するものでなくてはならない。こういう理念をもってする政策と連動のシステムを考察して、本講義の総括とする。	同上

＝ 産業および生業としての農業 ＝（R）

〔主任講師：渡部忠世（放送大学教授）〕

全体のねらい

人類の生存に不可欠な食糧などを供給する農業は、人類の歴史とともに発展して、各地に独自な技術と文化を形成した。その発展の中で、農業は農民の生活を支える生業としての側面から、社会に食糧・生産物を供給する産業としての側面を強化した。農業のこの両側面を世界と日本の農業発達史をたどりつつ考察する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	農業の２つの側面	農業とは作物と家畜の人為的増殖を通じて、人類の生存と生活に必要な素材を生産する行為の体系である。歴史的にみると、生業として自給的であった時代から産業としての成熟へと発展した。その経過を技術と文化の視点からふりかえる。	渡部忠世（放送大学教授）
2	農業の地域的ひろがり	農業の多様性を地域類型区分によって紹介し、各地域の農業立地・類型を世界的に鳥瞰する。同時に、世界の農業類型を「農耕文化複合」の考え方によりとらえ直し、現在の農業類型の基層をなす農耕文化の地域的ひろがりを紹介する。	同上
3	世界の農耕文化(1)根栽農耕文化と稲作農耕文化	世界の農耕文化のうち、アジアの農業の基層をなす根採農耕文化と稲作農耕文化の地域的ひろがりと特徴を紹介する。とくに東アジアの稲作農耕文化に関連して、照葉樹林文化の特徴を述べ、稲作農耕文化の展開過程を概説する。	同上
4	世界の農耕文化(2)サバンナ農耕文化、地中海農耕文化、新大陸農耕文化	地中海農耕文化とサバンナ農耕文化の地域的ひろがりと特徴を紹介する。両農耕文化はそれぞれ、ムギ類と雑穀類を育んだ重要な農耕文化である。また、旧世界に重要な作物をもたらした新大陸の農耕文化を概説し、ヨーロッパの農業の成立過程を考える。	同上
5	農耕文化の発展―自給農業の成熟	世界各地の農耕が生み出した作物・家畜複合は、農業の基本である永続的な土地利用を可能とする農業システムを確立するとともに、人類に豊かな食素材を提供した。世界の農耕文化が育んだ、系内での完結した自給農業のすがたを類型的に概説する。	同上
6	東アジア水田農業の展開	東アジアは世界にさきがけて集約的な農業を成立させた地域である。水田多毛作化の進展と水稲栽培技術の集約化は、土地生産力を大きく発展させ、自給農業としては、世界に類をみない労働集約的な農業を成立させた。その特徴を中国と日本の例からうかがう。	同上
7	南アジア畑作農業の展開	サバンナ農耕文化を基礎に発達した南アジアの畑作農業は、多種類の雑穀類を組合わせ、畜力耕の一貫作業体系を確立して、独自の農業体系を完成させた。南インドの畑作農業を素材に、アジアのもうひとつの自給的な集約農業のすがたを明らかにする。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	ヨーロッパの「農業革命」	地中海農耕文化を基礎に、サバンナ・新大陸農耕文化の要素を吸収したヨーロッパの農業は、やがて「農業革命」の時代を経て、穀物と家畜を複合させた「輪栽式」農法を成立させる。世界農業のひとつの典型をなすヨーロッパの農牧複合農業の形成過程を概説する。	渡部忠世
9	アジアとヨーロッパの農業を比較して	永続的土地利用のメカニズム、作物複合、畜力利用の体系、労働力の編成などの農法的視点からアジアとヨーロッパに成立した集約的農業の特徴を述べ、アジアにおける自給的農業とヨーロッパにおける企業的農業の成立過程を比較検討する。	同上
10	植民地拡大と企業的農業の成立(1) 新大陸と熱帯圏のプランテーション農業	ヨーロッパの農牧複合農業は、新大陸への移住を契機にさらに大規模な企業的農業へと展開する。また熱帯圏への植民地勢力の展開は、熱帯の豊富ゆ植物資源を求めて、本来熱帯圏に存在しなかったプランテーション農業を成立させた。	同上
11	植民地拡大と企業的農業の成立(2) ヨーロッパによる世界農業の再編	工業原料や食糧を供給するプランテーション農業は、各地に成立した農耕文化をときには破壊しながら、あるいは未利用の土地資源を開発しながら、熱帯圏の農業地図を大きく書きかえていった。この時期のヨーロッパ勢力による世界農業の再編過程を概説する。	同上
12	自給的農業と企業的農業の性格	世界の農業の発展過程をふりかえりながら、自給的農業と企業的農業の農法的性格を比較する。作物複合の単純化、土地利用の単作化、エネルギー利用の増大など、企業的農業の発展にともなう変化を、これまでの農業類型を例に、農業生態学の視点から明らかにする。	同上
13	日本の農業をかえりみて	東アジア水田農業を基盤に発展したわが国の農業の、近世から近代に至る展開過程を概説し、わが国の農業発展の特徴をとくにヨーロッパのそれと比較しつつ検討する。家族労働を基盤に小規模零細経営として成立した日本農業の性格を考える。	同上
14	戦後の日本農業	戦後の一時期に土地利用において頂点に達した日本の農業は、高度経済成立を経て、ある種の「衰退期」を迎えたかにみえる。「農基法農政」「総合農政」下での戦後農業の変化を、東アジア水田農業としての日本農業の基本的な性格をふまえつつ、ふりかえる。	同上
15	日本農業の将来	生業としての農業、産業としての農業、そして国民の文化としての日本農業の将来性を、世界の農業との関連で考える。わが国に成立した集約的農業技術の世界における今後の貢献と、新たに始まりつつあるバイオテクノロジーの技術的可能性についても言及する。	同上

＝哲学思想史＝(R)

（西洋近代の哲学思想）

〔主任講師：中埜　肇（放送大学教授）〕

全体のねらい

この講義はルネサンスに始まって１９世紀半ばにいたる西洋近代の哲学思想をその内容とし、哲学者の思想内容の細部に立ち入るよりも、哲学的な問題意識の流れを全体にわたって辿ることを目的とする。とくに世界（自然と人間）像および知識（学問）論の展開に重点を置く。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	ルネサンス	ルネサンス期の思想の特徴を「開かれた宇宙観」と「新しい人間像」という観点からとらえ、自然科学と人文主義の持つ思想的な意味をさぐり、さらにこの時期の自然哲学と神秘主義的な宗教思想について考える。	中埜　肇（放送大学教授）
2	フランシス・ベーコン	「経験」にもとづく新しい学問の提唱者であるフランシス・ベーコンが展開した新しい知の構造（学問のプログラムと分類、イドラ論、帰納法など）について述べ、その意味と限界を考える。	同上
3	デカルト	「普遍学」を構想し、その方法論の基礎を徹底的な懐疑によって達せられる「自我」（＝理性）の確実性に求めたデカルトの形而上学について述べ、その二元論的な世界観の問題点を探る。	同上
4	ホッブズ	機械論の立場からする演繹的な思考方法を、自然現象よりもむしろ人間社会の構造に向けたホッブズが、社会契約の必然性と国家権力の絶対性の思想に到達した過程を明らかにする。	同上
5	スピノザ	「神に酔える無神論者」と称せられたスピノザの汎神論が、実は絶対無限な神に対する信仰の論理的な帰結であったことを明らかにし、彼の思想が哲学の模範とされる理由を考える。	同上
6	ライプニッツ	十七世紀において最大のスケールを持つ総合的哲学者であったライプニッツが、無限量で極微の実体「モナド」にもとづいて構想した連続的で調和的な世界像の本質を明らかにする。	同上
7	ロックと啓蒙思想	啓蒙思想の先頭に立つロックが十七世紀の独断的な理性論に対抗し、近代的な知識論の出発として、初めて人間の認識能力を批判的に吟味し、経験主義の哲学を定礎した意味を探る。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	バークリと同時代の思想家たち	ロックの知識論をさらに進めて、「在る」ことを「知られている」ことに還元する観念論の立場に達したバークリ僧正の信仰と思想を、同時代の思想との関連で考える。	中埜　肇
9	ヒ　ュ　ー　ム	ロックに始まる知識吟味作業の完成者であったヒュームが、経験主義の立場を徹底することによって懐疑論に接近したプロセスとその意味を、因果の問題などを手がかりにして考える。	同　上
10	フランス啓蒙思想とルソー	イギリスに始まった啓蒙思想がフランスに入ってラジカルなものになった過程および文明と進歩に寄せる啓蒙思想の信頼を徹底的に批判したルソーの立場について述べる。	同　上
11	ドイツ啓蒙思想とカント	啓蒙思想のドイツ的なあり方をフリードリヒ大王やヴォルフにおいて見たのち、啓蒙の精神を深めることによって独自の批判哲学を構想したカントの問題意識を『純粋理性批判』について考える。	同　上
12	カ　ン　ト （つづき）	カントの批判哲学の発展を『実践理性批判』、『宗教哲学』および『判断力批判』に即してたどり、カント哲学の画期的な意味について考える。	同　上
13	ドイツ観念論哲学	カントの哲学が後継者たちによって変容され、さらにフィヒテやシェリングの思考を通して、一元論的な体系構成へと発展するにつれて、哲学がロマン主義の色彩を濃くしてゆく過程について述べる。	同　上
14	ヘ　ー　ゲ　ル	ドイツ観念論哲学のみならず、近代の哲学思想全体がヘーゲルにおいて頂点に達したことを、彼の絶対理性（＝精神）の哲学とその方法である弁証法とについて考察する。	同　上
15	ショーペンハウアー・キルケゴール・マルクス	ヘーゲルの絶対理性の哲学を徹底的に批判して新しい哲学的視野を開き、近代から現代への思想的移行の先駆をなした三人の思想家の歴史的な意義について考える。	同　上

＝社会思想史＝(R)

〔主任講師：城塚　登（共立女子大学教授）〕

全体のねらい

近代の民主主義国家・社会、資本主義社会を形成してきた人たちの社会思想、またそうした国家・社会のはらんでいる深刻な諸問題と対決し、その解決をめざした人たちの社会思想を考察し、現代の高度に発展した社会に生活するわれわれが、人間らしいあり方を確保するためには、どのような国家・社会をめざすべきかを考える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	近代的人間の登場	近代的な国家・社会は、資本主義経済の発展（産業革命）と市民革命を通じて出現したが、それを担った合理主義的人間はルネサンス期に登場した。マキァヴェリの社会思想を考察することによって、そうした合理主義的人間の社会観を見る。	城塚　登（共立女子大学教授）
2	個人の自立と自由	宗教改革の指導者ルターの宗教思想のなかには、内面的信仰を通じて神と結びつく個人の自立と自由、職業労働の意義が確認されるなど、近代社会を担う人間のあり方が示されている。それはカルヴィニズム、ピュウリタニズムに引継れる。	同　上
3	民主主義思想の成立(I)	ピュウリタン革命に出合ったホッブスは、個人の自然権から出発し、諸個人が社会契約によって国家・社会をつくったという民主主義思想の基礎がある。その問題を考える。	同　上
4	民主主義思想の成立(II)	「王政復古」から「名誉革命」にいたるイギリスにおいてロックは社会契約について考えを進め、「主権在民」の考え方を確立する。	同　上
5	啓蒙思想の展開とロマン主義	ロックの思想は、モンテスキュー、ヴォルテール、ルソー、カントなどの思想家に受けとめられ、啓蒙思想として展開。反動としてシュレーゲル兄弟らのロマン主義が現われる。	同　上
6	「市民社会」への反省	自由と平等を掲げたフランス革命は、流血と専制をもたらした。ヘーゲルは、スミスが解明した「市民社会」のあり方に反省を加え、国家が「市民社会」の活動を制御すべきだとする。	同　上
7	初期社会主義思想	イギリスのオウエンは労働者の生活改善に努め、協同生活・協同労働の村を開いて社会主義を説き、フランスでは科学者と産業者が社会の主導権をもつべきだとサン・シモンが主張した。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	マルクスの人間解放思想	ヘーゲル哲学から出発したマルクスは、国家は幻想の共同体であるとし、市民社会の自己変革をめざした。そして人間の自己疎外克服を人間解放の課題とする。	城塚　登
9	マルクスの共産主義思想	唯物史観に立つマルクスとエンゲルスは、資本主義が生産力の発展の妨げとなっているとし、生産手段の社会化を中心とする共産主義革命を説く、資本主義の経済学的解明をおこなう。	同　上
10	フェビアニズムと社会民主主義	イギリスの「フェビアン協会」は社会的善の実現をめざし、土地や資本の公有、社会福祉・保障の充実をめざす。ドイツ社会民主党は議会活動による労働者の権利拡大という路線を提出した。	同　上
11	マルクス主義思想の展開	ロシアでマルクス主義を受けとめたレーニンは、資本主義が帝国主義の段階に達したとし、革命を指導し実現した。西欧では、ルカーチ労働者階級の主体的自覚の形成が課題とした。	同　上
12	合理化と官僚制の問題	社会の近代化を合理化の過程としてとらえたヴェーバーは、会社などの集団が官僚制の特徴を示すようになるとし、人間はそれと対決しなければならないと説く。	同　上
13	大衆社会の問題	20世紀、資本主義社会は産業的合理化を進めたが、同時に非合理的行動や激情に走る傾向をもつ大衆が発言力をもった。その病理を指摘したマンハイム、リースマンを見る。	同　上
14	管理社会の問題	情報化社会の人びとの生活全体を制御しているのは、国家と法人大企業の複合機構であるとするガルブレイス、組織された資本主義の新しい問題を指摘したハーバーマスをとりあげる。	同　上
15	人間らしい社会をめざして	近代日本における社会思想の展開を概観し、日本の社会の現状を考える。民主主義、官僚制、大衆化、管理社会化などが日本の特殊性とからみながら引き起す問題にどう対処していくか。	同　上

＝知識と学問の構造＝(R)

－知の構築とその呪縛－

〔主任講師：大森荘蔵（放送大学教授）〕

全体のねらい

1つの中央構造線が現代学問の中央を貫いてこれを2つに分断している。自然科学と文化科学に、理科と文化に、そしてスノウの言う2つの文化に、更にこの分断は日常生活での人間観をも貫いている。この分断の基底には物と心の分裂があると私は考える。日本と西洋の両方にこの分裂の由来を尋ね、学問と人間観の一体性を回復することを試みる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	概説的序論	全体の予備的説明。西欧では16、17世紀の科学革命によって世界観の転換が始まった。これを「略画的世界観」→「細密世界観」への転換とみる。それが幕末維新期に日本で同じ転換を促した。これによって物の死物化、心身の分裂が生じた	大森荘蔵（放送大学教授）
2	略画的世界観	略画的とは精密な計測、表面的な論理的整合性にこだわらぬこと。そこでは天地人は一体として共感し、人間は神、霊、死者と共生し、過去と未来は現在に溶融する。動物、岩石も霊を持ち、物は生き生きとして死物ではない。	同上
3	日本における略画世界	古代神話、本居宣長の国学、江戸時代のインテリを支配した朱子学、そして基流思想としての仏教、における略画世界観について述べる。荻生徂徠、伊藤仁斉三浦梅園、等にも言及。そして幕末に強くなった洋学受容について。	同上
4	西欧古代中世における略画的世界観	イオニア自然学、アリストテレスに例をとる。細密世界観への起動力をもっていたデモクリストの原子論はアリストテレスの圧力で押えこまれた。更に細密化の始動としての天文学、静力学、解剖学にも触れる。	同上
5	略画の密画化その始まり	「円」信仰の呪縛からの最初の解放としてのケプラー、アリストテレス的神学に対する挑戦としてのコペルニクス地動説。細密数量描写としてのガリレイの動力学。連続量描写を可能とした微積分学。	同上
6	略画の密画化不可避の過程	ガッサンディによる古代原子論の復活。化学の領域での原子論の確認。それに基づいた「点描法」（原子論的描写）の進展。ラプラスの天体力学。それらにより物はほぼ死物と化した。一方神は遙か天上に死霊は街を歩きにくくなった。	同上
7	密画化と数量化	外部自然の細密描写が人体に及ぶとき人体の死物化が進行する。レオナルド、ベッサリユウスの解剖学。それがデカルトの「人間論」に至って人体は動物機械となる。当然「心」は分離独立し、「機械の中の幽霊」（ライル）となる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	密画の陥穽 －物の死物化－	だがデカルトの予想が現実化するには300年を要した。血液循環、呼吸、食物消化、発生と遺伝、これらの生命現象の細密描写が完成するまで紆余曲節があった。人体が死物体となるには手がかかったのである。	大森荘蔵
9	感覚的性質のストリップ	神経伝導、脳の機能の細密描写は今だに進行中である。しかしそれが完成しても心の機械化とはならない。逆に心はますます死物人体から浮き上り人だまのように浮遊している。心身の分裂は増大し現代人の迷いとなっている。	同上
10	二元論の構造的欠陥	西欧の密画世界観の受容は主として江戸期の医師によって行われた（例えば解体新書）。その時以来今日までその人間観が最も抵抗をうけたのは当然である。その抵抗の模様を観察する。	同上
11	二元論批判	無限の宇宙の細密描写を現実にはなしえない。そのため公理的方法に近い理論化が必要となる。その理論による説明とは何であるか。一方略画的描法をも併用せざるをえない社会人文科学における描写方法（デュルケム、ウェーバー、リッケルト）。	同上
12	原子論による密画描写	細密描写の基本は世界の時間的変化の描写である。この「変化」の概念を分析すると、可能な描法は原子論的描法と場描法としかないことを論証する。現代自然科学はまさにこの論理的選択可能性の枠内で展開してきたのである。	同上
13	人体の密画描写と知覚因果説	ここで残された現代の問題、心身問題に入る。まず生命論ではアリストテレスの形相としての霊魂論に還るべきと考える。それは上記の略画、密画両世界観の「重ね合せ」、「重ね描き」として理解できるからである。	同上
14	物と感覚の一心同体性	一方心の問題もまた上記二描法の「重ね描き」として理解しうる。密画世界観によって死物化された物はそれによって略画世界観でもっていた生命を取り戻すであろう。これを記憶、感情、想像、美的感覚等において説明する。	同上
15	自然の再活性化	一方、外界からの刺激による脳の興奮それによって生じる知覚像、という生理学の細密描法を批判、それに代えて「脳透視」の見方を提出し、幻像や十人十色を説明する。これによって両描法の「重ね描き」が完成し、心と物は昔の和合に返る。	同上

＝行　為　と　規　範＝(R)

〔主任講師：黒田　亘（東京大学教授）〕

全体のねらい

自然的存在であると同時に社会的、政治的な存在である人間は、さまざまな規範に従いつつ、それぞれの個性に応じた価値の実現を目指して生きる。そういう人間存在の多面性を集約的に表現する"行為"について、基本的な諸概念と諸問題の分析を試み、実践哲学の基礎的な構想を固める。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	行為について	「行為」という概念は自然現象を分類する概念とは性格を異にする。われわれが自分の意志行為についてもつ独得な知識にまず注目し、これを手がかりとして「行為」の分析を行う。	黒田　亘（東京大学教授）
2	規範について	意志行為とはすなわちまた「規則に従う行為」である。ひろく規則一般の観察と分類を試みたうえで、とくに「規範」と呼ぶべき規則に固有な性格と機能とを説明する。	同　上
3	価値と規範	「規範」と並ぶ実践哲学の主要概念は「価値」である。大観すれば西洋倫理思想史は、価値あるいは目的を中心とする学説と、規範ないし義務を根本とする学説のたたかいの歴史である。	同　上
4	「自然主義の誤り」について	二つの立場の対立は、行為の正誤をめぐる実践的推論の構造に根差している。アリストテレスの分析を範としてこの構造を考察し、ついでムーアの自然主義批判に論及する。	同　上
5	実践的知識の構造	ムーア以後の分析的倫理学では、まず事実と価値を切り離したうえで事実から価値への推論の正当性を論じるのが常道である。この問題設定の背後にある認識論的な前提を批判する。	同　上
6	意志行為の分析(1)	西洋認識論の主流をなす内在主義の正当化理論は、意志行為の原因と理由とを峻別する反自然主義の行為論と表裏一体である。これに対して筆者は意志行為の因果的解釈を目指す。	同　上
7	意志行為の分析(2)	「基礎行為」の概念を導入してアリストテレス学説の現代的な整理を試み、また行為の因果連関と出来事の因果連鎖とを区別して行為論の基本的な枠組みを整える。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	人格の概念	意志行為の因果連関は行為主体たる人格と、人格が設定する行為の目的とによって限界づけられる。とくに責任の問題との関連でこの事情を説明する。	黒田　亘
9	自由と決定	行為の因果的解釈は決定論や宿命論とは結びつかない。「選択の自由」や「予言破りの自由」に関する議論を批判的に検討し、人格的な行為の因果連関にそくして自由を捉えなおす。	同上
10	欲望と意志	善と知って行わず悪と知りながら行う「無抑制」の現象は、ソクラテスの昔から理性尊重の倫理学説にとっての試金石であった。因果説の観点からこの問題の首尾一貫した解釈を与える。	同上
11	快楽説をめぐって	行為を動機づける快・苦の現象は重要な検討課題である。快楽説に対する道徳的な反感や、要素主義の感覚心理学にはとらわれずに生活のなかの快苦の現実を直視したい。	同上
12	功利主義の検討	快楽または幸福の増大をもって行為の正しさの決定基準とする功利説について考察する。まず、「功利の原理」すなわち「最大幸福の原理」を正確に紹介し、解釈上の重要論点を挙げる。	同上
13	正義について	正義の諸規範を最大幸福の原理によって基礎づけ、正義を功利に帰着させることは可能であろうか。J・S・ミルの「功利主義論」に基づいて問題を提起する。	同上
14	嘘と約束	言葉に関する誠実の義務、という特殊な正義の規範について前章の問題を細かく検討する。これに関するカントの議論とミルの功利主義的解釈を対比し、それぞれの長所と短所を見る。	同上
15	契約と功利	功利説に鋭く対立するものとして契約説の正義論があり、道徳と政治をめぐる現代の理論的状況も両学説の対決を中心に動いている。この事情に注目しながら実践哲学の今後を語る。	同上

＝ 宗教学を学ぶ ＝（R）

〔主任講師：阿部美哉(放送教育開発センター教授)〕

全体のねらい

宗教の世界は音によって満たされているともいえる。聖なる世界からのメッセージを媒介するものが音である。本講義においては、ラジオのメディアとしての特性を最大限に生かすために、放送講義の中心となる部分を宗教にまつわる音を使った録音構成によるものとする。印刷教材は、その音を問題提起として受けとめ、学生自らが考えていく学習の手引とする。15回の流れは、宗教の原初形態から近代宗教への宗教史的展開を追うものとし、それぞれの回において宗教に関する基本的な理論を紹介する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	夜明け	講座を開始するに当たって、この科目の基本的な枠組を理解し、今後の学習に対処するための学習態度、特に、ラジオ番組の聞き方についての身構えを作る。 この講では、宗教学の性格およびその対象と方法について、基本的に理解し、初期の宗教学が、なぜ「宗教の起源」という問題を考察の対象としたかについて考え、さらに、「アニミズム」および「ヌミノーゼ」という概念について学習する。	阿部美哉（放送教育開発センター教授）
2	祈り	第1回の講義において、我々の宗教的な感覚の基礎に、自然を恐れると同時にそれに引かれるという感情のあることを見てきた。今回は、そういった理解を踏まえて、最も基本的な宗教行為と考えられる「祈り」に焦点を当てる。 祈りが成立するためには、祈りの対象となる「聖なるもの」の観得が不可欠である。「聖と俗」という宗教的世界における基本的な二分法について理解する。	同上
3	呪術	祈りが、聖なるものへの祈願的な働きかけであるとするなら、「呪術」は、聖なるものへの操作的な働きかけだと見ることができる。超自然的な力を利用して、世界をコントロールしようとする手立てとしての呪術について理解する。 呪術の世界を感覚的にとらえるとともに、呪術と科学、呪術と宗教の関係および呪術の類型、えらびに呪術の現代的な現れ方について考える。	同上
4	集団的沸騰	シャーマン等に見られる呪術的な神がかりが、個人の次元において、日常的な意識の状態から脱するための試みであるのに対して、集団的な神がかりの状態が存在する。そういった状態は「集団的沸騰」と呼ばれる。それは、集団全体が日常的な意識を超えて、聖なる世界に近付く機会である。この集団的沸騰という考え方について理解するとともに、その具体的な現れである「祭り」について理解する。	同上
5	儀礼	人間が円滑な日常生活を送るためには、俗なる世界を超越した聖なるものをコントロールしていかなければならない。そのための手段が「儀礼」であり、儀礼が宗教の本質的な部分を構成していることを理解する。 さらに、儀礼の様々な形態について学び、それぞれの目的や特徴について考える。儀礼が頻繁に営まれるのは、世界の秩序を維持するためであり、危機を克服するための行為であることを理解したい。	同上
6	神話	儀礼の背後には、その儀礼の意味を語る「神話」が存在することを理解する。神話は、あらゆることの起源を語る聖なる物語であり、そこでは世界の誕生、人間の誕生、死の起源、穀物の起源等が説明される。また、善と悪との闘争について語る神話も多く、善の勝利と悪の敗退についての神話が人々の行動のモデルとして作用すること、また、神話は権力の歴史的な根拠を証明するためにも使われることを理解する。	同上
7	終末論とユートピア	神話と儀礼によって、カオスの上にコスモスを打ち立ててきた人間には、世界が再び元のカオスへと崩壊していくことへの恐怖が存在する。その恐怖から生まれてきた、世界の終わりへの信仰に「終末論」がある。終末論	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	メディエーターと教祖	聖なる世界からのメッセージを伝達するためには、その媒介者である「メディエーター」を必要とする。メディエーターは、「他界」からの死者のメッセージを伝達する場合もあるし、神霊のメッセージを伝達する場合もある。そういったメディエーターの多様な形態と、機能を理解するとともに、メディエーターの一つの形態であり現実の世界に新たな秩序を打ち立てようとする「教祖」という存在について理解する。	阿部美哉
9	物語と信仰	教祖を初めとする宗教者の生涯が、その死後、聖なる価値を有する「物語」として定着化され、信者の間に伝承されていくことを理解する。この聖なる物語は、信者たちにとっては人間の生き方、信仰生活のモデルであり、少しでもこの物語に示された生き方に近づくことが、目標とされる。「信仰」という行為に対して、こういった宗教者の人生の物語が深い影響を与え、具体的な指示を与える点について理解する。	同上
10	文化と社会	一つの源から始まった各宗教は、その勢力を拡大し、様々な「文化」や「社会」の間に広がっていくにつれて、土着・既成の宗教的世界の影響を受け、その形態を変化させていく。そこに成立するのが、各種の「教団」であり、教団は各地域や各民族の「宗教的世界」との融合・対立の上に展開する。したがって、既成の宗教的世界と対立し、その変革を志向する場合もでてくることになる。ここでは、宗教集団と文化・社会の関係を理解する。	同上
11	聖地と巡礼	宗教的な世界においては、空間は均質ではない。最も聖なる価値を帯びた空間が「聖地」であり、聖地は時に世界の中心として考えられる。「巡礼」は、聖なるものを求める行為の一つであり、その形態は様々である。聖地と巡礼との関係、巡礼と通過儀礼の類似性と異質性、そして巡礼における体験の特徴などについて理解する。	同上
12	教会と社会制度	宗教の発展とともに、聖なる世界にふれるための場が日常の世界で重要な位置を占めるようになる。「教会」の誕生である。教会は、神の存在を知らしめることによって、日常の生活に秩序を与える機能を果たす。そこに様々な儀礼、儀式が生まれ、制度が形成されていく。 教会の制度について考えるとともに、その社会制度との関係や発展の歴史について理解をすすめたい。	同上
13	セクトと世俗化	社会制度の変化は、宗教の世界にも大きな影響を与える。社会分業の進展は、宗教制度の多様化に結びつく。教義や儀礼の合理化が押し進められ、脱神話化がはかられる。生活の領域においても、俗なる世界が聖なる世界から独立し、聖なるものによる社会の公的領域の統合力は弱まってくる。様々な「セクト」が発生し、「世俗化」が進行する。セクトの発生と世俗化が、社会生活に及ぼす影響について理解する。	同上
14	神秘主義と内面化	宗教的な世界においては、様々な音がその世界を満たしていると同時に、すべての音が断ち切られた「沈黙」の状態が重視されている。沈黙は、すべての世俗的な音が排除された状態であり、その沈黙の中での祈りや、人と人、人と神との交りが宗教行為の目的とされる。超越的な聖なるものへ世俗のことばによって到達することは不可能であり、沈黙の中へかすかに聞こえてくる聖なる音はまさに「福音」に他ならない。この福音について理解する。	同上
15	家とアイデンティティー	これまでの学習を三点にしぼって振りかえってみる。	同上

＝構造と解釈＝(TV)

〔主任講師：渡辺二郎（東京大学教授）〕

全体のねらい

最初に現代の「構造主義」の考え方を追い、その特徴と限界を指摘する。次に、その前提となっている「近代科学」の背景と意義と射程を論ずる。こうして最後に、「解釈学」的哲学の持つ重要な意味について論究する。結局、全体としては、「構造」を取り出す考え方の解釈学的前提を明らかにし、逆に「解釈」の構造を解明する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	「構造と解釈」への問い	最初に、本講義の主題である「構造と解釈」という問題そのものの意味について論ずる。特定の事柄の構造や解釈ではなく、構造と解釈「一般」を論じ、しかも構造「と」解釈の相互連関を明らかにするのが主題であり、これを「構造主義」と「解釈学」に即して行う。	渡辺二郎（東京大学教授）
2	構造主義の登場	レヴィ＝ストロースの構造主義は1960年代に大流行をした。構造主義の登場の背景には、ソシュールに始まる言語学における構造主義的考え方が前提となっており、これをリクールの指摘に従って、三つの点から明らかにするのが、この回の狙いである。	同上
3	構造主義における構造	レヴィ＝ストロース自身が、トルベッコイの音韻論的研究に示唆を受けていることを告白している。それを顧みたあと、構造主義が構造というものをどう考えているかをまず全般的に展望しつつ、四つの事例を挙げて、構造主義の構造に関する考え方を呈示する。	同上
4	構造分析の実例とその帰結	レヴィ＝ストロースが、構造に関する考え方を基礎にして、実際に彼の社会人類学においてどのような構造分析をしているかを一瞥する。母方のおじ、トーテミズム幻想、野性の思考に関する彼の分析を追ったあと、歴史否定の神話的思考の根本性格に言及する。	同上
5	構造主義への批判	レヴィ＝ストロースの構造分析が社会人類学において業績を挙げていることは言うまでもない。しかしリクールによれば、特定の神話的思考にのみ範例を求め、言語学的構造理論を一般化した構造主義哲学は、主体や歴史を見失う客観的科学の思考として批判される。	同上
6	近代科学の背景	以上で「構造主義」の話を終え、今度は、一般的に、近代科学によって事柄の必然的構造を法則的に捉える考え方の吟味に移る。こうした科学主義が現代を支配しているからである。こうした考え方は、アリストテレスの存在観と自然観の批判において登場した。	同上
7	近代的知の射程	十七世紀の科学革命が、現代の科学至上主義の根底にある。この点の特質を、カントの指摘した「思考法の革命」や、デカルトにおける「属性」重視の考え方と結び付けて省み、そこに大問題が潜むことを指摘する。「世界統握の時代」の始まりが現代にまで及ぶ。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	ラッセル批判	上述した近代的思考法の帰結の一つとして、現代のラッセルの存在観が批判的に吟味検討されねばならない。ラッセルは、存在を命題関数の性質として捉えることを提唱するが、そこに根本的な問題が付き纏うことを徹底的に示唆することが、種々の意味で肝要である。	渡辺二郎
9	ディルタイと解釈学	以上で、「近代科学」の吟味を終えたので、これからいよいよ「解釈学」の哲学の方に移る。解釈学の考え方は、十九世紀後半に、自然科学の誤った隆盛に抵抗して、精神科学を擁護し、人間的生の表出を、予解し、解釈すべきことを説いたディルタイに始まる。	同上
10	解釈学的現象学	ディルタイを承け、しかしフッサールに学びつつ、ハイデッガーは「存在と時間」において、新たに「解釈学的現象学」の方法を用いて、現存在の実存論的分析論を企てた。その際、「存在了解」をする人間の在り方が根本に捉えられる点がきわめて大事である。	同上
11	了解と解釈と陳述	ハイデッガーは「存在と時間」において、「了解・解釈・陳述」についてきわめて深い分析を行った。ここで初めて「解釈」の構造が鋭い分析によって掘り出された。了解の「予構造」、解釈の「として構造」、解釈学的「として」、命題的「として」などを見る。	同上
12	語りと言葉	ハイデッガーは以上に結びつけて、「語り」と「言葉」の問題を論ずる。ここに大層興味深い言語論がある。また、良心の呼び声も、語りの世界に入る。こうして、了解と解釈の射程は、世界内存在する実存の在り方に深くかかわってき、人間の在り方に密着する。	同上
13	詩人と芸術	後期ハイデッガーは、ヘルダーリンを初め、多くの詩人を論じ、また芸術についても考察を企てている。存在了解と存在解釈は、ここに至って見事な成果を結晶させる。この点を辿ることによって、了解と解釈の持つ重要性を浮き彫りにしてみたい。	同上
14	ガダマーの解釈学（その1）	現代における解釈学的哲学はガダマーによって提唱された。1960年における「真理と方法」の刊行は、世界中に大きな波紋を投じた。ガダマーのこの大著の基本的狙いを、全体の三部構成の順序に従って省みる。まず背景・特徴、第一部と第二部前半を見直す。	同上
15	ガダマーの解釈学（その2）	前回に続いて、ガダマーの「真理と方法」の第二部（後半）と第三部の内容を概観する。こうして、ガダマーの解釈学の特色が辿られる。要するにガダマーは、過去の単なる歴史学的辿り直しではなく、それとの厳しい思索的対決を、解釈学の根本精神とする。	同上

＝記　号　と　人　間＝（TV）

〔主任講師：吉田夏彦（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

記号に関連した事項をいくつか取り上げて論ずることを通じ、人間の世界を理解する上でどんなに記号に頼っているかを論ずる。記号について論ずるべきことは他にもいくらでもあるが、わかり易くすることを旨とするので、あまり手は広げない。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	さまざまな記号	ことばと記号　いろいろな記号　生活と記号 意味のある記号	吉田夏彦 （東京工業大学教授）
2	自然の中の記号	自然の表情　自然にそなわっている記号 記号を伝える神経　遺伝における記号 化学の方法　自然を記号化する 自然科学における記号	同　上
3	機械と記号	記号の効用　機械を使う 産業革命以後の機械　コンピュータ	同　上
4	通　信	せまい意味での記号　記号を伝える 記号の抽象性	同　上
5	解　読	人にわからない記号　いろいろな解読 解読においての正解　自然の解法	同　上
6	常識的なみとり図	記号の伝達　記号現象　思想の記号化 記号の枠組	同　上
7	誤　解	誤解の例　客観的な世界の構造 記号の意味するもの	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	有用な誤解	意識されない誤解　芸術作品の誤解 記号の目的　名前の多義性	吉田夏彦
9	コミュニケーション	記号の共有　具体から抽象へ 抽象から共同へ	同上
10	記号のひとりだち	記号自体の価値　数学の概念 記号による第二の自然　記号の価値の獲得	同上
11	抽象と記号	抽象　抽象の範囲　記号の「種類」 記号であらわされた集合	同上
12	論理	最低限必要な記号　命題　論証　論理学 正しい推論の形式　公理体系	同上
13	複数のモデル	四つの公理による「集合論」の矛盾 論理学的方法	同上
14	世界と知識	知識　理論に使われる概念　世界の記述 記号体系の本来の役割	同上
15	まとめ	記号の整理　記号の許容範囲　記号の意味 記号について学ぶ	同上

＝哲　学　的　人　間　学＝（TV）

〔主任講師：中　埜　　肇（放送大学教授）〕

全体のねらい

さまざまな面で人間のありかたが深く問われている現代において、人間存在の本質を根本において、また全体として明らかにすることはきわめて重要な意味を持つ。哲学的人間学はこの課題を果たすことを目的とする。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	哲学的人間学の課題	哲学的人間学の目ざすもの、人間学と人類学との差異、哲学的人間学の視点と方法およびそれの簡単な歴史について述べる。	中　埜　　肇 （放送大学教授）
2	人間の独自性	宇宙における人間の独自な位置について考え、人間の独自性を不安定性、自覚性、両義性などの面について考察する。	同　　上
3	身体について	人間の身体が持つ意味およびそれの人間的な特殊性を哲学の問題として考える。	同　　上
4	心について	心とは何か、心は在るのか、心の働きはいかなるものか、意識と無意識などについて考察する。	同　　上
5	心身関係について	デカルト以来現代にいたるまで、単に哲学だけでなく、ひろく文化上の大問題である心と身体の関係について考える。	同　　上
6	生　と　死	人間にとって生と死は他の生物の場合と根本的に違う。この人間独特の生と死のあり方について論ずる。	同　　上
7	社会性について	人間の基本的な特質と言われる社会性の基礎にあるもの、社会秩序の本質、代表的な社会集団の人間学的意味について述べる。	同　　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	歴史性について	歴史意識の本質と生成、歴史と社会との関係、歴史観のあり方、世界史の問題などについて考察する。	中埜肇（放送大学教授）
9	個体性について	神の死の前に立ったとき、明らかになる孤独性、それと人格や実存との関係、自我の問題などについて考える。	同上
10	自然について	人間にとって自然とはなにか、自然に対して人間はどのように関わるか、その関わりが人間に何をもたらすかなどについて論ずる。	同上
11	労働について	人間にとって労働はいかなる意味を持つか、労働はどのように進化するか、という問題を哲学的な視点から考察する。	同上
12	技術について	人間は人間であるかぎり技術を用いる。そういう根源的な技術と現代のテクノロジーとの間にどのような発展があるかを哲学的に考え、また現代テクノロジーの人間学的意味を論ずる。	同上
13	知識と情報	人間の文化の基礎にある言語の意味、それと思考との関係、さらに知識や学問などの知的な営みの本質について考える。	同上
14	価値と意味	人間は事実よりももっと広大な意味の領域に生き、また価値によって定位されている。このことの持つ根源的な意義について論ずる。	同上
15	文化と文明	文化と文明はどう違うか。それを人間の欲望充足のレベルの問題として考え、現代文明の本質に関する見解を述べる。	同上

＝日本言語文化論＝(R)

〔主任講師：古田東朔（放送大学教授）〕

全体のねらい

言語文化というとき、種々の扱い方が考えられよう。しかし、ここでは、日本語自体を対象とし、特に近代語が種々の作品とかかわりあいながら、どのように形成されてきたかをながめていく。文学作品はもちろん、論説・翻訳・読本などを通して、話しことば・書きことばの問題点とその形成過程について取りあげる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本の言語文化	全体の序説。明治期における書きことば（漢文訓読調・和文調）、話しことば（標準語・方言）、言文一致等々の問題が、政治・文化上の動きに応じて、どのように意識され、具体化されていったか。それらについての概観を行う。	古田東朔（放送大学教授）
2	古代語と近代語	まず日本語の歴史について大きく見ておく。古代語と近代語に大きく二分されるが、それは係り結びの有無、二段活用の一段化に認められる、この外、音韻・敬語などの違いについても、合せて見ておく。	古田東朔 築島裕（東京大学教授） 坂梨隆三（東京大学助教授）
3	江戸語から東京語へ	江戸時代のことばのうち、上方を中心とするものを上方語、江戸を中心とするものを江戸語ということがある。特に後期の江戸語から明治期の東京語に至る過程、特色について見る。現代のことばの基礎となったものだからである。	古田東朔
4	「国語」意識の成立	日本の近代国家としての成立は、必然的に「国語」の意識を確立させるようになった。話しことば、書きことばにおいて、問題として考えられたことは、どのようなものであったか。それらの数々について取りあげる。	同上
5	方言と標準語・共通語(1)	明治以後、全国に共通に理解される標準的なことばとは、どのような理由から考えられたものであったか。また問題点はどこにあったか。江戸末期からの話しことばの実態と、その際の主張、政策等について、まずながめておく。	同上
6	方言と標準語・共通語(2)	前回のあとを受け、特に国語調査委員会による全国の音韻・口語法の調査（明治36）と、その影響について見る。その結果が口語の標準となる『口語法』編集に活用され、他方、方言研究の進展をうながしてきたことについて話し合う。	古田東朔 徳川宗賢（大阪大学教授）
7	口語と文語	「口語」といい、「文語」という。しかし、それはどのようなものをさしていうのか。外国語との接触による日本語文法の再検討から始まり、やがて「文語」と「口語」という大きい枠が定められていく過程を見ていく。	古田東朔

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	言文一致の動き(1)	話しことばと書きことばを一致させようとする「言文一致」の運動は、明治になって盛んになる。江戸期の作品において、話しことばはどのように扱われていたか、幕末期から明治初期にかけての言文一致の主張や試みはどうであったのか。	古田東朔
9	言文一致の動き(2)	「言文一致」は小説だけに限られるものではない。前回を受け、三遊亭円朝の人情噺が速記により活字化され、『浮雲』に影響を及ぼした過程、その他の小説における試み、加えて小学校読本の談話体の文章などについて見る。	同上
10	漢語・文語調の位置(1)	文語調は、長く書きことばにおいて正式のものとされてきた。それは、どのように用いられてきたか。まず、漢語の使用についてながめておき、ついで江戸期から明治初期の小説・論説・翻訳など、漢文訓読調の文章を見る。	同上
11	漢語・文語調の位置(2)	前回のあとを受け、明治期の漢文訓読調・和文調・その他文語調の小説のいくつかについてながめる。そして、当時文語調の占めていた位置について考えるとともに、口語と文語の文章の違い、以後の文章の大きい傾向についても見る。	同上
12	訳語による新しい世界	西欧との交渉、理解のため、訳語の試みがお互いになされてきた。室町期・江戸期・明治前期において、和語・漢語による訳語がどのように用いられ、相互の文化が理解され、新しい世界が紹介されていったか話し合う。	古田東朔 進藤咲子（東京女子大学教授） 鈴木英夫（茨城大学教授）
13	言葉の登録	近代を切り開いていった言葉の数々は登録され、位置づけられていく。従来からのもの、新しい訳語なども含めた和語・漢語その他が、どういう観点からまとめられていったか。三つの辞書を取りあげ、その苦心のあとをたどる。	古田東朔
14	近代の敬語	対人関係の意識が、ことばにどうあらわれるか。かつての身分・地位によるものから人格の尊重へ、丁寧表現の増加へという傾向が見られるが、それらの主張や、実際の例、調査結果などについて見ていく。	同上
15	言語文化のみかた	これまでのまとめを行う。まず、ことば自体についてこれまでの資料による扱いについてながめ、ついで階層・地域・教育・男女差などによるみかた、さらに異文化を理解するためのことばの働きなどについて見ていく。	同上

＝上代日本文学＝(R)

〔主任講師：稲岡耕二（東京大学教授）〕

全体のねらい

万葉集は現存最古の歌集で、歌謡を母胎に文字による創作歌が生み出され、律令制度の確立とともに中国文化の刺激により文学的な洗練を加えていった100年余りの期間の、清新な抒情歌を多数収録する。そうした万葉歌の形成・展開のすがたを、個々の歌人や作品に即して跡づけたい。今回は額田王・柿本人麻呂とその前後を扱う。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	万葉のあけぼの ―舒明天皇・中皇命―	万葉集は、実質的には舒明朝から始まる。その初期万葉歌の特徴を、舒明天皇の国見歌、中皇命の宇智野献呈歌などの表現に即して考える。	稲岡耕二 （東京大学教授）
2	相聞歌の流れ ―石川郎女・藤原鎌足など―	巻二の相聞の部には磐姫皇后作歌が載せられているが、それは皇后の実作ではなく、おそらく人麻呂以後の仮託作である。歌垣の掛合歌を源流とする万葉の相聞歌の特色を、久米禅師・石川郎女・鏡王女・藤原鎌足などの作品を読んで理解する。	同上
3	額田王（一）	額田王は、初期万葉の代表的歌人である。集団の代表者や構成員たちにかわってうたうその歌人としての性格や表現の特色を、熟田津の歌、近江遷都の時の歌などを読んで理解する。	身崎壽 （北海道大学助教授）
4	額田王（二）	蒲生野における大海人皇子との唱和歌、大津宮における春秋競憐歌などを読み、宴席に歌才を発揮した額田王の特徴を理解するとともに、伝記上の問題点についても検討する。	同上
5	天智・天武天皇の歌とその挽歌	天智天皇と天武天皇は、寡作ながら、すぐれた歌を残している。三山歌・藤原夫人との唱和歌・吉野の歌などを読み、その作風を理解するとともに、崩御後その後宮の人々によって歌われた挽歌を読み、初期挽歌の特色を考える。	同上
6	柿本人麻呂の生涯と作品	柿本人麻呂の閲歴は詳らかでない。天武・持統・文武の三代に下級官吏として仕えたことはほぼ確かであるが、大津宮や壬申の乱との関係や官職、生没年など不明な点が多い。吉備津采女挽歌・臨死歌などを読み、伝記との関わりについて考え、その作品を概観する。	稲岡耕二
7	人麻呂歌集（一） ―略体歌について―	柿本朝臣人麻呂歌集には360首余りの歌を収録しているが、それらが人麻呂の自作か否か、古くから論議の的となっている。いったいどのような性格の歌が多いか、序詞・枕詞など表現方法の上で特徴は見られるかなど、略体歌を読みながら考える。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	人麻呂歌集（二） —非略体歌について—	非略体歌に含まれる紀伊国作歌や巻向関係の歌など人麻呂調に近い詠風の短歌や、歌集中に二首のみ見える長歌を詠み、その特色を把握する。	神野志　隆　光 （東京大学助教授）
9	近江荒都歌と日並皇子挽歌	持統朝前半の人麻呂作歌のうち、近江荒都歌は我が国における廃墟を詠む歌の嚆矢であり、日並皇子の殯宮挽歌は、男性の歌人による、誄的な内容を加えた挽歌のはじめである。それぞれの表現の特色を理解するとともに、「一云」「或云」などの異伝をも検討する。	同　　上
10	石見相聞歌	人麻呂が晩年に石見国に赴任し、朝集使などの役目で上京した時の作と考えられている石見相聞歌を読み、その表現と構成、反歌の性格などについて理解する。	同　　上
11	泣血哀慟歌 —人麻呂の連作—	人麻呂の亡妻挽歌を読み、人麻呂調と言われる詠風や、長歌二首の連作的構成、中国文学の影響などについて考える。	稲岡耕二
12	天智・天武の皇子女（一）	大津皇子・大伯皇女・穂積皇子・但馬皇女の作品を読む。	同　　上
13	高市黒人 —旅の歌の系譜—	旅の歌を多く残した高市黒人の作品を読み、人麻呂と比較しつつその特徴を探る。	同　　上
14	天智・天武の皇子女（二）	長皇子・弓削皇子・紀皇女・志貴皇子の作品を読み、その詠風の特色を探る。	同　　上
15	宴とみやび —長意吉麻呂・大伴田主—	人麻呂より少し遅れて宴席の異才として活躍した長意吉麻呂の物名歌、応詔歌などを読み、その特徴を理解するとともに、風流士問答で知られる大伴田主と石川郎女との贈報歌を読んで、みやびへの志向の深まりを探る。	同　　上

＝和文古典Ⅱ＝(R)

―王朝の文学―

〔主任講師：秋山　虔（東京女子大学教授）〕

全体のねらい

400年にわたる平安王朝の文学の主たる担い手は平安京の貴族たちであったが、彼らによって創出された諸形態の文学の高度の達成は、後世に規範的意味をもちつづけ、日本的美意識の源流となった。そうした王朝文学の形成・展開の姿をさまざまの視角から追求する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	王朝文学の始発	前代の遺響　桓武新政　延暦の遣唐使　唐風謳歌　菅原道真	秋山　虔（東京女子大学教授）
2	『古今集』とその時代	『万葉集』以後の和歌　平安初頭の天皇と和歌　興福寺の法師の長歌―和歌の衰微　宮廷圏外における和歌　漢詩人にとっての和歌　藤原良房の役割　六歌仙　六歌仙以後の歌人と和歌　宮廷詩としての和歌の復活　和歌と漢詩　延喜の治世と『古今集』の成立　『古今集』仮名序　撰者達とその歌風　『古今集』の組織・内容	久保田　淳（東京大学教授）
3	物語文学の誕生―『竹取物語』と『伊勢物語』―	物語文学の誕生　『竹取物語』の成立と口誦伝承　『竹取物語』の創造性　漢文伝と物語文学　歌がたりと歌物語　『伊勢物語』の成立　歌物語の衰退	秋山　虔
4	日記文学の成立と展開―『土佐日記』と『蜻蛉日記』―	日記と日記文学　『土佐日記』―仮名文と女筆仮託　『土佐日記』にこめられた心　『蜻蛉日記』の世界と成立事情　古物語の超克としての身の上の日記　女流日記の諸作品	同上
5	虚構物語の成熟と基盤	物語の氾濫　物語は女性の心を慰めるもの　『うつほ物語』の世界と主題　『うつほ』物語の成立と作者　『落窪』物語の趣向	同上
6	『後撰集』、『拾遺集』の位置	『後撰集』の成立　『後撰集』成立の背景　『後撰集』の特色　梨壺五人の和歌に対する意識　物語的傾向　歌物語・説話集との関わり　花山院文学園と『拾遺集』　『拾遺集』と『拾遺抄』　『拾遺集』の内容　万葉の古歌の意味　平明率直な歌風　和歌表現の可能性への模索　三代集の意義	久保田　淳
7	清少納言と『枕草子』	『枕草子』の成立事情　『枕草子』の特異性　中宮定子付の女房・清少納言　清少納言と中関白家の風儀　『枕草子』とその政治的背景　美の世界の自立	秋山　虔

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	紫式部と『源氏物語』の世界(一)	紫式部の生年・家系　紫式部の才質　紫式部の結婚、夫との死別　想像世界の理想像・光源氏　光源氏の人生の始発　好色者としての光源氏　光源氏とその准拠　『源氏物語』第一部の結末	秋山　虔
9	紫式部と『源氏物語』の世界(二)	宮仕え女房・紫式部の孤独　『源氏物語』創作の続行と第二部の世界　「宇治十帖」の世界と到達　『源氏物語』はどう読まれたか　紫式部の晩年	同　上
10	『源氏物語』以後	『源氏物語』の屹立　『源氏物語』と『更級日記』　『更級日記』定家本の奥書　『夜の寝覚』　『浜松中納言物語』　『狭衣物語』後後期物語の位相　短編物語の傑作	同　上
11	女流歌人と『後拾遺集』	一条朝の歌人群像　和泉式部と赤染衛門　和泉・赤染優劣論　その他の女流歌人達　後冷泉朝の和歌　白河天皇における政治と和歌　『後拾遺集』撰者藤原通俊　『後拾遺集』の部位の特色　『後拾遺集』の作者と作品　『後拾遺集』への批判とその意義	久保田　淳
12	和歌文学の革新―『金葉』『詞花』『千載』の時代―	白河院政の時代・社会　堀河朝の和歌　百首歌の方法と堀河百首・永久百首　文学遊戯から文学批評へ　和歌伝統の回顧　『金葉集』の成立　『金葉集』の新傾向　崇徳院と和歌　『詞花集』の成立　「武者の世」の始まり　『千載集』の成立　『千載集』の作者と作品	同　上
13	歴史物語の諸相―『栄花物語』と『大鏡』―	『源氏物語』から歴史物語へ　『栄花物語』の内容と特質　後宮中心の宮廷史　『大鏡』―紀伝体の歴史　＜昔語り＞と＜言談＞の場と伝統　戯曲的構成と＜語り＞の方法　『大鏡』の歴史意識と表現　文体	多田一臣 （千葉大学助教授）
14	説話文学の誕生―『日本霊異記』―	神話・伝説から仏教説話へ　『日本霊異記』―＜集＞の論理と撰述意図　歴史意識と自土意識　＜信＞の構図　私度僧の活動と『日本霊異記』　景戒の危機意識	同　上
15	『今昔物語集』の世界	『今昔物語集』の成立まで　『今昔物語集』とその組織　院政期の意味　秩序と反秩序　話末評語の矛盾　＜語り＞の様式　文体の問題　文学史的意義	同　上

＝和文古典Ⅲ＝(R)

―中世文学の展開―

〔主任講師：久保田　淳（東京大学教授）〕

全体のねらい

四百年に及ぶ中世文学の展開を、各時期の政治的社会的事件、文化思潮などと関連づけながら、具体的作家や作品に即して、明確に跡づける。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	王朝から中世へ	内乱と平安京―新都市鎌倉の出現　中世文学の始発　『梁塵秘抄』の成立と後白河院　『梁塵秘抄』の世界　『今鏡』の乱世に対する意識　『水鏡』の意味するもの	久保田　淳（東京大学教授）
2	新古今時代Ⅰ	新古今時代の範囲　西行の生涯　藤原俊成の生涯　西行と俊成の文学　九条家と新進歌人達　後鳥羽院歌壇の形成　『新古今和歌集』の成立　新古今歌人の方法	同　上
3	新古今時代Ⅱ	藤原定家の文学活動　その他の新古今歌人　藤原実朝と『金槐和歌集』　承久の乱　『新勅撰和歌集』と『百人一首』　法然・親鸞　明恵・道元　日蓮・一遍	同　上
4	鴨長明とその周辺	隠者たち　長明の出発期　数寄者として　新古今時代　草庵生活　『方丈記』の成立　源泉　『無名抄』　『発心集』　『宝物集』と『閑居友』	三木紀人（お茶の水女子大学教授）
5	軍記物語の世界Ⅰ	転換期の歴史意識　軍記物語の成立　『保元物語』の特質とその世界　『平治物語』の特質とその世界	栃木孝惟（千葉大学教授）
6	軍記物語の世界Ⅱ	『平家物語』の成立と展開　序章の意義　悪行者清盛の形象　平家嫡統の人人―重盛と維盛　勇将の生と死―義仲と義経　『平家物語』の作者　『承久記』の位置	同　上
7	説話の時代	説話の時代　開書類と『古事談』　『宇治拾遺物語』　貴族説話集のさまざま　『十訓抄』　『古今著聞集』　その後の仏教説話集　無住の著述　南北朝期以後	三木紀人

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	京と鎌倉	京と鎌倉　旅と文学　『海道記』と『東関紀行』　『十六夜日記』と『うたたね』　『信生法師集』と『飛鳥井雅有日記』　女流日記の特質　『弁内侍日記』と『中務内侍日記』　『とはずがたり』の世界　『竹むきが記』	三角洋一（東京大学助教授）
9	南北朝動乱期の文学	両統迭立から南北朝動乱へ　『神皇正統記』と『梅松論』　『増鏡』の王朝文学的傾向　『太平記』の成立とその世界　歌の家の分裂　京極派和歌と『新葉和歌集』	久保田　淳
10	兼好とその前後	兼好の登場　出自と環境　遁世生活　歌壇の中で　『徒然草』の成立　序の問題　『徒然草』の展開　源泉　現世をこえるもの　兼好の晩年　死とその後　『一言芳談』　二条良基	三木紀人
11	中世芸能の世界Ⅰ	中世芸能　歌謡の流れ　今様　『梁塵秘抄』　早歌　早歌の題材・出典　早歌の展開　小歌の時代　小歌　狂言の小歌	橋本朝生（山梨大学助教授）
12	中世芸能の世界Ⅱ	能・狂言の成立　能の形成　狂言の形成　能の作品　能作の流れ　花と幽玄　狂言の作品　狂言の素材　共感の哄笑　曲舞・幸若舞曲　舞曲　舞曲の素材	同上
13	物語の変貌	中世の物語の概観　『無名草子』と院政期の物語　『松浦宮物語』　『風葉集』と鎌倉期の物語　『石清水物語』と『我が身にたどる姫君』　改作の物語　『住吉物語』　『風葉集』以後の擬古物語　擬古物語から御伽草子へ　御伽草子の名称と特色　公家物の御伽草子　宗教物　武家物　『曽我物語』と『義経記』　庶民物・外国物・異類物	三角洋一
14	中世の心と言葉	古代語の伝統　口語体の発生　東ことばの混入　近代語論理の発展―条件表現　近代語論理の発展―格の意識　まとめ	山口明穂（東京大学教授）
15	中世から近代へ	戦国乱世から家康の天下統一まで　文化の地方伝播と地方都市の形成　欣求浄土から生の肯定へ　俳諧の連歌　狂歌の成立と展開　歌謡・芸能における近世への移行	久保田　淳

＝ 和 文 古 典 Ⅳ ＝（R）

― 近 世 の 文 学 ―

〔主任講師：村松友次（東洋大学短期大学教授）
清登典子（放送大学助教授）〕

全体のねらい

徳川幕藩体制のもと、商品経済の発達と識学層の増大に支えられて花開いた近世文学。その形成と展開の種々相を、中心的な作家・作品を取り上げながら検討してゆく。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	近世文学の胎動と仮名草子	表現力に注目しながら、近世文学の胎動期を眺め、その背景、特質などについて考える。	篠原 進（青山学院大学助教授）
2	浮世草子と西鶴(1)	西鶴が従来の文学をどう踏まえ、変形、発展させていったかを検証し、彼の浮世草子の本質について考える。（天和・貞享期の作品を中心とする）	同 上
3	浮世草子と西鶴(2)および西鶴以後の浮世草子	元禄期の西鶴がどのようにテーマを追い、その世界を深めて行ったかを考える。また、西鶴の拓いた浮世草子というジャンルを、以後の作家（江島其磧など）たちがどう受けとめ、都市の文学という傾向を強めて行ったかを跡付ける。	同 上
4	近世初期俳諧	貞徳は中世の末に流行した俳諧之連歌にある程度の規範を受け、庶民の教養の資とした。これを貞門俳諧と呼ぶ。この中から宗因を中心とする談林俳諧が興り、その談林俳諧の中から芭蕉一派のいわゆる蕉風が興る。その推移を辿って蕉風出現の意義を考える。	清登典子（放送大学助教授）
5	芭蕉の世界(1)	蕉風俳諧は彼の晩年10年間に三変する。談林から脱皮したての『冬の日』『春の日』『眺野』時代、円熟期の『ひさご』『猿蓑』時代、軽みの『炭俵』『続猿蓑』時代である。この蕉風三変のあとを辿り、特に円熟期の俳風に焦点をあてる。	村松友次（東洋大学短期大学教授）
6	芭蕉の世界(2)	芭蕉は散文においても革新を試みた。俳文の代表に「幻住庵記」があり、紀行文の代表に『おくのほそ道』がある。芭蕉は文芸（ことば）を虚の営みと見ており、虚に入って実に至るものと考えた。「幻住庵記」にも『おくのほそ道』にも多くの虚構がある。その意味を考えてみたい。	同 上
7	文人の時代 ―文人の成立と徂徠学―	近世儒学の本流であった朱子学と、それへの批判から生まれた古義学や徂徠学との相違 そしてそうした儒学思想の変遷を背景に登場した文人と呼ばれる人々の文学と生き方を概観する。	揖斐 高（成蹊大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	近世和歌と国学	堂上派から古学派、そして江戸派・桂園派の時代さらに幕末期の個性的な歌人たちの登場へと展開してゆく近世和歌の大きな流れをおさえ、そうした「歌」をどう考えるかということと深く結びついて成立・展開していった国学の問題点を併せて解説する。	揖斐　高
9	前期読本と秋成	都賀庭鐘・建部綾足らの諸作、秋成の『雨月物語』『春雨物語』をふれつつ、前期読本の成立・展開の様相をうかがい、その特質を考える。	長島弘明 （名古屋大学助教授）
10	俳諧と蕪村中興期	後世、芭蕉と併称され、近代俳句にも大きな影響を与えた与謝蕪村の作風の特色を、当時の時代思潮、俳壇動向ともからめて考えてゆく。 その大衆に密着する業俳と、趣味として俳諧を楽しむ富裕な遊俳とが生れて来た。	清登典子 （放送大学助教授）
11	化政期俳諧と一茶	俳諧の大衆化に伴って盛行を見た月並俳諧につき検討する。又、その時代にあって人間味ある特異な作風を示した小林一茶の人と作品につき、時代背景とかかわらせながら見てゆきたい。	村松友次
12	狂歌・川柳	近世初・前期の上方中心の狂歌と、天明の江戸狂歌の質的な相違を考える。 連句が解体され、独詠句化が推し進められる中で誕生した新文芸「川柳」。その発生と展開の様相を概観する。	長島弘明 清登典子
13	江戸戯作の世界(1)	草双紙と総称される赤本・黒本・青本・黄表紙・合巻の流れを、内容の移り変わりの他に、作者、画師、板元、さらに読者層の視点から追い、文学の大衆化を考える。	板坂則子 （群馬大学助教授）
14	江戸戯作の世界(2)	酒落本・滑稽本・人情本をとりあげ、戯作という呼称の意味をとらえ、戯作者の生涯を平賀源内・山東京伝・柳亭種彦らを代表として紹介し、文学とそれに加えられた出版統制の歴史をながめる。	同　上
15	後期読本と馬琴	山東京伝と曲亭馬琴の読本における競争と、その後の馬琴による士太夫の読み物としての読本の完成を、代表作『南総里見八犬伝』を中心に追い、後期読本の特徴を考察する。	同　上

＝近　代　文　芸　Ⅰ＝(R)

〔主任講師：紅野敏郎（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

日本の近代文学における成熟期―１９１０年代―の作家（漱石・鷗外・荷風・谷崎・志賀・有島・藤村・秋声・芥川・啄木ら）と時代との関連、主要作品の構造と分析を行なう。１９１０年代の自然主義・反自然主義との対応、作家の芸術と実生活のかかわりを把握。また「白樺」「早稲田文学」「新思潮」「青鞜」など主要雑誌の検討

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	「白樺」の出発 －大正文学の－ 発　端　(1)	武者小路実篤・志賀直哉・有島武郎らの「白樺」の前史と「白樺」初期の特色の究明。明治の「公」に対する大正の「私」の意識。文学と美術との接点。志賀の初期の日記・ノートなどの検討。「お目出度さん」と「かんかん虫」と「網走まで」の作品分析。	紅野敏郎（早稲田大学教授）
2	「三田文学」をめぐって －大正文学の 発　端　(2)	「三田文学」創刊号における永井荷風の「紅茶の後」の魅力と荷風の文学意識の検討。大逆事件における荷風を中心とする「三田文学」「スバル」関係者（佐藤春夫ら）の反応。「早稲田文学」との対比。パンの会の動向（これも美術と文学とが関連）。	同　上
3	谷崎潤一郎の出現 －大正文学の－ 発　端　(3)	谷崎潤一郎の最初期の戯曲と小説の分析、「刺青」と「秘密」などが中心。潤一郎と漱石とのかかわり―とくに「門」をめぐって―。「白樺」との差（「白樺」の場合は漱石では「それから」が軸となる）	同　上
4	啄木と大逆事件 －明治の終焉－	啄木の代表的日記「ローマ字日記」の分析。「九月の夜の不平」から「　子と口笛」に至る啄木の大逆事件への反応の点検。白秋の「思ひ出」との比較。鷗外の大逆事件への反応との比較。啄木と現代（寺山修司などを含めて）。	同　上
5	漱石文学の魅力 －「夢十夜」「それから」「門」を中心に－	１９１０年前後の中期の漱石の作品分析。とくに「夢十夜」における作品の意味づけ。漱石とその門下生及び後進の文学者との関連、漱石の初期作品（「　　」や「草枕」など）と中期作品の内容と文体の相違。	同　上
6	漱石文学の魅力 －「道草」と「明暗」を中心に－	漱石の晩年の二つの長編小説をこまかに分析し、一般によく知られている他の　作品よりさらに意味があることに力点をおく。	同　上
7	「暗夜行路」の検討－志賀文学の特色－	「暗夜行路」のプラスの評価とマイナスの評価をめぐって、作品の魅力をさらに精細に検討する。最初は「序詞」と前篇の構造、伏線、文体の面からはじめる。その前身である草稿の類（私小説「時任謙作」といわれているもの）も検討の材料に用いる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	「暗夜行路」の検討－志賀文学の特色－	後篇の展開と「大山」体験の意味をさぐる。数多くの志賀研究史とつきあわせ、この作品の影響と受容の歴史もあわせて考える。	紅野敏郎 （早稲田大学教授）
9	「或る女」の検討－有島文学の特色－	「暗夜行路」と対比しつつ、有島の「或る女」の構造を分析する。前後篇をあわせて行ない、この作品の時代背学となった明治３０年代についても考えていく。また「白樺」に連載した前篇にあたる「或る女のグリングス」との対比も行なう。	同　上
10	藤村と秋声－「家」と「あらくれ」をめぐって	第二次「早稲田文学」の特色を検討しつつ、「家」の構造と「あらくれ」（「新世帯」など他の作品も含む）の構造を比較検討する。自然主義文学の特質、とくにその執拗なねばり強い人生とのかかわりに力点をおく。	同　上
11	花袋と白鳥－「田舎教師」と「何処へ」をめぐって	花袋における人生の苦劇と「田舎教師」との関連。回想集「東京の三十年」も材料に用いる。白鳥の人生観と「何処へ」との関連。明治３０年代の青年と４０年代の青年の意識の差に注目。白鳥の回想集「自然主義文学盛衰史」も材料に用いる。	同　上
12	文学史における大正5年（1916）の意味－近代と現代の接点－	鷗外の晩年の歴史小説の検討。ついで宮嶋貞夫の「坑夫」、中條百合子の「貧しき人々の群」をあわせ眺め、白樺派、　美派の全盛、自然主義文学者の執拗な奮　をも視野に入れ、漱石の死（１２月９日）でしめくくられる大正５年の　層的な位置づけと行なう。	同　上
13	「青鞜」「寄蹟」「近代思想」の問題点－冬の時代と女性運動－	平塚雷鳥らの「青鞜」の出発と展開。広津和郎らの「寄蹟」の出発と特質。大杉栄、荒畑寒村らの「近代思想」の冬の時代における仕事の意味。堺利彦の「へちまの花」、土岐哀果（善　）の「生活と芸術」にも言及。	同　上
14	芥川文学の特質　－短編小説－の問題点	独歩や直哉を経て芥川において短編小説の魅力が発揮され、梶井基次郎・井伏鱒二らに引きつがれていく。初期の作品群を中心にする。第三次・第四次「新思潮」の検討もあわせ行ない、菊地覚・久米正雄・豊島与志雄らとの比較も考える。	同　上
15	「赤い鳥」「新しき村」「種蒔く人」の対比－ユートピアとプロレタリア文学－	鈴木三重吉の「赤い鳥」の運動、武者小路の「新しき村」の運動は同じ１９１８（大正７）年。この二つの根底にあったものをさぐり、ついで１９２１（大正１０）年よりはじまる「種蒔く人」の意味を探究する。	同　上

＝近　代　文　芸　Ⅱ＝(R)

〔主任講師：紅野敏郎（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

「近代文芸Ⅰ」で扱えなかった近代文学創出期の文学者坪内逍遙・二葉亭四迷・森鷗外・北村透谷・樋口一葉・国木田独歩からはじまる近代の短編小説の系譜、正岡子規・与謝野晶子・島崎藤村・北原白秋・斉藤茂吉・萩原朔太郎ら近代の詩歌を中心に活躍した人を作品の特質を追求する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	近代文学の出発 1 逍遙と二葉亭	逍遙の文学論「小説神随」と実作「当生書生気質」との関連と、逍遙の影響を受けた二葉亭の文学論「小説総論」と実作「浮雲」との関係を対照的に把握し、近代文学創出に際しての二人の文学者の同質と差異を探索する。	紅野敏郎（早稲田大学教授）
2	近代文学の出発 2 森鷗外	ドイツより帰国した森鷗外のドイツ土産三部作の一つの「舞姫」をとりあげ、その作品構造を分析するとともに、官僚としての森鷗外と文学者としての森鷗外の心理の二重性をさぐる。	同上
3	近代文学の出発 3 北村透谷	自由民権運動に参加し、やがて離脱、政治から文学への道を歩いた透谷のペンによる活動を検討する。とくに透谷の評論活動は「文学者」というものの基本姿勢を如実に示す。近代の文学者のなかで理想と現実の矛盾に悩み、自殺した最初の人。	同上
4	近代の短編小説 1 樋口一葉	一葉の「たけくらべ」「にごりえ」「十三夜」などをとりあげ、短編小説の切れ味の鋭さ、その魅力について言及。一葉の場合、西鶴の影響を受けた、テンポの早い雅文脈の文体、その物語性の展開について考察する。一葉の日記にも触れる。	同上
5	近代の短編小説 2 国木田独歩	詩から散文に移った独歩の資質、日記「欺かざるの記」と佐々木信子との恋愛、そのあと展開する短編小説「武蔵野」「忘れ得ぬ人々」「非凡なる凡人」「号外」「竹の木戸」などをとりあげ、独歩の短編の特質を検討する。	同上
6	近代の短編小説 3 正宗白鳥	読売新聞記者より作家に転じた正宗白鳥の初期の短編－「玉突屋」「塵埃」「五月蠅」などをとりあげ、自然主義文学者の皮肉な眼で見た人生の断片、それを描くつき　した手法について考察する。	同上
7	近代の短編小説 4 志賀直哉	「或る朝」のような日常生活のなかの不快から快へ切りかわる心理「清兵衛と瓢箪」に見られる子供の豊かな肉眼による美の発見とそれを圧殺する大人たち、その他「祖母のために」「正義派」「范の犯罪」「城の崎にて」「真鶴」など簡単無比な表現を技法について考察する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	近代の短編小説 5 井伏鱒二	処女作といわれている「山椒魚」や早稲田時代の友人とのかかわりを描いた「鯉」、また「屋根の上のサワン」はじめ、ユーモラスでかつ諷刺の利いた詩情を含んだ井伏作品の特質を考察する。	紅野敏郎
9	近代の短編小説 梶井基次郎	「青空」創刊号に載せた「檸檬」を中心に若くして亡くなった梶井の名作を分析、昭和の文学者たちにその短編の心象風景は大きな影響を与えた。	同上
10	近代の詩歌 1 正岡子規	俳句と短歌の本質的な改革を行なった子規の病床生活の実体とその実作を検討、あわせて子規のエッセイの持つ写生文の力について考察する。	同上
11	近代の詩歌 2 与謝野晶子	「明星」の史的位置づけと、晶子の「みだれ髪」を中心に、歌人としてのわくをはずれた豊かな才能や女性としての生きかたの迫力などにも言及する。「明星」のなかから啄木も、高村光太郎も北原白秋も木下杢太郎も生まれてくる。	同上
12	近代の詩歌 3 島崎藤村	北村透谷のあとを受け、自殺せずに泥にまみれながらも生きつづけた藤村の初期の詩集について考察する。とくに「若菜集」から「落梅集」に至る四つの詩集を吟味する。	同上
13	近代の詩歌 4 北原白秋	詩人と歌人を兼備、さらに童謡や散文活動など多面な才能を発揮した白秋の初期の詩集「邪宗門」「思ひ出」と、歌集「桐の花」をあわせて考察する。郷土柳河とのかかわりで、文学と郷里（出身地）との関連もここで考える。	同上
14	近代の詩歌 5 若山牧水と斉藤茂吉	子規や伊藤左千夫のあとを受け、「アララギ」の発展につとめ、処女歌集「赤光」をまとめた茂吉の生きかたとアララギ的写実の方法と九州日向より上京し、旅と酒を愛した若山牧水の流れるような自然のリズムを対比させる。	同上
15	近代の詩歌 6 高村光太郎と萩原朔太郎	光太郎の処女詩集「道程」の分析、また白秋の影響より出発した朔太郎の初期の歌集「ソライロノハナ」及び作表作「月に吠える」の検討。	同上

＝漢　文　古　典　Ⅰ＝（TV）

― 江戸時代後期の儒学 ―

〔主任講師：頼　惟勤（千葉経済大学教授）〕

全体のねらい

日本において作られた漢詩・漢文について、江戸後半期を取り上げて諸作品を講読し、関連事項に及ぶ。これによって、日本漢学の日本文化において占める役割りが若干なりとも解明できることを目指すものである。各回とも講義の糸口を原則として頼春水『師友志』から取り、兼ねてその人の諸作品と関連分野とに及ぶ。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	柴野栗山と赤壁会	柴野栗山（1736 － 1807）江戸昌平黌の儒官。寛政の学制改革に当った。享和2年10月の赤壁会の盛事を紹介する。	頼　惟勤（千葉経済大学教授）
2	尾藤二洲と白楽天の詩	尾藤二洲（1747 － 1813）昌平黌の儒官。晩年に白楽天の詩を好み、同僚の古賀精里との間で応酬した。その間の経緯を概観する。	同　上
3	古賀精里と通信使	古賀精里（1750 － 1817）昌平黌の儒官、肥前・佐賀の出身。曽て林述斎に従い、対島に赴き、朝鮮通信使に応接した。	同　上
4	岡田寒泉と実学の実践	岡田寒泉（1740 － 1816）昌平黌の儒官。のち関東の諸郡に出て代官となった。実学とは本来、実践躬行の学問の意味で、矢子学がその代表である。寒泉の学問がすなわちそれである。	同　上
5	服部栗斎と江戸市井の漢学	服部栗斎（1736 － 1800）江戸の麹湲書院の主。麹湲書院そのものは純粋に市井の漢学塾ではないが、そのような塾での基本的な教養がどのようなものであったかを取り上げる。	同　上
6	若槻幾斎と京儒	若槻幾斎（1744 － 1826）京の聖護院村に住み、その学行が幕府当局に認められて表彰されたこともあったという。	同　上
7	中井竹山と懐徳堂	中井竹山（1730 － 1804）大坂の懐徳堂の主。弟の履軒も著名な学者で、この兄弟の学問は広般な影響を世に与えた。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	葛子琴と混沌詩社	葛子琴（1739 － 1784）大坂の医にして且つ詩人。片山北海が主催する混純詩社の中で、その才名を称せられた。	頼　　惟　勤
9	趙陶齋と黄檗僧	趙陶　（1713 － 1786）長崎に生れる。父は唐人。黄檗僧となり、還俗後、江戸・大坂・堺に転住。兼ねて全国を旅行した。僧侶の漢学に対する寄与は甚だ大きい。また道教的なものも案外に日本文化の中に侵透しているといわれる。	同　　上
10	飯岡義齋と家庭教育	飯岡義齋（1716 － 1789）大坂の儒医。曽て石門心学（大坂の尊性堂）を修めた。その子女に対する教訓は極めて熱心であった。	同　　上
11	菅茶山とその周辺	菅茶山（1748 － 1827）備後・神辺の詩人。京あるいは江戸において儒者文人と広く交った。詩人であると同時に、『福山志料』の纂修に関予し、随筆の分野でも著名である。	同　　上
12	高芙蓉と書画篆刻	高芙蓉（1722 － 1784）江戸時代の篆刻を芸術的水準にまで高めた。このころ漢の金印が出土したこともあって、漢の方寸印に倣った印が作られた。	同　　上
13	平賀中南と赤穂義士	平賀中南（1722 － 1792）安芸出身の儒者。大潮に学び、のち京坂に住んだ。『天野屋利兵衛伝』の刊行にも言及する。	同　　上
14	長久保赤水と地理天文	長久保赤水（1717 － 1801）水戸藩彰考館の学者。『大日本史』の地理志を纂修した。そのころの天文・地理・医学にも触れる。	同　　上
15	樺島石梁と親藩の学問	樺島石梁（1754～1827）久留米藩儒。細井平洲の門人・平洲は尾張藩に属する。紀州藩には礼制の研究者、あるいは文献学者が出た。	同　　上

＝漢　文　古　典　Ⅱ　＝(R)

――中国小説史への視点――

〔主任講師：大塚秀高（埼玉大学助教授）〕

全体のねらい

中国は三千年に及ぶ悠久の歴史を持っており、小説の歴史もこれに応じて長い。しかし同じ漢字を使いながら、小説という言葉の意味内容は時に応じて違いを見せる。この小説概念の変遷を、小説がそれに立脚した物語の伝統に目配りしつつ、春秋戦国の時代から清代まで追跡し、かつ中国小説の日本への影響についても触れたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	小説と物語 史家と方士たち	萬言と小説　小説と小説家　史官と方士　史記と漢書　鴻門の会　陸賈と楚漢春秋　史書と演義小説　春秋と国語　方士の語った小説	大塚秀高 （埼玉大学助教授）
2	志怪から伝奇へ 史家と読者に於ける変化	志怪と五行・　緯思想　類書と古小説鈎沈　捜神記と干宝　曹丕と劉義慶　サロン文人と物語の伝統　伝寄の誕生　古鏡記と遊仙窟　物語の場	同　上
3	仏教と説教 応験記と遊行僧	応験記の成立　応験記的性格の志怪　金剛経応験記の流行　唐臨と冥報記　宋・明に於ける金剛経応験記　洪邁と夷堅志　鬼国母　文芸の担い手としての僧侶　転変と転経　説経と文芸	同　上
4	二都の夢 新たな「小説」の誕生	志怪にみる仏教の影響　六朝貴族社会の崩壊　俗講と市人小説　京と臨安　東京夢華録と夢粱録　瓦子と勾欄　説話四家　講史書と「小説」緑　新話と醉翁談録	同　上
5	神話の没落 から五通へ	霊怪の門庭　汀州と山魈　独足の山魈　山海経図　夔一足鳥陽・　巨人　山都と猿　畢方・水客・その他　淫神五通　財神五通	同　上
6	類書から通俗類書へ 伝奇小説の変遷 そ　の　一	種本と話本　文言の伝奇と白話の伝奇　宋代の小説集　二つの醉翁談録　鴛鴦灯と紅　密約張生負李氏娘　類書と通俗類書　明代後期の通俗類書　伝奇小説の長篇化	同　上
7	短篇小説だった 水滸伝 長篇小説の育たぬわけ	水滸伝成立史　梁山泊と百八人の好漢　宣和遺事　水滸の盗賊たち　好漢の銘々伝　水滸伝と「小説」　梁山に上れなかった好漢たち　白話小説と作者	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	法家と小説家の間 公案概念の変遷	酔翁談録の公案　明末の公案小説集　判決から捜査へ　疑獄集と折獄亀鑑　棠院比事と棠院比事物語　捕物帳と余象斗　名裁判官物語　万歴時代	大　塚　秀　高
9	包龍図の登場 講唱文芸のとりで	民衆に愛された包公　包公の実像と虚像　包公を巡る民間信仰　包公説話と「小説」　有名無名の判官たち、宝をめぐる物語　説唱詞話から説書へ　公案小説から侠義小説へ	同　　上
10	幽霊さまざま 伝奇小説の変遷 そ　の　二	元末明初　剪灯二話愛愛しの幽霊　祟る幽霊　王魁負心と灰骨匣　自刎と怨念　彷徨える幽霊　取殺す論理と取り締まる論理　鴛湖誌余雪窓談異と幽怪詩譚	同　　上
11	話本から小説へ 輯佚と創作	洪　の清平山堂　熊龍峯四種小説と通俗類書　発跡変泰話本と紅白蜘蛛記記　三言百二十篇の素性　馮夢龍　柳七官人像の変化	同　　上
12	伝奇から小説へ 貞潔と女性の運命	劉小官雌雄兄弟　男装の目的　女性の孝と貞　劉方三義伝　梁山伯と祝英台　心堅金石伝　霞箋記に於ける改悪　嫌疑と恥辱	同　　上
13	白蛇伝の登場 民衆のはぐくむもの	馮夢龍の白蛇伝　西湖の怪の物語　白蛇の物語　嫉妬と蛇　白蛇伝の成立　白娘子の解放	同　　上
14	金瓶梅から紅楼夢へ 才子佳人小説と佳人の男装	中国小説史上の才子佳人小説　長篇伝奇との関係　才子佳人小説と金瓶梅　金瓶梅と四大小説　万暦の気風　春秋配と呉江雪　佳人の男装風流配と鴛鴦譜　紅楼夢　文康の児女英雄伝	同　　上
15	さまざまな小説 清末小説に至る流れ	杜騙新書　照世杯　応挙を題材とする小説　受験百態　儒林外史　李宝嘉の官場現形記　劉の老残遊記　李漁の小説　清代小説の多様性	同　　上

＝西　洋　古　典　学＝（R）

〔主任講師：久保正彰（東京大学教授）〕

全体のねらい

西洋古典とは、古代ギリシャ・ラテンの文物の漠然とした総称であるが、今回は、“古典”という規範を設けた古代ローマの修辞学の要請を出発点として、修辞とは弱者の立場擁護を主眼とすることを明らかにし、古典文学の中でも古典であるギリシア文学の中に、ヒューマニズムの母体ともいうべき修辞論の展開を具体的に辿ってみたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	ギリシア・ラテン文学の規範とその文学史的背景ー修辞学の要請と人間性のかかわりについてー	古代ギリシア・ラテンの文学作品の中から“古典”の名に値するものを選定し、それが後世に伝えられるように多大の貢献をとげたのは、ローマの弁論家キケロとクィンティリアーヌスであるが、修辞学が、“古典の規範”とした事柄を、修辞学の歴史の中に求めてみたい。	久保正彰（東京大学教授）
2	オーメーロス叙事詩「イーリアス」の修辞学：強者の論と弱者の論	古代の修辞学者が最高の師と仰いだのは、叙事詩人ホメーロスであるが、「イーリアス」の物語を織りなす強者の論、弱者の論を検討しながら、嘆願や説得の言葉をつうじて作者が示す人間性理解を描きだしてみたい。あわせて、叙事的物語における神々の役割も。	同　上
3	ホーメロス叙事詩「オデュッセイア」の修辞学：弱者の論理	「オデュッセイア」は姉妹篇「イーリアス」とは対照的に、弱い者や立場を失った者の受難の物語であって、計略や偽りも少くないが、また人間の心理を深く鋭く突いたやりとりも多い。弱者はいかにして強者の心をとらえ得るのか。修辞・弁論の力は如何にして生ずるか。	同　上
4	ヘーシオドス：詩の女神ミューズと弁論・修辞の道	詩人ヘーシオドス（前7世紀初）の生きた時代は、強者と弱者の現実的葛藤が露骨に現れた。ヘーシオドスは弱い立場に立つ人間を若しめている世界の成立縁起を説き、その世界にも残されている正義と秩序について語り、弱き立場から放たれる詩人の言葉の価値を示す。	同　上
5	叙情詩人の自己発見ー弱者の論を新しい形式にー	貴族と民衆、富者と貧者、支配者と隷属者などの相剋が続いた時代（前6世紀）に、政治家も軍人も、また女性も、弱い自己に直面する機会が多く、その都度省みて感懐を記したが、かれらの創出した叙情詩の多様なジャンルを、弱論・強論の修辞学の見地から検討したい。	同　上
6	行為と言葉ー運動競技の祝勝歌の修辞学ー	オリュンピア競技を初め、運動競技祭は、古代ギリシア人の発明創始になるが、その事績を称える勝利歌もギリシアに生れたものである。代表的詩人ピンダロスの詩から、勝利を語る修辞学を紹介し、競技の行為と讃歌の言葉を対比して語られる詩人の主張を考える。	同　上
7	ペルシア戦争の文学ー強者対弱者のパラドックスー	兵力、軍資金いずれの面でも圧倒的強者であったはずのペルシア帝国は、何故弱小ギリシア諸那に敗れたのか。歴史の真相もまた、強者の論ではなく、弱者・敗者の論をつうじて明らかにされることを、アイスキュロスの『ペルシアの人々』とヘーロドトス『歴史』は語る。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	諸悪の根源から 人間愛へ ープロメテウス の修辞学ー	神々の火を盗んで人間に与えたプロメーテウスの神話は、諸悪の根源を説明するものであったが（上記第4話）、非劇詩『しばられたプロメーテウス』では、人間愛に燃えた犠牲的行為であったかの如くに語られる。この神話の変容を生みだした修辞技巧を検討してみたい。	久保正彰
9	悲劇構造の修辞学 ーオイディプース の場合ー	真の自分自身に帰っていくことの難しさは、まさに最大の非劇によってのみ現しうる。それをソフォクレースの二つのオイディプース劇は告げているが、人間の最大の武器は、それ自体人間の最大の欠陥であり、また人間がもちうる真の力は、弱者の力に外ならないとする逸話的修辞を演劇技法の問題として考究してみたい。	同　上
10	ツーキュディデースの政治史 ー人間の本性と 文　化ー	『ペロポソネーソス戦史』は、文字通り弱者と強者の共存・葛藤・角逐・内乱・戦争・共倒れの過程を活写しているが、「メーロス島事件」における弱者の論・強者の論の対決を中心として、『戦史』が綴り出す人間の本性と文化の関わりを検討してみたい。	同　上
11	イソップ偶話 ー弱者・強者のパラダイムー	弱者の論・強者の論のパラダイムは、英雄悲劇や政治論争の場のみに限られて用いられたものではなく、底辺の民衆の英知をも彩るものであった。今回はトラーキア生まれの奴隷アイソーポス（イソップ）作といわれる偶話の中から、人生の苦汁として語られている弱者の論る検討する。	同　上
12	医師と患者 ーヒッポクラテースの弱者と強者ー	ヒッポクラテースの医学書集は、古代ギリシアに於ける経験的科学の成立を物語る貴重な文献であるが、同時に強大な自然力と、病める弱者との間に立つ、医学者の問題を厳粛な文章で綴った証言である。弱者の側に立って病理を解明する科学の論理を検討したい。	同　上
13	弱者の絶望 ーエウリーピデースの女性たちー	社会的不平等、戦争、内乱の時代にあって最大の苦しみを負わされたのは、老若の女性であるが、その立場に立って弱者の訴えを悲劇の主題として取上げてきたのはエウリーピデースである。代表的作品に現れる女性という弱者の絶望の修辞を紹介したい。	同　上
14	弱者の喜劇 ーアリストファネースの逆説的勝利ー	弱者であっても名案・頓知に恵まれ、実行力があれば、どんな強者だって怖くはないぞ　ー現実社会には有りえないような逆説的な着想は、アリストファネース喜劇の生命であり、強者を凌ぐ弱者の論は、空想の世界の中で実を結ぶ。喜劇の修辞とは何かを考えてみたい。	同　上
15	ソークラテースの弁明 ー修辞的伝統の勝利ー	修辞学を見せかけの術として鋭く批判したのは哲人ソークラテースであったが、しかし人間という弱きものの内にある真の力を実践的に説き続け、弱者の論に一命を賭したのもソークラテースである。ソークラテースの弁明を、ギリシア的修辞の精神的勝利としたい。	同　上

＝日　本　語　教　授　法＝（ＴＶ）

（主任講師：宮地　裕（帝塚山学院院長）
　　田中　望（国立国語研究所日本語教育センター・日本語教育研修室長））

全体のねらい

外国人に対する日本語教育の振興は、社会的要請になってきたといってよいが、まだ日本語教育に関する知識は中等教育における英語教育あるいは一般に外国教育を反省するための契機となる。この講座では、日本語教育の方法とその裏付けとなる理論について、日本語教育を志望する学習者（実習生）の視点に立って、具体的に解説する。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
1	日本語教育とは何か	実際の日本語教育の現場を見学することをてがかりとして、日本語教育に関する概括的な解説を行う。教育機関の種類、国内・海外の現状、その抱える問題点などをとりあげる。	宮地　裕（帝塚山学院院長） 田中　望（国立国語研究所日本語教育センター・日本語教育研修室長）
2	授業の実際 －初級・1－	以下第7回までは、初級の日本語教育について、教育実習生の過程を追いながら解説をすすめる。この回は、実習を指導する教員のモデル授業を見学し、事前の準備などについて説明する。	同　上
3	授業の計画 －初級・2－	実際に授業の準備を進める実習生に対し、教授計画のたてかた、教材分析の方法などについて解説する。	同　上
4	教室活動の種類 －初級・3－	教授計画にとりあげられた各種の教室作業について、その具体的方法、注意点などを、実習生の模擬授業をとおして解説する。	同　上
5	教育実習 －初級・4－	実習生の教育実習を材料に、教育活動の現場での問題点、注意点などを解説する。また、教育活動の記録のとりかたなどなど、授業後の反省の材料となる資料を収集する。	同　上
6	教育の評価・反省 －初級・5－	実習の際の授業記録をもとに、教育活動の評価を行い次の授業に生かすための反省作業の実際を紹介する。	同　上
7	まとめ －初級・6－	初級の日本語教授法について、ここでとりあげたもの以外の方法を紹介し、それぞれの長所・短所を比較することによって、初級の日本語教育のまとめを行う。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	日本語教育の多様性	日本語教育には、留学生など一般外国人に対する教育のほかに海外帰国子女、中国帰国者、ベトナム難民などに対する第２言語教育としての領域がある。ここでは、中国帰国者に対する教育を紹介し、日本語教育の多様性を説明する。	宮地　裕 田中　望
9	初級教育との相違点 －中・上級・１－	以下第14回までは中・上級の日本語教育について、初級と同じく実習生の学習過程を追いながら解説する。この回は、中・上級の教育機関を訪問し、初級の教授法との相異を中心に解説する。	同　上
10	授業の実際 －中・上級・２－	実習生の指導にあたる教員のモデル授業を見学し、指導上の注意点、事前の準備の方法などについて解説する。とくに、中・上級以上で問題となる流暢さを高めるための教育の方法について解説する。	同　上
11	授業の計画 －中・上級・３－	中・上級の教授計画のたてかたを中心に解説する。中・上級では、初級と異なり、聴解・読解などの技能別の授業を行うことが多いが、ここでは聴解をとりあげ、教材準備などの方法を紹介する。	同　上
12	教材の開発 －中・上級・４－	中・上級では、既成の教材ではなく、学習者に合わせて教員が自主作成した教材を使用することが多い。ここでは、中・上級の教室作業を紹介し、そこで使う教材開発・教材準備の実際について解説する。	同　上
13	教育実習 －中・上級・５－	実習生の教育実習風景をとりあげ、授業の展開など教育活動上の注意点を解説する。また、授業記録のとりかたも紹介する。	同　上
14	教育の評価・反省 －中・上級・６－	実習の際の授業記録をもとに、教育活動の評価・反省を行う。とくに、中・上級では準備した教材が適切であったかどうかが大きな問題となる。ここでは、実習生の授業をうけた外国人学習者の意見も参考にしながら解説する。	同　上
15	日本語教員の資質と能力	全体のまとめとして、日本語教育の必要性、現状、その問題点、今後の課題などを解説し、あわせて、そこで必要とされる教員の理想像を検討する。	同　上

＝歴　史　の　理　論＝（R）

〔主任講師：阿部玄治（放送大学教授）〕

全体のねらい

昔から多くの歴史書が書かれてきた。それらが示す歴史の特徴は何んであったかを探ることにより、今日歴史が問題とされている点を考えてみようとするものである。西洋の歴史を中心にして、歴史哲学よりは、歴史書の方により多く重点の貢をさくことにした。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	歴史の語義	歴史という用語は中国の「史」からでており史官の記述したものの意味だった。明治以降ヒストリの訳語として用いられた。歴史は過去の出来事、その出来事について書かれたものの意味、また歴史学、歴史記述等の意味にも広狭様々使われてい	阿部玄治（放送大学教授）
2	神話的段階の歴史	文字の発明以前には口頭の歴史というべき神話、伝説、歌謡などがあった。先史考古学は神話の中に反映した史跡を発掘している。天地創造神話は人間の起源の歴史的証明と言える。バビロン神話を例にして神話上の人物が神から人間に移り次第に文学的になる過程を探る。	同　上
3	歴史と文学	ホメロス叙事詩は文学でもあり歴史でもある。歴史として、ヴィコはこれを「神の時代」に次ぐ「英雄の時代」と規定した。ギリシアでは歴史は文学と共に芸術に属していた。長い間歴史には文学性が要求されていたのである。	同　上
4	歴史の誕生ヘロドトスの物語風歴史	ギリシアにおける歴史の誕生はイオニアのロゴグラフォイに始まり、ヘロドトスにおいて「物語風歴史」の頂点に達する。	同　上
5	教訓的歴史	トゥキュディデスとポリュビオスは史料批判に基づく正確な歴史を示すことによって読者に教訓を与えようとした。同じことが繰返されるという考えが教訓的歴史の基にあった。ルネサンス期の歴史家たちはこの教訓は歴史を規範としたのである。	同　上
6	世界史の成立	世界史は世界を一体として考察しうるようになったとき成立する。近代ではヨーロッパを中心としてランケ流の世界史がまず成立したが、古代では地中海世界の歴史がポリュビオスによってつくられた。世界史が成立すると統一的紀常説の必要が生ずる。	同　上
7	キリスト教の歴史観	中世に入って歴史は神学の奴隷となった。キリスト教が歴史の中にもちこんだ摂理の思想と時代区分の考えは、その後のヨーロッパの歴史に長く影響することとなった。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	アラブの歴史観	中世の時代にあって、西洋古典文明を継承し、ヨーロッパよりも文化的優位にあったアラブの文明は哲学・神学・科学の分野でめざましい発展を遂げた。その総合性の上に打ちたてられたアラブの歴史学の特色についていささか触れてみる。	福島保夫 （埼玉大学教授）
9	史料批判と史料の蒐集	ルネサンス期のヴァラのコンスタンティヌス寄進状を偽善とする批判は、宗教改革や印刷術の進歩と関連し、サン・モール派やボランディストの史料蒐集を刺戟し、歴史補助学や史料の外的批判を大いに進歩させた。	阿部玄治
10	史料の内的批判への道	キリスト教の歴史観から解放されねば史料の学問的な内的批判には進めない。17～18世紀は教会の支配からの自由を求めた時期であり、啓蒙の名のもとにそれが行われた。	同上
11	歴史における進歩	啓蒙時代に入ると人類は歴史の中で進歩するという思想が強くうち出された。テュルゴー、コンドルセー、カント、アダム・スミスにその例をみる。しかしフランス革命に失望した人々は中世をみなおし、ロマン主義歴史学が現れる。	同上
12	ランケとヘーゲル	19世紀の民族主義の勃興の中で、各国で公的機関による史料蒐集が行われるようになった。史料の内的批判によって真たる事実を探り出して叙述しようとするランケ史学が史学界に大きく影響する。他方歴史哲はヘーゲルにおいて歴史発展の大構想を示す。	同上
13	マルクス歴史学	マルクスの歴史学は摂理の社会主義的と言える。そこでは資本主義を打破する革命の必然性を社会法則の現れとして証明する。マルクスにとって社会法則は自然法則と同じような必然性をもつのである。	同上
14	マルクス死後のマルクス歴史学	マルクス理論のマルクス自身における曖昧さは、その死後の社会の推移と相まって様々の修正理論を生み出し、一貫性に欠けるものとなった。	同上
15	歴史家の方法論	自然科学と歴史学とを同一の方法論に基づいて統一的に考えるよりも、双方の違いを十分探り出して、歴史的認識のもつ内的矛盾を把握することが、歴史により貢献することになる。	同上

＝ 日 本 文 化 史 ＝（TV）

〔主任講師：笠原一男（放送大学教授）〕

全体のねらい

日本文化史にふくまれる文化は無数といえるほど考えられる。本講では、第一、日本古代の民間宗教ともいえる観音菩薩、地蔵菩薩、弥勒菩薩、阿弥陀如来、第二、連歌・俳諧、第三、民衆と政治権力と民衆宗教などを通じて、日本の社会に生まれ、育った文化をとりあげ、それぞれの歴史的背景のなかで日本文化の特色を考えたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	日本文化史序論	まずここでは、担当講師全員の座談の形をとって日本文化史の特色が論ぜられる。外国に学んだ日本文化、日本で生まれた文化、社会と文化の関係、歴史の流れと文化との関係などさまざまな問題が語られる。あわせて、担当講師の講義の概略が紹介される。	○笠原一男（放送大学教授） 速水侑（東海大学教授） 奥田勲（聖心女子大学教授） 小栗純子（中央学術研究所講師）
2	現当二世の利益 ―観音菩薩―	仏・菩薩は数多いが、現世から来世におよぶ利益の幅広さにおいて、観音に比肩し得るものはない。多様に変化する観音像を通じて、各時代の民衆が観音に期待した利益や、今日なお、民衆の間に生きる観音巡礼の信仰などについて考える。	笠原一男 ○速水侑
3	地獄からの救い ―地蔵菩薩―	民衆にとって、もっとも親しいものが地蔵菩薩。地獄からの救済を本願とする菩薩の信仰の特色と、民間での発展の歴史を明らかにする。さらに、民衆の日常的欲求を満す身代り地蔵、あるいは子供の守護へと変化して行く、民俗信仰化の過程をのべる。	同上
4	末法の救世主 ―弥勒菩薩―	弥勒の信仰は、弥勒が修行中の兜率天への上生を願う上生信仰と、弥勒が兜率天から地上に下生する日を待ち望む下生信仰に分れる。末法思想の普及につれて、上生信仰よりも下生信仰が盛んになり、この世の浄土を実現する民衆のメシア信仰として今日に生きつづける。そのような信仰の軌跡をたどる。	同上
5	極楽浄土へのいざない ―阿弥陀如来―	西方極楽浄土への往生を説く阿弥陀如来の信仰が、わが国でどのように展開して鎌倉仏教の成立に至ったかを、主として阿弥陀像や来迎図の変化発達を通じて明らかにする。さらに、その過程で、空也や源信など平安時代の浄土教信奉者が果した役割を考える。	同上
6	連歌から俳諧へ ―その流れと担い手たち―	和歌から派生した連歌は座の文芸（人々が寄りあって合作する）としての特質により身分階層を越えた支持者を得て、中世には和歌を凌ぐ盛行を見せた。更に連歌を継承発展させた俳諧は連歌になかった独自の世界を形成し、より多くの人々の共感を得た。	笠原一男 ○奥田勲
7	連歌師 ―職業としての文学―	連歌会には一定のルールと、それによって会の運営を取りしきる役目が必要となる。このような要請に応じて生まれたのが連歌師である。連歌師は連歌会の運営だけではなく、連歌を通して広く人々と交わり、文化の形成に大きな役目をも果している。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	地方文化と連歌	中世は連歌の地方普及という観点から見ても著しいものがある。それには地方と京都の間を頻繁に往復して都の文化を伝えた連歌師の果した役目が大きい。またそのようにして培われて行った地方文化は独自の連歌活動を展開する力さえ発揮する。	笠原一男 ○奥田勲
9	宗祇から芭蕉へ —白河への旅—	宗祇と芭蕉は、連歌と俳諧を代表する人であるが、両者には経歴や活動について共通点が少なくない。しかし、両者の詩的世界はかなり異質と言ってよい。この二人が、約一世紀を隔てて同じ北関東を歩いたとき、自然や人間への視線の相違にそれがあらわれている。	同上
10	芭蕉と旅 —奥の細道—	奥の細道を生んだ元禄二年の旅は芭蕉の俳諧の総仕上げであったといわれるが、その旅において彼の詩と真実の関係は必ずしも単純ではない。それは、芭蕉自身が句の推敲過程ではしなくも明らかにしている場合があり、また行くさきざきでの人々との交渉からも窺うことができる。	同上
11	転換期の時代と民衆宗教	日本の文化と社会との関係においてみられる特色の一つが、価値観の大きな変化がおこるような転換期の時代には、例外なく民衆宗教が複数で生まれ、大幅な発展をとげていることである。このような事実とその原因を具体的に考えてみた。	笠原一男 ○小栗純子
12	鎌倉幕府と農民と念仏	鎌倉時代に生まれた民衆宗教の一つの親鸞の真宗が急速な発展をとげた時、政治権力との間に衝突が起った。鎌倉時代の民衆と真宗は政治権力にたいしてどのように対応したかを、三者の力関係の在り方によって具体的に考える。	笠原一男
13	戦国大名と農民と一向一揆	戦国時代の農民は惣村と呼ばれる新しい村を形成した。惣村の農民のなかに本願寺の教線が浸透していった時、各地の政治権力である守護・地頭との間に激しい衝突を起した。この問題を戦国の民衆と本願寺と守護地頭との力関係の中で考えたい。	同上
14	江戸幕府と宗教と農民	近世の日本人は幕藩の権力によって、士・農・工・商に分けられた。宗教も幕藩権力によって厳しい統制下におかれた。近世の民衆と宗教には戦国時代のような行動は許されなかった。近世の民衆と真宗と幕藩権力を三者の力関係の特色のなかで考える。	笠原一男 ○小栗純子
15	日本文化史の回顧と展望	14回にわたって論じられて来た日本文化史をふまえて、もう一度日本文化の特色を座談の形でふりかえって見る。あわせて将来の日本文化形成の基本的精神とはなにかを語りあっていただく。	笠原一男 速水侑 奥田勲 小栗純子

＝アジア論Ⅰ＝(R)

〔主任講師：浜口允子（放送大学助教授）〕

全体のねらい

我々の属する東アジア世界は、一つの完結したまとまりを示す文化圏である。歴史的にみれば、それは、中国を中心とし、そこに周辺民族や国家が関わって形成された世界である。本講座は、その形成過程や特質を理解することを目的として、基軸をなす中国の政治・社会構造を歴史の中から考えていくものである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	東アジアとは	東アジア世界をどう考えるか。そこにおおよその位置づけを与え、それが中国を中心とした文化圏であることを明らかにする。	浜口允子（放送大学助教授）
2	自然的条件	自然は、その社会に固有な歴史が展開される舞台である。幾多の自然的条件の中から、その歴史の展開に大きく作用したと考えられる地理的位置など、いくつかの要素をとりあげ説明する。	同上
3	皇帝権力の成立 秦漢の時代 (1)	秦の始皇帝から今世紀に至るまで二千余年の間、中国は一貫して皇帝権力を中核とした統一体として存続しつづけた。そのはじめの過程を郡県制の成立を中心に述べる。	同上
4	皇帝権力の成立 秦漢の時代 (2)	短命であった秦を継いで漢は、四百年にわたり統一国家を維持した。それは何によって可能だったのか。前漢の皇帝権力強化の過程と、その中から力を蓄えてくる地方豪族の存在について述べる。	同上
5	皇帝権力の展開 隋唐の時代 (1)	漢滅亡後の長い分裂期の中から、六世紀末、再び統一国家が生まれた。この隋及び唐の集権化政策に焦点をあわせる。特に均田制について、その変遷、貴族制との関連等を説明する。	同上
6	皇帝権力の展開 隋唐の時代 (2)	均田制に基礎をおく律令体制は、唐代に最も整備されるが、八世紀中葉をさかいにして大きく崩れはじめ、新しい制度と担い手とが登場してくる。その過程と、そこに作用した諸要因について述べる。	同上
7	皇帝権力の確立 宋の時代 (1)	唐末五代の武人勢力の台頭も短期間で終り、中国には再度統一国家が成立した。この君主独裁制といわれる宋の体制について、特に官僚制と戸等制を中心に述べる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	皇帝権力の確立 宋の時代(2)	十一世紀に行われた王安石の改革は、宋の体制の矛盾をつくと共に、何が皇帝権力の基盤であるかについて多くの示唆を与えている。この点を中心にその後の社会について展望する。	浜口允子
9	財政基盤としての税(1)	権力による納税対象の把握のしくみは、時代を端的に示すものである。均田制下の収取方法の変遷と、その両税法への移行を見、それが何を意味するものであったかを考える。	同上
10	財政基盤としての税(2)	唐から宋への社会的変革は、税制にも大きく影響した。宋の膨大な国家財政を支えた新たな財源である商税と、塩や酒などの専売について、それぞれのしくみを説明する。	同上
11	経済発展の諸相 農　業	中国の中央集権体制は、常に農民を維持し、そこから収奪して成り立ってきた。農業生産力の発展の歴史的推移と、それが何によってもたらされたものであったかを考える。	同上
12	経済発展の諸相 商　業	農業と並んで、中国社会の基本的経済力を示す商業および手工業の発展を概観する。また宋代以降の都市や市場の形成などを通して中国社会のまとまり方を考える。	同上
13	経済発展の諸相 漕　運	広大な中国にあって、物資を動かし、情報を流し、人々を結びつけてきた社会・経済活動を支えるシステムについて、その発展や特徴を考える。特に水運のあり方について述べる。	同上
14	人々の生活(1)	二千年前、漢代の人々はどのような生活をしていたのだろうか。何をつくり、何を食べ、誰と暮らしていたのか。女性の問題も含めていくつかの資料をもとに人々の生活を考える。	同上
15	人々の生活(2)	唐代の均田農民はどのような暮らしをしていたのか。宋代の都市の市民は都市生活を享受も得ていたのか、それぞれの時代に生きた人々の、かけがえのない生活を垣間見る。	同上

＝アジア論 Ⅱ＝(TV)

〔主任講師：和田久徳（放送大学教授）〕

全体のねらい

日本をふくむ東アジアとその南に位置する東南アジアとは、古くから交渉があったが、日本との関係は近時とくに政治・経済・文化など各面で緊密化している。日本の将来にとって重視すべき東南アジアについて、諸民族の歴史とその特質を述べ、同地域の社会と文化の理解を深めたい。その際、日本とのかかわりに注意する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	初期の国家形成と東西海上交通	歴史時代初期の港市国家。紀元初頭の東アジアと南アジア・西アジアを結ぶ海上交通の繁栄。扶南の建国、その海上貿易活動と東西文化交流。扶南と古代日本。	和田久徳（放送大学教授）
2	諸民族の国家とインド文化	林邑の建国と海上活動、初期の中国文化受容。林邑と古代日本。ビルマ・マレー半島・インドネシア各地における「インド化」国家の出現。インド化の意味。	同上
3	シュリーヴィジャヤ王国と海上貿易(1)	初期のシュリーヴィジャヤ。シャイレーンドラ朝とボロブドゥール。八、九世紀の東西海上交通の盛況とシュリーヴィジャヤの海上貿易独占による繁栄。	同上
4	シュリーヴィジャヤ王国と海上貿易(2)	中継貿易隆盛の記録、国家の物質主義的性格。競争者クディリ国の興隆。チョーラ朝のシュリーヴィジャヤ遠征とシュリーヴィジャヤの弱化。	同上
5	古代クメール帝国の繁栄	前アンコール期、古代クメール帝国の成立とアンコール建築群、アンコール＝ワットと日本人の墨書。クメール帝国の内陸農業国家的性格。	同上
6	チャンパーの中継貿易とモン民族の諸国	チャンパーとヴェトナム・クメール帝国との抗争、チャンパーの中継貿易活動。ドヴァーラヴァティーの通商活動と古代日本。赤土・ハリプンジャヤ。	同上
7	ビルマの統一とヴェトナムの独立	ピューとモンの国家、パガン朝のビルマ統一、モン文化・南方仏教の導入。ヴェトナム独立の過程、呉・丁・前黎の各朝。李朝の中央集権政策。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	ヴェトナム社会の発展	陳朝の中央集権と民族主義、国史の編纂、国家チューノムの使用。明朝の支配と後黎朝の独立回復。民族文化の興隆。チャンパーの中継貿易衰退とヴェトナムの南進。	和田久徳
9	タイ系諸国の成立と南方仏教(1)	スコータイ朝・ラン＝ナー王国の成立。ラーマ＝カムヘンの大国家建設、タイ文字の制定、民族文化の保持。スリランカ仏教の受容と伝播。	同上
10	タイ系諸国の成立と南方仏教(2)	アユタヤ朝の成立、中央集権国家と海上貿易活動。ラーンサーン国の成立。クメール帝国の崩壊。ビルマの分裂、タウングー朝の再統一、ビルマ文化の展開。	同上
11	ジャワ諸王国の展開とイスラム化	シンガサーリ朝からマジャパイト朝への繁栄。ジャワ北岸諸港市のイスラム教受容とマジャパイト朝の衰退、島嶼部のイスラム化の進展。イスラム文化の影響。	同上
12	マラッカ国の政治と社会	マラッカの建国と明朝との関係。ムザッファル＝シャーのイスラム教受容と中継貿易国家の建設。イスラム化後のマラッカ国。モスレム国家としての特殊性。	同上
13	マラッカ国の政治経済構造	直轄地・属領・朝貢国。スルタン家とブンダハラ家の協力による安定支配。武官ラクサマナ、港務官シャーバンダール。中継貿易の隆昌政策。土着支配層と外来海商との相互依存関係。	同上
14	東南アジアと東アジア(1)	中国との初期接触、九世紀までの中国人の消極的態度。中国人の東南アジア進出と活動圏の拡大、その定着居住と現地社会におけるあり方。ジャワの中国人町。	同上
15	東南アジアと東アジア(2)	パレンバンの中国人集団、アユタヤその他の中国人町。東南アジア船の東アジア来航と琉球国の東南アジア貿易。	同上

＝ヨーロッパ論Ⅱ＝（TV）

〔主任講師：木村尚三郎（東京大学教授）〕

全体のねらい

ヨーロッパ世界における人びとの生き方、物の考え方、歴史と文化の特質、その心と形を、日本との対比においてさまざまな視点から明らかにするのが、全体のねらいである。最近におけるヨーロッパの変貌はいちじるしく、対日感情も激変しており、これを踏まえながら、私たちのこれからの生き方をも探っていきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	ヨーロッパと日本	大陸主義の進展／「文化の闘い」の時代／大陸型海洋国家の出現	木村尚三郎（東京大学教授）
2	変貌する現代ヨーロッパ(Ⅰ)	フランスの「奇妙な敗北」／ナショナリズムの後退／大陸間戦争としての第二次世界大戦	同上
3	変貌する現代ヨーロッパ(Ⅱ)	重要視されはじめた「日常生活史」／低成長時代の「死」の認識	同上
4	変貌する現代ヨーロッパ(Ⅲ)	土集団の時代と土離れ勢力の時代／生産と進歩の上昇期／商業・交通と調和の安定期	同上
5	ヨーロッパの農村社会(Ⅰ)	プロローグ―自然と時間の観念／森と人間の戦争／日本の自然とくらべて／神から機械が生まれた／ゴシック寺院は森のイメージ	同上
6	ヨーロッパの農村社会(Ⅱ)	農民生活の十二か月	同上
7	ヨーロッパの都市(Ⅰ)	都市の空間学／乾いた理論と意志の世界／都市の時代	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	ヨーロッパの都市 (Ⅱ)	歴史意識がつくった街／均整備あふれる近代パリ／大革命の流血の記憶きざむコンコルド広場／中世パリの顔／セーヌに浮かぶ船、シテ島	木　村　尚三郎
9	ヨーロッパの文化 (Ⅰ)	光を求める／復活祭／狩りの文化／死と向かって生きる／悪魔	同　上
10	ヨーロッパの文化 (Ⅱ)	教会の鐘の時間支配／一日は真夜中から始まる／ローソクが刻む時／時間人／日本の時間観／市庁が時間を支配する	同　上
11	ヨーロッパの家族 (Ⅰ)	変貌しつつある家族関係／理性の時代から感性の時代へ／家と家族の概念／靴はなぜ脱がない／血縁の重視／日本の家神・土神	同　上
12	ヨーロッパの家族 (Ⅱ)	子育て／徒弟制度と手づくり教育／他人のメシを暖かく	同　上
13	キリスト教(Ⅰ)	孤独／拒絶の精神／土の匂い／情感／悔いあらため	同　上
14	キリスト教(Ⅱ)	葡萄酒の魅力／集い、食べ合う／復活／慈善／土離れ／教会と多国籍企業	同　上
15	これからの時代を生きる	一を求める心／集う／内心の時代／お陰様／タイムスパン	同　上

＝アメリカ論Ⅰ＝（TV）

〔主任講師：猿谷　要（東京女子大学教授）〕

全体のねらい

北米（アメリカ合衆国とカナダ）について、各方面からその特色を論ずる。北米はいま日本ともっとも深い関係をもつようになったが、その本質は必ずしもまだ十分に理解されてはいない。従来とかく断片的になりがちだったアメリカ論を、ここで十分にまとめて展開し、正確な理解を得られるようにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	若い共和国の誕生	ヨーロッパ人にとっての“発見”　インディアンとの出会い　初期の植民地　大西洋上の奴隷貿易　植民地時代の生活と文化　植民地間の戦争　独立への気運　独立戦争の経過　独立革命の成果　独立革命の影響と世界	猿谷　要（東京女子大学短期大学部教授）
2	セクションの発展と衝突	デモクラシーの発展　孤立主義への傾き　フロンティアの西進　太平洋岸への道　北部資本主義社会　南部奴隷制社会　アメリカ文化の成熟　南北対立の激化　南北戦争のさなかで　南北戦争の遺産	同　上
3	世界的強国への発展	南部の再建　フロンティアの消滅　独占資本の成立　自由放任の政治　激増した新しい移民たち　帝国主義への道　改革の気運　第1次大戦へ参戦　債務国から債権国へ　世界最初の大衆消費時代	同　上
4	超大国の影響力と価値観の変動	大恐慌とニューディール　国際的緊張の高まり　第2次世界大戦　パックス・アメリカーナ　東西冷戦の進行　赤狩りの50年代　変革と激動の60年代　怒れる若き反逆者たち　絶対から相対へ移った70年代　80年代の展望	同　上
5	アメリカン・デモクラシーの特色	アメリカ政治の特徴　権力の分立　連邦会議　大統領　行政部　裁判所　選挙　政党　有権者　圧力集団	阿部　斎（放送大学教授）
6	アメリカ外交の特色	外交政策の決定　孤立主義　膨張主義　自由主義的同質性　イデオロギー外交　冷戦とアメリカ外交　デタント外交の展開	同　上
7	資本主義経済の発展	市場経済体制の確立　フロンティアの開拓と鉄道の発達　工業と農業の利害対立　西欧諸国との競争　独占の発達と反トラスト立法　繁栄の20年代　不況の30年代とニューディール　混合経済への道	嘉治元郎（放送大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	経済の当面の諸問題	平時経済への転換　ドル不足からドル過剰へ　インフレーションの諸様相　成長の促進と福祉の充実　ドル体制の破綻　経済の再建をめざして　世界経済の中のアメリカ	嘉治元郎
9	人種・民族・女性	「人種の坩堝」神話　WASP中心からモザイクへ　ヨーロッパ系　黒人　インディアン　スペイン語系　日系アメリカ人　少数派としての女性　女性の平等をめざして	猿谷　要
10	社会の特色を彩る諸要素	州権の国　東部　南部　中西部　西部　摩天楼と荒野　暴力と犯罪　家庭の崩壊　ボランティア精神	同上
11	アメリカ的生活様式	アメリカン・デモクラシー　情報化社会　神を信じる人びと　高等教育の大衆化　中産階級　庶民のふところ具合　自動車社会　大衆文化　若者文化	同上
12	カナダ歴史の特色	フランス系カナダ社会の伝統　アメリカ革命の影響　英領北アメリカ植民地の遺産　国際環境に影響されたコンフェデレーション　コンフェデレーションの意義　困難な国家統一　漸進的な「独立」の達成　定義しがたいカナダ・ナショナリズム　永遠の課題：アメリカ合衆国との関係　永遠の課題：ケベック問題	同上
13	カナダモザイク文化	対先住民関係の特徴　フランス文化の遺産　アカディア人とケベック人　王党派の到来　その他のイギリス系カナダ人　英領北アメリカ法と教育・言語問題　リエルの二つの「叛乱」　移民の多様化　日系移民の問題　多様文化主義へ	同上
14	日米関係の流れ	アメリカ側からみた日本開国　異文化接触の原点　友好の第1期　対立の第2期　戦争の第3期　蜜月の第4期　競合の第5期　物の国際化から心の国際化へ　未知の世界へ入る	同上
15	変貌するアメリカ	ヨーロッパ人のアメリカ論　日本人のアメリカ論　アメリカン・スタディーズ　アメリカ国内の地殻変動　国際関係の多極化　太平洋時代の幕あけ　アメリカの夢は終わったのか	同上

＝ アメリカ論 Ⅱ ＝（TV）

〔主任講師：増田義郎（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

ラテン音楽やマヤ、アステカ、インカ等の古代文明などによって日本に知られている中南米は、その歴史、文化において特色に富み、またその政治・経済・社会も、19世紀の独立期以来独特な歩みを示して、第三世界の中でも、他のアジア・アフリカ地域と全くことなった個性を持つ。その個性とはなにか。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	乾燥地帯・高原・熱帯低地	・中南米の概略 ・中南米の地形 ・中南米の気候 ・海流と風 ・人間と自然	増田義郎（東京大学名誉教授）
2	多様な民族、多様な言語	・複雑な民族構成 ・中南米の原住民 ・スペイン人 ・ポルトガル人 ・アフリカ人 ・その他の民族的要素 ・多様な言語	同上
3	マヤ・アステカ・インカ	・中南米の古代文化 ・農耕への道 ・文明への道 ・宗教都市の繁栄 ・動乱と統一 ・アステカとインカ ・その他の民族	同上
4	バロック文化の開花―中南米の植民地時代	・イベリア文化と中南米 ・問題の発端―征服と破壊 ・現実とユートピア ・植民地官僚制の成立 ・バロック文化の渡米 ・植民地時代文学 ・その前夜	同上
5	独立運動と共和国成立	・閉ざされた大陸 ・自由化の要望 ・内乱の世紀 ・ハイティの独立 ・独立運動の開始 ・独立運動の性格 ・ブラジルの独立	同上
6	クーデター・革命・民主主義	・中南米政治の特徴 ・独立後の混乱期 ・安定した寡頭制の時代 ・寡頭制の危機の時代 ・人民主義の時代 ・軍事政権の時代 ・模索の時代 ・政治的不安定の原因	恒川恵市（東京大学助教授）
7	中南米政治の争点	・政党と政党制 ・軍部と軍事政権 ・カトリック教会 ・外国への経済的依存 ・アメリカ合衆国による干渉 ・棍棒政策と善隣外交 ・キューバ革命以後の米国の政策 ・自立への動き	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	経済発展の光と影	・経済発展の長期的趨勢（一次産品輸出経済の発展・輸入代替工業化の進展・経済統合）　・戦後期経済発展の特徴（持続的成長と投資率の上昇・所得分配の不平等化）　・農業と工業の構造（工業の構造の特徴・農業の構造ー不平等な土地所有制度）　・不完全就業とインフォーマルセクター	細野昭雄（筑波大学助教授）
9	累積債務とインフレの80年代危機	・累積債務危機の実態（不況とインフレ・累積債務の規模）　・債務危機の直接的要因（交易条件の悪化・資本市場の変化）　・債務危機の構造的要因（積極的開発政策と自由化政策）　・中南米経済の展望	同上
10	躍動する新しい文化	・19世紀の中南米文化　・社会的抗議の文学 ・メキシコ革命と壁画運動　・新しい文学 ・ブームの文学　・モデルニスモ以後の詩人	増田義郎
11	メキシコ―変革と伝統	・国土と住民（気候と風土の多様性・住民の居住パターン・住民の言語と文化）　・メキシコ革命（ポルフィリオ・ディアス時代・1910年革命と1917年憲法・カルデナス政権・「革命」の後退） ・現代メキシコの政治・経済（石油資源と累積債務・ＰＲＩ体制の衰え・アメリカ合衆国との関係）	恒川恵市
12	ブラジル―未来の国	・中南米最大の国ブラジル　・悲しき熱帯 ・ブラジルの成立　・砂糖産業と奴隷の輸入 ・産業の変遷　・帝国から共和国へ　・工業化の時代	増田義郎
13	ペルー―砂漠・高原・熱帯林	・対蹠的な三つの自然　・住民と都市　・ペルー副王領の成立　・植民地封建制　・独立から共和国へ　・20世紀のペルー	同上
14	アルゼンチン―豊かさの中の停滞	・繁栄と停滞の歴史（豊かさのなかでの停滞・温帯農産物輸出による繁栄）　・社会の特徴と政治的不安定（輸出経済の危機とペロン政権の登場・軍事政権の功罪）　・経済構造と長期的停滞 ・最近の政治と経済	細野昭雄
15	カリブ海地域―非ラテン的な中南米	・カリブ海地域とは　・自然と住民　・スペイン人の侵入　・ヨーロッパ諸勢力の侵入　・アメリカ合衆国のカリブ海進出　・自立への動き	増田義郎

＝美の本質と様態＝(R)

〔主任講師：今道友信（清泉女子大学教授）
橋本典子（青山学院女子短期大学助教授）〕

全体のねらい

本講義は、東西の美学史を学びながら、美学の基礎的概念について研究を深め、美の本質やその様態を考えるものである。美の様態とは、美の現象形態のことであり、芸術美もその一つである。本講義では、主に芸術を媒介として考察を進め、真や善と並んで、人間のあこがれる理念である美を省察し、美学の新しい可能性を拓きたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	芸術的超越 ―孔子と諸子百家―	ギリシア・ラテン古典文化と並びせられるシナ古典文化は、東洋に位置する日本の文化の基礎のひとつである。その中でも代表的な孔子の美学説を中心に考える。芸術段階説や世界超越説などが明らかにされる。諸子百家の若干の人々にふれる。	今道友信 （清泉女子大学教授）
2	一者とその影 ―荘子と六朝時代―	孔子を否定的に超える荘周の学説を中心として、一者の形而上学的美について論じる。ここでは、真の超越としてのエクスタシーが風の象徴を以て論じられている。尚、シナ古代の花と言われる六朝の芸術論にもふれる。	同上
3	植物的世界観 ―日本の古代・中世―	日本の古典を介して日本文化の特色のひとつとして植物的世界観が立てられていると見て、それとの関連に於いて、古代・中世の芸術論を解明する。	同上
4	幽玄と旅 ―日本の近代―	日本近代の芸術論を介して、独特の美的カテゴリーとしての幽玄を論じ、また、美を求める実践としての旅について考える。	同上
5	形相 ―西洋古代―	西洋美学の源流としてのギリシア哲学に於ける美や芸術の省察を、基本概念としての形相（イデア）を中心に考える。手続として、ソークラテース以前、プラトーンとアリストテレース、プローティノスを省察する。	同上
6	光 ―西洋中世の美学―	西洋中世の美学を、基本象徴としての光を軸にして省察する。この時代の美学思想は従来軽視されて来たが、芸術論としても重要であることを示す。	同上
7	数と言語 ―ロゴス―	ルネサンスの時代精神は、ヒューマニズムと比であると言われるが、比の原理である数が美や芸術に於いて占める重要性を考える。比は、ロゴスであるが、ロゴスは言語でもあって、ここに言語を重視するヒューマニズムの考え方も問われることになる。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	実在と模倣 —近代美学の黎明—	近代美学の伏線がデカルトのコギトーにあると考え、またパスカルの芸術論、ライプニッツの美の省察を介し、認識と主観が中心となる近代美学の前半を課題にする。	青山昌文 （放送大学助教授）
9	関係と美 —近代美学の自立と超克—	近代美学の自立性を樹立したバウムガルテンの認識論的美学の特色と、ディドロの関係の美学の新しい解釈により、ここに近代を超克する力が秘められていることを明らかにする。	同上
10	無限・完成・分裂	ロマン主義、ドイツ観念論、それらに対する反動という思想的激動の時代としての近代終末期の美学説を省察する。	今道友信
11	虚構 —新しい認識方法—	芸術に必要な契機としてのフィクションすなわち虚構を、新しい認識方法に着目しつつ、演劇を例にして省察する。	伊藤公一 （放送大学助教授）
12	音楽美学	音楽の特質をその時間構造を通して明確にし、音楽と精神との関わりを創造の面から省察する。特に音楽作品に内在する形而上学的力の可能性について論じる。	橋本典子 （青山学院女子短期大学助教授）
13	美と時間 —芸術と倫理—	比較芸術学の立場から、諸芸術の根本構造を明らかにする。更に芸術創造に於ける崇高性という概念との関わりから、芸術創造に於ける倫理的側面、時間を越えた人間の精神的美（美善）を追究する。	同上
14	カロノロジア	現代、技術連関の時代との関係に於いて新しい美学、カロノロジアを省察する。無を介するその論理的構造を明確にすると共に、人間の存在の彼方に輝く美、すなわち存在論を越えた新し思想について省察する。	同上
15	結び	全体を総括し、特に美的判断の問題を手がかりにして、新しい創造論へ向けての論理的省察が行なわれ、新しい美学への指針が示される。	今道友信

＝文芸史と文芸理論＝(R)

〔主任講師：轡田　収（学習院大学教授）〕

全体のねらい

ヨーロッパの古典古代から近代に至る文学の生産とそれに対する理論ないし学的反省との関係を捉えていく。この視点をとると、時代により、言語圏ないしは国により、実践と理論とは独特な成互関係をもつことが明らかになろう。それによって、一国の文学史のみを見ることでは得られない各言語文化の特異性が浮き彫りにされよう。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	実践と理論	1. 文学の理論と西欧の特質 2. ギリシアにおける「理論」 3. テオリア・プラクシス・ポイエーシス 4. 理論と実践の歴史的変化 5. 芸術の理論と芸術の歴史的位置 6. 『詩学』とミメーシス	三島憲一（学習院大学教授）
2	古典古代(1) ―ギリシャ―	1. ギリシア悲劇 2. アリストテレスの『詩学』	岡道男（京都大学教授）
3	古典古代(2) ―ラテン―	1. ラテン的世界の始まり 2. ホラティウスの『詩論』―『詩作技術』 3. クインティリアーヌスの『弁論家の教育』	同上
4	中世(1) ―ラテン的世界としての中世―	1.「ラテン中世」とは何か―歴史的複合体としてのヨーロッパ　2.カール大帝の偉業―学業改革と文化運動　3.学校教材用の著作家の選択―文芸作品についての「正典」の形成　4.詩作品の解釈の枠組み―ヨーロッパにおける文学教育の歴史 5.人文主義者による「12世紀のルネサンス」―「自国語」文学の多彩な様相	南大路振一（大阪市立大学教授）
5	中世(2) ―フランス―	1. 現存するテクストの性格―筆写され口誦された作品 2. 北フランスのトルヴェール 3. 南フランスのトルバドゥール 4.「非抒情詩」と犯罪詩人フランソワ・ヴィヨン 5. ロマン（物語）の誕生	新倉俊一（東京大学助教授）
6	中世(3) ―ドイツ秘められた詩学―	1. はじめに 2. 耳を楽しませる文芸 3.「アルトゥース・ロマーン」（「アーサー王物語」） 4. 行数比による作品構成 5. 中世文芸の特質	平尾浩三（東京大学教授）
7	中世(4) ―イギリス―	1. 古英詩の特質 2.『ベーオウルフ』―ゲルマン民族の英雄叙事詩 3. チョーサーの文学	安東伸介（慶応義塾大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	俗語文学の栄光 ―イタリア―	1. 俗語文学の誕生 2. 清新体派とダンテ 3. 『神曲』の構造 4. ペトラルカとボッカッチョ	河島英昭 （東京外語大学教授）
9	近代文学への道(1) ―フランス―	1.16世紀ルネサンスの豊かな軌跡　2.文芸理論の登場とセビエの『フランス詩法』ールネサンス精神の発裂　3.デュ・ベレーの『フランス語の擁護と顕揚』　4.古代人模倣ーロンサール、ドービニェ、モンテーニュ　5.マレルブへの反抗ー第1期の過渡期　6.アカデミー・フランセーズと文芸理論の基礎固めーシャプランの書　7.第2期（1660ー1690年）の作家の活躍ーパスカル、ラシーヌ、モリエール	成瀬駒男 （国学院大学教授）
10	近代文学への道(2) ―イギリスー エリザベス朝―	1. 詩の擁護はなぜ必要だったか 2. 民衆の娯楽・文芸と国民性の形成 3. シドニーの批評論と詩の本質 4. 近代イギリス文学の成立	児玉久雄 （学習院大学教授）
11	近代文学への道(3) ―ドイツ―	1. 遅咲きの近代文学 2. オーピツのドイツ詩改革 3. 新しい文学制作は翻訳から 4. 言語育成と言語協会 5. 文学活動と地域の特色 6. 理論と実践との関係 7. 新興の文学ジャンル―小説	轡田収 （学習院大学教授）
12	小説の興隆	1. 「小説」とはなんであったか 2. 小説の3系統 3. 騎士冒険小説から英雄恋愛宮廷小説へ 4. 悪者（ピカロ）小説 5. 牧人小説 6. 小説の変貌と展開	同上
13	文学と天才	1. 天才概念の成立 2. 規範美学批判と市民社会 3. 天才と自然 4. ドイツにおける天才思想の開花 5. 天才の神格化―ヘルダーとゲーテ 6. 天才の芸術と市民社会 7. ＜天才＞と＜趣味＞	大貫敦子 （千葉大学助教授）
14	文学と国民意識 ―ドイツを例に―	1. 「国民」という概念 2. 国民運動と国民意識 3. 解放戦争と『ニーベルンゲンの歌』 4. 国民意識と文学の歴史 5. ドイツ学の成立 6. 精神科学と国民意識	轡田収
15	社会と文学の自律性	1. 近代と芸術の自律性 2. 理性の自己分析と芸術 3. 市民社会の代償としての芸術 4. 芸術の自律性とアヴァンギャルド 5. 芸術の自律性の動揺―反省の深化	三島憲一

＝美術史と美術理論＝（TV）

〔主任講師：友部　直（共立女子大学教授）〕

全体のねらい

今日、精神的な豊かさを求めて、美術への関心が高まっている。この番組では、単なる美術の通史ではなく、トピックを含めて、映像的な魅力を通して、学習者を美術の世界へひきこむようにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	美術とは	1. 色と形の役割 2. 表現の様式 3. それぞれの立場 4. 能力の問題	友部　直 （共立女子大学教授）
2	日本 ～彫刻(1)天平彫刻～	1. はじめに 2. 飛鳥・白鳳の彫刻 3. 天平初期の彫刻 4. 天平盛期の彫刻 5. 天平後期の彫刻 6. 肖像彫刻 7. 結び	宮　次男 （実践女子大学教授）
3	日本 ～彫刻(2)鎌倉彫刻～	1. 鎌倉美術の特色　2. 南都復興 3. 東大・興福二大寺の造仏　4. 運慶 5. 快慶　6. その他の慶派仏師たち 7. 慶派以外の仏師集団　8. 関東彫刻 9. 肖像彫刻　10. 裸体像 11. 結び	同　上
4	日本 ～絵画(1)仏画～	1. 仏画とは 2. 奈良時代の仏画 3. 平安前期の仏画 4. 平安後期・11世紀の仏画 5. 平安後期・12世紀の仏画 6. 鎌倉時代の仏画 7. 結び	同　上
5	日本 ～絵画(2)絵巻物～	1. 絵巻とは 2. 絵巻の発生 3. 源氏物語絵巻 4. 信貴山縁起 5. 伴大納言絵詞 6. 鳥獣戯画 7. 結び－平安絵巻の性格	同　上
6	中国 (1) ～皇帝の墓陵～	1. 中国美術のあけぼの　2. 新石器時代の彩陶　3. 仰韶文化の彩陶　4. 馬家窯文化の彩陶 5. 大汶口文化の彩陶と龍山文化の黒陶 6. 河姆渡文化　7. 夏・殷時代の社会と文化 8. 殷王朝の青銅器　9. 最盛期の青銅器 10. 俑の出現　11. 秦始皇帝の兵馬俑	東山健吾 （成城大学教授）
7	中国 (2) ～石窟寺院～	1. 仏教と仏教文化 2. 石窟寺院 3. 五胡十六国時代の涼州 4. 炳霊寺石窟 5. 敦煌莫高窟 6. 莫高窟初期の壁画 7. 雲岡石窟	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	中　　国　(3) ～水墨画と陶磁器～	水墨画 1. 山水画の成立　2. 荊浩とその後継者たち 3. 郭熙と三遠　4. 宋画院の山水画 5. 江南の山水画家　6. 南宗画 陶磁器 1. 最初の陶器　2. 青磁　3. 黒釉　4. 白磁 5. 磁州窯　6. 青花（染付け）	東　山　健　吾
9	西　　洋 ～王墓と神殿～	1. エジプト美術の特性 2. ピラミッド － 巨大な王墓 3. 神々の住まい － 神殿	友　部　　直
10	西　　洋 ～神殿と劇場～	1. 神々と人間 2. 時代と様式 3. パルテノンとアクロポリス 4. 官能的な女神たち	〃
11	西　　洋 ヨーロッパ中世 ～街と大聖堂～	1. 神の栄光のために 2. 大聖堂の時代 3. 都市と城	〃
12	西　　洋 ルネサンス美術(1) ～人間の世紀～	1. ルネサンスとは 2. 古代美術の復活 3. ルネサンス美術の開花 4. マサッチォなど	〃
13	西　　洋 ルネサンス美術(2) ～絵画の黄金時代～	1. レオナルド・ダ・ヴィンチ 2. ミケランジェロ 3. ラファエロ、ティツィアーノなど	〃
14	西　　洋 ヨーロッパ近世 ～王侯の芸術～	1. 時代の転換 2. 宮廷を彩る 3. アルプスの北で 4. ヴェルサイユ宮殿 5. ロココの成立 6. 雅びなる宴に	〃
15	新　し　い　視　覚 ～19・20 世紀の ヨーロッパ美術～	1. 凋落に向う貴族社会 2. ロマン主義と古典主義 3. 現実を直視する 4. マネと印象主義 5. セザンヌと後期印象派 6. 視覚の冒険	〃

＝演劇史と演劇理論＝（TV）

〔主任講師：毛利三彌（成城大学教授）
西　一祥（日本大学教授）〕

全体のねらい

日本演劇の特質は、ジャンルの並存性と生きた伝承性にある。本講座は各専門ジャンルの講師の分担講義により、古代から現代への演劇史の流れに沿いつつ、各ジャンルごとの演劇の展開を重層的にみていく。また随時アジア芸能や西洋演劇との比較・対比を通して日本演劇の環境や本質をグローバルな視点から多角的に考究する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	演劇の源流	演劇の歴史は人類の歴史とともにまるといわれるが、その源流は太古の呪術信仰や神懸りの歌舞に溯る。第一回なので演劇の発生を通してその本質的側面にふれ、ついで古代歌舞の種々相および大陸渡来の伎楽について具体的に述べる。	高山　茂（早稲田大学講師）
2	中世芸能の胎動	伎楽に次ぐ外来芸能である舞楽の受容と定着。その潮流は一大山脈となって現代に連なる。一方平安末になって、民衆に支持された田楽・猿楽が胎頭してくる。祭礼の場を通して時代の変革とともに芸能が新たな潮流を形づくってゆく様子を考察したい。	〃
3	中世芸能の諸相	中世に入って田楽・猿楽は各地の座を中心に中世芸能の主流を占めるに至る。また寺院の延年も中世芸能の展開に大きな役割を果す。田楽および大成前の猿楽の実態、白拍子・曲舞などの種々雑芸についてふれ、中世芸能の諸相を眺望する。	〃
4	都鄙の猿楽	能が大成するまでには、田楽や猿楽が想像以上に農村のすみずみにまで行きわたっていた。地方民衆という広い底辺に支えられて、その頂点に大きく咲いた高い花が能であった。それは都会的・貴族的なものとして、美化されてゆく。その歴史的背景について述べたい。	西　一祥（日本大学教授）
5	花と幽玄	世阿弥によって達成された能の美とは何か。世阿弥の花と幽玄の論は、今日ではすぐれた演劇論として注目されている。世阿弥の論について説明したい。世阿弥以後、能はどのような歩みをとるか。豊臣秀吉によってもたらされた再度の興隆期についても言及したい。	〃
6	式楽を経て	能は徳川家康によって権威まで与えられた。武家の式楽として、前例のない太平無事の時代を経た。危機的状態となった明治以後、岩倉具視らの保護策があり、フェノローサらの愛好もあった。最近における能ブーム。海外での能公演の盛んな現状にも言及したい。	〃
7	“おかし”の精神	南北朝期の争乱後、足利義満治世のわずかな平和の時期があったが、応仁・文明の乱から戦国時代へと入る。その動乱の渦中で、民衆がたくましく生きた人間讃歌こそ、狂言のもつ“おかし”の精神であろう。日本演劇の母胎ともいわれる狂言について略述したい。	〃

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	語りの系譜	語り物が、声明の構式から平曲、浄瑠璃、義太夫節へと分化し発展していった諸相を探り、あわせて人形浄瑠璃の成立と発達の過程を考察する。そして日本演劇史のなかで、語り物と歌い物が果してきた役割りを、文化史の流れのなかに位置づけたい。	藤波隆之 （国立劇場芸能部長）
9	歌舞伎の誕生	近世の初頭、異風・異相の「傾く」風俗で京洛に登場した女歌舞伎・若衆歌舞伎は、習俗紊乱の廉で禁止された。その後の野郎歌舞伎以降、荒事と知事の創始、女方や立役の役柄の確立、作劇術、演出、美術等の進歩によって、町人層に親しまれて大成していった伝承の特質を概観する。	〃
10	爛熟の美	十八世紀末から、文化・文政期を経て幕末にいたるころ、江戸歌舞伎は大成・爛熟期を迎えた。悪の世界を大胆に形象化した市井の写実劇（生世話物）や、変化舞踊がさかんとなり、刹那的な享楽を志向する。社会的な背景のなかから退廃の美を再検討したい。	〃
11	伝統と変容	明治期を迎えて、雅楽、能楽、文楽、歌舞伎などの伝統芸能は、近代社会にどのように対応していったか。近代歌舞伎の変容を、伝統と創造の視点から瞥見する。伝統演劇と新派・新劇との並存性、重層的な構造の特質とともに、伝統芸能の民族性と国際性にも言及したい。	〃
12	西洋演劇の潮流	西洋の演劇はもちろん国によって異なる歴史をもつが、大きく眺めてみればいくつかの際立った潮流をみてとることが出来る。それは我国の並存性と違って、常に新しい内容と形式を獲得してゆくことで歴史を形づくってきた。	毛利三彌 （成城大学教授）
13	演劇近代化の試み	十九世紀後半から西洋では演劇の近代化が遂行されてゆくが、明治期の日本はそのための多くの試行錯誤と生みの苦しみを味わわねばならなかった。この回では近代劇成立の状況を、東西の共通性と相違性を探りながら考察してゆく。	〃
14	新劇の時代	翻訳劇上演から始まった日本の近代演劇は、大正・昭和期を通して、いわゆる新劇というジャンルを成立させ、能・歌舞伎とは異なった演劇概念の深化と実践を進めてきた。それは西洋の二十世紀演劇の歩みとどのように歩調を合せているのだろうか。	〃
15	現代演劇の行方	第二次大戦後の世界の演劇は、それまでと全く別の演劇的思考に基づく舞台を生み出し始め、往々にして演劇の否定、他の分野との境界の曖昧化さえ示すことがある。この現代の状況に我々はいかなる演劇的意味を見るべきであろうか。	〃

＝音楽史と音楽論＝(TV)

－日本の音楽に世界の音楽を投影する－

〔主任講師：柴田南雄（放送大学教授）〕

全体のねらい

ＴＶの特性を生かし、教室で教科書をなぞるようにでなく、縄文・弥生の石笛や琴にはじまり、古典音楽から現代音楽まで、各地の遺跡のロケや邦楽・洋楽の実演もとりまぜ、しかも東西音楽の通史となるよう話を進める。同じ時代に、日本と中国、日本と西洋でどのような音楽が行なわれていたか。つねにそれらを比較考察しながら話をすすめる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	外来音楽と日本人	太古から今日まで、日本列島にはどのようなヒトが、どのような音楽を持ち込んだか。仏教伝来と共に入った音楽を消化する過程と、西洋文明とともに入った音楽を消化する過程との類似点や、日本と西洋の音楽史におけるサイクル現象の存在を指摘する。	柴田南雄（放送大学教授）
2	音楽文化の深層を探る	旧石器時代、欧州大陸にどんな楽器があったか。日本の縄文時代の石笛の出土品を紹介、その音色や用途から能楽の横笛との関連を考える。オリエント、エジプト、ギリシア、インド、中国には古代にどのような音楽があったか。	同上
3	祭祀の音楽	弥生時代・古墳時代（ほぼＢＣ300年～ＡＤ600年）の間に用いられた土笛、銅鐸、琴などの出土品と復元品を紹介、あわせて中国（儒教）や西欧（キリスト教）のこの時期の音楽の状況をしらべる。	同上
4	制度化と学習	飛鳥時代と奈良時代（６世紀～８世紀）における大陸からのさかんな音楽の輸入、とくに大宝律令で制度化された＜雅楽＞について。西欧ではグレゴリウス大法王による聖歌の集大成と、各地に聖歌学校の設立を見た。	同上
5	芸術音楽の胎動期	平安時代（９世紀～12世紀）には、楽制の改革により輸入音楽が定着し（雅楽）独自な曲種が発生（今様）しはじめる。西洋ではゴシック様式の大聖堂が多声音楽の発生源となる。	同上
6	諸国を行脚する音楽	鎌倉時代と南北朝（13世紀・14世紀）が対象で、平曲が起り田楽、猿楽の流行をみる。西欧でもトルバドゥールなど騎士階級からの吟遊歌人が起こる。また音楽理論の整備とともに、多声音楽がますます発展する。	同上
7	ルネサンス	室町時代、安土・桃山時代（15世紀・16世紀）に、世阿弥による能の確立、キリシタン音楽、三味線の琉球からの輸入を見る。西欧ではルネサンス多声声楽の花が咲き、遠近法に見合う機能和声の音感が確立する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	キリシタン音楽	1549年ザビエルは日本上陸と共にミサの歌を信徒に歌わせた。数種の楽器も入り、少年使節は欧州各地でオルガンを演奏、帰って信長にきかせている。禁教徒も隠れキリシタンの祈り歌（オラッシャ）は今日まで伝承している。その実情を紹介する。	柴田南雄
9	東と西のバロック音楽	江戸時代の前半、元禄をへて享保の終り（1735年）頃までは上方が優勢で、箏曲、薩摩琵琶、三味線楽、長歌、尺八、義太夫節などが市民の生活に支えられて競い咲く。西欧ではバロック音楽の時代（1600年頃～1750年頃）。	同上
10	古典派・ロマン派	江戸時代の後半、宝暦から文化文政をへて幕末まで。前記に誕生した曲種の拡充が行われるが新味に乏しい。これに反し西洋では古典派・ロマン派音楽が西洋音楽を一気に頂点に導く。	同上
11	無からの出発と隆盛の絶頂	明治政府の音楽教育政策は西洋音楽を基本とした。伝統邦楽の活力は衰退しこれに反して西洋音楽はヴァーグナーの楽劇に代表される隆盛の極にあった。第1次大戦までを対象に考える。	同上
12	両大戦間の状況	日本ではようやく西洋音楽様式の創作がはじまる一方、邦楽はますます背景に後退する。西欧で「古典派・ロマン派」の最後の段階としての新古典主義（新即物主義）の時代を迎える。シェーンベルクの12音音楽もその思潮の中から生まれる。	同上
13	第2次大戦後の作曲界	第2次大戦を境に作曲の様式は大きく変わる。世界の諸民族の音楽をとり入れた、単純で即興的なものからの再出発。邦楽器への再認識もその一環である。電気音響装置やコンピュータの作曲への導入。	同上
14	第2次大戦後の演奏界	現代は作曲不振、演奏上位の時代である。また作曲の時代様式と演奏の時代様式の間にはあきらかに平行関係が認められる。20世紀初頭に遡るレコード録音から典型的な事例をあげて比較する。	同上
15	未来の展望	今日、日本人はどのような音楽を好んでいるか。人々は何を音楽に求めているか。今、音楽とは何か。これからの音楽はどのような形をとるであろうか。ピートリーの諸芸術循環説などを紹介する。	同上

＝民族音楽＝（R）

主任講師：柴田南雄（放送大学教授）
徳丸吉彦（お茶の水女子大学教授）

全体のねらい

民族音楽学の近年の研究成果を踏まえ、ヒトと音楽のかかわりから生じる根源的な諸問題を考える。また、それらの問題と関連する諸民族の音楽の実例をなるべく豊富に紹介するが、たんなる鑑賞の素材としてではなく、それが属する文化の文脈の中でいかなる意味を持っているかを明らかにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	総論	1.人間の音楽的な営みをさぐる　2.異文化理解としての比較音楽学　3.比較音楽学から民族音楽学へ	柴田南雄（放送大学教授） 徳丸吉彦（お茶の水女子大学教授）
2	音楽と人々の生活―アフリカ	はじめに　1.ことばと音楽　2.生活と音楽　3.楽器と音具（タイコ、木琴、指ピアノ、その他の楽器）　おわりに	江口一久（国立民族学博物館助教授）
3	音楽と神話	1.神話表現としての音楽　2.神話の音楽的叙述 3.楽器の神話的起源　4.神話の音楽的象徴化 5.音楽の神話的意味	山田陽一（島根大学専任講師）
4	音楽と構造	1.音律とテトラコード　2.旋法体系―ダストガーハを中心に　3.旋法上の巡歴―グーシェを中心に 4.リズムと形式	拓植元一（東京芸術大学助教授）
5	音楽と文化変容―変歴する音楽	1.「トルコ音楽」　2.メヘテルハーネ 3.「トルコ風に」　4.軍楽と式楽　5.伝播と変容	同上
6	音楽と楽器―音による点と線の表現	1.音の文化的意味づけ、そして音楽　2.点在性のテクスチュア　3.線条性のテクスチュア 4.点と線を超えて	山口修（大阪大学助教授）
7	音楽と祭り	はじめに　1.シンガポールの華人と地方劇の種別 2.祭りの行事の中の酬神戯　3.各劇種の盛行度合いと使用楽器　4.戯棚と伴奏音楽演奏状況 むすび	上参郷祐康（東京芸術大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	音楽と演劇	1.文化としての音楽　2.意味をもつ音・感じる音 3.語りの音・状況の音　4.演技する音・異界の音 5.ミューズとサラスヴァティ　6.インド音楽の伝統　7.インド音楽の総合性	小西正捷（立教大学教授）
9	音楽とパフォーマンス	1.パフォーマンスを研究する意義　2.演奏技法からコスモロジーへ（バリ島の事例）　3.パフォーマンスと相互作用（奈良県の事例）　4.パフォーマンスの枠組み	中川　真（京都市立芸術大学講師）
10	音楽と社会―イスラエル、アラブ	1.ユダヤ人とアラブ人（離散ユダヤ人、「イスユム化」と「アラブ化」）　2.民族と音楽（アイデンティティを求めて、宿命と賛歌をうたう、千夜一夜物語の音楽世界）　3.音楽と宗教（宗教儀礼と音楽、「声」による賛歌、コーラン朗唱、神秘派の音楽儀式）　4.音楽と政治（『黄金のエルサレム』、クルスームの歌）	水野信男（兵庫教育大学教授）
11	音楽と伝承	1.第二次口頭性　2.規範的な楽譜と記述的な楽譜 3.楽譜の形態（擬声語的な種類、文字・数字による種類、図式的な種類、術語による種類、混合種） 4.口三味線と身体性と口頭性	徳丸吉彦
12	音楽と記録	1.民族音楽の現場―フィールド・ワーク 2.採譜と分析	谷本一之（北海道教育大学教授）
13	音楽と都市文化―南北アメリカ	はじめに　1.ジャズとニューオリーンズ（クリオール）　2.ニューヨークとティン・パン・アリー 3.ニューヨーク・ラテンサルサ　4.ニューヨークのストリート・カルチャー　ヒップ・ホップ 5.西の拠点　ロサンジェルス　6.ナッシュヴィルとカントリー音楽　7.カントリー・ミュージック 8.ラジオ番組の波紋	鈴木道子（国立音楽大学非常勤講師）
14	西洋クラシック音楽と民族性	1.民族音楽と西洋芸術音楽　2.西洋音楽の歴史　3.西洋クラシック音楽と演奏(イタリア人の音楽性、ドイツ・オーストリア人の音楽性、フランス人の音楽性)　4.ヨーロッパ周辺国諸民族の演奏に表れた音楽性(ロシア人音楽家によるドイツ音楽の演奏、ドイツ人音楽家によるロシア音楽の演奏、ハンガリー人の弦楽器の音色)　5.中近東の諸民族の演奏(レバノンのピアニストによるベートーヴェン演奏、トルコのピアニストによるブラームス演奏)　6.アジアの諸民族の演奏他	柴田南雄
15	音楽と人種・言語・民族	付・音楽の始原説について 1.人種・民族と音楽文化　2.言語と音楽文化 3.西洋作曲様式のもとでの民族性 付・音楽の起源に関する過去の諸説について	同上

＝文化人類学＝（TV）

〔主任講師：祖父江孝男（放送大学教授）〕

全体のねらい

文化人類学という学問を一言で定義すれば、世界の諸民族のもつ文化や社会について比較研究する学問だと言える。それらの特色を具体的・実証的にとらえていくところに特徴がある。本講においては文化人類学の諸分野における今までの成果を概観し、日本人、日本文化の問題や国際理解など、身近な課題にも眼をむけていきたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	文化人類学とはどんな学問か？	フィールド・ワークの学問　アメリカにおける区分法　英国における区分法　ドイツ、オーストリアにおける区分法　日本における区分法　民俗学と民族学　欧米におけるこの分野の歴史　日本における歴史　人種と民族	祖父江　孝　男（放送大学教授）
2	文化：人間の特質	人間の特質としての言語能力　動物の鳴き声　人間の言語の特色　言語の役割(1)コミュニケーション　言語の役割(2)記憶と複雑な思考　人間だけがもつ文化　文化はいつ生まれたか？	同　上
3	文化の進化、文化の伝播	19世紀の文化進化論　モルガンの社会進化論　進化論にかわって登場した伝播論　イースター島の問題　タバコの伝播	同　上
4	生業と経済	狩猟と採集が最初の段階　狩猟の規模によって生活形態が異なる　不安定な狩猟採集民の経済　農耕とその起源　穀物農耕により人間の生活はどう変わったか　日本の場合を考える　牧畜の起源	同　上
5	衣・食・住を考える	衣類の種類と系統　身体装飾　食物の基本型：主食の獲得と利用　調理の基本型　住居の基本型	同　上
6	言語とコミュニケーション(1)	音声学　音楽　構造言語学とエティックの立場、エミックの立場　言語の系統―比較言語学	同　上
7	言語とコミュニケーション(2)	言語の分類(1)文字のある言語、ない言語　言語の分類(2)形態による分け方　サピア・ウォーフの仮説　非言語的コミュニケーション	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	家族と親族(1)	原始乱婚制説をめぐって　モルガンの方法における誤り　一夫一婦制と一夫多妻制　一妻多夫制家族　婚姻後の居住場所の分類	祖父江　孝男
9	家族と親族(2)	父系制と母系制　母系制　リネージと民族　日本の同族　イトコ婚をめぐるレヴィ・ストロースの学説　レヴィレート婚、ソロレート婚　冗談関係と忌避　配偶者選択における自主制	同　上
10	超自然観と宗教	アニミズムとアニマティズム　宗教と呪術　呪術の分類　妖術（ウィッチクラフト）　シャーマニズム　日本のシャーマニズム	同　上
11	民族芸術と音楽・芸能	民族芸術　民族音楽学からみた日本の音楽　芸能	同　上
12	文化と心理・民族性	民族性・国民性は文化によって作られる　マーガレット・ミードによるニューギニア研究　日本文化と日本人の心理、国民性　重要な因子としての歴史と風土　県民性を例にとって考える　風土ということばの意味　家族関係としつけの様式	同　上
13	文化変化と文化変容	文化変容（アカルチュレーション）　文化変容の種類　ハワイの場合、北米インディアンの場合　相対主義　カルチャー・ショック　反文化変容運動　文化変容をどう評価するか　戦後日本の文化変化	同　上
14	国際理解と国際交流	村垣淡路守のこと　エスノセントリズムと相対主義　異なった背景に異なった慣習　日本人の対外感覚	同　上
15	エピローグ	触れ残した諸領域　認識人類学　医療・映像・教育人類学　都市人類学　象徴人類学・女性の人類学　80年代の人類学　フィールド・ワークの方法と倫理	同　上

＝アフリカ論＝（TV）

〔主任講師：川田順造（東京外国語大学教授）〕

全体のねらい

アフリカの姿を過去現在にわたってかなりくわしく、しかも全体像がつかめるような形で紹介する。写真、図版、ビデオ、録音（道具、衣類、楽器などの実物も）を豊富に使い、アフリカの姿がいきいきと視聴者に伝わるように工夫する。日本人との関係でのアフリカ、現在から未来へ向かってのアフリカについても十分考えるようにしたい。地域別各論では、それぞれの地域での現地調査経験の長い専門家を適宜ゲストに招いて、川田がきき役になり対談形式で他の地域と対比させながら次第に全体像が作られていくようにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	自然と人	1. アフリカの自然 2. アフリカの人種	門村　浩（東京都立大学教授） 尾本恵市（東京大学教授）
2	アフリカの言語	1. アフリカの言語の分類と分布 2. 源郷（homeland）の推定と言語の拡散 3. アフリカの言語の特徴 4. 多言語併用と共通語 5. 太鼓ことば	加賀谷良平（東京外国語大学助教授）
3	歴史の中のアフリカ	1. 文字史料と遺跡の欠如 2. アフリカ史の諸性格 3. 植民地化以前の国家	川田順造（東京外国語大学教授）
4	都市・新しい民族形成	1. 多部族共生の国民社会 2. 部族本位制社会―アフリカの伝統的社会 3. アフリカ社会の植民地化 4. 植民地に対する住民の反応 5. アフリカ社会の都市化 6. アフリカ都市の社会的特性 7. アフリカの国民社会	日野舜也（東京外国語大学教授）
5	ベルベル文化とイスラム―北アフリカ	1. 北アフリカ文化の多元性 2. ベルベル人とベルベル文化 3. イスラム化の過程 4. 伝統的なマグリブ社会と文化の特徴 5. 北アフリカ的個性とアイデンティティ	宮治美江子（東京家政大学教授）
6	家畜と人間	1. はじめに　2. 東部アフリカ牛牧文化複合 3. 家畜の個体識別 4. 家畜の分類と民俗遺伝観 5. 色・模様の認識 6. 色・模様を介した世界観そして儀礼 7. 特定の色・模様（家畜）へのアイデンティティと攻撃性	福井勝義（国立民族学博物館助教授）
7	サバンナと森林の文化	1. 多様な自性条件 2. 自然と食生活 3. 自然と物質文化 4. 産物と交易 5. 人種・言語・社会 6. 外の世界との交渉 7. 王と商人	川田順造

回	テーマ	内容	担当講師 （所属・氏名）
8	農産物と魚の物々交換—中部アフリカ	1. ソンゴーラの焼畑耕作の方法 2. ソンゴーラの焼畑作物の構成 3. マニオクの調理法に見る三つの伝統 4. アブラヤシへの依存　5. ザイール川の漁労民 6. 農産物と魚の物々交換 7. 物々交換市の制度 8. 農耕民の客分としての漁労民	安溪遊地 （山口大学助教授）
9	東アフリカ農耕社会の家族と親族	1. 東アフリカの農耕社会 2. 家族・リネージ・クラン 3. 複婚家族の実態 4. 冗談関係と忌避関係	松園万亀雄 (東京都立大学助教授)
10	アフリカの採集狩猟文化	1. ムブティ・ピグミー 2. ブッシュマンとの比較	原子令三 （明治大学教授） 田中二郎 （京都大学教授）
11	女性とその世界	1. はじめに 2. 日常の生活 3. 女性の一生 4. 女性の領域、女性の世界 5. おわりに	上田冨士子 (新潟大学非常勤講師)
12	アフリカの世界観—知恵と力	1. 世界観の基調 2. 神観念をめぐって 3. 双極論 4. トリックスター	阿部年晴 （埼玉大学教授）
13	ものと人間	1. ものと人間のかかわりの原型 2. からだの延長としての道具 3. 「もの」の文化的意味 4. 工人集団と技術の継承 5. 技術の停滞と変革	川田順造
14	商品経済の進展と開発の問題	1. 輸出向け換金作物の導入 2. 鉱産物輸出経済の形成 3. 輸入製品の流入 4. 独立後の工業化の動き 5. 農村開発重視への転換	吉田昌夫 （アジア経済研究所 コーデイネーター）
15	アフリカが提起するもの	1. 私たちにとってのアフリカ 2. アフリカと他の世界との交渉 3. 受動性と同化力 4. アフリカから学ぶもの	川田順造

＝ イギリスの言語文化 ＝（TV）

〔主任講師：橋口　稔（東京大学教授）〕

全体のねらい

ルネサンスの時代から20世紀の現代まで、主として文学作品をとおして、イギリス文化の諸相を歴史的に辿ってみようと思う。短いものであっても英語のテキストを読むことを交えながら、イギリスの言語文化の特質を明らかにしたいと考えている。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	英語の歴史	・「イギリス」という言葉　・古英語、中英語、近代英語　・近代英語とシェイクスピア　・英語の語彙	橋口　稔（東京大学教授）
2	シェイクスピアⅠ	・ルネサンスの潮流　・＜新しい学問＞の展開　・近代英語による新しい詩　・エリザベス朝の演劇と劇場　・シェイクスピアと「地球座」	同　上
3	シェイクスピアⅡ	・ストラトフォードのウィリアム・シェイクスピア　・劇作家ウィリアム・シェイクスピア　・シェイクスピアの四つの時期　・史劇・喜劇・悲劇について　・シェイクスピア劇の韻律	同　上
4	欽定訳聖書	・欽定訳聖書とは何か　・英国国教会の成立　・聖書の英訳　・欽定訳聖書の誕生　・欽定訳聖書の英語　・その後の英訳	同　上
5	ミルトン	・ピューリタンの精神　・ミルトンのすぐれた才能　・ピューリタン革命　・ピューリタン　・『失楽園』	同　上
6	ロビンソン・クルーソウ	・海外冒険物語　・『ロビンソン・クルーソウ』　・無人島の位置　・入植者ロビンソン　・作者ダニエル・デフォー	同　上
7	近代小説に見る生活Ⅰ	・ジェントリー階級　・フィールディングの『トムジョウンズ』　・オースティンの『高慢と偏見』　・相続と結婚　・作者オースティン	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	ロマンティシズム	・ワーズワースと自然　・『抒情歌謡集』 ・『序曲』　・イギリスの産業革命　・イギリスのロマンティシズム　・ジョン・キーツと美	橋口　稔
9	近代小説に見る生活Ⅱ	・イギリスのパブリック・スクール　・パブリック・スクールの功罪　・ディケンズの『オリヴァー・トウィスト』　・二つの国民	同　上
10	ヴィクトリアニズム	・帝国主義的繁栄　・テニソンの『イン・メモリアム』　・アーノルドの『ドーヴァー・ビーチ』 ・ハーディーの『テス』	同　上
11	ブルームズベリー・グループ	・新しい時代への期待　・グループのメンバー ・G.E.ムアの『倫理学原理』　・グループの人間関係　・グループの基本姿勢　・ストレイチーと伝記　・ヴァージニア・ウルフの『波』	同　上
12	T. S. エリオットとD. H. ロレンス	・エリオットの詩集　・ロレンスの『息子たちと恋人たち』　・ジェントリー文化への影響	同　上
13	オーデン世代	・オーデン・グループの人たち　・『新署名』と『新領土』　・W.H.オーデン　・スペイン戦争 ・オーウェルの『カタロニア讃歌』　・『ウィガン波止場への道』より　・『動物農場』と『1984年』　・オーデンの長詩	同　上
14	第二次世界大戦後Ⅰ	・新しい演劇―『怒りをこめて振り返れ』　・労働者階級出身の作家たち　・アラン・シトリー ・オズボーンの及ぼした影響　・新しい桂冠詩人	同　上
15	第二次世界大戦後Ⅱ	・戦後のイギリス　・新しい詩人たち　・ラーキンの『教会へ行く』　・新しい小説　・新しい小説家たちの登場　・マードックの『鐘』	同　上

=アメリカの言語文化 II=(R)

〔主任講師：比嘉正範（放送大学教授）
Nicholas J. Teele（同志社女子大学助教授）〕

全体のねらい

この科目は、アメリカで使われている英語、いわゆる「アメリカ英語」(American English)の社会的・文化的背景を説明し、受講生がアメリカ英語の性質と多様性をよりよく理解し、アメリカ英語をより効果的に使えるようになることを目的としている。受講生はすでに「中級」以上の英語を習得していることが望ましい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	アメリカ英語の多様性	この科目の全体的な紹介を兼ねてアメリカ英語にはどのような多様性があるのか、言葉の多様性と社会的および文化的要素とどのような関係があるのかを概観する。	比嘉正範（放送大学教授）
2	黒人英語	アメリカの人口の10パーセント以上を占めている黒人の間で使われているいわゆるBlack Englishの特徴を具体的に説明し、アメリカ英語の一方言としてのBlack Englishに対する理解を深める。	田中幸子（椙山女学園大学教授）
3	アメリカ英語の男女差	アメリカ英語の男性語と女性語の特徴を具体的に説明し、両者の差を明らかにする。	井出祥子（日本女子大学教授）
4	アメリカ英語の敬語	アメリカ英語にも敬語があることは意外に知られていない。日本語の敬語と比較対照しながら、アメリカ英語の敬語の特徴と使用状況を具体的に説明する。	同上
5	アメリカ英語の比喩	アメリカ英語で使われている比喩の言語的構造と内容的特徴を具体的に説明し、比喩を比較文化的に考察する。	平賀正子（放送大学助教授）
6	アメリカ英語のオノマトペ	どの民族の言語にも特有の擬声語(onomatopoeia)があるが、本章では日本語の擬声語と比較対照しながらアメリカ英語の擬声語を紹介する。	筧寿雄（神戸大学教授）
7	アメリカにおける広告の言葉	アメリカは広告と広報活動の盛んな国である。アメリカにおける広告の言葉の特徴を発想と表面の面からとらえて比較文化的に説明する。講義は英語で行う。	Vance E. Johnson（明治大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	アメリカの初等および中等教育における英語教育	日本における国語教育に匹敵するアメリカにおける英語教育が小学校と中学校でどのように実施されているかを説明する。講義は英語で行う。	Nicholas J. Teele（同志社女子大学助教授）
9	アメリカの大学における英語教育	アメリカにおける国語教育である英語教育が大学の一般教養課程の一部としてどのように行われているかを説明する。講義は英語で行う。	同上
10	アメリカにおける外国語教育	英語が国際語になっているのは事実だが、アメリカの高校や大学で外国語教育が行われているのも事実である。アメリカにおける外国語教育の現状、特徴、問題点などを報告する。	牧野高吉（北海道教育大学教授）
11	アメリカにおけるピジン英語	一般にピジン英語は単なる不完全な英語と見なされがちだが、アメリカで使われているピジン英語の特徴、造語力、表現力などを説明する。	比嘉正範
12	アメリカにおけるバイリンガリズム	アメリカは多民族、多文化、多言語の国といわれている。このような国におけるバイリンガリズム（二言語使用）あるいはマルティリンガリズム（多言語使用）の現状、問題点、これに対する政府の政策などを紹介する。	本名信行（青山学院大学教授）
13	アメリカ英語の「人間・社会関係文」	人間関係を作ったり、保ったり、壊したり、修複したりするときに使われる表現を「人間社会関係文」、略して「関係文」と呼んでいるが、アメリカ英語の関係文の特徴を比較文化的に説明する。	比嘉正範
14	アメリカ英語の民主化	民主主義や民主化は政治に限られたことではない。多くの社会で言語が人間差別や社会階級意識維持の手段として使われてきた歴史があるが、アメリカではどのようにして言語の民主化が行われてきたか、あるいは行われつつあるかを論じる。	同上
15	国際語としてのアメリカ英語	英語が国際語になっているといわれても、英語にはイギリス英語、アメリカ英語、オーストラリア英語などがあり、それぞれの国際性は必ずしも同一でない。この章では国際語としてのアメリカ英語の現状と今後の発展を論じる。	比嘉正範 Niholas J. Teele

＝ドイツの言語文化＝（TV）

〔主任講師：辻　　瑆（放送大学教授）
　　三島憲一（学習院大学教授）〕

全体のねらい

日本におけるドイツ像の成立をふりかえった上で、ドイツ文化がアイデンティーティーを獲得したとされるゲーテ時代と、そのゲーテ時代の文化を政治的統一のためのイデオロギーと化してゆく19世紀後半の状況を対比、時には政治的な遅れの故に、高度の内省的、批判的文化を作り出してゆくドイツ独特のメカニズムを解読する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	日本の中のドイツ、ドイツの中の日本	この講義の意図　さまざまなドイツ像・日本像　森鷗外と姉崎嘲風　憧憬の対象と粗暴な自己正当化　そのつどそのつどのドイツ　変わらないドイツ像・いぶかるドイツ人　失われていく差異の意義　ようやく始まる理解	三島憲一（学習院大学教授）
2	ニュルンベルクに見るドイツ史	ニュルンベルク市を例としてのドイツ史概観	辻　瑆（放送大学教授）
3	啓蒙の時代(1)―フリードリヒの世紀―	啓蒙主義と脱魔術化　啓蒙主義と市民階級　批判の精神　公共の場での啓蒙	三島憲一
4	啓蒙の時代(2)―カントと批判精神―	ドイツ啓蒙主義の特質　ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツ　単子論　その後のドイツ思想の特質　クリスチャン・ヴォルフ　イマヌエル・カント　カントの問い　『純粋理性批判』『実践理性批判』と『判断力批判』	木田　元（中央大学教授）
5	感性の解放―「若きヴェルテルの悩み」を中心に―	啓蒙主義と芸術　新時代に先駆ける文学　個人と社会慣習とのはざま　貴族と市民　小説『ヴェルター』の反響　解放か逃避か　作品解釈と時代	欝田　収（学習院大学教授）
6	フランス革命とドイツ観念論	政治と哲学　政治と芸術　古代と美と自由　ドイツ観念論　ヘーゲル―精神現象学と人類の「教養」　理念と現実	木田　元 三島憲一
7	ロマン派の夢―市民社会と芸術	初期ロマン派とフランス革命　政治革命から「美的革命」へ　市民社会批判としての合理主義批判　世界の「ロマン化」　ロマン的イロニー　後期ロマン派　ヨーロッパ的運動としてのロマン主義	大貫敦子（千葉大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	芸術から社会の現実へ—ハイネを手掛かりに—	ハインリヒ・ハイネ 「芸術時代の終焉」 市民階級の理想 7月革命期のドイツとフランス 解放戦争前後の国民意識 7月革命とハイネ 『フランスの画家』『フランスの状態』 3月前期の文学史 時代に呼びかける詩『ドイツ、冬物語』『ドイツ、冬物語』より	磐田 収
9	歴史の世紀—擬古典主義と記念碑—	市民社会と歴史 芸術は過去のもの 歴史と国民意識との結びつき 歴史志向の帰結—芸術の馴致 精神科学の制度化 記念碑その他	三島憲一
10	ドイツ帝国の時代—文化批判と社会運動—	教養俗物への批判 『悲劇の誕生』とヴァーグナー アポロ的とディオニュソス的 ソクラテスと芸術の解体 ヴァーグナーとの不和 近代批判と未来への期待 二つの文化	同上
11	終わりか始まりか—世紀末とカフカ—	ニーチェとそれに続く時代 世紀末 解放か？ アール・ヌーボー（ユーゲント・シュティール） ミュンヘン 文芸誌と画家 作家たち 凋落 終わりか始まりか、フランツ・カフカ 書くことと生きること	辻 瑆
12	帝国の瓦解とワイマル時代	帝国の矛盾と表現主義 第一次大戦の敗北と共和国の誕生 共和国の苦難 黄金のワイマル文化 建築と映画 共和国の終焉	山本 尤（京都府立医科大学教授）
13	30年代とナチズム	ヒトラーの政権掌握 文化統制と亡命 大衆の熱狂と反ユダヤ主義 知識人のナチへの期待 第三帝国の崩壊	同上
14	二つのドイツ	敗戦と東西の分裂 47年グループとハイデガー フランクフルト学派など学生叛乱 分裂の認定と平和的な共存	三島憲一
15	現代の中のドイツ	トーマス・マンの呼びかけ なぜまたもやブロイセン・ドイツなのか 日本とドイツの近似性 日本とドイツの対照性 ヴァイツゼッカー大統領の講演 ギュンター・グラスとシュテファン・ハイム グラスの見解 文化によるアイデンティティー 脅威の下で ハイムの見解 何がちがうか 伝統と断絶 さまざまな社会運動と緑のグループ 生の直接性を求めて ヨーゼフ・ボイス ユルゲン・ハーバーマス	辻 瑆

＝ドイツの言語文化Ⅱ＝（TV）

〔主任講師　辻　　瑆（放送大学教授）
　　三島憲一（学習院大学教授）〕

全体のねらい

「言語文化１」では啓蒙主義以後のドイツの激動の歴史と反省的な文化のあり方を扱ったのを承けて、「言語文化Ⅱ」では現代のドイツ語圏、それも主としてドイツ連邦共和国（西ドイツ）の社会と文化の様々な側面に光をあててみたい。地方ごとの特色、家庭や女性の問題、政治の仕組みや労働組合のあり方、また現代の芸術や文学などをときには日本の状況と比較しながら紹介し、考えてみたい。同時に生きたドイツ語にもできるだけ触れるようにするつもりである。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	ドイツ語圏の地方	ドイツ語圏には４つの国があるのみならず、個個の地方も昔から分裂国家であった歴史を反映して、非常に個性豊かな特色を持っている。いくつかの代表的な地方の文化的特色を扱う。	轡田　収（学習院大学教授）
2	連邦制	地方の多様性が西ドイツの連邦制にどのように反映しているかをも考えてみたい。各州の特色、教育や文化面での連邦の役割などを扱う。	同上
3	政治の仕組	西ドイツを中心に基本的な政治の仕組や制度、政治倫理や政治に働く様々な力学の表れ方、一般市民のもつ民主主義についての理解などを日本とも比較して扱う。	三島憲一（学習院大学教授）
4	労働と余暇	ドイツ人（特に西ドイツ）の職業生活、職業観は日本の場合と随分ことなる。余暇の過ごし方、それを支える法的基盤、また労働者の共同決定の仕組等について考える。	同上
5	西ドイツ社会における家庭	ドイツの家族のあり方も、価値観の激しい変動の影響を深く受けている。伝統的な市民的家庭はもはや無傷のままでは存続してはいない。それに伴って家族に関わる法的基盤もさまざまに変わりつつある。そうした問題群に制度と日常生活の両面から光を当てる。	大貫敦子（千葉大学助教授）
6	女性問題	家族、そして社会全体の雰囲気の変化に大きく寄与したのが女性の意識の高まりである。さまざまな新しい動き、そして女性運動を見る。また、そのような変化の文学的表現も扱う。	同上
7	ドイツ連邦共和国の教育制度	ドイツ連邦共和国の教育制度は複雑に見える。また平等主義的な教育制度も定着しなかった。これを歴史的な背景から見ていく。	エンゲルハルト・ヴァイグル（東京大学外人講師）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	学生・大学・職業教育	ドイツ独特の職業教育とはどのようなものであるかを見る。さらに大学構内の制度や授業のあり方などを日本の場合とも対比しつつ明らかにしていく。	エンゲルハルト・ヴァィグル
9	都市と住宅(1)	ベルリン、ミュンヘン、ハンブルク、フライブルクなどドイツ語圏の個性豊かな都市の伝統を紹介し、都市と西欧文化との関連を考える。	辻　　理 （放送大学教授）
10	都市と住宅(2)	現代の都市が抱えている諸問題を、都市計画、デザイン、住民参加などとの関連で考える。	同　　上
11	過去の傷　(1)	第二次世界大戦の侵略国でありながら、過去の国家的犯罪に対する態度は日本と西ドイツではだいぶ異なる。西ドイツにおける過去克服の試みを制度や教育の面で扱う。	三島憲一
12	過去の傷　(2)	過去の問題が知識人や作家、そして公共の世論においてどのように論じられているかを、いくつかの逸話などによって再構成し、日本の状況とも比較して考える。	同　　上
13	現代ドイツの文学、演劇、映画、芸術(1)	60年代、70年代を中心に、ベルをはじめ現代作家の業績や芸術家のグループの活動を概観する。東ドイツの文学・芸術にも触れる。	岩淵達治 （学習院大学教授）
14	現代ドイツの文学、演劇、映画、芸術(2)	70年代の内面化傾向、女流文学の動き、演劇、映画の傾向をさぐり、80年代の文学を考察する。	同　　上
15	新しい社会運動	現在の社会制度や文化にかわるものを見つけようとする「アルタナィーヴェ」のさまざまな局面「カウンター　カルチャー」や「緑の人々（緑の党）」などを通して現代産業社会の問題点と新しい社会運動の行方を考える。	大貫敦子

＝フランスの言語文化＝(TV)

〔主任講師：福井芳男（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

フランス語はフランス文化を形成する基本的要素であり、それ自体世界に誇る文化財となっている。フランス語がいかなる場で用いられ、歴史的にどう成立したか、言語芸術がどうなっているかをフランス語を知らない人にもわかるように説明し、フランス語の美しさを守る心を日本語の美しさを守る心と関連させて考えてみたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	フランスという国 ―序論―	フランスとはどういう国であるか、フランスに関して人の持つイメージに触れながら、フランスの地理と歴史について基礎的な事柄を学ぶ。	福井芳男 （放送教育開発センター教授）
2	フランス語はどこで、どんな風に話されているか	フランス諸地方の方言、また特殊なブルトン語、バスク語に触れる。後半では世界のどこでフランス語が使われているか（ベルギー、スイス、ケベック、アフリカなど）を見る。	同上
3	食べる楽しみ、話す楽しみ	料理を味わいながら、話をする。会話を楽しむ。これがフランス語をうけつぎ、また洗練させる源泉であった。そして名高いフランス料理とはいったいどういうものか。	同上
4	言葉は遊び ―社交・ギャラントリー―	言葉はまた人間の飾りにもなる。巧みに言葉を操り、社交を楽しむ。サロンなどで女性たちを楽しませる。こういったことが、いかにフランス語を磨かれたものとしたか。	同上
5	言葉は武器になる ―マスメディアと政治家のフランス語―	フランス語に変貌を強いているのは、ジャーナリズムであるが、ここでフランス語はどう使われているか。フランス歴代政治家がいかに名文家であったか。	同上
6	フランス語を守り伝える ―学校教育と辞書―	フランス語の純粋さを守るのは、学校教育である。ここでどういう風にフランス語を教えているか、さらに辞書はどういう発展をとげたか、辞書がフランス語の護持にいかに役立ったかも示す。	井村順一 （東京大学助教授）
7	フランス語の誕生と中世文化	ラテン語がカエサルのゴール攻撃によりもたらされ、フランス語が成立する過程と、それとともに中世の文化がいかに花さいたかをみる。	新倉俊一 （東京大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	ヴェルサイユ宮の栄光 —近代フランス語の確立—	17世紀古典主義時代に確立したフランス語について、そして18世紀全ヨーロッパに輝いたフランスの栄光を語る。	福井芳男
9	パリに生きる人たち —現代のフランス語—	現代フランス語のさまざまを、それを使う人たち、場所などとも考察する。	同上
10	明快さと深さは矛盾しない —散文の美しさ—	パスカルを中心にして、フランス語の明快さとは何か。それを駆使して人間の心の奥へ迫った思想家たちに触れる。	同上
11	魂の深い淵から —詩の美しさ—	ボードレールを中心に、フランス語の詩の形、美しい詩の形の発見、さらにそこから人間の魂の苦悩をいかに歌い上げたかを考察する。	同上
12	人間の心をたずねて —小説の伝統とマルセル・プルースト	プルーストを中心に、人間の心の奥をたずねるフランス小説の伝統と、そして「書くこと」の意味を追求する近代・現代小説の流れとを考える。	同上
13	人間の運命に対して —悲劇と喜劇—	フランス演劇の典型として、喜劇のモリエール、悲劇のラシーヌをとりあげ、古典の伝統、フランス演劇の伝統について考える。	同上
14	映像、旋律と言葉を結んで —映画とシャンソン—	大衆芸術としての映画と言葉とのかかわり合い、そしてフランス映画の楽しみ、民衆の心を歌うシャンソンなど、現代の言語芸術について考える。	同上
15	日本とフランス —2つの言語文化の触れ合い—	フランス人の日本観、日本語観の変貌、日本人のフランス文化、フランス語観の変遷を通じて、深いところでの日仏文化交流の道を考える。	同上

＝フランスの言語文化 Ⅱ＝(TV)

〔主任講師　福井芳男（放送教育開発センター教授）〕

全体のねらい

フランスの文化を作りあげたものは、長年にわたる作家、思想家、芸術家、それらを支えた民衆たちであった。現代のフランス精神に大きな跡を残している。各世紀の重要な文化事業（文化作品を中心とする）を選び、その証明を通じて、フランス文化の現在を浮き上らせていく。毎回短かいフランス語の文を読む。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論	15回の講義の趣旨、主題の説明 基本的には、美しいフランス語、花咲くフランス文化を作りあげるため、作家、思想家、芸術家がいかに苦しんで作っていったのか、それを支えた社会との関連を追求し、フランス精神の恒常的な要素を追究する旨を述べる。	福井芳男（放送教育開発センター教授）
2	ルネサンスとは何か	近代を作ったルネッサンスとは何であったか。イタリアの影響は？　そして人文主義の教養がフランス文化をいかに支えたか　―ロワールの城、神話の問題、ラブレー、ロンサール、モンテーニュ	同上
3	人文主義・文化		福井芳男 塩川徹也（東京大学助教授）
4	世界観の変革と人間の苦悩	近代科学を人間の思考、世界観に組みこむため人間はいかに苦悩したか ―ガリレイ、ケプラーたち ―デカルトとパスカル	福井芳男
5	古典の美とは	古典主義文学とは何であったか、規制と自由―ベルサイユ宮、そして、モリエール、ラシーヌ、ラ・フォンテーヌなど人間の心を美しいフランス語で描き出した文学者たち	同上
6	雅びな宴	宮廷文化の雅び、ギャラントリーの誕生、そしてその雅びの道から生きる喜びを求めた人たち ―マリヴォー『マノン・レスコー』・コデルロス・ド・ラクロ・ワットー・ブーシェ・フラゴナール	同上
7	啓蒙の光	百科全書は、近代的知を、人間の思考に組み入れる壮大な作品であった、―モンテスキュー、ヴォルテール、ディドロ、ルソー、現代の百科全書の試みにも触れる	福井芳男 鷲見洋一（慶応大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	革命の火	フランス大革命は、社会の構造を近代産業社会に適用させるための大きな震動であり、余震は19世紀を通じてしばしば起っている。 大革命の指導者たちの夢と現実の革命 ―ロベスピエールほか、ロマン派的空想社会主義（ユゴー、サンド）	福井芳男
9	ロマン主義革命	ロマン主義は単に文学の解放運動であっただけではない。世界観、特に文学観 ―知性と社会との関係の大きな変革であった。自我の開花 ―シャトーブリアン、ユゴー	福井芳男 井戸佳子 （放送大学助教授）
10	あるジャンルの運命 ―小説―	なぜ小説が、特に近代的ジャンルとして優位をおさめたか スタンダール、バルザック、フローベル、ゾラ、モーパッサン	福井芳男 宮原信 （放送大学助教授）
11	ブルジョワ社会における知性	1857年、ボードレール、フロベールの2つの裁判で、知識人とブルジョワ社会との関係が極度に緊張した。 ―ボードレール、ヴェルレーヌ、呪われた詩人たち	福井芳男 井戸佳子 モーリス・パンゲ （東京大学講師）
12	言語の破壊	フランス語が、近代の感性、詩人の世界構築の夢を盛るのに十分ではなくなった。新しい言葉の探索が始まる。	福井芳男 菅野昭正 （東京大学教授）
13	世界観の革新	第一次大戦後、フランス文学も世界に開かれるようになった。主導的な役割を果たした、ジイドとNRF誌、また人間の内面への深い研究もプルーストによって切り拓かれた。他方、世界へ開かれた作家マルローなど	福井芳男 岩崎力 （東京外国語大学教授）
14	人間存在への問いかけ	第二次大戦後、人間が永遠につづくものではないことが痛切に自覚、人間存在への根源的な問いかけがなされるようになった。 ― カミユ・サルトル	福井芳男 モーリス・パンゲ
15	結論文化の交流と伝統	現代フランスで作家とは何か。 世界へ開かれたフランスの知性。 文学の伝播における翻訳の役割、特に日本文学のフランス語訳と関連づける。	福井芳男 井戸佳子

＝ロシアの言語文化＝（TV）

〔主任講師：川端香男里（東京大学教授）〕

全体のねらい

ロシア文学は、他の外国文学以上に日本人にとってなじみ深い文学であるが、それは19世紀のロシアの大作家たちが日本でよく読まれたおかげである。これらの作家をとりあげて、新しい光をあて、かつその前の時代、後の時代とのつながりを考えて、ロシアの言語文化の諸相を明らかにする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	『イーゴリ軍記』	11世紀から17世紀末までのロシアの「中世文学」を概観し、この時代の最高傑作である『イーゴリ軍記』について学ぶ。	栗原成郎（東京大学教授）
2	ピョートル大帝とエカテリーナ女帝	18世紀ロシアの歴史も文化もロマノフ王朝のふたりの皇帝、ピョートル1世とエカテリーナ2世の名前と深く結びついている。	直野敦（東京大学教授）
3	プーシキンⅠ―その歴史的位置―	ピョートル大帝によるロシア近代化の1世紀の総決算として歴史の上に登場したプーシキン。その文化的業績について学ぶ。	栗原成郎（東京大学教授）
4	プーシキンⅡ―その主要作品―	プーシキンの多彩な作品世界を解説する―叙情詩、劇詩、物語詩、散文小説。	同上
5	『エヴゲーニイ・オネーギン』	韻文小説というユニークな形式で世界文学の古典的作品のひとつに数えられるプーシキンの代表作『エウゲーニイ・オネーギン』の魅力の解明。	川端香男里（東京大学教授）
6	ゴーゴリ	風刺と笑いで知られる作家ゴーゴリは、詳しく見ると芸術と思想の相克、リアリズムと幻想性の混交というロシア文学の特質を彼なりに表現していることがわかる。	同上
7	ドストエフスキィⅠ―その時代と生涯―	ドストエフスキィの活躍した時代は、ロシア文学史の上では小説の黄金時代である。彼の時代と生涯をたどってみる。	直野敦

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	ドストエフスキィⅡ —その主要作品—	『貧しき人々』から『カラマーゾフ兄弟』にいたるドストエフスキィ作品の秘密をさぐる。	直野　敦
9	『罪と罰』	小説としての面白さ、筋の運びの巧みさ、思想的深み、あらゆる点で19世紀ロシア小説の頂点にある作品をじっくりと読む。	同上
10	トルストイⅠ	精神的危機にみまわれ回心に至るまでの生涯と作品をたどる。日本との関係も考えてみる。	川端香男里
11	トルストイⅡ	思想的・宗教的傾向に大きく傾斜した晩年の作品や活動をたどり、『戦争と平和』『アンナ・カレーニナ』の二大作について解説する。	同上
12	チェーホフⅠ —その生涯—	19世紀末ロシアの不安な時代の見事な鏡と言えるチェーホフ。チェーホフの生涯とその作品の世界を概観する。	島田陽 （東京大学助教授）
13	チェーホフⅡ —その演劇—	演劇史的に見たチェーホフの新しさ、独自性をさぐる。日本ではチェーホフはどのように受けとられてきたか。	同上
14	ロシア革命と詩人たちⅠ	ロシア革命はちょうどロシア詩の「銀の時代」の出来事であった。詩人たちはこの革命にどのように対したであろうか。	同上
15	ロシア文学—その過去と現在	ソビエト時代に入って文学はまったく新しい文学になったように見える。本当にそうなのであろうか。その最近の動向をふまえて、ロシア文学1000年の歴史をふりかえってみる。	川端香男里 島田陽

＝ロシアの言語文化Ⅱ＝(R)

〔主任講師：川端香男里（東京大学教授）〕

全体のねらい

ロシア文学を中心にロシア的なるもの、ロシアの伝統を考えることを意図した「ロシアの言語文化Ⅰ」を受けて、名文章、名語句、成句、諺等、ロシア語の具体的表現例をもとにして、ロシア文化の多様な測面をとりあげ、ロシア文化の特質をさぐる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	ロシア的なるものとは ―序論―	プーシキン、チュッチェフの文章をもとに、ロシアという国のイメージを探りつつ、ロシア史を貫ぬく特質について考える。	川端香男里 （東京大学教授）
2	ロシア語について	トウルゲーネフの散文語『ロシア語』を軸にロシア語の歴史、特徴、ロシア時代とのかかわりについて述べる。	栗原成郎 （東京大学助教授）
3	ロシアの民衆文化Ⅰ ―異教の神々とキリスト教の聖者たち	民間信仰の多様な世界と、その後に入って来たキリスト教との結びつきを解明しながらロシア国民の大多数を占める農民の精神世界について述べる。	同上
4	ロシアの民衆文化Ⅱ ―民間歴による年中行事と民衆の	ロシアにおいて口承文芸の果した重要な役割について考える。	同上
5	ロシアの民衆文化Ⅲ ―諺・諺的成向・名句名言	諺や寓話詩を通してロシア人の生活、習俗、考え方を明らかにする。	同上
6	ロシアの民衆文化Ⅳ ―諺にみる民衆の生活文化	諺に現われた動物の寓意を通じて、ロシア人の民族的心性について考察する。	同上
7	ロシアの自然Ⅰ ―「祖国」と自然	ロシア人の自然感情を詩を通して解明する。またロシアの詩人にとって自然は叙学の題材であるだけではなく、哲学的、歴史的考察のきっかけであった。この点に光をあてて自然との文学とのかかわり合いを考える。	川端香男里

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	ロシアの自然Ⅱ—ロシアの詩に見る民衆の感情	文学作品を通して、ロシアの植物、花とロシア人とのつながりを見る。	川端　香男里
9	ロシアの自然Ⅲ—ロシアの森と河	人と動物とのかかわり合いを、生活史的に見て振く。	同上
10	ロシアの大地—ロシア人はどのように旅をしたか	ロシアの自然のいとなみとそこに生活し行き交う人々の姿を見て行く。農業、交通の歴史的考察	同上
11	都市と農村Ⅰ—ロシアの都市の成り立ち	18世紀以降のロシア近代化の中でペテルブルグという近代都市が成立するが、これは古いロシアの伝統の中にまったく新しい要素を生み出した。都市がロシア近代史に提訴した問題について考える。	同上
12	都市と農民Ⅱ農村と農民	近代化の進行の中で、農村および農民は社会の矛盾をもっとも味わせられることとなる。19世紀全体を通じ、今日のソ連に至るまでロシア文学の最も重要なテーマは、近代化の産業化の犠牲になった「農村」である。その点について考えてみる。	同上
13	民族Ⅰ	百を越える民族、百を越える言語を話すカシラーソ連、その中にあって国家構成員であるドイツ人、ユダヤ人はいかに生きてきたか。さらに、時にはロシアの歴史の主役を担ってきたコサックについても考察してゆく。	同上
14	民族Ⅱ	今日のソ連を構成する諸民族の中で、最大の人口をもつ東アラブ族のロシア人、次いでウクライナス人の歴史と現状を考える一方、非スラヴ系民族はいかに生きてきたか、その苦難の歴史を考察する。	同上
15	ロシアとソ連—連続と変化	ロシア的伝統がロシア革命以後のソ連体制のもとでどのように生き続けているか。その点について考えてみる。	同上

＝存 在 と 価 値＝

〔主任講師：今道友信（清泉女子大学教授）〕

全体のねらい

哲学の体系は、大別すると理論哲学、実践哲学、制作哲学の三部門から成る。この三部門を通じていずれに於いても最重要な概念は存在及び価値であろう。ところが従来理論哲学に於いて存在は形而上学が、価値は認識論がそれぞれ別々に問うてきた。そのため両者の関係は必ずしも明瞭ではない。本講義では一応歴史的にどのような考えがあったかを問うことも大切にするが、現代に生き未来を拓く人間として、存在と価値の問題をどのように考えているかを明らかにしたい。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	序論 問題の提出とその現代的意義	存在と価値とを考えてきた伝統的類型を明らかにし、それらの思考が直面する現代的限界を示し、この古来の問題が持つ現代的意義を哲学的に考究する。	今道友信（清泉女子大学教授）
2	歴史的省察 ― 交換可能性と分離的処理	存在と価値をめぐる最も基本的な考え方を歴史に求めるとすれば、両者の交換可能性並びに両者の分離的処理である。具体的に三人の哲学者に絞ってそれぞれの論理を明らかにする。	同上
3	唯物論的考察	18世紀に"関係"の哲学を樹立した唯物論者ディドロに言及し、主として現代の機械論哲学者ドゥルーズに於いて差異性を中心として、この主題を論ずる。	青山昌文（放送大学助教授）
4	科 学 哲 学	20世紀に飛躍的展開を示している科学に注目する科学哲学、及び認識に新たな考察を試みる認知科学の視点から事実世界の変動と相関的に存在と価値の問題を考察する。	伊藤笏康（放送大学助教授）
5	技 術 と 言 語	20世紀後半の哲学を刺激した問題の中で前々回及び前回の講義と連関して技術と言語とを取り上げ、それらをめぐる現代哲学の潮流の中で存在と価値がどのように組み合わされているかを論ずる。	今道友信
6	間－客体性（Inter-objectivitas）	フッサールやマルセルがそれぞれの意味で主張した間・主体性の問題とは逆の視点から間・客体性の省察が必要になる。それが存在と価値と並ぶ第三の概念を導出するであろう。	同上
7	脱存在論と倫理学	既にハイデガーに於いて西洋に於ける存在の哲学はある種のアポリアに直面した。それを予感してベルリンガーやジャンケレヴィッチは無の概念を深めた。それを一歩進めてレヴィナスは脱存在論の倫理学を第一哲学とした。その過程を論ずる。	橋本典子（青山学院女子短期大学助教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	芸術哲学としての美学	主として解釈を論ずる。確かに美の理念、美的経験や美的範疇も美学の重要な課題であるが、芸術は科学と並んで人間の営みとして最高のものであり、宗教と並んで神秘の啓示される限定された場なのである。この問題に関して存在の価値を問い、価値の存在を確かめる。	橋本典子
9	エコ・エティカ（Eco-ethica）	人間の生活環境の技術連関化に従い、技術は道具性を失なうことなく環境ともなった。この性格変化は単に価値の変化ばかりでなく、存在の変化でもありはしないか。人間はここで行為の原理をいかなる存在のいかなる価値に求めようとするのか。	今道友信
10	時の充実	悪とは時の非充実である。時の充実は、それならば単に善にとどまるのか。時の充実は存在や価値にとっていかなる意味があるのか。	同上
11	身の詩学	美しく創るために詩学がある。肉体でも物体でもない身という言葉がある。そしてそれは自身と言えば自我よりも自己そのものとなる。そのような身の美とは何であるか。そのような美を創る詩学とは何であるか。	同上
12	都市哲学（Urbanica）	日本では人口の8割が都市生活者である。世界の都市化は人間の存在状態と価値観に大きな変動を与えつつある。巨大都市と個人、巨大都市と国家とをめぐって、主題を探究する。	同上
13	死	生きる権利のある人間に死ぬ権利はないのか。存在理由を持つ人間に於いて死の理由はあるのか。自殺、所謂"安楽死"（エウタナジー）の可否をめぐって、存在と価値の人間学的展開を試み、更に自己同一性の先駆的終結としての死と差異性の問題を論ずる。	同上
14	存在を超えるもの	稀にではあるが人は寝食を忘れて何かにうち込むことがある。人は己れの存在を捧げるものをみつけた時幸せなのである。人間が自らの価値ある存在を捧げることによって何が出てくるのか。	同上
15	結び　人生経於ける哲学の意味	全体を総括し、講義のまとめを行なうと共に、その職業や社会的地位のいかんを問わず、人間として良く生きるために、即ち幸せに生きるために、人生に於ける哲学の意味を考える。	橋本典子

＝日本の言語文化＝(R)

〔主任講師：古田東朔（放送大学教授）〕

全体のねらい

日本の近代語自体を対象とし、それがどう作品とかかわりあいながら、言葉を形成してきたかの過程につってながめていく。文学作品はもちろん、それ以外の論説・翻訳・小学読本なども取上げ、話し言葉・書き言葉における問題点について考える。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	日本の言語文化	全体の序説。明治期における話し言葉（標準語・方言）、書き言葉（漢文訓読調・和文調）、言文一致等の問題が、どのように意識され、実際の作品を通して具体化されていったかについて、大きく見ておく。	古田東朔 （放送大学教授）
2	古代語と近代語	まず日本語の歴史について、概観する。日本語の史的変遷からすれば、大きく古代語と近代語に分けることができるが、それぞれどのような特色が指摘できるか、その主要な点について取上げる。	古田東朔 築島裕 （中央大学教授） 山口明穂 （東京大学教授）
3	上方語と江戸語	江戸時代の言葉のうち、前期は上方を中心とする上方語、後期になってからは江戸を中心とする江戸語が、特に取り上げられる。どのような違いが認められるかについてながめる。	古田東朔 坂梨隆三 （東大学助教授） 小松寺雄 （埼玉大学教授）
4	東京語へ	後期の江戸語が東京語へとなったが、階層等による言葉の違いが、明治以後においては次第に均一化されてくる。どこに基準を置くようになったかの過程について見る。	古田東朔
5	「国語」意識の成立	日本の近代国家としての成立は、「国語」という意識を確立させることになった。そのとき、どのようなことが解決を要すべき問題として考えられたか。それらの数々について考察する。	同上
6	方言と標準語・共通語	明治以後、全国に共通して理解される標準的な話し言葉は、どう考えられたか。まず文法的な面においてその統一が考えられたが、それらについてふれる。	同上
7	口語と文語	「口語」といい、「文語」というが、実際にはその術語でもって、内容を規定していったところがある。加えて、外国語との接触による日本文法の枠組みの再構成がかかわってくる。その過程について説明する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	新聞・雑誌の言葉	明治以後、新聞・雑誌などが多く刊行され、人々の生活に影響を与えてきた。それらはどのような言葉で書かれ、どう発達してきたか、それらについて概観する。	古田東朔 清水康行 （名古屋大学助教授）
9	言文一致の動き(1)	書き言葉を話し言葉に一致させようとする「言文一致」の運動は、明治になって盛んになる。しかし、その萌芽は既に幕末期からあった。その主張や試みは、どうであったのか。	古田東朔
10	言文一致の動き(2)	「言文一致」といえば、これまでは小説に関して取上げられるのが普通であった。しかし、明治期にあっては、それだけではなかった。講演の速記、小学読本の談話体の文章なども加えながら、その動きについて考える。	同上
11	文語調の位置 (1)	文語調の文章は、長く書き言葉において正式のものとされてきた。明治初期の漢文訓読調の文章で書かれた小説・論説・翻訳などについて見ながら、そこでの漢語の役割についても考察する。	同上
12	文語調の位置 (2)	前回のあとを受け、明治期の和文調の文章について見ていくほか、漢文訓読調と和文調の統一を考えた文章など、実際の作品について見ていき、当時の文語調の文章が占めていた位置について考れる。	同上
13	訳語による新しい世界	西欧の学術の理解のため、訳語を通しての努力がなされてきた。室町期・江戸期・明治前期において、和語や漢語による訳語がどう用いられ、新しい世界がどう紹介されていったかの過程について見る。	古田東朔 鈴木英夫 （茨城大学教授） 進藤咲子 （東京女子大学教授）
14	言葉の登録	近代を切り開いていった言葉の数々は、後にどう伝えられていくか。新しい訳語も含めた和語や漢語が、どういう観点からまとめられていったか。幕末からの代表的な辞書を取上げ、その編集の苦心のあとをたどる。	古田東朔
15	近代の敬語	明治以降における政治・社会上の変革が、言葉の上にどう反映されてきたか。敬語表現は身分・地位に即したものから人格の尊重という点へ変ってきた。その主張と、実際の使用はどうなのか。	同上

ニア　ジ　ア　論　Ⅲ＝(R)

〔主任講師：浜口允子（放送大学助教授）〕

全体のねらい

本講では１０世紀以降２０世紀初頭に至るまでの中国の歴史をとりあつかう。この時期の中国社会は、社会のしくみ、経済、文化、対対関係など様々な面でそれ以前の社会と大きく異なるものであった。それは、中国が１９世紀中葉に西欧諸国と本格的に出会った時の姿でもある。この時期の歴史を学ぶことは、その後の近代中国がかかえた諸問題を由来に遡って理解することにほかならない。

各回のテーマ

1　中国社会の転換　1

2　中国社会の転換　2

3　元　1

4　元　2

5　明　1

6　明　2

7　清　1

8　清　2

9　近代　1

10　近代　2

11　経済発展の諸相　1.　農村と農業

12　経済発展の諸相　2.　工業と手工業

13　経済発展の諸相　3.　商業と貨幣と都市

14　人々のつながり　1

15　人々のつながり　2

＝フランスの言語文化Ⅰ＝（ＴＶ）

〔主任講師：福井芳男（放送教育開発センター教授）
西澤文昭（青山学院大学助教授）〕

全体のねらい

広く世界にあって、またヨーロッパという歴史的文化的共同体の中にあって、フランスがフランスである所以はどこにあるのか。フランス語の成立と発展を縦軸とし、現代世界におけるフランス文化の独自性の解明を横軸として、フランスの言語文化の在り様にアプローチする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	フランスという国	フランスはどういう国であり、フランス文化の独自性はどこにあるか。フランスに関して人の持つイメージに触れながら、フランスの地理と歴史について基礎的な事柄を学ぶ。	福井芳男（放送教育開発センター教授） 西澤文昭（青山学院大学助教授）
2	フランス語の現状	フランス本国以外では世界のどんな地域でフランス語が話されているか。ベルギー・スイス・カナダ・アフリカにおける公用語としての現況。また国内にあって、標準フランス語と方言との関係はどのようなものか。	西澤文昭
3	ヨーロッパの成立・フランスの成立	ヨーロッパという概念はいつ、どのような形で、またフランス国家・フランス人という意識はどのようにして明確になり成立してきたか。ローマ帝国の崩壊、キリスト教の成立と発展、アラブ文化などを視座に入れ、探る。	同上
4	フランス語の誕生	ラテン文化の継承。南仏文化と北仏文化。フランス語が一民族の、一国家の言葉として意識され確立するまでを概観する。	同上
5	ルネサンス期のヨーロッパとフランス	先進国イタリアとフランスの関係。ユマニスムとは何か。古典研究がフランス語の発展にどのような影響を与えたかを見る。	同上
6	ヨーロッパの公用語	ヨーロッパ宮廷文化におけるフランス語の地位の向上。十七・十八世紀のフランス語論。伝統と革新。アカデミー・フランセーズの成立とその役割。	同上
7	啓蒙思想とフランス革命	啓蒙思想はフランスとヨーロッパ諸国の間にどのような関係を生み出したか。ルソーの思想と言語観。フランス革命が後世にもたらした影響について考察する。	永見文雄（中央大学助教授） 西澤文昭

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	食の文化史	葡萄酒はいつから飲まれるようになったか。香辛料はどこから来たか。フランス料理の原点を探る。	西澤文昭
9	衣の文化史	中世人の衣服から現代のモードまで。装飾の文化を通観する。	同上
10	住の文化史	都市の成立と市民階級の誕生から現代の都市改造まで。建築物と都市のありかたに焦点をあて、フランス文化を見る。	同上
11	小説について	フランス近代小説は19世紀とともに始まる。ロマン派の成立とその言語観について、その後の様々な主義主張を見据えながら、考察する。	石井晴一（青山学院大学教授） 西澤文昭
12	詩について	ボードレール、ランボー、マラルメなど近代詩の流れを辿り、フランス詩の形式、美しさを探るとともに、詩人は言語についてどう考えていたかを見る。	竹内信夫（東大学助教授） 西澤文昭
13	フランス語と外来語	現代技術の進展につれ目立つようになった英語の流入。すでにはるか以前から外国語はフランス語に取り入れられてきた。借用語の歴史からフランス文化がどのようにして外国文化を受容してきたかを見る。	西澤文昭
14	マス・メディアとジャーナリズム	現代のフランスのマスコミはどのような状況にあるか。テレビを中心として、ジャーナリズムの現場からのリポート。	福井芳男 西澤文昭
15	フランスと日本	フランス人の日本語観の変遷、日本人のフランス文化・フランス語観の流れを辿り、日仏文化交流の実態について考える。	福井芳男 西澤文昭 井戸桂子（放送大学助教授）

＝ロシアの言語文化Ⅰ＝（ＴＶ）

〔主任講師：川端香男里（東京大学教授）〕

全体のねらい

ロシアの言語、文学、思想、芸術を、具体的なテーマに即しながら、しかし同時に常に歴史的な視点・枠組を忘れずに展望し、ロシア文化をいかに理解すべきかということを解説する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	聖なるロシア―キリスト教の受容	キリスト教の受入れによって、文字と高度の精神性を確得したロシアの「あけぼの」について解説する。	栗原成郎（東大文学部助教授）
2	遊牧民とのたたかい―「イーゴソ 軍記」	繁栄をきわめた中世ロシアも南からの侵入者たちのたたかいで未曽有の国難に直面する。ロシアの危機と人々はいかにたたかい・文学がそれをどのように表現したか述べる。	同上
3	生活とのたたかい―ロシア民謡の世界	広大なそしてきびしい自然とロシアの農民たちの生活のいとなみ、哀歓をロシア民謡やフォークロアの世界を通じて考えてみる。	中村喜和（一橋大学教授）
4	ピョートル大帝とロシア近代化	タタールのくびきとモスクワ公国の鎖国のため中世的状態に停滞していたロシアを一気に近代化・西欧化したピョートルの事業の歴史的意義について考える。	川端香男里
5	西欧への窓―ペテルブルグ	近代化以後革命までの200年間のロシアの歴史はそのままピョートルの都ペテルブルクの歴史があった。ペテルブルグの歴史をたどりつつ近代ロシア文化の栄枯盛衰を見ることにする。	同上
6	母なる都―モスクワ	伝統的にロシア的なるものを守りつづけたモスクワの歴史をたどりつつ・ロシア人の心のふるさとであるモスクワのさまざまな側面をさぐる。	中村喜和
7	プーシキン―ロシア文語と国民文学の成立	ロシア文語の創始者、ロシア国民文学の祖としてのプーシキンの歴史的業績について考える。	栗原成郎

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	農村 ー文学に見る農業問題	今日のソ連に至るまで農業・農村の問題は国の根幹をなす問題であった。グリゴローヴィチ、トラルゲーネフから今日の農村派散文にいたる文学をとりあげてこの問題を考えてみる。	島田　陽 （東　大学教養学部助教授）
9	トルストイとドストエフスキイ	この二人の巨匠は、文学者であるにとどまらず、思想家、予言者としても大きな影響を同時代および後代に及ぼした。二人を対比して論じ、かつその世界的意義もあわせ考える。	川　端　香男里
10	ロシア人と演劇	ロシア人は身ぶりの大きい表現力豊かな国民である。文学作品としての演劇の面でも、演技、演出という面でもロシアは世界に大きな役割をなしている。そのロシア演劇の歴史的流れを見てみる。	同　上
11	ロシア語の魅力	語の魅力は外国人に伝えがたいというが、語を語らずしてロシア文学の偉大さを論ずることはできない。可能な限りロシア語の美しさの一端を紹介したい。	島　田　陽
12	ロシアとヨーロッパ	建国以来ロシアは西欧から多くのことを学んだ。さらに多くの外国人がロシアの文化の発展に協力した（近代のユダヤ人も含めて）。一方、ロシア人は亡命という形で西欧とつながることも多かったが、19世紀半ばから蓄積した富を西欧に返して来た。その歴史を眺望する。	川　端　香男里
13	ロシアと日本	日本とロシアの歴史的な交渉の歴史を具体的に展望し、文化的な相互関係を振り返ってみる。	外川継男 （上智大学外国語学部教授） 川　端　香男里
14	ソビエト時代	ソビエト時代の文化のあり方について展望する。	島　田　陽
15	ロシア文化の世界的意義	ロシア革命以後70年の歴史を含め、ロシアという国が世界文化の中で果して来た役割について考える。	川　端　香男里

＝ 解　析　学 ＝ （R）

〔主任講師：長坂建二（放送大学助教授）〕

全体のねらい

基礎数学Ⅰの実数変数の微分・積分学に引き続いて、複素変数の微分・積分学（関数論）について述べる。コーシーの定理を中心に、定積分の計算に役立つ留数計算に習熟する。更に、微分方程式論において基本的な解の存在定理、線形微分方程式の解法、級数による解法などを述べ、応用性を高める。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	複素数の導入とその性質	複素数を、実数の対として導入し、極形式による表示、加減乗除の幾何学的意味を考え、その性質に言及する。	長坂建二（放送大学助教授）
2	複素数の初等関数	一次変換の定義と性質についてまず述べる。次ぎで、実数変数の初等関数の知識を用いて、複素変数の初等関数　代数関数、指数関数、三角関数、対数関数、巾乗関数、逆三角関数を導入し、複素関数特有の多価性についての注意を述べる。	同　上
3	正　則　関　数	複素関数の連続性・微分可能性についが述べ、微分可能な複素関数（正則関数）がコーシー・リーマンの微分方程式を満たすことを示すと共に、基本的な性質について述べる。	同　上
4	正則関数の性質	複素微分に関する諸定理と共に、複素微分の例を与える。また、正則でない関数の例を述べると共に、正則関数が満たす性質を、実数関数の場合と対比しつつ言及する。	同　上
5	複素関数の積分	実数関数の積分の概念を復習し、その自然な拡張となるように、複素関数の積分を正則弧上の複素積分として定義し、その基本的な性質を示す。	同　上
6	コーシーの積理	複素関数論において、最も重要なコーシーの定理を紹介し、証明の概略を述べる。また、単連結な領域の説明と例を与える。	同　上
7	コーシーの積分公式とその応用	複素積分の例として、円周積分を計算する。次いでコーシーの定理により、正則関数に対するコーシーの積分公式を導き、リウヴィルの定理より代数学の基本定理を証明する。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	留　数　計　算	複数関数の零点・極等の特異点を定義し、次いで実数の微分・積分学の範囲では、求めることが困難であった、いくつかの定積分の値を複素積分、特に留数計算によって求められる事を示し、関数のローラン展開について述べる。	長　坂　健　二
9	有名な微分方程式	微分方程式論の誕生と微分方程式論の内容を概観し、求積法で解が求められる、変数分離形、同次形、一階線形微分方程式の解法と共に、一階の微分方程式として有名な、ベルヌーイの微分方程式、リッカチの微分方程式の解法について述べる。	同　上
10	存　在　定　理	ダランベール（ラグランジュ）、クレローの微分方程式の解法と解の性質について述べる。次いで、一階常微分方程式が、リプシッツの条件を満たす時、初期値を満足する唯一つの解が存在するという存在定理を逐次近似法により証明する。	同　上
11	ルジャンドルの微分方程式	求積法により直接解を求められない微分方程式のうち、巾級数を利用して解を求められるルジャンドルの微分方程式及びベッセルの微分方程式の解法を概説する。	同　上
12	線形微分方程式	n階線形微分方程式の解の性質を、ロンスキー行列との関係と共に説明し、一般解の求め方を与え、定数係数の場合には特性方程式を解くことにより解が求められることを例と共に示す。	同　上
13	連立線形微分方程式Ⅰ	連立線形微分方程式を行列表現し、定数係数の場合には、係数行列の指数関数を考えることにより、解が求められることを示す。また、行列の指数関数の性質にも触れる。	同　上
14	連立線形微分方程式Ⅱ	前回に引き続いて、連立線形微分方程式の解法についてのべる。定数係数行列の固有値と固有ベクトルとスペクトル分解との関連を説明し、計算法を与える。	同　上
15	実社会と微分方程式	自然現象や、社会現象を記述する目的で生れた数々の微分方程式について述べ、数学と社会との関連を考える。	同　上

＝ 現 代 応 用 数 学 ＝ （R）

〔主任講師：伊理正夫（東京大学教授）〕

全体のねらい

現在の社会において実際に応用され役に立っている数理的手法を、数学的な立場から整理して講じる。しかし数学的な厳密性をあまり強調しすぎないように注意し、なるべく実際に手法が使われている場面における動機づけを重視し、かつ具体的な問題に直面したときにそれをどう扱うべきかの行動指針をも与えるよう努める。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	数と量と次元 ― 数の体系	1. 自然数　6. 記数法 2. 整数　7. 実数 3. 乗算　8. 複素数 4. 有理数 5. 数の大小関係	伊 理 正 夫 （東京大学 教授）
2	数と量と次元 ― 物理量の表現	1. 次元と単位 2. SI単位系	同 上
3	数と量と次元 ― 物理量の演算	1. 量の間の乗除算と同次元性　2. 量の間の加減算　3. 行列・ベクトル算と次元　4. 次元解析　5. 数学的関数の引数の次元　6. 量の間の関係を示すグラフ、表、計算式の書き方	同 上
4	線形システムの数学 ― 線形システム1：入出力関係 因果関係	1. 線形システムとは何か 2. 線形関係の例 3. 線形システムの例	韓 太 舜 （専修大学 教授）
5	― 線形システム2：基本的諸概念（その1）	1. 行列の基本変形 2. 行列式 3. 一次独立と一次従属 4. ベクトル集合の階数	同 上
6	― 線形システム3：基本的諸概念（その2）	1. 逆行例 2. 基底と基底変換 3. 固有値	同 上
7	― 線形システム4：	1. 部分ベクトル空間 2. 線形変換の像と核 3. 入出力変数の部分的入れ替え 4. 出力変数の部分的拘束 5. システム変数の並び換え	同 上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	離散システムの数学 — 離散システム1：関係、順序、グラフ	1. 関係とは　2. グラフ　3. グラフと関係 4. グラフによって表現されるシステム 5. 2部グラフ　6. 路と閉路 7. タイセットとカットセット 8. 木と補木	佐藤　創 （専修大学助教授）
9	システムの数学 — 離散システム2：グラフの行列表現 グラフの分解	1. グラフの行列表現 2. 部分グラフ 3. グラフの連結性 4. 2部グラフのマッチングと被覆	同　上
10	システムの数学 — 離散システム3：最短絡と最小木	1. 最短路問題とは 2. グラフと最短路問題 3. 距離が非負の最短路問題 4. 一般の最短路問題 5. 最小木 6. グリーディ算法	韓　太舜
11	システムの数学 — 離散システム4：最大流とマッチング	1. 最大流問題とは 2. 流れと容量 3. 増量可能路 4. 最大流問題の解法 5. 最大流・最小カット定理 6. マッチング問題	同　上
12	連続システムの数学 — 連続システム1：常微分方程式モデル（その2）	1. 微分とその意味 2. 微分方程式の定義と分類 3. 微分方程式の解と解法 4. 常微分方程式によって記述される現象	佐藤　創
13	— 連続システム2：常微分方程式モデル（その1）	1. 微分方程式の定常解と周期解 2. 平衡点の安定性 3. 周期解の安定性	同　上
14	— 連続システム3：偏微分方程式モデル（その1）	1. 多変数関数の偏微分 2. 偏微分方程式の定義と分類 3. 解の自由度と境界条件 4. 偏微分方程式によって記述される現象	同　上
15	— 連続システム4：偏微分方程式モデル（その2）	1. 熱伝導方程式〔例14.1〕の解法 2. 対流のある拡散方程式〔例14.2〕の解法 3. 弦の振動方程式〔例14.3〕の解法 4. 波動方程式〔例14.4〕の解法 5. 定常的温度分布を表す方程式〔例14.5〕の解法 6. 膜の振動方程式〔例14.6〕の解法	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	連続システム・5：差分方程式モデル	1. 差分方程式の定義 2. 差分方程式によって記述される現象 3. 差分方程式の解法	佐藤　創
17	最適化の数学 — 最適化 1：数理計画法	1. モデル 2. 最適化 3. 在庫問題 4. 価格決定問題 5. 2人零和ゲーム 6. 日程計画問題 7. 線形計画問題 8. 非線形計画問題	韓　太舜
18	— 最適化 2：線形計画法の解法	1. 線形計画問題の図式解法 2. スラック変数と基底変換 3. 連立一次方程式と基底変換 4. シンプレックス法 5. 双対問題	同上
19	システムの数学 — 最適化 3：確率的モデル	1. 確率論からの準備 2. 待ち行列 3. 一斉取り替え問題 4. 最適停止問題	佐藤　創
20	情報処理の数学 — 数値情報処理1：計算機の中での数の表現と誤差	1. 数の表現と丸め誤差 2. 情報落ちと桁落ち	星　守 （千葉大学助教授）
21	— 数値情報処理2：補間、補外、関数近似	1. 補間法 2. 補外法 3. スプライン補間 4. 関数近似	同上
22	— 数値情報処理3：数値微分、数値積分	1. 数値微分 2. 数値積分	同上
23	— 数値情報処理4：線形計算（連立方程式）	1. ガウスの消去法とLU分解 2. 逆行列の行列式 3. 3項方程式 4. 反復改良法	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	― 数値情報処理５：線形計算 （反復法、平均、分散、線形最小２乗法）	最小二乗法（正規方程式を使わない方法について触れるか？） 1. 反復法 2. 平均・分散の計算 3. 線形最小２乗法	星　　守
25	― 数値情報処理６：非線形方程式・代数方程式	1. 反復法 2. ニュートン法 3. 代数方程式	同　上
26	― 数値情報処理７：常微分方程式	1. 一段法 2. 多段法 3. 高階微分方程式連立微分方程式	同　上
27	― 数値情報処理８：偏微分方程式	1. 偏差分演算子 2. 放物型偏微分方程式の解法 3. 双曲型偏微分方程式の解法 4. 楕円形偏微分方程式の解法	佐　藤　　創
28	― 非数値情報処理１：算法の複雑度とデータ構造	1. 計算量 2. 線形計算 3. 多項式の計算 4. データ構造	星　　守
29	― 非数値情報処理２：ソーティング	1. 単純挿入法 2. 単純選択法 3. 単純交換法 4. ソート法の改良 5. 各算法の比較	同　上
30	― 非数値情報処理３：グラフと地図の表現	1. 地理グラフ　2. 地理グラフの接続関係 3. 接続関係の計算機表現　4. 接続関係の誤り検査　5. 線と面の順序つき検索　6. グラフの計量　7. グラフの幾可学的問題	韓　　太　舜

＝現代数学特論Ⅰ＝（R）

〔主任講師：吉田夏彦（東京工業大学教授）〕

全体のねらい

数学の性格を統一的にとらえるやりかたの一つに、論理の基本概念と集合論の基本概念だけをもとにし、他のすべての数学的な概念を、次々と定義していくというのがある。このやりかたを知ってもらうことを目的とする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	はじめに	1. 数学 2. 論理学 3. 数学と論理学 4. 集合律と単	吉田夏彦 （東京工業大学教授）
2	集合	1. 集合の概念 2. 外延性 3. 包括の原理 4. 関係、写像	同上
3	論理記号	1. 論理記号 2. 定義	同上
4	集合論の公理	1. 包含記号、等号、部分集合 2. 外延性の公理と包括の公理	同上
5	集合論の展開（その１）	1. ラッセルの矛盾 2. クラス表現 3. 幾つかの概念の定義 4. 半群とモノイド	同上
6	命題論理	1. 式 2. みずまし 3. いれ1, いれ2、とり、¬いれ、¬とり 4. Vやつを使う推論の形式 5. Vとりの書き換え	同上
7	決定問題（その１）	1. 問題につっての問題　6. 不完全性定理 2. トートロジー 3. 命題論理の構成（その１） 4. 命題論理の構成（その２） 5. 定理式	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	述　語　論　理	1. 言　語　　6. 幾つかの定義と派生推論図 2. 項　　7. 公理式と証明図 3. 命題式　　8. 解釈と形式化 4. 推論図　　9. 完全推定理 5. 論証図	吉　田　夏　彦 （東京工業大学教授）
9	集合論の展開 （その２）	1. 形式的構成 2. 代数系 3. 数学的構造 4. 順序数 5. 基　数	同　上
10	リカースィヴ函数	1. 函　数　　6. 表　現 2. 基礎的な函数 3. 函数を作っていく操作 4. 例 5. チューアリングの計算機	同　上
11	不完全性定理	1. 第一不完全性定理 2. 算術化 3. 第二不完性定理	同　上
12	決　定　問　題 （その２）	1. 形式的構成い関する決定問題 2. 否定的な解決	同　上
13	集合論の展開 （その３）	1. 三つの立場 2. 連続体問題	同　上
14	公理の整合性と独立性	1. 選択公理の整合性 2. 三つの公理の独立性 3. 正しさ	同　上
15	抽　象　と　具　体	1. 実在論と実用説 2. 数学と哲学	同　上

＝ データ解析方の基本 ＝ （ＴＶ）

〔主任講師：林　知己夫（放送大学教授）〕

全体のねらい

データによる現象解析法をデータ解析法と名付ける。どのようにデータをとり、どのようにデータを解析して情報を取り出すかの方法を言う。これには、現象をどう取扱うかのフィロソフィーが重要で、この上に立って必要に応じ数理的・統計的方法が開発されるものである。まずデータ解析をする上での基本となる考え方・方法を述べる。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	データとは何か	以下の講義では、統計学の基礎的知識を前提とする。この講義の学習の仕方について説明する。 データとは何か。これは単なる数字の羅列ではなく、それが出現した背景が重要である。こうした点について述べる。	林　　知己夫 （放送大学教授）
2	グラフ化の重要性	データ解析では、データを基にさぐりながら情報をつかみ出すことが大事で、このためには、データをグラフ化していくことが基本である。こうしたことに関連した考え方や方法についての基本を説明する。	同　上
3	データにおける質と量	測定や計測によって得られる標識には、つまり「なま」の測定の表現には、数量である場合と質的な分類である場合とがある。これをどう取扱って情報をとり出すかが、データ解析の核心になる。ここでは、量的・質的表現についての性格を述べる。	同　上
4	データの性格・Ⅰ―測定誤差・測定値変動の分析上の意味―	データ解析をする上でデータの性格をしっかり摑む必要がある。この一部は第1回にも触れた。多次元的な分析の方法を説明する前に、測定誤差・測定値変動がデータ分析に対して与える影響について述べる。まず測定したものが数量である場合について説明する。	同　上
5	データの性格・Ⅱ―測定誤差・測定値変動の分析上の意味―	前講の続きで、測定が質的なもの、カテゴリー反応として表現されるのでカテゴリカル・データというが、この場合について、データ分析に対して測定誤差・測定値変動が与える影響の問題を取扱う。	同　上
6	多次元空間における分散	一次元におけるデータの散らばりを表す分散から出発し、多次元空間におけるデータの散らばりを表す一般化分散に言及し、この意味について説明する。	同　上
7	判別の尺度・Ⅰ	判別とは何か、について説明し、これを表現するための尺度を説明する。それぞれの尺度のもつ意味や特色について説明する。判別の基本概念、相関比、多次元の場合の相関比について説明する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	判別の尺度・Ⅱ	前講の続きで、判断成功率の意味、これと相関比との関係、多次元の場合の判断成功率についての説明をする。	林　知己夫
9	距離と一般化分散と線型判別関数	多次元データを分析するに際して、ユークリッドの距離、一般化分散の特色に基づいて、どう使い分けていくのが適切かについて説明する。また、通常統計学で用いられる線型判別関数について述べる。	同　上
10	多次元データ分析の重要性	以上の基本を踏まえて多次元データ分析の方法に進むが、ここで多次元分析が、いかに現象解析に対して重要な意味をもつかについて説明する。	同　上
11	因子分析法と成分分析法	測定が数量で与えられている場合、因子分析法は、データ構造をさぐるためによく用いられる方法である。これについての考え方やモデルのたて方について述べる。また、統計学で用いられる成分分析法についても説明し、両者の関連性に言及する。	同　上
12	データ解析における数量化	データ解析における数量化の位置について説明する。その前に数量化とは何か、その発生について述べる。これがデータ解析の基本理念であることを説明する。数量化の基本が理解できればその考え方で各種のデータ解析が可能となる。	同　上
13	数量化の基本概念	数量化における測定・計測したことの表現と基本的二つの立場について説明する。こうしたことが、数量化を超えて広い意味のデータ解析の基本となっていることを示す。	同　上
14	外的基準のある場合・Ⅰ―それが数量で与えられている場合―	数量化Ⅰ類と呼ばれる方法で、これについて詳細に説明する。これは、形式的には、重相関関係の拡張となっている。	同　上
15	外的基準のある場合・Ⅱ―それが数量でない場合―	外的基準が分類である場合の数量化を説明する。数量化Ⅱ類と呼ばれ、形式的には線型判別関数の拡張となっている。	同　上

＝ データ解析法の進歩 ＝ （TV）

〔主任講師：林　知己夫（放送大学教授）〕

全体のねらい

データ解析の基本を習得した上で、さらに学ぶべき必要のある重要な方法について述べる。基本だけでは、実際の現象を有効に取扱って情報をとり出すことは出来ないので、より進んだ方法を説明する。これらの方法は「基本」のフィロソフィーの上に立つものである。ここでは質的データを解析するための数量化の諸方法を中心に話を進める。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	「データ解析の基本」の復習	これから、さらに進んだ方法に入る前に、データ解析の基本で学んだことをもう一度復習して基礎を固めることにする。基本が理解できていれば、本講座が理解し易いものになる。	林　知己夫（放送大学教授）
2	外的基準のある場合・Ⅲ—実例による計算—	第14、15講で説明した理論をより一層理解し、実際に用いて計算できるようにするため、簡単な例をあげ、これについて計算手続きを説明する。自ら復習し、納得がゆくようにするための講義である。	同　上
3	外的基準のない場合の数量化・Ⅰ—パタン分類の数量化・その1—	外的基準のない場合の数量化の一つであるパタン分類の数量化、数量化Ⅲ類と呼ばれる方法について説明する。どうしてこの方法が発生したかについて説明する。	同　上
4	—パタン分類の数量化・その2—	実例を用い、前講で述べた理論に基づいて計算する手続きを示す。これは、理論を一層理解し易くすると共に、実際のデータを用いて計算する仕方を習得させるのがその目的である。	同　上
5	—パタン分類の数量化・その3—	種々の実際の例を用いこの方法の応用法について説明する。	同　上
6	外的基準のない場合の数量化・Ⅱ—eij型の数量化その1—	二つのものの間の関係が数量で示されているが厳格な意味でメトリカルでない場合の数量化の方法である。二つのものの間の関係を基にする諸方法のなかで位置付けて説明する。この場合、関係は親近性、非親近性を表すものとする。	同　上
7	—eij型の数量化その2—	理論的構造と応用法について説明する。さらに、これを発展的に応用した例について述べる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	一対比較法の数量化・Ⅰ―ガットマンの一対比較法―	一対比較法の諸方法の説明とガットマンによる一対比較法の数量化について述べる。数量化の方法発展の礎となった考え方を中心に据えて説明する。	林　　知己夫
9	一対比較法の数量化・Ⅱ― 一対比較法における矛盾と数量化―	一対比較法では矛盾がよくおこる。A＞B、B＞C、しかしA＜Cという関係である。＞、＜はより好ましい、好ましくないという事を示す。この従来の取扱いと、数量化による別角度からの取扱いを述べる。	同　上
10	多次元尺度解析法 MDS（Multi-Dimensional Scaling）・Ⅰ	二つのものの間の関係を基にして、要素の空間的位置付けを求める方法で、eij型数量化と関係が深い。二つのものの関係が、親近性、或は非親近性をあらわす順位で表されている場合が基本である。この応用法について述べる。	同　上
11	多次元尺度解析法・Ⅱ	親近性もしくは非親近性が順位のついたグループ分けで与えられている場合が一層実用的なものである。これをMDA－ORというが、この方法について、解析の理論を述べる。	同　上
12	多次元尺度解析法・Ⅲ	MDA－ORの実例及び二つのものの間の関係が唯の分類（ノミナル・スケールという）で与えられている場合の解析法を述べる。これは、MDA－UOと名付けられているものである。	同　上
13	多次元尺度解析法・Ⅳ	MDA－UOの展開とMDA－ORとMDA－UOの使い方、それぞれの特色について述べる。	同　上
14	三つの要素の間の関係に基づく数量化	三つの要素の間の関係が数量であらわされているが、厳格な意味でメトリカルでない場合の数量化について述べる。これはeij型数量化の拡張となる。数量で与えられている場合には個人差あるMDS、タッカーの三相因子分析、ハーシュマンのPARAFACモデル等がある。これらについて説明する。	同　上
15	分類とクラスター化	分類は科学における最初の重要な操作である。分類を通しての情報抽出は不可欠の考え方である。このための統計的方法としてのデータに基づくクラスター化による分類について述べる。但し、これは外的基準のない場合の方法である。	同　上

＝統　計　学　特　論＝(R)

主任講師：林　知己夫（放送大学教授）
主任講師：鈴木　達三（統計数理研究所教授・主幹）

全体のねらい

この特論では、統計学の基礎において極めて肝要な意味を持つ情報量規準の理論をとりあげ、統計モデルの選択という基本的問題と関係付けて話を進める。もう一つは、実際問題において今日要請の高い統計的社会調査法の理論と応用の問題をとりあげることにした。両者は一見異るが思想的に相通ずるものがある。

回	テ　ー　マ	内　容	担当講師（所属・氏名）
第1部　情報量規準と統計モデル			
1	情報の抽出と統計モデル	統計学で利用される確率的構造は、データから必要な情報を抽出する方法を作り出すための統計モデルである場合が多い。統計モデルのこのような用い方を事例によって解説する。これに関連して尤度ならびに最尤法の概念について説明する。	赤池弘次（統計数理研究所長）
2	統計的検定とモデル選択	統計的検定については種々の誤解があり、概念上の混乱が見られる。データに基づいて特定の統計モデルを選択する問題との関係を調べることによって、統計的検定の困難点を明らかにする。特に尤度比検定について論じる。	同　上
3	エントロピーと情報量	熱力学的エントロピー概念の確率論的考察を行なったボルツマンの業績を紹介し、これが確率分布の間の隔たりの自然な尺度としての情報量概念の本質を明らかにするものであることを述べる。これと尤度概念との関係について解説する。	同　上
4	モデル選択と情報量規準ＡＩＣ	情報量を用いた統計モデルとデータとの適合度を測るために、情報量規準ＡＩＣが導入された。ＡＩＣの基礎にある考え方を説明し事例によってその実用性を示す。特に検定によるモデル選択との対比を通じてＡＩＣの特色を明らかにする。	同　上
5	ベイズモデルとその応用	未知のパラメータに対して、先験分布とよばれる確率分布を想定する統計モデルがベイズモデルとよばれる。このようなモデルに基づく推論の特長を情報量を用いて明らかにする。特に、尤度概念の適用によって実用的なデータ処理法が得られることを示す。	同　上
第2部　統計的社会調査法			
6	標本調査法の発展Ⅰ	「確率論・統計学」において標本抽出理論の基本を述べたが、ここでは通常用いられるシステマティック標本抽出、多相抽出法、比推定法　不等確率抽出法、エリア抽出法の問題について述べ、さらにパネル調査、標本ローテーションに関する諸問題を述べる。	林　知己夫（放送大学教授）
7	標本調査法の発展Ⅱ	よく利用される全国規模の層別二段抽出による標本調査を例にとり達成精度の計算および地域抽出法による実績精度の計算例をのべる。さらに面接調査、自記式調査、電話調査等各調査方式の特色および利用可能な補助資料に応じた標本調査計画を具体的に説明する。	鈴木達三（統計数理研究所教授、主幹）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	質問文作成と調査票の構成	調査目的に沿った質問文作成と調査票の構成について標本設計、調査誤差の問題　利用可能なデータ解析の諸技法、分析における考え方等をふまえて説明する。以下の時系列比較、国際比較方法論においてのべる調査等を具体例としてとり上げ説明する。	鈴　木　達　三
9	調査における誤差の諸問題	調査においては、その対象、分野により固有の誤差があるが、一般的には標本抽出に関する諸誤差のほか、調査不能による誤差、調査法による誤差、回答者による誤差がある。これらを数量的に評価し、調査の全体の精度を考えるための基本事項を説明する。	林　　知己夫
10	社会調査における回答誤差	調査実施過程における誤差のうち、回答者に関連するものを具体的に述べ、さらに回答結果の信頼性について考える。個人の回答の不確定性をどのように考えるかいくつかのモデルについて述べる。	鈴　木　達　三
11	データ構造と統計的推論	得られたデータの性格をまず把握することの重要性を説明する。つぎに　多次元的データの関連性を通して、データ構造をさぐり出す方法について述べ、これから統計的推論をどのように導き出すかを説明する。	林　　知己夫
12	時系列比較方法論Ⅰ	継続データは時系列変動をみることによって事象の兆候を鋭敏に示すものであるので、どのようにしてこれを探り出すかを説明する。これは、マクロ的な見方に基くことが適切なこともあるし、ミクロ的な構造を通して見ることが有効なこともある。	同　　上
13	時系列比較方法論Ⅱ	継続調査データを実際に分析することによって個別の調査データでは分らなかったことが具体的に示される。マクロ的な見方の例として、時系列分析、コウホート分析をとり上げ、ミクロ的な見方として質問項目の相互関連分析の例をとり上げて説明する。	鈴　木　達　三
14	国際比較方法論Ⅰ	ここでの国際比較としては、統計的調査による意識の国際比較の問題をとりあげる。標本抽出の方法、質問文の作成のあり方、マクロ的なデータ分析の効用と限界、考えの筋道の比較の重要性などについて説明する。	林　　知己夫
15	国際比較方法論Ⅱ	国際比較調査においては、国内調査では目立たない技術的な点も重大な問題となる。また具体的な分析手法も慎重な取扱いが必要となる。これらの点を実施例に則して具体的に説明し　分析にとり上げる質問の組合せを選択することにより分析結果の有用性が高まることを示す。	鈴　木　達　三

＝ 時 系 列 論 ＝ （R）

〔主任講師：尾崎　統（統計数理研究所教授）〕

全体のねらい

時間の経過と共に不規則な変動を示す現象の統計的解析法を論じる。必要な基礎的概念の説明をはじめに行い、ついで一般的に良く知られている線形時系列モデルについて解説しその利用法を論じる。非線形時系列モデルあるいは事象の発生時点の系列の特徴を解析するための点過程モデル等の新しい話題についても概説する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	序　　論	時系列とは何かを概観して以下の講義の準備とする。このため、具体例に沿って、問題となるのは何か、どのような概念がこれまでに発展させられたか、それが実際の解析方法にどう用いられるのか等を説明し、時系列解析の有用性を示す。	尾崎　統（統計数理研究所教授）
2	確率論的な基礎	確率、確率変数、同時分布関数、平均、共分散、密度関数、確率変数の独立性、多変量正規分布、カイ二乗分布、条件付き確率および平均、などの基礎的概念を解説する。	尾形良彦（統計数理研究所助教授）
3	確率過程の基礎概念	時系列解析の基礎となる確率過程について簡単に説明する。時系列の定常性、エルゴード性について解説し、自己共分散関数、自己相関関数を導入する。これらの関数の性質、推定法等について説明する。	尾崎　統
4	線形システムとフーリエ解析	入出力間の関係を表現するモデルとしての線形システムを説明し、フーリエ変換にもとづく周波数領域における解析法を説明する。とくにパワースペクトル、クロススペクトル周波数応答関数、インパルス応答関数などの諸概念を導入する。	同　上
5	スペクトルの推定	具体例を用いながらスペクトル推定上の問題点を示す。これを解決する方法としてピリオドグラム平滑化法を紹介し、その推定値の性質を示す。平滑化法の選定が困難であることを指摘し、時系列モデル導入の契機とする。	同　上
6	予測とARモデル	時間領域における時系列解析の指導理念の役割を荷う「予測」の概念を説明し、予測を実現する手段としての自己回帰モデル（ARモデル）を導入する。ARモデルのあてはめに関連して、予測誤差、最小2乗法、ユールウォーカー法について説明する。	石黒真木夫（統計数理研究所助教授）
7	ARMAモデルとスペクトル	ARモデルとパワースペクトルの関係を説明して、ARモデルでは表現するのが難しいスペクトルを記述する道具として自己回帰移動平均モデル（ARMAモデル）を導入する。ARMAモデルの特性方程式に関する説明を与え、あてはめ法の解説をする。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	統計的モデル構成とＡＩＣ	ＡＲモデルの次数を変えると推定スペクトルの形が変化することを例としてとりあげ、統計的モデル構成と選択の問題を定式化する。これを解決する手段として、FPE、AICを導入し、その利用法を説明する。FPEとAICの関係も示す。	石黒真木夫
9	カルマンフィルター	時系列モデルを統一的に取り扱う方法として状態空間表現を導入し、状態推定や予測の効率的な計算法であるカルマンフィルターおよび固定空間スムーザーを説明する。カルマンフィルターを用いた尤度の計算法や新しい時系列モデルの構成法についても説明する。	北川源四郎（統計数理研究所助教授）
10	多変量時系列モデル	実際の確率的現象においてはいくつかの系列が互いに影響をおよぼし合っている。予測の問題を例にとりながら、多変量ＡＲモデルの必要性を説明する。多変量ＡＲモデルを導入し、その推定法を説明する。また、応用として、クロススペクトルの推定法などを示す。	同上
11	フィードバックシステムの解析	フィードバックシステムの特性の解析には時系列モデルの利用が不可欠である。ノイズ寄与率の概念を導入し、多変量ＡＲモデルを利用したノイズ寄与率の推定法を説明する。またノイズ寄与率によるシステムの解析例を示し、システムの制御の可能性を検討する。	同上
12	統計的制御	多変量ＡＲモデルから制御システムの状態空間表現を導く。次に最適制御理論にもとづいて最適制御方式を決定する。この時系列モデルに基づく統計的制御の方法により、今まで数値的制御が困難であったシステムでも制御が可能となることを具体例を用いながら示す。	同上
13	ベイズモデル―非定常モデル―	非定常時系列の典型的な例として経済時系列をとりあげ、ベイズモデルによる季節調整法を説明する。この他にベイズ型の手法を応用した解析法の例として、地球潮汐データ解析コホート分析などが開発されていることも紹介する。	石黒真木夫
14	非線形モデル	従来の時系列論は主として線形モデルを中心に発展されてきたが、実際にはこれらのモデルでは取り扱えない現象がある。ここでは典型的な非線形現象を具体例によって示し、それらを解析するための非線形モデルを導入しデータにもとづく同定法を紹介する。	尾崎統
15	点過程モデル	地震、様々なシステムの故障発生、などにみられる突発的な事象の時系列を表現する点過程モデルについて解説する。基本概念となる条件付き危険度について説明し、これに基づくシミュレーション法や点過程モデルの実用例を示す。	尾形良彦

＝物理科学史＝（R）

〔主任講師：村上陽一郎（東京大学教授）〕

全体のねらい

物理学の史的な展開を、力学的分野に絞りながら、概観することによって、近代科学の中心的な柱となった物理学の特徴を理解し、併せて、西欧の歴史的な流れについても、はっきりした見透しを与える一助とする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	科学史とはどういう学問か	科学史ということばがともすれば与えがちな進歩史観を批判し、あり得べき新しい科学史の形態を≪全体論的アプローチ≫という概念を使って、可能なかぎり提案する。	村上陽一郎（東京大学教授）
2	歴史の流れの概観	従来のヨーロッパの時代区分である古代、中世、近代という概念の問題点を指摘し、学問史、知識追究の歴史として、さらに西欧中心主義を脱却した史観を考える。	同上
3	ギリシア・ローマの宇宙観の意味	ギリシア時代の天文学を、プトレマイオスの『アルマゲスト』を中心に考える。太陽中心説も可能的には考慮されていたこと、またそれがなぜ捨てられたかを示す。	同上
4	アリストテレス的運動学とその展開	ギリシアの運動論の主流であるアリストテレスの考え方を紹介する。また、それを受け継いだビザンツの運動論として、ピロポノスの重要着想も明確にしておく。	同上
5	後期中世からルネサンスへ	ヨーロッパが、ギリシア・ローマの学問を手に入れるに当たって迎えた重要な二つの節目、12世紀ルネッサンスとルネッサンスに触れ、その特徴、その違いを明らかにする。	同上
6	コペルニクス革命とケプラー	コペルニクスからケプラーへの太陽中心説の内容を紹介することを通じて、それが、ルネッサンス的思想状況とどのように結びつき、影響を受けていたかを確認しておく。	同上
7	ガリレオのたどった道	ガリレオの生涯を振り返りながら、彼の仕事の自然学上の新しさ、古さ、そして力学の形成史において果したその役割を、当時の全体的状況と照合しながら探る。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	デカルトからニュートンへ	慣性原理のデカルト、万有引力と運動法則のニュートンの、単にそれら法則の発見者としてではなく、当時の時代状況との関連のなかでのはっきりしたイメージを描く。	村上陽一郎
9	聖俗革命への道	ニュートンとデカルトの宇宙像の比較を行いながら、その両者から、次第に神の概念が脱け落ちてき、今日の科学技術の原型が姿を現してくる過程をとらえる。	同上
10	機械論的力学的世界像への成立	デカルトのプログラムとして後代に残されたものの本質を、機械論として規定し、それがどのように世界像として定着するかを探り、またそれへの反動の有様を描く。	同上
11	19世紀科学の動向	19世紀に初めて成立した「科学」あるいは「科学技術」の概念の出自を探ると同時に、20世紀初頭における力学上の大変革を何が準備したか、という点を考える。	同上
12	現代物理学の二局面	相対性理論と量子力学の成立という、20世紀初頭の力学上の大変革の本質に簡単に触れ、それが古典力学とどのように違うか、というところにも、焦点を当てる。	同上
13	現代科学の位相	19世紀に始まった科学の制度化のなかで、物理学的科学がどのような位置にあり、どのような問題点があるか、という点を、アクチュアルな視点から、多少批判的に眺める。	同上

放送大学放送番組回数と印刷教材各章との対応一覧

章	小　見　出　し	放　送
1－科学史とはどういう学問か	1. 科学という概念の多義性	第 1 回
	2. 啓蒙主義的歴史観の克服	第 2 回
2－歴史の流れの概観	1. 時代区分はどうあるべきか	第 3 回
	2. 新しい時代区分	第 4 回
3－ギリシア・ローマの宇宙観の意味	1. 天体現象	第 5 回
	2. ギリシア的記述様式	第 6 回
	3. 太陽中心説の否定	
4－アリストテレス的運動学とその展開	1. アリストテレスの運動論	第 7 回
	2. 中世の自然学	第 8 回
5－後期中世からルネサンスへ	1. 12世紀ルネッサンスの結果	第 9 回
	2. ルネッサンス期の変動	第 10 回
	3. プラトン主義の復興	第 11 回
6－コペルニクス革命とケプラー	1. コペルニクス革命	第 12 回
	2. ブルーノと無限宇宙	第 13 回
	3. ケプラー的世界像	第 14 回
7－ガリレオのたどった道	1. ガリレオの生涯	第 15 回
	2. ガリレオの運動論	第 16 回
8－デカルトからニュートンへ	1. デカルトの立場	第 17 回
	2. ニュートンとその運動学	第 18 回
		第 19 回
9－聖俗革命への道	1. ニュートンとデカルトの宇宙観	第 20 回
	2. 知識の世俗化	第 21 回
10－機械論的力学的世界像の成立	1. デカルトのプログラム	第 22 回
	2. 物理学こそ科学の王道か	第 23 回
	3. ロマン主義的反動	第 24 回
11－19世紀科学の動向	1. 科学と技術の融合	第 25 回
	2. 光の問題	第 26 回
12－現代物理学の二局面	1. 相対論力学の誕生	第 27 回
	2. 量子力学の誕生	第 28 回
13－現代科学の位相	1. 科学の制度化の巨大化	第 29 回
	2. 科学への疑義	第 30 回
	3. 新しい物理学の可能性	

＝現代物理学Ⅰ＝（R）

〔主任講師：江沢　洋（学習院大学教授）〕

全体のねらい

物理学20.世紀のはじめの30.年間に大きく変った。それまでの、ニュートンの力学とマクスウェルの電磁気学を二本の大黒柱とした古典物理学が、相対性理論と量子力学に席をゆずったのである。この講義では、その必然性をしらべ、変革の深さを測って、現在の物理学の動きを見定めたい。探究は依然つづいているのだから。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	力学的世界観	古典物理学の二本の大黒柱の一方をなしたニュートン力学の構造を復習する。それは、初期条件と力の法則、運動方程式の三つ組を骨として未来を決定論的に予言する。一時は、これによって宇宙の万象を運動に還元して捉えきることができるとさえ思われたのだが？	江沢　洋（学習院大学教授）
2	電磁場と光	第1回に引きつづき、古典物理学のもう一方の大黒柱であったマクスウェルの電磁気学の構造を復習する。ここでは、力学の主役であった粒子にかわって「場」が登場するが、初期条件と運動方程式から未来を決定するという論理は変らない。光も場の伝播である。	同上
3	相対性理論（1）	光が伝わるのは、電場の変動が磁場を生み、その磁場の変動が電場を生み……という連鎖による、でも、光と並んで光の速さで走ったら、光は変動のない静止した電磁場に見えるだろう。いや、それはあり得ない。アインシュタインはこの疑問を追及して相対性理論に到達した。	同上
4	相対性理論（2）	光の本性の追及から時間と空間の概念の根本的な再検討が必要になり、相対性理論が生みだされた。それは同時にマクスウェルの電磁場の法則に潜んでいた美しい対称性をあらわにすることであり、それを力学にも及ぼすとニュートンの法則を変革することにもなった。	同上
5	原子論の発展	どんな物質も極微の粒子 ―原子― の集まりだという考えは遠くギリシャの昔からあった。なぜ、人はその考えに誘われたのか？どのようにして、人は、その目にも見えず触ってもわからない微粒子の存在を、長い歴史の間に確信するようになったのか？	同上
6	電子とその役割	物質の普遍的な構成要素として最初に発見された微粒子は電子である。もちろん、極微の粒子が直接に見えたわけではない、粒子と仮定し力学と電磁気学で予想を立てて実験した結果が決して予想と違わなかったのだ。その延長線上で物質の熱的・光学的性質も解明できそうで？	同上
7	放射能の発見と原子核	放射能の新しさは3つある：不変と信じられてきた元素の壊変を伴う、真空放電や化学反応に比べエネルギーが桁違いに高い、偶然事象だ。放射能のもたらす高エネルギー粒子と物質の相互作用の研究が原子核の発見に結実したが、これは原子が安定に存在し得ないことを意味した。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	量子の発見	物質が光を放出したり吸収したりする現象においても古典物理学は窮地に追いこまれていた。プランクは熱した物体のだす光の色の問題で光はエネルギーの定まった塊であると考えざるを得なくなり、マクスウェル理論との折り合いに悩んだ。光は粒子なのだろうか？	江沢　洋
9	量子力学の世界	原子や分子の内部に入るとニュートンの力学は破綻する。その世界の基本法則として1926年に量子力学が発見された。ここでは電子はとびとびのエネルギーしかとれないが、しかし状態を連続的に変える。この不連続と連続の矛盾を止揚するのが重ね合わせの原理である。	同　上
10	量子力学の構造	重ね合わせの原理の一つの数学的表現が物質の波動性である。波はさまざまの形をとり得るが、原子のとびとびのエネルギーは定常波に対応する。そして、初期条件に応じたそれらの重ね合わせが実験し、重ね合わせの位相が時間とともに連続的・因果的に変化してゆく。	同　上
11	量子力学的観測とアインシュタインのパラダイス	電子は、状態変化こそ波動で表現されるが、個々に観測すれば粒子として立ち現われる。その集積は、しかし、状態変化の波動性を反映して干渉や回折の模様を示す。こうした波動と粒子の二重性を媒介するのが確率解釈である。その含意を追うと奇妙なパラドクスに出合う。	同　上
12	角運動量の量子力学	原子構造の探究への準備、角運動量とは、太陽系の惑星の運動で基本的だったケプラーの法則に現われる面積速度に相当する。原子ひ小さな太陽系なので、そこで惑星に当る電子の運動を調べてゆく上で角運動量が基本的に重要である。量子力学でも、このことに変りはない。	同　上
13	原子の構造	量子力学によって、原子の構造は歯車仕掛けの機械などと同じように精密に計算できるようになり、周期律をはじめとして諸性質の謎が解けた。原子たちが互いに結合して分子を作る仕組みもわかり、化学は物理学の翼下に入った。いまや分子の設計も可能である。	同　上
14	エネルギー準位と物質の性質	電子と原子核が多数あつまった系の物理的な振舞いも量子力学で計算し予言することができる。そのとき、系のエネルギー準位は一般に極めて密に並ぶが、ところどころに隙間ができることがある。こうした準位の並び方と、その上への電子の分布のしかたで物質の特性がきまる。	同　上
15	素粒子	原子・分子・固体の構造を解明した量子力学も原子核の内部には適用できないのではないかと疑われた時期がある。ての　も中性子の発見と中性微子の仮説で解けた、湯川秀樹は原子核をひとかたまりに結び合わせている力の特質から新粒子の存在を予言し素粒子論の扉を開いた。	同　上

＝現代物理学Ⅱ＝（ＴＶ）

〔主任講師：江沢　洋（学習院大学教授）〕

全体のねらい

現代物理学Ⅰで得た量子力学的世界に対する理解を、実験などヴィジュアルな題材を通して一層ふかめる。最先端の研究をしている研究室を訪問して“現代”に触れるようにしたい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	結晶	物資は粒子の集まりだという認識が現代物理学の出発点である。それらの粒子は、原子なら直径にして百億分の一メートル、原子核ならその十万分の一、そんなに小さい粒子たちのことがどうしてわかったのか？　雪の結晶からはじめて考えを進めてみよう。	江沢　洋（学習院大学教授）
2	電子と原子核の発見	電子も原子核も、机の上にのる小さな手づくりの実験装置で発見された。しかも古典物理学をあやつって！　どんな実験とどんな論理がつかわれたのか振りかえって、これからの勉強の足場を固めよう。	同　上
3	光の本性 (1)	光は波であるといわれ、また粒子であるといわれて、歴史上に争いが続いてきた。それを現代の眼で見たらどうなるか？　実験をしながら考える。まず、光の波動性から、それは何を意味するか？　証拠は？	同　上
4	光の本性 (2)	光には、もう一つの顔がある。粒子性である。それは何を意味するのか？　どうすれば、その顔は見られるのか？　粒子の顔をもちながら波動としても立ち現われて干渉や回折を示すということが、どうして可能なのか？　現代の技術でその実態をあばく。	同　上
5	電子に見る粒子性と波動性	電子も、しかるべく舞台を設定すれば波のような振舞いを見せてくれる。では、そのとき粒子らしさはなくなってしまうのか？　最近、技波がつくれるようになったので、それを利用して美事な実験をお目にかける。	同　上
6	量子力学の発見	電子の、そして極微の世界の他の粒子についても、粒子性と波動性をひとつかみに統一して捉えるのが量子力学である。これが、原子や分子の内部ではニュートンの力学にとって代るのだ。しかし、まったく縁が切れるわけではなく、ニュートン力学も新力学発見への道案内になる。	同　上
7	量子力学的な運動とは	原子のなかでの電子の様子を表わすと称して雲のような絵がよく描いてあるが、少しも電子が運動しているように見えない。量子力学の世界にも運動があらわになる現象もある。この世界のいろいろの運動をコンピューター・アニメーションでお目にかけよう。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	定常状態とエネルギーの不連続性	電子力学的粒子の運動を波動で表わすと、限られた空間に閉じこめられた運動は特定のとびとびのエネルギー値しかとれないことが導かれる。この命題こそ、原子が光を特定の波長でのみ出す理由であり、原子の安定性と個性の根元である。この重要な命題はどう導かれるのか？	江沢　洋
9	原子と分子	原子の構造と化学結合の仕組みを明らかにしたことは量子力学の大きな成果の一つである。原子や分子のなかをX線や電子線で見るというのは、どうすることか、そこに見える姿は何をわれわれに語るか。	同上
10	温度と物性	温度というものは、原子の世界のざわめきの指標である。温度を下げてゆきながら原子たちのざわめきの変化を聴いてみよう。そのとき電気抵抗などの物性はどう変ってゆくか？　極低温に達すると電気抵抗がストンと0になる。これは超伝導状態への相転移である。	同上
11	固定の中の電子	現代のエレクトロニクスは半導体の量子力学的な特質をフルに利用している。特に、強い電場をかけてその表面に電子たちを押しつけた系（MOS素子）は、電子の密度を人が意のままに制御することのできる理想的な「実験室」である。その基礎物理から応用まで。	同上
12	極低温	極低温で液体ヘリウムが相転移をおこし粘性を失なう現象。そのとき、流体の常識に反するさまざまの振舞が見られる。これらも、しかし、ちゃんと量子力学の法則にしたがい、起るべくして起っていることなのである。そうわかるまでには何十年もかかったが。	同上
13	相転移	固定や液体は、温度をゆっくり変えてゆくと体積や電気伝導度などの性質がなだらかに変化する。しかし、水が氷になるときのように、特別の温度では性質がガラッと変わる。これが相転移である。そのとき原子の世界では何が起っているのか？　アニメーションを混えて。	同上
14	高エネルギー物理(1)	素粒子の内部構造や相互作用を研究するには、それらを高いエネルギーで衝突させて反応を見る。エネルギーが高いほど微細な世界が見えるというのが物質の波動性の帰結である。そのため年々、加速器が巨大化する。最近完成した電子と陽電子の衝突型大加速器を見る。	同上
15	高エネルギー物理(2)	物質の究極的構成要素の研究はどこまで進んだか。これから何を問題提起し、どう自然に迫ってゆくか、新しい加速器による実験の出発のときに、歴史的展望に立つ研究の抱負をきく。	同上

＝物質の科学Ⅰ＝（TV）

〔主任講師：田丸謙二（東京理科大学教授）〕

全体のねらい

高校で習った気体についてのテーマを原子・分子という微視的立場から見直す。

理想気体の状態方程式やそのはずれとしておこる諸現象に対して、微視的立場からの説明を与える。さらに、気体分子の構造や結合および反応について、簡単な量子力学的説明を与える。現在の研究を紹介し、この分野の研究の最先端を示す。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	空気 (1) 気体の巨視的性質と粒子モデル	空気が気体として認識されてから、どのようにその実体が明らかにされて来たかの歴史を述べる。気体が原子や分子から形成されているという概念に到達した実験的・理論的根拠を明確にする。理想気体、実在気体と臨界現象についての関連にもふれる。	近藤　保（東京大学助教授）
2	空気 (2) 気体における分子運動	気体の巨視的な性質を示す状態方程式が、微視的な性質から気体分子運動論を用いてどのように説明されるかについて述べる。気体粒子間に相互作用が存在するとき、理想気体の状態方程式がどのようになるかを示し、臨界現象などを説明する。	同上
3	空気 (3) 気体分子のスペクトルと構造	空気の成分分子による発光、吸収スペクトル回折現象などについて述べる。電波天文台によって観測された星間分子のスペクトルなどを示す。このようなスペクトルを解析することによって、どのように分子の構造や内部状態が解明されるかを示す。このような解析の基礎となる量子力学的な理論を平易に解説する。	同上
4	空気 (4) 分子衝突と化学反応	空気中で一番重要な燃焼反応について、原子・分子の立場から説明する。	土屋荘次（東京大学教授）
5	空気 (5) 化学反応の機構	環境化学の立場から、光化学スモッグの発生に関連した光化学反応の初期過程を考察する。このような反応過程理解の基礎となる簡単な反応理論（あるいはモデル）について、平易に解説する。	同上
6	空気 (6) 気体分子のレーザー光化学	現在、これら分子の構造や反応の研究はどこまで進んでいるか、最新の話題は何かについて概観する。レーザー、分子線、質量分析器などを用いた最新の研究例を紹介し、どのような方向を研究しようとしているか、そのねらいなどについて述べる。	近藤　保（東大助教授）
7	水 (1) 水の特異な性質	地球と宇宙における水の存在様式と量について述べ、次に近代科学の発展とともに水に関する知識とその利用がどのように進んできたかを概説する。水が特殊な物性をもつ化合物であることを類縁化合物との対比から明らかにする。	田隅三生（東京大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	水 (2) 水分子の構造と水の3相	水蒸気、水、氷の状態図とクラウジウスークラペイロンの式、蒸気圧降下、沸点上昇、共沸、凝固点降下、寒剤、溶解度、電離、PH、移動度、当量電導度などについて概説する。	田隅三生 （東京大学教授）
9	水 (3) 氷の構造	自由分子としての水分子の分子構造とその決定法、氷の結晶構造とその決定法、水分子の電子構造と双極子モーメント、水素結合の本質について述べる。重水についてもふれる。	菅宏 （大阪大学教授）
10	水 (4) 液体としての水の構造	液体としての水の構造とその研究法について述べ、物性との関連性を考察する。粘性、表面張力、単分子膜、ミセル形成、界面活性剤の作用などを概説する。	中西浩一郎 （京都大学教授）
11	水 (5) 生体物質との関わり合い	生体物質、とくにタンパク質と生体膜の構造と機能が水の存在とどのようにかゝわりあっているかを考察する。	野田春彦 （放送大学教授）
12	食塩 (1) 結晶構造をきめる	結晶の構造、また結晶をつくっている分子の構造はどのようにしてわかるかを食塩を例として説明する。波の回折の原理を学んだあと結晶によるX線の回折の実例を見る。	小谷正博 （学習院大学教授）
13	食塩 (2) 弾性と振動	結晶の中で原子や分子は静止しているわけではない。熱は物質の中で振動としてたくわえられているし、また音は物質のなかを波として伝わってゆく。このような振動やまた物体に力を加えたときに起る弾性変形が原子間の力とどのように関係しているかを述べる。	同上
14	食塩 (3) 光学的性質	食塩は目に見える光に対しては透明であるがある波長の赤外線に対しては強い吸収を示す。また食塩の屈折率は波長によって異る。光が物質を通りぬけるときに起るこれらの現象がどのように物質の構造と結びつけて理解されるかを解説する。	同上
15	食塩 (4) ソーダと塩素	食塩は化学工業における主要な原料の一つでソーダ灰、か性ソーダ、塩素などの無機薬品がつくられ、ガラス製品、繊維製品、医薬品、などの製造、上水道の滅菌など広く利用されている。ソーダと塩素の製法と利用について説明する。	笛木和雄 （東京大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	鉄 (1) 百獣の王、ライオン－百金の王、鉄－	i）鉄は諸々の金属の中でも最も重要な位置を占める。ii）鉄の特徴を合金化、相変態、焼入性、加工性、集合組織、等で述べる。iii）鉄と鋼の定義。iv）鉄の結晶構造。v）現代製鉄法の概要、鉄鉱石の還元による銑鉄の製造と酸素精錬による鋼の製造法を簡単に述べる。	田中智夫 川崎製鉄㈱エンジニアリング事業部研究開発センター所長
17	鉄 (2) 転移論	i）鉄の塑性変形挙動と降伏強度、引張強度の定義。ii）クリープ強度、疲労強度の概念。iii）理論強度と実際の材料強度との 離。iv）転位論の概要。転位モデルによるすべり変形。Zranck-Read 源、部分転位と交叉すべり、多結晶体の構造と降伏のメカニズム、等を述べる。	同上
18	鉄 (3) 鉄の百面相	i）鉄合金の成り立ち。ii）状態図の熱力学と状態図の読み方。iii）鉄－炭素２元状態図とその重要性。iv）相変態の概要。拡散変態と非拡散変態、特にマルテンサイト変態の特徴を述べる。v）連続冷却変態図。vi）各種熱処理法。vii）ミクロ組織と機械的性質の関係。	同上
19	鉄 (4) 高機能性鉄材料	合金設計と製造プロセス制御により機能性の高い鋼を作ることが出来る。i）低温靱性の優れた鋼－脆性破壊のメカニズムと低温靱性。ii）形状記憶合金－熱弾性マルテンサイトの利用。iii）集合組織制御－（111）集合組織による深絞り用鋼とGoss 方向による方向性珪素鋼。	同上
20	炭素 (1) ダイヤモンドとグラファイト－混成軌道－	有機化合物の中心元素である炭素原子の結合様式をSP^3、SP^2、SP 純成軌道について説明する。これらの結合をもつ典型的な化合物、ダイヤモンド、グラファイトの性質、興味ある点をとりあげる。	池本 勲 （東京都立大学教授）
21	炭素 (2) －分子内部回転と回転異性体－	炭素－炭素の単結合および２重結合のまわりの内部回転について説明し、内部回転ポテンシャルの形、ポテンシャル障壁の高さと回転異性体、幾何異性体の存在との関係を明らかにする。鎖状分子、合成および天然高分子、生体高分子の分子構造との関連にもふれる。	田隅三生
22	炭素 (3) 有機化合物の多様性	有機化合物の主な骨格は炭素と水素からできているが、これに、酸素、窒素、硫黄、リンなどのいわゆるヘテロ原子が加わることにより、真に有機化学の特徴である有機化合物の多種多様性が実現できることを、原子団、官能基などの概念によって系統的に説明する。	武井 尚 （東京工業大学助教授）
23	炭素 (4) 光学活性体の有機化学	右手型と左手型という、立体的・空間的な分子構造の差異によって生ずる光学異性体の世界を、糖、アミノ酸、抗性物質など身近な例から題材をとりあげて解説する。あわせて、分子模型の使い方、絶対配置の表示法、光学活性体の作り方などについても解説する。	野平博之 （埼玉大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	炭素 (5) 生態を構成する有機化合物 ー生命現象を荷なう核酸について	炭水化物、タンパク質、アミノ酸、脂質、核酸など、生物体を構成する主要物質の構造とその役割を明らかにし、これらの物質に対する有機化学的な研究方法と、その成果および生命化学における今後の役割について展望する。	畑辻明 （東京工業大学教授）
25	炭素 (6) 分子を彫る ー有機化合物の合成と反応	有機化学は、生命の合成能力に対する畏敬・あこがれ・挑戦というような気持が入り混って発展してきたが、近年において、独自の合成手法の発展も著しい。多種多様な有機化合物をいかに自在に合成できるようになったか、その最新の手法と考え方を解説する。	向山光昭 （東京大学教授）
26	高分子 (1) 高分子の特徴	繊維、プラスチック、ゴム等日常生活に欠かせない材料として数多くの合成高分子物質が使われている。一方、核酸、タンパク質、多糖は生物にとって必須の高分子物質である。これらの用途、機能にとって高分子であることはどんな意義があるのかを考える。	井上祥平 （東京大学教授）
27	高分子 (2) 高分子の構造と性質	高分子物質の性質の特徴の一つは、熱的性質、力学的性質、電気的性質などの物理的性質にあり、これが用途の基礎ともなっている。ここではこれらの性質が高分子化合物の分子構造、および分子の集合体の構造とどのように関連しているかを考える。	同上
28	高分子 (3) 高分子をつくる	高分子化合物はどのようにして合成するか、その分子の大きさはどのような要因で決まるか、分子の構造を制御するにはどんな方法があるかを考える。また実際の高分子材料をつくるに当たって、フィルムや糸はどんな方法で成型・加工するかについても触れる。	同上
29	高分子 (4) 高分子の反応	高分子の化学反応によってまったく新しい高分子をつくり出したり、部分的反応によって性質を変化させたりすることができる。ここでは高分子の化学反応の特徴とその応用について考える。物理的性質の特徴と化学反応性を組合せた機能性高分子の例にも触れる。	井上祥平
30	表面の科学	1. 表面の特徴 2. 表面の調べ方 3. 化学吸着と触媒作用 4. 表面の特性 5. 表面原子の動き 6. 表面の修飾 7. 触媒反応の速度 8. 触媒の通電性	田丸謙二

＝物質の科学Ⅱ＝（TV）
―ミクロからみた物質―

〔主任講師：上村　洸（東京大学教授）〕

全体のねらい

物質の示す様々な巨視的性質をミクロの法則で如何に解明できるかを、量子論の初歩的な段階から出発して、分り易く講義する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	物質の構成要素 ― 原子	物質の構成要素である原子の電子状態について、最も簡単な原子である水素原子を例にとって、そのミクロな特徴を説明する。特にミクロな世界を支配する量子力学の復習に力点をおく。多電子原子の状態を取扱う方法について述べる。	上村　洸（東京大学教授）
2	原子から分子へ	これを基にして原子の周期律表を統一的に説明する。自然界には、原子が単独として存在するよりは、分子あるいはその凝集体として存在するものが多い。なぜ分子ができるのか原因を、最も簡単な水素分子を例にとって説明する。	同上
3	原子から結晶へ	日常我々が対象とする物質の多くは結晶状になっている。結晶内では原子は規則正しく配列している。ここではこの結晶の特徴について、1次元格子を例にとって、並進対称性、エネルギーバンド等の重要な概念を説明する。	中尾憲司（筑波大学助教授）
4	結晶の中の電子	結晶中の電子のエネルギーバンド構造を、殆んど自由な電子の近似で議論し、その特徴を説明する。バンド構造による金属と絶縁体のちがいを明らかにする。	同上
5	化学結合と結晶の分類	まず金属の電子比熱や電気伝導を自由電子モデルで説明する。次に原子が集合して結晶を作るときの結合の仕方について説明する。	上村　洸 中尾憲司
6	半導体	代表的な半導体のシリコン、GaAs、CdS等のエネルギーバンドの特徴を概観する。特にエネルギーギャップと有効質量の重要性、不純物の導入による浅い不純物準位の存在を指摘して、絶縁体とのちがいを説明する。	中尾憲司
7	固体の伝導現象	電気伝導とホール効果について説明する。次に金属と半導体の伝導現象について、その特徴のちがいを議論する。	川路紳治（学習院大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	光に対する性質	固体の光に対する性質のいくつかを考察する。特に、金属についてはなぜ光沢があるか、半導体と絶縁体についてはなぜ透明か、これに関連した基礎吸収と励起子吸収に関して説明する。	国府田 隆夫（東京大学教授）
9	半導体素子の基礎	pn 接合の構造と整流特性を説明し、これを利用したトランジスタ作用を解説する。	川路 紳治
10	磁性体とは	巨視的な物質は、反磁性体、常磁性体、強磁性体である。これらの磁性をになうものは、その構成要素である電子の磁気モーメントである。巨視的な物質に磁場を加えると、どのようにして磁化が発生するかを、ミクロなメカニズムに立って説明する。	近 桂一郎（早稲田大学教授）
11	磁性のミクロな起源	強磁性体、反強磁性体では、ミクロな磁気モーメントが自発的に整列した秩序状態ができ上っている。このことを示す実験事実を紹介する。さらに、モーメントの整列をひき起す力の原因について説明し、特に種々の強磁性物質を紹介する。	同上
12	磁性体と光	ルビー、サファイア等の宝石はなぜ美しい色を示すか、鉄族イオンを含む常磁性体を例にとって、その光物性の特徴を説明する。さらに、光磁気記録への応用について説明する。	同上
13	超伝導	量与効果の最も目ざましい巨視的発現である超伝導の本質をできるかぎり平易に解説する。	小林俊一（東京大学教授）
14	固体の表面構造	固体の表面は結晶内部とは異なる原子構造をとっている。いくつかの特徴的な例を示し、その原因について考える。表面に特有な秩序状態や、表面上の原子の振動や拡散についても紹介する。	塚田 捷（東京大学助教授）
15	固体表面における電子	表面の電子状態は、表面でおこるいろいろな現象を理解するかぎである。表面にとらえられた電子の状態、仕事関数のなりたち、化学吸着のメカニズムについて述べる。さらに表面の励起機構や、電子分光法の原理について説明する。	同上

＝ 物 質 の 科 学 Ⅲ ＝ （R）

〔主任講師：野田春彦（放送大学教授）〕

全体のねらい

我々の見る物質は100種に足りない元素の組み合わせであるが、ほとんど無限ともいえる種類のものが発見され、それについての研究が進んでいる。古くから知られている物質の性質について新しい理解ができることもある。これらをできるだけ広範囲に取り入れて、それを基礎的な理解につなげようというのがこの科目の狙いである。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	結 晶 の 成 長	結晶の成長と晶癖に対する外界の条件の影響を説明する。天然に存在する雪の結晶や、地殻内の岩石の結晶から、人工で合成される結晶までの例を挙げて説明する。	砂 川 一 郎（東京大学教授）
2	半 導 体 超 格 子	1. はじめに 2. ヘテロ構造と選択ドーピング 3. 量子井戸と半導体レーザー 4. 共鳴トンネル効果とその応用 5. ま と め	覧 見 博 義（日本電気 KK 光基礎研究部長）
3	金 属 多 層 膜	蒸着技術の進歩によって膜の厚さを原子層の単位で制御した薄膜ができるようになった。2種類の金属元素を交互に積層した人工的多層膜の物性がどのような点で興味深いかを述べ、なぜ新物質として注目されているかを説明する。	新 庄 輝 也（京都大学教授）
4	アモルファス半導体	規則的な格子配列をもたないアモルファス材料が新素材として注目されている。アモルファス材料が結晶材料とどう異り、どういう特徴を有するか。応用上どういうことが期待されるかを、アモルファス半導体を中心にして具体的に説明する。	丸 山 瑛 一（日立基礎研究所長）
5	高分子鎖の形態と物性	理想化された鎖状高分子が自由にとるランダムコイル形態、実在の高分子鎖が溶液中、メルト中で理想鎖の形態からどのようにはづれた形態をとるかを説明する。そのような高分子の統計的形態、ならびに鎖の屈曲性と高分子物性との関係についても説明する。	永 沢 満（豊田工業大学教授）
6	繊維生体高分子	生物体の強度を保持する材料は多く繊維状である。繊維の材料となる分子の化学的および物理的性質、遺伝情報との関係、繊維の集合方式などを解説する。	野 田 春 彦（放送大学教授）
7	生 体 高 分 子（粒状分子）	酵素など生物体内で機能を発揮する分子の機能と構造の関係、そのような構造の形成の原理、などに対する研究の現状を解説する。X線解析によって明らかにされた構造の実例を示す。	同 上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	機能性高分子	プラスチック、繊維等の構造形成を主機能とする高分子の他に、化学的機能、電気的機能などを主機能とする機能性高分子に最近関心が集まっている。イオン交換樹脂、感光性樹脂、気体分離膜、導電性高分子、圧電性高分子など幾つかの例を挙げて説明する。	井上祥平（東京大学教授）
9	コロイド (1)	まずコロイドを分類する。(1)ではその一つミセルコロイドに関する現象と応用について述べる。すなわち、界面物性（吸着、ぬれ）と界面活性剤の関係、つぎに界面活性剤の溶液物性としてのミセルの生成と物性、またミセルの機能についてもふれる。	北原文雄（東京理科大学常務理事）
10	コロイド (2)	ここでは粒子コロイドについて述べる。その特性としての分散、凝集の基礎となる界面電気現象について説明する。ついで、電気二重層と粒子間力によるコロイド分散、凝集の理論と応用について述べ、さらに高分子による分散、凝集についても簡単にふれる。	同上
11	膜	界面膜と独立膜、特に脂質膜の安定性、単分子膜の保護作用や生体膜の二分子膜構造について述べる。また膜の機能、特に膜透過性について述べ、その応用として逆浸透膜、限外濾過膜、透析膜、イオン交換膜、気体分離膜、膜センサーなどにも言及する。	中垣正幸（京都大学教授）
12	ゼオライト	1. 骨格構造 2. 分子篩作用とガス吸着 3. イオン交換性 4. 触媒作用	高石哲男（豊橋技術科学大学教授） 堤和男（豊橋技術科学大学教授）
13	セラミックス	1. セラミックスの進歩 2. セラミックスの種類 3. セラミックスの強さともろさ 4. セラミックスをつくる 5. セラミックスの微細構造と高温強さ	沢岡昭（東京工業大学教授）
14	超微粒子	煙やコロイド粒子は粒径が1 μm以下であり、より大きな粒子とは違った性質を示す。日本ではそのような粒子を超微粒子と呼んで研究と開発が進められている。学問的にも興味があるが、セラミックス、触媒、広義の塗装などへの応用が重用である。	上田良二（名城大学容員教授）
15	情報生体高分子	1. 蛋白質と核酸 2. 遺伝子DNAの構造と遺伝情報 3. 遺伝情報の発現 4. 遺伝子操作 5. 蛋白質工学	三浦謹一郎（東京大学教授）

＝生命科学史＝（R）

〔主任講師：筑波常治（早稲田大学助教授）〕

全体のねらい

全体を3.部にわけ、1.～9.回を「生命科学史の基本知識」として、科学の歴史をどうみるべきか、総論的に解説する。1.0.～1.9.回は「生命科学史の個別分野」とし、いくつかの話題をえらんで各論的に生物学の流れを文化的に展望する。2.0.～3.0.回は「生命科学史の担い手たち」ということで、生物学史上の人物列伝をあつかい、個人を研究にかりたてる情熱の源泉をさぐりい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	科学史の見方	科学の歴史を学ぶとき、まず時代による常識のちがいを理解してほしい。過去の業績を評価するには、学説そのものよりも、そこえ到達するまでの過程が大切である。	筑波常治（早稲田大学助教授） 対談相手 坪郷佳子
2	生物学の思想と方法	現代科学は生命の動きを、化学現象としてとらえる。また研究の手段として、数字と数式を多く使用する。これらの先駆的な例を紹介する。	同上
3	博物誌と生命論	生物学には、ふたつの源泉がある。身のまわりの多種多様な生物たちへの関心と、生命の正体をつかもうとするあくなき探求と。それぞれに由来する生物学の現状を考える	同上
4	生物学とキリスト教	ヨーロッパで成立した科学には、キリスト教の思想的影響が認められる。生物学も例外ではない。うわべの対立を超えて、両者をつなぐ底流に注目したい。	同上
5	探検が開いた世界	探検によって、未知の新世界が開かれた。それとともに新しい生物が数多く知られだした。これらの知識が、生物学という学問を、新たにつくりなおす動機となった。	同上
6	顕微鏡が開いた世界	未知の世界は、遠方だけにあったのではない。顕微鏡の発明で、身近にある新世界の探検がはじまった。肉眼で見えない微細な対象が、生物学の重要な研究課題になった。	同上
7	医学と生物学	医学と生物学の歴史には、深い因縁が存在する。病苦からの解放をめざす努力が、生物に関する多くの新知識を生んだ。両者の関係を、具体的な例にそって説明する。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	農業における生物（Ⅰ）	農農業をつうじて、人間と生物は密接に関係しつづけた。有史以前の人類が、どのような方法で、作物や家　つくりあげたのか。現代科学による推定を説明する。	筑波常治 対談相手 坪郷佳子
9	農業における生物（Ⅱ）	農業には、自然を尊重する部分と、自然に違反する部分とがあり、この組み合わせが、農業の成否を決める。後者の側面として、雑草や害虫・病原体の問題などがある。	同　上
10	生命観の変遷（Ⅰ）	生命とは何か。人間にとって最大の関心事のひとつである。むかしは息を生命とみなし、「生気論」という思想がおこった。その内容と影響を説明する。	同　上
11	生命観の変遷（Ⅱ）	近代ヨーロッパで生気論にかわり、新たに「機械論」が登場した。生物と機械を基本的に同じとみなす思想で、自動機械の発明がこの成立をうながした。	同　上
12	生命観の変遷（Ⅲ）	機械論が有力化すると、その影響は各方面におよび、意識するか否かにかかわりなく、現代人の生活を支配しはじめた。他方ではこれに反発して、「全体論」という第三の思想もおこった。	同　上
13	分類学と理想と現実（Ⅰ）	分類とは生物の異同を何にもとづいて分けるかという、基準の発見にほかならない。それは人間本位の実用的分類からはじまり、やがて自然本位の客観的基準の探求へとすすんだ。	同　上
分14	分類学の理想と現実（Ⅱ）	人為分類から自然分類へ、進化論とともに系統分類へと、基準の取り方が複雑化していった。現代分類学をささえる思想はあまりに高　となり、実行困難という矛盾に遭遇する。	同　上
15	個体発生の秘密（Ⅰ）	性と生殖への興味は、生物学をそだてた第三の源泉といえよう。しかし生体の深奥でおこなわれ、極微の世界のできごとゆえに、真相は容易にわからず、空想的な諸説が唱えられた。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
16	個体発生の秘密(Ⅲ)	発生研究の歴史には、前成説から後成説へ、観察による研究から実験による研究へと、いくつかの画期的なできごとがおこった。そして必然的に遺伝学と結びついた。	筑波常治 （対談相手 坪郷佳芙子）
17	進化の思想（Ⅰ）	生物の歴史で、功罪両面にわたり、もっとも多方面な影響を与えたのは、進化論である。その登場に至るまでの、前史というべき時代について、まず概観する。	同　上
18	進化の思想（Ⅱ）	進化論の成立には、自然科学的な原因と、社会思想的な背景とがあった。両者が合わさって、１８世紀のフランスで、最初の進化論が登場した。そのいきさつを明らかにする。	同　上
19	進化の思想（Ⅲ）	１９世紀のイギリスで、進化論は確立された。それを実現させた当時の情勢と、文化一般にひろく及ぼした影響について説明する。さらに、その限界についても。	同　上
20	古代最高の生物学者	生物学の歴史でまずず登場する重要人物が、アリストテレスである。古代中世をつうじて最高最大といわれる業績を、生い立った境遇と関連させながら紹介する。	同　上
21	博物誌をまとめた人々（Ⅰ）	博物誌はむかし上流階級によって担われた。古代ローマはこの分野で、注目にあいたいする。また中世期のヨーロッパで、アリストテレス再発見とともに、生物への関心が本格化しだした。	同　上
22	博物誌をまとめた人々（Ⅱ）	博物誌の研究はしだいに発達し、１８世紀に絶頂をきわめた。そこに至る歴史上の人物として、ゲスナー、アルドロヴァンディ、ビュフォンなどの活動が重要であった。	同　上
23	博物誌をまとめた人々（Ⅲ）	貧困から身をおこしたリンネ、自然観察と文学を結合させたイギリスの作家たち、生物学の主流と対立したファブルなど、近代から現代にかけての博物誌の動向をさぐる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	異端的な研 研究者たち	中世的魔術を信奉するパラケルスス、「ふしぎなメガネ」をひたすらのぞきつづけたレーウェンフク、そして狂気にみちた人々、だがかれらも科学史の重要な担い手であった。	筑波常治 （対談相手 坪郷佳芙子）
25	思索と実証の対立	想像力にたよって進化論を主張したラマスク、実証精神にもとずきそれを否定したキュビエ。同時代のフランスを代表する生物学者を比較して、科学とは何かを考えたい。	同　上
26	不幸が贈った幸運	ダーウィンの生涯は、きわめて幸福にみえる。ところが学説には　世的傾向がいちじるしい。ダーウィンの人間形成の過程と、学説とのつながりを考察する。	同　上
27	門外漢ゆえの大発見　（Ⅰ）	親子の形質の異同すなわち遺伝という現象は、古来の大きな関心事であった。しかしそこに一定の法則が存在することは、生物学の門外漢たるメンデルにより、はじめて明らかにされた。	同　上
28	門外漢ゆえの大発見　（Ⅱ）	メンデルは気象学を勉強し、物理学者の発想で生物を扱った。その結果が偉大な発見につうじた。しかし同時代の生物学者からは、容易にその価値を認められなかった。	同　上
29	自然発生説をめぐる攻防　（Ⅰ）	１９世紀わ代表する生物学者のひとりパストゥールは、きわめて多方面な分野に足跡を残したが、その中にはみごとな一貫性が認められ、同時に近代科学の発達過程が示されている。	同　上
30	自然発生説をめぐる攻防　（Ⅱ）	同一の実験で同一の結果を得ても、同一の学説が樹立されるとはかぎらない。パストゥールの活動を中心に、実験と理論の複雑な関係を明らかにしてゆく。	同　上

＝生命のしくみⅠ＝（TV）

〔主任講師：木原弘二（慶応義塾大学教授）〕

全体のねらい

生物はさまざまな物質からできている。これらの物質の働きによって、生物の活動が支えられている。この点をいくつかの例によって示し、これらの生体内物質の特徴的な性質と機能を説明し、生化学の基礎的な内容を紹介する。特別な予備知識は必要ではないが、初歩的な化学の用語を理解できることが望ましい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生体に含まれる物質	タンパク質・脂質・糖など、生物をつくり上げている物質について紹介し、これら有機化合物の特徴と構造について説明し、とくにタンパク質の構成成分であるアミノ酸をとりあげる。	木原弘二（慶応義塾大学教授）
2	生体内の高分子物質	生体物質のうち高分子物質であるタンパク質核酸、多糖などでは、その3.次元的な形が機能と密接に関連している。その形が化学構造によってどう定まるかを、原子の大きさと原子間の結合とから考える。	野田春彦（放送大学教授）
3	栄養のとりこみ	食物は消化されて、さまざまな化学変化を受け、身体の成分として利用されたり、エネルギー源として分解されたりしている。これらの説明を通して、酸素の働き方を述べる。	木原弘二
4	代謝 遺伝病(1)	身身体の中で起こっている化学変化は、すべて　素の作用によって進行しているが、この酵素の欠陥により起こるフェニルケトン　症・ガラクトース血症など遺伝性の病気について紹介する。	同上
5	タンパク質の構造	酵素の主要成分はタンパク質だが、他にもヘモグロビンなど、　素ではないタンパク質が重要な働きをしている。ヘモグロビンの分子が遺伝的に異常な鎌型赤血球貧血症について述べる。	同上
6	呼吸のしくみ	生命活動を遂行するエネルギーの源泉は、酵素による反応段階を経て、糖や脂質の　化的分解によって確保され、その中間産物は、他のいろいろな成分の合成の素材として利用されている。	同上
7	エネルギーの利用	エネルギーはＡＴＰの形をとって、細胞内への物質の吸収、いろいろな物質の合成などのほか筋肉の収縮、神経における情報伝達など、細胞のさまざまな活動のために利用されている。	丸山工作（千葉大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	タンパク質合成	成長途上の幼い個体では、身体の成分として新しくタンパク質を合成しなければならない。その反応のしくみについて述べる。	木原弘二
9	調　　節	身体の各器官は、それぞれの独自の機能を果しているが、つねに相互の活動状況が個体の維持に都合のよいように調整されている。主として、タンパク質合成の制御について述べる。	同　上
10	脂　　質 遺伝病(2)	細　が合成する成分には、身体や細　の構造に関係した、糖や脂質に属する物質がある。その物質の正常な分解に支障がある遺伝病として、粘液多糖類蓄積症を紹介する。	同　上
11	生物界における元素の循環	すべての生物界の物質は、太陽の光のエネルギーを植物が利用して、二酸化炭素を糖に変える光合成反応に源がある。これを説明し、また窒素化合物の利用・分解過程についても述べる。	同　上
12	細　と細　膜	細胞には、いくつかの構造体が含まれ、それぞれ機能を分担しているが、その成分の70%は水である。水の特別な性質、細胞の膜との関係を紹介し、改めて細胞の働きについて整理する。	長野　敬 （自治医大教授）
13	細　の増殖とDNAの複製	タンパク質の構造を指定しているＤＮＡは、細胞の分裂とともに、娘細胞に同一の分子が均等に伝えられなければならない。ＤＮＡ分子の合成のしくみについて解説する。	木原弘二
14	遺伝子工学	最近話題に上ることが多い遺伝子工学の現状を紹介するとともに、遺伝子をある程度意のままに組み替えたり、ちりこませたりする技術の基礎となっている現象を説明し、ＤＮＡの構造を解明する。	同　上
15	物質系としての生命	全体のまとめとして、生命現象は、生物特有のタンパク質・ＤＮＡなどの物質の存在なしには考えられないこと、その機能の遂行に必要なエネルギー、および情報の役割について述べる。	同　上

＝生命のしくみⅡ＝（TV）

〔主任講師：木原弘二（慶応義塾大学教授）〕

全体のねらい

“生命のしくみ ― 化学の立場Ⅰ”で一通り学んだ点を基礎知識として、これらの知識の根拠を改めて確かめ、また、補充発展させることを目的としている。主に、個々の独立した問題を取り上げて、基礎的な紹介では触れることのできなかった点を検討し、現代の生化学が直面している問題を二・三紹介する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	物質観と生命観	物質についての考え方をギリシャ時代から中世、近代へと辿り、その間、生物の働きについて生命に特有な力やしくみが考えられてきたことを紹介し、現代での考え方と対比させてみる。	木原弘二（慶応義塾大学教授）
2	有機化学の確立	18世紀末ごろから、多数の有機化合物が発見され確認されてきた。19世紀初頭は、無機化合物の研究が華々しい成果を挙げていた頃で、無機物質と有機物質との区別が明確になり、その後の生化学の発展の方向が確かめられていった。	同上
3	尿酸と痛風	尿酸は、精製され確認された有機化合物の最初のものの一つである。この物質の血液中濃度が高いと、痛風の発作がおこる。ヒトという生物に特有の二つの事情が、この病気の起こるための条件となっている点を解説する。	同上
4	ビタミンC	私たちの健康な生活には、適量のビタミンを摂取する必要があるが、ビタミンの必要性が明らかにされてきた研究の歴史は、物質を研究する上での考え方を教えている。ビタミンCを例にして、この点を紹介する。	同上
5	コラーゲン	ビタミンCの欠乏で、もっとも影響を大きく受けるのは、コラーゲンである。このタンパク質は、特殊なアミノ酸が含まれている点、アルファ・ラセン構造が主構造となっていない点など、標準的なタンパク質と異なっている。	同上
6	ABO型物質	赤血球の表面には、さまざまな血液型を決定している物質が存在している。血液型については、ABO型が最初に発見された（1801）。しかし、この型を決定している物質が確認されたのは約半世紀後で、この例について糖脂質の研究を紹介する。	同上
7	組織移植適合性抗原	腎臓移植などの臓器移植の際に問題になるのは、移植片に対する拒絶反応である。この免疫現象には、白血球の細胞膜表面の抗原が関係していて、その抗原型はきわめて多数で、A、B、C、D、DRの5群に分類されている。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	タンパク質の細胞内分解	タンパク質は、赤血球などの場合のように、細胞全体として分解される場合の外にも、細胞の内部で絶えず分解されている。細胞内タンパク質が分解される過程では、それぞれのタンパク質は異なった速さで分解され消失していく。	木原弘二
9	アンチ・トリプシン	白血球の働きのためには、タンパク質を加水分解する酵素が必要であるが、その過剰な作用を防ぐために血液中には、タンパク質分解酵素を阻害するタンパク質が存在していて、このタンパク質の遺伝的変異型の人では肺気腫が起こりやすい。	同上
10	酵素活性の調節	酵素の活性は精妙なしくみで調節されている。肝でのグリコーゲンの分解と合成に関係している酵素系と、窒素を含む化合物の合成の出発点ともいうべきグルタミン合成酵素を例として取り上げる。	同上
11	ホルモン放出因子	ホルモンによるさまざまな身体のしくみの調節について、そのホルモンの産生が視床下部から放出される別のペプチドによって支配されている。副腎皮質刺戟ホルモン（ＡＣＴＨ）の放出因子などについて述べる。	同上
12	水	生物体の大部分は水である。水という物質はきわめて特別な物質で、この特殊性が生物の示すさまざまな現象の基盤となっている。そのため、水の補給は生命の維持に不可欠であり、この点をきわだった形で示しているのが脱水症状である。	同上
13	ヘモグロビン遺伝子	ＤＮＡ分子を切断し、適切に結合し直す方法を用いて、動物、とくにヒトの遺伝子を純粋にすることができるようになり、その構造を究明することが可能となった。ヘモグロビン遺伝子を例として、この分野の研究の現状を紹介する。	同上
14	放射線の作用	放射線の作用には、さまざまな型があるが、ＤＮＡ分子に対する影響が、もっとも詳細に研究されている。細胞には、生じたＤＮＡ分子の損傷を修復するしくみが具わっている。大腸菌と、ヒトの培養細胞を利用して得られた成果を紹介する。	同上
15	生命と物質	これまでの講義全体をふりかえって考察し、物質についての研究から、生命現象が究明されてきた成果をまとめて考察してみる。このことは、とりもなおさず、生命についての考えを改めて整理することになるであろう。	同上

＝ 植 物 の 生 理 ＝ （TV）

〔主任講師：増田芳雄（大阪市立大学教授）〕

全体のねらい

植物は動物と異り、特有の構造と機能をもっている。その機能の1つは自栄養、すなわち光合成で、これによって太陽エネルギーを蓄え、地球上の全生物の生命を支えている。植物の形態形成と生理的機能は遺伝子のもつプログラムに従って発現されるが、それは環境要因にも影響される。植物に特徴的な構造・機能の調節を焦点にする。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	植物生理その特性	19世紀にドイツにおいて植物生理学、すなわち植物の機能を定量的に扱う学問分野が確立した経緯、以後100年間の発展について概観する。また、対象となる高等植物の構造的および機能的特性について解説し、以下の各講義の基礎となる導入部になる講義にしたい。	増田芳雄（大阪市立大学教授）
2	水分生理と気孔	土壌から植物体内を通り、空気中へと水は一本の道（導管）を移動するが、この移動は物理学の法則に従って働き、生物のエネルギーをとくに利用しない。水の移動の制限要因としての気孔運動とその制御機構、水の通る場所、体内の水の分布についてのべる。	倉石晋（広島大学教授）
3	光合成 I 明反応	光合成反応の全体像：光吸収、ガスの出入り、明反応と暗反応；光エネルギーの捕捉：色素、量子収量、エマーソン効果、電子の流れと光リン酸化、酸素の放出；光合成の構造と機能：葉緑体（分子の世界から細胞まで）、葉緑体の自己増殖	辻英夫（京都大学教授）
4	光合成 II 暗反応	CO_2の植物へのとり込み、カルビン回路：回路のしくみ、明反応との関係、回路の調節；C_4植物とCAM植物：回路のしくみ、葉緑体構造の分化、環境への適応；光呼吸：3種類の細胞小器官の共同作業；光合成産物の転流：ソース―シンクの関係	同上
5	窒素固定とタンパク質合成	大気中の窒素の固定：根粒菌の共生、窒素固定の反応系、土壌中の窒素と植物による取り込み、植物体内での硝酸の還元、アミノ酸の合成、タンパク質合成・プロセッシング・会合の調節；タンパク質の分解と窒素化合物の体内移動：発芽時、老化時の変化	同上
6	植物ホルモンの働き	植物の生長、分化を調節し、また植物に影響を及ぼす環境要因の仲介者となるオーキシン、ジベレリン、サイトカイニン、アグシジン酸、エチレンなど植物ホルモンにつき、発見の歴史、化学構造、典型的な生理作用などについて解説する。	増田芳雄
7	遺伝的変異と生理的機能	人類は突然変異を利用することにより農業を進歩させてきた。DNA上の変化が植物ホルモンや細胞壁の変異をひきおこし、その結果矮性が出現することを例を示して説明し、さらに環境条件が遺伝子発現にも影響することについて概説する。	倉石晋

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	細胞成長と細胞壁	植物細胞の生長を規定する要因：液胞の吸水、吸水は液胞液の浸透圧と細胞壁圧（膨圧）とのバランスによる。吸水増加（生長）の原因となる浸透圧上昇と細胞壁のゆるみ、細胞壁の力学的性質、化学的性質、およびその構築と代謝的回転などについて説明する。	山本良一（帝塚山短期大学助教授）
9	器官相互作用	植物には、体のある部分がシグナルを出すことによって他の部分の発育や機能に影響を及ぼす、相関という現象がある。シグナルの本体はホルモン，ビタミン、同化産物などの化学物質と思われる、頂芽優勢、光屈性、重力屈性などの相関現象について概説する。	神阪盛一郎（大阪市立大学助教授）
10	植物の運動	植物の器官が環境の刺激に反応して運動する傾性という現象がある。傾性運動は、生長や膨圧変化による細胞の容積変化が原因となっておこる。巻き髭のコイリング、葉の就眠運動、食虫植物の捕虫葉の運動などについて概説する。	同上
11	細織培養と分化全能性	主として高等植物の試験管内培養系を例として、細胞、組織、器官、不定胚の分化、形態、形成の機構について解説する。とくに前世紀以来の先人の考え方、実験、研究の歴史的展開を軸として説明する。	原田宏（筑波大学教授）
12	形態形成と遺伝子発現	分化全能性を有する培養細胞・組織で得られた形態形成機構に関する知見について解説する。また、形質転換組織・個体の基礎・応用研究への　用についても述べる。	同上
13	光形態形成とフィトクロム	種子発芽、伸長、葉の展開など、植物の生長や分化の過程が光によってどのように制御されるかを説明する。とくに、これら諸反応の光受容体であるフィトクロムが発見された経緯、フィトクロムの化学的性質、作用様式などを、具体例をあげながら解説する。	滝本敦（京都大学教授）
14	生物時計と花芽の形成	生物時計発見の歴史、その性質、しくみ、生理学的意義などを簡単に説明したあと、光週期による花芽形成制御の機構を解説する。とくに、光週反応におけるフィトクロムと生物時計の役割に重点をおき、それらと花成ホルモンとの関係についてものべる。	同上
15	植物と環境ストレス	植物は動物と異り移動が困難で、ストレスを受けやすい。温度ストレスは、乾燥ストレスとも、氷ができたために生じたストレスともある程度関係がある。その他冷害、塩害によるストレス、およびストレスに対する耐性の機構についても説明する。	倉石晋

＝動物の行動と社会＝（TV）

〔主任講師：日高敏隆（京都大学教授）〕

全体のねらい

動物の行動をさまざまな面から眺めてみて、そのしくみ、生存にとっての意味、社会とのかかわり、学習、進化などを理解し、人間の場合についても新しい視点を開く。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	動物行動学	動物行動学（エソロジー）とは、いったい何をどのように研究する学問なのか。その概念と研究内容を概説する。	日高敏隆
2	行動のおこるしくみ	われわれのまわりにはさまざまな動物たちがいる。その多様な行動の背後にある行動をおこすしくみ－生得的解発機構に焦点をあててみたい。	山下恵子（都留文科大文学部非常勤講師）
3	探索と定位	動物は種によって、主に使っている感覚器が異なっている。各々の動物がどのような感覚で環境を探索し対象を定位しているのか、具体例をあげながら考察する。	同上
4	コミュニケーション	動物たちの社会的な生活はリリーサーという記号のやりとり、すなわちコミュニケーション（情報の伝達）によって成り立っている。その具体例をみてみよう。	新妻昭夫（立正大学非常勤講師）
5	適応度とは	動物は繁殖のために、驚くほど多大な努力を払っている。この努力や精巧に組みたてられた行動のしくみは、いったい何のためのものなのか。	日高敏隆
6	適応のための戦略	動物たちは適応度を高めるために、どのような戦略を採用しているのか。具体例にそくして、それを検討してみたい。	山下恵子
7	社会構造－1－群れとなわばり	動物は社会的な存在である。個体と個体の関係、すなわち社会関係について、「群れ」と「なわばり」という観点から、そのメカニズムを考察する。	新妻昭夫

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	社会構造－2 －配偶システム	動物の配偶関係のかたちは、一夫一　、一夫多　、ハレムなどじつに多様である。じっさいにどのような形態があり、それがどのように決定されるのか、具体的に考えてみよう。	新妻昭夫
9	社会構造－3 －真社会性	共同育児、繁殖と労働の分業、世代の重なり、という社会的特徴をもつアリ、ハチ、シロアリは、真社会性の動物とよばれている。その行動と社会を、具体例をあげながら詳述する。	山下恵子
10	利他行動と包括適応度	動物の世界には、一般に「利他行動」とよばれている行動がたくさんみられる。これは、適応度という考え方では説明できない。そこで包括適応度という概念が提出された。	日高敏隆
11	最適戦略とＥＳＳ	動物たちは、自分の適応度を高めるために、いろいろな戦術や戦略をとっている。最適戦略（もっとも効率的な戦略）とＥＳＳ（進化的に安定な戦略）についてみてみよう。	同上
12	行動の進化	化石になることのない「行動」や「社会」の進化は、どのようにして調べることができるのか。比較行動学の基本概念、遺伝的変異と自然淘汰、そして近年の淘汰の理論を検討する。	新妻昭夫
13	共進化	2つ以上の種がたがいに密接な影響をおよぼしあいながら、相互に進化していくことを共進化という。一方だけではほとんど生存できない相互依存の関係が成立するような場合もある。具体的にその例をみながら、先進化の仕組みを考察する。	山下恵子
14	行動の発達 －プログラムと学習－	動物の行動の発達には、生得的な部分と学習される部分があり、両者が複雑にからみあっている。そのプログラムについて、具体例をみながら検討してみる。	新妻昭夫
15	動物の行動からみた世界	本講義をまとめるにあたって、動物の環境世界について考察を加え、さらにエソロジーという観点から人間そのものをみてみたい。	日高敏隆

＝ 脳 と 行 動 ＝ （TV）

〔主任講師：伊藤正男（東京大学教授）〕

全体のねらい

脳の研究は、現代生物科学の極めて重要な課題の一つであり、その医学上の応用や人工知能開発への波及効果に対する期待も大きい。この講座では、現在自然科学の手法を動員して行われている脳の研究の成果をもとに、脳の構造とその働き方の仕組みを解説する。更に、脳と行動の関わりを考察し、脳と心の問題に言及する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	脳の働き	脳とは何か。動物の行動に現われるその複雑で精妙な働きは如何にして生まれるのか。そして、どのようにして脳は我々の精神の担い手になるのであろうか。	伊藤正男（東京大学教授）
2	ニューロン	脳は膨大な数のニューロンから成っている。ニューロンは電気信号を発生し、伝播させ、特殊な化学物質を分泌して相互に情報を伝え合う。	同上
3	脳の構造	脊髄、延髄、小脳、橋、中脳、間脳、大脳と呼ばれる脳の各部分は、それぞれ特徴のある構造をしており、脳の働きの上で違う役割を分担している。	同上
4	反射系	脳の働きのもっとも底辺にあるのが反射である。多数の反射をうまく組合わせて実施する働きは脳に特有のものである。反射における信号の伝わり方を調べてみよう。	同上
5	脊髄下降路	延髄より上位の中枢から脊髄へ何本もの下降路が降りていく。その信号は、自動脊髄で行われている反射を活動させたり、停止したり、種類を切り換えたりする働きがある。代表的な下降路の構造と作用を調べる。	同上
6	小脳	小脳は直接、あるいは脊髄下降路を介して間接に反射系につながり、反射の働きを正確な、円滑なものにする。いかにも計算機に類似した小脳の働きや構造について考察する。	同上
7	大脳基底核	大脳の深部にある幾つもの核の集合体で、運動の自動的な制御の中枢である。これが病気で侵されると、いろいろな型の不随意運動が起ってくる。大脳基底核は運動制御における自動的な安定装置の役を担っているようである。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	感覚系	皮膚、目、耳、鼻、舌で受けたいわゆる5感の情報は神経信号に変えられて上位の中枢へ送られる。脳はどのようにしてこれらの情報を分析し、外界のイメージを作り出すのであろうか。	伊藤正男
9	随意運動	われわれは意のままに運動を行うことができるが、その仕組みはどうなっているのであろうか。大脳の運動野で生まれた司令信号が脊髄に送られて運動を引き起す過程を分析してみる。	同上
10	情動	われわれの感情の根底にあるのは、外界からの刺激に対する生物学的な価値判断である。この価値判断機構は視床下部にあり、大脳辺縁系に助けられて働くと思われる。	同上
11	本能行動	摂食、飲水、性行動など本能的な行動は情動と密接な関係があり、大脳辺縁系、視床下部が中枢として働く。本能行動と脳とのかかわりについてしらべてみる。	同上
12	睡眠と覚醒	通常の睡眠はノンレム睡眠と呼ばれるがこれが時折レム睡眠と呼ばれる別の型に切り変わる。覚醒とこれら2型の睡眠のリズムが作り出される脳内の仕組みについて考えてみよう。	同上
13	記憶と学習	脳の記憶装置は、使い方によって信号の伝わり方が変化する可塑性シナプスにより作られている。これらのシナプスが神経回路網に組込まれて脳の学習機能が生まれる。	同上
14	大脳連合野	大脳皮質の感覚野、運動野の間を占める連合野は動物が高等になるにつれて発達し、人間では大脳表面積の大半を占める。ここに言語野が生まれ、思考等の高次機能が含まれる。	同上
15	脳と心	反射に始まって大脳連合野まで、脳の構造と機能について一歩一歩登ってきたが、最後に「脳と心」の問題を考えてみよう。心は果して脳の働きとして最終的にとらえうるであろうか。	同上

＝植物と菌の系統と進化＝（TV）

〔主任講師：西田　誠（千葉大学教授）〕

全体のねらい

植物と菌の起源と進化を生活史と比較形態学を通じて考察する。系統分類における形質についてもふれる。植物については、特に陸上植物の進化の方向とその必然性を地質時代の環境との関連において考えようとするものである。本講では菌は動・植物にてい立する第3の生物群として扱う。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	藻類の分類と分類形質	紅藻・褐藻・緑藻は古い時代に分類された呼び名であるが、色が違うと光合成産物や生殖細胞の形態なども異ることがわかり、色による藻類の分類は自然分類と評価されるようになった。藻類の分類形質は植物界全般にも適用できる。	千原光雄（筑波大学教授）
2	紅藻と褐色の生活環	藻類の生活環の様式は多様である。紅藻には2世代型と3世代型があり、褐藻には同形世代型、コケ型、シダ型、後世動物型がある。 動物型の生活環をもつホンダワラ類は藻類の中で最も高度に分化した体制をもち、陸上の高等植物に比較できる藻類である。	〃
3	緑藻の系統と生活環	緑藻は、1.陸上植物に連なる系統群、2.淡水に分布する緑藻、3.海に生育する系統群の3つに分類できる。生活環の様式は、1と2では単相型で、これはコケ型、シダ型の始原型と思われる。3には同形世代型、コケ型、シダ型、後生動物型がある。	〃
4	植物の上陸1 緑藻の細胞学	現生植物の細胞構造や細胞器官の複製機構の比較研究（特に細胞分裂、核分裂の微細構造、鞭毛装置構造など）によって浮び上ってきた祖先の植物像を紹介する。また、陸上に生育圏を拡大することができた条件を細胞レベルで解説する。	堀　輝三（筑波大学助教授）
5	植物の上陸2 緑藻の生理化学	現生の緑色植物にみられる光合成を中心とした物質代謝系の多様化が、それらの植物が出現したと推定される地球上の環境（酸素、二酸化炭素濃度など）の変化に対しどのように適応し、エネルギー獲得様式を進化させてきたかを考察する。	猪川倫好（筑波大学教授）
6	コケとシダ（造卵器植物）	水中で単相で生活する緑藻や車軸藻から進化した緑色植物としてコケとシダをとらえる。水中から陸上へと生活圏をひろげる過程でおける造卵器の形成と退化、機械組織・フラボノイドの発達、水の欠乏に対応する気孔や通道組織の発達などを解説する。	水島うらら（上野学園大学短期大学部教授）
7	葉の進化	テロム説による葉の進化を解説。ハナヤスリ科（シダ類）の裸葉と実葉が示す葉の立体的構成を大葉進化の中途段階に留るものとして理解し、茎頂と葉の形態形成様式から茎と葉のちがいを論じ、維管束植物の茎頂分裂組織の進化を紹介する。	今市涼子（玉川大学農学部講師）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	花と種子1 種子の成立	石炭統の種子化石から、テロムが大胞子のうを包み、珠皮となり、胚珠が成立する過程を推論する。いっぽうシダ植物の前裸子類からソテツ系統と球果類系統へと進化したという推論を材解剖学の上から考察する。	西田　誠 （千葉大学教授）
9	花と種子2 花の構成	花は短縮したシュートであり、おしべは小胞子葉、めしべは大胞子葉であるとするゲーテの変態論にはじまり、ゴノフィル説による花の器官学的解釈までを紹介する。いっぽう、花の原型を地質時代のソテツ類、針葉樹類に探り、花々二系列のあることを紹介する。	西田　誠
10	被子性	心皮（大胞子葉）が胚珠包んでめしべを形成するのが被子植物の特徴である。その前ぶれは裸子植物に見られる。被子性は種子の保護と散布に役立つ。いっぽう、心皮説では説明困難なめしべの解釈についてはゴノフィル説がある。	田村道夫 （神戸大学教授）
11	重複受精	被子植物の生殖細胞の行動の特徴は、1.精核（精子）が花粉管により胚珠まで送られること。2.2個の尤核のうち、1つは卵核と合体して胚をつくり、他は極核と合体して内胚乳をつくることである。これらの発生学的性質を裸子植物と対比させて説明する。	山下貴司 （お茶の水女子大学助教授）
12	被子植物の起源	モクレン類と尾状花序類 古植物学的例証 花（結実器官fructificafion）の化石	西田　誠
13	菌の形質と分類(1)	菌は動物界・植物界に対応する菌界の生物である。これは生物群の系統進化の考察の結果であるが、その考察は後に行うことにしてここではやず、菌界に二つの亜界 — 原核菌亜界（細菌の仲間）と真核菌亜界（かび・きのこの仲間）があることを述べる。	寺川博典 （東京医科歯科大学名誉教授）
14	菌の形質と分類(2)	次に、原核菌亜界の分類上重要な形質と分類群5門について述べ、従来の一般的分類法との比較を行う。さらに、真核菌亜界に含まれる菌の重要な形質と分類9門について述べ、それぞれの特徴に基づいて、従来の系統進化の考え方との比較を行う。	〃
15	菌の系統進化	従来、菌は下等植物とされるか、または真核菌類を動物界・植物界に対する菌類界として原核菌類は別界に含められた。しかし菌の起原と進化を考察すると、原核菌類と真核菌類とは一界をなすものであり、生物界は動・植・菌の三界からなる（生物三元論）	〃

＝ 動 物 の 進 化 ＝（TV）

〔主任講師：丸山工作（千葉大学教授）〕

全体のねらい

生物の進化の経過、その多様性、その仕組みについて現在の生物科学がどのようにみているかを各専門家を通じて解説する。とりわけ、分子進化論の最近の進歩は、生物進化に新しい見地をひろげており、ヒトの由来についても考えなおさせている。ごく基本から、新知見にいたるユニークなシリーズ。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	生 物 の 進 化	生物の進化の概論	丸 山 工 作 （千葉大学教授）
2	ガラパゴスの動物相	1. ダーウィンとガラパゴス 2. ガラパゴスの地質学 3. ガラパゴス諸島での種分化 4. ダーウィンの自然選択説と適応	八 杉 龍 一 （科 学 史 家）
3	生 命 の 起 源	1. 生物学的一様性 2. 化学進化 3. 年代決定 4. 最少要素生物 5. 宇宙 子 6. 微化石 7. RNA酸素 8. まとめ	野 田 春 彦 （放送大学教授）
4	分子レベルの進化と中立説	1. はじめに 2. 遺伝的浮動について 3. 突然変異遺伝子の種内への蓄積過程 4. 分子進化の特徴と中立説 5. おわりに	木 村 資 生 （遺伝学研究所教授）
5	分子進化系統樹と動物の起源	1. 生物系統論の試み 2. 分子進化学と分子時計 3. 分子系統樹 4. 5SrRNAによる生物系統樹 5. 生物界の全体像 6. 後生動物の起源 7. 後生動物の系統“異説” 8. 5SrRNAによる後生動物の系統樹 9. おわりに	堀 寛 （名古屋大学助手）
6	動 物 の 系 統 樹	1. はじめに 2. 化石 3. 生きている化石（living fossils） 4. 比較形態学 5. 発生学 6. 生態学、生物地理学 7. 生化学、生理学 8. 遺伝学、飼育動物の場合 9. 動物の系統樹	蒲 生 重 男 （横浜国立大学教授）
7	細胞器官の起源	1. ミトコンドリア 2. DNAとゲノム 3. 遺伝子転写系 4. タンパク質合成系 5. タンパク質輸送系 6. 共生説か内生説か	石 川 統 （東京大学助教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	種　の　分　化	1. 大進化と小進化 2. 種とは何か？ 3. 亜種問題 4. 時間要因と環境要因 — 一つの種系統（ lineage ）のたどる道 5. 絶滅も進化の一コマ	浜　田　隆　士 （東京大学教授）
9	行　動　の　進　化	1. はじめに　2. カモ類の求愛行動の進化 3. 2つの問題　4. 転位行動　5. 儀式化 6. クジャクの場合　7. 行動戦略と進化 8. ESS（進化的に安定な戦略）	日　高　敏　隆 （京都大学教授）
10	原　生　動　物	1. 原生動物とは 2. 原生動物の行動制御の進化 3. イオンチャンネルより見た原生動物の進化	内　藤　　豊 （筑波大学教授）
11	無脊椎動物にみる退行進化	1. 器官の退化していく進化　2. 鍾乳洞の中の世界　3. 水性の洞窟動物　4. 陸生の洞窟動物　5. 洞窟動物に共通する特性　6. 洞窟性脊椎動物にみられる退行進化の証拠　7.甲虫類にみられる退行進化の段階　8. 水生洞窟動物の由来　9. 陸生洞窟動物の由来　10.退行も進化のひとつ	上　野　俊　一 （国立博物館室長）
12	脊　椎　動　物	1. 脊椎動物とはなにか 2. 脊椎動物の基本体制 3. 相同と相似 4. 体制の進化	養　老　　司 （東京大学教授）
13	ヒトの進化(1)	1. 霊長類の進化　6. 新人段階 2. 人類への進化 3. 猿人段階 4. 原人段階 5. 旧人段階	原　和　郎 （東京大学教授）
14	ヒトの進化(2)	1. はじめに 2. 分子時計とは 3. ミトコンドリアDNAの分子時計 4. ヒトに一番近い類人猿はどれか 5. グロビン偽遺伝子の分子時計	長谷川　政　美 （統計学研究所室長）

＝生態学概論＝（R）

〔主任講師：岩城英夫（筑波大学教授）〕

全体のねらい

個体一個体群一群集の各レベルにおける生物と無機的環境、生物と生物との関わり合いを具体的事例をあげて講義し、生物的自然の構造と機能、生物群集や生態系の多様性、全体性およびその動的平衡についての理解を深める。講義を通じて生態学の基本的原理と概念を理解させ、また環境問題に対する生態学の視点も述べる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生態学とは －序論－	生態学とは何か。この講義の導入部として生態学の対象、方法および環境要因の捉え方などについて述べる。	岩城英夫 （筑波大学教授）
2	生物と光環境	生態系のエネルギー源である太陽光の分布と季節変化は生物の生活に大きな影響を与える。生物と光要因との関係を、光と植物の光合成・成長、光と動物行動との関連を中心に述べる。	同上
3	生物と温度環境	生物は種類により異なる温度限界と耐性温度を持っている。温度環境は地球上の場所により異なり、これに応じて生物の生活期間や分布が決められていることを述べる。	同上
4	生物と大気要因	大気の成分中、二酸化炭素は植物の光合成作用の制限要因になりやすい。酸素は水生生物の生活を制約する。生物と大気要因との関係を説明し、風や大気汚染の影響についても触れる。	同上
5	生物と水環境	陸地における水の分布と植物の水収支について述べ、植物の生育や分布にとって水が重要な制限要因であることを説明する。	同上
6	生物と土壌環境	植物の生育は土壌の物理的・化学的性質によって影響を受ける。一方、植物や土壌生物の存在は土壌の形成に大きな役割を果していることを述べる。	同上
7	気候と植生の分布	温度と降雨量の地理的分布に応じて、地球上にはさまざまなタイプの植物群系が分布している。生活形と気候条件との関係、過去の気候変化に伴う植生の変遷についても触れる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	個体群の成長と調節	生物の集団（個体群）における個体数は、有限の環境において無限に増加することは不可能である。このような環境下において、生物種はどのように対応しているのか、その機構についてまず理論的に述べ、ついで実例を見ながら論じる。	藤井宏一（筑波大学助教授）
9	動物の密度効果と“なわばり”	有限の環境下において動物の個体数が増加すればいつかは過密の状態に達する。このような過密状態に対する動物の対応の仕方について論じる。また、過密を避ける機構、特に“なわばり”について、例を用いて論じる。	同上
10	競争と“すみわけ”	同じ資源を利用する異なった生物種間には種間競争が存在しうる。種間競争とは何か。その機構についてまず理論的に取り扱い、さらに、種間競争の結果として起こる“すみわけ”について、観察例を用いて説明する。	同上
11	植物間相互作用	植物の種内競争と種間競争の仕組みについて述べる。まず同種の植物間で起こる競争密度効果と自然間引について述べ、次に異種の植物間の競争の機構について説明する。	岩城英夫
12	捕食関係	食うものと食われるものの関係（捕食関係）は生物群集内における生物相互作用の中でも一番重要な関係の一つである。まず捕食関係の動態に関する理論について述べ、次に実例を用いて自然界における捕食関係の果す役割について説明する。	藤井宏一
13	絶滅と安定性	局所的に見た時、ある特定の生物種がその場に長期にわたって存続するとは限らない。その絶滅の機構は何か。生物種の生物群集の中での役割を論じつつ、各生物種の絶滅の可能性、そして群集そのものの安定性について論じる。	同上
14	植物の繁殖戦略	植物には一年生・多年生、草本・木本などさまざまな生活の仕方があり、それぞれ特徴的な成長・繁殖様式をもっている。異なった環境下でこれらの生活様式がどのような生態的意義をもつかについて説明する。	岩城英夫
15	生物群集の構造と組成	生態系の性格を決める上で最も重要なのは植物群落の種類組成と空間構造である。群落構造は生態系の微環境に影響し、また動物の分布もそれに対応して独特の群集構造を形成することを述べる。群集構造の季節的変化についても触れる。	同上

＝宇宙の構造と進化＝（TV）

〔主任講師：小尾信彌（放送大学教授）〕

全体のねらい

太陽系、銀河系、銀河宇宙と階層化し、多様化している現在の宇宙の特徴や構造から、それが形成された100数十億年の歴史についての理解を深める。専門分野の講師によって、各分野の最前線の研究にもふれる。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	宇宙と宇宙論	1. 宇宙と宇宙論 2. 宇宙の構造と進化 3. 内容の展開について	小尾信彌 （放送大学教授）
2	宇宙探究の歴史Ⅰ ー開かれた無限宇宙	1. 宇宙論とは 2.「閉じた有限宇宙」からの脱却 3. 開かれた無限宇宙	佐藤文隆 （京都大学教授）
3	宇宙探究の歴史Ⅱ ービッグバンの発見	1. 宇宙のモデル 2. 星の進化と元素の起源 3. 新しい観測手段 4. 進化する天体と宇宙 5. ビッグバンの発見 6. 宇宙と人間	同上
4	光学天文台Ⅰ	1. 望遠鏡 2. 位置観測 3. 撮像観測 4. 測光観測	小平桂一 （東京大学教授）
5	宇宙の現状Ⅰ	1. 天体の観測 2. 光や電波（電磁放射） 3. 天体が放つ放射とその観測	小尾信彌
6	宇宙の現状Ⅱ	1. 光が伝える天体の情報 2. 原子のエネルギー状態 3. 原子のスペクトル 4. スペクトル線の幅 5. 太陽や恒星の連続スペクトルー熱放射 6. 電波天体の連続スペクトルー非熱的放射	同上
7	宇宙の現状Ⅲ	1. 宇宙の階層構造 2. 超銀河団と銀河団 3. 銀河 4. 恒星 5. 冷たい天体	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	光学天文台 Ⅱ	1. 分光器 2. 低分散分光観測 3. 高分散分光観測 4. 干渉計観測	小平桂一
9	相対論的宇宙論 Ⅰ	1. 運動の相対性 2. 光の特殊性 3. 特殊相対論 4. ローレンツ変換 5. 特殊相対論の実験的裏付け	江里口良治 （東京大学助手）
10	相対論的宇宙論 Ⅱ	1. 加速度運動と慣性力 2. 一般相対性原理と等価原理 3. 重力理論としての一般相対論 4. 一般相対論の検証	同　上
11	相対論的宇宙論 Ⅲ	1. ニュトン的宇宙論 2. 宇宙原理 3. 膨張宇宙 4. 宇宙の地平線 5. 膨張宇宙の密度と温度	同　上
12	相対論的宇宙論 Ⅳ	1. 重力の強さと時空の歪み 2. シュワルツシルド時空中の運動 3. 事象の地平面とブラックホール 4. ブラックホール候補 5. ブラックホールの蒸発	同　上
13	初期の宇宙進化 Ⅰ	1. ビッグバン宇宙確立史 2. 宇宙の初めの1000秒の出来事 3. 宇宙黒体輻射	池内　了 （東京大学助教授）
14	初期の宇宙進化 Ⅱ	1. 宇宙の大規模構造 2. 銀河形成の2つのシナリオ 3. おわりに	同　上
15	電波天文学 Ⅰ －電波による宇宙の観測	1. 電波と光 2. 電波望遠鏡 3. 野辺山の45m電波望遠鏡 4. 野辺山の五素子電波干渉計 5. まとめ	海部宣男 （東京大学助教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
16	電波天文学 Ⅱ ー電波でみた宇宙	1. 宇宙における電波の発生 2. 星間分子雲からの星の誕生 3. 銀河中心核と宇宙ジェット	海部宣男
17	恒星の誕生	1. 恒星進化論 2. 星間ガス雲 3. 恒星誕生のダイナミックス 4. 星間塵と星間分子 5. 星の誕生の現場 6. 主系列星への収縮	杉本大一郎 （東京大学教授）
18	恒星のエネルギー源 と主系列星の寿命	1. 恒星のエネルギー源は何か 2. 原子核融合のエネルギー 3. 恒星の内部構造 4. HR図と主系列 5. 主系列星の寿命	同上
19	巨星への進化と死	1. 巨星への進化 2. その後の進化と原子核反応 3. 恒星の死	同上
20	星の進化論の意義	1. 極限状態の物理 2. 物質世界の歴史 3. 恒星はなぜ進化する	同上
21	恒星進化の残骸 Ⅰ	1. 観測されている超新星 2. 大質量星の爆発するタイプ2の超新星 3. 白色矮星が爆発するタイプ1の超新星	野本憲一 （東京大学助教授）
22	恒星進化の残骸 Ⅱ	1. 超新星の残骸 2. 中性子星	同上
23	大気の外からみる 宇宙 ーX線天文学	1. 大気の壁 2. X線の空 3. X線星の正体 4. つぶれた星ー中性子星とブラックホール 5. X線パルサーとX線バースト 6. 人工衛星「はくちょう」と「てんま」 7. かに星雲 8. 銀河系外のX線源	小田稔 （宇宙科学研究所長）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	銀河の進化と元素Ⅰ	1. 銀河進化の基本的物理過程 2. 星間物質の物理状態 3. 分子雲からの星生成 4. 巨大バブルの形成	池　内　　了
25	銀河の進化と元素Ⅱ	1. 星生成の基本データ 2. 星の進化のデータ 3. 放出されたガスの混合過程 4. 銀河の進化と重元素 5. おわりに	同　　上
26	太陽系の構造と起源　Ⅰ	1. 太陽系の構造 2. これまでの太陽系起源論	中　澤　　清 （東京大学助教授）
27	太陽系の構造と起源　Ⅱ	1. 惑星の形成過程 2. 木星型惑星の形成 3. 地球の形成・進化 4. 太陽系内小天体の起源	同　　上
28	生命のはじまりと惑星の進化	1. 生命と物質 2. 生命の起源 3. パンスペルミア 4. 生命の歴史 5. 生命構成物質の合成 6. 惑星環境と生命	大　島　泰　郎 （東京工業大学教授）
29	地球外生命を探る	1. 太陽系に生命を探る 2. 太陽系外の生命 3. 銀河系内における文明社会 4. 地球外文明探査 5. 地球外文明への送信	同　　上
30	まとめとこれからの学習	1. さらに勉強したい人に 2. 自分でいろいろ考える	小　尾　信　彌

＝太陽系の科学＝（TV）

〔主任講師：小尾信彌（放送大学教授）〕

全体のねらい

惑星や小惑星、衛星、彗星など非常に多数の天体が太陽の重力を受けて集団をなしているのが、われわれの太陽系である。本科目では、惑星などの運動や、個々の天体の性質等について、最近までの研究成果をふまえて講義し、現代の太陽系像を習得する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	研究の歴史	導入として全15回のカリキュラムを述べ、つづいて古代やギリシャ時代から太陽系天文学発展の歴史を概観し、現代の探査機による太陽系探査にいたる。現代の宇宙観形成までにおける太陽系天文学の果たした意義も考える。	小尾信彌（放送大学教授）
2	太陽系の概観	太陽系の全体像について述べる。太陽を中心とした諸天体の配位や分布、運動等について述べ、太陽系に見られる全般的特徴を学び、太陽系の起源に及ぶ。	同上
3	地球の運動に伴う現象	自転や公転、歳差など地球の運動に伴って見られる諸現象は、1年の季節、時刻や時間等を通じて古来われわれの生活や自然の認識に大きくかかわってきた。これらについて学ぶ。	吉岡一男（放送大学助教授）
4	月、惑星の現象	月や惑星に見られる諸現象は、古くから天文学が発展し、宇宙の構造（太陽系のモデル）を形成するのに大きな役割を果たしてきた、これらについて学び、さらに日、月食についてもふれる。	同上
5	惑星運動の法則の発見	16世紀後半のチコ・ブラーエの惑星位置の観測をもとに、17世紀初めにケプラーが惑星運動に関する3法則（ケプラーの法則）を発見した。ここでは、観測結果から法則が導かれたいきさつや手順について学ぶ。	堀源一郎（東京大学教授）
6	面積速度の法則	17世紀後半にニュートンは万有引力の法則を発見し、それに基づいてケプラーの3法則は理論的に導かれた。ここでは面積速度の法則（第2法則）について、3の諸側面を学ぶ。	同上
7	楕円運動の性質	万有引力の法則からは、2体の運動の軌道として楕円、放物線、双曲線が得られる。ここでは、太陽系でふつうに実現している楕円運動について学ぶ。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	第3法則を導く	万有引力の法則からは、2体の運動について公転の平均距離と公転周期のあいだに、いわゆる第3法則が導かれる。ここでは3の導き方を通じて2体運動を考え、また天文学における第3法則の応用等も学ぶ。	堀　源一郎
9	惑星以外の天体の運動	地球をまわる月、一般には惑星をまわる衛星の運動も2体の運動として考えることができる。ここでは衛星の運動などや、さらに彗星のような小天体の運動について述べる。	同　上
10	摂動	現実の太陽系においては、惑星や衛星等の運動を論ずる場合に2体運動は理想化されたものにすぎない。小惑星の運動をはじめ現実の太陽系の力学を論ずるため18世紀以降発展した摂動について学ぶ。	同　上
11	地球型惑星	水星、金星、地球、火星、さらに月など地球型の諸天体について、地球からの観測や最近の直接探査で得られた結果をもとに、それらの地形的特徴や物理化学的な性質を学ぶ。	村山定男（国立科学博物館理化学研究部長）
12	木星型惑星	木星、土星、天王星等についての知識は、最近の直接探査の成果によって格段に進んだ。ここでは、それらの成果をふまえて、これら大型の惑星の諸性質を学ぶ。木星型惑星に属する衛星について学ぶ。	同　上
13	隕石と彗星	彗星に関する物理化学的な知識、構造等に関する知識も、1985～86年のハレー彗星の観測を通じて大きく進んだ。ここでは彗星やそれに伴なう流星等について学ぶ。また、隕石についての諸研究の成果についても学ぶ。	同　上
14	太陽と惑星	太陽やその活動についての研究も、最近の宇宙探査を通じてめざましい進展が見られる。また、太陽放射やその活動が惑星など太陽系の諸天体に及ぼす影響等についても新知見が得られている。ここでは、それらの成果について学ぶ。	桜井邦朋（神奈川大学教授）
15	これからの太陽系	太陽系についての研究がこれからどのように進展していくかについて、さまざまな側面から、理論的な研究や観測、探査等の進展と可能性について話し合う。	同　上

＝宇宙像の変遷＝(TV)

〔主任講師：村上陽一郎（東京大学教授）〕

全体のねらい

現代宇宙論の解説ではなく、人類が過去に、どのように宇宙を把握しようとしてきたか、という点を振り返り、そのなかから、≪科学的宇宙観≫が生れてくる過程を跡付けることを、主たる目標とする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	宇宙観とは何か	宇宙観の一般的な意味を探る。人類が、自分の知っている世界を空間と時間の上で拡大し、世界の初め（と終り）、世界の果て、などを考え、さらに人間をそのなかに位置付ける、という営みを、神話として行ってきたことを日本と中国を例にとって、考える。	村上陽一郎（東京大学教授）
2	インド人の宇宙観	神話的宇宙観の典型として、インドの古代的な宇宙神話を取上げる。空間、時間の構造などを手掛りに、≪須彌山説≫も学ぶ。また天文学との関りにも触れよう。	楠葉隆徳
3	ギリシアの宇宙観	プラトン、アリストテレスらの≪哲学≫に先行する神話的宇宙像と、そうした≪哲学的≫宇宙像との関りや、その特徴について述べる。	村上陽一郎
4	地球中心モデル ―プトレマイオスの場合―	ギリシア的宇宙論のなかから生れた、数学的天文学としてのプトレマイオスの説を取り上げる。どのように天体の動きを記述しようとしたか、そこでは、宇宙の構造はどのように考えられていたか、を探る。	同上
5	アラビアの宇宙観	7世紀に出現したアラビア世界では、どのようにギリシアを受け継ぎ、またどのようにイスラム独自の着想をそれに付け加えたかが問題となる。ここではその点を考えてみる。	楠葉隆徳
6	中世からルネサンスへ ― 西欧の場合 ―	ユダヤ＝キリスト教的な宇宙観の特徴は、「創世記」にある如く、神の世界創造にある。ギリシアやイスラムの学問を受け継いだ西欧世界が、中世、あるいはルネサンスに、どのように、世界創造とそうした学問とを組合せて、統一的宇宙像を造ろうとしたかを探る。	村上陽一郎
7	コペルニクスの登場	ルネサンスの宇宙像の一つが、太陽中心的モデルであり、コペルニクスはその代表者と考えられている。それが≪科学的≫宇宙像とはかなり距離のある宇宙観として提案されていることを学ぶ。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
8	ケプラーの宇宙観	近代天文学の祖と言われるケプラーもまた、ルネサンス宇宙像を抱いていた一人である。ケプラーの占星術や、天体についての考え方が、≪科学的≫宇宙像とどう違うか、重なるか、という点に焦点を当てよう。	村　上　陽一郎
9	ニュートンと近代宇宙観	ニュートンの出現で、天体の運動を説明する基本法則は出揃った。しかしニュートンその人の描いていた宇宙像と、近代に生れたニュートン力学的世界像との間にも、大きな距りがあることを認めなければならない。	同　　上
10	コスモスの崩壊	17世紀後半、デカルト哲学の浸透と、ニュートン法則の解明とから、従来のような、意味と構造と秩序をもった宇宙、つまりコスモスは、次第に、単なる天体を容れる空間と、均質な長い時間、という≪科学的≫な宇宙概念に変質し始める。この点を考えよう。	同　　上
11	観測器械の進歩と天文学	ガリレオ、ニュートン以来、望遠鏡の改良は目覚しく、掃天観測が行われるようになり、とくに南半球から観測される天体が、新しい知識を我々に与え、近代的天文学が誕生する。	同　　上
12	地　球　を　測　る	それとともに、我々の住む地球についてのさまざまな観測が詳しくなり、宇宙のなかでの地球の位置も次第にはっきりしてくる。	同　　上
13	現代天文学とその宇宙観　　その1	13、14回を通じて、オルバースの道理からビッグ・バン仮説の成立までの経過を辿り、そのなかで、現在の科学的宇宙像がどんなものであるかを、探る。	小　林　桂　一（東京天文台教授）
14	現代天文学とその宇宙観　　その2		同　　上
15	宇　宙　と　人　間	宇宙に飛び出した人間は、宇宙のなかで、再び、科学を超えた世界に出会う。こうした体験を踏まえ、現在の我々人間が、科学的宇宙論の向うに何を見ようとしているのか、を考えて、本講の締め括りとする。	村　上　陽一郎

＝地球の科学Ⅰ＝（TV）

― 固　体　地　球 ―

〔主任講師：奈須紀幸（放送大学教授）〕

全体のねらい

地球は固体地球・水圏・気圏の３つの大きな層圏から構成される。そのうち、固体地球について説明する。最近数十年間における固体地球に関する研究の進展はいちじるしいものがある。それらの内容についても説明する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	固体地球の層圏	固体地球は球状の層圏から構成される。地表から地心へ向って、地球表層、マントル、外核、内核から構成される。地球表層としては地殻、あるいは地殻とマントルの最上層部で構成されるプレートという岩石圏がとり上げられる。これらについて学ぶ。	奈須紀幸（放送大学教授）
2	地球の物理的性質	地球はほとんど球形であるが、若干形がずれている。このような地球の形状について学ぶ。また、地球には重力、地磁気が存在する。これらについて学ぶ。さらに、他の天体との関係で、地球には潮汐現象がある。また宇宙線がふりそそぐ。これらについて学ぶ。	同　上
3	内因的作用による地表の変化	地球内部の諸要因によって生じる変化が、地表まで達して変化を与えることがある。それは火山であり、地震によって生じる断層であり、また隆起や沈降である。これらの事項について学ぶ。	同　上
4	外因的作用による地表の変化	地表は大気の温度変化を受けたり、結氷・融氷による膨張・収縮の作用を受けて風化する。また流水の作用によって侵食されて堆積物を生じる。堆積物は運搬され堆積される。また大陸氷河の消長によって海水準が変動し、相対的な隆起・沈降が起る。これらを学ぶ。	同　上
5	火成岩	地球表層の内部およびマントルの内部では固相の物質の一部がとけてマグマとなっている。マグマが冷却固結したものが火成岩である。火成岩には深成岩、火山岩およびその中間の岩石がある。また酸性岩、中性岩、塩基性岩、超塩基性岩の別がある。これらを学ぶ。	同　上
6	堆積岩	地表とくに海底に堆積した堆積物は、長年月の間に続成作用を受けて堆積岩になる。礫・砂・泥が固化した砕屑岩、生物源の生物岩、化学的に沈澱した化学的堆積岩、さらに火山源の火山性堆積岩がある。これらについて学ぶ。	同　上
7	変成岩	火成岩、堆積岩が地下深所である条件下での圧力・温度のもとにおかれると固相を保ったままで内部の原子配列が変化し、別種の岩石となることがある。これを変成岩という。変成岩もときに別種の変成岩となることがある。これらについて学ぶ。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	相対年代と絶対年代	地層中には化石が含まれることが多い。それらの中には生存期間の限られた示準化石がある。地質時代はまず主としてこれら示準化石によって区分された。これを相対年代という。一方、放射性同位体によって岩石の年代を測定して絶対年代が組まれた。これらを学ぶ。	奈須紀幸（放送大学教授）
9	地質調査と地質図	地球表層の岩石分布や構造は地質調査によって解明される。地質調査には、地表の調査、ボーリング調査、空中からの調査がある。こうした調査の結果は地質図にまとめられる。地質調査の方法および地質図の読み方も含めてこれらの事項を学ぶ。	同上
10	プレートの動態	地球の表層は数枚のプレートによっておおわれている。これらのプレートは相対的に運動しているものも多い。プレートは中央海嶺中軸部で新生し、潜没帯でひとつのプレートの端は潜没して地球内部へ沈んで消失する。こうしたプレートの動態について学ぶ。	同上
11	潜没帯	ひとつのプレートが隣り合う他のプレートの下へ潜没する場所では潜没帯が形成される。潜没帯では地形的には海溝が形成され、潜没面に沿って地震が多発する。また潜没面のある範囲でマグマが形成され易く、その部分は火山帯となる。これらについて学ぶ。	同上
12	古生物の進化	地球表層に生物が芽生えたのは海洋が形成されてからある期間を経た頃であった。先カンブリア代の終り頃から骨格をもつ生物が増加し化石として残るようになった。これら古生物は進化しつつ変化してきた。その変化のあり方について学ぶ。	同上
13	造山帯	隣り合う2つのプレートが押し合う場合、主として圧縮力がはたらいて、プレートの境界は近で変形が起る。これを造山運動という。造山運動に伴って山脈が形成されることも多い。造山運動のあり方についてはその考察に変化があった。これらの事項について学ぶ。	同上
14	地球表層の変遷	地球表層はその形成の初期から核になる部分を中心としてその周囲で造山運動をくり返しつつ伸張し大陸の部分が拡張してきた。一方、大陸は分裂・移動した痕跡も残している。このような地球表層の変遷のあり方について学ぶ。	同上
15	地下資源の利用	地球表層には金属資源や石油・石炭・天然ガス等の地下資源が賦存する。また地下水も資源のひとつと言える。これら地下資源の在り方とその利用について学ぶ。	同上

＝地球の科学Ⅱ＝（TV）

― 日　本　列　島 ―

〔主任講師：奈須紀幸（放送大学教授）〕

全体のねらい

私達が生活の基盤をおく日本列島について、地球科学的な視点からその本質を追及する。日本列島は太平洋とアジア大陸の境に位置する弧状列島で、環太平洋変動帯の一部である。日本列島は典型的な変動帯で、火山帯、地震帯を伴い、地史的にも多くの変動を経験した。これらのことについて学ぶ。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	日本列島の特徴	日本列島は本州を中心とし南北方向に長くのびた大小の島々よりなり、アジア大陸の東端に位置し、太平洋およびフィリピン海に面する。環太平洋変動帯の一部を占める。このような日本列島の特徴について学ぶ。	奈須紀幸（放送大学教授）
2	日本の地質	日本列島は幾つかのプレートが接し、せめぎ合う場所に位置する。そのため、地質は複雑である。そのような複雑な日本列島の岩石の分布の様相と地質構造の大勢について学ぶ。	同　上
3	日本の気象	日本列島は南北方向に長く、気象の在り方も場所によって大きく変る。しかし、全般的には中緯度の偏西風帯に位置し、気象は西から東へと移ってゆく。高気圧、低気圧、前線はいずれも東進する。台風は別の経路をたどる。これらの事項や気候について学ぶ。	同　上
4	日本をめぐる海	日本列島は周囲を海にめぐらされている。南方からは黒潮や対馬暖流が北上し、北方からは親潮が南下する。このような日本周辺の海流について学ぶ。また、海水の性質について学ぶ。さらに日本周辺の波浪、津波について学ぶ。	同　上
5	日本列島とプレートの動き	日本列島は大局的には太平洋プレート、ユーラシアプレートおよびフィリピン海プレートが接する場所に位置する。アメリカプレートの西端も北海道東部までのびている可能性もある。これらのプレートの動態について学ぶ。	同　上
6	日本周辺の海底	日本周辺には太平洋、フィリピン海、東シナ海、日本海、オホーツク海などの外洋、縁海が分布する。これらの海底にはさまざまな地形的特徴が見られ、また堆積物や基盤の岩石についても多くの知見が得られている。これらの事項について学ぶ。	同　上
7	日本の地震	日本列島ではその周辺からはじまる潜没面が列島の下部に達している。そのため日本列島は地震帯に重なっている。これら地震帯で発生する地震の発生機構などを考究しつつ地震帯の特性について学ぶ。また地震予知の在り方についても学ぶ。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	日本の火山	太平洋底は日本海溝をへて東北日本の下へ、また伊豆・小笠原海溝をへてフィリピン海の下へ潜没する。フィリピン海底は西南日本の下へ潜没する。これに伴って日本列島には多くの火山が分布する。これら火山の諸々の特性について学ぶ。	奈須紀幸（放送大学教授）
9	日本の古生代・中生代	日本列島で発見された最古の化石は古生代オルドビス紀に属する。また最古の岩石は約20億年前のものである。そして日本列島の各地に古生代、中生代に属する岩石が分布する。一部には先カンブリア代と推定される岩石が分布する。これらのことについて学ぶ。	同上
10	日本の新生代	古第三紀の日本は比較的静穏な時期で浅海がひろがり主要炭田が胚胎した。新第三紀は変動の激しい時期でグリーンタフなどの形成をみた。第四紀には海水準の変動があり海岸線が前進・後退をくり返した。このような事項について学ぶ。	同上
11	日本の地下資源	日本列島はモザイクを集めたような複雑な地質構造を有する。そのため広大な面積を占める地下資源の分布は見られぬ。そのかわり、各種の金属資源、非金属資源がスポット的に分布する。とくに黒鉱は注目される。地下水資源も含めてこれらの事項について学ぶ。	同上
12	日本の海陸境界	日本列島は狭長な国土に対して長大な海岸線を有する。その海岸線には岩石海岸、砂浜海岸、内湾に面した干潟海岸の別がある。また、氷期、間氷期にともなう海水準の変動で海岸は前進、後退をくり返し、大陸棚を形成した。これらのことについて学ぶ。	同上
13	日本における地球科学の進展	日本が西欧の科学を全面的にとり入れ始めたのが百年余り前からである。地球科学の分野においてもそのことは同様であった。そしてこの一世紀余の間に日本列島に関する地球科学的研究も著るしい進展をみた。その経過について学ぶ。	同上
14	関東地方の地史	日本列島の中でも一例として関東地方をとり上げ、より詳細な地史を学ぶ。関東地方は日本列島の中でも最も広大な関東平野とそれをとり巻く山脈地帯、および伊豆、三浦、房総の半島によって形成される。そこで生起した地史的な経緯について学ぶ。	同上
15	日本列島と人間生活	私達は生活の基盤を日本列島においている。従って、日本列島の地学的特性と私達の日常生活とは、きわめて多くの点について深い結びつきがある。こうした関連性についていろいろの視点から学ぶ。	同上

＝大気と海洋＝（TV）

〔主任講師：奈須紀幸（放送大学教授）〕

全体のねらい

固体地球をおおう大気、および固体地球表面の７割をおおう海洋の本質を知るために、色々な専門分野にわたって学ぶ。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	大気の構造	気温・湿度・気圧・風向・風速などは絶えず変化している。とりわけ、高さに伴う変化は大きく、例えば、数千kmの高低緯度間の気温差はわずか１０kmの高度差によって体験できる。地球規模でみた大気の平均構造の実態を把握し、以下の各章の理解に役立てる。	○浅井富雄（東大・海洋研・教授） 奈須紀幸
2	大気の熱収支	大気運動のエネルギー源は太陽である。地球に降り注ぐ太陽放射エネルギーが大気中をどのように伝達され分配されたか、その道筋をたどり一方、地球も宇宙空間に向けて熱放射エネルギーを放出して、大気・地球系のエネルギーの収支が成り立っている。大気の熱平衡について考察する。	同上
3	雲と降水	水蒸気の凝結や昇華、水滴の凍結などによって微細な水滴や氷晶が空気中に形成される。それらの粒子は併合過程を経て、雲粒から雨滴へと成長する。雲や降水の形成にいたる微視的物理過程について述べ、さらに、雲と降水の巨視的動態にもふれる。	同上
4	対流と局地風 －大気運動その１－	４、５章では主に大気の運動を扱う。最初に地球大気の運動のしくみとその特徴を要約し、次に、中・小規模の運動として地表面付近に形成する対流混合層と水平の温度差によって生じる海陸風や山谷風をとりあげる。	○木村龍治（東大・海洋研・助教授） 奈須紀幸
5	低気圧と台風 －大気運動その２－	日々の天気は高・低気圧の動向に大きく支配されている。大規模な運動として、長大な前線を伴う温帯低気圧と巨大な渦巻きの熱帯低気圧（台風）に焦点を合わせ、それらの構造や発達のしくみについて記述し、さらに、これらの気象現象と大気大循環とのかかわり合いについてもふれる。	同上
6	気候の変動	地球上に大気が生成して以来、大気の状態は絶えず変動をくり返しながら今日にいたっている。気候変動のしくみについては不明な点が多いが、これまでの気候変動の実態とその原因、とりわけ海洋の果たしている役割について述べ、最後に人間活動の気候変動におよぼす影響についてふれる。	○浅井富雄（東大・海洋研・教授） 奈須紀幸
7	大気研究の歴史	日常身近かな天気の変化から地球規模の大気大循環にいたるまで、気象についての我々の知識や考え方がどのようにして養なわれ育ってきたかを、その発展の節目に重点をおいてふりかえり、併せて国際協力のもとで維持・展開されている世界の気象観測や予報の現状を示す。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	海洋探究の歴史	海洋の科学的探検の時代から現今の海洋実験の時代までにわたり、主として海洋と海底の構造と運動の面から探究の成果を概観し、海洋の科学へと誘うよすがとする。	○寺本俊彦（東大・海洋研・教授） 奈須紀幸
9	海洋大循環	海洋の物理現象の中でも特に顕著な海洋大循環について、その成因、構造について説明し、それらを更に深く理解する上で必須な課題である人工衛星からの観測や深層の循環の観測について述べ、関連する重要なトピックスである海洋－大気系の大規模変動や海洋温度差発電についてふれる。	同上
10	波と潮汐	海洋では常に沖から岸に向って波が打ち寄せている。この波はどこで作られ、どのような性質があるのか、実験を行って説明する。特殊な波として、高潮と津波に触れる。次に潮汐のメカニズムと水理模型による瀬戸内海の潮流の研究について述べる。	○木村龍治（東大・海洋研・助教授） 奈須紀幸
11	海洋の物質循環	生物の活動を通じて、いろいろな元素が循環している。酸素、炭素、窒素に注目して、海の中に残された生物活動の軌跡をたどることによって、その動き、特徴などについて探る。生物生産や沿岸の富栄養化の問題との関係についてもふれる。	○服部明彦（東大・海洋研・教授） 奈須紀幸
12	海洋の生態系	海洋の生物は大小の部分生態系に分れ、200m以浅の浅海系には植物の光合成活動があるが深海系では微生物と動物のみとなる。沿岸域と外洋域とでは種類も生物量も異なるが、近年、内湾の有機汚濁が外洋にはみ出す傾向がみられる。	○堀越増興（元東京大学教授） 奈須紀幸
13	海底の生いたち	深海底は中央海嶺で生れ、横に数cm／年の速さで移動しながらしだいに深さを増してゆく。海底が生れる場所には多数の割れ目があり、熱水が噴出して重金属を析出させていたり、溶岩が露出している所もある。マリアナトラフなど島弧の背後（陸側）にも小規模ながら海底が生れつつある海域がある。	○小林和男（東大・海洋研・教授） 奈須紀幸
14	深海底の沈み込み	海溝は世界中で最も深い場所であるが、海洋のへりに細長く並んでいる。深海底はここから斜めに陸の下に沈み込んでいる。その形は深発地震や地震の波の伝わり方から確認されている。海溝の地形や沈み込みのようすは地域によって異なっていて、地震の起こり方や火山活動の歴史にも関係をもっている。	同上
15	大陸棚の生いたち	大陸の周辺には海底傾斜のゆるやかな大陸棚がひろがっている。その外線の水深は、ほぼ120～140m程度である。このような海底地形が生じたのは氷期・間氷期の繰返しに対応した海水準変動が原因であることが判明した。その経緯について説明する。	奈須紀幸

＝現代資源論＝（R）

〔主任講師：山口梅太郎（東京大学教授）〕

全体のねらい

資源問題が論議されている割りには、鉱物資源について、例えば、鉱物資源と人間とのかかわり合いや、資源の分布や資源量の問題、資源を獲得し、利用するための技術、更に、わが国としてどう対応すべきかといったことがあまりにも知られていない。このセミナーでは鉱物資源の諸問題を、その開発と利用を中心に、技術的側面から概説する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	鉱物資源と文明	•道具の使用　•青銅器の発達　•鉄の時代 •資源とその利用	山口　梅太郎 （東京大学教授）
2	成長の限界	•成長の限界　•石油20年説　•資源の価格と消費	同　上
3	資源の有限性について	•地殻中の元素　•再生不可能な資源	同　上
4	鉱床の分類と成因	•鉱床　•埋蔵(鉱)量と資源量　•鉱床の形成 •鉱床の分類　•マグマ鉱成床　•堆積成鉱床	武内　寿久禰 （東京大学教授）
5	貴金属、非鉄金属資源	•金　•銀　•銅　•鉛・亜鉛	同　上
6	構造材用金属資源	•鉄　•マンガン　•アルミニウム　•チタン	同　上
7	鉄合金用金属資源	•錫・タングステン・モリブデン　•ニッケル・クロム　•コバルト（Co）	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	先端技術に必要な鉱物資源	・希土類（RE）　・核融合発電　・リチウム（Li）　・ベリリウム（Be）　・ニオブ（Nb）　・シリコン（Si）	武　内　寿久禰
9	核燃料鉱物資源	・原子力発電に必要な地下資源　・ウラン鉱床の形成　・ウラン資源の偏在と資源確保　・放射性廃棄物の処分	同　　上
10	非金属鉱物資源	・近代産業を支える非金属資源　・石灰石　・ダイヤモンド　・リン鉱　・蒸発岩　・粘土鉱物　・沸石　・流黄	同　　上
11	エネルギーと文明	・はじめに　・エネルギー需要の推移と現状　・エネルギー需給の将来予測	冨　永　博　夫 （東京大学教授）
12	エネルギー資源	・はじめに　・化石燃料資源　・核燃料資源	同　　上
13	天　然　ガ　ス	・はじめに　・天然ガスの探査、開発、生産　・ＬＮＧの生産と輸送　・ＬＮＧの用途　・ＬＮＧの冷熱の利用　・天然ガスのメタノールへの変換利用	同　　上
14	石　　油	・はじめに　・石油の鉱床　・石油の探鉱　・石油の開発と生産　・石油の強制回収　・海底石油の開発	同　　上
15	石　　炭	・はじめに　・石炭の成因と分類　・石炭の生産と供給　・石油の利用技術の開発	同　　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
16	オイルサンド	•はじめに　•オイルサンド資源の埋蔵量 •オイルサンド鉱床の特性　•採収技術 •ビチュメンの精製	冨永博夫
17	オイルシェール	•はじめに　•オイルシェールの資源埋蔵量 •オイルシェールの性状　•採掘と乾留の技術 •精製プロセスと製品	同　上
18	わが国の鉱物資源とその確保	•日本は資源のない国ではない　•鉱物資源の輸入　•資源確保の方策	山口梅太郎
19	鉱物の探査と評価	•鉱床探査の必要性　•山相学　•地質調査 •物理探査　•地化学探査　•試錐　•数理地質学の応用　•海外における探査	武内寿久禰
20	鉱山の開発　(Ⅰ)	•合理的な開発	山口梅太郎
21	鉱山の開発　(Ⅱ)	•坑内採掘　•採鉱法　•坑内環境の整備	同　上
22	鉱山の開発　(Ⅲ)	•特殊な方法による鉱物資源の採取　•採掘作業のロボット化	同　上
23	鉱石の処理　(Ⅰ) ー処理のフローー	•鉱石の事前処理　•フルイ分けおよび分級	井上外志雄 （東京大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
24	鉱石の処理　(Ⅱ) －物理的分離の原理と方法	• 比重選別　• 静電選別　• 磁力選別　• 色彩選別	井　上　外志雄
25	鉱石の処理　(Ⅲ) －物理化学的分離の原理と方法	• 浮遊選別	同　　上
26	鉱石の処理　(Ⅳ) －製　錬	• 乾式製錬　• 湿式製錬	同　　上
27	海から得られる鉱物資源	• 溶存鉱物資源　• 陸上から海底へ連続する鉱床　• 海底の堆積鉱床　• 深海底熱水鉱床	山　口　梅太郎
28	未利用資源とリサイクル	• 未利用資源　• 低品位資源の開発　• 自然エネルギーの利用　• 廃棄物利用　• リサイクル　• 再資源化の問題　• 再資源化の技術	井　上　外志雄
29	資源開発における情報処理	• 探査情報の処理　• 鉱山開発とＯＲ手法　• 原料の配合とプラントの自動制御	同　　上
30	資源開発と環境問題	• 資源開発に伴う自然環境の破壊　• 資源利用と環境保全との調和	山　口　梅太郎

＝統計的データ解析とソフトウェア＝（TV）

〔主任講師：大隅　昇（統計数理研究所助教授）〕

全体のねらい

現象解析を進める場合に、データの収集・獲得に始まり、それを分析に適した形に表現し、それらのデータから意味のある情報を引出すまでの過程で必要となる数理的な方法がデータ解析法である。とくに観測特性や個体が多数の場合の多次元データの解析は、諸現象に潜む複雑な情報を理解の容易な形に要約する手段として有効である。講義ではまず、データ解析で考えるデータとは何かについて述べる。次に、データ解析の情報探索ならびにその視覚化の基本操作であるグラフィカル表現法について概観する。さらに多次元データ情報を縮約化するための主な手法（主成分分析、パターン分類法など）を解説する。続いて、データを分類し、そこに内在する類似性や差異性を洞察するための方法である分類法（自動分類法、クラスター法）の主な方法について解説する。また、これらの多次元データ解析法を活用するためには、コンピュータと統計ソフトウェアの支援が不可欠である。そこで、統計ソフトウェアの歴史、考え方、その役割を述べるとともに、実際にそれらがどのようにデータ解析の諸場面で役立つかを、統計ソフトウェアの紹介や分析事例を交えて解説する。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	多次元データ解析(1) ーデータとはー	データ解析において、データをどのように表現しけた取扱うかを考える。まずデータ解析基本手続きであるデータの獲得と収集に始まり、データの性質（量、質、形式など）の考え方について述べる。さらに、この講義で取り上げる多次元データ解析手法の簡単な紹各と互いの関連について概観する。	大隅　昇 （統計数理研究所助教授）
2	多次元データ解析(2)	多次元データ解析の意味とその有用情について概観するとともに、データ解析におけるコンピュータと統計ソフトウェアの役割について述べる。また、データ解析の基本操作であるデータ変容の方法（数値化、変数変換、コーディングなど）をはじめデータ表の作成・編集の方法などについて述べる。	同上
3	データの探索と情報の要約化(1) ーデータの縮約化ー	多次元あるいは多変量データの情報を数値として縮約し、その特徴を把握するための基礎的な手順について述べる。多変量データから算出される各種の統計量とその解釈、相関と無相関などについて述べる。	同上
4	データの探索と情報の要約化(2) ーデータの視覚化ー	データに内在する特徴を直感的にまた簡便に観察する手段として、図的表示法あるいはグラフィカル表現法が有効である。こうした探索的手法のうち、データのプロット図、層別（各種のヒストグラム、箱髭図など）、2変変量データの散布図、多変量データの散布図などを紹介する。また、コンピュータ・グラフィクスの活用法と利用上の注意点などを、関連統計ソフトウェアを用いて確める。	同上
5	多次元情報の縮約化 ー合成指標の生成と次元の縮約ー	多次元データ解析の手法のうち比較的利用度がたかい、多変量データの次元縮約を目的とする主成分分析型手法（主成分分析法、パターン分類法など）、判別分析型手法、集約化研データ（クロス表など）の分析法を、簡単な数値例を交えて説明する。また、これらの手法と後述の分類手法との接点などについて述べる。	同上
6	データの分類 ー自動分類法あるいはクラスター化法ー	データ解析の基本は分類操作にあるが、最近はコンピュータ利用を前提として種々の分類法が登場している。ここでは、データ解析の実際場面で有用な代表的な手法を、階層的分類法と非階層的分類とに分けて紹介する。またそれに先立って、分類手法の区分や研究の流れ、分類操作の目的と意味、他の多次元解析手法との関連などについて述べる。	同上
7	階層的分類法 (1)	まず、分類操作で重要な概念である分類対象ならびにクラスター間の類似性や非類似性の考え方について述べ、さらに各種の類似度・非類似度などを説明する。次に、階層的分類法を凝集型分類法と分枝型分類法とに分けてそれらの主要な手法についての基礎的な数理を説明する。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	階層的分類法(2)	まず、凝集型分類法の主な方法（群平均法、ウォード法など）を述べる。次に分枝型分類法（ＡＩＤ法など）を簡単に説明する。さらに、これらの手法に関連する統計ソフトウェアを紹介し、簡単なデータで分類法の数理や計算手順を理解する。	大隅　昇
9	非階層的分類法(1)	分類結果を階層構造で表す階層的分類法に対して、そうではない分類法をまとめて非階層的分類法と総称する。したがって、無数の手法が存在するが、このうち実用的見地から有用な分割最適化型手法である、K-means 法と ISODATA法を中心に述べる。またこれらに関連して、クラスターの等質性の基準や分割最適化基準を統計的にどう考えるかを述べる。	同　上
10	非階層的分類法(2)	K-means 法とそれに類似の手法の計算手順を述べ、実際に簡単なデータによって分類の仕組みを理解する。また、コンピュータ利用の現界や使用上の問題点などを簡単な数値例を通して理解する。	同　上
11	分類結果の解釈と活用法	データの分類結果を、理解の容易な形に表現する方法が必要となる。ここでは、分類結果から、データに内在する情報の解釈を容易にするための二次分析の方法や得られたクラスター化情報を要約する分析手順について述べる。また、コンピュータ・グラフィクスを使って、分類結果を視覚化する道具を構築する際の考え方等について解説する。さらに各分類手法が抱える問題点や今後の動向などについて総括する。	同　上
12	統計ソフトウェア(1)	データ解析を進める際にコンピュータと統計ソフトウェアの支援は不可欠である。ここではまず統計ソフトウェアの歴史とそれが統計データ解析においてはたしてきた役割について述べる。また代表的な統計ソフトウェアの特徴と主要な機能を紹介する。さらに、統計ソフトウェアの品質や性能をどのように考えたらよいか、また利用者にとって使い勝手のよい統計ソフトウェアとはどのようなものかなど、コンピュータとユーザの接触面で発生する諸問題について解説する。	同　上
13	統計ソフトウェア(2)	既存の代表的な統計ソフトウェアとその特徴を総合的に比較し紹介する。また、可能な限りマイクロコンピュータ上で色々な統計ソフトウェアを使ってみて、それらの特徴を理解する。また、新しい課題として注目されている統計インテリジェント・システムの現状や考え方などについて解説する。	同　上
14	データ解析の事例研究(1)	既に講義した内容を実際データの分析という形で紹介し、データ解析の諸手法の運用の手順や効用を確める。まず、初めの例として、住民環境意識の調査データを用いた領域クラスタリング・システムを紹介する。これは、本来その表現が容易でない人の意見や態度をコンピュータ・グラフィクスを利用して、目に見える形に具体化するもので、主成分分析法や分類法を中心に色々なデータ解析手法を用いている。	同上上
15	データ解析の事例研究(2)	事例研究の(2)として、資源探査衛星の測定データに基づく地域区分法、身体計測データの分析、生物データの分類など、データ解析の事例をオムニバス的に紹介する。こうした事例の抜粋を眺めることでデータ解析の効用や利用上の注意点を知ることがここどの課題である。	同　上

量　子　論（TV）

〔主任講師：野田春彦（放送大学教授）
阿部　龍（東京大学教授）〕

全体のねらい

原子や分子の行動は量子論にしたがっている。従って、化学や物理学の基礎的理解には量子論が必要である。放送大学の化学や物理学の講義の中には量子論を使わなくてもなんとか理解できるものもあるが、量子論を理解いていなくてはわからないものもある。量子論をまともに学ぶためには数学的な基礎が必要であるが、この講義ではそれほど予備知識がなくてもなんとか重要なことは理解できるようになるようにと考えてある。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	量子論はなぜ必要か	１９世紀の物理学者は古典物理学、すなわちニュートンの力学とマクスウェルの電磁気学によって全ての物理現象が説明できると考えていた。しかし、２０世紀に入って古典物理学では説明できない現象が発見された。ラザフォードの原子模型の欠点について述べ、水素原子のスペクトルおよび光電効果を解説し、量子論がなぜ必要かに関するオリエンテーションを与える。	阿部龍蔵（東京大学教授）
2	波と粒子の二重性	光電効果の一つの特徴は、古典物理学では波と考えている光が粒子のように振舞う点である。この粒子は光子と呼ばれるが、そのエネルギーEと運動量pに対するアインシュタインの関係（E＝h　、p／　）を説明する。ついで、この考え方を一般化し、粒子は逆に波の性質をもっと仮定し、ド・ブロイ波を導入する。このような前提に立ってボーアの水素原子模型を考察し、同原子のスペクトルが見事に説明できることを示す。	同　上
3	シュレーディンガー方程式	ド・ブロイ波の挙動を記述する方程式が表題のシュレーディンガー方程式である。この方程式をいきなり提示しても初心者には理解困難と思えるので、準備段階として古典的な波動方程式について触れる。その後で、シュレーディンガー方程式	同　上
4	シュレーディンガー方程式の簡単な例	シュレーディンガー方程式を解くと、体系がとりうるエネルギーの値（エネルギー固有値）が決まる。そのような具体例として、自由粒子、井戸型ポテンシャル下での粒子、水素原子の基底状態などを取り扱う。	同　上
5	一次元調和振動子	古典力学の単振動を量子論の立場から考察する。この体系は厳密に答えがえられる数少ない例の一つであるが、その結果は分子の振動など具体的な物理的、化学的な問題を扱うとき役に立つ。数学的な手段としてエルミート多項式に言及し、体系のエネルギー準位を求める。	同　上
6	量子力学と古典力学	量子論の戦略に慣れたこの時点で、量子力学に関するやや一般的な叙述を行う。まず、量子力学は特別な場合には古典力学に帰着するが、これに関連したエーレンフェストの定理を証明する。また、粒子の位置と運動量が同時に正確には決まらないという不確定性関係に触れ、さらに量子力学の一つの形式である行列力学（演算子の行列による表現）について述べる。	同　上
7	水素原子	ここで再び水素原子の問題を取り上げる。具体的な計算にはラプラシアンの変換とか球面調和関数に関する知識が必要だが、詳細には立ち入らず結果だけを示すのにとどめる。ただし、物理的な側面として角運動量を強調し、また体系のエネルギー準位について解説する。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
8	スピンと量子統計	量子力学的な粒子はスピンという内部自由度をもつ。スピンは角運動量の一種だが、その大きさが整数の場合、粒子はボース統計に従い、また半整数の場合、粒子はフェルミ統計に従うことを指摘する。ボース統計、フェルミ統計の両者を量子統計と呼ぶが、これは粒子の交換に関して波動関数のある種の対称性を要求する。その帰結としてえられるパウリ原理について説明する。	阿部龍蔵 （東京大学教授）
9	原子の構造	原子の中の電子の数が多くなった場合の近似的取り扱いの原則、とそれを実際の原子に応用する方法について説明する。原子の周期律との関係を、元素の各種の性質から考える。	細矢治夫 （お茶の水女子大学教授）
10	二原子分子	水素分子の中の電子の存在状態を化学結合という面から考え直し、それを共有結合一般、結合の次数、不対電子などの考え方に拡張する。分子軌道法とその応用についても述べる。	同　上
11	多原子分子の構造と性質（Ⅰ）飽和化合物	HF、H_2O、NH_3、CH_4 などの分子を例として原子価状態、混成軌道などについて説明する。さらに分子一般の立体構造とその対称性を飽和炭化水素を例として考える。実例としてポリエチレンとダイアモンドについて説明する。	同　上
12	多原子分子の構造と性質（Ⅱ）不飽和化合物	エチレン、アセチレン、ベンゼンなどを例としてπ電子とδ電子について説明する。分子の電子状態とスペクトルの関係、波動関数の対称性を一般的に考える。ポリアセチレンとグラファイトの例を考える。	同　上
13	分子の振動と回転	二原子分子を調和振動子と考えて、力の定数、基準振動などの概念を導入する。分子の回転、分子内の結合の周りの回転をも考える	下沢　隆 （埼玉大学教授）
14	分子の電気的・気的性質	分分子の双極子モーメントと結合の分極と赤外スペクトルの関係を考える。これをマイクロ波スペクトル、核磁気共鳴スペクトル、電子スピン共鳴スペクトルにまで拡張して説明する。	同　上
15	化学反応の電子論	二原子分子の解離をポテンシアル曲線から考え、それから化学反応中間体への関係を述べる。化学反応と電子軌道の関係を各種の反応の実例との関係で考え、それを分子の設計まで延長する。	同　上

＝ 生命のしくみⅠ＝（TV）

－生化学の基礎－

〔主任講師：木原弘二（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

生物はさまざまな物質からできている。これらの物質の働きによって、生物の活動が支えられている。この点をいくつかの例によって示し、これらの生体内物質の特徴的な性質と機能を説明し、生化学の基礎的な内容を紹介する。特別な予備知識は必要ではないが、初歩的な化学の用語を理解できることが望ましい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	生体に含まれる物質	タンパク質、脂質、糖など、生物をつくり上げている物質の主な特徴と構造について説明する。これらの物質の構成成分であるアミノ酸、糖について解説し、それらが結合して高分子物質となることを取りあげる。	木原弘二（慶應義塾大学教授）
2	生体内の高分子物質	タンパク質、核酸、多糖類について、その構造、とくに立体的な分子の形をとりあげて、これらの物質の働きとの関係を説明する。今後の話題となる具体的な例について考える上で基礎となる知識を述べる。	野田春彦（放送大学教授）
3	栄養のとりこみ	食物の形で体内に入った物質が消化され、化学的な変化を受けて、身体の成分として組み入れられたり、エネルギー源として分解されたりしている。これらの反応の説明を通して、酸素の働きについて述べる。	木原弘二
4	代　謝 ― 遺伝病(1) ―	身体の中で起こっている化学的な変化は、すべて酵素の作用によって進行している。この酵素に欠陥があると、その反応が進行しないために、さまざまな障害が生じる。この酵素の欠陥が遺伝的に決定されている二三の例を紹介する。	同上
5	タンパク質の構造	酵素の外にも、大切な働きをしているタンパク質が多数存在している。ヘモグロビンは、酸素を結合して運ぶタンパク質で、その遺伝的に異常な形に変ったために生じる障害の例として、鎌型赤血球貧血症について説明する。	同上
6	呼吸のしくみ	生物のさまざまな活動は、すべてエネルギーを消費して進行している。これらのエネルギーの源泉は、細胞内での糖と脂肪の酸化的分解によって得られている。この分解過程は多数の酵素による反応段階を経て進み、各段階での産物が、別の物質の素材として利用される。	同上
7	エネルギーの利用	呼吸によって得られたエネルギーは、ＡＴＰの形で、細胞のさまざまな活動に利用されている。細胞内への物質の吸収、筋肉の収縮、神経における刺激の伝達などを例として、ＡＴＰのエネルギーが利用されているしくみを説明する。	丸山工作（千葉大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	タンパク質合成	タンパク質は、どの個体においても、毎日合成されている。このタンパク質合成反応のしくみを説明し、遺伝子としてのDNAが、タンパク質の構造、つまりアミノ酸の結合順序を決定している点を紹介する。	木原弘二
9	調節	タンパク質はつねに合成されているが、すべての種類のタンパク質が合成されているわけではない。状況に対応して、一定のタンパク質が合成されたり、合成が停止したりするしくみが働いている。この例を通して、調節といわれている生体の働きの一面を紹介する。	同上
10	脂質 — 遺伝病(2) —	細胞が合成している物質には、細胞の構造に大切な糖や脂質があるが、これらの物質の分解が正常に進行しないために、早期に死亡したり発育異常を招くことがある。粘液多糖類蓄積症、糖脂質蓄積症を紹介する。	同上
11	生物界における元素の循環	すべての生物界の有機物質は、もともと太陽からの光のエネルギーを、植物が利用して、二酸化炭素を糖に変える光合成反応にもとづいてつくり出されたものである。この反応と窒素化合物の生物界での利用、分類の過程について述べる。	同上
12	細胞と細胞膜	細胞は、核、ミトコンドリア、小胞体などさまざまな構造が含まれていて、それぞれ機能を分担している。これらの存在にとって、膜構造が基本的なもので、膜の構造、その働きについて紹介する。	長野敬 （自治医科大教授）
13	細胞の増殖とDNAの複製	タンパク質の構造を指定しているDNAは、細胞の分裂とともに、同一の分子が均等に子孫の細胞に伝えられてゆく、このDNA分子が、同一の構造を維持して合成されていくしくみについて解説する。	木原弘二
14	遺伝子工学	最近話題となっている遺伝子工学の現状を紹介して、特定の遺伝子を確認できた例を説明する。また、この技術を利用して、ヒトの遺伝病の原因となる欠陥遺伝子を明らかにして、胎児診断に応用されていることを述べる。	同上
15	物質系としての生命	全体のまとめとして、生命現象は、生物特有のタンパク質、DNAなどの物質の存在なしには考えられないこと、その機能の遂行に必要なエネルギー、および情報の役割にもとづいていることなどから、物質と生命の関係を改めて考察する。	木原弘二 長野敬 野田春彦 丸山工作

＝恒星天文学＝(TV)

〔主任講師：吉岡一男（放送大学助教授）〕

全体のねらい

恒星に関する基礎知識を得るとともに、それらの知識を観測あるいは理論をもとに得る過程について理解することを目的とする。そのために、恒星の運動、連星の解析、HR図、恒星の大気および内部構造を例に取り、それらの知識を得る方法を具体的に、演習形式も交えて学ぶ。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	年周視差と距離	恒星の定義とその一般的特徴および宇宙における位置づけについて述べる。ついで、全15回のカリキュラムを説明する。そのあと、恒星の直接的な距離決定として重要な年周視差の測定方法について学ぶ。	吉岡一男（放送大学助教授）
2	固有運動と太陽運動	天球上での恒星の動きを表す固有運動とその測定方法について学ぶ。ついで、太陽近傍の星の固有運動と視線速度の観測をもとに、太陽とその近傍の星の運動さらに銀河系全体での星の運動を導く。	同上
3	永年視差・統計視差と運動星団の方法	年周視差より遠い距離まで適用できる直接的な距離決定法として重要な永年視差、統計視差運動星団の方法の3方法の測定原理と測定方法について学ぶ。	同上
4	実視連星の解析	恒星には連星をなすものが多い。ここでは、まず連星の重要性およびその種類と頻度について述べる。ついで、その一種である実視連星の天球上での動きをもとに、公転軌道や星の質量を決定する方法について学ぶ。	同上
5	視線速度曲線の解析	連星には、望遠鏡でも2つの星に分解できないが、スペクトルの変化から識別できる分光連星がある。ここでは、視線速度の測定方法を学び、ついで、分光連星の視線速度の変化をもとに公転軌道や星の質量の情報を得る方法について学ぶ。	同上
6	光度曲線の解析	連星には、食現象による光度変化から識別できる食連星がある。ここでは、食連星の光度変化をもとに公転軌道や星の質量・半径の情報を得る方法について学ぶ。	同上
7	等級と光度	恒星の光度を表す等級にも、測定する波長域の違いによりいろいろな種類がある。ここでは、これら各種の等級と絶対等級およびその測定方法について学ぶ。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	スペクトル型と色指数	恒星は、そのスペクトルをもとにいくつかのスペクトル型に分類される。ここでは、まずスペクトルの測定方法とスペクトル型について学ぶ。ついで、スペクトル型と表面温度の関係に触れ、さらにそれと深い関係をもつ色指数についても学ぶ。	吉岡一男（放送大学助教授）
9	HR図と恒星の分類	横軸に表面温度を表す量をとり縦軸に光度を表す量をとったHR図は、恒星の研究において重要な役割を演じてきた。ここでは、HR図の歴史を述べ、ついでHR図にもとづいて恒星が主系列星や巨星などに分類されることを学ぶ。	同上
10	恒星大気を決める基礎法則	スペクトルが生成される恒星の表面外層は恒星大気とよばれるが、ここでは、恒星大気の構造を決める基礎的法則を学ぶ。ついで、これらの法則をもとに恒星大気の状態を求め、さらに推測されるスペクトルとの関係についても論ずる。	同上
11	恒星大気の物理量の決定	前回で学んだ恒星大気の状態とスペクトルの関係に基づいて、スペクトルの観測から恒星大気の温度、圧力、表面重力速度などの物理量が決定される方法について学ぶ。	同上
12	恒星大気の化学組成の決定	恒星大気の状態とスペクトルの関係に基づいて、スペクトルの観測から恒星大気の化学組成が決定される方法について学ぶ。さらに、こうして決定された多数の恒星の化学組成の結果とその解釈について述べる	同上
13	恒星のエネルギー源	太陽をはじめとして恒星を輝かせている源は、原子核エネルギーであるが、その性質をそれが解明されてきた歴史とともに学ぶ。さらに、このエネルギー源が元素合成の源でもあることやそれが意味していることについても触れる。	同上
14	主系列星の構造と質量光度関係	恒星の内部構造を決める基礎的法則について学び、それをもとに主系列星がどのような内部構造をしているか調べる。そして、それが主系列星の質量と光度の間に成り立つ質量光度関係とどのようなかかわりをもっているか考える。	同上
15	脈動変光星と周期光度関係	主系列星から進化した恒星の例として脈動変光星を取り上げ、脈動の機構を考え、周期光度関係を導く。最後に、これまでのまとめと、さらに深く学びたい人へのアドバイスを述べる。	同上

＝生活と環境＝（R）

主任講師：矢部章彦（放送大学教授）
〔　　〕
仲村優一（放送大学教授）

「生活と福祉」専攻の柱となっている個別の専門別の具体的な主題を、環境との関わりあいという共通の視点からとらえて分析検討し、専門間の境界領域の問題を探る中から、本専攻の共通課題を明らかにすることを目的とする。学生にとっては、卒業研究のテーマ設定に手がかりを与える機会にもなることが期待される。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	生活と環境 —序論—	“生活と福祉”専攻の担当者を中心に主題に関する境界領域の問題を探り、新たな研究の進展に役立てたい。主要な柱は、生活技術を源流とする衣食住の課題、社会的ないし文化的視点からの生活福祉、これに生涯健康科学という新しい視点を加えて所論を展開する。	矢部章彦 （放送大学教授）
2	住生活(1) 高齢化社会と住環境	主として統計資料を中心として欧米には殆ど例を見ない三世代居住がわが国に多く見られる理由が何か、また今後高齢化社会の到来が予想される中で三世代居住がどの様に変わっていくのかその動向について考える。また老人特有の生理的、心理的な特性を明らかにする。	本間博文 （放送大学助教授）
3	住生活(2) 高齢者の住宅事情	高齢者世帯の住宅事情を各種の統計資料に基づいて考察する。中でも三世代同居世帯に着目し、平均的な住宅条件、並びに住空間の使われ方の実態を調査結果に基づいて明らかにし、三世代同居の現代的な意義並びに住宅に関する現状の問題点と改善の指針を探る。	同上
4	住生活(3) 高齢者世帯の家族関係	三世代同居世帯の住計画を行うに当たって、その家族生活の実態を知る必要がある。時間と空間の座標軸の上に投影された家族生活をもとに望ましい三世代同居世帯の家族関係を考え、このような家族関係を実現するための住計画の基本方針を明らかにする。	同上
5	衣生活(1) 生活文化史へのアプローチ	フランスにおける生活文化の調査に関し、これまでの成果と近年アナール派が提唱する新しい方法と課題について、衣生活の問題を中心に述べる。	徳井淑子 （放送大学助教授）
6	衣生活(2) 衣の歴史と環境	生活文化史の新しいテーマの一つとして注目されている清潔感の歴史を衣生活とのかかわりの中で、西欧に	同上
7	衣生活(3) 生活の中の色	ニュートンとゲーテに始まる色についての論争を原点に、新たに生活を受皿として色を考えてみる。東西の色についての認識について、重ね色目と紋章の色を例に配色についての問題提起を試みる。	矢部章彦 （放送大学教授） 徳井淑子

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	衣生活(4) 白さの意識革命	色の一つである白を特にとりあげ、民族固有の白によせる思い、宗教と結びついた白の戒律、などが科学技術のもたらした新しい白の出現によって、どの様に変貌しつつあるかを、新しい技術社会への反省をこめて、論じてゆきたい。	矢部章彦
9	衣生活(5) と環境	洗濯をはじめとする“洗う”という営みに関連して、古来からの石けんと合成洗剤とが出会って以来の、さまざまなアツレキを通して、ヒトにとって便利さとは何か、地球環境の生態系を乱しているヒトのあり方とは、などについて考えてみる。	同上
10	食生活(1) 食と社会環境	食は基本的な生活の領域であるが、社会環境の影響を強く受ける。ここでは社会環境を人口学の立場から捉え、社会の年齢構造、世帯類型、都市の規模、地域環境の区分によって主食パターン分布の分析を試みる。	宮崎基嘉
11	食生活(2) 食と家族	生活の基本単位である家族は、食の営みに深いかかわりをもっている。食と家族とのかかわりを知る一つの方法として、家族が欠けたり加わったりすることが食のどのような変化につながるかについて考えてみたい。	同上
12	食生活(3) 食の生態学	人が「食べること」のしくみを、人間、食物、環境の三つを要素として、これらのつながりを捉えようとするが食の生態学である。この学問はまだ若いが、体系化の手がかりを三つの事例を中心に考えてみる。	同上
13	健康と生活(1) 健康と衣服	室内、戸外を問わず、大気の温度、湿度、気圧に対し生体は相応の生体反応をおこす。衣服は、外界の直接刺激に対する緩解作用を重要な機能の一つとしている。また衣服自体が刺激となることも多い。衣服に対する生体反応のしくみを考える。	本間日臣（放送大学教授）
14	健康と生活(2) 健康と食生活	成人病の多くがライフスタイル病と呼ばれる状況下で、食習慣は最も大きな影響因子の一つである。健康保持のためには、栄養物の選択のみでみでなくその摂取の方法も重要である。食生活と健康問題を消化管の反応を中心に具体的に考える。	同上
15	健康と生活(3) 健康と住生活	住居内の空気の汚染度、温度、湿度をはじめ、住居の構造、音響など健康に直接関与する因子が多い。例えば入浴一つをとっても浴場の構造、湯の温度、カビの発生など問題とすべき点がある。住生活と密接に関連する病態のしくみを考える。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	健やかな子を生むために―新しい感染症の視点から(1)	人間の誕生から生涯にわたるからだと心の精緻ななりたちとはたらきは、これらを微妙に安定させ活動させている維持機構によって支えられているが、これは天与の生命現象である健康な子を生むには母親となる女性の健康が基盤である。特に妊娠から出産、授乳、保育などの過程で子供の将来の健康に密切に関係する性行為感染症など新しい感染症がクローズアップしてきた。クラミジア、トキリプラフマ、HB、肝炎ウィルスなどについて述する。	古谷　博（放送大学教授）
17	母と子のつながり―新しい感染症の視点から(2)	母と子のつながりにおけるウィルス感染症として最近注目されている成人　細胞白血病ウィルス、ヘルペスウィルス、ヒト乳頭腫ウィルスなどについて述べた。これらのウィルスの基礎的研究とその検査・疫学・臨床の発展は、そのまま母子健康科学における重要な部門の一つを占めるに至っている。母と子の密切なつながりのもとにある同産期が特に濃厚な潜伏的継代感染をおこす時期であるという事実を強調したい。	同上
18	女性のライフスパンと健康	出生と乳児死亡の減少、平均寿命の延長、それに高学歴化と社会進出の増加は、女性の生涯のすごし方、健康観に次第に変革し、結婚、家庭、育児などの考え方にも変化がみられている。社会環境との不断の相互関係のもとにある。女性の長いライスパンにおける健康の意義について考えたい。	同上
19	精神衛生(1)食の心理学	食事とそれに付随する行動について、心理学の視角から考える。すぐれて現代的な疾病である神経性無食欲症を出発点とし、文化の発達とともに　離した身体と食物、さらには象徴性を失った現代の食卓状況に関して検討する。	織田尚生（放送大学助教授）
20	精神衛生(2)衣・住と日本人の心	衣服は着る人の自己表現の手段になると同時に、自我と社会あるいは自我と深層とを媒介する装置としての機能をもつ。この点について、文化人類学や民話学の知見を採用しながら考察を進める。	同上
21	精神衛生(3)心の健康とケースワーク	本章は、心理学と社会福祉の接点にかかわる。心の健康を損なうことによって生活上の困難を生じた人々に対して、PSWがどのような形で、援助を行うか、その構造と実際について学ぶ。	同上
22	福祉と余暇(1)人間の社会生活と環境(1)	人間の生活は、人間をとりまく社会環境との相互作用のなかではじめて成り立つものである。言いかえれば、人間は環境と関わりあうなかで、はじめて人間としての生活を営むことが可能となる。かかる意味での人間の社会生活の成り立ちと機序を明らかにする。	仲村優一（放送大学教授）

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
23	福祉と余暇(2) 人間の社会生活と環境(2)	人間の生活にとって社会的・文化的環境のもつ意味の重要性を明らかにした上で、人間の社会生活をさまたげる環境要因について吟味してみる。その上で、生活上の社会問題解決の方途を、人間の社会環境に照明をあてつつ考えてみる。	同　上
24	福祉と余暇(3) 環境とその対策(1)	環境問題とは何か、および、その顕在化と社会的対応策が講じられるに至ったプロセスを吟味する。特に公害対策基本法と関連法、および、国連人間環境宣言等を中心にその意義を検討してみる。	仲村優一 （放送大学教授）
25	福祉と余暇(4) 保健医療と国際協力	国際化の意味を明らかにした上で、国際的にみた保健医療状況を点検してみる。特に、開発途上地域の恵まれない状況に対する先進開発国の援助のあるべき方向をさぐってみる。	同　上
26	福祉と余暇(5) 環境問題と国際協力	国連人間環境宣言やナイロビ宣言の中から環境問題をめぐる国際協力のあり方をめぐってみる。その上で、かが国の開発途上国援助の現状と問題点を明らかにする。	同　上
27	福祉と余暇(6) 労働時間と余暇	生活時間のなかで、とくに働いている人は、労働時間の占める割合が高く、その他の生活の在り方を律する。またそれは、家族生活にも影響がある。その関係について、現在の労働時間短縮問題を焦点におきながら、今後の生活のあり方との関連を述べる。	一番ケ瀬　康子 （日本女子大学教授）
28	福祉と余暇(7) 余暇と生活空間	学歴の向上、高齢化、労働ち短縮などの諸状況のもとで、余暇時間がふえてきている現代において、その余暇が、どのようにつかわれるかはは、人生の在り方に大きな意味をもつ。その在り方を規制するものとして、生活空間の状況を考察してみる必要がある。	同　上
29	福祉と余暇(8) ボランティア活動と生活文化	余暇時間の中で積極的な創造性を持つボランティア活動は、福祉のみならずさまざまな生活場面の文化を創造していく意味を持つ。環境を生活者の例からのりこえていく活動の在り方を、ボランティア活動を通じてとらえる。	同　上
30	生活と環境 ―まとめ―	29回に及ぶこれまでの講義の内容を復習整理した上で、「全体のねらい」、及び、1の序論で提起された目標に照らして、全体のまとめの検討をする。その上で、それぞれの学問の広がりから新たな学問の展開の可能性を追求してみる。	仲村優一

＝心理と教育＝（TV）

―社会化―

主任講師：中川大倫（放送大学教授）
深谷昌志（放送大学教授）

全体のねらい

社会化は個人の行動と社会の要請との間の持続的な相互作用を大きく含む。従来は主として児童期頃までに実現される過程と考えられていた。しかし、現代は社会的構造の大きな変動下にある故、本諸では、この問題を人の長いライフサイクルの過程においてとらえ、可能なかぎり方法論に視点をおいて講述をする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	社会化についての概要	社会化とはどんなことか。学習、適応、自己統制、文化の内面化などとのかかわりはどうか。そして、その社会化が歴史的にどのように考えられてきたか。現代の社会化の特色はどうか、その範囲はどうか、これらの問題について論述する。	小口忠彦（放送大学教授）
2	社会化研究の歩み―方法論を中心に―	遊びの研究を素材としながらアンケート調査を中心とした量的な調査の進め方を概観する。特に、コンピューターを利用した調査の基本を紹介し、あわせて、事例調査の進め方にも付言していきたい。	深谷昌志（放送大学教授）
3	縦断的方法と横断的方法	乳児期から老年期まで、異なった年齢における人間の行動についての観察や測定などの結果を、成長の順序に従って、タテに関連づけようとする研究方法を中心にして説明する。	小口忠彦
4	母子相互作用	母子間のやりとり（turn-takIng）を中心にして微笑反応の出現、人見知りの発生などを研究する際の方法について考察する。	新井邦二郎（埼玉大学助教授）
5	言語の発達	社会化と言う視点から言語発達をとらえる。具体的には、(1)言語発達の流れ、(2)言語発達の個人差、(3)言語発達と思考との関連などについて考えることにする。	岩立志津夫（信州大学講師）
6	マザリングをめぐって	乳幼児期の親子関係、特に母子関係のあり方は、近年大きく変わってきた。ここでは、比較文化的な視点から、わが国の「母子一体化」の内実を、マザリングの概念を用いて国際比較調査などによって明らかにする。	中川大倫（放送大学教授）
7	子やらいの世界	子供のしつけ方の日本的な源流を江戸時代に戻る形で考えていく。この回では、日本の古い雑誌や本の利用の仕方を考えていく。あわせて聞き取り調査の進め方の基本についても紹介していく。	深谷昌志

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	「エミール」を手がかりとして	「エミール」を手がかりとして、西欧の子どものしつけ方のルーツを探っていく。あわせて欧米の原著や雑誌などを利用しての研究の進め方についての基本を紹介する。	志村鏡一郎（静岡大学教授）
9	学校文化	学校制度がどう形成され、それが子どもの人間形成にいかにかかわっているかを考察する。教育史の研究の進め方について、主として、明治以降の資料の扱い方を紹介していく。	深谷昌志
10	ひとの振り見て習う―モデリング―	「朱に交われば赤くなる」と言うことわざのとおり、社会的行動の発達に対してモデリングは大きな役割を果たしている。このモデリングに関する実験的研究を紹介しながら、実験的研究法の目的や手続きについて考えていく。	肥田野直（放送大学教授） 山口勧（東京大学助教授）
11	学級	学級集団は、子供が学校の中で生活していく場であり、そうした集団を通して、子供たちはさまざまなものを学んでいく。学級集団は40人前後なので、質量ともに分析しにくい側面をもつ。そうした小規模サイズのデータ処理を考えていく。	深谷昌志
12	父親らしさの変貌	父親の姿が変わってきたといわれる。たのもしいが、しかし、やさしさも持った父親が増加している。そうした父親の姿をとらえるのにどうしたらよいのか。アンケート調査を中心として、その手続きを紹介していきたい。	同上
13	国際化社会に育つ	海外に勤務する両親とともに幼年期・少年期を外国で過した後に帰国した、いわゆる海外子女・帰国子女たちの異文化間体験と、その人格形成へのかかわりについて考察し、国際化社会に育つ子どものもつ諸問題を理解する。	小林哲也（京都大学教授）
14	適応と逸脱	社会化というと、適応にイメージを置きやすいが、逸脱のアングルも社会化研究の重要な側面を形成している。ここでは、逸脱現象を研究レベルでどうとらえていったらよいのか、そうした方法論を深めていく。	麦島文夫（帝京大学教授）
15	からだとの出会い―性の問題―	身体的成熟、とくに第二次性徴の発見が、青年の心理面に、どのような影響を及ぼすのか。性的成熟を通して青年がどのような問題に直面し解決していかねばならないのか、といった諸問題を研究する際の方法について考える。	福富護（東京学芸大学助教授） 宮川知彰（放送大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	学力をとらえる	学力という用語は、日本独特のものだといわれる。一般には、人間の能力のうち、学業によって達成・評価された「特殊な力」（成績）と定義される。ここでは我が国の学力観をふまえ、学力の内容と形成の過程（プロセス）を、具体的なデータによって分析する。	岡崎友典（放送大学助教授）
17	アイデンティティと自立	青年期には、おとな社会に適応できる一個人の人格としての自立、アイデンティティの成立が期待されるが、この問題について考えるさいの方法について考える。	久世敏雄（名古屋大学教授）
18	青年期における性役割の社会化	男も女も人間である。ただ、性による社会的分業がなされる社会（男と女が区別される）では、「性差」がどのように形成されるかが、その社会的背景とかかわって教育上の問題とされる。ここでは、性的社会化について各種の調査データをもとに学習する。	神田道子（東洋大学教授）
19	青雲の志し	近代日本社会の成立期（変革期）に、重要な役割を果たした青年たちの、人生の軌跡を文献資料によって分析する。明治・大正時代の「青年の志し」の形成過程を、人材輩出ルート（政・財・官界別）と社会発展と対応させて考察する。	深谷昌志
20	現代の進路選択	子どもから大人へ。青年期の進路選択は、彼らの社会人としての「成人役割」を決定する。上級学校進学者も、最終的には「就職」の関門を超えなければならない。ここでは、「職業的社会化」と職業選択との関連を、各種の調査データを用いて分析する。	岡崎友典
21	青年の適応と逸脱	青年期には精神内界の均衡を保ちながら大人社会に適応できる人格を形成していくことが期待されるが、身体の急激な変化や生活条件が作用して非適応状態や逸脱行動を招くことがある。この問題を研究するさいの方法について考察する。	秋葉英則（大阪教育大学教授）
22	青年のサブ・カルチャー	学校は教育目的・内容によって類別されているが、同種の学校間にもその特性により学校差が形成される。中でも非制度的（インフォーマル）な文化としてのスクールカラー（学校文化）が、学校の性格を規定することがある。ここでは、中・高等教育機関を中心にスクールカラーの調査データをもとに「仕学青年」の文化の諸特徴について学ぶ。	耳塚寛明（国立教育研究所）
23	職業生活への適応	社会化の問題を人生の長いライフサイクルの中で捉えると、学業を終了し、職業生活に入ることは、新たな社会化の問題に直面することになる。本講は高度成長と技術革新を伴った経済社会の激しい変動の中に生きる働く者の諸問題を取り上げて講述する。	越河六郎（労働科学研究所研究員）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	働く母親の問題 —マターナル・デプリベイション—	親になることは、生物学的には容易でも心理的にはそれほど簡単でない。そこで、親になる心構えの形成を子どもの人間形成に関連させて深めていく。併せて、質的なデータを量的に処理していく方法論を深めていく。	深谷和子 （東京学芸大学教授）
25	技術革新の中での適応 —ＯＡ化社会の中で生きる—	現在、我々が直面する技術革新のテンポは極めて速い。本講はこの技術革新の激しい流れの中に生きる者の適応問題に焦点をあてる。即ち技術革新が生んだ高度のＯＡ化と働く者との関係を中心に、技術革新と人間疎外の克服等現代の成人が直面する問題にふれる。	椎名新一 （杉野女子大学講師） 中川大倫
26	地域生活と余暇活動	成人の行動様式は情報化の到来につれて変容をとげつつある。かつての地域に変わって、心理的な空間は広がりを見せ始めている。そうした行動のパターンを追う方法を調査の形を辿りながら深めていきたい。	岡崎友典
27	老年期における心的硬さ —老年期と適応	人生の各ステージには、それぞれ特有の問題があり、固有の研究法が必要となる。老年期における心理学的研究は、いまだ確立された段階ではないが、そこでの研究法を、特に臨床的手法を中心にながめてみたい。	荒井保夫 （横浜市立大学講師）
28	老人と家庭	老年期をライフステージにより類型化する。類型別に家族関係、役割の特徴を整理し、老人が達成すべき課題を明らかにする。特に変動する社会にあって、老人が社会に適応するには多くの困難が伴う。調査資料をもとに社会的課題についても学ぶ。	袖井孝子 （お茶の水女子大学助教授）
29	老化に対する適応 —再社会化—	老年期の入口で大半の人々は、子供の自立、定年退職等でこれまで自分が持っていた役割を失う。そのことで社会との接触を断たれてしまう人もあるが、社会の中で老人として新たに、その役割を見いだす人もある。老年期の生きがいの問題を考えてみる。	村瀬孝雄 （立教大学教授） 下中順子 （東京都老人総合研究所研究員）
30	エピローグ	講義の全般を概観し、検討し、残された課題を整理して述べる。	中川大倫 深谷昌志

＝ 都 市 の 研 究 ＝ （ＴＶ）

〔主任講師：加藤秀俊（放送大学教授）
菊竹清訓（放送大学客員教授）〕

全体のねらい

都市化現象は20世紀から21世紀にかけての、人類共通のおおきな課題のひとつであろとおもわれる。この総合科目では、この都市のさまざまな側面について、学際的な接近をこころみ、たんに社会科学のみならず、人文、自然にまたがる都市の総合的研究の成果とこんごにのこされた問題点をあきらかにするとともに、この主題の周辺に卒業研究をもとめる学生に刺激と方向をあたえるように講義内容を配慮した。また、受講者の便宜をはかり、問題別に整理をはかるため、４単位科目30本の番組を５本ずつ６つのサブ・ユニットにわけて、担当講師もおおむねそのサブ・ユニットに対応してふりわけることとした。

回	テ ー マ	内 容	担当講師（所属・氏名）
1	都市現象の考察	「都市化」ということばはよく使われるが、この講義では「都市化現象」という視覚からとらえることにする。その背景はなんだろうか。	菊竹清訓（放送大学客員教授）
2	都市とはなにか	都市ということばや概念をわれわれは日常的に使っているが、都市の定義はむずかしい。その諸説をふまえて都市の本質をさぐる。	加藤秀俊（放送大学教授）
3	近世都市の類型	日本の近世は全国に都市が噴出し、本格化した時代であった。ここでは、都市が形成されるにいたった三つのパターンを考察する。	同上
4	首都の成立と変化	日本で十世紀以上にわたって首都でありつづけた京都は、その歴史とともに大きく変化してきた。首都とはいったいどんな性格を特徴としているのだろうか。	同上
5	都市のシンボル	都市にはかならず象徴機能がともなう。それぞれの都市が、いったいなにをそのシンボルとしているのかをさぐってみる。	同上
6	経済構造の変化と都市化	都市は経済の中心である。都市のなかで経済はどんな構造とはたらきをもっているのか、それを吟味する。	高橋潤二郎（慶応大学教授）
7	都市化の一般過程	都市、とりわけ大都市が形成されてゆくプロセスを理論的、現実的にとらえておくことは、現代のわれわれにとっての急務だ。	同上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	都市システムの研究	都市は雑然としていて、とらえどころがないようにさえみえる。だが、そこには、あきらかにシステムがある。その本質をさぐってみよう。	高橋　潤二郎
9	アーバン・ゲーム	都市の人間たちは、それぞれに利害をもっている。その利害が葛藤を生み、また問題解決の糸口にもなる。利害をゲームとしてこの問題をとりあつかう。	同　上
10	都市の経済法	都市経済は複雑で、しかも高度の相互依存性をもっている。ひとつの商品のなかにもその混み入ったプロセスが結晶していることを実証する。	同　上
11	人類・村落・都市	人間の居住形態は歴史とともに進化してきた。ここでは、人類史の視点から、都市という居住形態の特徴をとらえて、現代を再検討する。	米山　俊直（京都大学教授）
12	都市のパースナリティ	都市環境は、そこに生活する人びとに独特の影響をあたえ、いわゆる「都会人」をつくる。社会・文化をパースナリティ＝都市のかわから考察する。	同　上
13	都市のエスニシティ	都市が世界的にひろがれば、都市はことなった民族的背景をもった多くの人びとの雑居の場となる。そうして雑居性がもたらす問題点をさぐる。	同　上
14	御成街道盛衰記	むかしからある都市は、時の流れとともに変貌してゆく。そうして都市の新陳代謝もひとつの実例に照らしてとらえなおしてみよう。	同　上
15	都市と都市文化	文化とは「生活様式」のことだ。都市に生きる人たちには、特有の生活様式がある。それはいったい、どのような性質のものであるのか、をかんがえる。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
16	都市政策の課題	都市には行政機能が不可決だ。とりわけ現代という時代を考えれば、行政のもつ役割は大きい。どのようなことがらが、行政上の問題なのであろうか。	田村　明 （法政大学教授）
17	都市経営と自治	都市は行政のがわからみれば、経営の対象でもあろう、そして、そこでは、自治体としての責任と義務が問われる。自治体のあり方を検討する。	同　上
18	都市の拡大と都市	首都圏、近畿圏などにみられるように、都市の圏域はどんどん拡大してゆく。一千万をこえる人口をもつ都市もめずらしくはなくなった。そこで考えるべき課題のひとつは分散化であろう。	同　上
19	市民参加と 「まちづくり」	住みやすい都市環境をつくってゆく力は行政機関だけではない。むしろそれよりもたいじなのはその都市に住む住民の力であろう。その実例をとりあげる。	同　上
20	都市のルールと都市のデザイン	都市生活は自由だが、同時に、おたがいが快適に生きるためにはルールが必要であろう。そのルールは、計画やデザインの面にも反映されてくる。	同　上
21	都市と建築	都市は、せまい空間にたくさんの人が生活する、という特徴をもっている。その多くの人口を収容するためには都市型の建築が必要だろう建築が都市にたいしてもつ役割を考察する。	菊竹清訓
22	臨海都市	都市の立地はさまざまでありうるが、とりわけ海と都市とは密切な関係をもってきた。それを現代の時点で、ふたたび見直してみたい。	同　上
23	都心都市	多くの都市では、その都心部がビジネスセンターとなって、中核的な機能をもつようになった。その都心部での都市現象を検討する。	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
24	人　工　土　地	土地が足りない、と多くの人がいう。しかし、その解決策のひとつとして、土地を人工的につくる、という方法もあるだろう。その実例をしめしながらかんがえる。	菊　竹　清　訓
25	海　上　都　市	人工土地のほかに、人間が海面上を利用して生活し、しごとをすることも技術的に可能になってきた。将来の都市像のひとつとして海上都市をとりあげる。	同　上
26	都　市　と　情　報	現代の都市では、多くの情報が集積し、処理されている。しかしその原型はふるい時代から用意されていた、ここでは、	加　藤　秀　俊
27	非都市のゆくえ	日本の国土は都市現象におおわれているが、そのなかで、都市から離れている過疎の地域もすくなくない。そうして「非都市」の現状と将来をかんがえる。	同　上
28	都　市　の　景　観	都市は美しくあってほしい。たんに機能だけでうごくのではなく、人間にとってたのしく美しい景観が都市には必要だ。景観論の立場から都市を再検討する。	菊　竹　清　訓
29	未　来　都　市	都市は歴史の産物である。そして、もしも未来をいうのか、将来に予想される歴史であるとするなら都市がこれからどうなってゆくのかをかんがえることも重要であろう。	同　上
30	都　市　の　未　来	未来をつくってゆくのは、しょせん人間の努力というものであろう。全講義をふりかえりながら、こんごにのこされた諸問題を論ずる。	加　藤　秀　俊

＝ 情報化時代の産業・技術 ＝ （ＴＶ）

〔主任講師：磯部浩一（放送大学教授）
加瀬滋男（放送大学教授）〕

全体のねらい

この印刷教材は「産業と技術」専攻の専任教授の全員と客員教授により分担執筆される。

各分担者は、すでに大きな変化が予想されながら進行しつつある高度情報化と、各自の専門分野の学問研究との相互関連や、研究の進展状況、研究課題等を明らかにし、履修生の卒業研究のテーマの選択、指導の助けとする。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	高度情報化の進展―実態と意義―	1970年代以降、世界の経済は大きな変動期に入り、その要因、内容、期間、進行方向について議論がなされている。変動の波は国際化、成熟化、高齢化等があり、とくに技術革新の波のうち、高度情報化は進展が早い。ここでは高度情報化の進展の実態と意義を明らかにし、経済・社会・産業への影響を検討したい。	磯部浩一（放送大学教授）
2	情報化の進展と産業構造	産業構造の変化発展の方向は、生産の迂回化、工業化、重工業化、重化学工業化、省資源化、さらに、サービス化、情報化と次々に変化してきた。産業の空洞化現象も心配されている。情報化が産業構造にどのような影響を当えるかを考える。	同上
3	情報化の進展―企業と政府―	情報化の進展はアメリカにおいてＡＴＴの分割、日本では、ＮＴＴの民営化を進めた。ＡＴＴの分割は多様化による大量生産の少量生産への転換が、生産や企業の基盤にまで影響を与えたといわれる。その根底には多様化があり、高度情報化も同じ脈絡で考えられる。これらの点について、企業と政府の役割を考える。	同上
4	情報化社会の労働―量と質の変化	コンピュータは人間の単純労働や肉体労働を代替する。労働の現場では、情報時代の新しい労働環境に適合しにくい労働者が出てきたり、テクノストレスを訴える者が増えている。ここでは、ＭＥを中心とする技術革新や情報化の進展が雇用や失業、労働の中身や転務内容にどんな影響を与えるかを検討する。	古郡鞆子（明海大学教授）
5	情報化と流通機構(Ⅰ)	生産と消費・産業用使用の懸隔を架橋する流通機能においては情報伝達は不可欠の機能である。それがなぜ不可欠であるかを理解し、伝達されるべき内容と伝達する手段の多様性を整理する。そして情報伝達機能を遂行する。	鈴木安昭（青山学院大学教授）
6	情報化と流通機構(Ⅱ)	このような情報伝達機能の遂行にコンピュータが導入され、企業内と企業間の伝達に情報化が進展した。POSやVANなど現在進行中の情報化を中心とした流通システムの現状と問題点をとり上げる。	同上
7	情報化と地域の活性化―情報交流の場づくり	情報化の進展は地域社会に様々な波紋を投じているが、これを地域振興整備の手段の１つとして積極的に活用しようとする動きが活発である。実例を紹介しながら、その問題点と可能性を検討す。	熊田禎宣（東京工業大学教授） 阪本一郎（放送大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	情報化と地域の計画づくり ―知恵の集約と合意形成	計画の役割が大きくなりつつある現代社会では、計画の合理性・妥当性が強く要求されている。利害対立の調整が重要な課題となる「まちづくり」においては、計画策定に際して新しい情報システムの開発と利用が期待されている。このことを説明する。	熊田禎宣 阪本一郎
9	情報と機械	電気・光・音・温度などの物理量は、物の生産や工場の自動化、放送や電話あるいは緊急時など社会情報の伝達に不可欠な情報媒体である。これら物理量の情報伝達と処理を技術的立場より、その特徴について考察し、情報と自動化との関わりについて述べる。	小川鉱一 （放送大学助教授）
10	情報伝達と処理	身近に見られる自動販売機、自動車、カメラなどをはじめ、ＮＣ工作機械、ロボット、自動搬送機など生産現場における最近の機械には、エレクトロニクスが組み込まれ、知能化を一歩進めた機械となっている。これらの機械と情報との関係について説明する。	同上
11	情報技術の歴史をたどる	情報技術の革新は常に社会を変革してきた。情報技術が社会をどのように変えて来たのか。そしてこれからの高度情報化社会を支えるマイクロエレクトロニクスは私たちにどのような社会をもたらしてくれるのかを見る。	東千秋 （放送大学助教授）
12	情報化時代の産業のコメ―ＬＳＩ	情報化時代の産業の米といわれる、マイクロエレクトロニクスの代表、小さなＩＣチップは、大規模集積回路（ＬＳＩ）で構成される中身のよく分からないブラックボックスである。ＬＳＩとはなにか、それはどのように作られ、将来はどうなるのか述べる。	同上
13	情報化と生産技術 ―生産の自動化をめざして	情報技術が広く浸透してきた今日の高度情報社会の中にあって、情報の活用に先駆的役割を果たしてきた工業における、従来主軸あったハードウェア技術と、今日ますます重要な位置を占めてきたソフトウェア技術の発展について述べる。	町田周郎 （放送大学教授）
14	情報化社会と生産技術展望 ―生産無人化の行方	高度情報化時代の生産の場においては、広汎多種の情報蒐集と迅速な情報処理によって最適条件の設計、加工生産また評価・管理などを行う技術が浸透してきている。ここではいくつかの例について現状を述べるとともに将来を展望する。	同上
15	プロジェクト管理の高度手法 ―ＧＥＲＴ―	PERTタイプのネットワーク計画法をより一般化したGERT（Graphical Evaluation and Review Technique）の初歩的事項を概説し、広くプロジェクト管理への関心の高揚に資したい。	加瀬滋男 （放送大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	構造化技法によるシステム設計 ―データ中心への接近	最近企業が頭を悩ましているシステムのバックログ問題の打開策として、システムの構築に構造化技法の採用が期待されている。その考え方、ツール、技法のあらましを展望し、伝統的手順との差異を明らかにしたい。	味村重臣 （産業能率大学教授）
17	エントロピー・モデルによる市場構造分析 ―新銘柄進出の市場分析と価格選定	消費者の購買行動における銘柄選択の問題を、市場情報の有効利用の観点から、エントロピー・モデルにより分析する手法について解説する。あわせて、既存の市場に新銘柄が進出してきた場合の市場構造分析と新銘柄の価格選定についても講述する。	太田宏 （大阪府立大学教授）
18	経営戦略と前提 ―環境予測企業目標能力評価	経営戦略の設定は、未来の多くの環境予測情報に依存する。そこで社会・経済、技術、市場、資源政府規制等の因子を中心に、企業をめぐる環境予測の内容を説明する。	小林靖雄 （放送大学副学長）
19	経営戦略の設定	環境予測にもとづいて、企業がとりうる戦略の諸代案のうち一つを選択する意思決定は、フォーマルな手法をもちえない。ここではその基本的前提と、若干の接近方法について述べる。	同上
20	情報化時代の生産システム ―ファクトリー・オートメーション―	近年、ＦＡ、すなわち機械加工および組立の高度な自動化が進められている。本講義では、より柔軟性のある自動生産システムとして注目されるＦＭＳ（フレキシブル生産システム）の概要を説明するとともに、これからの生産システムのあり方について解説する。	横山雅夫 （放送大学助教授）
21	情報化時代の生産管理	より高度な生産システムの発展のためには生産管理システムの開発が不可欠である。本講義では、多品種少量生産を行う生産システムにとって重要な、負荷配分や加工のスケジューリングを中心として、問題のとらえ方と計画手法について解説する。	同上
22	情報化とマーケティング ―マーケティング革新の背景―	消費市場は、「分(少)衆化」「個別化」した市場へと変質してきた。大衆ではなく「個」の市場をいかにつかむかが、マーケティングの最大の課題である。情報化の進展に支えられ、個々のニーズを掌握するというマーケティング上の革新が起こりつつある。	伊藤公一 （千葉商科大学教授）
23	情報化とマーケティング ―マーケティング革新の展開―	このマーケティング革新とは、川下発想（メーカー・卸）、付加価値提供志向(卸)、生活者の欲求への適合（小売）である。革新を支え、促す情報化として、①情報ネットワーク（ＶＡＮ他）、②顧客データベース化、③ＰＯＳシステム、④ニューメディア、を取り上げる。	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師 （所属・氏名）
24	企業内容の開示制度	現在、わが国の株式会社は証券取引法と商法の定めによって、その事業内容を、いわゆる財務情報として開示しなければならないことになっている。本講では、有価証券報告書の制度、および、貸借対照表などの公告の制度につき、現状をあきらかにする。	江　村　　稔 （放送大学教授）
25	財務情報と情報革命	投資家などに開示すべき会計情報について近年、会計学者による研究が進んでいる。とくにW.H.ビーバーの「財務報告革命」は注目さるべき業績である。本講では、この書物をとりあげて論じてみよう。	伊　藤　邦　雄 （一橋大学助教授）
26	情報化の進展と企業の資金部門の変貌	コンピュータを始めとする情報機器の発展は、高度成長期にみられた銀行との話し合いをもとにした資金の調達と資金繰りから、より多くの情報を収集し、迅速に対応した資金の管理を促してきた。ここでは、その変貌の跡を辿り、これからの課題を考える。	古　川　浩　一 （東京工業大学助教授）
27	情報化が経営財務に及ぼす影響の諸側面	企業の資金調達力は、その企業に対する資本市場の評価と密接に関連する。企業は自らの経営成績を会計報告書という形で利害関係者に報告している。この報告書によって与えられる会計情報が企業の評価とどのように関連しているかを検討する。	同　上
28	ＯＡの基礎 －ＯＡと歴史と狙い	ＯＡを理解するために、まず、「ＯＡの歴史と背景」を考察し、その本質を見極める。そして、「ＯＡの狙い」は、一体、何であるのか、その狙いに到達するためには、如何なる「ＯＡ化のステップ」を必要とするのかを、考察する。	中　村　光　男 ㈱岡村製作所 経営情報システム研究所 研究開発室長
29	ＯＡの実践 －ＯＡの現状・動向・課題	昭和55年前後から注目されたＯＡも今や定着しつつある。そこで「ＯＡ化の現状」を把握し、次に、今後のリード・ソフト・通信・環境整備・情報管理技術の向上と共に「高度情報化社会におけるＯＡの動向」につき、若干の考察を行い、「今後の課題」を提起する。	同　上
30	総　　括	本講義に対する補遺や敷衍を試み、全体的なまとめを行う。あわせて来るべき時代の産業および技術の動向を展望し、今後の勉学の便に供する。	江　村　　稔 磯　部　浩　一 町　田　周　郎 加　瀬　滋　男

＝科学と宗教＝（R）

大森荘蔵（放送大学教授）
主任講師：橋本典子（青山学院女子短期大学助教授）
伊藤公一（放送大学助教授）

全体のねらい

科学と宗教というテーマは大きく、且つ単なる教条的理解や道聴塗説に止まってならぬ面を持っている。本講座は総合講座として、学説の記憶というより、学生諸君がこのテーマについて自分の意見を形成することを狙いにしている。それ故教材は記憶すべき玉条集でなく、諸君が意見形成する際の対話相手と考えてほしい。

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
1	序論 －科学信仰の源流	科学の確かさはどこに由来するのかをテーマとし、科学記述の世界と日常世界のかかわりを検討する。	大森荘蔵 （放送大学教授）
2	関係の原初形態 －古代は過ぎ去った影と過ぎ去らない基礎との共在する場である－	古代ギリシアのソークラテース以前の哲学に於いて、科学と宗教がどのように関係していたかを論定する。代表的学者を取り上げ、祖型に分類した。	今道友信 （清泉女子大学教授）
3	科学と宗教 －科学者として宗教者として	科学者であり同時に宗教家である立場から、この問題を論じ、自然現象の科学的把握も神のメッセージを含むこと、その意味では、宗教も科学も一つであることを説明し、また、すべての文化的営みが一つの方向を持っていることを論じている。	柳瀬睦男 （上智大学教授）
4	神はどこに住むのか人間はどこに住んでいるのか	人間の王国を建設するところに科学の仕事があるが、それは神の国の土台の上に据えられなくてはならないことを、人間の在るべき場所を求める哲学的考察によって明らかにしている。	加藤信朗 （東京都立大学教授）
5	「物理学者にとって神とは　」	ガリレイからニュートンを経て十九世紀に至る宗教観と、ハイゼンベルクの眼を通して見た現代物理学の創始者たちの宗教観との対比により、それらの類似と相異が汲みとられるようにした。現代科学者による問題の展開が簡明に論じられる。	小田稔 （元文部省宇宙科学研究所長）
6	心の本質をめぐる科学と宗教	心、特に「わたし」の扱いを中心として、科学学的世界観と宗教的世界観の特徴と限界を明らかにする。それらは二つの相異なる原語によって語られるから、直ちには結びつかない。宗教言語に習熟するためには自己革新が必要である。	稲垣良典 （九州大学教授）
7	宗教的言語が披く地平と科学的世界	頌歌を材料に取り、宗教的言語がいかなる働きをもち、いかなる世界を披くか、またそれは科学言語の披く世界といかに異なるかを検討する。	宮本久雄 （東京大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	科学的真理と形上学的真理	現代の日本を代表する哲学者として西田幾多郎と松本正夫を取り上げ、両者に於ける科学論と宗教論とを基にして、標題のテーマを考察している。西田は自力宗教と述語論語、松本は啓示宗教と主語論理というように、相互に尖鋭な対立がある。	橋本典子（青山学院女子短期大学助教授）
9	存在と意味	科学言語と日常言語を比較し、存在に目を向ける前者と意味を求める後者を対比し、科学言語が作る科学的世界の強さと弱さを検討する。	大森荘蔵
10	科学の問いと宗教の問い －技術・科学・宗教	技術・科学・宗教はそれぞれ何を求める活動なのか。それらの答えるべき「問」によって三者の区別を試みる。	伊藤笏康（公一）（放送大学助教授）
11	「賢者ナータン」	十八世紀ドイツ啓豪思潮の代表的文人レッシングの「賢者ナータン」を材料として、宗教間の対立、それを超える人間的真情の交流の重要性を述べる。理神論、啓蒙主義、科学的合理主義等の本質を考察し、道徳教説に於ける人間的一致の重要性を説いている。	坂部恵（東京大学教授）
12	科学時代に似合った宗教心を求めて	現代人は、科学者を含めて、倫理的責任が問題になる時、良心に訴えるか、宗教に頼ることを止める傾向が強い。その原因の一つは、宗教の側の言語表現の不適切性にありその改善が望まれる。	橋本典子
13	科学と宗教 その架け橋 －リクールとオリベッティ	リクールとオリベッティーとの筆者の直接対話を基にして、科学と宗教の結びつきの可能性を問う。リクールを介して、詩的言語の解釈が、オリベッティーを介して、倫理がそれぞれ媒介となることを明らかにした。	山本信（東京女子大学教授）
14	科学と宗教、 そして人間 －知ることと生きること	科学は客観を、宗教は主体を問題とし、衝突はないはずであるが、知識の強情と信念の偏執が原因となって両者の関係は複雑となる。科学が自然を問題にするように、人間は宗教に関し、自己の安心立命のみならず、社会の歴史の行方に責任を持つべきである。	橋本典子
15	生命哲学と宗教 －アンリ・ベルクソン	科学と宗教の接点の一つは生命と死の問題である。この問題に関しては、ベルクソンを介して、独自の考察を求めることも一つの方法である。科学と宗教を直接に関係づけず、科学と哲学の比較を通じて、道徳や宗教を論じる。	小尾信（放送大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	宇宙論	現代の天文学者として科学と宗教について論じる。そのため、人間が何故ここにいるのか、という問い、私が今何故ここにいるのかという問いを出発点として宇宙の構造と進化の面からそれについて考える。	小尾信彌（放送大学教授）
17	科学理論と宗教「理論」	求めるものに応じて理論は異なる力動的構造を取る。その面から科学と宗教と技術の活動としての差は何か、また三者を連続的につなぐものは何かを検討する。	伊藤笏康（公一）
18	科学・宗教・合理化	科学と宗教を統一的に見る視点を、マックス・ウェーバーの「人間の生の合理化」に求め、両者が合理化の過程の中で緊張関係に立つことを明らかにした。近代以後、科学が生の全面に合理化を果したので、宗教は非合理の中に閉じ込められた。	井修（東京大学教授）
19	死	死は科学の超克出来ない現象であり宗教の基本的課題なのである。その視点からディー教授の宗教観を直接対話で尋ね、ジャンケレヴィッチを介して死の瞬間の意味を探り、死が原罪に基づくとされるところから悪の問題を考えた。	橋本典子
20	科学と禅 －漱石の世界より	近代科学との出会いを経験した漱石の世界に於いて、科学的精神と宗教の相異を考察するため、『門』と『行人』の二作品の解釈を行った。禅を『坐』とし科学を『走』と規定した。	大橋良介（京都工芸繊維大学教授）
21	科学と宗教の基本的関係 －二つとも古くから別々の明るさを求めている	両者の異同、混同、劃的調和という意味論的＝価値論的問題を縦軸とし、過去、現在、未来を横軸として、両者の基本的関係を論じている。	今道友信
22	言語の働きとしての科学と宗教	科学も宗教も、＜こころ＞言語の働きによって生成する地平であり、ともに「全体を求める」性格をもつ。「全体を求める」＜こころ＞言語の機構としての「縮重」を中心にし、両者の異同を検討する。	井上忠（日本大学教授）
23	技術文明と宗教 －ガブリエル・マルセル	技術が世界を支配し始めた時代から思索の生活に入ったマルセルは、技術社会に於ける人間性喪失の危険に気付いた最初の人々に属する。宗教による希望が単なる欲求と異なり、人間を新生に導くことを明らかにした。	橋本典子

回	テーマ	内容	担当講師 （所属・氏名）
24	愛と死	科学者として信仰をもつ自己の経験を手がかりにして、先ず、個人に於ける両者の関係を論じ、次に体制として自己変革を経た宗教に対しそれを経験しない科学に向けて、科学のあるべき姿を価値論的に提案している。	垣花秀武 （上智大学教授）
25	良寛・道元 ウィトゲンシュタイン	「論理」を広い意味での探究原理と考えるとき、良寛や道元の得た論理は何であったか。また近年、そのいみでの論理を重視した哲学者にウィトゲンシュタインがいる。三者の論理を中心にして考察する。	黒崎宏 （成城大学教授）
26	科学・倫理・宗教 ―エマニュエルレヴィナス	存在を限度とする形而上学に飽き足らず、存在の彼方を志向して、倫理学を第一哲学とする現代哲学者レヴィナスの思索を通じて宗教を論じる。「顔」に於いて「汝殺すなかれ」という神の命令を読むのは周知の特色である。	橋本典子
27	将来の問題 ―これは省察であって予言ではない。しかし，推理と決意とは想像とともに時を先駆ける―	科学と宗教が現実を解釈する二つの目であることを明らかにし、将来に於ける宗教の必然性とその存立条件を、エゴ・エティカとの連関に於いて考察している。	今道友信
28	悪について ―それは時間の非充足である。	悪の本質を時間の非充足ないし非充実と見る新しい見地から、宗教・科学・科学技術と悪の関わり合いを考察した上で、災悪と罪悪とに於ける宗教の役割を論じている。	同上
29	科学と宗教 ―死の問題を例として	人間の死の問題を例として、両者の関係について哲学的思索を展開する。宗教は自己の中に科学技術を受け入れてあまりあるもの、すなわちそれによって侵されない大きな力であることを、生死が無生死であり、無生死が生死することの体得を通して明らかにする	辻村公一 （京都大学名誉教授）
30	知識と意見	『科学と宗教』の講義は、教養学部の最も教養らしい教養として提示されているものである。このような問題については知識よりも多くの卓れを意見に接することが大切でる。これを「受ける」のみではなく、これに「反応」して考えるべきである。	大森荘蔵

＝ 生　命　論 ＝（TV）

〔主任講師：野田春彦（放送大学教授）〕

全体のねらい

生命は歴史を通じて人類の強い関心を集めてきた。十九世紀以来生物学、生物化学の新しい展開にともない生命の考え方は大きく変わり、分子生物学の出現で物質を基礎とする考え方は確実なものとなった。この考え方と従来の考え方とを比較考察する。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	序　　論	この講義全体の編成の方針を概略説明し、ここで採用した考え方以外の考え方をも考慮した上で、全体的視野の下で勉学の指針を与える。	野　田　春　彦 （放送大学教授）
2	歴史宗教哲学と生命	人類の有史以来の生命に対する考え方を総説する。特に宗教書や哲学書に現れた世界観など古代以来の生命に対する考え方の変遷を現代の知識と関連させて見直す。	伊　藤　笏　康 （放送大学助教授）
3	生気論と機械論	生物学が物質的基礎を持たなかった時代には、物理学や化学で理解できない未知な原理が働いて初めて生命現象が起こるという考え方をせざるを得なかった。それが今でも本当かどうかを考える。	大　森　荘　蔵 （放送大学教授）
4	生命の最小単位	地球上の生物全部に共通の部分があればそれは生命にとって必須の部分であろう。さらに必須でない部分があればそれを除く。最少の部品で構成される生物はどんなものかを探ってみる。	野　田　春　彦
5	筋　収　縮	生物の細胞の基本的運動能力を考察する。細胞分裂に際しての細胞内の動き、鞭毛の運動、繊毛の運動、筋肉の運動などの構成や運動機構の異同についても考察する。	江　橋　節　郎 （岡崎国立共同研究機構生理学研究所所長）
6	増殖と分化	単細胞の生物は細胞分裂によって増殖し、多細胞生物は細胞分裂によって成長し、さらに増殖する。基本となる細胞分裂の機構とその生物種による微細な差を考察して、生命機構全体との関係を考察する。	平　本　幸　男 （放送大学教授）
7	構　造　形　成	単細胞生物でも、多細胞生物でも、タンパク質分子が集合して形成する構造は個々のタンパク質に固有の化学構造にもとづいて自動的に作られる。多細胞生物では細胞の集合の方式も生物の形を決定する。これらに内在する原理を考察する。	野　田　春　彦

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	酵素	生物体内の化学反応で共有結合が形成されるときにはほとんどの場合に酵素が関与している。この酵素の物質としての性質、作用機構と構造との関係などが、どこまで物理化学的に理解できているかを考察する。	野田春彦
9	ホメオスタシス	生物体内では条件を一定に保とうとする傾向がある。その中で特に物質代謝系に関係する物質の濃度を一定に保持する機構については研究が進んでいるので、それを説明する。	同上
10	太陽と地球と生物	現在の地球上では生物界への炭素化合物の取り込みは殆ど全部植物の光合成によっている。光合成の産物が食物連鎖を通じて動物や菌類を養っている。その全体像を地球的規模で考察する。	同上
11	物質代謝とエネルギー代謝	生命現象の特徴の一つは材料物質が常に流れていることである。流れを作るためにはエネルギーが必要である。それらの流れの相互関係と、その機構を考察する。	同上
12	遺伝	遺伝現象の基礎となる分子生物学的機構は全部解明されているわけではない。染色体とDNAの関係などをも含めて、分子レベルの考え方をできるだけ現象に結び付ける試みをする。	同上
13	タンパク質の生合成	遺伝子の構造として保持されている遺伝情報の具体的発現はいろいろあるが、その中でよく研究されているのはタンパク質の生合成である。その機構の細目を検討してみる。	同上
14	分子の進化機構	永い年月にわたる遺伝子の変化が進化の基本であるが、DNAの具体的な構造とその変化の可能性を実際の遺伝子の構造と関連させて考察する。	宮田隆（九州大学教授）
15	核酸の構造と機構	1. 核酸の所在 2. 核酸の立体構造 3. 染色体とDNA 4. 核酸のヌクレオチド配列　の分析	野田春彦

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	個人差と人種	1. 遺伝的多型 2. 遺伝子の多様性と人種 3. タンパクからDNAへ	尾本恵市 （東京大学教授）
17	中枢神経	多細胞生物の多数の細胞の行動を統制する方法の一つは神経によるものである。生物が進化して、その神経の中に中枢神経系が現れて全体をまとめるようになると生物の行動は複雑になる。人間は言葉を使うことによって更に新しい行動様式を開発した。	久保田競 （京都大学霊長類研究所教授）
18	記憶について	知能は記憶の基礎の上で働くものであるが、その記憶というものの本質を考え直す試みをする。	大森荘蔵
19	精神と生命	人間の立場から生命を考えると、精神の働きが常に念頭にある。山川草木に生命を感ずるのは、人間の側から感情その他を移入する結果である。その他日常の多くの場合について色々の面からの考察を試みる。	香月秀雄 大森荘蔵 野田春彦 伊藤公一
20	自然知能と人工知能	計算機は脳の能力の一部を遂行するものであるが、最近の計算機では人工知能と呼ぶこともできるような能力を備えるものがある。両者の比較から脳の能力に対して新しい見方も現れるかもしれない。	甘利俊一 （東京大学教授）
21	免疫	鳥類と哺乳類は侵入する外敵に対抗するために、特別な細胞群を用意している。これらの細胞群が多種類の外敵に対して対抗できることの原理、その際に合成されるタンパク質などについて最近の進歩を考察する。	大沢利昭 （東京大学教授）
22	消化と吸収	我々の日常生活では、食事の消化と吸収は意識されないことが多い。もし意識されるようになると異常が存在する。平常の場合にはどのように進行しているか、異常になると何がおかしいのかを考察する。	橘正道 （千葉大学教授）
23	考える脳のメカニズム	1. 思考時の大脳連合軸の活動 2. 大脳の神経回路網 3. 意識と注意 4. と幻覚 5. 記憶の2型	伊藤正男 （東京大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	病気	体の部分について意識するようになると、そこに何かの異常があることが多い。しかし異常がないのに意識が先行することもある。何を正常と呼び、何を異常と呼ぶかについて考察してみる。	香月秀雄
25	抗生物質とその効き方	薬の中で抗生物質は効力の原理が明らかなものである。細菌が如何にして抗生物質を生産するか、抗生物質が相手の細菌の生理作用のどこを阻害するかを調べてゆくと、生きるということの分子生物学的な基礎と深く関係していることが多い。	大村智（北里研究所副所長）
26	老化と寿命	多細胞生物の個体は必ず老化する。加齢による器官の変化、死亡率など老化の基本データを供覧し、老化に関して今までに提出された仮説を説明し、老化と栄養の関係や寿命の予測など現在ではまだ答えのできていない問題についても考察する。	松村外志張（明治乳業ヘルスサイエンス研究所 研究員）
27	臓器移植	医療の手段の一つとして故障のある臓器を摘出して他人から正常な臓器を移植したり、人工の臓器を取り付けたりすることが行われる。実際の方法、功罪、将来の見通しなどを論ずる。	香月秀雄
28	生と死	人間の意識の中で、自己の死というものは特異な地位を占める。歴史的な思い込みを取り去って、虚心胆懐に考察を試みる。	大森荘蔵
29	物質と生命	地球上の生命の物質的基礎は相当程度明らかになってしまった。しかし宇宙のどこかで生命を構成するときに、現在地球上にみられる生命と同じものだけを考えるので十分かどうかは確かではない。	野田春彦
30	生命とはなにか、改めて考える	各方面から考察した生命の本質を再び復習し、考察の足りなかったところを補い、将来研究すべき点について論ずる。	野田春彦

＝ 文 学 の 東 西 ＝ （R）

〔主任講師：辻　　瑾（放送大学教授）
　　芳賀　徹（東京大学教授）〕

全体のねらい

「文学」や「東西」の意味、日本文学の特質などを検討したのち、主に芳賀講師によっていくつかの主題に則し、日本と諸外国間の関連と影響関係を比較文学の成果として解明する。後半は西欧諸国・中国と日本との間において、対照比較、受容の問題等を論じ、全体として日本文化のアイデンティーを求める試みとしたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	担当講師（所属・氏名）
1	「文学の東西」をめぐる環境(1) “文学”および“東西”の概念	「東西」及び「文学」について東西からする配慮を行い、この二つの概念の歴史的な変遷についてもふり返ってみたい。	芳賀　徹（東京大学教授） 三好行雄（大妻女子大教授） 小山弘志（国文学研究資料館々長） 辻　瑾（放送大学教授）
2	「文学の東西」をめぐる環境(2) 日本語の特性と文学への影響	世界の中で言葉の孤児である日本語の特性を考察したのち、この特性が文学に与えているであろう影響を、各種の仮説として論じる。	三好行雄 小山弘志 古田東朔（放送大学教授） 辻　瑾
3	「文学の東西」をめぐる環境(3) 比較と日本文学	比較の可能性と不可能性について論じたのち、比較文学という学問の成立根拠を問う。	芳賀　徹 小山弘志 佐伯彰一（中央大学教授） 辻　瑾
4	比較文学の歴史	比較文学という学問の西欧における歴史とともにその日本における展開と成果を解説する。	芳賀　徹
5	桃源境の系譜 (1) 陶淵明の桃源郷	中国文学に取材する。	同　上
6	桃源境の話 (2) 東アジアの理想郷	日本の江戸文学までを扱う。	同　上
7	桃源境の話 (3) 日本における桃源郷	近代文芸に取材する。	同　上

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
8	きりしたんとクリスチャン (1) 西欧キリスト教文学と日本	南蛮文学の翻訳及びヨーロッパにおける文化史的背景を扱う。	加納孝代 （青山女子短期大学助教授）
9	きりしたんとクリスチャン (2) 明治時代の聖書と讃美歌の日本語訳	寛永までを扱う。	同上
10	蘭学事始 (1)	新井白石について。	大久保喬樹 （東京女子大学助教授）
11	蘭学事始 (2)	杉田玄白について。	同上
12	ヴィクトリア朝英国と日本人 (1)	岩倉使節団と福沢諭吉。	川西進 （東京大学教授）
13	ヴィクトリア朝英国と日本人 (2)	夏目漱石をめぐって。	芳賀徹
14	住居（すまい）の詩（その1）	俳句。芭蕉、蕪村、一茶、草田男など。	同上
15	住居（すまい）の詩（その2）	詩。バシュラール、リルケ、萩原朔太郎、田中冬二など。	川本皓嗣 （東京大学助教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
16	〔中国と日本(1)〕 唐以前	唐以前の中国文学と日本との関係を、一、二の事例に即して論ずる。	竹田晃 （東京大学教授） 辻理
17	〔中国と日本(2)〕 白話小説	唐・宋の伝奇小説と、それにもとづく日本の小説を取り上げて、比較考察する。	尾上兼英 （東京大学教授）
18	〔ロシアと日本(1)〕 ロシア文学の近代日本文学への影響	日露間の文化的交渉を簡単にたどったあとで、トゥルゲーネフからトルストイ、ドストエフスキイ、チェーホフに至るロシア文学が日本近代文学成立上に演じた重要な役割を説明し、同時に日本的理解の偏よりについて論ずる。この偏よりはソビエト期に更に大となる。	川端香男里 （東京大学教授） 辻理
19	〔ロシアと日本(2)〕 ロシア文学と日本文学 ― 対比的考察	外国文学の影響の及ぶ「終着点」であるという点で両国の文学は多くの歴史的形態論的特徴を持つ。また文壇のあり方、作家の生き方にも相似た面がある。これらの共通点・類似点を指摘しつつ、さらに両文学の相違、両文学の民族的特性へと話を進める。	同上
20	〔フランスと日本(1)〕 フランス文化の自己理解― 演劇を主として―	フランスの文化がいわゆるアイデンティティーを獲得し、明確な自己理解を行うのは17世紀のことである。演劇を中心としてその経緯を解明しながら、一部は現代にも話題を拡げて日本とのコントラストを浮き彫りにしてみたい。	渡辺守章 （東京大学教授） 辻理
21	〔フランスと日本(2)〕 フランスと日本の散文詩	詩とは何よりもまず形式の面で散文と異るものだった。どのようにして、散文のままで「ポエジー」が成り立つようになったか。ボードレールや萩原朔太郎の場合に即して考える。	阿部良雄 （東京大学教授） 井戸桂子 （放送大学助教授）
22	〔イギリスと日本(1)〕 ソネットの受容	ソネット（十四行詩）という、約束事の多い窮屈な西洋の詩型が、日本でどのように受容され、変容したか、イギリスのソネットとその翻訳、日本の創作ソネット数篇を取り上げて考察し、東西文学の特質の一端を明らかにしたい。	川西進 辻理
23	〔イギリスと日本(2)〕 二つの自然観 ― ワーズワスと芭蕉	ワーズワスと芭蕉とは、ともに花鳥風月をうたった詩人であるが、そのうたい方にどのような差異があるか、そしてその差異はどのような考え方、ものの見方の相違から生ずるかを、具体的な詩句に当たって考察する。	上島建吉 （東京大学教授）

回	テーマ	内容	担当講師（所属・氏名）
24	〔アメリカと日本(1)〕 日米の自然観	日米の自然観が文学にいかに表われているかを考える。南北戦争以前の文学をとり上げマクロコズムとミクロコズム、17世紀清教徒達の見た神意の啓示としての自然、19世紀ロマン主義の作家エマソンとメルヴィルの相対立する自然観などを論じる予定。	島田太郎 （東京大学助教授） 辻　　理
25	〔アメリカと日本(2)〕 アメリカ文学における自然と文明	自然と文明の対立はアメリカ文学における最大の主題の一つといえるが、この問題は西部フロンティアと深く関係している。この授業ではマーク・トウェインなどの作品を通してそれを検討し、さらに日本人の自然・文明観との比較によってその独自性を明らかにする。	渡辺利雄 （東京大学助教授）
26	〔ドイツと日本(1)〕 ゲーテの「普遍性」	ゲーテの普遍性と言われるものを、市民階級・市民文化との関連から考察し、『若きヴェルターの悩み』を中心に、日本における受容の様態に触れたい。	辻　　理 大貫敦子 （放送大学客員助教授・千葉大学助教授）
27	〔ドイツと日本(2)〕 カフカとその受容	カフカの作品を通じて翻訳と理解の可能性と不可能性を論じる。	辻　　理
28	〔スペインと日本〕 『ドン・キホーテ』	『ドン・キホーテ』と近代小説の誕生について考察したのち、『ドン・キホーテ』受容史についても論ずる。	桑名一博 （東京外語大教授） 辻　　理
29	〔中南米と日本〕 現代のラテン・アメリカ文学	現代ラテン・アメリカ文学の魅力と強い影響力とを論じ、その位置づけを試みる。	同　　上
30	まとめ	概観と各種の事例の考察とが自然に語るものが何であったかを、まとめとして論じておきたい。	芳賀　　徹 辻　　理